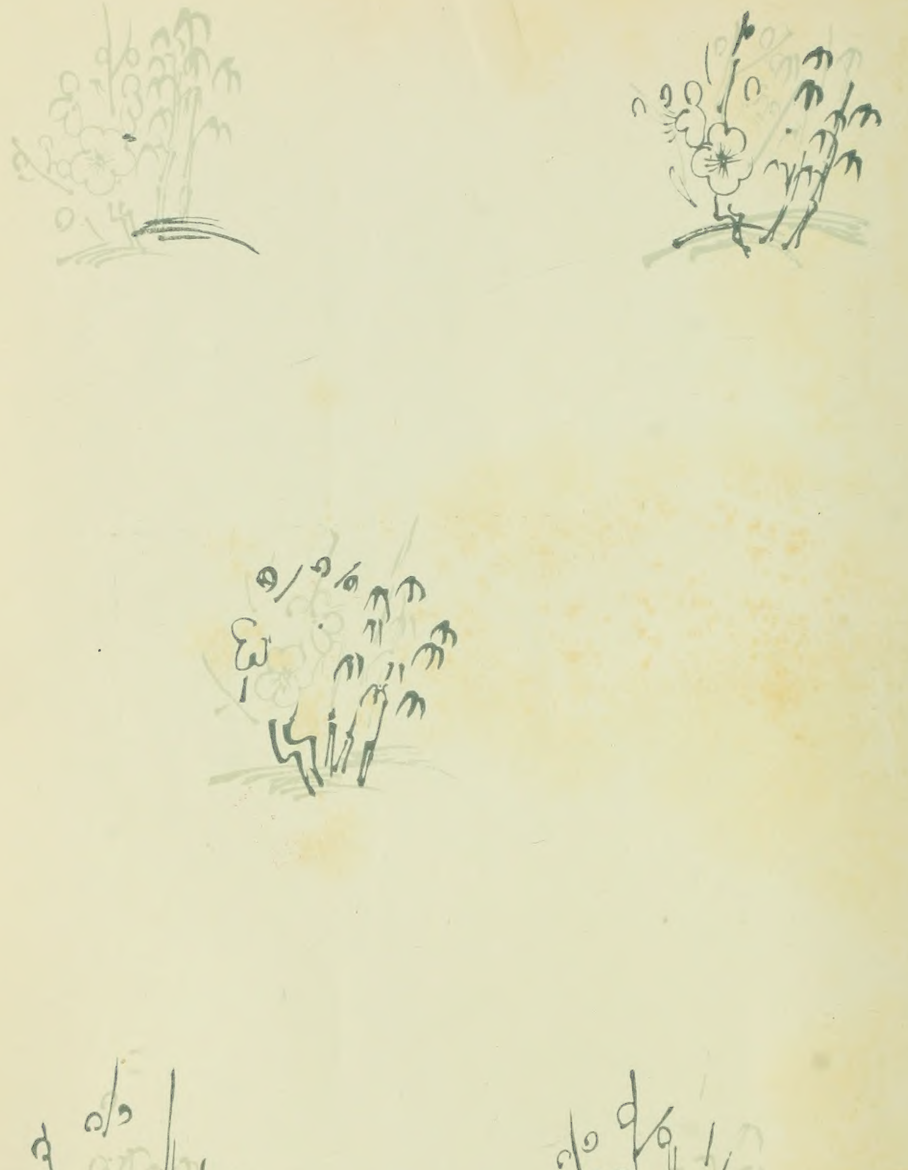




元禄名家句選

装幀津田青楓

鬼貫贊　友禪畫

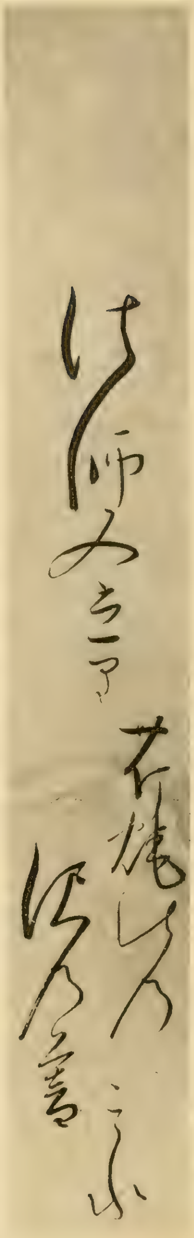
（鈴木廉平氏藏）



黒髪や花から花と水鏡

おにつら

言水短册

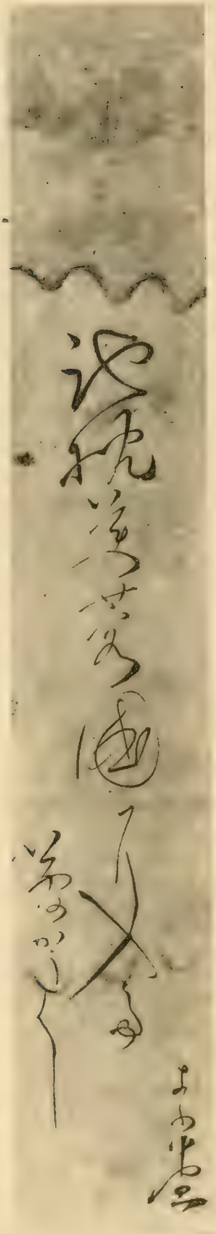


（武藤一郎氏藏）

法師又立り芹焼比の澤の暮

言水

素堂短册



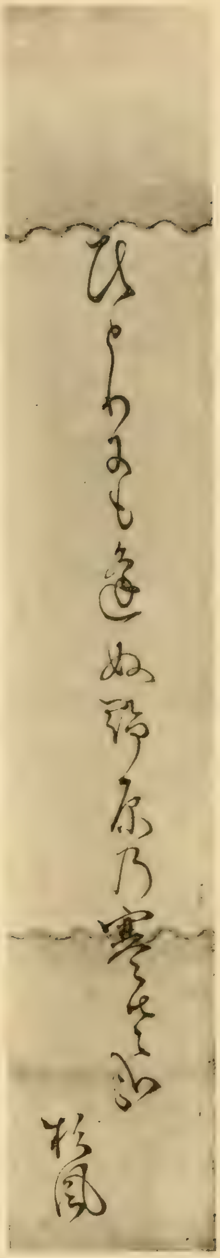
（同）

池枕芙蓉國に入て夢かうはし

素堂

杉風短册

（吉田里子氏藏）

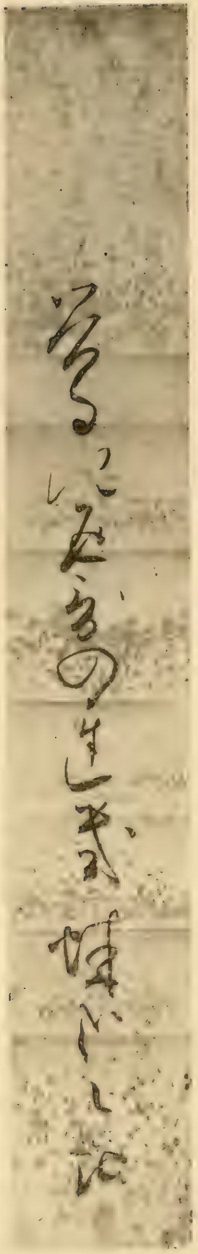


ひとりにも逢ぬ野原の寒さ哉

杉風

乙由短册

（武藤一郎氏藏）



鶯に返哥の遲き蛙哉

乙由

解題

初心もと柏　享保二年板　中本一冊

貞門系統の俳人ながら江戸に在つて檀林派の運動に携り、初期蕉門の徒と往來して、いつとなく折衷派の一人となつた池西言水の自選句帖である。言水は奈良の人であるが、少年にして江戸に下り、十六歳の時早くも法躰となつて俳諧をその一生の道として勵み、師重頼の歿後上洛して新町通に紫藤軒を構へて居た。かの「木枯の果はありけり海の音」がその名句として都鄙に持囃さるゝと共に、木枯の言水と呼ばれたが、享保七年九月、享年七十三で物故した。言水の著書は『東日記』その他俳諧書史學に重視さるゝものが多いが、『初心もと柏』は彼一人の句帖であつて、『江戸八百韻』以來の快心の作をみづから選び、句毎に簡潔な文章を以つて傍註を添へ、その註が又洒脱な隨筆躰をなして居るので甚だ面白い。四季發句の外に獨詠付句を若干附錄し、不統一な雜然たる俳風が言水の折衷派としての楯の兩面を明瞭にあらはして居る。言水の傳は享保八年板の『海音集』に詳記され、その發句は安永四年板の『俳諧五子稿』の「紫藤軒言水句集」に拾輯されて居るが、『初心もと柏』は彼みづから選抄した特色があるので、本集に收めて言水の俳風を代表させる事とした。原本は帝國圖書館の所藏である。

鬼貫句選　明和六年板　中本二冊

伊丹の墨染寺には鬼貫の墓がある筈でない。小童永太郎の墓側に小さくその戒名を刻してあるに過ぎない。この痛

ましい事實は生前死後を通じて鬼貫その人の不遇を深刻に象徴してゐる。貞門から檀林へ俳壇的に放浪して遂に誠の俳諧に心眼を開いたが、世間的逆境のうちに鬼貫の名はその存在を忘れられてしまつた。嘯山が「惜未レ見ニ其全集ヲ」と歎じ、その著『俳諧古選』に「所レ錄數章氣骨嗣々可下與ニ來山一雁行上也」と激賞して以來、鬼貫研究の聲高く殊に「不夜庵太祇としごろこの事を嘆きて」と蕪村の跋にある如く、太祇の熱心と努力とを以て『鬼貫句選』の開板を見る事になつたのである。その上卷は四季發句を四卷に分つて載せ、下卷は彼が閑居の机上に向ひつゝ居ながら書いた『禁足旅記』の一篇を收めてある。もし嘯山の推讃なかりせば、もし太祇の誠意なかりせば、鬼貫は永久に俳諧史から埋れたかも知れない。たゞし、『禁足旅記』は元祿三年板行された鬼貫の著『犬居士』から連句を省略して、その道中記に假託した本文のみを抄錄したものである。太祇の序に「白笑が乞にまかせ」とあり、蕪村亦「例の氣みじかなる板もとは八文字屋白笑也」と書いてゐるから、初才本は八文字屋から出たのであらうが、本書の奥附には橘治板とある爲め再刷本と思はれるが本文に異同はないだらう。

七車　天明三年板　中本二冊

『鬼貫句選』は鬼貫を中興期の俳諧に復活させる機縁となつたが、其の稿本『七車』の所在發見は更により多くの私淑者を出した。大阪の書肆與文堂は鬼貫の門人只川の後裔といふ縁故で、稿本を所持する荒木氏と相はかり、既に句選に出て重複するを除き、句選の訂誤にかねて殘る、全部を五卷に分つて出板したのである。鬼貫の序文に彼が「としぐ\いひすてたる發句」を主として序跋及び詞書を手抄し、これを「子孫にながくのこさんとの心をのするものから、なゝぐるまと名附て」享保十二年に脫稿せる次第を明記してある。與文堂の「某氏に托し」といへる人は、鬼貫

の小傳を本書に添へた嘯山で、校合もその手に成つたのであらう。一より四の卷は四季の發句で、五の卷は文章篇である。題簽に「なゝ車」とある流布本は四の卷冬の部の二丁を脫してゐるので、本集には題簽に『鬼貫發句集』とあり、本文に「なゝくるま」の原題を存し、無落丁の完全なものを底本としたが、嘯山の跋は當然卷末に附載さる可きを原本通り坤卷の卷初に揭げたのは、あまり正直過ぎた嫌ひがない事もない。ともかく『七車』の飜刻本は數種あるが、前記脫丁の缺點があるので迂濶に信じていけない。本文に奥附を舉げなかつたが、板元は「大阪心齋橋通南久寶寺町鹽屋　高橋平助」である。

獨　言　　享保三年板　　中本二冊

俳諧は誠あるのみ。誠こそ俳諧の大道である。いつはりなき人生は俳諧の誠となつてあらはれる。兩者の藝術的一致を確信して疑はない鬼貫の態度は、『獨言』を通じて一貫し、其の思想的背景をなして居る。それ故に俳諧は「をのづから心にうかぶ所を」そのまゝ出發點として、「句を作るに、すがた・詞のみを工み」にする技巧を厭くまでも排斥した。殊に「ことやうの句を作りて、それを新しとおもふ人は」この誠に徹せざる者として、その迂愚を笑つて居る。『獨言』の上卷は鬼貫の體驗から出たそれらの至純な俳論であるが、肩の凝らない隨筆躰ですら〳〵として淀みなく、そのいふところ、論ずるところが悉く誠を以て汲み取られる。下卷は四季の景物を叙して、美しき自然觀照と、人間生活の趣味相を描寫したものと、旅の感想と戀のものあはれさと及び祝の一篇を添へてある。此の二帖の隨筆は鬼貫が「年比思ひ寄たる事ども、寐覺〳〵にかいつけ置侍りしを」その門人千及・市貫の「あながちに乞に」よつて授與したので、長伯の序及び巨妙子の跋を附し、鬼貫の生前出板されたのである。初刷本はやゝ細長き大本であつて、古

雅な体裁のものを缺本で見た事がある。こゝには半紙判の再刷本から覆刻したが、板下は孰れも同一樣式である。

いまみや艸　安永七年板　中本一冊

女人形を愛して今宮に閑居した湛々翁來山の淡々として淸冽、水の滴る如き句境と、その世外にある趣味生活から生れた發句並に文集である。若き萬平として檀林躰に流行してゐたのは暫時のこと、中年以後はその派のやゝもすれば鬼趣諧におち入るを好まず、彼自身の眞の生活に徹した句境を守つて、十萬堂の寂しい一室に世相を觀じて居たので、鬼貫の提唱する俳諧の誠とも藝術的呼吸が通ひ、蕉風の開示せる舜の世界にも悟入し得たのであつた。『いまみや艸』一卷は奈良の門人古道・長江・梅七の共編で、その三子が師來山に接せる時の聞き覺え、或は文通の折に送り越したもの をおの〳〵持寄つて「年序の前後にもかゝはらず」編次したのであるといふ。女人形の記で見ると、來山はこの人形に愛を寄せて無妻であつたらしく「あらうつゝなのいもせがたりやな」とさへ結んでゐるが、事實は妻あり子あり、殊に若き後妻をすら娵つてゐたのは罪のふかい戲文といはねばならぬ。來山の發句は『俳諧五子稿』に「十萬堂來山句集」として揭げ　坎窩久藏の『木葉駒』と題する句集の稿本もあるが、單行本として行はるゝものに別にない。

續いま宮草　天明三年板　中本二冊

開卷、悅山和尙の筆になる十萬堂の額、髭さへ剃らぬ疎野な來山の風丰に接して、そのありし日の姿をなつかしく思ふ。「愼獨」と篆字で白抜きにした二字は來山の好んで揮毫したもので、「くらがりで凉めど肩はぬがぬなり」の句と共に彼の愼獨的性格があらはれてゐる。『續いま宮草』は前の『いまみや艸』が地方の遺弟が持寄つたあつめものとは

違つて、その家に殘され、子孫に祕め傳へられた限りを盡し、世間に流布する句の誤は一々眞蹟と對照して訂したものなので、孰れの句も無條件で信じてよい。來山四世の孫小西什山の開板で、孛孤の序・南海僧正の題字、凡例、本文、並に知己の追悼吟、什山の跋の順序で體裁よく收めてある。本文は四季の發句混題で、中に附合あり、「寺島の記」の如き小紀行、夢想開きの歌仙、編集の序の類を隨所に配置し、時に泉石の評を句の頭に添へてある。本集にその句の下段に評を置き換たのは、組版の都合で他意がある譯でない。奥附に「今宮草拾遺嗣出」とあるが出板になつたか、どうかを知らない。『續いま宮草』の原本は椒山梓月氏の所藏さるゝを特に乞ふて覆刻する事を得たので、氏の理解ある厚意を深く謝して、さし繪その他を凸版にて全部掲出したのである。

素堂句集　安永四年板

蕪村が『鬼貫句選』の跋に「五子の風韻をしらざるものは、ともに俳諧をかたるべからず」と論じ、その五子中「素堂はもとより句少く」と評せるは蓋し至言であらう。素堂の俳系は葛飾正風派として永く其の勢力を支持したが、素堂句集の編纂に志せる者なきは「もとよりその句少く」といふ事情によるのであらう。麻青菴直生の『俳諧五子稿』には「山口素堂句集」を載せてゐるが、蕪村のいへる五子とは一二出入があるので、その言葉に感激したものとはいへないけれど、蕪村の遺弟太呑の校閲と序を求めてゐるので、その間多少の交渉あるものと思はれる。最初は「素堂家集」と題する寫本による筈であつたが、傳寫のうちに過誤の多かる可きを虞れて見合せ、『五子稿』より採つて收める事に變更したので、此の點讀者の諒恕を願ひたい。素堂は茶道を宗丹に承けてその三世となり、俳諧は季吟に學んで芭蕉の同門といはれるが、初期の檀林風以後は芭蕉の風格を徹して、かろ〴〵しく對抗する事をしなかつたので、蕉

門の徒より重んぜられると共に、素堂の作句その者も蕉風の響きを持つものと見做してよいやうに變調したのである。

狂六堂才麿發句拔萃　天明六年板　中本一冊

江戸檀林は梅翁の十百韻より流行したが、その後の中心人物は才麿であつた。才麿は西鶴の俳系を承け、その大矢數俳諧にならひ、淺草の觀音堂で一日一万句を興行して江戸人一部の人氣を萃めたのである。『次韻』の時代は蕉門と行動を共にしたが、その下風に立つ事を潔よしとせずして離反し、依然舊き檀林風を喜ぶ一派を支配して勢力を維持して居たが、元文二年正月、八十二の長命を以つて歿した。『狂六堂才麿發句拔萃』は江戸談林七世素外が一派の俳風不振なりし時代に「有紀堂佳風、此翁をむかへて再び當流の規矩を立たり」と稱し、梅翁・西鶴・才麿の俳統により、談林三世として其の遺德を慕ひ、古集に載する發句を抄錄し、四季に部類したものである。恰も素外の同門寶馬が發企となつて、才麿五十年回の爲め「椎能恩爺忌」を執行したので、その追善の歌仙及び發句を附載し、一冊子に合梓したので、才麿の肖像は半紙大に刷出してあるのを頁の都合で半段に縮寫した事を斷つて置きたい。原本は川西和露氏の藏架するところで、本集の爲め喜んで覆刻を許されたのは感謝に堪へない。

五元集　延享四年板　大本二冊

蕉門の第一人者其角の自筆句帖である。其角は年少桃青門に入り、『延寶廿歌仙』には既にその技倆を現はして居た。『虛栗』は天和年代の名著であり、貞享には『續虛栗』を出して蕉風の先驅者をつとめ、元祿に入つては一家の集甚だ多い。寶永四年二月、故人となるまで一代の作品中、『焦尾琴』以前のもの丶灰燼となつた外は年々の句稿を手許に止

めて置いた。その中から意に叶へるものを選抄し、俳壇的に經て來た年號の五元を題名として、此の『五元集』の原稿本が殘されたのである。後、或る高僧の文庫に秘められて他見を許さなかつたが、其角の門系旨原その傳來者にしば〳〵懇望した結果、途に宿志を遂げ、これが臨摹を蕪村に托した事が『新花摘』に見えるが、蕪村約を果さず、龜成の手にて其角の眞蹟を一點も違へず透き寫しとし、それに「おのがね鷄合」及び旨原の「拾遺」を附し、元・亨・利・貞の四卷として開板したが、本集には其角自選の元・亨二卷を取つて覆刻したのである。板行の四冊本には江戸の書肆竹川藤兵衛及び前川六左衛門の兩板あり、旨原は別に其角の附合を輯めて『續五元集』を出してゐる。其角の句集には後に久臧の『其角發句集』が文化十一年出板されたが、『五元集』の前二卷を以て充分其角の作風を鑑賞し得るから、敢て對照もして見なかつた。

玄峯集　　寛延三年板　　中本二冊

嵐雪は温和な人物と見られて居る。時には妻女の愛する猫を默つて捨てゝ來て、氣狂ひのやうにさがす妻女の姿をうしろから眺めてゐる。そんな冷酷といふより寧ろいたづらな半面の性格も持つて居た。俳諧師としては筆不性であつたらしい。机に向つてこつ〳〵筆を動かすよりは、頰杖をついて附合の趣向でもぼんやり考へてゐる方であつた。『延寶廿歌仙』に嵐亭治助の名で獨吟を寄稿してゐるが、それ以後は特別の選集に手柄を見せやうとするでもなく、『其袋』が先づ代表作と見られる位である。句作の量も其角より乏しい。其角の作にはその直觀の鋭さがあるが、嵐雪は對象を概念的に扱ふ理智的の傾向がいちじるしい。晩年は禪の感化で人物も作品も縹渺とした趣を感じさせるが、『五元集』のやうな句帖とて殘さなかつた。旨原の編纂した『玄峰集』が唯一の句集である。嵐雪の句は雀志の「註解

玄峰集』を見れば大方理解し得る。其角のやうに難解なものは尠い。『玄峰集』は坊間に流布するが、所藏の板本の置き處を忘れて校正の際は帝國圖書館の寫本を借り、雀志の『嵐雪全集』を傍ら參照したので二三文字の異同がないとも限らぬ。その爲め紐落し等の懸念がないやう校正によく注意を拂つて置いた。

蓮二吟集　寶暦五年板　中本二冊

俳諧は今日の上をいへ、今日の上をいふのが俳諧である。芭蕉のかうした言葉が遺語の中にある。その今日は芭蕉生前の今日である。歿後の今日は既に生前の今日ではない。支考はこの今日の上を解釋して、今日の人情、今日の世相が彼のいはゆる俗談平話に反映されてゐると見て、俗談平話を以て常にその句作の信條として居た。支考の思辯的な俳論より推して、その作品の俗情中心なるを恠しむにあたらない。美濃派の俳風の地方的に流行して人物の出でなかつたのは、その今日の上を支考在世の今日に求めて、時代と共に新しき今日あるを忘却したが爲めである。『蓮二吟集』はその門系の掬一浮が、支考關係の俳書八十七部から抄錄したので書名の目錄もあげてあり、句集としては其の体裁を備へたものであるが、板下に誤字誤寫が多く、「古い板本にも亦誤植がある」一例に擧げらるゝ缺點を持つてゐる。編者の序、引書、春夏二季の發句を風の卷とし、秋冬二季の發句、追加及び支考古墳圖を雅の卷に充てゝある。支考の句集の活字に飜刻されたものなきを以て、流布本の稀なるを知るべく、本書亦川西和露氏の所藏本によつて校訂したのである。

五老井發句集　天保五年板　中本一冊

發句は題を箱に入れて、その蓋に上つて趣向を求めよとは許六の句作態度であつた。發句は題と趣向との二つを對照して、その取合せを第一とすべしとは許六の技巧論である。許六の發句の特色及び傾向は此の態度と技巧とで大体考察し得ない事はない。許六は又芭蕉の道統を稱して同門を威壓したが、これはその俳風宣傳策で、しかも『正風彥根躰』の地方的勢力を得たのみで、彥根以外には許六の弟子孟遠が中國筋に多少の宣傳をなした得程度に了つた。許六は宿痾に臥しつゝ死ぬまで俳諧的叫びをつゞけたが、その句集は『菊阿全集』にある筈とばかり開板にならないので遂に世に知られない。嘉永元年板の『風俗文選犬註解』にその著者介我が『菊阿全集』その他より輯めて許六傳の終に附錄したものが句數も多く、世間的にもなつて居る。本集の『五老井發句集』はそれ以前に近江の指艾園山陰か四季に類題し、單行本として出板したもので序文に許六の「一代の句々、諸集よりもしほ艸書あつめ、撰訂を正し」て一書とした事を述べてゐるが、漏れたる句も決して尠くない。

北枝發句集　　天保三年板　　中本一冊

火事で家を燒いた北枝は「されども花は散らすまじ」と、いくらか風雅をてらつた嫌ひのある句を詠んで、芭蕉からその造次にも俳諧を忘れない心事をいたく稱揚された。北枝は兄の牧童と共に金澤の研屋であつた。俳諧の爲め業を怠るな、家を破るなといふ芭蕉の誡は北枝の場合だけ除外例となつたのである。北枝はその性行疎懶の方で、別に集を選んで名を賣らうとするでもなし、弟子を拵へやうとするでもなし、全く俳諧を無上道として世事に關心するところがなかつた。北枝の句を理解するには超世間的な彼の氣分を度外視してはならない。杉あじろの笠、樫の杖、狂者に近い姿で「おれは發句をひろひに步るいてゐるのだ」と濶步した彼にして、彼の句境に到着したのである。北枝の句

集は闌更編の二冊本があると聞くが、こゝには加賀の北海が行脚の道すがら聞きあつめたものを板行した『北枝發句集』を採つて置いた。梅室の序、拘儀の跋がある。北枝にはその俳系を嗣いだ者がないので、闌更の『俳諧世説』にある逸話以外に事蹟も多く傳はらない。その句集の存するのが、せめて北枝の句境を知るよすがとなるばかりである。

古太白堂句選　文化元年板　小形本　一冊

江戸の蕉門は概して『炭俵』を流行の頂點として、再びあとへ戻つたり、行き過ぎたり、その傾向が甚だ亂れて行つた。桃隣は『別座鋪』の一卷に「さら〳〵として砂川のながるゝ」やうな淺きを俳諧の躰として芭蕉の捌きに接しながら、その淺きに行詰つて江戸座の風俗に染る事になつた。それは附合の上の事で、發句には流石にそれ程戸惑ひするに至らないやうに思はれる。桃隣の俳系は太白堂の一派をなして居たので、近世まで連綿として絶ゆる事はなかつた。『古太白堂句選』は四世桃隣がその門人舞石と共に編纂したので、歌仙七卷を卷初に載せ、更にその發句を四季類題別とし、百年忌の報恩に出板したものである。原本の題簽剝落してその題名をあきらかにし難い爲め、發句の部にある標題をそのまゝ假に用ひたのであるが、本文には脫丁等の憂ひなきものと思つてゐる。本書も筆耕の思はぬ誤記がある中に歌仙の芭蕉の蕉が悉く、草冠のない焦の字になつてゐる如きは不体裁も甚だしい。發句はいづれ桃隣關係の古集から抄錄したのであらうが『陸奥衛』にあるものは全部載つてゐる。曾良の一句が混入してあるのは本文に指摘して置いた通りである。

杉風句集　天明五年板　中本　一冊

杉風は芭蕉の江戸に於ける生活の支持者であつた。殊に檀林以來の作者なので、句作の力量もたしかに備へて居た。芭蕉がたはむれに「ひがし三十三ヶ國の俳諧奉行」と人にも語り許して居たといふのは事實であらう。晩年その鯉屋が倒産したので、不遇に終つたらしい。杉風の系統を稱する採荼庵派は梅人によつて再興されたので、直接繼承したものでない。杉風の孫女の遺稿類を傳來するのを聞いて、梅人がその家を訪問すると、孫女は前夜夢に杉風からかく〳〵の者に我が遺稿を與へよといはれた人物に似てゐる奇縁に、家にある杉風祕記その他を割愛して採荼庵の再興を諾した事が、梅人傳の中に出てゐる。『杉風句集』も亦その折讓られた句稿を整理したのであるが、『杉風祕記拔書』の芭蕉伊賀より來り「剃髮して素堂と改られけり」とある一項は疑問である。梅人の序と右の拔書、杉風の座像があり先づ檀林風の發句をかゝげ、蕉風躰の分を四季別として收めてある。梅人門人魚葉の跋及び採荼庵所持の目錄を添へ、奥付に『續杉風句集』を近刻としてあるが、これは出板に至らなかつたものと思ふ。

惟然坊句集　　文化年中板？　　中本一冊

『藤の實』の純然たる蕉風境から『二葉集』の口語調へ、その變化の急激なるにも似て、惟然坊の一生は又流轉のはげしいものであつた。「庭前の梅花時ならずして鳥の羽風に落散るに感動して、世を遁るゝの初發心によつて妻子を置去りにし、蕉門に入つて捨身行脚の身となり、師の遷化の後は風羅念佛を唱へ廻り、たま〳〵その女とめぐり逢ひ、泣いて袂をひかゆるを振りはなち、その女の世に望みを絶つて尼となるに及び、父子二人の佛門生活をなすに至るまでの經路は一篇の人間哀史である。『惟然坊句集』は尾張の秋擧が散亂せる發句、書翰及び逸事を苦心蒐集したもので、四季類題の發句の中に、その季に相當する書翰を挿入し、諸國にて見聞せる坊の風狂的生活を率直な文章で記してあ

る。秋擧とその師士朗との序、巴圭の跋があるが、それで見ると秋擧が坊の舊菴なる關に至り、その句と逸事を詳しく語つたのに感激し、關の住人巴圭が校合出板したものゝ如くである。板元の奥付のない爲め、出板の年號を明確にし難いが多分文化年中であらうと思ふ。或は藏本に奥附を缺いて居るのかも知れないから、異本を見たらそれが明瞭するであらう。

去來發句集　安永三年板　中本二冊
丈艸發句集

石山の幻住庵に、鳰の波照る湖畔の無名庵に、或はとく〳〵の雫を共に掬び、或は木曾殿とせなか合せの夜寒を師翁と語り明したのは去來と丈草であつた。難波の病床に群弟子を統制して師翁をやすらかに遷化させ、義仲寺の埋葬の事なども、つゝがなく取行つたのも此の二弟子であつた。蕉風分裂後の諸弟子おの〳〵覇を爭ふ中に、毅然として不易流行論をとなへたのは去來であつた。それらの紛紜に無關心で、佛幻菴裏一字一石の法華經に師翁の供養を行つて居たのは丈草であつた。其角と嵐雪を蕉門の桃さくらとすれば、去來と丈草はまさに梅とすもゝの双絶であつた。去來は儒家に人となつて堂上家に仕へ、丈草は武人の俸祿をすてゝ佛門に歸依した事と、處世的境遇は異るが、『猿蓑』の絶對句境を信じて遂に變風しなかつた二人の態度は全く同一轍であつた。去來には未見ながら『十日菊』その他丈草には『幻の庵』及び『龍ケ岡』の二集あつて、その傳記と行狀を詳しく知り得るが、その句集として單獨に編輯されたものはない。芭蕉一門の懇篤な記録者蝶夢の手に依つて、二人の句集が同時に出板されたのは其の好い機縁であつたといはねばならぬ。題簽で『去來發句集』は上卷、『丈草發句集』は下卷である事、その各別の板行でない事は、

去來の方に與附なく、丈草の卷末に井筒屋・橘屋の兩板元を記してあるのでも知れやう。蝶夢の序と、二集それ〲に小傳を添へ、發句も同一体裁の四季類題となつて居る。本集には別個の句集として取扱ひ、標題に上下を附して置いたが、解題に兩集を同一にしたのは原本の主旨を尊重した意味に外ならない。『去來發句集』にはまゝ落丁本を見受けるが、本文は丁附を調べて完全な事を確めた上で底本としたのである。

浪化上人發句集　慶應元年刊　小菊本　一　冊

越中井波の邊鄙な寺に住持したが、本願寺の連枝といふので、浪化の入門は階級的な時代の人々をして、蕉風に對し驚異の眼を向けたであらう事疑ひない。浪化の芭蕉と對談したのは嵯峨の落柿舍の一會に過ぎないが、「有磯・となみ」の撰集をデヂケートして居るので師恩を思ふの深かつた事も亦疑ひない。芭蕉の後は去來に師事したので純蕉風躰を体驗したが、支考の行脚を迎へて、その雄辯に動かされたであらうから、その發句にも取立てゝいふ程の特徴はない。浪化の行狀は『白扇集』及び『霜の光』に掲げられ、その日記の一部は『霜の光』に收錄してあるが、發句集としては越中の野鶴が、浪化の日記幷に元祿の古集から忠實に抄記した本書あるのみで、編集の時代の若いものとしては信用して好い。私の畏敬する遠藤蓼花氏は本文の覆刻を古俳書文庫中にて試み、浪化の研究にも心を寄せて居られるので、本文の校正を懇囑して快諾を得、逐一原文對校をされたのである。本文は四季別の發句集と日記遺稿から採つた文集を合せ、附錄に野鶴當時の俳人の發句をも入れ加へてあるまゝ、校正の際變更した個所はない筈である。

蓼林集　細長本　三　冊

支麥の徒といへば俳諧魔の如く嫌惡された。それは彼等の黨派心が强くして、その徒以外の者とは俳諧的交渉をさけ。或時は彼等以外の者を異端視するが如き態度を取つて居たからで、後世の月並派、今日の俳壇一部の如き物質的に墮落して居る原因ではなかつた。支麥の徒の一は支考の美濃派であり、一は麥林即ち乙由の伊勢風派である。伊勢風は凉菟を祖述者とするが、全國的に風靡したのは乙由の力であつた。美濃派では連句の約束に心の纏を、伊勢風では形の纏――女とか櫛とかいへば直に戀として取扱つた位の相違で、根本的の區別を立て難い。從つて乙由の句を評するには、支考に對したと同一で、俗談平話を本位として地方人の歸依を得たるものと看做してよい。『麥林集』三卷は乙由の遺子麥浪が、父の遺艸を整理して四季類題に配列したので、句數はむしろ多きを貪り過ぎて、玉石同架の弊に落ちてゐる。みゝずの這ふやうな板下の文字は刷り方の拙劣な爲め、ところどころ擦れて判讀に苦しめられたが、全然不可解の文字はなかつた。『續麥林集』二卷は乙由の附合を輯めたので、同じく麥浪の手で出板されてゐる。

類柑子文集　寶永四年板　大本三冊

其角は豪放の一面に細心な性格であつた、かの『五元集』の句帖といひ、此の『類柑子文集』といひ、遊里と酒とに一生を沈湎したといふ世俗的の誤解は此の一事でもとけやう。文集とはいふものゝ也有の『鶉衣』の如きユーモアを以つて一貫した俳文ではなく、隨時の感想を書いて置いたものを中心に、それに因みのある自他の發句を挿んで感興を添へ、中卷の後半は其角一派の歌仙をならべたもので、いはゞ彼の『雜談集』と同じやうな体裁に出來てゐる。終に守武千句の序を私抄してあるのは凉菟の『皮籠摺』に序して、その自筆本に興味を寄せてゐる心事を現はしてゐる。上・中の二卷が本文で、下卷の題簽には『類柑子追悼』として内容は「おのがね鷄合」の三十五合までと、青流の晉子

追悼記、嵐雪その他の同門遺弟の發句、冠里公發句の百韻を錄してある。沾洲・秋色・青流連名の跋によると、嵐雪等がその舊庵中にて反古の類を取揃へ、「秋色といふもの、女ながらも久しく笈を負ふ心ざしあり」その散佚を憂ひて、これが出板を企てたのであるといふ。「おのがね鷄合」は後半を『五元集』の利の卷より補ひ、又再板本の追悼句をも採つて卷末に附した事は本文にも註記し置いた。

續其袋　　中本一冊

嵐雪の文集であるが、遺稿の殘れるを板行したのでない。雪中庵の三世を嗣いだ蓼太が諸集より抄記したものを收め、これに蓼太一派の作品を附し、全三卷としたので嵐雪の文集はその上卷にあるだけである。後には外題を『嵐雪文集』と改めて單行本にしたが、此の方が坊間に流布してゐる。仔細に見て行くと筆寫の誤があるので、「裴遊稿」及び「塔澤記」は『杜選集』の原文と對照して、その誤れる個所を訂し、『胡蝶記』は史登の『ぬか衣』に載する原文通りに改め『黑茶碗銘』は『本朝文選』により、「其袋序」は『其袋』により文字の異同を原文本位に訂した以外は、蓼太本のまゝにして置いた。附錄二卷は本來ならば採錄すべきであるが豫定の頁紙を超えるのと、かつは『嵐雪文集』として單行本もある事なので、本文のみに止めて附錄の方は省略した。この校正は編纂同人に委したが、文脈の接續を發見するに困難なので或は誤つた句讀を施したところがないとも云へない。（勝峰晋風）

本集には『野坡吟集』を入れる豫定であり、『凉莵句選』も此際同時に覆刻したい考であつたが、豫定の頁と豫約期間に迫られてそれを果し得ず、古板本より增訂をはかる主旨をも實現し得なかつたのは申譯がない。

日本俳書大系　第五巻　元禄名家句選　目次

初心もと柏

言水

城南の何がしが子の問、誹諧のみちはどの道をゆく。答、昔時は直グ道、中比は難波みち・江戸道の八百韵、うそにもあれ、後やう姿・前後園の品、あづまには東日記・京日記に書わけて、都風俗に一筋あり。新道・蛇の鮨はむかしとて無味成べし。江戸辨慶が長刀もとさびて千人にわたらず。只橋上にイて五十哥仙の人々に行あふ。其中に秀才の兒あり。予はしたがひて去ル。城南子にをしゆ。花はみよし野の枝折、去年の古道をゆけ。同じ櫻のながめ何かあるべし。紅葉にはと立田にゆかず、清閑寺の一木に一瓢をたゝくあり。それも一日の樂か、そしるにはあらず。月は更科、雪の不二、くもらぬ胸を以てあがむべきは、只敷しまの道の神。

享保二丁酉年霜降月下旬

紫藤軒言水

自序

元日

思出つ赤人にまでのかゞみ餅

人麻呂を仰ぎ奉るはつねなり。赤人にまでさおもひいづるは、此春のゆたかさ、我世の程もほゝえみて。

四方拜

もれめやは短山まで四方拜

上　四方の山陵の御拜ありて、民の世も思召す御政さかやさぞ。もれめやはもれまじき也。中臣ノ祓に云、高山の末短山の末。高山は山陵、みじか山は其外也。それの中にもれぬ民。

元日

とし玉に梅折ル小野の翁かな

小野は都の北山にして、きはめて雪深き里なり。かゝる山里も陽來りて此花咲り。賣炭ノ翁、都のつさにさおりめづらしく思ひたるか。

仝

霞けり比叡は近江の物ならず

うちかすむとしの明ぼのゝすがた云に堪タリ。顯昭が哥枕に、ひえは近江のものさいふか、

中〱都の空。

同

齒朶の葉の七荷は誰を小殿ばら

みちのくの十符の菅ごも七符には君をねさせて三〇に我ねん

右の哥をとれり。齒朶の葉に荷有。十荷に定ルものにはあられど、それと見なしてかくいへり。小殿と有に戀を思ひて。

元日

福壽艸一寸物の始なり

万物の品タリ。福も壽も寸尺の運びにひとし。一寸と打出たる詞、此句のひさつなり。福壽草元正ニ花始テ開ク。故ニ元日草トモいふ。そのさま寸ニ及テ花有リ。

仝

夫にせよ我レ手に安し松の羽子

此京にのぼりし年の朝、大路のさま松たてなどして豊なる時。

仝

比叡にこそ額の皺はあさ霞

あけたつさしの眺め也。自を祝キ我若し。今高峯にむかつて見上、皺をなす。此皺老たるにはあらず、比叡故にこそ。

六十餘歳亦化レス見る

海老の座も越ぬべら也小殿ばら

小殿ばらと云出るは若年の輩。海老はかざりの一チとして蓬萊の長タリ。予六十余にして今若くかへりぬ。是より又千世ふべし小殿ばら。

着衣始

花染の羽袖や去年の寒苦鳥

只我福の花〱しきを述ル。

佛説ニ曰、雪山ノ寒苦鳥、巢をなさずして寒天を歎く。陽に至ノてはその事を忘ル。人上ノいましめ是也。我其鳥に似タリ。昨は麁衣に寒を歎キ、今は花の衣となれり。又遊に戯てそれを思はず。作レ去今日の富、羽の一字は鳥の縁か。

元日

蓬萊に夜は薄ぎぬも着せつべし

同

白魚の塵(チリ)も撰けり年男

又

人も來(ク)る雜煮に鰹花かづら

巻向(まきむく)の穴師の山の山人と
人も見るかに山かづらせよ

此哥よりおもひそむ。嘱に品あり。

仝

歯固やとは云さして水の恩

聖節

酢に酢貝酒に禮(レイ)有ッ睦(ムツミ)月

酢貝は酢にむつましむ。ゆかりの一族(ゾク)は酒によろ事正し。

元日

鏡餅多門は鉾をあれ鼠

聖節

初空や有ノ福祿壽無ノ惡魔

南星は福祿壽、正に形アリ此嘱。

元日

はつ空や金糸烟(タバコ)吹輪の中の比叡

仝

面影や匣(コヨミ)左右(マテ)指スえ方棚

さしの姉は我他(ヒト)に妻新タに沐(ユアミ)し、髮けづり、つれならぬ樣にして。

樂ト云題ニテ

膝枕設物の音の喜春樂

歡樂極めては此愛あるべし。

湖上眺望

破レ鐘もかすむ類(タグ)ひか鳰の海

春のうら〳〵さうちかすむなり。けやけき三井のわれがねも、音うつくしくこの時は。

朧月

猫逃て梅動(ユスリ)けりおぼろ月

月にうかれて花にたよれり。のらいうかれは妻こひが、けうさく木づたへば猶梅がゝ甚し。

南禪寺金地院にて

酢をとへば無一味を答ヘツ梅の花

華頂山

御忌の鐘皿割ル罪や曉(アカツキ)雲

山上の鐘太(ヲホイ)にして隣山に響き、院々の土器をわる。その罪は雲のごと消なん。人上の罪科は中々唯ためめ。

元祿始

ならの京にて

釋迦霞けりや生駒は雨ぐもり

君があたり見つゝをゝらんいこま山
雲なかくしそ雨はふるとも

西に伊胡馬嶽、ひんがしに盧舍那佛、いづれも高タリ。雨曇りは哥の緣より。

二見浦

など着せぬ岩に烏帽子を春の海

此國のならひ物になぞらへて、ものこふる宮雀アリ。

難波津を出くるに、鶴翁・似仙・一時軒のともがら我をかへさず。

一席

我かへせ芦に角生ィ魚白く

鳳風巾

しら糸やひつじさるさるいかのぼり

夫木ニ
見ちのくの白川越て別れにし
ひつじさるさるゆけどはるけし

紙鳶陽に乘じて、東風に鳴ル。

初蕨

をし曲(ユガ)むわらびも風のゆくて哉

寸ニ及ぶも陽にしたがひて。

六角堂月次之會卷頭

うごくとは土筆(ツクシ)も雷の初メ哉

涅槃

鼠とるねはんの猫とながめけり

一蓮託生

蓮池に生れて舊(モト)の蛙かな

井手にて

玉川や蛙流るゝ馬の沓

駒とめて猶水かはん山ぶきの
花の露そふ井出の玉川

此歌にのりて古沓の上。

東御門主一如上人の御前にて、卽興。

吹ぬ日の風鈴は蜂のやどりかな

上巳

勝鶏(カチ)の世は若衆に抱(ダ)かれけり

美童に抱かるゝを、ないが本意か。

江戸八百韵に

共事よ蜑の咽(ノド)干ル今日の海

猫戀

つま猫の胸の火やゆく潦(ニハタヅミ)

猛火をしめす水。

大井川の邊にて

ねこの子やいづく筏の水馴竿

約してつれゆく猫の桴(いかだ)の上にさまよふを見ろ。法苑珠林ニ曰、筏は兄弟のごとし。此猫別れて他にゆく、是其材に等し。

みよし野にて

人ゝに同じ様(サマ)なし山櫻

仁和寺のはなに

腮(アゴ)杖(ヅヱ)に阿(あ)呼さだまる櫻かな

阿と云にあふぬき、花の果を見る。呼といふには、うつぶきて、あごに杖つく暮日のかなしみ。今此時、あすしらぬ我が命。

關白殿房輔公御前にて即興、花交松ト云題

家づとや櫻のあゆむ小松原

東山の花に

ゆき〳〵て蝶(ヒラ)の根ひくし山櫻

日岡峠にて

伊勢まいり都見かへせ花ぐもり

題落花浮水

待(マテ)おのれ櫻敲きし水馴棹

新古今冬 おほゐ川にまかりて、紅 浮水といへる心を　資宗朝臣

いかだ士よまてこととはむ水上に
いかばかりふくみねのあらしぞ

昨來つて花のちるだにかなしきを、今初櫻の散うかぶは、汝、水上にて水棹あてたるやいなや。

知恩寺に遊ブ。

入あひの黒みをそめぬ櫻かな

祇園

花ぐもり南に黒しかはら竈(ガマ)

桑門友元がもとの一木のさくら
に書つけぬ。

そめば花そまねば櫻はねつるべ

東山千もとの花に帷幕引はへて

行者は隔夜ばかりぞ花の陰

人々かみのそのふにあそぶ。隔夜はなのが業ゆへしばしもとゞまらず。五もじは語也。

雲雀

採桑の壢に落る雲雀かな

欵冬

やま吹やおらで渦まく淵の上

ふかく花を思ふのみ。

梨園

梨の花水こひ鳥や幾廻り

梨花ニ水氣アルヲ。

、東山の鑒にて

茶の花や淀も桂もわすれ水

忘水とは深草が下にゆく流なり。右の二河常は淸白に見ゆ。花茶長寢とては其樣忘水タリ。

夏

卯花

うの花も白し夜半の天河

江戸八百韵と云集撰み侍りける時、素堂と打つれ歸るさの夜いたく更ぬ。所は本庄、一鐵が許。家まばらにして、かきね卯花咲り。

灌佛

卯花と闇の明けり產の水

獨尊出生、暗夜の明たるがごとし。花は手向種淸白をいふ。

麥秋

茶になげき麥にむさぼるうき世かな

待郭公

人いまだ荊には寢ずほとゝぎす

足引の山路くらしつ郭公
今一聲のきかまほしさに

此歌に對ス。山ふかく入て、荊屯にも臥さばきくべきを。

初聞霍公

夜着きても愛宕は早し蜀魂

あたごは高山にして余寒甚し。さりながら。

志賀山越

花の魂入日や滋賀の子規

花のたましゐは入日と變じ、入日はほとゝぎすと變ズ。志賀は淡海の西山、かるがゆへに。

山田原

二の華表こゆる迄なし杜宇

西行 きかずともこゝをせにせんほとゝぎす 山田が原の杉のむらだち

一ノ鳥居にきかず。二に至らんとすに、願ひ滿タリ。

忍山時鳥といふ句を望む人有リ。

時鳥行碁の縄や山かづら

碁聖は國郡を分初たまふなり。今横雲を縄と見る。むかししのぶのやまのほとゝぎす是なん。

牧方と云所にて

流レ去ル夜やなら茶舟時鳥

啼すてゝいづちゆくらん郭公 よどのわたりのまだよふかきに

さよめるよりおもひ出ツ夜ごろ、賈船の行逆ふその聲もおかしげに。

伏見江ニ聽キ蜀魄ヲ

鯉はねて水靜也郭公

この里のさびわたるには、ほとゝぎすもやさく待わびしに、左はなく、里魚のはぬる音をきく。いやましに淋し。はたして時鳥なけり。句の品は鳶天魚躍、此事を思ひそへぬ。

待子規

地藏いねず樗花咲り杜鵑

一佛必玉鉢の樹下ニ立リ。

大原野にて

操サガしけり清水は朧ほとゝぎす

名にしあふ朧の清水、その所をしらず、みくさがしたに音あるを得てむすべり。邊は木立物ふりぬ、聲きゝつべきに左もなく。

諫鼓鳥

玉水や榮螺がら鳴クかんこ鳥

點滴也。

洋々公御會に

釣そめて蚊屋面白キ月夜哉

程ふれば爵（ハツ）〳〵しきを、はつ釣の夜、月のおもしろく、後をしらず。

契情（ケイセイ）にかはりて

身を思へばいなする蚊屋のほたるかな

皷子花にしばし羽なき螢哉

夜を待けしきなり。夕がほと有べきを晝がほさす。晝は一日の理。

牛部屋に晝みる草の螢哉

四州鉚鱗公、伏陽の御旅館にめされて、都邊の有さまいかにとの御意、何の品なし。

宇治瀨田を中ス葉うらの螢かな

句は白晝。

鳥羽にて

見てゆくや早苗のみどり里の藏

富貴をもさゝして淸白を逃ル。

田植

早乙女の見にゆく宮の鏡哉

かへるさ成べし。

賀茂の祭

老樂も二つ鏡やあふひ草

嗜ムにはあらず、神ヲ敬ふにて。

葵草かゝれとてしも牛の角

たらちねはかゝれとてしも烏羽玉の
わがくろかみをなでずや有けむ

これよりして。

端午

藥（クス）玉や灯の花のゆらぐまで

夜陰にうつるを云。くす玉は造リ花にて、玉簾に結びて、其一日のかざりなり。花と花との爭ひな。

仝

むづかしや粽とく手も桑門（ヨステビト）

芦田鶴の香を鼰（カギ）出す粽かな

粽の風流なり。其芦に馴たる鶴の匂ひまで賀さ定ム。

短夜

夏の夜は山鳥の首（クビ）に明にけり

賢鳥の寢姿首短し。

蠅

はいうちやをのがむくひをなめし革(ガハ)

閼荷昌貭、年經て此京に席(ムシロ)もよふすにかく云遣ス。

東嶺に又契る世や水の蟬

句は後佛の世。予一たび東のかたに有リ。今は此地の水虫と卑下(ヒ)ス。蟬と變じて又その山にちぎるべきとの理リ。

五月闇

富士に目はやらでも寒し五月雨

其比は暑也。不二山の冷をしたふべきに、只さむく五月暗。

川狩

成長(ヒトヽナリ)て左手にかざせり枕蚊帳

蚊屋の題にて

晝か屋は人魚に網のまよひかな

女の半バきぬ脫かけたるを見て云、下心略ス。迷ひの字專。

蓮

父と呼ヒ母いまだ有リ蓮の花

我たのむ寺にまふでゝ、池上所せき花咲リ。舊年父におくれたり。其父此蓮臺にやあらんとよばふに、いらへなし。世にのこる一人、いやましに孝をなさん事。

白雨に割ぬ葉もあり志名(しな)の蓮

湖邊の志名は蓮の名どころにて、花みる人多し。みな月の比、棹(サホサシ)て只しげきを云。

南京藥師寺の繪馬ニ書。

涼風や眠(ネム)漕グ舟のやくし寺

古哥
三笠山みねこぐ舟のやくし寺
淡路の嶋のからすきのへら

涼しきに堪て打眠ル也。俗言に人のねぶりを舟漕トㇳ云。右の哥に對ス。

日枝(ヒヱ)峯にて

高峯より礫打チ見ん夏の湖(ウミ)

湖上の眺のすゞしきを。

河東涼

夕涼み妬(ネタ)しや鳰(ニホ)のあり所

すゞしさ此外にあらじと慢ズ。作レ去山隔て淡海有。それ一つ又たましく。

おなじく

引袖も涼し太皷の四がしら

一二の太皷三たびに及べば、茶店の業しまふ掟也。かへらんさすな、いまだ更やらぬといひてさゞむもあだ人。

月は山美犬こそ眠たかむしろ

月は山風ぞしぐれににほの海

右後普光園殿の御句なり。其五もじをしたひて。

難波祭逝追悼

引汐の世や夜たゞ鳴よし雀

鵜飼

あまつさへ經木踏ゆく鵜川かな

紙屋川

東の立志、都の棹哥をのく口ずさぶ中に、

夏草や魯論かぞふる紙屋川

洛北紙屋河は聖廟のしりへなり。故ニ魯論とは出タリ。一万八千ぐさのながめして。

秋

享保の元のとしのはつ秋、打出の濱にあそびしも、御代がはりのかぎりなき御賀、富貴草によそへて、

乍恐

松風の賦をさゞ浪や早稲遲田

賦はもの〻姉、松ふく風よりつたへてさゞ波にうつし、わせにふき、をしれに穂なみをなす。

夙に起て妻に芭蕉を縫せけり

つとに朝速也。はや秋風のもろく、その葉を割ク。此悲ミ。

七夕

七くさや酢味噲遁れて秋の花

星に七種の手向有。萩・きちかうのたぐひなり。人ー日の七くさは酢にもあへり。此草はのがれて秋の花と。

躍

をどり聲花に鎰もあらばこそ

夜比心のさはりなく、うかれたつ賤の女男か。

玉櫛笥親のとりをく躍かな

人の親の心のやみときくも。

露

しらつゆのしらけ仕まひや淀の水

・大ひえ・愛宕・あらしの山の。

木槿

賤の戸や襁褓にしぼむ花木槿

朝日まちえて、しめしほす垣ほ也。いよ〳〵花のはかなさ。

女倍子

女郎花うてば扇のにほひかな

姉ましさ打ば忽扇に香あり。猶こゝろにくし。

神路山

笑へとのをしへや折て女郎花

人情此國を元とす。二神はじめてのをしへ、この花にたよりて。

萩

山萩のそへ竹はなしさりながら

人の庭に一もとうへて、宮城野のなごゝ愛る。おかしからず。只山萩の打みだれて、風の吹しくをこそ。

自撰五十哥仙に

山城に見ぐるし野あり我も香

他のことの葉の中に我あり。我かうばしきさは我慢その事、みぐるしくやあらん。見ぐるし野は、醍醐のほとりとぞきく。

霧

朝霧やさても富士呑む長次郎

しほや長次良といふ者、世にいでゝ放下す。目前の山海、行路の牛馬を忽にのみ隠す。今の朝霧は眼上の不二山をのむ。塩の長次に似タリ。此山たゞは出さず、しほじりの縁を以也。予此句このまず。さりながら雜言の一つ、是慰にもと。

釋氏の許にて

玉虫は掃捨る師の掟かな

嵯峨にて

あさましや虫吹中に尼一人

世わたりの尼が、衣をかけながら虫撰の中に見タリ。さめるもいゝ涙にしたがひて、かゝ

る事おほし。

鳴子

なるこ引ク二日の月もちから哉

しゝ小屋のさびしく、よすがなきを。

追悼

どこへゆくどこへ白-露の節衣

中秋ノ節也。右は靑木春澄が身まかりけるをとぶらふ。其身妙經ニ固く傾きて、又禪道もうとからず。依去かく云つかはす。衣の白キは常ならず其期。

高野山

何ほとけ乘せ來る秋の曉雲（ヤマカヅラ）

妻に別し稱高野に詣ぬ。此地後佛を誓フ御山也。此曉の雲には我妻ものせくるか。

初鴈

後（ロ）から物めさせけり鴈の聲

衣かりとよめるより。

初月の弓に弦なし鴈の聲

澤邊の鴫のたつを見て

石うつて立する鴫は哀なし

此鴫は自然の心。

十五夜

須磨の秋三日月からは來ぬ人ぞ

人ゝ須磨の月を見るに、滿月を專さす。志深からず。

かしましや〱此須磨の秋

閑月を感ジじて見るをこそ、名所の本意ならめ。むれつゝ人の來る事ぞ。

淀にて

名月や汲ぬも寒き水車

くみわたす水の別は冷ゝたるを、くまぬ車も名月のかげに傾キテ。

思へたゞ今日を桂の太郎月

新月を初陽にたとへたり。

前夜雨いたくふりて、けふの快-晴

月を是にひと雲非也今日の山

けふの晴天きのふの非なし。非と思しきは唯山に一雲殘たるのみ。

廣澤や禿も底に月の聲

此句ことしの句也。若人（ワカウド）にきゝて廣澤に禿連

ゆくなと十五夜さ悟ん。さもあるべし。遊人又此禿は大澤のしら菊が妹か。

いで羽なる象潟に旅ねして

夜や秋や海士の痩子や鳴鷗

五文字治定也。下のやは疑也。夜なるかな秋なるかな。此夜の永きに付て、我ねざめたり。あまの子もひとしく乳房や乞て泣か。又はかもめのなくか。鷗ー聲赤ー子ニ似タリ。

きさかたや稲木も網の助杭

潟に思ひて網干ないふ。この潟は島ー海ー山の麓、徑〳〵を襟にして、袖掛櫻のほとりまで田園なり。

高雄

鼻紙の間の紅葉や君がため

あだ人に見せばやさ。

冬

初時雨

初時雨舌うつ海膽の味もこそ

欄に出て時雨を見る。酒ありて、うにあり。初海膽其節タリ。舌にさばけて清味なり。しぐれの清くたるそれに對ス。

傘提てしらぬ翁ぞむらしぐれ

宗祇　うつし置我影ながら世のうさを
　　　しらぬ翁ぞうらやまれぬる

右のうたをとりて云。村時雨にそのかさをうらやむ。

•

三十余年一むかし、都外の閑人を尋ぬ。所は壬生領又開子が許。

鳩眠ル冬木ながらや枯梢

はねつるべは必たつ木によりてなくものなり。汲人稀に、百鳥も見ず。只一ー鳥又ゝ閑。

羇路冬

火燵出て古郷戀し星月夜

予廿にたらであづまにおもむく。遠江の國汐見坂といふ所にやどりて、都も戀し足がらの關もと、ゆくすゑの事おもひわたして。

淡ゝ與行

爐の眠り浪こそきかね須磨明石

只九華ノ地ノ豊を云。すまもあかしも夢の興。

待戀

來ぬ人を爐にけぶらせつ椎のから

約してこぬなかこつ。瓫(ホトキ)の椎のひさつく〲にうらみ盡して、爐中のけぶりさはなしぬ。

南京研心比丘を訪ふ。

爐の炭の瘦もとはゞや夜半の霜

冬椿

されぱこそ茶人しらなみ玉椿

此句春さいふ人もあるべし。心は茶にして、行客を極めて花盜さうたがふ。ふかく冬椿なるべし。

山茶花

さゞむ花に囮(ヲトリ)鳴日のゆふべかな

鄙びたる家の後園に置一籠。ころは小春の優にめでゝ、日影のにほひ此花に對る。

見消ぬ奥はさゞん花崩壁

美童の跡をしたひしにその俤をうしなふ。ついひぢ(築墻)のくづれより入て見れば、山茶花のさけり。さては花の精魂あらはれたるか。

石菜花

窓明の姿二つやつはの花

きぬ〲なり。手あらひ口すゝぎして、わかれゆくを見る折にあひ、つはの花さけり。さてもふたつの俤は君黄八丈。

河邊聞千鳥

碁は妾に崩されてきくちどりかな

所は洛のひんがし、ねよさの鐘も更〱、建仁ノ陀羅尼(り)に其わざはてず、崩すは憎し情は深し。

火の影や人にてすごき網代守

行路の夜、水上の火をなそるゝ人、定りて網代守とはしりながら。

北條園水興行

所は堀川の亭

はつ雪や菅笠とつて櫻河

おもしろや酒狂人。

雪

枯野哉かれに寝て見ん不二の味

彼(カレ)は其野也。

早梅

折られけりいらちて梅の徳は何

菅大臣社
奉納

桂折ル左も可也冬の梅

御母公ノ御哥
久かたの月の桂も折ばかり家の風をもふかせてしがな

桂折とは官に昇ル事。また、そでにもちたる梅にてもの御哥を合して、聖廟の御譽を申たてまつるのみ。

年尾

四十年以前、東の茅にありしとしのくれ

質に置ん露さへ氷る歳の暮

昔時清貧の連哥師あり。つれに酒ヲ好ム。門人に酒家あり。それが許に買フ。其錢つもつて、なす事をしらず。後に酒をうらず。師の歎ク。門人がいふ、質を乞リ。時に質種なし。酒家がいはく、露の一字をとるべし。かされてつかふ事なかれ。師のいはく、いさ安しといひて呑リ。席(ムシロ)かされて我句すゝます。又歎てつゆの字をかへす。是非なふして酒をうる、やさしきためしあり。それはむかしの人。

白晝に雉子拾ひけり年のくれ

心のいそがしきにかく有べし。拾ひたるは賀也。

年も今日我慢に暮つ白是界(しろぜかい)

白是界といふ能有リ。金剛が祕曲にて老品也。今の世の我他(ヒト)は慢を專とす。光陰うつりてはとしも老くれぬ。我樣かの是界坊にひとしからんか。

幷 獨詠付句

前句 太平は花の敵も吹ぬ世ぞ

狛(コマ)に駿河にふところの種

山城のこまのわたりの瓜つくり、とよめり。駿河も瓜・茄はやき所也。瓜などのたね懷にしてあたゝむる事、太平の代にあはせり。春季の品如レ此。

又

前句 一文銭の歩く世中
浦風もみやこのかたへ蜑の息
きこえたるさまなり。

前句 枳殻(カラタチ)に荊(イバラ)に覆ふ奥の坂
しほ一合を嬉しとし玉
海遠き山國塩稀也。句は山寺などのけしき。

前句 制札立て毒うらぬよし
佛さへ見かへる世あり神慮
神罰にはやき事。

前句 鬢つけの油漲ル淀の水
網代にかゝる文解(トイ)て見る
このすがたなり。

前句 笹竹の窓に入風いらぬ風
つまんだ蚤(ノミ)に念佛きかする
比丘などの所作歟。

前句 市中の塵はふまじ即心
小刀を巻(マイ)て鱣(ウナギ)のひとつ鳴キ
きこえたる哀。

前句 雲行客のあとの塵塚
山科の置キ熟柿さへ夕烏

前句 長き夜は扨もねざめのひとつ酒
死なぬ命がもろこしを買ッ
けふさいへばもろこしまでの哥から。

前句 神鳴の卒爾に落てさはがしき
千貫目には常のともし火

享保二丁酉年霜月上旬

洛陽堀川松葉町
書肆 今井重左衛門
岡村三右衛門

後序

もろこしの某は詩賦をもて我子に教へ、九重の翁は誹句をもて人の子に教ゆ。みづから撰びとり集て、もとかし葉と號、かの衣笠うちのおほるまうちぎみのとの葉に、初心の二字を冠させたるならむ。その姿けだかく、心又ひくからず料るは、今をしていにしへに歸らしめむとなるべし。抑、月雪花紅葉は天のなせる質にして、元來六の根なし。もし耳あつて聞、口してそしらば、誹諧はむづかしく、賢愚相共に耻はづらん。人の嘗は嘗も返しつべし。何ぞ無情のものに對して事を論ぜむ。唯風雅にたかゝらんには、朝に學て暮に修せよ。一龍一豬はその灯を費やすにあらむ。予はしらず、老師に問へ。城南子。

丁酉 仲冬上浣　　逸民百丸跋

鬼貫句選（おにつらくせん）

道にたどりふかき翁ありけり。そのゆくやたかきより飛、ひくきより躍いづ。峻に立、ほそきをつたふ。ざれありき、おもむろにありく。夢のうき橋足さはらず、ふむにこゝろよしとなん。世ばなれければにや、おにつらといふ。むべ鬼なるかな。そのこゑ玉に金に、代にきこゆる句そこばくといへども、人のこゝろにたらねばや、猶もとむ。予ももとめて見きゝにうつしけるが、漸かばかりにこそ侍り。七車といふ家の集は、世にあらはれねばよしなしや。あはれそれをもつたえて、あまねく鬼つらのおにたる無凝自在を、見もし學びもせば、わが芭蕉翁にこの翁を東西に左右し、延寶より享保にいたるこの道の盛世をてらし見て、けふこの道にゆく人のこゝろの花のにほひに足リ、心の月の影とゞきて、はいかいの幸大ィならんかし。しか思ふものから、自笑が乞にまかせ、これに序してあとふる事になれり。

明和五年春二月　　不夜庵太祇

鬼貫句選　巻之一　不夜菴太祇考訂

春之部

大旦むかし吹にし松の風

ほんのりとほのや元日なりにけり

老松町

我宿の春は来にけり具足餅

中垣や梅にしらける去年の空

五器の香や春たつけふの餅機嫌

何おもふ八十八の親持て

雪よ〳〵きのふ忘れし年の花

試筆　人麿の尊像にむかひて

旋頭句

烏帽子の顔ほの〴〵と

何の花ぞもとしの花

六日八日中に七日のなづな哉

芽柳の遊ぶ鳥まだ寒けなり

風が吹梅のつぼみはしつかりと

初春詠

鶯が梅の小枝に糞をして

山里や井戸のはたなる梅の花

梅散てそれよりのちは天王寺

宿替に鼻毛も秡（扱）ぬ梅の花

鶯や梅にとまるはむかしから

うぐひすの鳴けば何やらなつかしう

軒の鶯　窓の鶯　薗の鶯

枝の鶯　谷の鶯

うぐひすは山ほとゝぎすばかりなり

旅行

あふみにもたつや湖水の春霞

春の水ところ〴〵に見ゆる哉

うち晴て障子も白し春日影

曙や麥の葉末の春の霜

しら魚や目まで白魚目は黒魚

日南にも尻のすはらぬ猫の妻

空道和尚、いかなるか是なんぢが

誹眼と、とはれしに即答

庭前に白く咲たる椿かな

水入て鉢にうけたる椿かな

夕霧が塚にて

この塚は柳なくてもあはれなり

懶はおぼろ鳥のねざめ哉

ゆかしさのあて〴〵しきや雉子の聲

草麥や雲雀があがるあれ下ガる

二月二日、京に住こころもさめて

北へ出れば東へ出れば花のなんの

誰が家の醬油むすぶ春の草

骸骨を乞て、郡山をたちいづる名

殘に

たよりなや笠ぬぐ後の春の雨

春の日や庭に雀の砂あびて

ひさり、舟にて伏見へくだる夜

おぼろ〳〵灯見るや淀の橋

月なくて晝は霞むや昆陽の池

玉水にて

山吹は咲かで蛙は水の底

佛前

きさらぎの日和もよしや十五日
何まよふひがんの入日人だかり
人の親の烏追けり雀の子
人に逈げ人に馴るゝや雀の子
遠里の麥や菜種や朝がすみ
雨だれや曉がたに歸る雁
狀見れば江戸も降けり春の雨

里家春日

猫の目のまだ晝過ぬ春日かな
あら靑の柳の糸や水の流
樹の中に只靑柳の尾長烏

住吉にて

みどり立きしの姫松めでたさよ

月尋が、つまにわかれし悼

春の夜の枕嗅やら日が暉した

二月すへ、惟然にさはれて、のち

餞別

いなふとの花の前なりや止られぬ
春草の姿持たる裾野かな
鳥はまだ口もほどけず初ざくら

伊丹俗洗

賤の女や俗あらひの水の汁
から井戸へ飛そこなひし蛙かな
一鍬や折敷にのせしすみれ草
春風や三保の松原淸見寺

四日曉

浪の底に我足形の有やらん
永き日を遊び暮たり大津馬
一の洲へ都の客と馬刀とりに
桃の木へ雀吐出す鬼瓦
軒うらに去年の蚊うごく桃の花
杖ついた人は立けり梨子の花

黃檗山にて

ありのみのありとは梨子の花香哉

三月十日、はせを翁懐舊、支考
萬句興行に
かけまはる夢は焼野の風の音
それは又それはさへづる鳥の聲
富士は雪は花一時のよしの山
心あての花でよし野で餘をば猶
恥しの老に氣のつく花見かは
何くれと浮世をぬすむ花の陰
煩惱あれば衆生あり
骸骨のうへを粧て花見かな
摺鉢の花に賑ふ菴かな
花鳥に何うばゝれて此うつゝ
戲卯懐舊
うたてやな櫻を見れば咲にけり
花の頃扇さいたり諸職人
兵部太輔光成のもとより、文の中
に櫻の花を入て、送られし返し
九重の状より花のこぼれけり
去年も咲ことしも咲や櫻の木

さくら咲頃鳥足二本馬四本
日よりよし牛は野に寐て山ざくら
谷水や石も哥よむ山ざくら
此句、長伯老人より誹諧哥傳受の時の吟なるよし、人
申はべる。
黒谷にて
盛なる花にも絶ぬ念佛かな
師弟のむすびせまほしくいはれし
人に
花のない木による人ぞたゞならね
大心禪師六十賀
順ふや音なき花も耳の奥
うつろふや陽の花に陰の花
又もまた花にちられてうつら／＼
定家卿の夢中に、抱さめたまひし
さなんきこへし、觀世音のたゝせ
たまふ御寺に行て
花そなら散はや夢も抱くらむ
花散て又しづかなり園城寺
多田院花見

武士も見ながら散す花の風
咲からに見るからに花のちるからに

散花

又ひとつ花につれゆく命かな
鶯よ花はちるとも飛まはれ
野田村に蜆あへけり藤の頃

孝行

目は横に鼻は竪なり春の花
どつちへぞ春も末じやに又ねる歟

京に住こさありて、古郷をはなれける春のすへ、友にむかふて申いでける。

春雨の降にもおもふおもはれふ

彌生晦の雨を

春雨のけふばかりとて降にけり

雜

淀川にすがた重たや水車

初瀨に旅寐して

小夜更て川音高きまくら哉
闇の夜も又おもしろや水の星
塩尻は不二のやうなるものならん

池田唐船淵

むかしの海、中比の淵、今は田夫が睡まくらをなして夢さなる。織女の觀（歟）樂の跡をおもふて

棹の哥は松の聲のみ鍬つゝみ
藏にゐて人には見えず白鼠
松風や四十過てもさはがしい

東山院御葬禮を拜み奉りて

御車は闇の月夜のなく音哉

鬼貫句選 卷之二

不夜菴太祇考訂

夏之部

春みてる夜、難波より船にのりて、明ぼの淀のわたりを過けるほど

淀舟や夏の今來る山かづら

春と夏と手さへ行かふ更衣
一日で花に久しき袷かな
しれるものゝ尼のねがひありて、西方寺に籠りけるを、望にまかせつかはしにとて、う月三日かの寺に行て
我はまだ浮世をぬがでころもがへ
戀のない身にも嬉しや衣がへ
花惜しむけも夏山の柴車
きかぬやうに人はいふなり時鳥
おなじ雲井のほとゝぎす
ほとゝぎす耳すり拂ふ峠かな
雲枕花の氣さむるほとゝぎす
津の國の玉川しれずほとゝぎす
傘のしるしに
此夏はいく度きかんほとゝぎす
鳥羽繩手を通りて
空に鳴や水田の底のほとゝぎす
江戸にて
あちらむく君も物いへ郭公
なまじいにいく夜むかしの時鳥
題呉猛
蚊をよけて親の餠や時鳥
夜の後灯白しほとゝぎす
奈良にて
神〱と春日茂りてつゞら山
非情にも毛深き枇杷の若葉哉
みよしのゝ川上に、業平の隱れたまひし所とてありけるに、人の發句せよと望みければ、彼男のむかし杜若の例にならひて、むばらの花といふ言葉を沓かふりになきて
むかしとへば卯塔までの葉末かな
卯月廿七日西吟へ行て
葉なりとも西吟櫻ふところに
おなじく歸るさに
けふの日をさぞ五月雨におもひ出ん

橋にておの〳〵發句せし時
雨ぞふる簾てたち花の起てもぞ
旅行の里
のり懸や橘にほふ塀の內
心ならでまはるもおかし茶引草
つく〴〵とおもふ。
我むかし踏つぶしたる蝸牛哉
我が身の細うなりたや牡丹畑
後に飽蚊にもなぐさむはし居哉
猶信がつまにおくれし悼
夜もさぞな明やすひとは僞りと
海音、快氣のよろこびに、發句乞
れて
遣はなつ心車に飛ほたる
卯月廿七日、道閑といふ醫師の
新宅にて、ほ句望れしな
此軒にあやめ葺らん來月は
端午
葦原や豊の粽の國津風

戀しらぬ女の粽不形なり
人の旅宿にて
壁一重雨をへだてつ花あやめ
螢見や松に蚊帳つる昆陽の池
藪垣や卒都婆のあいを飛ほたる
野のすへやかりき畑をいづる月
さつき雨たゞふるものと覺へけり
五月雨にさながら渡る二王かな
さみだれや鮓のおもしもなめくじり
西吟興行
佗ぬれど毛虫は落ぬ庵哉
竹のこや雪隱にまで嵯峨の坊
やれ壷におもだか細く咲にけり
鵜飼
鵜とゝもにこゝろは水をくゞり行
根は草の水に花置く池のうへ
大坂へ行て、東行興行に
草の花の水にまかせて根をひかへ

夕暮は鮎の腹見る川瀬かな
みや川町にあそびて
飛鮎の底に雲ゆく流かな
蜘の巣はあつきものなり夏木立
鶯の聲なかりせば目白哉　といへ
るを今ならば
鶯や音を入て只青い鳥
作斗新宅
夏菊に露をうつたる家居哉
探題蟬
鳴蟬のその木にもまだ居つかぬ歟
鳴ぜはし鳥とりたるせみの聲
ゆく水や竹に蟬なく相國寺
巳夫にゑぼし着せて
夏草の根も葉もどちへどふなりと
京より伊丹いたみへ行
水無月や風にふかれにふる里へ
さはさはと蓮うごかす池の鯉
小町の繪のかゝりたる家にて

すゞ風やあちらむきたるみだれ髮
夏の日のうかんで水の底にさへ
松雨興行
なでし子よ河原に足のやけるまで
田家
六月や臼をほそふぞつき臼を
知牛老母死を悼
水無月の汗を離るゝほとけ哉
雲の峯なんぼ嵐の崩しても
夕立のまたやいづくに下駄はかん
夕立や隣在所は風ふいて
夏草に身をほめかれて旅の空
夕涼
なんとけふの暑さはと石の塵を吹
旅行
夏の日を事とも瀨田の水の色
獅子谷
凉風や虛空にみちて松の聲
旅行

あの山もけふのあつさの行衛哉

糺ノ涼

日盛を花とみたらし明日も來ん

夏の星の顏なつかしも暮かゝる

水無月の頃、舍羅が剃髪しけるを

國々を秋になつたら見にまはれ

しらぬ人と謡問荅すゞみ哉

冬は又夏がましじやといひにけり

雜

しよろ〳〵と常は流るゝ大井川

須磨に此あづまからげやしほ衣

山崎にて

木神せよ油しめ木の音ばかり

鬼貫句選　卷之三

不夜菴太祇考訂

秋之部

初秋

なんで秋の來たとも見えず心から

そよりともせいで秋たつことかいの

ひら〳〵と木の葉うごきて秋ぞたつ

心略起て秋たつ風の音

此露を待て寐たぞや起たぞや

初秋雨

初秋のどれが露やら雨の露

あはれけもまたほめく夜の秋の風

朝も秋ゆふべも秋の暑さ哉

桐の葉は落ても下に廣がれり

下り舟にて

稻づまや淀の与三右が水車

人の親のくるとばかりや玉まつり

こゝろにて顏にむかふや玉まつり

こぼるゝにつけてわりなし萩の露

庭の萩

内藏に月もかたぶく萩の露

高井立志餞別

人むかふて笑ふ。わかれて思ふ。ゆくも百三十里、さゞまるも百卅里。

そちへふかばこちらへ吹ば秋の風

家は汐津ばしといふ橋のほとり也。前には軒の松風、流水にひたして、なをひやゝかに、後には野徑の虫、時しも野分に吹送りて、おのれ〳〵が聲かすかなり。今は闇なれば、やがて月のためにはさたのしく覺えて

闇がりの松の木さへも秋の風

むかふは堂嶋の新地、家建ならび、舟きおふ堀江の川あらしに、西海の浪をわすれ、入日を惜む歸帆、牛は屋上に見こして、姿しらぬ旅人のわかれをおもふだに、此夕はさらにもかなし。

須磨の秋の風のしみたる帆莚か

野徑に遊ぶ。

秋風の吹わたりけり人の顔

れものがたりの里を通りて

ふむ足や美濃に近江に草の露

宵はいつも秋にかつ氣をむしの聲

行水の捨どころなきむしのこゑ

野ばなれや風に吹くる虫のこゑ

獨聞虫

人呼にやるも夜更つむしの聲

右には武庫・淡路のつゞき遠く聳へて、左は伊駒・かづらきの峯はるかに高し。來れる人もなければ、物埋む雲もなくうち晴て、致景こと〳〵く的歷なり。

わせるなら霧のない間に誰も哉

有岡のむかしを、あはれにおぼへて

古城や茨くろなるきり〳〵す

おもしろさ急には見えぬ薄かな

露の玉いくつ持たる薄ぞや

茫〳〵と取みだしたるすゝきかな

吹からに薄の露のこぼるゝよ

此薄窓より吹や秋の風

ゆがんだよ雨の後の女良花

今はむかしの秋もなくて

伏見には町屋のうらに鳴鶉

伊丹あたご火

あたご火に稲づま光るとひやうし哉

芭蕉にもおもはせぶりのうこん哉

思ひ余り戀る名を打碪かな

朝寒のけふの日なたや鳥の聲

來山が老母の死を聞て送る句

おもひやる只の秋さへくらされぬ

老母の身まかりける夜

けふの秋にいつ逢とぞ親にまで

富士の形は、畫るにいさゝかかはるとなし。されども腰を帯たる雲の今見しにはやかはり、其けしきもまた〱おなじからずして、新なる富士を見ると、暫時にいくばくぞや。あし高山はおのれひとり立なば並びなからん。外山の國に名あるはあれど、古今景色のかわらぬこそあれ。

によつぽりと秋の空なる富士の山

夕ぐれにまた

馬はゆけど今朝の富士見る秋路哉

うら聲といふにもあらで鴈の聲

雁がねの跡に飛ゆくむら鳥

むかしから穴もあかずよ秋の空

來山が妻の追悼

荻の葉そよぐゆふべ、さよ更る砧、ねやにさし入月かげ、つれてわたる雁がね、人の妻の摺鉢の音。

うつゝなの夜とは秋とは今ぞ嘸

踏ては花をやぶり、ふまずしてはゆく道なし。

野の花や月夜うらめし闇ならよかろ

老母をいざなひて

風もなき秋のひがんの綿帽子

旅泊

衣うつ京へは遠き寐覺かな

犬つれて稲見に出れば露の玉

家せばくておほからぬ道具さへ置所なく、そこ〳〵に棚などつらせて、晝のころまでは陋し。やう〳〵ほこりはき捨て安座す。

吹風や稲の香にほふ具足櫃

待宵

あすみちて明日かける月のけふこそな

秋はもの丶月夜鳥はいつも鳴く

名月 十九句

月よけふよ去年の命に花ぞ咲

珍しと我影さへや窓の月

月をとて漸く雲のちぎれ〳〵

野も山も晝かとぞ首のだるくこそ

木も草も世界皆花月の花

連哥

見るほどはいはれぬ月の今宵哉

病後

しみ〴〵と立て見にけりけふの月

夜半の雨後

名月や雨戸を明てとんで出る

更行や花は紙にも押ものを

此秋は膝に子のない月見哉

愚痴〳〵と獨に更る月見かは

明なばの俤変ら窓の月

月は此今宵に明て何ひとつ

父の身まかりける忌中の名月

虫も鳴月も更たり忌の中

名月くもりければ

春ならば朧月とも詠めふに

良夜大雨

しよほ〳〵に降なら月を〳〵とも

十五夜雨ふりければ

何の木と見えて雨ふる今宵哉

どこ更る空のあてども雨の月

燈火やおのれがほなる雨の月

歌人は居ながら入唐す。

秋の月人の國まで光りけり
富士の山にちいさうもなき月し哉(よカ)
見ぬけれど月の爲には外(そと)の濱
中秋十七日女の身まかりけるを
ゆく水にうき世の月もきのふ哉
述懷
銀もてばとかくかしこし須广の月
月代やむかしの近きすまの浦
椴の木のすんと立たる月夜哉
遊女の繪に讃す。
どの方をおもふてゐるぞ閨の月
袖が浦といふ盃に
うつゝなや現なの月の袖に〳〵
後名月
名月や纔の闇を山の端に
後の月手まめなといふを
豆を喰て豆の花とも詠ばや
後名月
けふは梢の松風も、くれぬさきより東山の峯をまれきて、實非情さへさみゆ。猶頃さりて十五夜の雨も、今宵の空に晴て月明〳〵たり。
跡の月雨の降時けふの月
十五夜も雨なりける、十三夜もふりければ
又の月もあふのいでこそ甲斐はあれ
貞享四の秋長月十七日の夜、更行まゝに庭のけしき人はしらず。
おなじ夜、ねられぬほどに、こゝかしこなめぐりて
今の心是こそ秋の秋の月
いとゞ鳴猫の竈にねむるかな
破芭蕉やぶれぬ時もばせを哉
宗因墓
宗因は春死なれしが秋の塚
久かたや朝の夜るから空の菊
重陽
菊の香のひとつをのこす匂ひ哉

翁屋阿貫月次初會

よも盡じ草の翁を露拂

旅泊病

ながき夜を疝氣ひねりて旅ね哉

落穗拾ひ鶉の糞は拾にけり

古寺や栗をいけたる椽の下

しろくれ紅葉の外は奈良の町

文臺記

みむろ山の嵐は立田川の錦におち、別所山の紅葉は今江原氏鷄賀の家にながれよりて、世に其名を照す。

寸法は、

高サ　三寸壹步

竪　壹尺八步

横　壹尺九寸

裏には、

別所山滿願寺尊悟寺住之時興昌寄進之

さ來たい以てならべたり。蒔繪はむかしの秋底に匂ひて、夕に月をおもひ、朝に奥山の聲をしたふ。實月日さこしなへに流れてちらぬ影さへ眼に沈み、やたらこしかたをおもふに、いくばくの人の心の種さなりけんぞと、知らぬ言の葉の數さへすゞろに戀しくこそ侍れ。

こゝし寶永ひのさの亥の秋、菊の花むすぶ窓のもさに筆を置ぬ。

むかし色の底に見えつゝ花紅葉

寄謠無常

目をさませ後しらぬ世の紅葉狩

あゝ蕎麥ひとり茅屋の雨を臼にして

草の葉の岩にとりあふ老母草かな

木にも似ず扨もちいさき榎の實哉

去程にうちひらきたる刈田かな

賀

言の葉の落穗拾ふもたのみかな

九月盡

むかしやら今やらうつゝ秋のくれ

雜

來いといふ時にはこいでをふいおい

戀

君もさぞ空をどこらを此ゆふべ

契不逢戀

油さしあぶらさしつゝ寐ぬ夜哉

鬼貫句選 卷之四

不夜菴太祇考訂

冬之部

あたゝかに冬の日なたの寒き哉

夕陽や流石に寒し小六月

大坂へ着て

つめたいにつけてもゆかし京の山

福島住居のさし

冬もまた松の木持てむかひけり

つく〴〵とものゝはじまる火燵哉

さゝ栗の柴にからるゝ小春哉

なんと菊のかなぐられふぞ枯てだに

物すごやあらおもしろや歸り花

世の中をすてよ〳〵と捨させて

あさからひろふ坊主どもかな

古寺に皮むく棕櫚の寒け也

在鄕

種なすび軒に見えつる夕かな

麥蒔や妹が湯をまつ頰かぶり

葉は散てふくら雀が木の枝に

宇治にて

冬枯や平等院の庭の面

枯芦や難波入江のさゞら波

久しく交りける友の身まかりけるさきこへ侍りければ、いさゝさへ

旅のね覺は物うきを

木がらしの音も似ぬ夜のおもひ哉

ひう〳〵と風は空ゆく冬牡丹

茶の花や春によう似た朝日山

皆人の匂ひはいはじ枇杷の花

川越て赤き足ゆく枯柳

青空や鷹の羽せゝる峯の松

白拍子の尼になりて、久しくすみ

ける庵に立よりて

引かへて白い毛になるつはの花

荒るものと知ばたふとし神送

時雨ても雫みじかし天王寺

おとなしき時雨をきくや高野山

野もかれ落葉さへなき頃、關なくよりて不夜城に入ば、花ありて姿寒からず。哥はふしなふて匂ひあり、聲はこけるさいふたぐひならで玉あり。折ふしの雨、むかしをそぼちて更にわれをせむ。

糸に只聲のこほるゝしぐれかな

ねられぬやにが〳〵しくも鳴千鳥

千鳥鳴須磨の明石の舟にゆられ

汐汲や千鳥のこして歸る海士

家鴨かとおもふ人なし沖の鴨

筑後三毛領にて

遠干潟沖はしら浪鴨の聲

水鳥のおもたく見えて浮にけり

おもふに花の頃より其かたち凋み、時鳥の聲きく夜毎も、懶き閨さぞなにやありけん、散かゝる紅葉のころ故郷を都にわかれて、立かへる秋をしらぬ身のあはれさよ。はや時うつり一生爰に盡て、月も日も十に滿る夜あらしに、鐵丱（卯）去て來らず。是何者ぞ、我また是何者ぞ。空ゝ寂ゝ夢又夢。それが中に親しみにひかれて、きのふけふをばおもはざりしを、おもふもこれ又何事ぞや。

いつも見るものとは違ふ冬の月

宵月の雲にかれゆく寒さかな

旅泊

膝がしらつめたい木曾の寐覺哉

夜話

灯火の言葉を咲すさむさ哉

待宵の頭巾や耳をあけてゐる

紙子着て見ぬ唐土のほとゝぎす

餞別

鰻谷はかたちまで才覺あり。

漸のびて冬のゆく衞やよいつぶり

山家契

はづかしや枡にふすぼる煙草頬

初雪に友をまねきにつかはしける。

我宿の雪のはしり穗見にこされ

白妙のどこが空やら雪の空

雪踏哉薪に狸折そへて

十二月二日初雪

この雪が降ふ〳〵と師走まで

富士の雪我津の國の者なるか

寒苦

雪の降夜握ればあつき炭團哉

雪で富士歟富士にて雪かふじの雪

しれる人の中むつまじう、今は闕

守もなくゝたのしめる宿に行て

雪に笑ひ雨にもわらふむかし哉

おさなき子におくれし人のもとへ、

悼て申つかはしける。

ちらとのみ雪はうき世の花ゝな

飯後の雪を

飽くふて其後雪の降にけり

ふぐと程飽のやうなるものはなし

水よりも氷の月はうるみけり

井のもとの草葉におもき氷柱哉

何ゆへに長みじかある氷柱ぞや

朝日かげさすや氷柱の水車

寐て冷て空也きことて覺はせぬ

殊勝也牛の糞ふむ鉢たゝき

われが手で我顔なづる鉢扣

鉢扣古うもならず空也より

節季ゝや臼こかし來て間がぬける

世の花や餅の盛りの人の聲

歳暮

惜めども寐たら起たら春であろ

月花を見かへすや年の峠より

花雪やそれを盡してそれを待
鏡を磨ふ春まつ老の若ざかり
灯の花に春まつ庵かな
櫚や髪の扇に年ゆく日
惜まじな翌のつぼみとなる年を
君を月をまつ夜過こし春まつ夜
寐よぞねよ夢のゆく衛の年をまた
流れての底さへ匂ふ年の夜ぞ

雜

獨居の僧の庵に行て
燃る火に灰うちきせて念佛哉
人間に知惠ほどわるい物はなし

鬼貫句選 卷之五　不夜菴太祇考訂

禁足旅記

北窓の月は遠山の曉にそむき、南面の秋日は軒をめぐる事はやし。我ごゝろあらばめでたき閑居なるめれど、いやしければたのしみのおもひみじかく、靄寥たる秋の、中〳〵吾妻のかたにたびしたけれど、用なきに身を遠く遊ぶ事、暫老親のためにおもければ、こしかた見つくしたる所〳〵、居ながら再廻のまなこをおよぼし、日〳〵こゝろばかりを脫けてゆかば、我願ひもたり、不孝にもあらずとおもひ立ぬ。

廿日の夕ぐれ大坂に出て、伏見への船かりてのる。

我が身に秋風寒し親ふたり

ほのくらきころ難波の地をはなれて行。草葉の露は左右おなじくをけど、船ひく男らの岸づたひに、かた〳〵は虫のねたへて、是も物のあはれなるべし。江口の里はまだ宵闇の覺束なく、川風は今も旅人の枕に馴て、むかし

の秋をしたひ顔なるも、また哀に覺ゆ。

幽靈の出どころはありすゝき原

なを過るに、月は佐田の宮に出て、森のともし火影うすく、いと神〳〵し。夜は牧方・葛葉のさとにふくれど、川浪まくらの下をたゝきて、夢もむすばず、こゝろすみて、

ひや〳〵と月も白しや秋の風

曙ちかきころ淀のわたりをゆく。むら霧川づらに立のぼれど、水車のすがたとは見ゆるほどなり。

霧の中に何やら見ゆる水車

廿一日、ふしみにつく。朝ぼらけ打ながめ行に、町は所〳〵家の隣、畠になりてさびし。

伏見人唐黍がらをたばねけり

それより深草に行く。

少將屋敷

草露道なふして風はむかしのにほひもなく、今は野人の車のみ往來す。

牛御亭車に落す草の露

元政舊菴

この沙門日蓮宗なれど常の佛の數もならべず、たゞ釋迦のみたふとく見えたまふを

箔のない釋迦に深しや秋の色

里はなれて、出家ひとりつれだつ。ゆく〳〵のり(法)の事など殊勝に聞えて、あふさか(逢坂)にいたる。むかし行基の鯖つけたる馬にあひて、よみたまひける哥など、物がたりしければ、かの法師行基に一問ありとて發句す。

しほ鯖といづれか動く紅葉鮒

別れて關の明神にまいる。

琵琶の音は月の鼠のかぶりけり

案内する子をやとひて、三井寺より高觀音にのぼる。所〳〵の事念比に、夜は湖水の月など、舌さへまはらずいひしも、實(げに)馴ればおとなしき物をと愛らしくて、

大津の子お月様とはいはぬかな

松本を過てもろこ川に至る。人の家のうしろに柿の木ありて、

義仲塚一

柿葺や木曾が精進がうしにて

また膳所を行はなれて、秋の田の面の物あはれなる中に、

粂平塚

粂平が塚渺〳〵とかり田かな

この所より道を右にのぼりて、

石山のいしの形もや秋の月

もどりに芭蕉がいほりにたづねて、

我ゝに喰せ椎の木もあり夏木立

長はしをわたりて、

瀬田の秋よこ頬寒しかゞみやま

廿二日、草津を出て宿のわかれに發句す。おもふに付所しな〴〵ありて、句のすがたはかはるやうなれど、みなおなじうつはもの丶中をめぐりて、心新しきはなし。世の常の俗言をもつて作れば全誹諧にして、しかもその古きをのがるべしと、我しばらく爰に遊ぶ。此地にも安心せば、また例の病ひおこらん。只誹諧をのり物にして常をわたる人あらば、行ず止らずして誹諧もなく、やまひもなき大安樂界にいたらむ。

欒〳〵と姥が屋根ふくや今年藁

此發句にて伊丹風獨吟哥仙あり。

石邊・水口は、この獨吟にまぎれて發句もなく、けふは土山にかり寐す。

廿三日、朝日よりさきに出て、

吹ばふけ櫛を買たに秋の風

白川橋といふをわたりて、爰にもとおもへど、趣向もなくて、蟹が坂になる。それがためにとて、いさゝかの石塔あり。ほとりの松風は苔に聞ゆるばかりわびし。

つま白の石のあはれや秋の霜

近江のくにをわかれて、鈴鹿の峠につく。常はこの所より湖水を見れど、けふは霧ふかふしてあやなし。

狂哥

鬼貫が鈴鹿の山にきたればや霧にくもりて見えぬ湖

汗かいて坂をくだる。また田村堂にのぼりて、瓦の奉加つく。

六文が月をもらすな田村堂

道すがら見るに、野山の色は新玉の空よりうつりかはる

ならひ、げに世の中の事はそれのみならずと、おもひ〴〵て鈴鹿川を渡る。

一とせの鮎もさびけり鈴鹿川

瓢界來りぬ。いざとて行。彼もわれも骸は津のくにをきて、こゝろは今、關の宿のほとりに遊ぶ。野は草の茫〴〵として、かれかゝりたる中をみれば、(哥仙瓢界發句あり、誹諧畧之。)四日市といふ所にとゞまりて、今日石藥師にていひたる句書つく。

國富ややくしの前の綿初尾

廿四日、桑名にいづ。風はげしくて船こはさに宿とる。座敷は海を請たる所なり。礒よりちいさき釣ぶねの行衛おぼつかなく見やりて、蛤など燒せてこゝろのびけり。

風の間に鱸の膾させにけり

午のさがりに風なをりて舟だす。うち晴てそこ〴〵おもしろかりし物を、申のかしらより雨になりてういめ(憂)す。漸日のおはるころ熱田にあがりて、こよひのやどかる。

熱田にて鱸の膾吐にけり

廿五日、なるみ(鳴海)の宿をすぎて行さき、尾張・三河のさかひ橋あり。おはりのかた半は板をわたし、三河の地はつちばしなり。

發句合

尾張

板かけてさらに見するや草の露

此繼橋、おはりのかたよりも土をわたさば、かくまでながめあるまじ。板よりつちに行うつりて、草は橋にさへうらがれぬさ、秋のあはれを見せなん心尤深し。

三河

板わたる人に見するや草の露

此句、三河の人は尾張のかたに板渡せるを見て、橋を土になしたりさいへり。意味左右同じきか。されども草は三河の地にうらがれて、あはれは此くにの勝たるべし。

池鯉鮒をすぎてやはぎ(矢作)につく。藪生たる所、かの長者のあとなどいひて田の中に見ゆ。やとひたる馬士の、是に

よそへて望むほどに、耳ちかき世の一ふしをとりて、

　上瑠璃よかり田の番は夜る斗

わがこゝろの留主見まひすとて燈外見ゆ。幸にこの人とらへて、ゆく〳〵兩吟して赤坂に宿とる。亥のさがりまで語りて、また例の獨寐す。哥仙燈外發句有、諱略之。

廿六日、ほどなくて御油の宿にかゝる。猶行道の左右に大きなる松はへつゞき、梢ひとつになりて、日の影さへもらぬほどなり。

　たびの日はどこらにやある秋の空

よし田の町にて鶉きゝて、

　うづら鳴吉田通れば二階から

ひうち坂といふ所に休て、

　霧雨に屋ねよりおろす茶の木哉

ふた川を過行。爰にも三河・遠江の境に川橋あり。それを渡りて、

　我裾は三河の露とまじりけり

白須賀こえて、荒井につく。濱名の橋のあとなつかしくて、

　ことしにて濱名の橋は幾秋ぞ

　　また夜の心になりて

　あの月やむかし濱名の橋の月

舟より前坂(舞)にあがりて、こよひは濱松に明す。

二十七日、天龍を渡る。

御上洛の御時は此川舟橋になりぬと、船頭の物がたりす。げに宗荷が事を聞つたえて、なつかしくなりたり。

　我祖父も舟橋おがむ秋の水

池田の宿に遊也(ゆや)が石塔あり。老母のはかなくやならんとしたひし女も、かくあはれに見ゆるよと、世を觀じて、

　秋の夢老母も遊やも我もまた

袋井を出て行道の田のほとりに、鵙おどす人あり。されば伊丹の馬櫻が狂句に、

　田の中に棒の一本立たるは
　鵙をおどすか千の字か

かくおかしき事をおもひ出て、われもその類にあつまる。

　田の中に雪隠一ッ立たるは
　箕を伏たるか鹽釜か

この輿に掛川をこえて、けふのとまりは日坂に定ぬ。

廿八日、佐夜中山。

松杉のすげなふ立たる中に、朝日影ちからなくさし入て猶心ぼそし。

けふともに秋三日あり佐夜の山

菊川

承久三年の秋、中御門中納言家行と聞えし人、つみありて東へくだられけるに、此宿にとまりけるが、昔は南陽縣の菊、下流を汲てよはひをのぶ。今は東海道の菊川の西のきしに宿して命を失ふ、と、ある家の障子にかゝれたりけると聞をきたれば、あはれにてその家を尋ぬるに、火のためにやけて、かの言の葉も殘らぬと、長明が書たることなどおもひいでゝ、我も家の障子に、

家行は承久三年の秋述懷を書、我は元祿三年の秋其亡魂を弔ふ。

本來の障子はやけじ秋の風

大井川

雨遠、水なふしてこゆるにやすし。

痩ずねに漸寒し大井川

また素龍にとはれて、まりこ（鞠子）のやどの初夜までに、半哥仙素龍發句あり、誹諧略之。

廿九日、阿邊川を行とき、

東路の夜露こふたる紙子哉

道〳〵わがこゝろふたつにわかれて、半心はこの句冬也。惣じて露・月などの類、季のかぎりある物にむすびては、いづれもその季にひかるゝならひ、しかれば夜露こふ紙子全（まつたく）秋ならずといふ。また半心の曰、かなしひ哉、汝色を見ていまだそのいろに奪はるゝ事、尤物につれては四季の間をわたる露・月なれば、句躰うち聞えたる所秋なし。されば一とせの長月は、はやけふ明日のかぎりしられて、この宿を過るに、吾妻の秋の形見は夜露しみたる紙子にこそ殘れりと、深くも秋をしたひてなり。また此露冬にして聞所いさゝか意味なし。句は是こゝろより作れるすが

た、爰に於て汝心をとるや、すがたをとるや、といへば、實至極の秋なりし物をと、心またひとつになりて、荐中にかゝる。爰は竹にて物作る家あまたなり。

虫籠を買て裾野に向ひけり

江尻を過て、清見寺にのぼる。

庭上秋深ふして佛閣靜に高し。海原見やる所に望めば、こゝろのび、また心よはくなれり。

秋の日や浪に浮たる三穗の邊

興津の浦の海士の蚫とるなど、都にはなきをと見る。猶あら波のいそづたひに、道すなをならで、げに所の名もとおもふに、また古郷なつかしくて、

雜

故郷や猶こゝろぼそ親しらず

由井・かん原をこえて、富士川につく。色さへ余所の水にかはりて、船のさる事甚はやし。

不二川や目くるほしさに秋の空

よし原に臥て晦日の朝、

秋の日や富士の手變の朝朗

うき嶋が原をひさしく通りて、

浮しまや露に香うつす馬の腹

三しまの社を拜み奉るに、みな幾抱あらむとおもふ斗の松杉、間なく立こもりて、さびわたる神風に梢のしづく落るも遠し。眞砂はその白玉にうるほひ、御池は水の面青み立て、底おぼつかなくすごし。

雜

ちはやぶる苔のはへたる神館

のぼり〳〵て箱根のとうげにいたる。けふ三嶋の空にいたゞきたる雲ははるかなれど、こよひはまた其うへに枕す。

十月朔日、宿を出て行。俗にこの山にて死人にあふたる例おほしと、いひならはすほどに、

雜

水海や我影にあふ箱根山

磯はたにさいの川原あり。念佛する法師の家、所〳〵にきこえ、往來の人の小石あまた、つみかさねたるを見る

にも、子をしたふ數しられてものあはれなり。

お地藏のもすそに鳴や礒鵆

權現にまいりて、

神の留主留主とおもへば雪の留主

かしの木は皆人馬にものらず。そのほか岩根道いくまがりもまがりて、中〳〵鈴鹿の坂はこの汗にも似ず。漸小田原にくだる。

雜

氣辛勞や馬にのるもの小田原へ

實こゝろばかり行道なれば、落る事もなきにと後悔してすぐ。曾我の里をとへば、海道より十町ばかり左の山陰なりといふ。

さむ空にいとゞおもふや曾我の里

それより大磯にこえて、

とら御前今はつめたし石の肌

藤澤にとまりて、二日の朝遊行の御堂にまいる。看經の聲たふとく、我も無念の念佛す。

十月の二日も我もなかりけり

之道、けふは隙にしてきたりぬといひけるを、またとらへて、哥仙之連發句あり、評略之。

かな川を過て、爰から富士の人穴といふあなあり。口廣くあいて、おくの深さ闇くて見えず。

人穴に折ふし寒し風の音

品川より鉄炮洲の御堂を見やりて、

むさしのは堂より出る冬の月

江戸に入て、日本橋を渡る。

いつもながら雪は降けり富士の山

嵐雪に行て宿す。去年の秋は、狐界この庵に来て夜長く、ことしの春は、作白が日永ふして我事いふにみじかく、また歸りていふに長し。たがひにわらつて夜もすがら雨吟す。句は共俗にむかふ。哥仙其外發句あり、評略之。

蘆生が榮花は一睡五十年のゆめ、囃々唄が謳樂は旅心十三日のうつゝ。行も鬼貫、かへるも居士。とゞまるもまた、跡もみづから也。

元祿三年庚午十月日

鬼貫句選跋

五子の風韻をしらざるものには、ともに俳諧をかたるべからず。こゝに五子といふものは、其角・嵐雪・素堂・去來・鬼つら也。其角・嵐雪おの〳〵其集あり。素堂はもとより句少く、去來はおのづから句多きも、諸家の選にもるゝこと侍らず。ひとり鬼貫は大家にして、世に傳る句まれ也。不夜菴太祇としごろこの事を嘆きて、もしほ草こゝかしこにかき集めて、數百句を得たり。たとはゞ滄海に網して、魚をもとむるがごとし。なをもれたるものいくばく歟侍らん。さるを鬼つら句選と題して、はやく世の好士につたへむと、例の氣みじかなる板もとは八文字屋白笑也。

于時明和己丑春正月

三菓軒蕪村書

京寺町二條下
橘治板

七（なゝ）車（ぐるま）

乾・坤

鬼貫著

乳ぶさを握るわらべの、花にゑみ月にむかひて指ざすこそ、天性のまことにはあらめかし。いやしくも智惠といふもの出て、そのあしたをまち、其夕をたのしとするより、僞のはしとはなれるなるべし。予は寛文元年かのとのうし、梅さくらのにほひもきのふのまがき(籬)にこぼれ、やゝ卯の花の白髮見するみつがひとへのあした、有明の岡、ゐな野細江のほとり、糸海(イタミ)といふ所に胞衣をときぬ。こゝはいにしへより連誹のすき人おほく、おのづから耳に心にうつりて、八ッになりけるとし

　こひ／＼といへどほたるがとんでゆく

これを我わざこと哥のはじめとして、より／＼句をいふ事數あり。十三歳の頃、松江の翁をまねきて、流をくまんといふより、明暮此道に心をつくしぬ。そのころ、又世にゝほへる梅の翁をはじめ、名たゝる誹師や、雲の扉をたゝきて來れる時ゞ、座をならべずといふ事なし。寛文八つちのと(己)のさるのとしより、花月に心を馴るゝこと、凡六十年に及べり。猶此のち天數のかぎりしらるゝ夕までなるべし。これそもいかなる因縁ぞや。夫誹諧の道に入る事、初心をはなれて上手にいたり、上手をはなるゝ所名人ならむ。上手とは、句をおもしろく作るをいふ。名人とは、さのみおもしろき聞えもなうて、底ふかく匂ひあるをいへり。猶そのおくにいたりては、色もなく香もなきをこそ得たる所とはいふなるべし。抑十七歳のむかしより、人にかはりて梓にちりばめたる誹諧の書あり、獨吟の書あり、とし／＼いひすてたる發句あり。又序や、跋や、詞書や、つゞまやかにしるし置て子孫にながくのこさんとの心をのするものから、なゝぐるまと名附て、享保十二ひのと(丁)の未のとし、さくらをかざす窓のもとに筆をおきぬ。

　　　　　　　　　　　　おにつら　花押

なゝぐるま全部百三拾餘丁ありて翁の自撰なり。往年揚芳堂これを得て、荒木氏と梓行せんとしていまだ果さず。其本荒木氏に藏して、已に二紀に及べり。先年京人本集より抄して句選を刻すといへども、本集は翁の得意にてものせられぬれば抄せん事其ほいにあらざるべし。余が此集梓行の志をおこせし事は、我が祖父なるもの、只川と號して、翁も親弟なるよしをしるされ、其句など其比の集物にも散見し、又あつう翁を信ぜられし事は、亡父つれ〲かたりきこえしをもて也。ことし其氏に托し、句選に出せるを除き、文部をわかち、或は句選に詞書をもらし、贈答を略せるは重出し、校正ををさめて、荒木氏とはかり世に公にす。冀くば、京本とならべて舊觀に復すといふべし。是や家業をうけつぎ、宿願のたまもの、餘慶もて、おほぢが師恩をむくふにぞありける。

天明三年癸卯春

大阪興文堂書坊　高橋徳恒謹識

なゝぐるま　卷の一

春部

歳旦

春立や星の中から松の色

和州郡山に年をむかへて

いたゞくや大和正月三笠山

初日影まづ出たりないこまやま

大ぶくや淡路も見さい茶臼山

猪名野の古郷に春をむかへて

事はじめいくやるなのゝしらうつほ

さかづきや先打わらふはなのはる

門松やうしろにわらふ武庫の山

火の數やとし德棚のにぎやかさ

立年の鏡をかほの花にせう

春立や誰も人よりさきへ起き

鳥のこゑ雨あら玉の年立かへる

かをるより雪氣はげしき今朝の空

四十五になりける元日

花といはさ老の五のかふりほろ

雲包む初日を空のおしむやは

雲横に去年のことしの花や空

嘉儀ゆよやをら初日の梅ごゝろ

いねあげよ明て秋の田かゝる世に

此年元日の雪を

降からに鶴を着そむるあしたかな

高砂や去年を捨つゝ初むかし

日よ月よ千代の轍の初ぐるま

祇園の社にまゐりて

あはれげもいにて春たつ朝ちどり

江戸にて大としの夜、いさゝかの
神の道を受つたへて

あなたのし十種はじめに日の鏡

江戸より歸京のとし

朝紅や水うつくしき初がすみ

。ひもといた年の冠のもゝちどり

初風や去年の目さますいねの花

龜の背に海老ほのあかし初日山

梅の湯のすはや明たつ額休ゝ

梅の湯のすき人ならば花ゐ見ん
このみのたねたわりてすつるな

梅や紅人のけはひの初かゞみ

。已上歳旦已下本集の列のまゝにうつせり。但し句選に
出たるはのぞけり。

殘る火燵まだ山里はこたつかな

如月十日鐵卯懷舊誹諧百韵興行

うたてやなさくらを見れば咲にけり

月の朧は物たらぬ色　才麿

盃の跡も春なるゆふべにて　來山

此連中は鬼貫・才麿・來山・補天虛・西鶴・方海・執筆七吟
なり。

上巳

節句明てはまぐり煮出す障子哉

子をたづぬる母の網もて花すくふ

を、かきたる繪に讃せよといふ。

即吟

鳶からす蛙が母も水かゞみ

はじめて和州郡山のきさらぎを、

むかへて

君が地の花のつぼみを見初けり

はいかい難波頓禮の一番に

喰ておいきやくていかしませ五加木食

百韻獨吟

聞ば誰ッみねのあらしや雉子の聲

明石の人まろ塚の松の木もて造り

し文臺・硯箱を、青人が家に求得

たるよろこびに誹諧興行

松の木と名はしりながら呼子鳥

月あかき夜、圓通法師におひて

こぶりこや木摩の里行餅ぶくろ

正月十五日

小雨降るとへども例の火影かな

居所をうつりかへて

うちはれて障子も白し初日影

井戸堀〔掘〕てまづうつろふや松のはな

ひさしく音信ざりける人のもとに、

何となく物語しけるに、そこらま

ばらなりければ

うぐひすに內藏賣てなんといふ

兵部の大輔光成のもとより、文の

內にさくらの花を入ておくられし

にかへし、

九重の狀より花のこぼれけり

こなたよりも花をつゝみて、その

紙のはしに

君見よやゐなかの花の黑き事

うぐひすの靑き音を鳴こゑかな

雜百韻、獨居の僧の庵に行て

燃る火に灰うちきせて念佛かな

垣のほとりに人のうつぶく

しらぬ木の鳥の糞よりはえ出て

下畧

○右句選には冬部に入たり。今本集にしたがつて

こゝに出せり。但し本集一本には冬に入れり。

伏みれば江戸も降けり春の雨

苗代や隱居へ行て手をつかへ

正月十五日亡子が一回忌に

去年より物一時もわすられぬ

二月廿五日惟然にさはれて、廿八日京へかへらんといふ時

止られぬ又きさしませ花ちらば

やよひ廿五日長谷川立賢夢想に、

以二一枝一得二一根一者ハ大一欲也

と文字までおぼえたりと、物がたりありけるなごこほぎて

芽を出すや心をたねに無根草

春の野に蹲踞(ツクバフ)て居るわかなつむ(摘みカ)

角菱の餅にありとも桃の花

宇治に來て屛風に似たる茶つみ哉

はるさめの物の相手をになれうよ

彌生朔日老坊と大久保道古をいざなひて、高臺寺へ行けるに、道古發句所望

松杉にゝほひがある歟比(ころ)もころ

上巳

こゝろふとや都の雛に夫婦づれ

玉腕子は惠林大德のたまはりける名となん。それのみならず、あまたの禪師詩をおくり、文をよせられて譽ある筆工なり。元祿みづのとのひつじ卯の花月のはじめ、其隣に居をうつして、やがて心おかぬ程になりければ、發句してくれよかしといひしほどに

月も雪も何か殘ふ花も筆に

牡丹　江戸止水所望

あくたにも散氣はなれてまあ廿日

うつふし染といふ書をして、西吟がはいかいの板行やみなんとて、發句望しほどに

それをだにそなたも春をなしますや

正月廿日高森其愼の許へまねかれて、同氏正因一座しけるに發句所望

老せじと來初たに日も遲かれな

きさらぎ五日大佛のほとりに、高森正因が許にまねかれけるに、をりふし雨ふりあがりて、空のけしきいまだ晴ざりけるに、庭のかたへなる梅の花白く匂ひ、床につらゆきの像をかけて、發句所望ありける卽興

雨雲の梅を星とも晝ながら

おなじく廿五日北野の御神へ奉納すとて、柳水所望

梅をしる心もおのれ鼻もおのれ

彌生九日醍醐の御門主へめされける時、御所望

樹の奥に瀧も音して花や咲

河內國の人八虹があつめし土師(はし)の梅の卷頭、來山取次

そのそこにおのれを梅に鳥とは

三の里といふ題にて

梅の花目にもたまらで網引か

雛といふ盃に

行春の夜を寐ぬ顏の雛から

座神京へまゐりて古鄕へかへる日

去年からの此花の比又いつか

狩野峯信が勇士に梅をかきたる繪に

うぐひすよいつをむかしの雪のころ

生蓮寺にまねかれて

十かへりのころやたえせん松の花

彌生四日はじめて逢ける人に

膝合す雛の脊中をはじめかな

けふの日を柳にやりて川端に

我寸亭にまねかれし時、春日の題にて所望

しら髮うき今朝の昔の春日かな

賴朝の文もたる人に逢て、言葉の便よく見まほしき事を乞ければ、心さけたりけるよろこびに

幾春の文のよはひや鶴が岡

我ひとり(にカ)むれつゝ花の旅がらす

としひとつ又もかさねつ梅の花

伊丹より年々東武に通ひける人、ことし花のつぼめる比、我をたづねて京に來りけるほどに、久しく過しむかしをもかたりなんと、引とゞめて

武士の數こそなけれ花ぐるま

新宅のよろこびに誹諧興行

先え方みの幸(サチ)よろしいなり山

來山が男子まうけたるよろこびを、しらせこしけるほどに、いひつかはし侍る。

初聲を鶴ともきかめ松のはな

春のうち吾妻のかたにくだりなんやといふを聞て、溪鶯子がもとより、むまのはなむけすとて、唐扇に發句をそへておくりけるほどに、心ざし淺からねば脇句をつくりて、よろこびを述ぬ。

いちよい日末廣御覧春の富士　溪鶯

人の詞の花をはな笠　鬼貫

三日桃賀のもとにて、よろこべる事のありけるものがたりなど聞て

芽柳の奥たのもしき風情かな

すつと立木草の中に松の花

伊勢の涼兎、きさらぎの末京にのぼりて、是より北國行脚おもひ立侍るといひし程に餞別

蛙鳴この夜忘るな旅まくら

三月九日桃賀宅にて即興

折よしと花もほゝゑむ軒端かな

人麿影供に

白雲は幾代の花の哥ぶくろ

戀獨吟

生て聞さむればひとり春の雨

初春　石町旅宿にて上野のかねを聞て

遠う來る鐘のあゆみや春霞

春草のすがた持たるすそ野かな

六十賀に、龜は万年の友といふ題にて

幾春を龜の六つよりとしの友

はじめて孫をまうけたるよろこびにまれかれし時、所望に

鶴龜のあゆみ程よき春日かな

目うつりや花にむせたるよしの山

曉梅

鳫啼て夜のつるべにむめのはな

大舜の繪に

賃とらで象も田をかへす動かな

大坂愛宕の水奉納の繪馬所望に

うかるゝや扇隣に水の花

箔をもて雲をかきたる、ふるき源氏の繪に

花の香やむかしの袖に源氏雲

京の九問がもとより、よひのとし欅木の杖をおくりしに

かしの木や花の初枝百ちどり

小町の繪に

あちらむけうしろもゆかし花の色

半面を見せたる小町の繪に

かたがほや見ぬ奥山のはなの色

七十賀に

つく杖のしちくにあゆめもゝ千鳥

一切經堂の繪馬に

梅が香や衆生にみちて軒の聲

八十賀に

さくら咲遠山見こせ眉の八

松に鷹をかきたる繪に

玉爪の金をつかむ春日かな

月次の誹諧せまほしさて、初會の發句所望に

墨に雲人の言葉の初ざくら

妻の一周忌いとなむ人の發句乞けるほどに

くりことの便りに蒔やさくら麻

古哥に、さくら麻の苧生のしたくさしげれ

たゞあかでわかれし妻の名なれば。櫻麻は夏なり。蒔は春也。さくらの時分に種まくなといへり。其外麻の花・麻手・麻の萓(う)等みな夏也。連に如レ此。

伊丹鵜阜の吟

ひよ鳥や世のさへづりも石の花

こかしの梅かきたる繪に

笠に杖面影さがすんめの花

西行「とめこかし梅さかりなる我宿を　うときも人はをりにこそよれ

佐川流筠兩吟せまほしきさて、發句所望に

鳥の巣に去年の色出す花の聲

富士のすそ野に櫻の花さ、田子のうらに舟かきたる繪に、讃望れて

雲やにほふ海もさくらも富士の枝

ある人の老母八十賀に、發句所望せられて

口紅の初花ゆかし玉椿

野に馬ひとつかきたる繪に

鞍の上に人もおぼえずさくら時

閑立和尚、牲川充眞(マヽ)に馬の繪をかゝせて、予に讃を望まれし程に書て遣しける。

婆婆の荷と何月花もはなれ馬

英一蝶が書たるほていの繪に

口ほどけにこ〱草の花ぶくろ

正月十一日佐川流筠兩吟所望の時

即興

七夕に契りおきてし初ざくら

同十六日或人の老母九十賀に

世の花や百の峠も九十から

同廿日の松芳室宅へ行て

雨水くむ筆の林に鳳の雛

あさみに雉かきたる繪に、讃望まれて

ひとつ着て出ぬも悔しき春日かな

下野國那須の住人大金隨有、みつからのかたちをうつし、文して予

が讃を望めるに

面影はしらぬ翁の花香哉

高砂・住の江のめでたきためしを、うつし蒔たるさかづきに

のめやうたへ神の連理の若緑

落日の魚に袖なし花衣

うた三味線をわざにせし女に

春雨の底をさがすや聲の糸

神祇の春の發句所望に

花垣や雲も和光の八重ざくら

只川は我門を叩く事久し。

何もかもしらぬ顏せよ呼子鳥

立圖のかきけるふたりの翁を、いとけなき童のうつくしくうつしたるに、予がこゝろばせを書と聞えしほどに

此人のうつはもの、方圓自在に輝なん。猶百とせの後をことぶき侍りて

月花や龜鶴の白髮もみかゞみ

山鳥やさくらをしほる夜の雨

備後國府中の住人龜川氏鬼冬、牡丹花の作れるかたちをうつしたる文臺に

かいほこれ今をむかしのふかみ草

右文臺寸法、竪壹尺九寸、橫壹尺壹寸、足ノ高サ三寸壹分、金物打、ケヤキヌグヒ板、裏黑ヌリ○此句本集夏部にも出たり。ふかみ草初夏なるべけれど、今こゝに出して下を略せり。

花桶と名をよびたる竹に、發句書附よと望まれて

花桶や千代の名立の初冠

正月七日雲雅と北野不動の茶店に遊びけるに、はや入相のおとづれ、まうづる人もすくなくなりけるに、發句せよといひければ、とりあへず

またむ月入相のかねに人ぞ散

山櫻のさかりなる枝に、猿の二三疋烏帽子着て幣持たるに、瀧のいさぎよくおちて、其ほとりに離れ

馬をふたつ三ッ書たる繪に、讃の
　そまれて
しらいとやいなおほせ鳥よぶこ鳥
咲花やとしの下手なる遲ざくら
　附誹諧平外鉢　四季並敲
岸陰やけふは汐干の淡路山
　京にのぼりて
水無月や伏見の川の水の音
宇治川や朝霧立てふし見山
「枯芦や難波入江のさゞら波

七車　巻の二

夏部

鷄が塒もあやめふきにけり
かんこ鳥のこゑに賑見る山路かな
　さくら塚の西吟へ、おさづれて歸
　るさに
夕ぐれは鮎の腹見る川瀨かな
春はなく(鳴)夏の蛙は吠にけり
　梵天瓜を
白くても白き味なし眞桑瓜
神まつり大和子供や立田哥
瓢(簞)簞の花とおぼえつ麥ほこり
　芝柏東武に行を
田草取に日和聞顔見るやうな
　天滿祭を拜みて
菅原やみこし太鼓の夜の音

夢想

京の町で龍がのぼるやほとゝぎす

瀧の糸はなんの香もなし夏衣

彌生六日蘭舟亭にて

松や竹みどりの中に木瓜つゝじ

坂上待閣堂にて小倉色紙を乞て見たるに、發句を又乞かやされて即時

秋もはや小倉色紙の隣まで

その夜風呂に入し時、又所望せしを

風呂ふけや蚋にさゝれし所をば

仲夏の頃、京に住ける日野屋何がしといへる兩替屋に行ける日、發句望まれて即時

さみだれに金はしめらぬ手わざ哉

須磨にやすらひて

夕立や卒都婆のよめる鳥の糞

嵐にも崩れぬものや雲の峯

巳夫にえぼし着せて

夏草のひとり花やれ水鏡

山下正榮誹名あらたまりたう思へるを、我に文字定よといひ侍りける程に、其勢になれといへば、發句してくれよと乞ひける時即時

水に其勢でこそ夏の花

誹諧の道をしへよと、小桂がいひし時

青梅に顔をしかめぬ味をしれ

五月十四日金毛が家に日を待例有て、言水・轍士・之白・百丸各うちかたらひて行けるに、こよひのもてなしにとて、狩野元信が書たる人麻呂の像を床にかけて、誹諧興行有ける。予に發句せよと乞けるほどに即時

明やすの此ほの〴〵や烏帽子顔

五月廿八日雨ふらざりければ

年ふれば虎もなみだや忘れ草

水無月廿五日讃州の人におくる餞
別
とぶほたる國へいんだら雲の上
孝玄にはじめて逢て
夏衣きたら〳〵もかね〴〵ぞ
九十二にて身まかりけるにおくる。
九十一も二もなしそれも夏衣
妻におくれしを悼ておくる。
よもさぞな明やすいとは僞と
美濃國加納に行ける時
お多賀への道もおいそ（老曾）の夏木立
はん（班）女の住けるあさゝて、人のな
しへけるに
秋も來ぬ其人の閨の草まくら
青野が原を通りて
盗人の塚もむさるゝ夏の草
加納にしばらくありける時、野ゝ
山内匠にまねかれしに
たのもしや何も加納の青田時
中村氏端山が許にて、しばらくや
どりけるに、心ざしのあさからね
ば歸るさの名殘に
まつとならばいなば又こん秋もやがて
六月の時鳥といふ題にて、發句所
望節時
笋は穗に出る雲のはつねかな
金毛亭にて橘といふ題を出して、
發句所望の時
雨ぞ降る寐て橘の起てもぞ
廿八日の雨を
とらが袖そこに有やら降泪
一心院常念佛
あら涼し鉦の音死ぬ一心院
靈山にて
雲水や庭行水に落かゝる
大坂に住ける鍔太といひしもの、
妻を失ひてのち、京にのぼりて、
我に發句してくれよかし。石塔に
彫附て手向たう侍ると、願しをあ
はれに覺えて

たちばなは其日〳〵をむかし哉

五月五日はじめて、大野の城下に入て

夏草に馴染初たる大野かな

巳夫が近き隣に住て、久しく音信ざりける事を句に聞えこし彌生の晦日はきのふになり、けふ手に落ければ返し

夏が來た隣へだつも霞だけ

岸野次郎三郎は三筋の糸にほこりて、普く世に其名をしられぬ。夏もまたきのふけふなりける日、初てかれが一曲に耳をよせて

卯の花の糸に先よる初音哉

長風興行

若竹にふしなき中のむすびかな

光彦が有馬の湯より出たるに贈る。

五月雨を跡に置つゝ有馬菅

溪水が新宅にて誹諧興行

花や咲筆に机に雲見草

祇園の御輿洗に

鳳凰のいくたびぬるゝ名殘かな

しれる女の尼の願ありとて、北野の西方寺に籠りけるを、望にまかせやるとて、卯の花月三日かの寺にゆきて

我はまだ浮世をぬがで更衣

忍證上人の所望にて獅子谷眺望

麥の穗も赤らむものを法の聲

しれる人のもとへ、今宮祭りに行て

けふとに枇杷も鈴ふるいさめ哉

五月十三日蟻道身まかりけると聞て、十九日におくる。

竹の穗はむかしの馬の夢路哉

眞葛が原にて座神興行

あら涼し身はのら猫の床めづら

花をしむけも夏山の柴車

五月十日月尋興行

下に居ぬ人のこゝろや雲見草

不二

夜を殘す寐ざめや夏の雪凪

夫木　夜を殘すねざめに聞ぞあはれなる
夏野の鹿もかくやなくらむ　西行

ほたるの卷を書たる繪に讃

物いはぬほたるや袖のたはれ草

橘の島といふ有ける。香ばしき國の人、羨島はじめて我宿に飛來て、花橘といふ誹諧の書をおもひ立ける程に、橘の發句してくれよと乞ける程に、けふより幾久しくちなみ結ばんとの悦びを述ぬ。

橘よ今をむかしのこゝろ種

笠をいたゞき杖を携へて、富士見んと立出たる雲鼓法師がすがた、風になびくと詠じけん昔におもひよせて、殊勝に侍りければ、一句をおくりぬ。

風になびくけぶりも夏の雪見哉

卯月の末、安藤須挂殿に行て

葉ざくらに心ゆかしや鞍あぶみ

題黄香　二句

床まくら父に骨折あふぎかな

目に耳にあふがぬ風のかをり哉

今宮まつりに、桃賀亭へまれかれて即時

いさましや人の顏照る神祭

願事有ける人のもとへ、廿六夜待にまねかれて所望に

待かひや夜の埒もはや明やすき

北野にまゐりて

むすび葉に心ためたる宮居かな

人の子が身まかりけるを悼て贈る。

あぢきなやひろげぬ文に飛ほたる

輕人がつくしに旅立けるむまのはなむけ

海山やみやこの筆に雲見草

同素山におくる。

青梅のつくしにいさむ旅出かな

端午

露に雲蓮つむ野の朝かゞみ

雲水やいしな礫の端五つ

しなのゝ國諏訪の湖をよめる古哥に
「うなゐごが氷の上を打ならす石な礫のころ〳〵の里」

望海庵老和尚所望

またもこんこずゑの海を夏の花

卯月の末三人を書たる繪に讃所望

ほとゝぎす馬追船頭おちの人

禰宜の傘さして、片手に燈を提て
行ける繪に　雑

雨雲の影神〳〵し傘の下

呑流といひし人、同江のほとりに
住て、花匂ひ月さやかなる時〳〵
おとづるゝ事も近かりけるを、こ
とし水無月の初、居所遠くうつし
行ける新宅のとぶきにおくる。

花と實の中垣涼し梨子の窓

一禮一周忌

足跡のなきを首途に夏の霜

小蝶草に水鶏をかきたる繪に

香盤の烟もあつき庵かな

杉の村立にほとゝぎす書たる繪に

鳴ちらせ杉のあらしに聲の花

馬貞といひし人、つくしへ出立け
るに餞別

ふところに花こそにほへ夏の雲

老ては子に從ふ。

むぎわらは麥掃庭のはゝきかな

是は予が句のよし、先年京にて流布ありし
と或人物語有ける。されど控書になき故と
ゞめ置也。

子におくれ給へる人に、夜の鶴の
ねざめおもひやりて一句をおくる。

くちなしにはなうちかみて窓の花

西行の夏野の鹿の鳴音を、今東行
子に離れたる寐覺におもひよりて

夜をのこす袖にまくらに夏の露

末社の神をかきたる繪に

しら鳥のこゑに尾のある田植かな

凌霄や杖に老嘴む嫁が門

凌霄や蟬の團扇に日の相撲
田家行水
てゝら脱帶跡白し日 南水
結髪や鏡はなれて朝すゞみ
夕立やむしろまとひの都麥
麥つきやむしろまとひの俄雨

此句いづれに可定哉、先書付置。西行哥に、
「賤の女がかきつれ麥をほしかねて
夕まどひする小野の里人

なゝぐるま　卷の三

秋　部

大和めぐりして
から井戸は西瓜に逢す月のみか
秋もはや宇田の炭がま煙けり
須磨の月は行に十三里、名月を待に廿日あまりといふを聞す、あらしやうこはの法師や。
出ていなば影法師もな須磨の月
休斗宅にて
うづら鳴田も見えたりな鼠丸堂
靈棚や蚊は血ぶくれて飛あるく
光枝氏備後國福山へ、出陣の御供せられしを祝して
しこ草の鬼もしかるゝ陣屋哉
劔術執行する人に

蟷螂の鎌を立るも力味とや

閑舟亭にて別傳和尚相見の時所望

佛にも是には馴るゝ糸瓜かな

多賀谷氏初の九月江府を出て、伊勢へ代參せし物語をことぶきて

きゝに出て又もや菊の舞の袖

利陽童子に別れし年、八月十五夜に

「此秋は膝に子のない月見かな

筆とらぬ人もあらふ歟けふの月

をみなへし猿にもなるゝ山路かな

月次の發句乞れて

寄そめて菊をいくへも重ふぞ

重陽

心から栗に味ある節句かな

七夕

田の水の湯と成て星の逢夜哉

九月十三夜、明星待て病後のとぶきをいへる。

後の月入て顏よし星の空

今津に住ける野田某の翁が許に行て、万葉集の物語など聞て日なくれてかへるさ、發句して立といひしほどに、彼集の詞をとりて

二里いぬる門に立たつ茅子(ヘギ)の月

宮の嗅あきたつ森のかげろふや

惟然が伊丹の我宿に來りていふ句とりあへず

秋晴たあら鬼つらのゆふべやな

いぜんおじやつた時はまだ夏

佛の兄の禪扉をたゝかふと思ふとし、あまたたびなり。荊蕀出がたに、やう／＼ことしの秋にこそ其室には入りたれ。

澁柿の霜にあふこそうれしけれ

園水

身は園栗の味もしや／＼りも

紫野といふ題を得て

風玉に月の輪きほふむらさき野

九月盡 住吉の神送りに
たれもみな打あふのくや四社の前
奥の海といふ盃に
花に月身をばいづくにおりやしらぬ
いんじ中の秋、老母にになれける
玉祭りに
去年に似たけふならばこそ鯖くはめ
猿猴の繪に
御所柿のさもあか〳〵と木の空に
也雲軒宗旦懐舊
常に思ひ常にむかふ、めぐりて十
三のとしになれば
さもこそも香さへ菊さへいつもさへ
島臺に
むかふぞや相生のやうに此秋も春に
たが身にもひとつふたつは秋の空
蟬子古郷に歸る餞別に
そちとこちの中に季を持わかれ哉
愛宕火やむれつゝ暮を花ざかり

昆陽池
物いはぬ魚の片目や水の月
誹諧獨吟の千句を思ひ出て、長月
のはじめ玉津島に願をかけ侍りて
影たのむ三日の月より滿るまで
七月の郭公といふ題にて
卯の花や踊崩れてほとゝぎす
出雲國風水、東武に行なんとて、
京にのぼりけるにあひて
八雲立京に秋たつ富士に立
八月十五夜
身ひとつを最中こえなば素秋哉
重陽
久かたや朝の夜るから空の菊
獨吟戀百韵 千句の内
星も嘸空をどこらに此ゆふべ
そゞろながらになみだ吹風
夢見せた枕ひとつに氣をなれて
下略

越前國大野城主に仕へて、八月廿一日はじめて彼地に到る。

どふ寐ても憐な秋の寐覺哉

大野より京へ歸る時、敦賀といふ所見まほしくて、九月五日彼地に宿し、夜更るまであるじとかたりて

弓張のつるがにはなすやどりかな

路通移徙興行

友とする夜も文車の荻の聲

むかしやら今やらうつゝ秋のくれ

九月廿二日出雲の國の人、風水が死去せしよしを聞て

秋とつれて神に出るかず身はいづこ

芋もやゝみの入るほどぞ三日の月

八月十日淺水、月次の誹諧興行に

あぶれ蚊のほめかぬ壁を便りかな

心を文車の文にいせて、やさしき數に入ける女のもとにて

秋風や窓にまくらに須磨の卷

鷄賀宅にて

よひやみに火袋深き木の間かな

九月朔日人の妻もとめたるに

菊にきく垣なき中のむすびかな

文月七日の曇りを

露とりに起て日をするくもりかな

八月十五夜

月見心人の脫(モヌケ)も木にこよひ

九月十三日の月を

身は闇にうづもれし後を此光

立秋

秋立や花の初音のわすれ草

同よろこびを述

秋や今朝たつを眞袖の三ッ柏

七夕

地にあらば薄や星のみだれ髮

中元

鼠尾草のよそも御名よぶゆふべかな

おなじく

魂〳〵とて姿なけれど爪なすび

九月十二日黒門へ、神事にまねかれて

神の日と來てさへまねく尾花哉

十五夜 右句こゝに並べ書つく。

去年のあすの心にくもる月見かな

めづらしと我影さへや窓の月

明なばの面影こゝら窓の月

愚痴〳〵とひとりに更る月見かな

影法師にこゝろを分る月見かな

(原註)ヤカ
からようや月のその空水の月

只の夜の夢のまくらや月の晝

昔家娟哥に

ながめずば夢の枕に過ぬべし月のきかする時鳥かな

人の妻の身まかりけるときゝておくる。

こぼるゝにつけてわりなし萩の露

鶏賀東武發句餞別

雜

駒引の心にかなふ旅出かな

金毛日待に菊を立添て、發句せよと望し時

幾露と朝待菊の笑顔山

千及がいつくしみ深かりける千白といひし門弟子、長月の末身まかりけるを悼て送る。

燈火をさぞながき夜の力草

中元二句

わすれめや世にありのみの魂むかへ

靈に玉消ぬほとけに萩の露

九月八日江戸に下りける時、はつかあまりやさせむかしの秋をかされて、こさし又裾野にむかふ。

その秋のおぼえはなかば富士の空

行秋やむかしをからで富士ひとり

箱根山にて古郷を思ひ

ふるさとをまねくか尾花二子山

江戸より京にかへりて

秋立や富士をうしろに旅歸り

鯉水といふ人、京に在て我許にたづねよりて誹諧の物語などしけるに、やがて伊豫國に歸りなんといへるほどに書て送りける。

秋かぜを我物顔や旅ぶくろ

題老萊子

世には來て親にそむくを馬鹿踊

長月の末齋藤某が母の身まかりしを悔て

まねくとは有が上こそ薄散る

初秋

初秋や耳かきけづる朝ぼらけ

百丸、因幡堂のほとりに閑居をうつす。むかふに人家もなく、常盤木日を覆てみどり也。

秋は先此宿ゆふべ朝ぼらけ

久しく逢ざる人の、京にのぼりけるが、ちかき内に江戸へかへりなんと聞えし名殘りに

行馬の跡に花なし菊の空

よろこべる事ありとて、何がしの許へはじめてまねかれける時、發句こはれて

千代まぜと菊もまひたるすがた哉

五十賀

又五つ走ても光れ星の秋

三宅吟東十三回忌に

袖に玉七ッのむつの鐘に露

七夕

七草や露のさかりを星の花

十六夜

一輪やかけ（鷄）のたれ尾の山かづら

鳴門集といふ書を文十撰し、卷頭兩吟の哥仙あり。

鹿の音や渦にまひこむ浪颪

佐川氏へ行ける時、兩吟所望、秋季にて吉野の句をとありしに卽時

よし野氣のはなれて白し秋の雲

葉鶏頭に蟷螂をかきたる繪に

柴の戸や入日をぬすむ秋の風

十三夜

春はよし野秋の花とも奥の月

玉井氏松堂、身のさちありて旅立けるに、馬のはなむけに一句をつかうまつる。行先も人これをかざすといふ國にて侍る。

笠にせよ千といふ字を旅の秋

秋月明白ニ候。誹哥の御心持無御座候や、池の汀に參會仕度候。

右は松島雲居和尚の手跡にて持けるを、閑立和尚にまゐらせける時、發句して書付よとありけるに

月影や雲居は消ず島の跡

小望月の雨を

待花やこよひ雨月の馬さぐり

なゝぐるま　卷之四

冬部

かけはしに猿の折たる氷柱かな

臘月廿日あまり和州こほり山に行とて

鎌とぐや伊駒あたりのとしの暮

多賀谷氏江府に歸る餞別

餅哥や君が歳暮の馬下りに

初雪

雪に〳〵にけんによもなふて戸を明た

惠心僧都の作とや、烏丸光廣卿の讃有ける小野の小町の木像を、今大路兵部大輔光成のもとより乞求て、元祿十一戊寅臘月十七日誹諧興行

花の色はからびはてたる冬木立

おなじ月廿三日芝栢亭にて、さる
事ありて

冬梅の身にあまりたる句ひかな
をとゝしのから鮭買ふてやすいもの
まつ宵の頭巾や耳を明て居る
ひう〳〵と風は空行冬牡丹

旅泊

つめたさに火を吹おこす大火入
あるゝ物と知ればたふとし神送り

臘月十二日伊駒英宅へはじめて行
所望

春ちかうわらひ初たかわすられよ歟
なんと菊のかなぐられうぞ枯てだに

餅つく日家の子手をやぶりて、う臼
すへ血をおとしけるに

かち杵に血を見る餅のつよさ哉

歳暮

としぞけふ朝日や後にくるゝらん

十一月十日鶏貫初て興行

羽二重の御用、新に仰蒙けるを祝
して

羽二重に降やら松に竹に霜

十二月二日鶏貫、東武へ下りける
餞別

春待に花の咲身やひがしむき

おなじ月十二日不及宅にまねかれ
し時所望

何ふるとさだめぬ冬ぞたのもしき

年のくれ　以下十三句

行としのそらの隙さへいそがしき
節季ゆや年の岸なるわすれ草
年をまとふいのちや菴の花かつら
明日ありと闇にふすらんとしの山
としの夜もあかしがたやら須磨心
年の淀春さへひとよ伏見まで
としの瀬や都の世話も角田川
人まろの雲へもちかし年の奥
年の塵神の手業に千代や簸

花もみぢひとつによせつとし車
年木めせ奥のおく山馬の聲
行としや市に(原註)轅きしらふ炭翁
山を出て何を聟に飾賣

元祿十五年霜月十五日貞徳翁五十
年忌に　廻文

なきを霜死なば名はなし若翁

壬白に承り候へば益氣湯参候よし、
此比本草綱目に身を入候。人は日
用が大事にて候まゝ、又肉食も可レ
被レ成哉と書付候らん。

霜月十三日

春ならばたんとこしめせ鮒鱠

無名庵にては(カ)人の口もいかゞに候
へは(カ)外へ御出候而御求あるべく候
と覺助も申傳申候以上。

惟然坊　おにつら

麥蒔や妹が湯を待頬かぶり

鶏賀亭夢想開の誹諧みちて發句所
望の時、錢を吹願ある家なれば祝
して

駒引の跡猶はやし梅の陰

翠柏興行

花を雪に見たる法師や雪の花

十二月十二日の夜、各遊興の地に
行ける時所望

重ね着に寒さもしらぬ姿かな
冬のにほひをたきとめるむめ　才麿
物音の裏門もはやしづまりて

同じく十九日、鬼次にただききさ
いふ誹諧の書をやりし時、發句し
て奥に書付くれよかしと望しほど
に

うぐひすや五文字ほどく年の内

十月十三日、伊豫國美点、京に登
りて興行

夕陽のさすがに寒し小六月

鳴海の人千鳥の題にてほ句所望

汲汐や千鳥のこして歸る海士

鷄賓宅にて

ともしびの言葉を咲す寒さかな

備前岡山、山知といふ人に、はいかいのちなみむすびし時

世の格に居らで冬咲ふかみ草

身にわづらひある人の養生すとて京に登りけるが、やならこゝろよくて國元の春をむかへ、又春夏の比來りなんと出立ける、馬のはなむけに

來るとしの身もたのもしや枇杷の花

一高興行

うつくしく交る中や冬椿

何がしが許へ行けるに、太神宮の御祓を備へ、御酒などよろこばしく見えける程に、折ふし筒に入たる花のいろ／＼とり添て、ことぶきの數にまうけぬ。

天照や梅に椿に冬日和

某が母身まかりけるを、いたみていひやる句

うかりつゝ日比の桶の水かゞみ

江戸に在ける時、安藤何がしどのゝ館にて

雪霜に程こそ見ゆれ心花

旅泊

寐覺うき身を旅猿の冬木かな

よし原にて

寒からぬ姿夜なき城の花車

江原和風の新宅に招かれ侍りて、布袋の繪にことぶきを添て、逃迯り侍る。

春待や幸ある家の花ぶくろ

旅宿の寐覺に古郷を思ひて

夜あらしや時雨の底の旅まくら

題大黑天

叶へばぞ陽につぼめる霜の花

鷄賓宅にて廿六夜待を

（ふカ）
うちうるふともしびや冬の心花

素山宅にて挨拶

はや陽のめぐみて冬の笑ひかな

題王褒

名の消ぬその魂や厚ごほり

題閔子騫

三つがひとつこゝろ香し霜の花

年内立春　二句

去年に似てどこやら霞む年の内

年を産む松も地の角洞の庭

葉屋何がしにまねかれて

あらたのし冬たつ窓の釜の音

十月廿四日大森道勇に廿年を經て逢けるに、色〳〵物語ありけるうち、「夢中の郭公といふ題にて
一聲は猶耳まくらに殘るかと
夢めさめあへぬ山ほとゝぎす
といふよみ哥を、かたりけるほどに

冬ながら人のはつねやほとゝぎす

都を去て大坂に居をうつしける砌

つめたいにつけても思ふ京の山

前車といふ釜に發句望ければ

口切やこゝろくるまに前車

肥前國基部荒穗宮奉納卷軸

神松や稲もあら穗の冬日和

うれしきもの、春の曙と夏のゆふぐれ。たのしきもの、秋立朝と、一とせの暮行空と。

おもかげやとしの鏡もわすれ草

かたち富士に似たる石あり。愛する人の發句せよといひて聞えしほどに、ひくかりしものを作りておくりぬ。

いつ涌ていつ降雪の玉がしは

水仙にちごりを書たる繪に

夜を殘す風猶さむしひとつ窓

塩屋何がし宅にて、諸士寄會の時挨拶に

春に似て心うるはし冬日和

さしの暮

老も花と流るゝとしのますかゞみ

此句前に出すべきを一本に見えざる故、校合の後とゝにのす。

備陽の何がし年月難波の地に有て、風雅のまじはりをなしけるに、こさしかしこき御事ありて古郷に赴なんさて、一句のかかりを萄畑に殘されし程に、予も亦わざとこさ哥を作りて、馬のはなむけするのみ。

窓ひらけ幸ありのみのかへり花

山家初雪

初雪や柴に咲せて山ざくら

稲荷奉納

降からに天女の化粧松の琴

須磨にて

徘醴や浦風寒ししほ衣

さゝほろゝ浪こゝもとを打過て
すまでのむこそにごり酒なれ　平　敦盛

宗月庵に尋しなりから、此道の達人に逢見しに

月に出て德拾ふたり一しぐれ　民鷹

置事淺し霜の初花　鬼貫

鬼貫一名佛兄、姓は平泉、假名は與三兵衛、津の國伊丹の人、其先はみちのくなる、和泉三郎忠衡より出たり。表して槿花翁といひ、又囉々哩、あるは犬居士・馬樂堂など稱せり。中比洛の堀川に寓し、後は浪華に住す。壯年の比、やまと郡山本多侯につかへられしかど、久しからで、母の病るにあふて、祿を辭し、歸去來を吟ず。七十三のとし髮おろして、法諱を卽翁と號す。元文三年戊午秋葉月二日、島の內うなぎ谷わたりの家に病沒せりとぞ。今世誹諧を事とする人、鬼貫をしらぬあり、しりぬるも亦深く授りぬるは稀也。これまたく當時此翁はもと伊丹の一豪家にして、點者てふ稱を立ず、はたかの支考・野坡などがごと、自ら衒ありける類にあらざりし故にや。其小傳を閱するに、鄉を出て後は、浪速に暫は洛にも居を寓せ、導引をもて年月を送るのよすがとす。其術たるや、もと明人某國の亂をさけて瓊浦に投ぜしを、道古なるもの、親み隨ひ、賾を探りて、其技をうけ授りぬ。翁は卽古が高弟にして、藍より出るの妙あり、天性眞率不羈にして、よろづ物に拘ず、學あり、才秀て、識尤高し。曾て弱かりし時、重頼に學び、宗因を友とし、すでに三十年に及ては、卓然として一家をなし、同鄉の百丸・青人等を携へ、終に伊丹風なるものを興す。其調天に倚地を拔、彌見れば彌難し。生涯の佳什、人のしりぬるかぎりは更にも云ず、すべて集中に、あるは解しがたく、あるは無味なる、あるは嶮なる類などは、初心しばらく手つけずて有なん。束ねていへば、たゞ其氣象の高く逸れたるに、目とゞめぬべくこそ。此道發明の旨は、獨語にみえたり。芭蕉には十六七年もやおくれたりけめど、八ッのころより指を染られしと見ゆれば、稽古の功はけつく先たちてや有けん、よのつねの話にも、さいつころ筆執しめける桃青をのこ、其質さかしとしも覺ざりしが、いつしか諸處にいちじるく振回ありくよなどうちほゝゑみて蔑視せられしよしなれば、まいて其餘の作者は論ずる事をまたず。八十に今ふたつ滿たで、やまふに臥れし時、諸門人枕のもとにさしつどひて何を乞けるにいな吾常々興にふれ、事に感じてほくをもせしかど、今はた簀を易るに臨て、煩はしう何を

かいひ出べきと答られしを、一人おしてさりともおほす事なからましや、あはれおせあれかしとしひければ、微笑してさらば吾生付て蛇嫌なる事は、そこたちも知てん、なくなりて野邊送りすべかめる時、かの柩おほふなる旗の頭に、青き蛇の、赤き舌出したる、いとこゝちあしからめ、これを(原註)不用ふようにとりはかりたびてよといひつゝ終られぬとぞ。此コト其節側ニアリシ五ヽ馬ナル人八十チカクニテ存生ノ話　さるを今、大坂の書肆高橋生、むかし其祖の翁の徒弟なりし因をもて、向に梓行せる選に洩たる句ゝ文章ともに彫て、七車のほいをあらはす。此生もとより雅道にたづさはらねども、相識蘆屋して、余が跋を請ふ。屋も亦誹歌を嗜むにはあらず、たゞ翁の句を喜ぶが故に、此事を託するならし。よつてこれが爲にあら〳〵聞る所をしるして、索をふさぎ、かつは千載知己の意を濟すといふ。蘆屋卅ヨレル醫士某、正サシク翁ノ孫引傳授ノ人ニテ、常ニ翁ノ昔ヲ語ル。コノ故ニ、尙洩ヌルコトヲタヅネマシトスルニ、折節イタハルコトアリテ、此事ク、タヾコノ旨ヲ誌シテ余ニ授ゼリ。

天明三年秋八月上浣

洛　三宅嘯山題　印　印

七車　巻之五

序跋類

高すなご集序

誹諧の大道は言習ふにも得ず、句のかたち作りならふにも得ず、只我平生の氣心高天原に遊んで雪月花の誠なるに戯れ、神妙をしらば、目にみえぬ夢の浮橋、足さはらずして踏に心よき地平〳〵たらん。その花に鳴うぐひす、其水に住かはづ、いづれの哥袋も、すべて天地の袋なり。それが中に、羅門(囘)外月尋は、難波の流に、高すなごの囀をなして、一集の名とす。いふこゝろは、盡ぬ道に算へたるの砂子か、あゆみくるしきとよめるのすなごか、さてはかたよらぬすなごなるよな。そのかたよらぬこそ大道なれといつて、元祿五年季夏の日、堀川の馬樂堂書ぬ。

佛の兄序

元祿よつのとし、鬼貫の名を馬樂堂にかはり、ことしま

た佛兄(サトエ)になりて、誹諧の自序していふ。そも〳〵此書の名となせし心は、古哥によめる佛の兄にはあらず、是なんのあにぞや。しれる人は弟にあらず。夫道ひろき誹諧、みちせばき誹諧、千筋あり一筋あり、束ねて大道あり、内あり外あり、内外なし。あらむづかしの言葉やな、わすれて年をへし物を

元祿十一戊寅歳仲冬日

實花集序

いんじ誹諧を古しとすれど、十德をはづさず、今を新しといへど、羽織だにもかさねじとす。道はます〳〵はびこれりといへども、道はいよ〳〵枯に似たり。こゝに八雲たつ國の人丸山子、とし彌生の中比、九重の東山に席をまうけて、百韻興行の日、そのかたちたゞしく、禮を上にかさね、像を下に着す。かの御抄に、公任經信の兩卿もしらざるとか聞えしを、此人は知にやあらん。實花集と題號して、予に序せよといふ。恐れしけれど筆をとるはや

元祿十六癸未の年花老下弦

何の姿序

細くからび、ふとくたくましく、うつりゆく時〳〵、おの〳〵はいかいに戯れ、それが心を感じ、これが言葉をむつまじとして、ならべたる數にはなりぬ。されど月の隈なきにたらず、花のにほやかなるにとゞかず。たけ高からず心淺ければ、その姿なんかのすがたには似ぬものならし。これはそも何のすがたぞといふより、此書の名にまうけて、たから永き七かさねのとし、春むつみ月のする、連る中の求に應じて　鬼貫書ぬ。

老の寐覺序 百丸所望

誹諧は天のうずめの命の岩戸の戯より、中比古今集の、もろこしの吉野、うぐひすのひとくのたぐひながく世に傳り、守武宗鑑共したゝりを汲しより、貞德あり、立圃あり、重頼あり、百丸や、その松江の雫をなめて、花鳥に心をうつし、月雪に笠をたづさへ、此道に耽る事久し。今はた其いひすてたる句をひろひて、六〻に番ひ、みづから評を付て、予にはし書せよといへども一島の落字なければ、過策をもて補ふ言葉もなし。おもふに丸は

たゞ老の寐覺のよく富る者なるべし。しかのみならず、心また其折毎のむかしにかへりて更に黑髮を撫なん事、是誹中の仙ならんやといふ。

享保元丙申のとし櫻月中旬

誹諧童子敎序

順水丈人撰誹諧童子敎請予序因賦一章

安然童子敎　順水童子敎

其說良有以　善哉童子敎

わらべ達皮は味ないぞ眞桑瓜

大語物狂序　并發句跋

予丙寅季夏始赴東武、辭友人鸞動于其鄕、送且謂曰吾之所欲見者、惟富士山耳、雖數聞諸往來之客、言大而已、景象靡詳、請子記來及於我乎、月歸于難波、遂至其塚上、愴然而嘆曰、難矣生也、將與誰語之、但雖其人無言猶在耳我豈欺於死哉、滌翰狄露效於繫劍云。

羅〻哩居士鬼貫

「富士の形は、讃るにいさゝかかはる事なし。されども腰に帶たる雲の、今見しにはやかはり、そのけしきもまた〱おなじからずして、新なる不二をみる事、其數暫時にいくばくぞや。あし高山はおのれ獨り立ならば、ならびなからん。外山の國に名あるはあれど、古今景色のかはらぬこそあれ。

「によつぽりと秋の空なる不盡の山

夕ぐれにまた

「馬はゆけど今朝の不二みる秋路哉

峯は八葉にひらきて、不生不滅の雪を頂き、吹ぬ嵐の松の聲、裾野になかぬむしの音、鸞動〱、是今たしかに聞ケ、我レ石を撫て生れぬ先の父ぞこひしき。

此手向草は、よとせむかしの秋にしほれぬ。それが中に、鸞が末期に詠メし松は、天地に久し。我レその木のもとに獨句を次で、ことし又不消の露をむかふ。

百韻

根は常磐しばし紅葉ぬ松のつた　鬼貫

きのふもけふも露は白けれ

あの鴈の來るやよひはかへるらん

下略

和哥の道は我朝の法也。法は常也。その常をしらば誹諧をしるべし。誹諧の夢覺なばまた常をしらん。なれど、二我いまだ此道の達人を見ず。世上皆風躰にかゝはり、或は(原本一字缺)□句を工みにし、言葉をかざりて、前句のなじみをもわきまへず。或は懐紙座所、又は正花をあらそひ、我を立る輩是おのれに徳なき故也。徳あれば人夫を悪敷におかず。若我を以て徳を押時は、其我にゆづりて、作る所の句の中に、卷頭あるの意味をしらず。只誹諧の味を喰ひ、今日のたすかる事をえずして得る所、皆病ひのみなり。曰ク人と我と常いふ所の言葉、十七十四にきれば、ことごとく誹諧也。其世界をしらば、全體前句のなじみあるべし。發句も亦目前の常を作らば意味深うして、しかも匂ひあらん。その大道にいたらずして、かたちを似せば、一句になどか色香を持ん。善悪を知て、姿風躰のよき所にとゞまるも、是病ひなれば、只可不可のふたつをもわするべし。わするゝといふも亦おなじ病ひ也。

ひとり立我誹諧を観ずれば
上手でもなし下手にてもなし

元祿三庚午五月日

萩の百よせの序

高津の月は、芦角が萩にかたぶき、大寺のかねは曉の露につたふて感情日閑也。闇の夜の覺束なさは、よきあたりに燈籠置て、其風情あり。夜の露の日に打かはきたる、うるほへる花にはなくてあはれ深し。又雨にうたれ風に吹れて、おのれどち亂合たるは、するどにはあらず。明暮此風情に富る事、秋はたゞ蘆角が家に有べし。見及び聞傳へて、誰それの送れる句、とり揃て、萩の百よせといふ名にして、書をなせる日、序を乞に默止がたくて書ぬ。

萩を分てもゝをぞかたくわするゝな

遠千鳥序

時は逢がたくて失ひやすし。こゝに來山といひし人、誹道に其名高く、世もて其風をしたはずといふ事なし。予若かりし比よりしたしく相かたらひ侍りける。昔螢雪の窓をたゝいて、鶯にはあらねど、小鍋やほしさと手づから惠み來りし、其名を小西と呼ていまぞかり。鍋の命は

つきなかりしを、去年の時雨月の初、定なき數に入ぬ。其比句に悼てつかうまつりし、我袖のきはづきもかはかざるに、はや一めぐりのけふにむかふ。

むかしおもふしぐれ降夜の鍋の音

生前の風流は、木の葉駒にくはしくのすれば、更にもいはじ。彼翁天性酒を愛すといへども、終に親疎青白の眼をわかたず。しば／＼沈醉の中にも、誹諧を諷ふ事、おそらくは一斗百篇の詩を耻ずといふべし。世の人十萬堂と稱美せり。其美をしたひ、其德をあふぐ、食客門人、筆をして盡しがたし。それが中に烏路齋文十、ひとり節を守り、志の高き事、彼陣后山も麓なるべし。よて遠千鳥を編して、いさゝか師恩を酬んとす。これが序を乞にいなみがたく、享保かのとの酉、初冬の日、權花翁おにつら筆をとるものならし。

伊丹發句合跋

伊丹の發句合といふ物を、月尋が懷より出して、予に跋を乞。見ればかの里の好士等の句に對して、獨四(七カ)つゝの句を番ひたるなり。其姿は面のごとくにして、各一樣ならず。天性の得たるをもて、おのづからの風情となるに似たるなるべし。才麿が評は、幕をもて花を粧ひ、舟をうかべて月の見所を求がごとし。難波津や梅の翁のにほひたえず、柿園の翁のしづくかはかずして、質靑からず、澁からぬもの、これ此月尋ならんかし。　正德甲午年

郭公の卷の跋

支考ほとゝぎすの盃に醉て、西に行ば、座神うのはなの匂ひをしむ。是を束ねて、序は素堂がすみにすゝめの墨ぐろに書ぬ。

くわい／＼と夏の蛙の鳴すもと

寶永二乙酉の夏日濟の永昌陽(坊)　鬼貫書

荒小田跋　舍羅撰

あら小田といふ書を作りて、言葉の種をまけば、花あり實あり。(原本缺損)□□是はいかいの鳥追。

うね／＼と船に筋違ふ鴨の聲　佛兄

古園誹格跋

泉字盤只ことし仲夏の比、富士を右にし、頭を誹諧に傾、足を訪尋の車にして、なす所此古園誹格。是を抱き

て、初冬又富士を左にして去。

元祿十五壬午初冬　犬居士　鬼貫

贈辭記 讃類

南都松井和泉へおくる詞

畢は聖賢の教をとこしなへに傳へ、あるは千里の外に人の心を通はし、あるは四季をり／＼の詞の花の中立ともなれりける。何がし松井氏、その功を貴み、その德を感じ、今製家のおろそかに成ける事を歎きて、遠く橋の京の昔の匂ひをおこし、紀貫之の梅のかをりをしたひて、普く詩哥連誹の句を乞もとめものしける。それが中に予は伊勢の御の梅の詠哥の句をとりていふのみ。

花と見てをられぬ水に石の雲

閑立和尚におくる詞

難波津や、天みつ北のかたほとり、砂原といふ所に、西方便と聞えし隱遁の行者あり。柴の扉をとぢて、甘露王につかへ、庭わづかなるに、こと草を養ひ置て、をり／＼ごとの花をさゝげ、明暮御名をこがるゝ聲の、いとたふとかりければ、垣のそともをゆきかふ人、袖に露おかずといふ事なし。すべて此世に生るゝ輩、死る例をしり顔なるも、みなしらぬにやあらん。必死る例ある事をひじりにとふてしれ。

まけよ蒔ヶ佛の種も彼岸から

壽松居をことぶく詞

九重や杜鵑の名だゝるは、初音まつ空よりも高く、かへる浪なきといひし磯邊の木陰によりては、かへらん事ををしみ、立わかれいなばの山には、今かへりこんとの契りを殘し、都のつとにいざと思しあねはのまがたは、人ならぬ事をうらみ、曾根高砂のめでたきためしも、住の江の岸におもひよせ、そのとぶきをまた何がしが庭にうつしこしらへて、千代ふべき事をまねくもならじ(し)。

青陽の空に鶴さ(きカ)く花の床

大ロ理右衞門、去年霜降月のはじめ、白生の鷹ふた羽を二夜つゞけて夢に見しとなん。ことしの秋よろしき　公役の仰蒙りて、家の格式人に越たりけるをことぶきておくることは

大ロ氏何がし、よゝ難波津に富て、仲尼のほめし所にし

たがへば、求ずして万幸おのづからきそひぬ。いんしは、白かねや霜降月のはじめ、玉爪金眸を夢見し事ひと夜ならずとかや。ことし寐覺月の中比、所の循吏かしき仰ごありて、又あらたにさきくをかさね揚る事鷹の如し。おほけなけれど、師倚父になぞらへて、陰徳のいさほしならずや。ことぶきいはんとて、寶永つちのえ子、猶千代よばふ菊月の末、筆を取てかいつけて見す。

夢の色のこがね粧ふ日の出かな

一桃子におくる詞

東武一桃と聞えし人は、はるかなる唐土舟の流よる長崎の府生也けらし。一とせなには津の梅のにほひをしたひ、一帆の風に身をまかせて、あまみつや老松の名をもたる所に住とゞまりて、富る人、落葉かく人、あまねく長生の救ひをしたまひぬれば、不老を願人すら門前に市をなさずといふ事なし。予もしばらく軒をならべる友となるより、筆をして物いはせよかしと、戯にたはぶれ侍りて、に一句をたはぶるゝものなり。

朝風や菊のうなづく菊の露

岡田休意におくる詞

うぐひすの聲めづらしき朝より、ゆふべ〳〵かねの音さへ重り、犬吠るあたりを桃盛なる里なるらんといそがれ、とかくして春をしき空も、卯の花月夜に心移りて、さくらの花の俤をわすれ、菖蒲ふく軒端も、きのふになりて、風のおとづるゝ窓によるこそわりなけれ。秋たつ朝は、星をいたゞきて枕にそむき、やさしき數にも入なんやと、露とるかた手に、硯なんどを洗ひ、それも又跡にながして、くだ物よろこぶ人の心こそ澁から(ぬカ)ぬ。三五夜の空もひと日〳〵指のかずさへをりつくし、共夜になりては、又最中過なん明日の心をおもひおかれ、菊の花日ざすあしたは、きぬの綿さへ身になじみて、火桶かゝゆる老の寐覺は、窓に雲行そらをうちながめて、年くるゝこそたのしけれ。

珠數くりて春を待こそ仕事なれ

文臺記 (原註)句選に出たれば略す。

六玉川讃

百丸は、一軸の玉川を弄んで、眼をそ(すカ)ゝぎ心を洗て、是

をたのしみとして、六國の景色身をはなたず。其ちからやつよからん、懐や廣からん。予もひとゝせかの川をわたりて、たのしき事を得たれば、それを投出しぬ。

是こゝへ蛙の飛んだ足の甲

次の川は、在所分明ならず。書圖は丸子が扉におなじ。

玉川を雪かと見れば四月哉

はるかに百餘里はへだゝれど、川は卯の花の隣にながれて、調布はとこしなへに臼を帶たり。

川風や夏の日落る臼の音

非情は時を得て花をむすび、月は常住の水にやどる。

むらさきも白もおなじ萩の枝に
いづれを分て月やどるらむ

汐風枯芦に吹わたりて、友ずれの音、かろ〱とみゝにさはり、目にさへ寒ういろどりたれば、心既に其國の境界にならふ。

いざゝらば酴醾(ドブロク)のふで千鳥きこ

わすれては汲やしつらんとありしを、皆人毒水などいへどさはあらぬとか聞し。

谷水や風にたゞよふ月の糞　　佛兄書

元祿十三庚辰臘月日

犬居士（原註）句ニ重る所省略せり。故ニ全篇をこゝにうつす。

八月卅日、大坂の市を立て、山居をはなれ、里家の閑なるを好んで、福島に心を動し、みづから犬居士と呼て、誹道をほゆ。尾もなし又頭もなし。家は汐津橋といふはしのほとり也。前には軒の松風流水に浸して猶ひやゝかに、後には野徑のむし時しも野分に吹おくりて、おのれ〱が聲かすかなり。今は闇なれどやがて月の爲にはとたのしくおぼえて、

「闇がりの松の木さへも秋の月

明れば長月朔日、家せばくて多からぬ道具さへ置所なく、そこ〱に棚などつらせて、ひるの比まではいそがはし。やう〱ほこり持捨て安坐す。

吹風や稻の香匂ふ具足櫃

右には武庫・淡路のつゞき遠く聳へ、左は伊駒・かづらきの峯はるかに高し。來れる人もなければ、物埋む雲もなく、うちはれて致景こと〲くあざやかなり。

わせるなら霧のないまに誰もがな

むかふ堂島の新地、家立ならび、船きほふ堀江の川尻(凪カ)に、西海の浪をわすれ、入日ををしむ。歸帆半は屋上に見こし、姿しらぬ旅人のわかれをおもふだに、此夕はさらにもかなし。

　須磨の秋の風のしみたる帆莚歟

三日瓢海のおとづれに六句の吟。

　出て聞はおぬしがいひし秋の風　由平
　　月も持ッたりこちの松の木　鬼貫
　　　跡句略之。

五日十万堂にとはれて雨吟してつれ／＼を送る。

　秋風や男世帯に鳴千鳥　來山
　　月のあかりに船たでる濱　鬼貫
　　　右替作有、跡句畧之。

七日盤水みゆ、つれ立出てほとりの野徑に遊ぶ。

　秋の風吹わたりけり人の顔
　　　盤水脇句畧之。

　　向重陽

けふは家ゝに鍬を休て、牛馬の息までも靜なり。めのをのこの姿は木綿なれど、綿いれたるころもの時しり顔に、藍までは染ねどやさし。

　機しねを網にしたりや栗袋

　　後名月

けふは梢の松風もくれぬさきより、東山の峯をまねきて、賈非情さへとみゆ。猶頃さりて十五夜の雨も、今宵の空に晴て月明ゝたり。

　跡の月雨の降時けふの月

十五日家見にとて雨友を得たり。夜までかたりて三吟滿て歸る。

　歌仙　畳風發句、鬼貫脇、文十第三。誹諧畧之。

　　北條團水が許より愚者といふ題をこして發句乞けるほどに

道に慥なる人は、しらぬをしらざるとす。慥ならざるは、しらず顔なるをよしとす。此故に下手なうして、しかも下手多し。達人の誹諧は、みづから述てみづから心をよろこばしむ。彼知り顔の人は、みづから述て人におよぼし、よしといへば悦び、惡しといへばくるしむ。是己が

くらければなり。其くらき事を、己はよくしりて人に隱す。達人は是をみれどもあらはれず、あらはさねばしらざると思ふのたぐひ多し。それ變化をしりて人に先ゝずる有、盲者これをにくむ。たとへば剛強のものにつれ立て、柔弱のものゝ道を歩に腹を立るにひとし。抑貞德立圃重賴三老の風姿、世に流布するの後、梅翁出て是を變化す。其時古風をはなれざるの輩、嘲哢して放狂の體といへるを、ふるしと言てわらふ人すら今の變化をにくむは、其ふるしとさしたる輩のたぐひに覺えずして今己が心のなりたる事をしれ。

「來いといふ時にはこいでおういおい

大元式卷頭

物狂といふものぐるひに興なきはなし。我大悟物狂は其興なき初　諸人笑ッてとらず、是珍愛(重カ)。又いやしめざるは柳水ひとり、是迷惑。あらおそろしの此人やな。

寒空に都を迯し物ぐるひ

哀傷類

亡子を悼し詞

元祿八亥のとしのむ月の六日の夜、母の夢想に、南面に松はへにけり、といふ句を見て、其年の亥の月の、中の亥の日、卯の上刻に誕生す。名を永太郎と呼んで、月を送り日を重るにしたがひて、聰明人にこえ、平生もてあそぶわざは、武氣自然に備り、生得強勢なりしを、今年初陽の上の五日より、疱瘡のためにおかされ、醫療應ぜずして、中の五日の戌の下刻に終りぬ。抑かゝる凶事のあるべきにや。南面の松ゆゑなきに枯、西裏の松は風やはらかなるに、大枝をれぬ。其外あまたの前表をあらはし來れば、ひとへに天數のまぬがれざる所か。されど愛念しばらくも離がたくて、老少不定の明理、たちまちに曇らんとし、夜の雨は窓をくゞつて胸を叩き、松吹風はいつも聞音にはあらず。とかくして、一七日の夕、骸を納たる寺に行て

土に埋て子の咲花もある事か

日は西山に入て、明朝東山に出。庭の梅の花今年又花生ず。一切是空年の夢。昨日永太郎、今日利陽童子。

木をわりて見たれば中に花もなし
されども木より花はさきぬる　父　佛兄

元祿十三庚辰孟春廿一日　手向

塩屋何がしが死去を悼て贈る詞

花のあした月のゆふべ、友とせし人の、窓に彳む面影も、いつしか野邊の煙と立のぼりて、その事かの事、夢になりはつるうつゝ心こそかなしけれ。

山吹にさきだつ雨や身のひとつ

百丸追悼

西行は花の下にて我死んとよみて、其きさらぎの中の五日に、ながく世をねぶれるとかや。百翁は上人に一日遲し。哥人誹人ともに、かのきしにいたりて、蓮を同じうせん事をこそ思ひやり侍れ。

落日や釋迦もうしろに入さ山

百丸が妻の身まかりしを聞ておくる悼の詞

此佛、百丸と現のかたらひしける比より、むつまじく、花にほひ月さやかなる時ゝ、九夏の風、玄冬のふすまにも我軒端をとひ彼家に行て、心おかぬ程にありけるを、我やことしの春、さる事ありて京に住離ぬ。彌生の中比、故郷にくだりてまみえまつるに、はやあす歸りなん、持病御快、やがて都へなんどいさめ侍れば、うちなみだぐみていらへもなきほどに、見えつる、今のおどろきに思ひ合てあはれにたへがたうこそ侍れ。

春の夜の面ざしもなし夏の月

蟻道一周忌に手向る詞

蟻道や維舟の門人にて、我誹諧の弟なり。天性風をいとひ花をおもひ、雲をあやしみて月を愛しつゝ、市中に在て清閑の扉をしむ。かの鷄頭や、鉢叩や、是をいはずば蟻道も蟻道にはあらじ。いひ得て即蟻道也。その初音や、雪の曙や、心と詞と能相叶て、都鄙遠境の耳をめぐり、貴賤頭を春きて、其感こまやかに味ふ事、舌頭に箕形の業

をなさしむ。かくて見もしらぬ人すら、霞をあはれみ、露をかなしむ心を養育するの粮とし、其序をしへずして、いくばくの人に伴ふ。それいづれの上ミをのぞき、又其下モにをらん事かたかるべし。

から鮭は誰が娘ともしれぬなり

此句は予が持し小町の木像のからびたるにむかへるうるはしさ也。若轍の魚の呼事あらば、蟻道又いづれの水をかあたへん。此人や深く風雅の境をこえ、遠く月花の迹をわきまへ、いつしか妄想能斷して、無着空心の佛性をも見得したるなるべし。嗟蟻道、去年の橘月、むかしの人の數に入ぬ。ことしそのけふにむかふ朝、あすしらぬ身ながら一枝を手向るのみ。

夏草の秋まつ程ぞ甘露王(玉カ)　鬼貫

法屋宗旦七回忌をいたむ詞

瓢箪(簞)の鯰いんでいづくにかある。なしといはむとすれば、水は流てちん〳〵、風は吹て颯々。

死や生や七ッになりし石佛

宗旦末期に「世の中はたゞ瓢箪(簞)の大鯰おさへ〳〵てにげていにけり、といへるを思ひて書たる詞也。

池西言水が一周忌に發句を手向よと方役(設)が許より乞けるほど送りける詞書をよむ

其名ばかりをとゞめ置て、枯野の薄に佛を見し古人の魂を動せしはむかし也。池西言水誹諧に業をたてゝ、世の中に副ふ。あかれぬ人の數にて、維舟の流を汲ながら、しかも其舟にもつながれず。筆の道學ずして、佐理 道風が假名の手もとを覺えぬ。人よくまじはりをむすぶ。七十の年の後、埋れる苔の上をしたひて、今やわすれぬ志にあそび、此いさほしに寄人は、なにがし方役(設)也。是もすける心ざしおとらず。誰かれ月花のかたらひ多して、窓軒端をたのしとす。我も交の莚に曲を覺えし友なれば、をかしさあはれさ心のはしながう、なきあとの石の面こそせんなけれ。

朽もせぬ石に袖なし花すゝき

慶志を悼て鷄賀へ送る言葉

慶志はとし比はいかいに心をゆだねて、能友に交、能人したしめる事、たとへば花に、朝のあらしをいとひ、月のゆふべのうき雲を思ふごくにこそ有けれ。されど彼四っ

の品まぬがれぬ世のならひなれば、いつのころよりか身にいたづきのいるにまかせて、吉野初瀬の春秋も人のながめとはなりぬめれど、ゐながら心をよろこばしむるこそ、去此不遠の理りにも叶ぬべしや。されば飛花落葉のさかひあり、有爲轉變のならひまで、常によくわきまへたるにや。霜の二日の朝嵐に、正念にして念佛とともに行けるこそ有がたけれ。

散とのみ見る日や婆娑の冬木立

來山追悼

花にとはれ月に音信しも、むかしの數に入て、其事かのとに、幾十とせの夢をかぞへ、我袖のきはづきも、戀しき今の形見とはなりぬ。

文も見ぬしぐれふる夜ぞ定なき

補遺（頁廿七 前賢餘興ノ類へ收べきなれども、よてこゝに出せり。）

小町の木像を九問にゆづりける副文

小町の名また〳〵なる中に、明月記現形の神名ひとつにのせて、日の本のわざ事に遊びたのしむ人も、わするゝ事なし。昔惠心院源信の觀室に有て、人万呂 赤人 猿丸 黒主 小町にあへりと。それより滿誓沙彌が哥を感ず。其因にや、其作は百とせのかたち殘れり。中比陽明殿下の御家にて寺田無禪に傳はり、ひさしく祕藏して持り。是ももゝとせあまり十の五の齡をかさね、手かき哥よむ事人よくしれり。さるを今大路兵部大輔光成あつく信仰して、これが家に祭る。其後ふかき故ありて、我物となれるより、花月の魂いますがごくうやまひ、ほとゝぎすに起され、雪にたはぶれしも、皆御影にささはれけるよと思ひとりしを、門人何がし養雛齋九問、我にわざことの道しるべせよといふより、燈火のもとにありては、昔の人の俤をしたひ、窓によりては、昨日の雲の行方を思ふ。其風流さすがにいやしからねば、此神像のやどす所も我にひとしき事を思ひよりて、烏丸光廣卿の副文、又予が心覺えをかいそへ、享保五庚子のとし、神むかへ月朔日、九問にこれを讓りて、永く其家に輝ませとあふぐのみならし。

木がらしの底に花行老の浪　鬼貫

七車終

獨言

上・下

鬼貫著

世に誹諧をもてあそぶとみさかりにして、心あるもなきも、わひだめなく、奴婢僮僕のやからまで、口にまかせて、さがにくきばかりいひしろひぬれば、かつはあさはかなるたはれごとのみ聞ゆれど、其源は難波津・淺香山の山の井よりながれて、人倫を和し、人の心をなぐさむるは、またく和哥の德にかはらずや。和哥にも誹諧躰とてあなれば、その中よりわかれ出たるにやあるらん。しかあれば遠くも近くも、誹諧に名ある人の名句とて聞ゆるは、其心幽玄にして、其姿又妖艶なる物をや。爰に鬼貫と聞えし人は、まだいと若かりし時より、此道に身をゆだね、筑波山はやましげ山分入にも、本より志のまとをしをりにして、既に佳境に至れり。年ふるまゝに、其名高く世になりてすら、人々の口にある秀句どもは、誠に一唱三歎に堪ずなむ有ける。此人、年比心にこめし誹諧の心用ひを、親しき門人のこふによて、二帖に淸書して獨言となむ名付られしをみれば、むべも限りなき敎と成ぬべき玉寶の物とみゆ。されば予に其趣を、書の始にかいつくべきよし申給へど、我まだしらぬ道なれば、いかほの沼のいかにしてと固辭し侍る物から、しかまにそむるあながちに聞え物し給へれば、せむすべなくて筆にまかせ侍る物ならし。

以敬斎長伯誌

(獨ごと上)

「俳諧の道は、あさきに似て深く、やすきに似てつたはりがたし。初心の時は淺きよりふかきに入、至りて後は深きよりあさきに出とか聞し。むかしは人の心すなをにして、初中後を經しかど、今はその修行する人だにすくなく、心皆さきにはしりて、いつしか人もゆるさぬ上手にはなりけらし。これをおもふに、俳諧は只當座の化口にして、根もなきいひ捨草なりと、かろき事におもへるなるべし。是もまた和哥の一躰とか聞時は、かりにも淺〱敷おもふべき道にはあらぬを、ほいなき事にぞ侍る。

「大かたの人は口にまかせていひつゞくるを、この道の達者なりと心得て、更に我に益ある事をしらず。俳諧は只まことにもとづく中立なりと、心をよせて修行すべし。たとへば、わかき人の親にいたくいさめられん時、腹だゝしきこゝろの出る事あらば、親といふ前句に子として腹立る躰を付句に取なをして見侍るべし。全くのりなじみはあらじ。又打杖のよはきをかなしめる心ならば、よくなじむべし。さあれば親にむかひて蜂吹は、神慮にもにくませ給ふ所なりとおそれて、孝心にもとづき、あるは人につかふる身の、慰むかたにいざなはれて用をうしろになす心をも、付句に取なをしてそれを改め、或は他人のまじはりだに、四海みな兄弟なりと心のあゆみをつけ、常のわざを俳諧になぞらへ、はいかいを又つねのむつまじ事に案じよらば、自然と句毎にのりなじみも出來ぬべし。

「ことやうの句を作りて、それを新しとおもふ人は、此道を深く尋ね見ざれば、遠きさかひに入がたくや侍らん。詞は古きを用ひ、心は新しきを用ゆとこそ聞しか。

「一座におもしろき付句の一二句もつゞきたらん時、それよりも猶まさりたる句をせんと、大かたの人は一入ちからを入て案じ侍れど、いかにもかろ〲とやり句する人まれ也。只よき句を〱と獨り〱が案じいら

ば、しかも能句の出る事かたくや侍らん。さら〳〵とやりながしたる跡は、更に能句も出來ぬべし。程よき遣句は未練の人の及ぶ所にはあらず。

「發句は月雪花、木ゝ艸ゝ、其外生る物のたぐひ、すべて何にてもあれ、ひとつ〳〵に物いはせたらんに、かくまでも我事をいひをよぼしぬる物かなと、深くよろこびなん心詞にあらざれば、まとすくなくや侍らん。

「付句はのりなじみを專一にすべし。宗祇法師の雜談にも、上手の付句は他人の中よきがごとし、下手のは、親類の中あしきがごとしと、いひたまひけるとぞ。

「句を作るに、すがた・詞をのみ工みにすれば、まとすくなし。只心を深く入て、姿・ことばにかゝはらぬこそこのましけれ。古哥にもあれ、古事にもあれ、ひたすら案じ探りて句を作ると、をのづから心にうかぶ所を用ゆるとの、さかひならんか。

「句は師匠のかたちによく似せて仕習ふべし。修し得たらん後は、そのかたちをはなれて、天性ひとり〳〵が得たる風儀をこそ用ひまほしけれ。

「ある人、扨も俳諧はならぬ物にてゆ、といひけるほどに、其ならぬ物と知たまふは、ひとかどの事にて侍る。予は天性數奇て此道にこゝろを盡す事、をよそ四十年にあまりて、行にも座するにも忘るゝ事なく、臥時はまくらのほとりに硯を置て、寢ざめだに外なければ、道のなりがたしといふ所を聊わきまふに似たり。平生深く心をもいれざる人の、ならぬ物としり顏にいひたまふこそきこえね。

「俳諧をする人、あらましにもいひこなせば、はや得たり顏に止まるあり、無下にほいなくぞ侍る。或時は句もなりやすきやうにおぼえ、又或時はひたすらなりがたくもなり侍らん事、幾かはりも有ぬべし。深く入なん人は、其程〳〵に功つもりて、猶むづかしき事を覺侍らん。修行の道に限りあらざれば、至りて止まる奥もあらじ。只臨終の夕までの修行と知べし。たとへば宗祇法師は連哥の達人にて、余にならべる人もなしとはいへど、祇公ひとりの上には、今五とせる給はゞ五年の功、十とせながらへたまはゞ十年の功も有つべき

事にこそ。

「新しく作りたる句は、やがてふるくなるべし。只とこしなへに古くもならず、又あたらしくもならぬをこそ、能句とはいひ侍るべくや。作意にのみかゝはりていふ句と、まことを深く案じ入て、一句のすがた・詞にかゝはらぬとの差別なるべし。

「歳旦の題に、只の春の句も聞え、また元日やとさへいへば、元日の句なりとのみおもひて、心のよそ／＼しきもおほし。花の句は花のみをいひ、月の句は月のみいひて、しかも意味深きをよしとす。うはの空に案ずる人は、句に心にちからなきにまかせて、色／＼の事品を取まじへ、おもひよせて、をのづから工みに作るなるべし。

「いつはりを除きて、まことをのみいひのべんと、ちからを入て案じ侍るは、いつはりいふにはまさりたれど、これも又まことを作りたる細工の句にて侍り。此道を修し得たらん人の、虚實のふたつに力を入ずしていひ出す所、句毎にいつはりなきをこそ、をのづからのまことゝはいひ侍るべけれ。是なん常の心に僞りなく、世のあはれをも、深くおもひ入たる故なるべし。

「いにしへの俳諧は、來る幾日の興行なりと前廣に定置て、詠草に刻付して、再ゝ返までもまはしたれば、句數もいでき侍り。當日に至りて、或は朝飯後よりはじまりたるは、夜半をも越て終り、又晝過てあつまりぬるは、大かた夜もしら／＼と明わたる程にみちぬ。今時の俳諧は再返をだにまはす事まれなりければ、座の上の句數はおほく侍れど、滿る所はいにしへの席の三分が一にもたらず。古人は各沈思して、尤句毎に宗匠の心をうかゞひ、宗匠は又故なき句を取事なし。あるは前句に不便をくはへ、あるはのりなじみを專一に案じ侍りければ、をのづから時のうつりたるなるべし。

「作意をいひ立たる句は、心なき人の耳にもおもしろしとやおぼえ侍らん。又おもしろきは何のやまひなりとぞ。修し得たる人の幽玄の句は、修行なき人の耳にはおぼろげにもかよふ事かたかるべし。しかもその詞やすければ、いはゞ誰もいふべき所なりとやおもひ侍らん。

聞えぬといふ句に幽玄と不首尾の差別侍り。まとを辨へぬ人のさま〴〵に句を作りて、是にても未聞え過ておもしろからじとひたぬきに詞をぬきて後には何の事とも聞えぬ句になり侍れど、作者は初一念の趣向をこゝろに忘れ侍らねば、我のみ獨り聞ゆるにまかせて、いひひろむるもかた腹いたし。又幽玄の句はつたなき心をもて、其意味のおもしろきところを聞得ぬなるべし。

「祈禱の俳諧興行して、いひつらぬる所、句にいつはりおほきは、いかでか神慮にかなふべき。何毎にまとを辨へざる人の努〳〵おもひ立べき事にあらず、もたいなきわざにぞ侍る。御影のかゝりたる座に着ては、各其日の神主なりと心を改め、又御影のかゝらざる席には、心のうちに勸請申て、在がごくつゝしむ人は、いつはりなき句も出來ぬべしや。

「追善懷舊の俳諧も、まとをはこばざる時は、これも佛の道にそむき侍らん。

「花の句は一座の宗匠、または功者にゆづりて、努〳〵このむべからず。貴人・小人などには花を所望しつべき品も侍り。夫ともに宗匠の言葉をまたずして、外より會釋すべき事にあらず。むかしは月・雪・郭公の類ひは功者の外遠慮しつれど、今時は其わかちをも辨へず、いつしか此道のかたちをとり失ひ侍るもおほし。それより仕習ひたる作者は、斟酌あるべき句のすべをもしらず、なげかしき事にぞ侍る。

「發句・第三などしたる作者は、花の句をせざる物のやうにおぼえたるもおかしくこそ。

「脇句は文字にてとめ、第三は、に留・にて留・らん留・もなし・はなしなどゝも、とめ侍るとばかりは誰も皆しる事にて侍れど、何故かくは定置たるぞといふ、然る所以をしる人まれなり。又脇句のてには留、第三の文字留、なれや留などゝいふ事もあり來り侍る。

「表の十三句めを月の座、裏にては十一句め月、十三句めを花の座と定侍れど、又月花共に取あげてする時は、何句めにてもくるしからず。さあれば月花の座とは、何ゆへ定置たるぞといふ事をさへ辨へしらぬ人も侍る。

「花は櫻花といふさへ正花にならねば、ましてこと木は

いふにも及ばず。しからば何をさして花とはいひけんやと、深く尋ね入べき事にこそ。

「鎌倉の右大將、西行上人に弓馬のみちをたづね給ひし時、馬は大江の千里が、月みればの哥のすがたにて乘たまへと答られければ、ほど拍子を心得たまひて、即座に馬の乘かたをさとり給ひけるとぞ。俳諧にも句のほど拍子は、上手のうへのしわざなるべし。

「我句をおもしろく作り侍らんより、きくははるかにいたりがたしと、古人の詞にも見え侍り。ひたすら修行し侍らん道なるべし。

「發句に動くといふ事侍り。たとへば、つばなの句をすみれの句にしていへば、又それにもなり、杜若の句をあやめの句にして見ればなるをこそ、嫌ふ事にて侍れ。余はなぞらへて考ふべし。

「心すなをに生れつきたる人も、俳諧にてはたゞうそのみいひならひ、かたち實躰なるも、おなじく異形を盡せる人おほし。俳諧といふ物はいかなる事を益とはなせるぞと、深く尋ね入なん事もなく、口に出るにまか

せていひなぐさむわざなりと、只かろ〴〵敷おもひとるは、聊この道を辨へざる故にて侍る。心すなをなる人、俳諧にていふごとくにうそつきて世に交るべきや。又風俗こうたうにしなして、世に交る人の衣服に與さむる程の模様をそめ、或はまた羽織袴の上に甲か、立烏帽子なんどを着して人中へ出よといはゞ出べきや、能ゝ考しるべし。それ俳諧は和哥のはしなれば、心を種として万づのことの葉となり、目に見えぬ鬼神をも哀とおもはせ、猛きものゝふをもなぐさむる道とこそ聞しか。俳諧を修してまことの道を行侍らば、なさけしらぬ人すら情をしり、あるは不孝不忠の人も不の字をとをざくべし。只世に交はりて、さしむく所を前句に立て、ひとつ〳〵付句に取なをして考見るべし。前句と付句と肌もあはず、のりなじみのなき時は、是すなをの道にあらじと、たしなみ改むべき事にこそ。

「人とわれと常いふ詞を句に作れば、悉く俳諧なりと辨へしらざる人は、付句の味ひをもしる事かたかるべし。

「古風もむかしは當風ならし。今はた當風とおほしき句

も、又いつしか古風となり侍らん。古風といふも、當風といふも、ともに作り求めたる句のすがたによりて、新古の名はあれど、修し得てまことの道を行けん人の句は、幾とせ經るとも新古の差別はあらじ。只この道に深く心を入なん人の、まれなるこそなげかしけれ。

「俳諧のわる道に入たる人の會に連りて、前句に心をもはこばず、兼てこしらへ置たる句をもて、つけはめたるは、古き鞘に刀を入るゝがごとし。又兼てといふにも品あり。心ざし深かりし人の万づに心わたりて、より／＼おもひをける趣向のうちより、求めずして前句にすがりて出たらんを、程よく句に作りてつけなし侍るは、かの道にふける人の哥袋とやらんいふにも、ひとしかるべしや。

「秀逸の發句といへるは、打きこゆる所、何とらへておもしろき事も見えず。只詞すなをにたけ高くして、其意味口をして述る事かたきをこそいひ侍れ。是は常に詞を巧みよせたる句をのみ面白き事に覺て、もてあそぶ人の耳には聊かよふべからず。世に周ねく人のゆるしたる作者の秀逸と、名にたてる發句を聞て、その底の聞えざる輩は、我心にうたがひをおこして、修し入て見侍らば、自然とおもしろき意味をもしる事あらん。その分上に至らば、自句に秀逸をもまうけぬべし。小細工にのみ心止まりて、我とほめしてん作者は、終に人の句の秀逸を聞得て、たのしむべきさかひにもいらず。もとより身を終ふるまで、一句のぬしとなりなん事かたくや侍らん。

「此道を修し得たらん人に、いつ時代の句を作りてきかせよといはゞ、それ／＼に句のすがたをいひあらはす事やすかるべし。ましてまことやうの句は、猶更いひやすき事に侍らん。すべて細工にわたる所、むづかしき事にはあらず。只まことを深くおもひ入て、句のすがたは其時のうまれ次第と、あきらめたらん人の句は、すがたかならず一様ならず。獨吟の俳諧などは、所／＼自然と心かはりて、見るに飽事あらじ。未練の人に、此所をしてきかせよといはゞ、まねても及びがたくや侍らん。一筋にこりかたまりたる作者の獨吟の句は、みづから

飽出侍りて、つるにわが心にもかなふべからず。いはんや人の聞所をや。作り求たる句はいひやすく、もとめざる句はいひがたからん。その所に心をつけ侍りて、他念なく修行すべし。いひやすき事を是として、いひ及ほしがたきを非なりと、かたくなに覺たる人には、ほどこしぬべき言葉はあらじ。

「鶯はうぐひす、蛙はかはづと聞ゆるこそ、をのれ〳〵が哥なるべけれ。うぐひすに蛙の聲なく、かはづにうぐひすの囀りなきこそまことには侍れ。

「俳諧の修行もなくて、心のみ高く止りたる作者は、たとへばたかどのゝ上にのぼりて、四方山をながめつくしたる人の、心ゆう〳〵と打晴たりといへるを聞て、我もともに風景を見てんとて、居ながら其所に至らん事をこのめるがごとし。ひとつ〳〵階をのぼらずして、いかでか高き所に至るべき。此理りをよくわきまへ侍りて、未練の人はひたすら修行すべき事にぞ侍る。

「未熟にしてわれこそ熟したれとおもへる人は、おろかにぞ侍る。修し得たる覺もなくて、上手になるべき道理はあらじと、我とわが心をさがしてあやまりをしるべし。修行なき人の器用一ぺんにて、及ぶべき事にもあらず。又智惠才覺をもて至るべき道にもあらじ。

「俳諧の修行といへるは、ひたすら句にまことの味ひを稽古して、平生人に交るをも、すぐにそのまことを用ひて、いつはりなき事を、むねと心得たらんをこそいふべけれ。

「我は俳諧を仕習ひてより、いくとせを重ねたりと指をかぞへて、それをのみ修行なりとおもへる人は、心得違ひも侍らん。まことの道にこゝろをよせずして、句のうへをのみいひもてあそびたる作者は、たとひいくとせをふるとも、身の益とはならずや侍らん。

「俳諧に地・自句・やり句・格外といふ事侍り。地といへるは、さのみおもしろき事にもかゝはらずして、前句によくつけてとをるをいふべし。自句とは、みづからの手くせをもて、おもしろく作りなしたるなるべし。遣句は、其あたり能句のつゞきたらん上か、又はむづかしき前句にて付がたき所を、かろ〳〵とつけのけ侍り

て、程よくやりたるをやいひ侍らん。格外といふは、打きこゆる所更に前句に付よるべき句とも見えねど、底にてよく付侍りて、しかも感深きをいふなるべし。

「百韻の内、地三十三・遣句三十三・自句十七・格外十七、と古人のいひけるは、あながち句の數を其ごとくにしわけよといふにはあらず。百韻皆つけかた一樣なる時は、見るに飽なんといへる心なるべし。

「連俳のわかれは、遠く見る時はとをく、近く見る時は脊を合するがごとし。たとへば東西にわかれ行人の、一歩しける時は袖をならべ、裾をふまへぬれど、東へ行ん西へ行んと心ざしのちがひたる所より、わかるゝといふ名のあるがごとし。俳言のつよからん句は、一歩よりわかれ行たる人の遠きさかひを隔るたぐひならし。又言葉やすらかにして、打きこゆる所は連哥めきたる句も、心ざす所連歌のいきかたならざるは全く俳諧なるべし。これなん脊合せたる人の東西へ行にひとしかるべしや。あるは又、連哥にいふまじき詞つゞきをもて、俳諧なりといへるたぐひも有ぬべき事にぞ侍る。とかく其一句をとらへて論ぜずんば、又一概にもいひがたき事なるべし。

「俳諧は連哥を元として連哥を忘るべしと、古人の詞にも見え侍りしか。

「つよき句・よはき句の事。大かたの人は俳言がちにいひて、句のかたちいかめしく作り、或は文字を聲にていふたぐひをのみ、つよき句なりと覺侍る。心得ちがひなるべき歟。たとへば、がさつなる人の喧嘩しける時、其さまさながら勇士に似たれど、底意に死べきまともなく、只人の恐るべき樣を作りたれば、死ぬべき場にをよびて逃る事すみやかなるがごとし。又まことを深くおもひ入て、すがた・詞、柔和に仕立たるを、よはき句なりといへるも又心得違ひなるべしや。たとへば物とがめしける人に行あひて、我にあやまりなき事にも、詞をつくしてやはらかにいひける時は、よはかりしやうに見え侍れど、やむ事を得ざるになりては、一足もさらずして死をきはむるがごとし。まことすくなかりしをよはき句といひ、まことを深くおもひ入なんをつよき句な

りとはいふなるべしや。その虚實をも辨へずして、句のすがた・詞にのみかゝはりて、强弱の沙汰しけん人は未熟にして、ひとへにあやまりなん事にや侍らん。

「いにしへの俳諧師は、百日の稽古より一日の座功といひて、只會に出なん事を大切に思ひ侍りし。實、山類・水邊・居所の躰用、或は句のいき方・つけかた・さし合等、輪廻の沙汰、其外の詮義までくはしく侍れば、一日の座功も大切の事にて侍し。

「まことを深くおもひ入て言のべたるも、詞よろしからざるはほいなくぞ侍る。心と詞とよく應じたらん句をこそ、このむ所には侍らめ。

「詞すなをに仕立たらん句を專一なりと、一概におもふべからず。俳言たくましからんにこそ、はいかいの趣はたち侍るべけれ。

「宗長法師の雜談に、付句は只前句にはなれて、しかもはなれぬやうに有べし。たとへば蓮の莖を引切て見るべし。はなれやすくして、しかもその糸絶る事なし。其ごとくに打越のがれ、前句の心を捨るは、蓮のくきを切にことならず。扨緣語をひかへ、寄合をわきばさめるは、糸のつゞきけるがごとしと。俳諧にも又ともに信ずべき事にこそ。

「いにしへはいかいの書をあむといへば、國〳〵より發句を書付て撰む人のかたへをくり侍り。其内長點かけたる句を小短册に書留をきてくは(加)へ侍りしを、今は初心の作者に至るまで、此句を入べしとて、をし(推)て書付をくり侍りき。又興行の俳諧に、一順をまはし侍るも、いにしへは付句を二句づゝして宗匠の心をうかゞひ、其後詠草に書付侍り。今は付句も作者の心ひとつにてきはめ、いづれへうかがふよしもなくて、すぐに書付てまはし侍る。かくまで法外の事になりける物かなと、そゞろにかなしく侍る。

「いにしへは名所などに物をもて付る句は、古哥にても古事にても、慥ならん證據なき句は付させ侍らず。某いまだ廿にもみたざる比、先師松江の翁と、梅花翁と烈(列)座の會に出て、

　　ちよと見には近きも遠し吉野山

といふ前句に、

腰にふくべをさげてふら〳〵

と付侍りければ、吉野山にふくべ、其故有事にやと、師のとがめにあひける程に當惑して、先御前句といへど、句前もとをく侍る間、付べきやうあらばその儘付よとひたすら申されける程に、卒爾の事をいひ出けんと、一座の人のおもへるところも面目なくて、

みよし野の花の盛をさねとひて
ひさごたづさへ道たどりゆく

といふ古哥にすがりて付侍りきと、當座の作意をもて此哥を拵て答ければ、めづらしくゆ。これは何にある哥にやと尋ねられける程に、たしか万葉か夫木にて見ゆといひければ、やがて執筆に書せられける。いかなれば師の心をかすめ、かく僞りをもて、もたいなくも懐紙をけがしたる咎、かへす〳〵も道にそむきし事、今はたおそろしくぞ侍る。其外俳諧を只かろき事におもひなしたるうちの句など、ひとつ〳〵かぞへ出さば、無量のあやまりも侍らん。

「元祿十七年の春、きさらぎのはじめ、或人のもとへ行けるに、床に貫之の像をかけて、發句所望せられし時、折ふし空かき曇てこさめ降ける中に、籬の梅のしろく咲て、そこらおぼつかなき程に見え侍りければ、

雨雲の梅を星とも晝ながら

といふ句をつかうまつりぬ、かれこれ案じめぐらしける中に、ふと蟻通の諷をおもひ出して、よき趣向とらへたりとて、取あへず仕立たる句にて侍り。惑說をも辨へずしてうかと心得たれば、かくあやまりなる句をも仕出し侍りぬ。すべてむづかしき句を案じ入たる時、よき趣向のうかみたるは、日でりに雨得たらんこゝちして、やがて句に作り侍る事、大かたの人の常にて侍る。其時今一かへし返して、心のうちに吟味有べき事にこそ。

「いにしへ守武・宗鑑、連歌に對して俳諧を興し、貞徳・立圃・重賴、また中興して專ら世上に此道をひろむ。しかれども其詞かたく、式こまやかにして、初學の人の道に入がたき所をおもひよりて、その後梅翁當風を作

りてうたふ。其句の姿・詞、花やかに打くつろぎたれば、人皆おほく古風を捨て、その當風にかたぶき侍りぬ。それより猶さき〲に移りかはりて、いつしか彼古風をうしなひ侍りき。其古へをしれる人は次第に世をさり侍りて、風儀のうつりかはりし末より學び入たる作者、そのいにしへをしらざれば、法外なる事を法外なりともしらず。或は又今新しとおもひて仕侍る句も、古來いひつくしたる内にありて、古かりし事をも辨へざるたぐひも見え侍る。只句のすがたはいかやうにうつりかはり侍るとも、古格をたづねしりて、心の底に置たらん作者は、をのづから法外の仕かたは、あるまじき事にや侍らむ。

「それがし八歳に成ける比、いなけなる（本文ノマヽ）發句しそめてより十三歳の比、松江維舟に師のちなみをむすびて、かの翁の古風をまなび、此道に心をいれて不斷獨吟の百韻をつゞり、その比名に立る古老のかた〲へ送りて、點をこのみ見る事、いく卷といふ其數をしらず。かくて十六歳の比より、梅翁老人の風流花やかに心うつりて、又其當風をいひ習ひ、猶其のりをもこえ侍りて、文字あまり、文字たらず、或は寓言、或は異形、さま〲いひちらせし比、發句・付句によらず、人によしといはれ、我心にもおもしろかりしやうに有けるをも、修行しつる覺もなくてなす所、よき句にて有べきやうはあらじと、ひたすら我心にうたがひを起して、更にこゝろをとゞむる事なく、思ふにいにしへよりの俳諧はみな詞たくみにし、一句のすがたおほくはせち（拙）にして、或は色・品をかざるのみにて心淺し。つら〱よき哥といふをおもふに、詞に巧みもなく、姿に色・品をもかざらず、只さら〱とよみながして、しかも其心深し。いにしへより俳諧の發句をおもふに、

青柳のまゆかく岸のひたい哉

まん丸に出れどながき春日かな

うつぶいておどるゆへにやほんのくぼ

山伏はしぶくとかぶれときん柹

またその比當風と聞えし句、

摺小木も紅葉しにけり唐がらし

これらはかの宗祇法師の說に、非道・敎道・非正道・進正道といへるたぐひ成べし。たゞ俳諧は狂句作意をいふとのみ心得たるばかり、一概にかたよるべき道にもあらず。猶深き奥もやあらんと、延寶九年の比より骨髓にとをりて、物みな心にそむ事なく、やゝ五とせを經て貞享二年の春、まことの外に俳諧なしとおもひもうけしより、そのかざりたる色・品も、かの一句のたくみも、ことごとくうせて、それぞれは皆そらごとゝなりぬ。

「修し得たる人の物がたりをうつして、未熟の人にむかひて、我しり顔にいへるを、力なきひとはそのことばを信じて、げに達人なりとおもふをよろこべる輩は、よこしまのわざにて侍る。及ばぬ道は、ひたすら修行し侍るべきを、他念心をもこらさず、勞をもついやさずして、只口先をもて上手なりと、人におもはれんことをこのむこゝろこそあさましけれ。

「當時もてはやす俳諧の中に、此句を聞給へと語り侍るを、前句は何といふにやと問人あれば、今時前句をたづね給ふは扨も古めかしく侍る。當風は前句なんどにかゝはる事ゆはずといふ人などもありげに聞ゆ。にがにがしくこそ侍れ。

「いにしへ談林風・伊丹風などいひて、句にさまざま異形をつくせし時節も、更に前句を忘るゝ事なく、或は文字をけうとくあましたる句も侍れど、二句隔る掟を守らずといふ事なかりし。

「いにしへは、一座百韻の俳諧をも句毎に覺て、或は歸りて人にかたり、或は悉く書留なんどし侍りし。今當風なりといへるは、哥仙の句をだにおぼゆる人なし。これをおもふに、いにしへは緣語をつたひて付侍れば、一句一句おもひ出せばおぼえ侍りし。今は前句に緣語なきことを誑なりとおぼえて、作り立たる句にて侍れば、何とらへておもひ出べき種もあらじ。ひとへに前句につかざる咎なるべし。

「祝儀の發句はそのことぶきをのべ侍りて、さのみ句のかたちに手柄をこのむべからず。付句はたゞいむべき詞に、能々心をはこびてすべし。

「同季を付ればよしとのみ心得て、たとへば正月の句に

三月の物をつけ、四月の句に六月の物をもて付る作者も侍り。付句はよくこゝろをはこびて、時節相違なきやうにすべき事專一なるべし。

「戀の詞をさへいへば戀の句なりとおもひて、本情なき句もおほく聞え侍る。詞に戀はうすく侍るとも、心の深からんこそこのむ所に侍れ。しかはあれど、俳諧の修行もなく、心のみたかくとまりて此所を仕侍らば、かへりてひがごにも成侍らんか。

「鶯はきゝ、郭公はまち侘るこそ詮なるべけれ。そのほか四季折〳〵の草木・生類に至るまで、ひとつ〳〵その物〳〵をとらへて、くはしく所詮を辨へしりて、句にもをよほしぬべき事にぞ侍る。うぐひすつけたらん句を郭公にいひかへ、梅つけたらんをさくらにいひかへて、前句になじむべしや。物の所詮を辨しりなんこそ第一の事なるべけれ。

「春の月は、くれそむるより朧だちて、物たらぬけしき。

「夏の月は、灯を遠く置て詠め深し。

「秋の月は、窓に・軒に、海に・川に、野に・山に。

「冬の月は、一むらの雲の雨こぼし行隙を照していそがし。

「春の雨は、物こもりて淋し。

「夕立は、氣晴て涼し。

「五月雨は、霹〳〵とさびし。

「秌の雨は、底より淋し。

「冬の雨は、するどにさびし。

「未練の人の俳諧は、春雨のと五文字言いでし時、春雨前に出ゆといへば、秋さめのと付替侍らんといふこそうたてけれ。

（ひとり言　下）

「とし立かへるあした、去年ことしの雲の引わかるゝ比、鳥の聲やゝ花やかに、殘る灯に鏡立て、妹がころものうらめづらしく粧ひなし、家〳〵にかんなどいはひ、かはらけとり〳〵にむつましく、門には松立ならべ、砂うちまきて、とぶきいひかはす。人の往來も、二日三日までは常の牛馬の通ひもなくてうらゝかに、あるは庭かまどに手あしさしのべて、うちねぶりなんどしたるもいそがしからず。

「梅は、軒の垂氷のふと〳〵敷、冬のこゝちもまだはなれがたきに、一輪のにほひ窓よりこぼれ入て、やゝ春めき、きさらぎの比は誓願寺に火をともして、人の心をかゝげ、あるはかた山里の折かけ垣に見ゆるもやさし。

「室咲は、いつの比、誰人のまち侘ておもひよりけん、賞あたゝかなるを、春にまがへて咲出る花の心こそすなをなれ。

「うぐひすは、聲めづらしき、朝より障子にうつる日影ものどやかにおぼえ、きのふけふ野山もけしきだちて、とぢたる水もをのづからながるゝ比、聲もともによくほどけて、霞に伴ひ花にあそぶ。又青葉が枝に囀る比はひたすらおしき。

「蛙は、水の底にて鳴初るより、上に出て雨こふ聲もあはれに、旅にあれば古郷の空なつかしく、あるは夜もすがら野になく聲の枕につたふ寢覺こそたゞならね。

「柳は、花よりもなを風情に花あり。水にひかれ風にしたがひて、しかも音なく、夏は笠なふして休らふ人を覆ひ、秋は一葉の水にうかみて風にあゆみ、冬はしぐれにおもしろく、雪にながめ深し。

「櫻は、初花より人の心もうき〳〵敷、きのふくれ、けふくれ、爰かしこ咲も殘らぬ折節は、花もたぬ木の梢〳〵もうるはしく、くるれば又あすもこんと契り置しに、雨降もうたてし。とかくして春も末になりゆけば、散つくす世の有様を見つれど、又來る春をたのむもは

かなし。あるは遠山ざくら、青葉がくれの遅ざくら、若葉の花、風情をの〳〵一様ならず。櫻は百華に秀て、古今もろ人の風雅の中立とす。

「桃の花は、櫻よりよく肥てにこやかなり。

「梨子の花は、ひそかに面白し。

「つゝじ・藤・山吹、其外名をもてる物、古哥にすがり古き詞にもたれて、只おもしろしとのみ大かた上にてながむる人おほし。底より詠る人は我心われに道しるべして、まことのおもしろき所に入べし。其感より出たらん發句は、その意味を業に述る事かたくや侍らん。

「野につくり〳〵と人の見えしは、わか菜つむ比より草〳〵にたはぶれ出て、すみれ・つばなに春おしきまでなるべし。

「卯月朔日は、櫃くさき衣の袖に手さし入るより、身もかろく氣もひときはかはりて覺ゆ。すだれかへらるゝ上ざまの事は、はかりてもいひがたし。

「郭公の比は誰もみな空に心を置て、月にあこがれ雨にしたへど、まれにもきかぬ折ふしは、もし夢のうちにや鳴つらん、人もや聞つらんと、ねざめ〳〵をうらみ、又たまさかにも聞つる後は、なをしたはしく、人の家より文もて出るをも、いかなる心をやいひをくりけんとゆかし。

「ふかみ草は、ほこりかにうつくしく。

「芍薬は、すげなきやうにてうつくし。

「卯の花は、郭公と中よく、あるは月と見て闇をわすれ、雪と見て寒からず。

「花橘は、あて〳〵敷、おもしろしとも見えず。心のうちにながめはふかし。

「螢は、ひとつふたつ見え初る軒ば、夜道行草むら、瀬田の奥に舟さし入て、花と見る柳の蔭。

「蟬は、日のつよき程聲くるしげに、夕ぐれは淋し。又山路ゆく折節、梢の聲谷川に落るも涼し。

「蓮の花は、朝のながめ一入いさぎよく、晝は又涼し。夕ぐれは心沉む。此華、佛の物にこゝろうつりてみれば、さかり久しからずして、ちりぎはのもろきもたうとし。猶ふかく賞して觀念の奥に至らば、埋れたる佛性、終

に忘心の泥をも出づべし。

「涼は、國阿の堂・華頂山の山門。四條糺の床は、心散てさはがし。又かた田舍は樗なんどの下に、晝寢むしろ敷たるもこのもし。

「秋立朝は、山のすがた雲のたゝずまひ、木草にわたる風のけしきも、きのふには似ず。心よりおもひなせるにはあらで、をのづから情のうごく所なるべし。

「七夕の日は、誰もとく起て露とり初るより、あるはとの葉をならべ、あるは古き哥を吟じて更に心を起し、あるはまた糸竹をならし、酒にたはぶれ、舟に遊びて、あすにならん事をおしむ。

「桐の葉は、やすくおちてあはれを告るさま、いづれの木よりもはやし。月のためには、日比覆へる窓・軒ばも晴やかに見ゆ。

「朝がほは、はかなき世のことはりをしらしめ、なさけしらぬ人すら、佛にむかふ心をおこせば、しぼめる夕をこそ此花の心とやいはむ。

「萩のさかりは、野をわけ入てかひくるゝをもしらず。人の庭に有ては露ふく風に花をおもひ、かたぶく月に佛をおしむ。又花もやがてならんと見る比の風情こそ、いひしらずおかしけれ。愛する人のまれなるぞうらみには侍る。

「荻は、むかしより風にしたしみて、そよぐの名あり。

「薄は、色〱の花もてる草の中に、ひとり立てかたちつくろはず、かしこからず、心なき人には風情を隱し、心あらん人には風情を顯はす。只その人の程〱に見ゆるなるべし。みの笠取もとめて行けん人の、時間まついのちの程もしらじといひけん、道のこゝろざしはかくおもひ入なんこそ有がたけれ。

「女郎花は、あさはかにながむる時はさのみもあらじ。よりそひてしばし心をうつしみれば、立のきがたし。たとへばすげなき女の情ふかきがごとし。又雨の後は、物やおもふととはれ顔にうつぶき、あるは風に狂ひて、くねりなんどしたるけしきは恨るに似たり。

「中元の日は、蓮葉に飯をもり、鯖といふいをに鯖さし入て生る身をとぶき、親もたらぬ家には鼠尾草に水打

そゝぎ、こしかたの有増をおもひ出して、千々のあやまちを悔、或は万づの惠みをしたひて袖さへぬるゝ折節、佛唱ふる與所の夕もおもひやらる。

「次の夕は、火をもて靈送るはかなし。山には大文字、妙法舟やうの物、火をさしよする程は、しばしこゝろもうき立侍れど、かたちあらはして、やがて跡なく消るも又はかなき。

「躍は、かたちより心を狂はせ、心よりかたちにまよふ。わらんべの品よきには、闇たどる親の夜もすがら付まとひ、あるはあらをのこのさま〲に出立たる、けうとくもおかし。顔つゝみたれば誰ともしらず。見る人にたちよりて、我ぞと人に語りなせそとさゝやきなんどしたるは、しらせ顔にて又おかし。あるは身もをしさけがたき女の、帶・帷子など取出して、すがたを人におどらせ見るもやさし。

「虫は、雨しめやかなる日、籬のほとりにおろ〲鳴出たる、晝さへ物あはれなり。月の夜は月にほこり、闇の夜はやみにむもれず。あるは野ごしの風に、をのれ〲が吹送る聲、いつ死ぬべしとも聞えねど、秋かぎる命の程ぞはかなき。つくねんとして、夜も更こゝろも沉みて、何にこぼるゝとはしらぬなみだぞおつる。

「紅葉の比は、きのふの雨にけふの梢をおもひ、けふ又あすの時雨をおもふ。時しも定めなければ、かひ打晴て枝も葉も雫だちたるに、夕日こぼるゝ風情こそ色ことにうるはしけれ。遥に遠山をのぞめば、耳にかよはぬ鹿の聲さへ心にうごきて、其里人の目をさましけん夜々の寢覺をおもひ、あるは名にたてる山のあらしはげしき折ふしは、あからめなせそといひけん筏士がつゞりの袖も、いつしか錦にかはりて、をのが影さへ底にみゆらん。花は散をいとへど、紅葉はちりてだにながめをのこす。

「鴈は、ひとつ〲山こえて跡なく見果る舟の上にて、古郷のかたに行ちがふ聲、又番ひ〲ならびゆく中にはしたなる鳥のまじはりたる、いづくの網にか身をうしなひけんと、妻の心ぞおもひやらる。

「鹿は、角ありて、そのかたちいかめしけれど、おそろ

しき名にもたゝず。あるは紅葉の林にたゝずみ、萩がもとの月にあこがれ、妻をこひ友をしたひて、秋のあはれを聲につかねて鳴ものならし。賢き人の害をさけて友にしけんも、げにさもこそあらめ。又齡ひを延るためしは、蒼くしろく黑くなん、色をかゆるときけば、鶴龜のめでたき數にも類ふべしや。

「菊は、霜か花かと見まがふ朝、まち得たる心地ぞする。にほひを万花のしりへにこぼし、風に傲り霜を睨みて、をのれ顔なる風情、殿上の庭に有ては富るがごとく、民家の園にありてはひそめるがごとし。世人これを愛してちまたに行かふさま、僧に一日の行脚あり。俗に一日の旅行あり。それが中に、鬢老たる人の月鏡なんど顔にをしあてゝ、籬のほとりのぞきまはるあり。わかやかなる人は嘲らめど、松柏の契りによせておほふ。此花ひとり年〴〵にめづらしきかたちを咲出侍れば、猶いくばくの數つもりけんと、千世經べき後の人のながめぞうらやまれ侍る。

「神無月は、春に似てうるはしく、花は櫻が枝にかへりて佛を見するとすれど、其色打かはきてさすがになやめるがごとし。夕陽はやくめぐり、夜たけなはにして、空行風枕にこたへ、木葉の雨軒にそぼちて、更に秋の寢ざめをうしなふ。

「霜は、木草みな枯せど、しろき事花にかはりて咲がごし。あるはとしくれぬる人のかしらをおかして、後の世のちかき事をしめし、あるは曉おしむきぬ〴〵には、しばし足跡をのこして形見ともなしけらし。又瓦に置ては鬼の顔さへけはひぬれど、行つかぬさまぞおかし。

「雪は、音なふして、夜もすがら降ともしらず。常の心に朝戸をしひらけば、そこらみな白妙になりて、木々の梢を埋み、あばらなる賤が軒ばも風情つきて、ふくら雀のつく〴〵とならびゐたる、ころもかしたき心地ぞする。又山〳〵を見渡しては、旅行人のさぞなるらめとおもひやり、あるは岡野べの松の一むらより、朝げ夕食のけぶりの細く立のぼるも佗し。

「霰は、松にたまらず、竹に聲もろく、地におちては米簸るに似たれば、すゞめ・鷄なんどのまがへて粥を費し

けるもわりなく見ゆ。消る事は露よりも猶すみやかなれば、詠めも又ともにいそがし。

「氷は、風寒き夜、水の面いつしかとぢて、日ごろの月の影も沈めず。朝な〳〵日影にうかめる魚のかしらを覆ひ、かへる浪なきとながめけん、志賀の磯邊の捨ぶねは、繋がずして行事なく、あるは世を捨人の庵には、筧のをとも絶〳〵になりて、事たるほどもかよはず。柄杓は桶のうちにゐつきて、柄を握れどもうごかず。あるはわらんべの瓶より出しもて遊びては、たゝく音かねのごとく、むかへばまた鏡のごし。とかくして年もきのふにくるゝあした、厚きうすきためさるゝおほん惠みこそ有がたけれ。水無月朔日はこれをはこびて上に奉るとなん。此例は千世万代も消る事なく、めでたき氷なるらん。

「千鳥の聲は、沖にたゞよふ舟の中の旅人、戀路にまよふひとり寝の枕、老たる人のいねがて、すべて耳にかよふ所、心〳〵に品かはりて、あはれの數はおほかりけらし。しかのみならず、汐のみち干を告ては、かの武士の譽れをのこし、加茂のかはらの川風には、夜たゞ聲吹流して、もろ人のねぶりを洗ひ、けふもくれぬる聲のうちには、あすしらぬ身のはかなき事にもうつりやすく、黒谷山の念佛ぞしたはる。是なん夜毎に人の心を殺してん、かの鳥のおこせるならし。

「火は、爐邊に春をまねきて窓に鶯の聲なき事を恨み、獨り雨間闇の中には、夜もすがら灰などせゝりて、やをら心の底をさがし、あるはかゞまる指を補ひては、筆とりて更行鐘のおもひをのべ、あたゝめし衣の化にさめにし心の奥など書つくしたるうさには、下にこがれしその比ぞしたはる。又むつましくみゆる物は、つま子取まはしたる火燵、あはれしらるゝものは、老たる人の火桶にもたれて、何おもふらんと見ゆるの。

「果の朔日は、子をもたぬ人だに、我もやがて臼にちなまんなど、ともに打いさみて、隣の餅にとぶきいひかたらひ、妻なき人はむかへん事をおもひて、顔まだしらぬ子孫をしたふ。又都のはづれ〳〵、此日より姥らといふもの出て門〳〵にさまよひ、聲ざまのぎやう〳〵

敷より、人の心も何くれとせはしくぞ覺ゆる。

「節季候は、いつの世よりか初りけん、實春秋のものとは見えぬかたちこそおかしけれ。手うちたゝきて拍子よくそろひたるに、物などいそがしく荷ひて庭通りたる人に、間ぬけのしたるもかた腹いたき。

「煤拂ひは、人の顏みな埃におほれて誰とも更に見えわかねば、聲をすがたに呼かはすもおかし。又置所わすれて日比たづぬれ共、見えざりし物の出なんどしたるは、我物ながら拾ひたる心地ぞする。

「餅突は、家〳〵に其日をたがへず、けふはあすはと親しき人〳〵行かはして、とり〳〵賑ふ中に、老たる女の例しり顏に下知なんどしたる家は、物こもりてみゆ。又おさなき人の柳が枝に餅むしりつけて、花と見るよろこびこそ其むかし戀しくは侍れ。

「としの内にも春たつといへば、日影もをのづから打のどめきて、口もほどけぬうぐひすのおろ〳〵鳴出るぞ、折知顏にてやさし。人みなえ方に棚打わたし、くれ初れば新しきかはらけならべて、灯にぎやかにかゝげたて、目にさへ見えぬ鬼にむかひて、豆うつ人のつこと聲出せるにぞ、いづくかすみかなるらんとおぼゆ。又老らくのひとつ〳〵かぞふる豆の手にさへ、あまる齡ひこそめでたけれ。門にはやくはらひといふものゝ、よぶかたに立よりて、例のことぶき一口にいひながして、又はしりまはる心の內ぞせはしき。年もみなとに漕よする寶舟には、誰も皆いねづみたる眠りのうちこそたのしけれ。

「一とせもはやけふのみにくれよする日、世のわざしげき人すら爰かしこはしりまどふさま、しれる人に行かふだに、纔に半面を笑らひて物さへいはず、心みな常の所にをかざれば、むかふる人に行あたりて、もてる物のそむけるをも辨へずして、ひとつふたつ言あへるもあり。又かたはらには、いかにしてわが足踏てんやと、とがめ出たるより棄廣がり、手をしまくり、いかりのゝしりなんどして、時のうつるをだにわするゝもけうとし。家〳〵に松竹植ならべ、しめ繩とりつけて、例のくさ〳〵かざりたるにぞ、事いそがしき中にもけ

しき立て、春をそげにみゆ。又むつましきかぎりは大暮のとぶき行かはし、あるは又をけら求むる神の庭には、鈴ふる袖も實なまめかし。風のけしきも猶更過るに、化口いひあへる八坂の奥こそ、むかしおぼえてそゞろにたうとく侍れ。手毎に火繩かひふりて、いさみもて歸るは、あすの竈を賑しそめんとならし。人の往來もやゝ絶〴〵に、閨のともし火に枕うちかたぶけて、春秋のあらましをおもひかへし、又逢べきけふにもあらじと、かぎりなく名殘しらるゝ折節、明なば袖さゝんとかさね置たる衣のにほやかなるにぞ、心もやがて花にはなりける。

旅

「門出したらん日、行人・とゞまる人ともに打いさみぬれど、見送り見かへりなんどしたるは、心にかなふいのちならばと、相おもふほどこそわりなけれ。住なれし里の木立は行にまかせて梢をかくし、跡しら雲の八重にかさなりては、めなれし山も埋みぬれば、心へだつなとおもふばかりこそかなしけれ。春はもろ鳥の囀に物なつかしく、あるは遠山のしろく見ゆるをも、雲か花かと心をつくし、夏は郭公の一聲に雲の行衛をしたひ、あるは木蔭に立休らひては、汗吹風に袂をなぐさめ、清水ながるゝ道の邊には、心をすゞしめて時をうつす。秋は又名もしらぬ草々に花をむすびて、遠かりし野路澤邊をだにいつ行としもなくて過ぬ。あるは又夕日程なくかたぶく時は、やどるべきかたもおぼつかなくて、野にゐる人に打むかひて、道の程たづねなんどしたるに、遠くいひなしたるはにくし。時雨の比は笠の雫も定なくて、日影ながらに身打ぬるゝこそうき物なれ。雪はなをつらくもふる物ながら。木々の梢しろ妙になりぬる時は、吉野・初瀬のこしかたをおもひ出して、旅の心を慰みけらし。晝の程はまぎるゝ事もおほかりけれど、なじみなき枕に夜々の寢ざめをかぞへみれば、あるはきぬたの音・更行鐘・川の瀬のをと・千鳥の聲・海ちかきやどの磯打浪の聲、風の氣色も更て行雁がね・雨しめやかなる軒の雫・かたすみにて綿つむぐ音・上手に申念

佛の音聲・さも佗しげなる犬の長吠、はる〲來てはやどりかはらぬ空の星さへ、影あはれにおぼえ、何につけても古郷の便のみおぼつかなくて、人やりならぬ道をうらむる折ふし、我國人のかへるにあひては、文たのまんと筆とりたれど、またせて時うつすべくもあらねば、心の程あらましにも書とりがたくて、物にもなやまで爰までは來ぬるとばかり、かひしたゝめて、やがて又わかれ行こそほいなけれ。なを行〲て心あてなる國に入ては、きのふけふうる〲しかりしも、人の心に鬼なければ、いつしかなじみ付ておもしろき事・おかしき事にふれては、人なみに興を催すにも、古郷の事のみ心の底に有ければ、慰むわざもみじかく盡ぬ。又かへるさにをもむきては、ひと日〲國のちかくなるにまかせてなをとけしなきに、道をそき馬やとひたる程、腹だゝしき物はあらじ。やう〲かへり着なんとしける日、我岡のべの木立なんど見え初るこそうれしけれ。笠破れ杖みじかく、色さへ黑ふおも痩、麻の小衣うちしほれたるに、つま子出むかひて、とぶきいひあへる中に、なみだぐみなんどしたるは、いつかはとおもひしだに、まち得たるうれしさあるは、うからん旅のあらましなどをしはかりての心ならめ。童僕よろこびむかへ稚子門にまつといひけん心の程は、國こそかはれ。しばしが內は夜〻の寢覺も旅のこゝちにまどひぬるを、窓・天井より心づきては、我宿なりとおぼゆる程にぞ有ける。又悔しかりしは、日ごろしたひたる名どころだに、或時は雨にさへられ、あるは日うちかたぶきて泊りをいそぎ、歸さにはかならず立よらんとおもひて過ぬるをも、古郷のかたに打むきては、一足をだに費しがたくて、又來べき折もあらめと見殘したりしも、終に行べきよすがもなくて、としふりなんどしたる後の心こそ口惜けれ。

戀

「心は法界にして無量なる物ながら、一念まよふ所は、大河の水の纔なる蘆によどむがごとし。さればまだみぬ人をも風の便に聞しより、などや忘れがたく思ひ、或は

筆のかたちを見ては、やさしからん心をしたひ、あるは芦垣のまぢかきあたりに休らふ折ふし、きよらかなる物ごしを聞ては、水などこひよりてすがた見むよすがを求め、あるは又道行ぶりに、しとみ格子のうちより顔さし出したるを見ては、ほとりの家に立よりて商ふ物の價なんど尋て、與所ながらかの家の名をとひて過るもあり。あるは花見る比ほひ、あるは又神に佛に詣めく日、色よき女の出立たる中に、かりそめにおもひかけては、添よるべき便もがなと思ふ折ふし、俄なる村雨なんどしければ、傘のやどりをもてより、あるは又火繩たつ物さし出してうつしもらひ、或は近きかたの道をしへなんどしたるも、こゝろづくしのはしなりけらし。それが中に、うしろすがた人にすぐれたるを見て、姿かしこつきまとひたるに、行ぬけてたちむかひたれば、すがたには似つかぬ顔に興さまして立のきたるもおかし。あるは又いはぬおもひにこがるゝ身の、人なみに交りなして折まつ程の久しきにも、何かに詞うつりて、われおもふとはしり顔なるもうれし。又片陰にて紙の皺をしのばして、しのびやかによみなんどしたる風情は、まるめて捨置たる文のおぼえもうれし。あるは心にあまるおもひにふしては、佛たのみ神に申て打祈るさま、人にむかひては中〳〵えもいはれぬまでを、物いはせ給はねばとて心の底うちあかしたるも、をろかにておかし。又人しれぬ通ひ路には犬さへあやしめて、宵〳〵毎に胸さはがしく、打もころじつべしといひけむ、何がしが文もおもひあたれど、喰ふ物こかしやりて、尾をふるまでに飼つけなし、あるはけにくき關守に物あたへなんどしたる、心づかひこそいそがしけれ。誰とはしらぬ人の例の時をもたがへずや、竹吹てとをりたるは、今宵もまたあくがれ來ぬるとしらせ顔なるしのび音ならん。鴫の羽がきとよみけんにも、おもひたぐへてやさし。星のあゆみもはるかにかたぶき、空吹風も音さびわたりて、籬のほとりに立休らふ程、與所の砧も聞ゆる比ほひ、ねやふかくしのびやかにきぬのをとなひしければ、それぞと心もそゞろなるに、いかに久しく待ぬるやと、袂引ゆく手も打ふるひ、ねりの

村戸をさぐり〳〵て、身を横さまにひそめ入ては、音せぬまでに跡さしよせ、物さへいはでため息したるも、心あまりてうれし。寢てこそとけめと枕打かたぶけしに、灯遠く置たれば、顏ばせのほのかに見えて、さしむかひながら床しき心ちぞする。とし月つれなかりつるこゝろづくしなど、うらみまじへてかたりたれば、いつはりおほき人の數にやあらんと思へど、いつの文より心ひかれてとばかり顏うちあかめたるも、こと葉おほきにはまさりておぼゆ。耻らふさまもなどやうちとけ顏に見ゆれば、心にもたぬ人のうはさなんど、いひたはぶれたるに、息みじかくかよへど上にも見せず、腹たて初るよそひこそうれしけれ。あるは又ちかきあたりなる女をこひて、文かよはしけるに、いつの夕かならずと聞えしよゝ、指の數さへ心ひとつにくれかねて、空打ながむる折節は、雨くだすなとたのみをかけ、あふ夜まつ心の程は人こそしらね。やゝその夕になりては、入相の鐘につねのあはれもなくて、いさましくふたつみつ螢とびかふ宵闇には、つたひ來ん君がもすそのあかりせよなど、あらぬ事のみ思ひあつめて、まつ心こそたのしけれ。千世をひと夜とかはす枕は、まだ宵ながらこと葉のこりて、あけぼのいそぐ鳥・鐘の聲におどろかされて、又いつかはといひし名殘もむせるばかりに、起わかれては沓にしかるゝ草引おこし、そむける籬をつくろひなして、ゆく影うしなふ窓の内には、髮の香殘る枕ひとつこそかた見なれ。又寢の夢の覺る朝は、何につけても心そまねば、野に出ては山うちながめ、川のほとりにかひつくばうては、水の行衞も物なつかしく、そゞろめきたる風情ながれにうつりて、我影ながらすごく見ゆるも淺まし。あるは又ちぎり深かりし中だに、與所(よそ)に心のうつりなんどしたるは、舟車にもつまれぬばかり腹だゝしきにも、おもひつくせし事のみかぞへて、こゝろひとつのむかし戀しき我ねやのうちこそ侘しけれ。

祝

それやまと哥は、天地ひらけ初しより、地の花の天には

じまり、天の月の地にすめる、天地和合の大道、たどちに詞となりて、神を貴み君をあがめ、世を治め身をおさむる道とはなりけらし。春は先梅かざすより、桃の雫の盃にしたゝり、あやめふく軒には、のぼり・甲なんどを立ならべて、よこしまの氣をしりぞけ、菊の白露は淵となるらん、いく世のするゑまでをいひとぶき、一陽來りかへる比には、おさなき人の髮を置そめ、袴着初なんどして、神に詣せんとて出たちたるを、老たる人の杖に肱かけて、見送りゐたる心の内こそたのもしけれ。四海浪しづかにして橋わたさぬ道もなければ、往來に足をだにぬらさず。かくおほん惠みふかく、治る國のためしには、民くさ打うるほひて、俳諧の連ね哥をつらね、なを万歳をうたひて、人皆鶴龜の齡をしたふ、かゝる御代こそあふぐべけれ。

右二帖者、年比思ひ寄たる事ども、寢覺〱にかいつけ置侍りしを、あながちに乞によて、千及市貢にあたふる者也。

鬼　貫

跋

古曰詩經變爲楚辭、楚辭變爲唐律也。我國和歌有長歌短歌旋頭歌泪連歌誹諧也。乃隨世變也。如誹諧自本歌若論之則野也。然其實不野也。今鬼貫誹諧非野語、乃實語也。淵明詩有達磨骨髓、則誹諧亦入其妙處、則蓋到古人和歌佳境、其可得乎。余閲鬼貫獨語集、其詞絶妙而有味焉。我以謂連歌宗祇宗長得妙、誹諧鬼貫獨得妙言者乎。勉旃。

享保戊戌佛誕生日

紫野亘妙子書于淸源南軒　印　印

建仁寺町四條下ル二丁目加賀屋
京都書林華文軒　中西卯兵衛藏版

いまみや艸

來山著

誹諧いまみや艸

湛々翁来山

菅神御自愛のしるしとして、さながら靈ゝたり。

うぐひすに問めや梅の假名づかひ

三味線も小哥ものらずうめの花

座論梅といふは、蘂ひとつに花の輪五つづゝさだまつてふくむ。さるから實のなるもむべなり。五花よせて常の大キさ也。

一時に散身で花の座論かな

木も艸も唐めきたる、むつかしきものとは古人もいひし。

梅のはな名によびよくてにほひ哉

住吉

若みどり神の濱松ひねたれど

若菜うど

おもたくと雪つけてこいわかな賣

香を持て堀おこさるゝ芽うど哉

さればこそ人は無能なるがよし。多能は君子の耻る所とも見たり。鳥けだものにてもいはれぬ藝する故に、くゝりまはされ、籠にこめられて、一生呵嘖にあふぞかし。

いひ蛸　ねこ

飯蛸のあはれやあれではてるげな

兩方に髭がある也猫の妻

ちよつとは雌雄見わけがたし。恵比須どのと大黒殿とは、女夫とおもひつめし尼あり。いふて聞せても合點せず。兩方に髭のある序に、ふとおもひ出して爰に書。

田にし　土筆

やはらかな水に角琢く田螺かな

つく〳〵したけたは誰も手にあはず

此くさのみ、ものかゝぬ人の塚にも、生らんとおもふもおかし。

長柄

陽炎にむらなしどこか橋所

わづか三里にたらぬ所ながら、旅の心地せられて何もか

もめづらし。

むしつては〳〵捨春の艸

くろい蝶あれでも花にめづるかな

木ひとつに花と櫻と咲にけり

花ちりてよい古び也一心寺

高砂の塩竈を見て

いづれとも雨のしほがま雨の藤

ひがし山にて

九重もなら茶がはやるさくら咲

朧月　はる雨

今更に土のくろさやおぼろ月

春雨やもらぬ家にもうどん桶

田うへ　杜若

早乙女やよごれぬものは哥ばかり

咲中に紫ばかりかきつばた

立秋

秋たつやはじかみ漬もすみきつて

女郎花　あさがほ

雨風の中に立けりおみなへし

朝皃やむしに喰るゝ花の運

龍松院の大願は、今かしこき御代の仰事をうけて

春日野に釋迦の案山子は笑止也

ひたすらはぎにめでゝ、庭に移し植たるを訪ひて

萩さかば鹿のかはりに寐に行む

野分

行衛なき雲に組して野分かな

むかし〳〵と腹の立やうな風なり。人のひが事するに付てはたくまず出くるなり。是を千腹の虎といふとかや。

重陽

栗の日や椎ももみぢものりこへつ

五位・六位の藏人勤るかぎりありて、のちに地下になりたるはわびしきものとや。さも社おもひやらるれ。惣じて人倫のみにあらず、調度喰ものゝたぐひにつけても、其ときにあへば、おのれがほにはえ〳〵敷ぞ。

憶自他

酒買にあの子傘かせ雪のくれ

鷄旦

ふるとしのあした、大直しの一句をもうけしより、道のひかり普くして、うちそとものよく足り。ことしまた願ありて望ありて。

蓬萊に熨斗の高橋かけまくも

あら玉椿ひがしから照

春霞晩にはもどる旅をして

悼晋子

金鐵の圍みをなしてものがるゝに所なきは、定らぬ世の定なればさらにいふべくもあらず。只其人のいさをしをしたふものから、武江におゐては晋其角、そのほどならぬ年より道に生れつきて、高き名ばかりを世にのこし、ことしの花にさきだちぬるよし。惜むべし〱。誹因のあさからぬをしつて、稲津氏のもとへとて責てに申つかはしけり。

霞けり消けり富士の片相手

涅槃　しほ干

寐姿を佛の趾やけふ迄も

海士の子の神子町に行汐干かな

もとよりけふは浦〱のいとなみもせず、すみよし・天王寺のかたにむれ〱たり。

葛井寺

むすび逢や花のかづらきふぢゐでら

追善之詞

落月庵とよばれて、遠くも慕れ、西吟と名乘しては、ちかくもしたしみ、年老の誹哲、世人よくしれり。此春の花につれだつ余波も、とし比のちなみ、おもひわすられず。

今までは所の名なりさくら塚

衣がへ　時鳥

袷出せ花さへ芥子のひとへなる

きつれ川をわたりて

宗鑑が詫宣かけよほとゝぎす

端午

幟出す南はせかず和田恩地

立秋

宵に御輿の海よりかへり入(いら)せます賑ひ、數千萬人の供奉參詣、扨こそ夥しきみそぎなり。余波を今朝にうち見やれば、さながら秋は爰らほどよりと、おもひよるさへなまめきたり。

來る秋やすみよし浦の足の跡

悼箏珉子

孝子潮白にわかれ初てよりは、ひとゝせにめぐれども、其時の愁は、老に煩をそふるものをしらずや。

手なし坊又もや秋のたつか弓

名月

こよひの月小笹へぬけた人とはむ

重陽

けふの菊に袴著て來る狐哉

明ゝ百草頭

しかしながらあへものゝ比にはさらにまじはる。

唐がらし茄子にあけ(朱)も奪れず

貧家にうたゝれて、

宿老に夜番の供やしぐれ降

絶景に秀句なしとかや。其時のそのまゝ。

古火燵また足はさむわかれかな

僧ひとり師走の野道梅の花

李天が集

有非の情はえならずとかや。されば風聲水音おのづからなり。鐵石もまたうてばかならず響く。花雪のたぐひは、景色のうるはしきにむかふて、人のおのれをわすれて欣笑す。なんのなす事ぞ。

是はとは朝戸〳〵に雪の聲

歳暮

としの瀬や漕ず桙せず行ほどに

傾婦に寄す。

鰤の腹廣し文箱の入レ所

試筆

舊臘三日の五更、夢想あらたなり。幸の事にして鷄の旦の一句に祝す。

御蓬萊や升の中から山が出る

をこと社よけれ家の薬子

巻柱綿で包めばあたゝかに

いまだに余寒つよきは是潤年のたのもしさ。

蛙〱土のけて見ん歌の種

彼岸

精進すなといはれし親の彼岸哉

蕨

山を鑄て銭となし、海を煮て鹽をとる。此一莖もそのたぐひならん歟。ことに秋田より出るを最上としてその問丸に彩し。

むらさきの塵編干て小判かな

竹子

そのものにして其ものをそこなふ。

竹の子を竹になれとて竹の垣

餞別

乾氏のぬし、ことし其君に招れ奉りて、富士見る旅に趣むくのよし。わざとも關の秋風に吹れに行しなどおもへば、こや浦山敷首途なるものを、

道ゝの涼しさ告よ土用東風

立秋

天地平等人壽長短

秋風やことし生れの子にも吹

神岡本納

早稲遅稲皆こちからのしむけなり

歳暮

大坂も大坂、まん中に住て

お奉行の名さへおぼえずとし暮ぬ

年内立春

日を八日馴染ほどありけさの春

題道成寺

上河原の水かさまさつて、くれなゐの前だれ翩翻たり。

花の闇わる銀もつておつかける

追福

其角〱、いづこの空にかあそぶらん。七とせあとの夢とはいへども、面影更にむかふがごとし。

名の花よ彫ず刻まずいつまでも

春興

垣の内外におなじ色をみだれたり、花の心をおもひやりて。

かいま見る山吹ねたむ菜種かな

在所めづらしく、あらぬかたまでさまよひまはりて。

水ふんで草で足ふく夏野哉

藪の中に一かたまりに咲出たるもめづらしく、

萱艸の花とばかりやわすれ艸

としのくれ

風雅はおのづからの業さもなれば、問にこたへもこそすれ。

年のいそぎ書とむなしや只の状

君子は器ならず、おもしろのありさま、

角もたぬ石ぞころ〱としの波

酔て井筒屋が高樓にのぼる。

楊貴妃や踏皮までぬがすたいこ持

餞別

はりまより信濃へ、所替して行るゝ仕官のもさへ

ちる花や雪の稽古を馬の上

女人形の記

西行法師に銀猫を給ひけるに、門前の童子にうちくれて通りしとかや。いはゞ躰あらめ。我は道にてやきものゝ人形にあひて、懐にして家に歸り、晝は机下にすへて眼によろこび、夜は枕上に休せて寐覺〱の伽とす。世を見れば、藷木の達磨などを崇て、科もなき身を白眼つめらるゝよりは、はるかにましてんや。ものいはず、笑はぬかはりには腹立ず、悋氣せず、蚤・蚊の痛を覺ねば、いつまで〱も居住居を崩さず、留守に侍らん心づかひなし。酒を吞ぬは心うけれど、さもしげに物喰ぬはよし。白き物ぬらねばはげる事なし。寒暑をしらねば此方氣のはる事更になし。夏はむかふに涼しく撫るに心よく、冬は爐のもとをゆるさねばよいかげんに暖なり。女の石になりかたまりしためしをおもへば、石が女に化すまじきものにもあらず。ものにあたらずば、千とせをふとも變ずまじきかたち、風老がなからんあとの若後家、さりとも氣遣ひなし。身は何國の土工

ぞや、出所をしらず。あらうつゝなのいもせものがたりやな。

折事も高根の花や見たばかり

牡丹の記

梅に櫻にさからはずして、其比も程よく、高からずひくからず、木に咲て草の名をとり、紫紅と蓓ては青白と開き、其靜なる風情、是なん花の富貴なるものをとりこせしもむべなるかな。假初にも古沓・古袴にてむかはむは、花のおもはむ程も社なれ。むくつけは更なり、道心者やうのやから切花にして引提たる、いと口惜し。三世の佛に花奉るとよみしに習ひて、其儘にて手向よかし。馬上の使ひ人、あるは大振袖のなよげなるが先にたちて、文箱に持せ添たる、いかなる詠を封じつらむと思ふさへなつかしきや。深見艸とは淺からぬ謂にや。廿日艸、聞づらし。さなきだに散比を思ひ煩ふものを、馬紅・天香・醉西施、それもこれもむつかし。ぼうたんとかけるこそ、やまとめきてひとしほめでたけれ。夕日を洗ふ打水には

そこら涼しく、いはゞ華清の湯あがりとも、おもひおもはれて、

　ものいはゞ人は消ぬべし白牡丹

盃の記

本町のかみなり伊藤小太がのこせし大なると、小なると、爰元屋が酒道樂、清四がうかむ瀬、是等は難波津の名盃にして今もなつかしきに、好人春家子のもとより懇書に一器を添られたり。見せばやな摺鉢のいたいけしたるなり。そとは土色備つて碧々たり。内は朱ぬりに明々として、金の沃懸仕わたしぬれば、うつせの玉にむかふがごとし。さればこそ雷盃ともかければ、我はそれによりて小神鳴と稱號して、左をはなたず、老樂の第一とするものをや。

　四日の月ゆふだち雲のはれ間より

夏夜草庵の記

ことし此夏今宮といふ所に、提てものく（退）べきほどの休み所をもとめてし。よはき足には道のほど、すこし隔りたれど、心のおもむきにまかせ、おり〳〵竹杖を嘶ス。こよひはさらにとて、ひとりふたりさそひつれて、まだ日高きよりうかれ行。西は海ちかくして地よりも浪高く、其前は民屋所々にたちつゞきたり。入日をあらふ沖津しら波、とよみし名古の浦は今の木妻村とかや。時と代とうつりかはるもあはれなりや。住吉浦の夕ばえ、中々えもいはれず。漸として其所に膝行あがりつゝ、蒲のむしろ・繭の枕、寐ながらの遠見、東南は雲をこすつて山林・野村一目にたらず。つゐ手の届く茶臼山、一心寺の入相は常にもしたふものから、月待暮はひとしほ待久し。安井の聖廟木の間に森々として、茶臼山のかけ造りあけはなちて心よし。新清水の欄干には亂舞糸竹の音こそ聞えね。家々醉賞の最中ならんと詠やるもものめかし。下寺町の藪だゝみ（も）いつしかに白壁になりかはりて、門〳〵高くつゞきて樓々櫂々たり。まして市中の繁榮、心ある人に見せばやな。それでも老は昔なつかし。

　名月や耳の山かせ目の曇

古梅園編集跋

世に墨筆の至寶たる事は、更にいひ出るに及ばず。和漢の傳來、歷代の數量迄、和泉掾が前書につぶやかに記せり。是をおもふに、より〳〵上ざまの御事なんど調奉るの家に養はるの謂にや。まだ若年の比よりやさしくも敷嶋の道に心をよせ、なかんづく誹諧の一躰を好て、花に醉月に醒、近きはまじはり、遠きは所縁にたよりて、まとに願ふにかたき高吟をはじめとして、一句〳〵を乞もとめ、ひめ置事良久し。是を人にも見せまほしけれど、家の業弘るに似もすれば、耻がましとて退ひて呫・管見ゝゝ、山も月も人口より出るとかや。題によらずんばいかんかせん。今にして止事あらば、金玉を埋み捨るの罪すくなからんや。幸すん所も名に高き椿井、なを此のちの代〳〵かけてかはらぬ色をとぶき納て、風老がとつてもつて、むかしの水と題號せる事しかり。

汲溜て玉に聲あり花つばき

若葉の比跋

なら坂や小坂氏の梅七、ことし東武につとむる事すみて秋の末歸郷のよし、さればこそ心まかせの旅すがら、さらにゆかしき人なるをや。さのみのいさをしもあらねど、自然の風雅連に通じ、誹に達し、八重に一重に花櫻、古き都のひかりをかゝげ、頃日の好士と世人よくしれり。任他厚餐したる能因法師、名のみしら河、問に及ばず。

闘照や紅葉にかこむ箱根山

剃髪の賀

宗祇の蚊屋に三年とは、古くもいひ傳へて、是等さへおかしきに、ことし稲津氏のぬし爰古里にのぼり來る序、早雲寺に馬よせさせて、旅衣ぬぎもあえず剃髪のほゐをよろこび、石上に座して一偈をつくつて陽ゝたりや。まとにたくみてもたくまれまじ。風情〳〵。其因緣こそゆかしけれ。

旅櫛笥あけてゑむらん神無月

正德四年歳旦

時こそ至れ。出生舊地の浪華津をはなれ、今の今宮に幽居をしつらひ、しばらくの齢を貪る。しかもことしは古稀にかへる春をとぶきて。

花の春命に杖や束うけ

せいぼ

のがれ出し市中のかしましさ、更に今宵ぞおもひ出る。足を空にのゝめきわたり、小路・裏店まで、てうちんの行かひ、それも又半時にかはる大仕組、家〳〵の春風太平をうたふ。

揉にもむ哥舞妓の城や大晦日

桃日

無才無能にして六十一歳、酔を常にして鼻もひかず。

桃の花けふより水をさかな哉

誹因をおもへば、四十年來尋常ものにさからわずして、禪に終を遂られし山平老人の影前に向て、其事かの事更になつかし。

有の無のといふ間も何も夏の月

良夜

酒硯去年にもこりずけふの月

寐あまつて又見る月や老の勝

今日〳〵是非に及ばず。

今宮は虫どころ也聾也

十日菊

菊はかへておなじ女良ぞめでたけれ

六字詰の念佛晝夜怠らず、十二時の鐘聲、遠近の心耳をあらふ。

時雨るやしぐれぬ中の一心寺

初雪

こゝしもまちかねて

花とよむ雪につぼみはない事歟

梅七子のもとへ

嘯ば時雨に香あり菊屋酒

正徳申年鶏旦

嶺の松調子揃ふてことしより

十三絃を潤年に表して

病中の吟

たゝみながら見やつたばかり衣がへ

せめてけふは障子あけはなち、
しばらく脇息にたすけられて

木も草も八日めきたる若葉哉

おもはぬ空に一聲の聞えけるな

はづかしや醫師待身にほとゝぎす

又どこやらに、あどなきこころ
ありて

色に香に江戸せぬ武士や花いばら

田家

古沓やくだいて入る爪（瓜）作り

寐あまるに老の常

雨戸越す秋のすがたや燈のくらひ

先師來山翁、まみえては風月のひかりをつたへ、便毎には金玉の響を贈りめぐまれし幾とせの花の詞、爰奈良の葉の三たりが許に茂き儘をひめおけるに、ことしかなへの耳を持合せて、只其輸をたくましうせんと、年序の前後にもかゝはらず、編ともなくかきつくれば、おのづから風躰のおしへ艸とはなれり。さして他にひけらすべき事にもあらねば、とりあえず今宮艸と題し、名古の入日のあかりをしたひ、此門に遊ぶ亀の鑑といはむもむべならんかし。ころは享保きのえ寅仲の秋、南都門人無名園古道・古梅園長江・金英舎梅七ともに跋す。

家石笠　峰紫　翠邊

十萬　堂　門葉

安永七年戊戌正月吉辰

大阪書林　心齋橋久太郎町　河内屋喜兵衛
薩摩堀東之町　金屋喜右衛門

續いま宮草

上・下

來山著



蓬莱山上鶴舞〳〵

瀧九つゞ

壬寅三春

南海僊三宮日八十二翁書





むかし〳〵我里に、湛〻翁といふ人おはしけり。いまぞかりける時、ひたすら世をかろきものにやおぼしなしけむ。提てもなど聞ゆる草庵をしめて、花に笑み月に嘯きつゝよく遊びたる人也。常には繪がける維摩居士を友として、世には立交はらずおはせしとや。其髪かたちのおのづから相似たるとは、鬼つらがいひしごとく物に見えたり。俳諧の句〻其妙境にいたれる、あまねく人のあふぐ所なり。さきに奈良人誰〻が編る今宮艸あり。其末に云を見れば、わざとに撰びなせしものにあらず。彼誰〻が許にありしのみを、ひとつものにかい集めて梓せしかば、はた人の口に傳へたるも漏ぬべきことわりなりける。こゝに翁が四世の孫に、小西什山子といふがおはしけり。翁なくなりて三世がほど、農事を業として怠らず。我里長におしなべて、棟高く造られたる人也。かく榮えおはすには、文ぐらの物の世に落散べくもあらずて有を、をり〳〵乞て見るに、今宮草はやゝ其三つがひとつばかりにぞありける。いとあたらしくおもふは、我のみならでおほかるを此度すゝめたちしに、かねてのした心にやおはしけむ、とみに一卷のものとなして世におし廣めらるゝに、是をものして是が端に物書べしともとめらる。我その任にあらず。されど軒ちかき朝夕の友の否むべくもあらじなど、いふ人もおはすまゝに、只あからさまなる筆して書しるし侍る。かつ書の名を續今宮草とよぶべくさだめけるは、彼奈良人の志を繼ていとよろしとやいふべきか。或人評すらく、翁が風體其旨とするや、梅翁を縦とし芭蕉を衡とす。難波のはいかい此人逝て後に人なしとなむ。此言のよしやあしやいかでさだむべからずとも、又時に媚ぬ人の高き心ばへなりかしとおもふを、こゝに擧て贈るといふ。

于時天明二年の秌八月のはじめ

松濤齋の窓中に

李狐しるす

[孔押]

凡例

一前に出たる今宮草に漏たる句ゝ尤多し。此度家に購めたるは其數を盡して梓行す。但前編に詞書を漏せるを二三句、末に重て載るものは、其詞一句一字をもむなしからじとてなり。

一翁が作、他に落散たるも其眞跡なるを審にして相加ふ。且世にかたり傳へたるも、詞・てにはなどの違へる彼是見えたり。又他人の作としてしるせるも有。今悉く眞跡をもて正し擧。但し翁の眞跡を得て寫すといへども、其字様を撰するにあらず。或は醉中即興等の句には、間其言葉脱し、假名違へるもあれば、つとめて校正を精くして清書せしむ。尙わざと撰びたるにはあらぬ事、前編に擬するのみ。

一泉石といふ人、交遊のちなみ有て翁の句を拾ひ、拔粹せしものあり。其撰必ず美盡せりとにもあらねど、間又評を得て作意を助くるものあり。依て是をも二三採て、此卷の光を増ばやと也。泉石は何がしの鴻儒、俳句をも玩ばれて此戯れ有しとぞ。

一翁沒後、高名の詞客の追福の句を附錄に載す。交遊の追慕の深かりしをしらしめむとなり。

續いまみや艸

湛ゝ翁 來山

歲旦

元日やされば野川の水の音 泉石評 百尺竿頭進一步。扨も〳〵奇妙なるかな。

端午

軒甲人にうしろは見せざりけり

重陽

けふ明日を千代の一瀬や菊の淵

歲暮

暮て行年の冠や半白髮

鷄旦

三千世界もあそぶにしかじ。只おのれをかへり見て足事をしれと社。

花の春宿の都路筑紫船

梅も無塩も南から飛

鷄に雉もいつしかなれ〳〵て

歲暮

其位に至らずしてその德をしらずとかや。さもあれわか

い衆、眞直な事申べし。

年わすれ十ヲも十五も兒を見て

夏風や粉糠だらけな馬のかほ

むしぞ鳴あのしはぶきはまた隣



細工箱を母に見せたる火桶かな

錢買の花にまじるも都かな

いつからの眞桑詞ぞ一かしら

名月や草とも見えず大根畠

泉石評 情ある詞かな、さてもいたいけ。

屋ねうらに虫の音寒し辻行燈

元日

蓬莱の晝ぞ雀の起る時

人日

冬年の聲賣戻すわか菜哉

泉石評　いひ手やかはる。きゝてやかはる。折節しうつかばや。

むめ　鶯

野や里や梅見るまでは落つかず

日とひ〳〵梅にうぐひす嬉しやな

春興

見かへれば寒し日暮の山ざくら

散花にねてゐて蝶のわかれ哉

人の目にあまるものなし山ざくら

法躰のとぶきにつかはす。

山鳥の帶せぬなりやさくら咲

春雨

春雨や火燵のそとへ足を出し

無二又無三

花いけてそこに丸寐や刀鍛冶

蘆雛　蛙

されば社とがりもとげず蘆の角

何の役にたゝでつらるゝ蛙かな

菜の花　ふぢ

旅行の吟

野の花や菜種が果は山の際

野田越て北の藤なみ寺の松

春を惜しむ。

鴈啼てものに味なや花の頃

衣がへ

更衣まだ朝晩はかへぬなり

田家　ほとゝぎす

あかねさす日にあらそふや藍作り

ほとゝぎすまだ夜着入れる蚊屋の中

端午

頼政がはね落したり菰ちまき

無音せし人の許へわすれ草をおくるとて、花の科に言なして、

せめてさて人の氣にあへわすれぐさ

住吉奉納

かぎりなや蚊までもそだつ海の上

納涼

是ほどの三味線暑し膝の上　泉石評　まことに〳〵あつし〳〵。

うら道もなき裏ずまひ、そのくせ人は重り合ふて、

蚊ふすべの中にこゝろあり念佛講　同評　冬きいてもあつくろし。

夜通しに京に行。

玉鉾の道の月夜や花あふち

淀川のなかて(ほりカ)

夏柳水よけの櫛まばら也　櫛の字杭敗。但し水尾くしの縁語によろか。しからは串の字なるべきに

二星

産着かして星がいもせのしるし見む

胸痛しきりなれば、何をまつ身と

なかしながら

魂まつり身は養生にこもりけり

盆の吟

乘掛で踊の中を旅出かな

良夜

はづかしや十六夜まで二ごゝろ

露にあたなるなおもて

萩が枝やあぶなき月の住所

田鼠化してうづらとなれば、貧者のむすめ傾城となる。

されば爰に、

まねくたび人になしたきすゝき哉　泉石評　野中心中踊もそなれど、しかとかうは、えおぼえぬに。

齊文身の事にてはいはぬぞ。

ひとりねや幾度夜着の襟をかむ

ひとゝせ二とせのほどを、なには津や渡邊橋のほとりに

すまひけるも、さらに旅泊の心しられて、

雪を汲てあかとは船の言葉かな　泉石評　いかにも〳〵。

さしの暮

かざれ〳〵明(日カ)にこそ年の都入

はひまとふ人にあひそや藤の花

東雲や西は月夜に夏の露

大空に雲なしどこをあひどころ　泉石評　七夕、翁みづからいふいはれぬ氣づかひか。

我寐たを首上て見る寒さかな

吹風を見よとて花の狂ひかな

蚤狩に賤が朝戸は暮にけり

玉と見て蜂の臺よ割石榴

かゞり火の中へ空しき落葉かな

花咲て死とむないが病かな

ほとゝぎすぬれて帷子ひとつ也

鬼つらに角ふるまへよ唐がらし

おもひこせ我も冬野の筆津虫

飯臺に竹箸を握つて、世を白眼て年來、それもはや、をかしからぬものをいはひて、老母によろこばしめよと、人のいさめも嬉しきとになりて、あらたむためともなく、

掛盤に顔見てとしの新也

しろ魚　鶯

白魚やさながらうごく水の色　泉石評 いふたりや〳〵。この句についておもへば、白魚といふ名さへくちをし。煮て後なれば也。白魚は只水いろにこそ。

小雨して竹にうぐひすなよ竹に　同評 此句さのみ巧もなけれど、何とやらん、つくし琴などにのせて、うたひぬべくおぼゆ。

春興

湯屋まではぬれて行けり春の雪　同評 風流也。氣味あり。

梅

白梅もつきそへば又にほひかな

山中鶯

覺束なあれうぐひすと聞つゝも

神明月次に

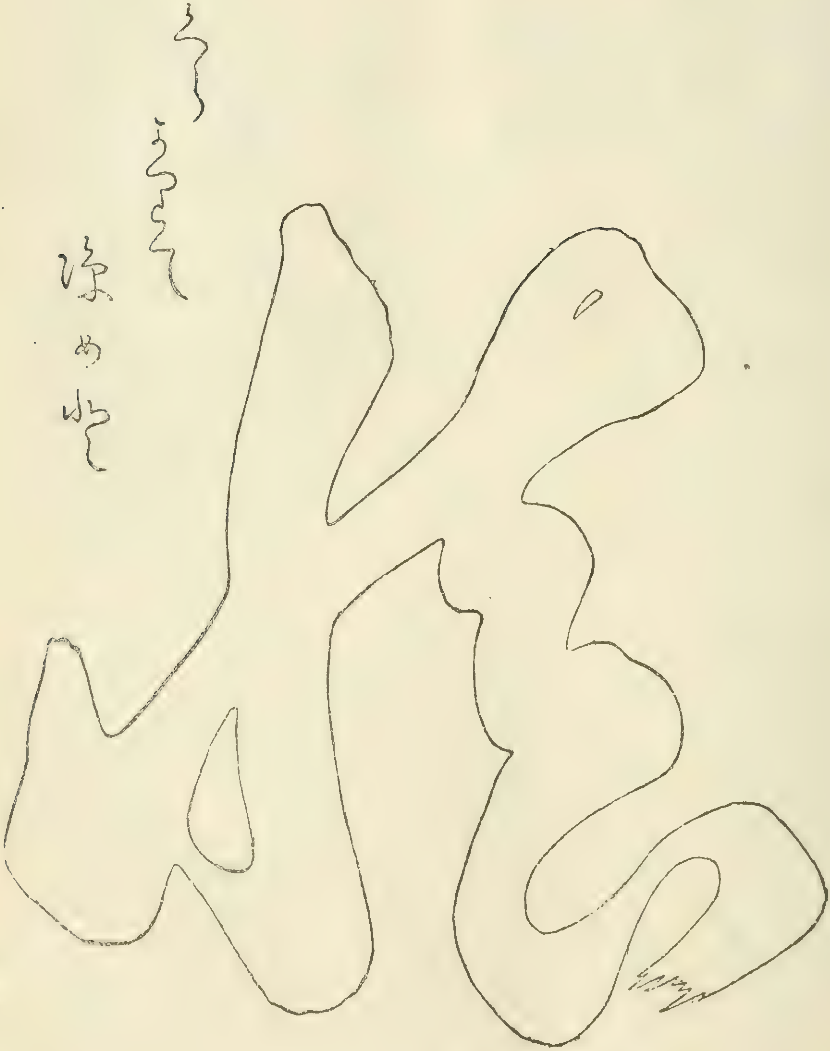
散る時はちるでもつたる神の花　泉石評 つれ〳〵書たる人さへこゝは迷ふたるに。

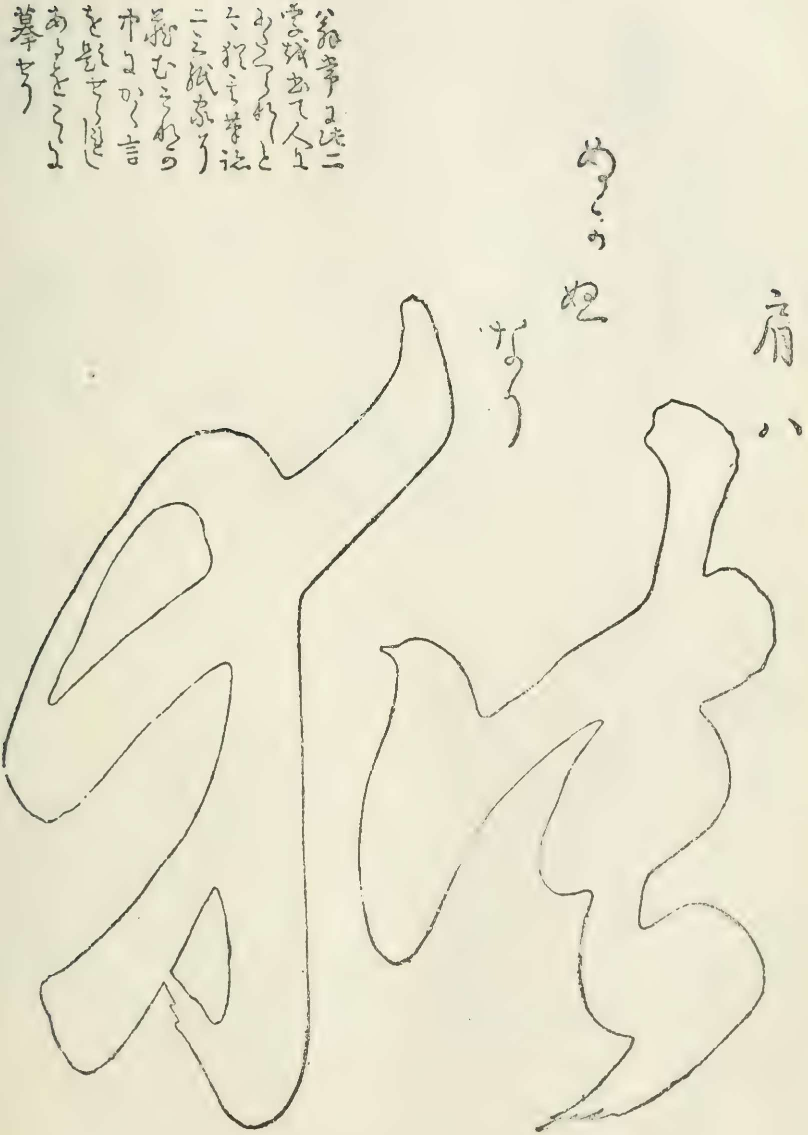
えむま堂に雨やどりして

ほとゝぎすこちもよつほど泣下地　同評 おどけたる事ばかり。

待戀

まち〳〵て蚤かく犬の戸すりかな





蔦の一鉢を得たり。めづらかなるものよなどゝ、女の童の問あへるもをかしくて、

　聞もつけぬ名はよびにくき水草かな

渡邊橋へのぼり、十歩にたらず朝暮還見。

　來る秋を帆にふくんだはどこ船ぞ

　　七夕　擶待

　星あひを思ふねざめや蚊屋の天

　擶待の茶碗ぬす人泪かな

　　蕣　　あさがほ

　身は老ぬゆびかまれたるきり／＼す

　朝がほや雨天にしぼむ是非もなき

　　鳴戸にて

　麗の音や渦にまきこむ山おろし

過し頃、三千風が行脚をうら山しくはなむけして、身のほどをいふとて、

　幾秋かなぐさめかねつ母ひとり

母に別れて後、大酔に及ばぬ時は、一日も夢に見ぬ事なし。機嫌よき時は其朝こゝろよし。さもなきときは其朝こゝろよからずして、せめてこよひのゆめはと、まちかぬるぞかし。

　今日の月只くらがりが見られけり

泉石評　高翁は母に孝、常に友なりしときゝし。此句且てもしらる。さても／＼、感心なる事かな。

鴻池何がしに誘はれ、昆陽の月見にまかりしに

片よつてあれは鴛なり池の月

古澤昔留を悼む。これはなげき入たる花ずきなりし。

菊栽て身の手向とはよもやそも

攝州福原

　歌仙

入月や幣にまねけば一しらみ　滋翁

　さや豆むしる野路の御供所　梅闘

苧絽よる其間の薄穂に出て　芦船

　末暑

しぐれ

又降はものうたがひのしぐれかな

むら時雨されどもものはそこなはず

雪月　雪鴻

雲水にあへられものや雪の月

白妙の橋に瘤あり雪の鷺

　藥喰

このいとし身をしかられて藥ぐひ

　歳暮

何をいふても老は身にひとつ〳〵。

行としや石噛あてゝ歯にこたへ

淨しゆん童子、早春世をさりしに

春の夢氣の違はぬがうらめしい

　歌仙

阿陽一棟哲才は風老數十年の誹因、たま〳〵對顏の時も例の一盞をさきだつ。

逢た時はなんにも夏の呼子鳥　湛翁

ゆたかな袖を轉る實櫻　一棟

あみ立る筏は水を相手にて　潮白

末略

　良夜

この宵や月人〳〵の氣を彩ル

年月つれなき女の愁にふかくこもりしを、さぶらふ男にかはりて

二色に氷らぬ袖のなみだかな

　試筆

神ごゝろりんと雜煮にむかふ時　泉石評り〳〵。見出し、

二月集、にくきもの〳〵部に

誰にやる破魔弓ねぎる道心者

　住吉奉納

浦の松帆に撫られて幾春か

　住よしにて

春の日に見よ半輪のはし（橋）の雪

　大無外　小無內

行月や朧は雪にしみこます

　春興

鳥も啼鐘は花よりとつとうへ

小座頭や花見ぬまでもよしの山

更衣

何所ひとつかたはでもなし衣がへ　泉石評 此氣は此日つきそうなもの

枕の集の出來るよし、かなはぬ身ながら



手枕にしびりがきれてほとゝぎす

夏柳　牡丹

しだれ〳〵柳にとゞけ苔の花

寐て牡丹さむればもとの胡蝶哉　同評 これらは翁が一躰の中の秀唱。豁物の至極〳〵。

端午

蒿の上、式はむつかし。

このあやめ軒にさしても水邊也

たばねながらにして、ものにつゝみたるなど、はえ〳〵敷にくからぬものから、

どれみてもゆびのならひの粽かな

竹子　竹婦人

うそ〳〵と子故の闇や竹の中

抱籠や一年ぶりの中なほり

こはた山を越るさてその勞をすくふ。

汗流す馬をおもへば歩行よりぞ

立秋

秋たつとゆふぐれ月やつひ三日

七夕

くらがりを牛引星のいそぎかな

初老

身ひとつに寒さはじめか年の氣か

獨居

秋風を追ば我身に入にけり

難波津のさかへ、大川小河漕ぬけるも一興なるもの歟。

行月や船で見る〳〵橋曇り

今宵はきのふより、わきてくまなかりしほどに、

けふの月小町が哥のうへを行

重陽

照菊や二名月の中とつて

十三夜

四時の農業おのづから満り。

末綿もふくや白きを後の月

悼二萬海一

萬海〳〵、夢なるを萬海、數十年のねもごろは人もこそしれ。一會滿座の一盞ほどよく興ありし人を、いかにしてこはざらめや。いかにしてわすれめや。

秋の月相文臺にむかひしも

孝子千舟子のもとへ、おろかに志を述て贈るものならし。

九月盡

年もはやあはれ明日より九十日

神無月吟

つれなしやまだ十月の暦賣

れざめ

わかい時見ぬ曉のしぐれ哉

わかき妻におくれし人の許へ言やる。

中〳〵に火燵が明て寒さかな　泉石評 けふの中〳〵なるや。

神明奉納

白くろの名のないさきも雪ぞ降

はかま着

袴着や子の草履とる親ごゝろ　泉石評 これを親の闇といはゞ、われは心の月といはん。くらきに似てあかし。

市中に隱士あり、隱士の中に、平思子ひとり幸にあり。

雪に留てそれよ梅にも手が屆く

わがすみかは遠山一目にて面白し。雪の日ゝとりわきて也。誹友のもとより音信あるその返事にそへて、

いつとてもやるぞ白紙雪とよめ

泉石評 染てくやしの似せ紫や、本の白地がましじやもの。五月あめほど戀しのばれて、今は秋田のおとし水。ふみはやりたし手はかゝず、やるぞ白紙それとよめ。是等は小哥の絶唱也。今此ほ句は、よう色あげしたるかな。手ぎは〳〵。

年尾

氣にむかぬ時もあるらん節季候

今宮惠美須奉納

出るに入無地の帆もなし霞つゝ

短夜

短夜を二階へたしに上りけり　泉石評 日高三竿我猶眠といふ句あり。其いこなるべしや。いふばかりにいふたりな。

菊

我としを花にたしけり菊作り

冬の吟

誰が文ぞゆかし茶の事雪の事　同評 さきしりたらば、みのかさとも出やうに。

三月三日

見せばやな浦の蛤鎌でとる

端午

葺事ぞ何のあやめもしらねども

大悲の誓ひによす。

見出立老かれし身もをどりかな

時雨

宿のない乞食も走るむら時雨

猫の戀

ひき窓や猫の舟橋戀の闇

卯花

卯の花や目をすゝいだるこゝちよし

秋興

野行吟

花すゝき寺あれば社(こそ)鉦が鳴ル

王子猷が圖を見れば、小船に一人棹さすあり。見せばやな、難波入江の壯に、廻船湊をふさぎ、酒の舟・鯨のふね、是は一ふしを諷ふてありく道の下寢には、しる・しらぬ人の足手をさする。

客盡て歸るや雪の比丘尼船

(續いま宮草　下)

自一此分一爲二下卷一

早春

木に草に麥に先見る初日かな

若菜

青し〳〵わか菜は青し雪の原

泉石評これ此翁が一體也。あれとにもさきにも此樣なる句をせしはみな此翁にぞ、これはその柳にとゞけわか楓などに次べし

春宵

梅さそふあらしの月や宵のくち

山家鶯

うぐひすや去年の栖に聞寐入　同評取合のよさ。

燕　　れこ

山の邊や風より下を行燕

猫の戀シヤ毛色にもよらぬなり

さくら　蝶

うちあけて障子わするゝ櫻かな

散花をよい相手也蝶の舞

天滿天神門前の植木や町、門内のうゑ木屋店山本といふ

所より草木をとりよせて賣ものとす。過し彌生五〻の日、かの神にまうでけるついで、その山吹なよげなるを見つけて、いくらかくらと問まはり、直をやすうつけたれば、かさねて相手にならず、せめてほ句して胸をさすりし。

花に似て山吹賣がものいはぬ

市原野を過るとて

ほとゝぎす貴布ねへかよふ禰宜ひとり

若楓 螢

さし出る朝日の友やわか楓

飛ほどの螢やとゞく天の原

茄子

慈愛のふたつも、おのれ〳〵がいとなみをはげむよりして、子はわきへなして、夜を夜ともおもはずとかや。そのあはれをきくに、

子はのけて抱たなすびかはやづくり

納涼

慈姑に目をつくまでの端居哉

雲鈴坊が席にて

ひや汁にうつるや脊戸の竹林

立秋

來山兀として

立秋や白髪もはへぬ身の古び　泉石評　一句のしなし、前書のしなし、上手かな。

わが宿は

初夜と四つあらそふ秋になりにけり　同評　更過ごさかひ目、此句程よくいひとりたり。

良夜

蔦葎みな秋風の道具也

重陽

熊野から南はどこぞけふの月

鬼貫が福島に住ける比

游ぎつくけふぞ菊の瀬花の淵

しぐれ

秋風や男所帶に鳴ちどり

律僧の鼠ぬれ行しぐれかな　泉石評　ぬれねずみ・鼠衣、さもあるべし。

餞別

筑紫の五雲子西國行脚を見送りて、みふに我ねんとよみしほどこそなくとも、

委の事も四つほどおもへ六の花

閑居

音するは立居の友やさら紙子

人の愛子に申おくる。

今でさへ顔なつかしや冬の梅

一切衆生悉有佛性

盗人の錢おく雪のやどりかな

寒中吟

打鑰であげた魚見る火燵哉

歌仙

二月集、こゝろもさなきものゝ部に

傾城町へはのぞかず。呉服屋はよい氣なもの、隱居は無事なり。よしあし年はつひ及ぶ所に、

先ッ奥を見るや師走の封じ文　湛翁
火燵の上に膳居りつゝ　季範
日照雨あれ松原を傘さして　文十

末略

わかう人たち入來りて一興に及ぶ。酒にこそおとつたれ。

二タ唐人見し世がたりをとしわすれ
ほのかなる鶯きゝつ羅生門
獨寐る蚊屋も四角はつりにけり
松の月枝に懸たりはづれたり
眼ばかりは達磨にまけじ冬籠
藤咲て菓子干棚か花かつら
里川や鵜とつれだちて坊主の子
あさがほに置とは露のつよみかな
手も出さず物荷行冬野哉
吹あてゝ柳に似たるあらしかな　泉石評　句中に露あ、とも ふべし。
若楓一ふりふつて日が照て　同評　氣色至極く。是等は翁が一躰の中の絶唱。
鵲の橋や銀河のよこ曇り
干網に入日染つゝしぐれつゝ

鷄旦

ふるとし、和田氏のもとより奈良暦の一緘をえたり。見るに所のこしらへとして、間遠の大字、老身の重寶、是にこそとて、諺に置よりて、一句のよろこびをのぶるものか。

是ことしくらがり越た日にむかふ

はる雨

はや二日昔の雨や春の闇

又けふも人よごしなりはるの雨

老樂

晝過に起て鶯むめの花

山中鶯

朝附日うぐひす黄也砥とり山

市中鶯

ぬしや待うぐひすの啼賣やしき

むめ　朧月

草の戸や藪ともいはずむめの花

是や此日ぐれにつゞくおぼろ月

山ざくら　ふぢ

世の事はいさ耳なしの山櫻

仕舞には花につなぐか藤の錢

夏の吟

蚊帳の香けふめづらしと宵寐かな

神明奉納

ふして拜む時には何もしら扇

蚤　蚊

世のさまや身に身をかくす猫の蚤

蚊が入ッて蚊屋ふるふたりや夜が明た

追悼の詞

このかみになき別せし鳥路のもとへ、悔にも詞たらず。我とても四とせあとの水な月に下枝をもがれ、涙とさらにおもひやられて、

啼こともなんでも蟬の片羽かな

浪華津の艶里は西南につゞきたり。我がすむ所よりは見渡してちかし。是も誰が書捨の餘波なるらむと、ふるめかしくも見立たり。

畠中にほしぞやすむはねつるべ

秋興

霧分て我馬探る朝かな

ふかれても風にやぶれぬ月夜哉

花野虫

花ならば花野の花にわけがある

行水も日まぜになりぬむしのこゑ　泉石評　秋の初風、句の中から出るであらふ。

名月

待宵の車軸は、こゝろなき身も老しほたれて、

けふこそは月夜も闇におぼえけり

仲秋に入てより晴天すくなし。せめてに今宵をねがひ草臥て、

雨の夢嬉しやほさんけふの月

九月九日

ぬれてこそ袖の祝ひと菊の露

いにしへの奈良とは和哥にもよみければ、今も民の家居までつき〴〵しく風雅に遊ぶ。それが中に松井氏の娘、やう〳〵ことし八歳の龍女には、たちばなひとつこそおとなしけれ。九日のことぶきとて、ひとつの句を作りて、しかもみづから筆して、艶しくもなつかしくも。

南都松井氏　きさ女

けふの菊もらひてつかむやり羽子に

是を見るに聞に、老さらばひし身さへ、かたちさへ、よはひものぶるこゝちになりて、あとに句をむすぶ。

蜜柑の猿もみちとせの笑

時雨　きぬた

ちひさげな舟はしぐるゝ岡の松

うちやむに間のなき冬の碪かな

浦の名によせて

見あくほど見ても初嶋雪の降　泉石評　初島の初の字いきてはたらくなり。いつも初音の賞翫と兄弟かいとこか。

かしこき人のうちつれそひて、世をそりかへりしとおもひ出られて、

寒菊の氣隨にさくや藪の中

せいぼ

人生一生不醉不醒

けふの瀬や一年中の舟あそび

宮裏白梅

櫻咲てこの宮早う夜が明る

草庵に飛ぶ物とて

蚤蚊蠅の三友

寐てくらす麓の嵯峨ぞ雲の峯

湖白が父の身まかりける時

野分とは人をそこなふ風の名歟

冬の吟

冬見れば松にひきそふ茶臼山

寺島の記

時雨比こがらしの外に音信あり。二ッ茶やの何がし山晴子なり。きのふ着岸のよし、草門に入。まことに風雅の因みわすれずもやと嬉しく、そのことかのともがたる中に、ちひさき盃の數ぞかさなりぬ。晴子持病あり。いまに折ふしはなやむなど聞に、爰に醫あり。其妙術は京の鬼つら傳授せしを我よく知れり。世人もよくしれり。幸昔爰に旅泊せり。尋ても見ましやといふにぞ、かねて聞およぶの所なり。是より伴ひくれかしといさみたつにぞ、菊治・柏喜のふたりもいざなひつれて、行先きは寺島といふ所なむめり。浪華津の色里よりは眞西にあたり、大門まで糸を引たるごとし、四五丁には過まじ。ものにのぼりなどせば、萬のいろあひも見ゆべきなり。河岸にのぞめば、むかふへ船いだしまちうけたり。何とやら旅めきて面白し。角田川の都鳥に、ものとひかけしむかしをとこの情、ことさらにおもひ出られて、

けいせいのよる瀨しつたか川千鳥

似つかはしくもやと晴にさゝやけば、しらいでもくるしからぬよる瀨なるべしとて笑ふ。こゝらは船作る所にて物音もかしましけれど、なれ〳〵ては水鳥などもゆたかに、おのがまに〳〵群たり。南は住吉にちかく、淡路島のおろしはふところに直に入る。北は此津のさかえ見およぶに果なし。なゝめならざる風景、おの〳〵行船を惜む。

ものくりよ歟寒いに漕な涉人

かぎりありてむかふにあがる。其柄をとふに、樹林奥深して一徑まがふ〳〵、虎のごとくなる石を踏こゆれば、龍のごとくなる松、頭に覆ふ門あり。あなひ人にまかす。白頭の老翁宛然たり。丹竈にたばこを吹あぐれば、けだものゝ雲に吹けむとよみしも思はく込けるぞや。時を宜して歸るさは暮にちかし。寒さはさむし。飛ごとくに其町に入ぬ。こゝにも石丈といふすきものあり。かれが家にこ

ろび入て、わざとならぬ火燵に踏こむ。ひとりふたりも來かさなりて、まんざら木男ばかりの酒にもあらず。ほどよき醉のうちに明日の事をちぎり〲て、三人はもたれあひて西に歸れば、我はものに乘て東にぞ行。夜半の夢しばらく十萬堂にてさめぬ。

玉川の辭

六觀音・六哥仙・六腑・六根などゝ、リクロクの兩音をこそ凡もちひくるに、今こゝにあぐる玉川のみ、言葉和らかに呼つゞくるは、いかさま、名川の德ならむかし。これをしつてにや、長谷川氏の百丸子、もと風雅にあさからぬから玉軸に卷ゝをつゞけ、己が重寶としよろこぶのあまり、上ざまの人にまで苦勞をかける。さらばそのひゞきにまかせて、舌頭にかけさする事あり。

ぬりふぐり〲三ぬりふぐり
あはせて六ぬりふぐりさあいへ〲

花といはゞかたみうらみや川の浪

元祿十三年菊月下旬

十萬堂において沈醉のあまりに書す。

歌仙

夢想　御獨吟

商人の濱より濱に荷を持て
　ことし米から藏數が增
惣領をまうけの秋もにぎやかに
　くれ椽走る猫の月かげ
蕪松の根は熊笹に色もりて
　船から見れば山が步行は
蓑を着て傘さすはぬかるなり
　別れていぬる食の源平
組敷ば手に釘もつた女にて
　禁酒をしやうとかたい約束
無筆でも悋氣の時は故事を云
　おはぐろ壺の盖のあけやう
すかすれば見えぬ壹步を猿が出す
　醒りやまた呑む夕立の月

寺町を看籠じやと賣□□（京本虫食）
茶師のくせとて輕薄な狀
綱かけて花漕入るゝ庭の山

右末欠タリ。

鳥路齋編集序

船は楫に順ひ、馬は鞭にいさむ。萬里にあそんで、雪花の色を我ものにたゝみこむ。宜しい哉。俳門に鳥路齋あつて、道に翥し、山に啄ばみ、渚に拾ひ、巢に喰あつめて、いまにこの海陸集とは、種麻得栗の功をなしぬ。風老も髑髏といざなはれて、卷〳〵のうちにもそこねたる尾をたれぬ。所謂黄山に鳥あり。青き羽・赤き觜、人舌にして克ものを眞似る。是もそれがたぐひよと、病中の文筆我さへ我をわすれけるよな。

豹皮集

題各枕

枕言葉・哥まくらなどは、和歌の餘情にして奥ものゆかし。まくら舘・まくら屏風の類は、枕上をのかぬものからさもとこそ。只事のよるべもなく、物〳〵に冠せらるゝは、いかさま一器のほまれなるべし。磯まくら・瀬まくら・浪枕いふにかぎりなし。任他こゝによこをりふせるとはよみたれども、何國を尾とも頭とも知ざるは。

雲霧や佐夜の中山寢惡し

辭世

よしやよし身は夕暮のもどり馬
月を目あてに一筋のみち

享保元年丙申十月三日　六十三歳歿

翁一日平野なる大念佛寺に遊びて歸をわすれ、薄暮におよびければ、馬にまたがりいそがれし途中の口號なりとかや。いかなれば此、終焉を期せられ、かねて此詠を、辭世の詞などゝ示されしとなんいひ傳ふ。翁の塚は淨波の大寺の西一心寺といふにあり。

十八歳開眼

未眕

我は只生れた科でしぬるなり
それで餘波もなにもかもなし

來山老人
最後前書レ之

附録

（原註）イニ門松はトアリ
門松や死出の山路の一里塚

泉石評

それはそなれど、年始の作にはあまりけうとし。其隣家の老婆あり、大三十日の夜死ぬ。皆人うろさがに獨住の老婆あり、大三十日の夜死ぬ。皆人うろさがり、いかにしてなどさわぎあへり。湛翁きいて己が宿へ引とり、元日を過し、二日に野送りさせたり。此句其時にやしたる。但し此時にあらねど、此氣ゆゑとぞおもひ出したるまゝ、おめずはゞからず言出したるにや。其角が海鼠ぎらひ小判の毒にあてらるゝといひし、ともに限ある句といふべし。

歳旦

元日や雜煮むつかし燒て喰
玉椿はしらも石になりかゝり
座所は花の指圖やぼたん講

名月

ほとり哉動く柳に魚迯す
毎日の花朝がほのこりぬかな
凉しさや坊主ふたりのみだれ髮
ほとゝぎすはだかで起て橋ふたつ
世を千年さされさは大福長者のこ

さ葉

秋たつとゆふべもしらずたはひもの
馬かたに請なしさてもけふの月
春の野やながきかづらの裾につく
ころび寐や我葉を敷て夕がほの
松吹て横につらゝの山邊かな

淀川畫船

船かすむ海とや水子の硯彫
若隱居見限り切ッた花とはむ
床緣は枕にひくしほとゝぎす

七夕　前書畧

嶋一反こや七夕のとりおとし
鉢にうゑてかひなき荻のそよぎ哉
出ずとよい石龍子(とかげ)や人をおどろかす
春風に白鷺白し松の中

難波津のしほざかひ、川舟遠く漕出して

篗(わ)の鼻身をちゝによる月見かな

餘のものにいたまぬ松を雪の膝
あをによし白き團扇もならうちは
眠る蝶それともに散る牡丹かな

更衣

おのが浦〳〵さよみし

衣がへあれが明石路須磨の浪
今朝よりは我〳〵がほの荻薄
雪までのなじみを竹の時雨かな
星の夜の寐られぬ罪や蚊がはいる

船あがり

伏見氣で今朝大阪のしぐれかな
家〳〵に月の中言雨の音
其笘とてことしの松も時雨けり
みじか夜や高い寐賃を出した事

方丈の笑

茶碗篭煙や雪の坪のうち
春雨や降ともしらず牛の口に
鉢たゝき顔の雫を呑にけり
ひとり居や蚊屋を着て寐る捨心
添竹もないに健氣にこの菊の
春風や堤ごしなる牛のこゑ
化に出た狐を化すしぐれかな
雨の柳糸なき琵琶のほこり掃
涼しさに四ツ橋を四つ渡りけり

端午

こゝろよやけふの浴に蚊が逃る
とし〳〵に名に枝の出る櫻かな
露にうつる月やちぐさの數日鏡

すゝ掃

拂ふべき所もないに玉はゝき
晝出るは其殺された幽靈蚊

阿陽芦楯、下向におくる。

神かぜやせめてさくらの噂でも
不二も日の薬となりぬ夕すゞみ
はる草の橋をかぎりて酒屋なし
埋火やしらぬ命に息かけん
猪は季をこそもた(ねカ)ぬ冷じき

懷舊　前書略

七年の夢吹さます若葉かな

尋見む雪燒男くろかりし

香筥に菊のむしとる緣でこそ

　鳶尾花を畵ける扇面に

濁らずばなれも佛ぞしやがの花

およそ翁のほくの、其ころの集物ども見え、又は人のかたりつたふるも少からず。此編に載るは十が一にして、こゝに盡せりといふにはあらず。それが中に是等の句どもは家にもきゝおぼえ、いひつぎたる所なれども、此集は眞跡を寫すをもてむねとし、あつむるに、これらの手澤はいづれに散在せるにや。今もさむべからざれど、さすがにもらし殘さん事のほいならねば、集例をそむきてこゝに附錄す。翁の筆蹟を藏め、或はもとめ得たらん人の、正したまはんことを、ねがふになん。

端午

　渡邊の岸は今の八軒屋のあたりここそ、今日端午一戰のむかし
　を思ひ出て

幟出す南はせかず和田忍地

良夜

　茶臼山の松ちかく鶴にしらむ籬のほの〴〵

酒硯去年にもこりずけふの月

初雪

花は冬至の目當もあり。月はその十五夜を最上とす。ほとゝぎすは夏のものなれど、春のうちより聲のほころぶにぞ、さのみやは。雪ばかりを待といふ題は、からやまさすくなしや。すくなからずや。

花とよむ雪につぼみはない事か　泉石評　無中に有を生ずるくせものかな。

湛翁追善の發句を拾ふ

前書各略

文も見ぬしぐれ降世ぞさだめなき　鬼貫
風流の骨はうづまぬ朽葉かな　百丸
はいかいの錺もむなしかれ柳　悠川
おのが世をむづをれたりや雪の松　貞爲
馴染たるしぐれの雲や何處へ行　之白
常の音や鐘樓は雪のつゝみても　一棟
殘念や浦かぜに散る梅もみぢ　友松
書にうくる雪の燭消にけり　瓢水
いつはりか耳にまとの神無月　人子
枯はてし梅や浪速の所あき　古道
灯の消て澪標の當所も浦しぐれ　長江
かねもあはれ袖はしぐれの一心寺　梅七
嬉しがる子を見る〱も眼の時雨　嵐水（後改良道）
終に行海道ちがひ神の旅　淡々
枯ぬ名や風老人を芦のゆめ　祇空
剰死のかみにたつ霜の花　一禮
しぐるゝやあの世の道はほとゝぎす　東行
かなしさを人こそしらね冬の蝿　何中

けふありてあすとは雪の言葉かな　甘水（後改芳室）
まことより山もゆるさぬ木葉かな　三惟
あかゞりは弘誓を渡すたよりかな　渓尾
木枯や遺愛寺のかね唐線香　平且
嗚呼小春浪華のかざり燒て捨　賦山
世に鳴りし名は猶呼ん神無月　花郷
かはらぬは家居ばかりよ冬木立　岐袖
時雨聞五文字消て六字かな　大立
しぐれても常の雨なり茶臼山　竹砌（後改布門）
ちからなき水鳥聞や冬柳　汝篁
佛ばかり常のかほなり枯すゝき　李天
有もなきものとや白眼冬の空　昨非
木も草も寐さして山の眠りかな　岸紫
八徳の面影たてり霜ばしら　文十
大道の人や渡せし橋の霜　伴自
しぐるゝやありし机の土人形　魚師（後改紹廉）
冬籠やよ其人を達磨の繪　海音
蕪邑名のみ殘るやいほの外　丈雪

輪にほれた道あらためぬ木の葉哉　員九（後改青房）
ふり行や霜にとれたる石の肌　千鹿
野はさませ袖はしぐれの手にあはず　賀世女
お掃除や今在西方十萬堂　舊徳
先汲て閼伽ともなさむ舟の雪　桐磨（後改矩州）
よくおもひ出された花のかみな月　瓦長
しぐるゝや十三紅の根も絶えず　鳳朔（後改法策）
斗酒あらば墳を洗はむ霜の花　白羽
水仙の葉も袖らしきしぐれかな　湖洲（後改古州）
鳥も寐て轍をつたふ冬野哉　樊川
トイキンのひゞきにけふもしぐれかな　蘭桂
一辨の香煙ちり行片しぐれ　百泉
十三度うつしかへして枇杷の花　及瓜（後改浪花）
幾年や草のかるゝは夜〳〵の數　横花
松をしぐれ法師をよごす手向哉　市吟
霜覆ひ牡丹も何を枝ばしら　茱萸
十月や葉にもなじまず三日の月　松堂
晩鐘や火なき火鉢に打むかひ　扇外

引よする親の手を見ぬ時雨かな　十萬堂二世 小西 一來
霜敷ていざとぶらはん山の寺　同三世 什來

攝津今宮郁　植木孛孤錄校
小西什山命梓

わが曾考來山のぬしは、人もしりたる俳匠にして、境に向ひものに臨みつゝ、佳句妙吟の數つきず。遠近の友がきはさらなり。輿論の口にも傳へつたえて、此里にわが翁ありとは今も猶聞ゆるに、それには似も似つかず、やつがれたゞ田畝の間に明し暮して、春もまだきに消殘る雪間を分けて、あぜ菜摘、はや苗代の水せき入る蛙のすさみをもいと心うとく聞過し、かほ鳥の羽風句ふと見るが中に、頓て麥かち早苗とりて、いとまくるしく三夏もたち、早稲田かりねの夢さえも結びあへず、露の晩稲を負せとるまで、いづれゝ〳〵故翁の句碑に入し風景なればと、な

つかしくもあはれにも見過し、感興せるばかりなり。ことし友人芋狐のぬし、より〳〵のすゝめに隨ひ、家に殘りし書捨どもを探しあつめて前編に續く。故翁もと泉南の居にして風雅を浪華に倡ひ、晩年農家にかくれて此里に終る。常に禪機を渴仰して悅山和尚にむつび、その外當時の韻人騷士の稱譽せる事は、世の人のしれる處なり。

天明二壬寅年十一月十萬堂四世孫、攝州今宮住小西知秀。

小西什山　十萬堂四世

今宮草 拾遺 嗣出

天明三年癸卯正月發行

浪華書肆

心齋橋筋南へ壹丁目 石原德兵衛

堂島中貳丁目 雲井熊次郎

心齋橋筋南久太郎町 柳原喜兵衛

素堂句集

山口素堂句集

浪華　芦陰舍大魯閲

春

宿の春何もなきこそ何もあれ

とく〱の水まねかば來ませ初茶湯

老の春初鼻毛拔今からも

悼ニ少長一

灶(たき)さしや歯朶の中よりこぼれ梅

閑亭の主人、池に鵝を愛せられしは、筆意有るゆへ也。

池に鵝なし假名書習ふ柳陰

西國に下りし比、周防・長門の間の堤に、大木の柳ありけるを

胴をかくし牛の尾戰ぐ柳かな

谷川に翡翠と落る椿かな

大井川いさめて落るつばきかな

雨蛙聲高になるもあはれなり

夕風に見うしなふまでは雲雀哉

朝虹やあがる雲雀のちから艸

大磯にて

あ荒れて中〱虎が垣根のつぼ菫

命ながし其如月の前の顔

はりま巡の時

遲き日やしかまのかち路牛で行

木の間行被(かつぎ)に散しさくら哉

福原

茶畠の爰が左近の櫻かよ

たれか見ん櫻の比の野人參

さぞな都淨るり小哥は爰の花

彌生の頃東武へ下りけるに

ふんぎつて都の花を下りけり

芭蕉居士の舊跡を訪ふ。

志賀の花湖の水其ながら

よし野にて

是つらよ吉野の花に三日寐て

三輪

至れりや杉を花とも社とも

よし野川

鮎小あゆ花の雫を乳房かよ

初瀬山

宿からん花にくれなば貫之の

芭蕉行脚に出て、久しく歸らざりし頃

いつか花に小車と見ん茶の羽織

池上偶成

池はしらず龜甲や汐を干す心

曾良餞別

汐干つゞけけふ品川を越る人

芭蕉・曾良餞別

松島の松陰にふたり春死ん

春もはや山吹白く苣苦し

夏

鎌倉一見の比

目には青葉山郭公はつ鰹

夜鰹やまたしと思へば蓼の露

贈一鐵

又や鰹命あらば我も鯑

村雨につくらぬ柘榧の若葉哉

又是より若葉一見となりにけり

篋の音日を道びくや藪椿

余花有とも楠死て太平記

山彦と啼く郭公夢を切る斧

わすれ艸もしわすれなば百合の花

綿の花たま〳〵蘭に似たる哉

宇治

喜撰法師螢の歌も詠れけり

瀬田

水や空うなぎの穴も星螢

蓑虫の角やゆづりし蝸牛

愛宕山一宿

しら雲を下界の蜩に釣る夜哉

垣根破るその若竹を垣ねかな
河骨や終にひらかぬ花ざかり
澤瀉や弓矢立たる水の花

箱根

峠涼し沖の小島の三年酒

木曾路をのぼる比

夕立にやけ石涼し淺間山
舟有川の隈に夕涼む少年哥諷ふ

比叡山の絶頂にて

山涼し京と湖水に限三つ
千鳥聞し風の薫りや蘭奢待
暑き日も樅の木の間の夕日哉

富士

山姫や鹿の子白無垢土用干
浮葉卷葉此蓮(れん)風情過たらん
浮葉卷葉立葉折葉とはちすゝし

開かんとする時、筆に似たり。

已つぼみおのれ書て蓮かな
我蓮梅に鴉のやどり哉

髭宗祇池に蓮あるたぐひ哉
一葉浮て母に告ぬる蓮かな
魚避て鼬いさむる荷葉哉
鳥うたふ風蓮露を礫(つぶて)けり
そよがさす蓮雨に魚の兒躍
荷たれて母にそふ鴨の枕蚊や
青とんぼ花の蓮の胡蝶かな
荷(か)をうつて霰ちる君みずや村雨
蓮世界翠の不二を沈むらん
或は唐茶に醉座して舟行蓮の楫
花蓉芙美女湯あがりて走りけり
筆と見てひらく芙蓉の命かな
年もはやなかば流れつ御祓川

秋

昔此日家隆卿、七そじなゝのさ詠じ玉ふは、みづからを祝ふなるべ

しさ我母のよはひのあひにあふ事な壽て、猶九そじ余り九つの重陽なもかさねまほしく思ふ事しかり。

めでたさや星の一夜も蕣も
去年の蔓に蕣かゝる垣根かな
有明も蕣の威に氣おされぬ
朝顔よおもはじ鶴と鴨のあし
土佐が畫の彩色兀し須磨の秋
西瓜ひとり野分をしらぬ朝かな
棚橋や夢路をたどる蕎麥の花

獨樂

我舞て我に見せけり月夜影
もしやとてあふぐ二日の初月夜

むさし野の月見にまかりて、歸るさに

袖みやげ今朝落しけり野路の月

西國下りの比

淋しさを裸にしたり須磨の月
三日月にかならず近き星ひとつ
三日月をたはめて宿す薄かな

武藏野の薄を手折て、大佛の前に耳かきなびろひし事を思ひ出て

宿にみるもやはり武藏野の薄哉
ゆべくゆや小野のお通が花すゝき
晴る夜の江戸より近し霧の不二

明石

朝霧に歌の元氣やふかれけん

玉津島

霧雨に衣通姫の素貞みん

野水の雁の句をしたひて

麥を忘れ花におぼれぬ雁ならし

いつくしま

回廊に汐みちくれば鹿ぞ啼
露ながく釜に落來る筧かな

長崎にて

珠は鬼灯砂糖は土のごとく也
南瓜やずつしり落て暮淋し

忍の岡のふもとへ家を移しける比

塔高し梢の秋の嵐より

ちからなく菊につゝまる芭蕉かな

宗祇法師のことばによりて

名もしらぬ小草花さく野菊かな

戊寅の秋洛陽に遊び、一日鳴瀧に茸狩して兩袖にいだきて歸りぬ。其片袖は都の主人にあたへ、其片袖は大津の浦の一隱士安世のかたへ、此三唱を添て送るならし。

其一

茸狩や見付ぬさきのおもしろさ

其二

松茸やひとつ見付し闇の星

其三

袖の香やきのふつかひし松の露

九月十三夜游園中十三唱

其一

ことしや中秋の月よからず。此夕は雲霧のさはりもなく、遠き山も、うしろの園に動き出るやうにて、さきの月のうらみもはれぬ。

不二筑波二夜の月を一夜哉

其二 寄菊

たのしさや二夜の月に菊添て

其三 寄茶

江を汲て唐茶に月の湧夜かな

其四

旨すぎぬこゝろや月の十三夜

其五 寄蕎麥

月に蕎麥を占ことゝ古き文に見えたり。我蕎麥は占によしなし。

月九分あれ野の蕎麥よ花ひとつ

其六

畠中に霜を待つ瓜あり、試に筆をたてゝ

冬瓜におもふ事かく月見哉

其七

同隱相求といふ心を

むくの木のむく鳥ならし月と我

其八　寄薄

蘇鐵にはやどらぬ月の薄かな

其九　寄蘿

遠とも月に遣かゝれ野邊の蘿

其十

一水一月千水千月といふ古ことにすがりて我身ひとつの月を問。

袖につまに露分衣月幾つ

其十一　答

月一つ柳ちり殘る木の間より

其十二　寄芭蕉

去年の今宵は彼菴に月をもてあそびて、越の人あり筑紫の僧あり。あるじも更科の月より歸りて、木曾の痩もまだなほらぬになど詠じけらし。ことしも又月のためとて菴を出ぬ。松しま・象潟をはじめ、さるべき月の所々をつくして、隱の思ひ出にせんとなるべし。

此度は月に肥てや歸りなん

其十三　園より歸る

我をつれて我影かへる月夜かな

うるしせぬ琴や作らぬ菊の友

（酒）さか折のにひばりの菊とうたはゞや

こかしせし思ひを小夜の枕にて、我此心をつれにあはれむ。

今なを思ひ出るまゝに

はなれじときのふの菊を枕かな

石山

雲なかば岩を殘して紅葉けり

大江山

ふみも見じ鬼住跡の栗のいが

甲斐が根

ほぞ落の柿の音聞く深山哉

冬

天の原よし原不二の中行時雨かな

三保夕照
網さらす松原ばかりしぐれ哉
深川の翁宗祇居士を讃していはず
や、友ニ風月ニ家ニ旅泊ニと。芭蕉の
趣キに似たり。
旅の旅つゐに宗祇の時雨かな
寒くとも三日月見よと落葉哉
松陰に落葉を着よと捨子かな
竹日の畫
竹青く口赤し雪に墨の隈
比良暮雪
暮遲し敦賀の津まで比良の雪
炭がまや猿も朽葉も松の雪
芭蕉いづれ根笹に霜の花盛
烏巾を送る。
唐のよし野ゝ奥の頭巾哉
茶の花や利休が目にはよしの山
金馬のさし仲の冬中の七日、三四
友をかたらひて、心ざしを申侍る。
人やしる冬至の前のとし忘
名をとげて身退しやふくもどき
埋火
宮殿爐也女御更衣も猫の戀
花桃身しりぞかれしはいづれの江
の邊ぞや、佛は敎べし。宿に先立
てこたへぬ松さ聞えしは誰をとひ
し心ぞや。閑人閑をとはまくすれ
ど、きのふはけふをこのみ、けふ
も又くれぬ。
行ずして見五湖煎蠣の音を聞
和布刈遠し王子の狐見に行かん
鳴戸磯渦まく暦くれはやし
此わすれ流るゝ年の淀ならん
市に入てしばし心を師走かな

狂六堂

才麿發句拔萃（さいまろほつくばつすゐ）

同追善椎の恩爺忌

序

今はむかし、誹諧の花なる事はうめの翁にひらけ、はいかいの實なる事は椎の翁に熟して、當流の花實全く備はりつたへて、其風調を學ぶとになむ。爰に云椎の翁は、はじめ南都にありて和漢の文に長じ、後浪華に住して其名高く、延寶より貞享・元祿の變化に格調自在をなし、長壽にして元文に終る。中頃東都の誹風區と成し時、有紀堂佳風、此翁をむかへて再び當流の規矩を立たり。さりや三世にして中興とも云つべし。發句は諸集に出て世に普く知れり。夫が中に目やすく耳ちかきを拾ひて、同門初學の爲、才麿發句拔萃と題す。椎は材として朽ず。これを梁として渉り學ばゝ、万代不易の風流を得むと。

天明乙巳冬、江戸神田、谷素外、玉池の氷を碎て硯に採、草菴の燈下に書。

舊徳翁才麿發句拔萃

春之部

庭竈民や難波の帝より

五百段のぼり〱て明の春

梅花沉や麝香はもたねども

梅さくや馬で遊びに川堤

うめが香に更ゆく笛や御曹子

梅さくや樽三弦は荷なはせず

名やたゝむ梅取いるゝ僧の窓

繪にならぬ所を梅の詩や歌に

源御史の御前に罷出けるに、初句ひの御句玉はりし序に、梅の句つかふまつるべきよし有ければ、頓に奉りける。

梅が香にふれて疊にかうべ哉

伊勢が像　花と見て折れぬ水の歌

のこゝろを書たれば
河くまのけはひとなるやこぼれ梅
面の眉結びあぐるや松花
十人の花の子もたり千代の松
松の壽に
種しあれば筆の雫や松花
白馬節會拜見に罷出て
朧月左右の木の間や衣かつぎ
花や見む去年の枝折の初芝居
しら魚の目さしぬらすな沖津波
住吉のすみに雀やす蛤
伊勢
あな尊若和布の砂も沖の珠
心きりのあとや越後の雪なだれ
つく〴〵と糸遊や氣のむすぼふれ
なら坂やあちらへこせば春の旅
夕暮のものうき雲やいかのぼり
水につれて流るゝやうな乙鳥哉

苗代にまつ事ありや鷺の首
立田河もみぢや朽て赤蛙
若鮎は鵜の一觜にたらぬ也
つき鐘の響きに動く柳哉
彼岸
花ちるや筆をふるふて南無あみだ
利酒やまだ見ぬ方の花思ひ
花もしや余所へ出るにも玉椾笥
魚も子を孕めとてしも花ざかり
東叡山
堂宮に山越するやはなの雪
來て見れば目に事かくや山櫻
鎖おろす貨の奥の櫻哉
さくら木につり鐘殘る尾上哉
糞ふむやあまりに奥の散櫻
住吉
よしあしの中を汐干ぞ忘草
土佐帋の青海原や硯とり
沖の蝶汐さすまでを睡り哉

足革や菫咲ける力ぐさ
宵月夜入日の岡や白つゝじ
藤浪や蜆売ちる下ながめ
小袖納め櫃川の櫻咲にけり
行春や得意の門に柴小舟

夏之部

衣がへやきのふのゆかり藤葛籠
ころもがへ壁に詩を書御浪人
杜宇新茶より濃聲のいろ
雨水の鯰も啼かむほとゝぎす
郭公はるかに蜀の新茶哉
卯木垣みがける玉の屛風哉
しら雲を吹盡したる新樹かな
柴船の漕こそ殘せ夏木立
臍の緒や生れながらの御手の糸

御嶽山に於て、兩都の判者を招き大きに會せし日、巻頭の句

一抓み何ほどあらん櫻の實

万句巻頭

萬葉の種拾ふ也八重ざくら
里の子の麥藁笛や青葉山
怠らで咲てのぼりし葵哉

小尉

美しい皺を見せけりけしの花
猫の子に嗅れてゐるや蝸牛
景清もあきれし蚤の行衛哉
やすらはでかい夜の明し螢哉
藥玉やみがゝずとても華光彩(ヒカリタマ)
五月雨や梅の葉寒き風の色
小式部が腹にある時梅黄也
襟裏のはじめて赤し花ざくろ
御輿洗ひ脛の白さや神樂神子
葛水に風騷ぐ也茶筅松

紀玉川

珊瑚珠もわれて流れむ山しみづ

秋之部

牛ぞ鳴紅葉ふみわけ中の橋

朝がほは少しの間にて美しや

朝顔がのぼりてゆ竹の垣

甲斐が根や烟りも白き若たばこ

花は根にもとあらの萩や土龍

猩(狸カ)毛の筆に薹あり唐がらし

燒米を幾年嚙て諸白髪

蓮の實集の後に

蓮の實や拾はれぬのは蓮に成

西宮

三ッ柏庭のひと葉もいたゞかむ

人丸の寐息や殘る朝の霧

又やあの霧から出ぬ朝烏

廣峯牛頭天王社　洛陽の祇園も此所より迁したりしとゝ、神官いかめしく語り

葛の道都に似ぬをうらみ哉

波たゝぬ夕ア、雲も立ぬ空の布を引たる如く、幾重も白う物のかさなりたるは

蕎麥花大和島根のくもり哉

武藏野の月に涌出や人の山

名月の窓や幾にうめの花

大師つらしかほどの月に石の芋

親をおもふ衣の山の月の色

須摩(磨)

月なうてかなしかりけり松の風

あら古や露に衛を須磨の体

辨慶が筆とて、此花江南所レ無也の制札あり。年號は壽永三年二月二日。

松蕈に制札はなし寺の入

大物浦　判官涙に漂泊ありし昔、この浦の哀れ靜かに舞、辨慶が顏見

ろやうに語るも目ざましくなかし。
しころうつ宿にありあへ古烏帽子

敦盛石塔
俤のばう／＼眉や花すゝき
冷じや吹出る風も一の谷
印南野や笠の蠅追ふ秋の風

大貳三位が係　いでそよの歌の心をうつしたる也。かれ／＼なる男の、おぼつかなくなど聞えければ
ものごに身にしむ風や女笹

西鶴悼
泣や此櫟は折れず秋の風
秋のくれ男はなかぬ物なれば
兀山や吹ぢからなき鳩の聲
蟀の足あともあり灰のうへ
夜寒さぞ裏壁付ぬきり／＼す
明石瀉夜ひと夜寒や朝寒や
うそ寒や不斷ふすぼる釜の下

廿七番圓教寺にて
木つゝきも札打やうに聞えけり
はねる程哀れ也けり秋松魚
芦の花折て船出の御秡せむ

ある大守の武江に下らせ給ふを見る。
武藏野の尾花に入歟大白熊

伊勢
いざ我も御汐あびよふぞ雁鷗

紀行の後に
おもしろや千秋樂をいとま乞

冬之都

時雨そめ黑木になるは何ゝぞ
かへり咲や狐川より志賀の花
木がらしや花ちる里の酒の燗
風に薪わりの谺響きけり
花の木もものゝ見事な冬木哉

女足袋柴野ゆくゆかり也
あさましや鷹に餌をかふ夜の鐘

家隆の賛　繪は河邊のちはら風さえての所。

闇の時あふであらふぞ妻衡
青首や同じみどりの菜つみ川
吝鮫鎌馬にて海をわたす事
都見よ霜もあられも瓦屋根
雪折や白土落るこまひ竹
雪ふりや若衆の門を掃に行
赤人の烏帽子も脫けむ不盡の雪
田子浦低根なりけり影の雪

顔見世

振りの翁明る日かけのかづら哉
尻敷に挾夜すみ人やきりぐす
お火燒や蘆にまじはる箒の神

宗祇之像

日發句やしらぬ翁のとし忘
勝手より子の這ふて出る歳暮
口のもとの人の多さよ年の暮

右四時百二十七章



序

星霜うつつて遠きを追しめ、日月來て善を作しむ。こゝに此小冊子を椎能恩爺忌と題する事、それ椎少文才麿は、難波津やうめの翁より第三世にして、今我黨のかみには中興覺夢の大德也。されや文雅の學に心廣く、道の風骨に體胖にして、しかも長壽く、八十有二を持ちて、過にし元文丁巳の春物故し給ふ。その在世に時を同うせし好事の輩、その才を羨やみ、その齡を尙んで、これに叙跋、かれに判辭を需めざるはなかりしとや。今正にその書存して、後生の人に摸範となれるもの少からず。于時天明丙午初陽二日、春畢院年回五十の正當也。かゝるよしをなん聞し召れにたる諸君子より玉はりし金詠、諸風子より送られし玉詞に法莚を添ふし、聲吟頓首して侍思ひらく、如レ是高貴の念章、衆友の群業稽拜に預り給ふ事、是誠に此居士の德行光明也。その赫奕たる餘影に照さるゝ末派の同士、百世といふとも夫猶如レ是ならんにや。この椎のこやてのするゑ葉〳〵に至りて、大爺とも尊び大伯父とも仰ざらめやと、今日牌前に祭れる處の錦章を、さくら木に咲せて香華にかへ、その匂ひの永く傳はり絕ざらん事を願ひ、しかいふ。

東都誹談林七世
後五千堂小菅寶馬述

椎能恩爺忌

誹談林三世
舊德翁

たねしあれば筆のしづくや松の花
千とせも戀んもとのたつ春　寶馬
夕東風に車合の月晴て　素外
砂うちはたくむしろ四五枚　津富
麥出來て鄙のこゝろの大まかさ　木丹
ねんごろぶり歟雀啼也　左簾
ウ
學ばぬも學ぶ童ァの跡を追ひ　寶馬
朝飯まへの冬のあは雪　木丹

藍瓶に籾糠けぶる西洞院　津富
　いふて見たらば亭さうな石　素外
寛に〳〵と年は耄たが逢ふた顔　左簾
　奢りし奉公後に耻かし　寶馬
殘るとも七夕限の土用干　木丹
　月は家陰に切籠出そろふ　津富
虫買ふをおかしがらるゝ國の伯父　素外
　眼鏡を鞘に欠び（あくび）しながら　左簾
花あればこそ遠山を窓のもの　寶馬
　海はかすみて空のあざやか　木丹
春もまだ隙な相場の幟ぶり　津富
　陶を見せて額ぬかせる　寶馬
いつとなく枕硯が名に成て　木丹
　城おだやかに鴈近き聲　素外
木ゝは黄に傾く月の矢走ぶね　左簾
　朝寒げなる浴衣旅人　津富
女中衆の中におどけた道心者　素外
　夢の祝ひにねだる牡丹餅　左簾
小六月とても遊ばす牛かして　寶馬
　禰宜町までは岸による波　木丹
夜さへや低きは樂の傳受事　津富
　氣の和らぎは老をしるから　素外
岡ものも田もいき〳〵と夏の露　左簾
　朝な〳〵のいそがしき鳥　寶馬
公達の御目覺はやさよけれども　木丹
　明る障子の繪を惜むとや　左簾
とふ今年三ッにはじまる花の式　素外
　無盡造化のぬるみあふ水　津富

題花木　作句順任至來

花のみ歟香具にも兄梅のはな　雅郊
眼の前に香を迎ふ日や花の跡　栗堂
いにしへの香や今花の一林　仙禽
春の色は鄙にもみちぬ桃のはな　凉山
うめがゝを東風の手引や春の野路　素琴
花したゝかつたなみはなし白椿　素玉

山に鍬とるや花見る人のため　一鼎
にぎやかな時を手向や花の春　井鳳
撞歟つかぬ入相ごろの花の山　寶春
うつぶいて行人はなし塀の梅　不逡
おもしろう夜や明にほふ窓のうめ　柏子
もろ人を香のちかづきや梅が宿　卜人
梅さくやおぼえ久しきものがたり　波靜
うめ咲ぬ家とてもなしけふの春　糸桐
梅やそのいにしへをこの花の恩　漁舟
近附をたんと持たるさくらかな　不言
折花や今見る人の爲ごかし　龜文
花は香に深し三世をつぎほ梅　冠車
咲殘る花の道かな外山まで　文洞
四方に香のふるきをもつて梅の德　龜全
語り接うめがゝひろし風ひろし　吐鳳
くり返すむかしがたりや糸ざくら　千枝女
一拳さくや鉢木のうめのふり　泰梁
雪とけて覗くや梅の水かゞ見　素閑

春やむかしその梅がゝの五十年　野州安蘇 東國
なには津に匂ふや梅の又一木　笠齋
うめの恩のにほひつゞきや月に東風　麴人
風に馴鐘に隔たり山ざくら　楚分
禁盃の綻びぐちやいとざくら　梨露
雨の花これやなやめる美人とも　丹州 江鳥
折て享るこゝろや誠はなの友　和國
花を根にさくや言葉の花に花　慮得
花に見人香に聞人をや讓り梅　暮雪
いろに香に接つたはるや梅花　上州舘林 虎風
花も香にそふて花なる櫻かな　素貫
花やあるじこの下草の青疊　素鷹
うめがゝに又一しほの月夜かな　蒼鷗
花の醉の空にも醒ず朧月　寶帆
さればこそ爰にいそとしの忌あり花の春　八十余歳 水雞
談林の梅がゝしるし法の風　奇峯
稀人をとめしさくらの手柄かな　春瓜
散て後も花形崩さぬ椿かな　水・蛙

名ある梅のその葉や數千本　鳥水
解る雪今又うめにつもる雪　花映
梅毎の花に噂や五十年　巳曲
その德のとし〴〵高し花の山　李杏
なには津の種や今なを梅かほる　方舟
明ぬ戸もひらくやうめの盛とて　銀樹
あるじまでゆかしや垣の梅匂ふ　白駒
言の葉の古きに香ありうめの花　加州金澤 牛司
名にゆかし見ぬ世の人の月と花　同 苔瓦
跡をよく折てまいれよ庭の梅　樗雲
香やかすむ霞や匂ふ野路の梅　龜遊
うめがゝや凝こほりつく朝戸より　生沾
手向せんうめはむかしのその色香　江鳥
香に染や脱し羽織も梅の膜　素芹
日は遲しはやきは年の山ざくら　山鳥
朝〳〵は花の一助の曇哉　素人
花に酒その香や人もさくらいろ　木奴
さくやうめ万木の春に增り草　久喜 玉圃

よりてかざす香やいつ迄も道の梅　玉川 素調
帋でする彼岸ざくらも七日かな　羽州角舘 歴翁
生垣の古風をさくや赤椿　同 素盈
序よし花に見物聞法の　同 公佐
氣儘こそよけれ深山の遲ざくら　大椿
山賤も斧とはいはぬさくらかな　素元
散て後もにほふや花の難波風流　過橋
しら桃のそれに似べくもなしの花　素后
香を慕ひ行ば遠はじうめの花　苔雨
をしまずに咲て見せたり山ざくら　風馬
梅からのつたへ是よりはな椿　梅壽
のどかさを杪(こずゑ)に見るや梅がもと　其葉
名どころの花や盛りに古事も　素竹
紅梅の難波ゆかしや椎がもと　蘭馨
花ちるや迦陵頻伽の遊ぶそら　岩月 何來
さく花も厚き手向や八重ざくら　同 青錢
にほひぬる五重の塔や花の雲　同 白陽
抱ゆればなを遲しゝはなの幹　同 素云

夜ばかり酒酌闘のさくら哉　小田原 可吟
桃さくや牛の涎も光るころ　枝靜
葉を花の笠に着てさく椿哉　蘭枝
梅かほる門や日の恩風の恩　合浦
うめがゝに障るな庭の掃除人　白羽
不忍を上野の花のかゞ見かな　涓東
花ぞ咲畑の無理道無理ならず　德雨
雨若しうめが垣根の草のつま　酉示
枝ぶりも木ぶりもつよしうめの花　東萩
談林の接穗一流万梅花　其玉
此道の花の枝折や通俗志　羽州庄内 寶義

春里院舊翁の誹德をおもふに、今世宮流と唱ふるは概、此居士のをしへを繼ば、

とふを花のはるやむかしを仰ぐ同士　素外

今年丙午正月二日椎本の翁五十回忌に、東武の枝葉は五千堂に會して、誹諧の連歌をもて手向とす。難波のもとつ葉は猶さかんなるべし。

梅を花船玉祭る魂まつる　津富
自他の眼に妙なり白き花のうめ　木丹

當流三祖の遠忌に、芳名のかくれなき事をおもひて

かすまぬぞ花よいく春二日月　左簾

椎少文翁の遺法をもて、此道の掟日〳〵に新なる事を

影ふまぬ年〳〵の師ぞ花の春　寶馬

五元集

元・亨

其角

長慶集・元亨釋書などきこえしは、集編なりたるそのとしの號を、やがて名となむせられたり。これは延寶にはじまりて寶永に終る。その間、五元をあらためたるが故なりかし。しかるに晋子の滅後にいたつて、たれ人の家にありともしられずして有しも、正徳より今延享までにこれも又、五元を經たり。さあれどその名の久しくきこえて、此集の世にかくれたる事や。こゝに國ゆすりてたうとみ奉るおほん神につかふ大徳の在けり。古代の物このみて、多くあつめもたれし中に、此書もとし比ありけるが、たぐひなき寶とめでものし、ぬりごめのうちにふかくひめ、心の注連もゆひかけつゝ、御垣をまもる宮奴の杉の嵐にねぶるをも、いかにうしろめたくやおもはれけん。さればをのづから案内しりたる此道のすきものどもは、縁を求めて見ん事をこふめるに、大徳うけざるさまにて、むれつゝ人のくるのみぞと、つぶやきながら、とりいでゝも、席をかへて見ることをだにいさはるれば、半紙もうつし得るやうなし。人みな月のうちのかつらのごときをうらみあへり。予も、もとよりこれを得て、先師の妙を明らめしらんとつねにおもひて、としをかさねき。まことや、この比つたへて持たる人をきくに、予がよくしりたるものなりければ、はじめよりねがひしことをかたりて、乞もとむるにゆるさず。されど彼家にゆきゝする事、度をかさね、かつなげき、かつうらみて、衣通姫の庭に、七日までたちさらざりし者のごとき、こゝろざしにやめでたりけん、からうじてあたへたり。よろこびまろびもてかへり見るに、みのゝ紙を中よりおり、かりそめに草稿のやうになしたる本の、遺墨八十八を一册とせるものにて、晋子の手澤・今なをうごくがごとし。うれしくも、したはしくも、あはれにも、めづらしくも、まぼろしのかんざしを得てかへりしこゝちも、かくやとおもふもあまり成べし。今は、はじめよりのほゐたがへじと、櫃におさめてかくすことなく、龜成といふが筆をかつて、氷の下なる魚を謡くがごとく、一點をたがへずうつして梓行し、世の晋子をしたへる人と、こゝろざしをおなじうし侍りぬ。

百萬坊旨原

五元集

延寶　天和
貞享　元祿
寶永

寶晉齋は米元章が硯の裏に鐫入たる號也。三弄子、其硯を予にあたへて、寶井晉子といへば、此號宜しくかなへりとて、筆事とに述給へるを、やがて佐玄龍が額を需て、雪月の軒端にかけたり。

延寶のはじめ桃青門に入しより、寶永の万ゝ歳をよぶといへるとぶき、しかなり。

其角

五元集（元）

四十の賀し給へる家にて

御祕藏に墨を摺せて梅見哉

遊ニ大音寺一

んめがゝや乞食の家も覗かるゝ

加小松觀音寺奉納

梅の花旦那を待て庭にあり

芭蕉翁の沙彌、かけものほしがりて繪讃を乞けるに

せめてもの貧乏柿にんめの花

曉

進上に闇をかねてやむめの花

不曲亭

あぜを越日あても梅の匂哉

こつとりと風のやむ夜は藪の梅

なつかしき枝のさけ目や梅の花

宰府奉納

守梅の遊びわざ也野老賣

和二心水推敲之句一

たゝく時よき月みたり梅の門

梅津氏の祖父、大坂表の軍功によりて 御感狀 御太刀を頂戴せらる。正月十七日の朝さかや、佐竹・上杉・蜂須賀等の家臣十七人さ也。家の風、相つたえて、今も正月十七日鏡開の興行あり。其栗、家督執權さして此春の賀會有。

幡持を文臺脇やむめの花

元日、眞珠喰あてし人の、句を祝へといふに

夜光る梅のつぼみや貝の玉

仙石壹岐守どの、正月五日に身まかり給ひぬ。玉芙公に御悔申上侍るとて

外樣迄手向の梅を拜みけり

元祿十四年二月廿五日、聖廟八百歲御年忌。於二龜戶御社、一詩哥連誹令二興行一座一。

梅松やあがむる數も八百所

氷肌玉骨とかや。

昔見し花にも香にも梅の皮

久松肅山亭にて

梅寒く愛岩(宕)の星の匂かな

芭蕉菴をとひて

百八のかねて迷や闇のんめ

鶯や十日過ても同じんめ

うぐひすに藥敎ん聲のあや

腕押のわれならなくに梅の花

籌木のゐくびは是にやみの梅

止丘隅 鶯の身を逆にはつねかな

うぐひすよいで物みせん杉鉄

茶臼にとまりたる繪に

鶯や氷らぬ聲をあさ日山

茶杓にとまりたる繪に

うぐひすの曲たる枝を削けん

鶯に罷出たよひきがへる

うぐひすや遠路ながら禮返し

市隅

とだあがりしやらしといふらん。

竹と見て鶯來たり竹虎落(もがり)

雀子やあかり障子の笹の影

長嘯の記に、淺草の觀音さて、國ゆすりてもてなす佛をはす。口にまかせて

いかなれや野邊に刈かふあさくさのくはんをむまのはみのこしつる

其時をおもひて

土手の馬くはんを無下に菜つみ哉

正月已巳(己巳)、布施の辨才天へ詣侍る

奉納

玉椿蕾とみえてや布施籠(こもり)

梅津硯水會に

窓をやれと梅ほころびぬ大家中

正月廿一日、冠里公に侍座

菜刻みの上手を握る蕨かな

椄木を詣て

來ませるの中繼とや見えつらん

十一日

お汁粉を還城樂のたもと哉

景清が所帶みせぬや二薺

漸覺春相泥といふ切句

削かけ膏藥ねりの鼻にあれ

畠から頭巾よぶ也わかなつみ

二人しづか(靜)のかけ物に

なつみ哉扇二ッをとぶこてふ

百人の雪掻しばし薺ほり

万葉しう(集)にも、朱雀の柳と侍り。

所からのけしきを

たびらこは西の禿に習ひけり

とばしりも顏に匂へる薺哉

七種や明ぬに聟の枕もと

なゝ中(くき)や跡にうかるゝ朝烏

砂植の水菜も來たり初わかな

溪邊双白鷺

沐ふ鷺芹梳る流かな

河州八尾娵そしり うすら氷やわづかに咲る芹の花

一升はからき海より蜆哉

石一ッ清き渚やむき蜆

白魚や海苔は下邊の買合せ

行水や何にとゞまるのりの味

白魚や漁翁が歯にはあひながら

白うをの罾にあがるひばり哉

陽炎や小礒の砂も吹たてず

したしき友に

こなたにも女房もたせん水祝

衆鼠入レ懐の夢をひらきて

引つれて松をくはゆる鼠かな

寶引に蝸牛の角をたゝく也

帶せぬぞ神代ならまし踏哥宴

難波人、福の神を祈りて、七人が句を奉る中に、大黒殿をいさめ申せさて、樽ひさつ送られたり。

年神に樽の口ぬく小槌かな

三月正當三十日

山吹も柳の糸のはらみ哉

書成 梟にあはぬ目鏡や朧月

種がしや太神宮へ一つかみ

舞鶴や天氣定めて種下し

格枝、繪馬合に

ことし斯盋ふえたり稲荷山

禁固チ破りて暇チ玉ハル也。

破也見憎い銀を父のため

待としきかば やぶ入やそれはいなばの是は星

故赤穂城主淺野少府監長矩之舊臣大石内藏之助等四十六人、同志異体、報ニ亡君之讐ヲ、今茲二月四日、官裁下令ニ一時伏レ刄齋レ屍。

万世のさえづり、黄舌をひるがへし、肺肝をつらぬく。

うぐひすに此芥子酢はなみだ哉

富森春帆・大高子葉・神崎竹平・これらが名は焦尾琴にも殘り聞えける也。

點印牛面美人の字を彫て、琴形の中ニ備ヘタルを、はじめて冠里公の万句ハ御巻ニ、拝(捺)弘め侍るさて

春の月琴に物書はじめ哉

悼ニ後立志一　初音は女也

昔かな初音三井寺夢の春

題　水

ちくま河春行水や鮫の髄

畫贊

拾得の鳳巾にからむや玉箒

爰にけふ御馬水かへ水間寺

奉納

金柑や冬青にさしても稲荷山

藪入や一ッはあたるうらや算

やぶ入や牛合點して大原迄

元祿内子のさし、む月末つかたに淺茅がはら出山寺にあそび侍り。畠中の梅のほつえに、六分斗なる蛙のからを見つけて、鵙の草茎なろべしと折とり侍る。

草茎を包む葉もなき雪間哉

蝸牛豆かとばかり柳かな

御忌

人の世やのどかなる日の寺林

本多總州公にて

春の夜や草津の鞭のゆめばかり

淺艸川泛レ舟

河上は柳かんめか百千鳥

柳には鼓もうたず哥もなし

欄干や柳の曲をつたふ狙

市川才牛追善

一子九藏名をつぎ侍るに

塗顏の父はなからや雉の聲

紫苑

黒胡麻でこゝをあへぬか土筆

春雨やひじきものには枯つゝじ

箏躬あいさつ

闇の夜のをりないかとは梅の袖

新三十三間堂

若艸やきのふの箭見も木綿うり

青柳に蝙蝠つたふ夕ばえ也

柳上鷺の圖に

さかさまに鷺の影見る柳哉

傾城の賢なるは此柳かな

春雨

綱が立てつなが噂の雨夜哉

此雨はあたゝかならん日次（ひなみ）哉

二月十五日上京發足

西行の死出路を旅のはじめ哉

渡し舟武士は唯のる彼岸哉

佛若シ大晦日に入滅し給はゞ、いかに佛さもさんちやくすべき。かゝる衆生のためには、往生もふのものなるべし。

佛とはさくらの花に月夜哉

山里の名もなつかしや作獨活

初茸の盆と見えたり野老賣

ところうり聲大原の里ひたり

野鼠のこれをくふらんつく〳〵し

竹の香や柳を尋ね蕗のとう

梅がゝや此一すじをふきのとう

二月十七日原驛

富士の朧都の大夫見て譽ん

おぼろとは松の黑さに月夜哉

類燒の比、邊鄙の居を問て、一樽に玉子を送る人に

わらつとや雪の玉水十とよむ

南都にあそぶ。雨

傘や薪の夜のあり（螘）とをし（通）

無二車馬喧一

夕日影町中に飛こてふ哉

見獅子倫有感

て（蝶）ふしるや獅子は獸の君也と

蝶とぶや猿をよび込原屋敷

藁屑に花を見すてしこてふ哉

釋　案

聖堂にこまぬく蝶の袂哉

百とせはねるが薬のこてふ哉

柳燕圖

乙鳥の蘆をうごかす柳哉

茶の水に蘆な落しそ里燕

畫さん

燕やかろき巣を曳凧

階子からとぶさ（鳥總）に及ぶつばめ哉

海面の虹をけしたるつばめ哉

傘に塒かさうよぬれ燕

飈（おほかぜ）やひばりあがれと夕日影

うつくしき顏かく雉の距（けづめ）かな

人うとし雉をとがむる犬の聲

角田川にて

なれも其子を尋るか雉の聲

海苔すゝぐ水の名にすめ都鳥

小田かへす鍬も柱やのこる鴈

爰かしこかはづ鳴江の星の數

ちんば引蝦（かはづ）にそふる泪かな

帆柱のせみよりおろす雲雀哉

苗代や座頭は得たる畝傳ひ

たねおろし俵に渡す小橋哉

景政が片目をひろふ田螺かな

みの路にかゝり侍るに

孫どもの蠶やしなふ日向哉

春雨や桑の香に醉みの尾張

沾德、岩城に逗留して、餞別の句なきを恨むるよし、聞え侍りしに

松島や嶋かすむとも此席

南村千調、仙臺へかへるに

行春や猪口を雄島の忘貝

富士の繪にのぞまれ侍り。

三帆舟は塩尻になるかすみ哉

小庭にうつしたる梅の小枝に、鶊の草莖を見出て、人々に句をすゝめけるついで

梅の名をうたてや鶊のやどりとは

いせの雲津を過侍る、夕げさふ比
に
馬に出る子を待門や傀儡師
傀儡師阿波の鳴戸を小哥哉

四睡圖
かげろふにねても動くや虎の耳

三州小酒井村觀音奉納
如意輪や鼾もかゝず春日影

或お寺にねう比丘とて、腰のぬけたるおはしけり。住持の深くいさなしみ申されしに五ッの徳を感ず。

能睡 煖な所嗅出すねぶり哉
能忘 おもへ春七年かふた夜の雨
能捕 鶉かと鼠の味を問てまし
能狂 陽炎としきりに狂ふ心哉
能取 髭のあるめおとめづらし花心

自得
蝶を噛で子猫を舐る心かな
足跡をつまこふ猫や雪の中

猫の子のくんづほぐれつ胡蝶哉

市間喧
つけ木屋の手なら足なら雨蛙

遠近廓歸の駕籠の内にて
かひなくたゝん春の夜の女とは我んすめ(娘)哉

宰府參詣の舟中
菜の花の小坊主に角なかりけり
醴(あまざけ)に桃李の詩人髭白し
鷄の獅子にはたらく逆毛哉

壬子曲水もよほされて
水香を烏帽子にきせん岩つゝじ
曙やとに桃花の鷄の聲
花さそふ桃や哥舞妓の脇踊
傳え來て雛の寶や延喜錢
見てのみや盜まぬ雛は松浦舟
おはしたに木兎もあり雛座敷
雛やそも碁盤にたてしまろがたけ

三月四日雪ふりけるに
ひなやその佐野のわたりの雪の袖

段のひな清水坂を一目かな
折菓子や井筒に成て雛のたけ
雛のさま宮腹〳〵にまし〳〵ける

永代島八幡宮奉納

汐干也たづねて參れ次郎貝
親にらむ比目を踏ん汐干哉
紀國の鯛釣つれて汐干かな

對酌

もどかしや雛に對して小盞
山水にあの氣違は茶碗哉
菓子盆にけし人形や桃の花
曲水や筧まかする宿ならば
綿とりてねびまさりけり雛の貞
くり言を雛も憐め虎が母
雛くれぬ人を初瀬の棧敷哉
緣豆の頭も白し桃の眉
順禮はよそに拜むやとり合

貝そろへを送られしに

蛤のしかもはさむか玉柳

行露公、あたみへ御浴養の比、はなんけの句奉るべきよし仰ありて、觀遊の御書ども聞えけるに

脇息にあの花おれと山路哉

露沾公御庭にて

寐時分に又みん月か初櫻
緣からはこなた思ふや花の庭
地諷や花の外には松ばかり
花見哉母につれだつ盲兒
いざゝくら小町が姉の名はしらず

黑谷にて

万日の人のちりはや遲櫻

仁和寺

いなづまのやどり木成し櫻哉

上野にて

浮助や扈從見に行櫻寺

妙鏡坊より花送れしに

文は跡に櫻さし出す使哉

花中尋友

饅頭で人をたづねよ山櫻

一筆令ニ啓上ニ仕さ招れて

初櫻天狗のかいた文みせん

友猿の友ぎらひすな花衣

三月廿日、含秀亭の山ぶみに御供して

御近習や花のこなたにかたをなみ

門柳薗をはらふ折ふし、うぐひす啼。

御用よぶ丁兒(でっち)かへすな花の鳥

矮屋、妻奴の膝をいるゝのみなるに、心まゝなる酒を呑て

傀儡の皷うつなる華見哉

石河氏宜雨公の山庄に、美景をあつめて、四方に四の風情をもてなし給へるに

二筋の道は角豆か山ざくら

護國寺にあそぶ時、馬にてむかへられて

表中郎雨上有西湖 白雲や花に成行顔は嵯峨

立君をあはれむ。

ざれありく主よ下人よ花衣

京よりくだる人にとづてして

花に逐て親達よばん都哉

寝よとすれば棒つき廻る花の山

山櫻猿を放して梢かな

花折て人の礫にあづからん

花は都物くるゝ友はなかりけり

侍座

花にこそ表書院でお月代(さかやき)

花に來て都は幕の盛哉

華盛子であるかるゝ夫婦哉

はな盛ふくべ踏わる人も有

世の花や五年已前の女とは

目黒松隣堂にて

浮世木を麓に咲ぬ山ざくら

遊二東叡山一　三句

小坊主や松にかくれて山櫻

八ッ過の山のさくらや一沈み

人は人を戀の姿やはなに鳥

芳野山ぶみして

明星や櫻さだめぬ山かづら

折に殺生偸盗あり。

あだ也と花に五戒の櫻哉

行露公、年ゝ御庭の花を給りける。ことしおそかりければ、

花を得ん使者の夜道に月を哉

妓子万三郎を供して

その花にあるきながらや小盃

酒のさかなに、さくら花をたしなむ人に

下臥に漬味みせよ塩櫻

惜レ花不レ掃レ地

我奴落花に朝寐ゆるしけり

雨後

さくらちる彌生五日はわすれまじ

上野清水堂にて

鐘かけてしかも盛のさくら哉

ちる花や踏皮(たび)をへだつる足の心

日輪寺の僧と、連哥のかたはらに對興して

花に酒僧とも侘ん塩肴

一食千金さかや

津國の何五兩せんさくら鯛

辛未の春上野にあそべる日　門主薨御のよしをふれて、世上一時に愁眉ひそめしかば、

其彌生その二日ぞや山ざくら

花に鐘そこのき給へ喧嘩買

上野御

わたり徒士見立る比の花見哉

尋花

植木屋の亭主留守也花いまだ

湖春と清水に遊びて

車にて花見を見ばや東山

花笠をきせて似合ん人は誰

酒を妻妻を妾の花見かな

王維山水寸馬豆人

此雨に花見ぬ人や家の豆

永代寺池邊

池を呑犬に入あひ花の影

甫盛、はじめて上京に

花ぞ濃伊勢を仕まへば裏移

大悲心院の花を見侍りて

灌頂の闇より出て櫻哉

茶もらひに此晩鐘を山櫻

折とても花の間のせがれかな

沓足袋や鐙にのこる初ざくら

明ぼのゝ山鳥（原本缺字）櫻かな

海棠の花のうつゝや朧月

小鳥居は葉守の神かつゝじ山

月雪に山吹花の素顔よし

亦是より木屋一見のつゝじ哉

藤咲て鰹くふ日をかぞへけり

旦夕（たそがれ）のはしるはじむるつゝじ哉

水影や鼯（むさゝび）わたる藤の棚

心なき御影さんはに岩つゝじ

よそに見ぬ石の五德や藤の露

白藤を酢みそにつたふ雫哉

淺艸川逍遙

鯉のもは山吹の瀨やしらぬ分

錦にも藤の虱は憎からじ

三月十二日、含秀亭の花とし百五十余種、うへ添給へる下莚に侍りて

植足に三切の供や山ざくら

同じく入相

此〳〵と花の名殘や節扇

秋航・庭せゝりせらるゝに

たそがれや藤植らるゝ扇取

龍樹菩薩の禪陀伽王に對して、貪欲なしめし給ふに、たとへば有瘡

人近猿煙始雖悦後增苦の文のこゝろを

雁瘡のいゆる時得し御法哉

摩訶止觀に

一日之羅不能得鳥得鳥之羅唯是一目、此文のこゝろを

鳥雲にゑさし獨の行衞哉

意馬心猿の解

立馬の曰は猿の華心

雜司谷にて

偶のは白くあられふりせき入し水のおとづれもせぬ。

山里は人をあられの花見哉

わが三嘯公、侍從になりて、寶永二年三月廿七日に、京使にたち給ふを祝して

藤浪や廿七人草履とり

芭蕉の白壽十三懷周之讃

師の坊の十年しばし柳陰

若鳥やあやなき音にも時鳥

有明の面起すやほとゝぎす

淀舟や犬もこがるゝ郭公

夜這星鳴つるかたや子規

官城

歷〻や下馬の折ふし時鳥

河東

川むかひたが屋敷へか子規

鵺啼や此あかつきを郭公

曉の氷雨をさそふや郭公

百間長屋にて

時鳥人のつら見よ下水打

子規一二の橋の夜明かな

阮咸が三味線しばし時鳥

傾廊

時鳥あかつき傘を買せけり

亦打山

夜こそきけ穢多が太皷鵑（ほとゝぎす）

きぬ〴〵の用意か月に時鳥

廬山雨夜　寮坊主のまねば淋しほとゝぎす

寧府奉納

ほとゝぎす鳥居〳〵と越にけり

林中不レ賣レ薪

せになくや山時鳥町はづれ

さる江といふ村にて

くらぶ山材場の日陰や時鳥

梺寺五加がおくをほとゝぎす

曲終人不レ見

曉の反吐はとなりか郭公

時鳥われや鼠にひかれけん

子もふまず枕もふまず時鳥

母におくれ侍りて、たのみなきゆめのみ見る曉

夢にくる母をかへすか郭公

枳風がつまな供して、あたみへ行さて

馬の間妹よびかへせほとゝぎす

桑名にて

蛤のやかれて啼やほとゝぎす

それよりして夜明烏や郭公

點滴を硯に奇也ほとゝぎす

自叉

人間の四月にふけれ郭公

時鳥茄子も三ッの小籠哉

う月十七日、ある人の愛子にねだり申されて

郭公幟そめよとすゝめけり

月消て腰ぬけ風呂や郭公

六阿彌陀かけて鳴らん子規

淺艸寺樹下

虫つかぬ銀杏によらん郭公

葉に成て畫れぬ梅や郭公

ほとゝぎす只有明の狐落

時鳥人を馳走に寢ぬ夜哉

日の上に日をかく人や子規

夢レ晝

砂は日にね覺を洗へ郭公

姉が崎の野夫、忠功孝心をきこしめされて、祿を給はりたる事、世にきこえ侍るを

起てきけ此時鳥市兵衛記

佛さへこの世間(よのなか)はくろしきにしら
でやけふは生れ出けん
麥飯や母にたかせて佛生會

風光別我苦ニ吟身ニ
大酒に起てものうき袷哉
越後屋にきぬさく音や衣更
一ッところに袷に成や黑木うり

卯月八日母におくれて
身にとりて衣がへうきう月哉

慈母墓
花水にうつしかへたる茂哉

上行寺
灌佛や捨子則寺の兒

若葉句合に
年寒しわかばの雲の朝ぼらけ
殿つくり並でゆゝし桐の花

夕のはなぶさ
うかれめや異見に凋む夕杜(牡)丹

いにしへのならのみやこの牡丹持

河刕觀心寺
楠の鎧ぬがれしぼたん哉

筑前紅な
しらぬ火の鏡にうつる牡丹哉

雨意　艶士にめで、
八専をうつゝに笑ふぼたん哉

池田の海棠子、宵柏の行狀をあつ
めて集あめろに
さゝはうし角に火ともすふかみ草

下洛、卯月の中の一日
隱岐殿のかへり見はやせ鏡山

朝叟・百里・全阿・雨簷等上京の時、三十三日の吟席
也。

寛永(改)開元奉幣使、御代參の人の家
にて
とした氣で伊せ迄誰か衣がへ

屏風に、藤房卿住すつるの所
迷ひ子の三位よぶ也時鳥

長崎屋源左衛門家に紅毛來貢の品

〳〵、奇なりさして
桐の花新渡の鸚鵡不言（ものいはず）

愛娘子
鶏啼て玉子吸蚊はなかりけり

序令初めて上京に餞
攝州鶴 涼み迄都のそらや連と金

護國寺にあそぶ。
水漬に泪こぼすや牡（杜）若
かきつばた疊へ水はこぼれても
紫の蛛もありけりかきつばた

奉納
篠まけ雨に提來る杜若
から衣御影やかけて杜若

田家
早乙女に足あらはるゝ嬉しさよ
汁鍋に笠のしづくや早苗取

木賀入湯のころ
しばしとや早苗より見る寺の門
袖裏や茄よりけに白くゝり

舟哥の均しを吹や夕若葉
卯花や蠣がら山の道のくま
うの花やいづれの御所の加茂詣

寄ㇾ幻吁長老ㇾ
老僧の筍をかむなみだ哉
筍よ竹よりおくに犬あらん
竹の屁を折節聞や五月闇
擬下無寸鐡 筍や丈山などの鎗の鞘

素堂居
艸の戸は皆喰ものぞ夏の艸

楓子居
夏艸や家はかくれて御用茅
夏草や橋臺見えて河通り
日通の岡の榎や築ざかひ
吐ぬ鵜のほむらにもゆる篝（かゞり）哉
鵜につれて一里は來り岡の松

戸塚誠侍るに
書與 爭はぬ兎の耳やかたつぶり

鰹荷の跡は己(巳)日の道者哉

帆をおろす舟は鰹か磯がくれ

夕塩や客の間にあふ中ふくら

しらすか通る時

世中をしらすかしこし小鯵うり

飯鮓の鱧なつかしき都かな

利重餞に

伊せにても松魚なるべし酒迎

こよろぎの名は昔にてうづは哉

呈二露江公餞一

箒木や人馬へだつる五月雨

さみだれや是にも外を通る人

顔ぬぐふ田子のもすそや五月雨

さみだれや富士の烟の其後は

五月雨や傘につる小人形

さみだれや酒匂でくさる初茄子

厳宥(有)院殿の大法事な、東叡山に拝ミ奉ル。

五月雨の雲も休むか法の聲

市驛吟

馬舟とわかる鰹やけいば組

花あやめのぼりもかほる嵐哉

公門に入時

あやめわく明り障子のみどり哉

錢湯を沼になしたる菖かな

けふぬけふあやめもあやめかはらぬに
宿こそありしやどゝおぼえね

住なれし所へだてゝよめりさ、伊せ大輔、家のしう(集)に見え侍る。

菖こそ蛙のつらにあやめ哉

此友や年なかくさず、白髪二毛の身なわすれて、松どの、太郎どの也けりとのゝしれば、今の人形の風俗をさらに、小兵衛などいふ人形はなし。

我むかし坊主大夫や花菖

五月三日わだましせる家にて

屋根葺と並でふける菖哉

あひしれる女の塔の澤に入て、ふみこしたるに

山笹の粽やせめて湯なぐさみ

艸の戸やいつ迄草のかひ粽

本つゝじ夕べをしめて菖哉

五月十三日

雨雲や竹も酔日の人あつめ

藻の花や金魚にかゝるいよ簾

酒 満

葛のはの酒典童子も二面

菁嵐といふ題を

海松の香に杉の嵐や初瀬山

蝙蝠の屎も子になれあやめ草

交代の薬守の神や初柏

疱瘡のあとは遙に幟哉

綠槐高處

はつせみや笛に袋を十文字

かたつぶり酒の肴に這せけり

鎌倉やむかしの角の蝸牛

たわめてや竹に生るゝかたつぶり

文七にふまるな庭のかたつぶり

河原町にて

妾が家ほたるに小哥告やらん

宇治にて

川ぐまや水に二重のほたる垣

うつせみの綸に

夏虫の恭にこがれたる命哉

谷 中

風ふかぬ森のしづくやかんこ鳥

僧正が谷

侘しらに貝ふく僧よかんこ鳥

下やみや鳩根性のふくれ聲

露江公、溜池の高閣にはじめて涼を挽さき、當座さおせありければ

夏山に我は御簾とる女哉

宇都宮入道 蓮生は哥はよまぬを虫拂ひ

樟脳に代をゆづりはの鎧かな

よめりせし時の枕か土用ぼし
捨人や木艸にかけて土用ぼし
浴衣着て爪〔瓜〕買に行袖も哉

狙公　溜池にて
爪〔瓜〕むいて猿にくはするあつさ哉
水飯にかはかぬ瓜のしづく哉
干爪〔瓜〕やうつむけてほす琶小舟
瓜の皮水もくもでに流れけり

亀毛に餞
瓜の皮笠は重シとかさねけり

破扇の圖
維光が後架へ持し扇哉
鳥飛紺のあふぎのあつさ哉
紅にうちはのふさの匂哉
せみ啼や木のぼりしたる圍うり
隣から此木にくむやせみの聲
竹のせみさゝらにしぼる時も有
水うてやせみも雀もぬるゝ程

白雨や内儀たま〲物詣に

市中白雨といふ題
鳶の香も夕だつかたに腥し
白雨やもりをとむれば鼠の子
うぐひすとのみ
ゆふだちに鶯あつく鳴音哉
夕立にひとり外みる女かな

牛島三遶（みめぐり）の神祠にて、雨乞するものにかはりて
夕立や田を見めぐりの神ならば
翌日雨ふる。

舟中吟
さゝがにの筑波鳴出て里急ぎ
西行と武藏坊には清水哉
芋のはに命をつゝむし水哉
にんにくの跡が清水の心かな
土用のいりといふ日の吟也。
箒木に茄子たづぬる夕哉

鳥山へおもむく人に
青柳やつかむ程ある蚊の聲に

夕がほや白き鷄垣根より

鴫焼は夕べをしらぬ世界哉

麻村や家をへだつる水車

或人の従者参宮しけるに、はなむけすさて

夏の夜を吉次が冠者に恨哉

夏の夜は寐ぬに病氣の起けり

生死去來

鳥行蚊はいづくより暮の聲

捕虎　東坡

七ッ毛の蚊にくるしむや足疾鬼

蚊柱にゆめのうき橋かゝる也

蚊をやくや褒姒が閨の私語

かやり火や蚊屋つる方に老獨

更閑

石灯籠蚊屋に消行鵜舟哉

いきけさにすでんどうさ、うちはなされたるが、さめて後

切れたる夢は誠か蚤の跡

旅店

富士の雪蠅は酒屋に殘りけり

ある人、大なるふくべを二に引割て[illegible]し、外は地さびのまゝ、内は朱に塗て、わに口にむら雨なかゝせて、句をのぞむ。

清水影李白が面にかぶりけり

形、目鼻なきめんのやう也。

淺草河蔵ゝ吟凉

此人數舟なればこそすゞみ哉

川涼み顔に泥ぬる詠かな

涼みつむ安房や上總に舟はなし

すゞしさや帆に船頭のちらし髮

舟暑し覗かれのぞく闇の顔

千人が手を欄干や橋すゞみ

涼しさや先武藏野の流星

韓退之捨酒吟あり。

酒ほかす舟をうらやむ涼み哉

こまかた

此碑では江を哀まぬ螢哉

牛御前

是や皆雨を聞人下すゞみ

橋上休老といふ題に

牛泥む老の齒がみや橋すゞみ

舷を玉子でたゝくすゞみ哉

海を見て涼む角あり鬼瓦

餞久松肅山

筆をさす御笠やかろき下涼

人の子をめでゝ

涼しいか寐てつむり剃ゆめ心

畫讃

大虚涼し布袋の指のゆく所

日枝にむかひ給ふ御神を

十八の明神つねにすゞみ哉

河原にて

曉を牛さえすゞみ車かな

此松にかへす風あり庭すゞみ

遊子殘月

勘當の月夜に成し涼み哉

暑字　行露公にて

むら雨の木賊に通る暑さ哉

呈餞　露江公

供がたの鞘の暑さや岡の松

人に又暑い顔あり端涼み

白嚢

たが爲ぞ朝起晝寐夕すゞみ

五月十日雷雨、永代島の茶店にやどりして

明石より神鳴晴て鮎の盞

住吉にて西鶴が矢數誹諧せし時に後見たのみければ

驥の歩み二万句の蠅あふぎけり

七十余の老醫みまかりて、弟子どもこぞりてなくまゝ、予に追善の句を乞ける。その老醫のいまぞかりける時、さらに見しれる人にもあらず。哀にもおもひよらずして、古來稀なる年にこそなどいへど、とかくゆるさざりければ

六尺も力おとしや五月雨

村田忠菴が事也。

年々の春秋、武江の寺社に廻り給ふなる靈佛靈神、君を守りのおさしめて、興廢の御威現あらたなる中にも、當時の開帳はさが（嵯峨）の御てらさ札をうたれて、官駕・鄙馬のさかひに暑をなやます。霍亂・虫氣のさはりもなく、蟻のごとくにまふでつだふ。行程の遠近を辻番にたづねて

まはらば廻れ振舞水の下向道

祐天和尚に申す。

夕顔にあはれをかけよ賣名號

晝顔に米搗涼む哀也

故翁の句を繪にかゝせて、讃のぞむあり。その繪は夕良の花を書たり。句とたがひ侍るゆへ自句を書侍る。

夕顔や一臼のこす花の宿

逐ニ歐陽公ニ賦

蠅の子の兄に舜なき憎さ哉

畫讃

蟷螂の小野とはいはじ車百合

市中勞

子の肩とみつわぐむ也夏旱

魚市涼宵

楊貴妃の夜は活たる鰹かな

七月七日靈夢を感じて、東湖の辨才天に詣侍るに

出ぬ茶屋に欺かれても蓮哉

荷（はす）切や下手にし切れば莖を角

哥仙貫之の古畫に

冠にも指をそふめり哥の汗

青流亡妻をいたみて

園女とはこれや此世を夏の海

上下と裸の間を夕すゞみ

ある御方より、あさがほ書たる扇に、賛（さん）せよとあり。

舜（蕣）や扇のほねを垣根哉

さ書て奉けるに、かされてまた筆

繪かいたる扇に、さん望まれ給ふ。

再は申かれて

凉風や與一をまねく女なし

鬼のやうなる法師、みちのくへくだるとて、道祖神にとがめられ、異例して何がしのもとに介抱せられ、漸生のびて、心よはき文ども送られしかへしに

辨慶も食養性や瓜畠

瓜守や桂の生洲たえてより

越前の人の土産をめでゝ、光廣卿のうたをおもひ合侍り。

鰹哉先まなばしを袖で拭

元角田川牛田といふ所にて

いそのかみ清水也けり手前橋

湖舟、餞に酒たうべて

貫之の鮎のすしくふわかれ哉

はなんけの一句を扇に望れて、生の松ばらのうたをよす。

木曾路とや凉しき味をしられたり

市原にて

虫はむと朽木の小町干れたり

手にとるも林檎は軸で面白し

百日のあゝら戀しや洗ひ鯉

皿鉢に駒のけあげや心てん

乳のめば清水がもとの祭哉

七日

鉾にのる人のきほひも都哉

山王の氏子として

我等迄天下祭や土ぐるま

番附をうるも祭のきほひ哉

松原に田舍祭や晝休み

夏痩に能因しかも小食也

乞食哉天地を着たる夏衣

高閣挽凉

香薷散犬がねぶつて雲の峰

蝙蝠に宇治のさらしや一曇

螢ならてなす人に
うき舟の涼しき中へかにの甲
ねてかとへ蓮にさそふ朝朗
大雨大風
吹降の合羽にそよぐ御秡(祓)哉

(五元集 亨)

待宵や明日は二見へ道者われ
雲井にかけしの繪に
傘持は月に後るゝすがた也
木母寺に哥の會ありけふの月
名所月
名月やこゝ住吉のつくだ島
霜獻上 小ぐらから古郷の月や明石潟
雨
上州佐野 駒とめて釜買獨けふの月
川筋の關屋はいくつけふの月
新月やいつをむかしの男山
水相觀の繪に
我書てよめぬ物有水の月
名月や居酒のまんと頰かぶり
得レ螢無レ酒
螢を畫て座敷這する月み哉

名月や疊のうへに松の影

雨

納屋に何雨吹晴てけふの月

名月や竹を定むるむら雀

夢かとよ時宗起て月の色

あつたにて

更ゝと禰宜の髯や杉の月

紀川　いくせもあり。

たつか弓箭に行水やみかの月

所思

いざよひも心づくしや十四日

名月や金くらひ子の雨の友

闇の夜は吉原ばかり月夜哉

月出て座頭傾く小舟かな

人音や月見と明す伏見艸

維摩のさん

山のはは大衆也けり床の月

張良圖

胸中の兵出よ千ゝの月

布袋の月を掬ル繪に

有てなき水の月とや爪はじき

寺

寺の月ぶだう蝓は葉にもらん

名月やかゞやくまゝに袖几帳

（木がくれてのみ）烏帽子屋はゐほしきて見よけふの月

閑倚橋

猿這に我とらんとや橋の月

含秀亭

富士に入日を空蟬やけふの月

風雨

雷に棹はなびきそ月見舟

小野川けんぎやうに餞

入月や琵琶を袋におさめけん

三日糧をつゝむといふに

名月や十歩に錢を握ッけり

巴江

聲かれて猿の齒白し峰の月

舟中に、ほていを書て、袋にそへた

ろ杖の、棹に似たるを

月見るも杖につなげる小舟哉

琵琶行をよむ

良夜に比巴（琵琶）を興じて、爰ら潯陽の客と思ひなす。酒をそへ灯を遠めて、深更いやましに村雨の心をはらし、私語の耳をそばだつめる感あり。かの十三より學得てし曹保は、祕曲もさぞな、人を泣しむさへ聞えつるすさびも、をはりにこそさ云に、其夜閑なる聞て哉さ聲をひそむるものはなくて、長うなれさ枕を投出す。かく無風情の人、一藝ありやさいへば、

十五から酒をのみ出てけふの月

あさづま舟につゞみ（鼓）を入て月をみろ女の、水干に扇かざしたる繪に

おもふ事なげぶしは誰月見舟

所懐　京にて

いはぬ事三ッ心に名有けふの月

母と月見けるに

ねられねば雨元政の十三夜

旅泊

うれしさや江尻で三穂の十三夜

藥研では粉炊おろすか後の月

住の江や夜芝居過て浦の月

白玉に芋を交ばや瀧の月

後の月上の太子の雨夜哉

しかぞすむ茶師は旅ねの十三夜

後の月躍かけたり日傘

十三夜を

やよや月夜は物なき木挽町

閏十五夜　前の良夜は江戸雨ふりければ

御番衆は照月を見て駿河舞

平家落足の屏風に

宿なしのとられて行し月見哉

柴ふるひ荷へる人に

名月や皺ふる人の心世話

名月や人を抱手を膝頭

待乳山

こよひ滿り棹のふとんにのる烏

契不レ逢戀

閨の灯に光る座頭や袖の月

一休の狂詠自畵を寫して

甲申

律師沙彌相剃をして月み哉

松前のきみに申送り侍る。

こさふかば大根で消さん秋の月

十六宿は儒者と名乘し姿也

漬蓼の穗に出る月を名殘かな

同十三夜

笈の菓子古鄕寒き月見哉

病中制禁好

橋桁の串海鼠はづすや月の友

新宅吟

汐汲をかゝへてみばやけふの月

宗因、光月なうるの句をとりて

芋は〳〵凡僧都の二百貫

君がいひけんとのはさ、いひすて

ゝ出たりけんおした。

物かはと靑豆うりか袖の月

鐘聲客船

名月や御堂の皷かねて聞

遊子

いねぶるな松の嵐も江戶の月

鴈鳴や弓弛をみれば昏の月

玉津島歸望

わかはみつ更井の月を夜道哉

いざよひや龍眼肉のから衣

上交語上

平家也太平記には月も見ず

吉野の山ぶみせしころ、こよひた

れすゝふく風、とよまれし世尊寺

に篠分て

賴政の月見所や九月盡

九月廿七日の月を惜

見し月や大かた晴て九月盡

不卜家句合

文月や陰を感ずる蚊屋の中

七夕や暮露よび入て笛を聞

星合やいかに痩地の瓜つくり

雨後

鵲や石をおもしの橋も有

星合や山里持し霧のひま

新居

梯梢かけてかよへや銀河

天川けふのさらしや一しほり

青山邊にて

踊子を馬でいづくへ星は北

侍座

刺鯖も廣間に羽をかはしけり

笹のはに枕つけてやほしむかへ

二星恨む隣のむすめ年十五

かさゝぎや丸太の上に天川

星合や女の手にて哥は見ん

ほしあひや曉になる高灯籠

丸腰の冶郎笠とれ星むかへ

比叡にのぼりて

星あひや双林塔の鈴の音

橋と成烏はいづれ夕がらす

七月朔日餞二薺山子一

かけて待伊豫簾も輕し桐の秋

葛花や角豆も星の玉かづら

小娘の生さきしるしかけ躍

小屋涼し花火の筒のわるゝ音

鵜さばきも逆櫓もやるや花火賣

玉川の水筋、かれたるとし

水汲の曉起やすまふ獨

増上寺晩景

馬老ぬ灯籠使の道しるべ

七夕うたづくしなどいふ草紙

行水に數かくよりも鷺に傘

弄化生

あひろの子字ルといなや天川

欄經よみにまいられし僧の、袖よりおひねりを落しける。かの授記品の有無價寶珠、と説せ給ふ心を

おもひて

衣なる錢ともいさや玉まつり

永代島にあそぶ。

遊山火を芦のははけや玉迎

玉まつり門の乞食の親とはん

きのふみし人や隣の玉まつり

得二斗酒一

陌上塵淵明が隣あつめや生身玉

棚經や此あかつきのあかの水

見る人も廻り灯篭に廻りけり

送り火や定家の煙十文字

千之と黄蘗にあそぶ。

盆前をのがれし山の二人哉

稻づまやきのふは東けふは西

妻におくれて後、子にもはなれたる人に

いなづまや思ふもいふも紛るゝも

伊勢の鬼見うしなひたる躍哉

身にしむや宵曉の舟じめり

舟興

萱雨が花火間もなき光哉

扇的花火たてたる扈從哉

妓子万三郎を悼て

折釘にかつらや殘る秋のせみ

鬼灯のからを見つゝやせみの空

悼二齊一

其人の鼾さえなし秋の蟬

投られて坊主也けり辻相撲

よき衣の殊(ことに)いやしやすまひ取

ト石やしとゞにぬれて辻相撲

神のため女も賣や相撲札

相撲氣を髮月代の夕かな

山城がまだ鑄ぬ形や鈷西瓜

遊二弘福寺一

木犀や六尺四人唐めかす

中の郷にて

幸淸が霧のまがきや昔松

雨後 二句

あまがへる芭蕉にのりてそよぎけり
殊晴て雷朝顔にいさぎよし
葬の日陰まだあり中老女
舜に立かへれとや水の物

いせぜにかけ松
蛛のゐや薄をかけて小松原

稱竹三竿
竹の聲許由がひさごまだ青し
つぼみとも見えず露あり庭の萩

長野豊受野をわたりて
角文字やいせの野飼の花薄
岡釣のうしろ姿や秋の暮
芦の穂や蟹をやとひて折もせん

客至
醤油汲小屋の堺や蓼の花

葉葬といふを
朝顔に花なき年の夕哉
花もうし佐野の渡の蓼屋敷
酢を乞ありて隣の蓼の花盛

三遶本納
早稲酒や稲荷よび出す姥がもと
露の間や浅茅原へ客草履
頬摺やおもはぬ人に虫屋迄

野店無ニ肴核一
足あぶる亭主にとへば新酒哉
酒買に行か雨夜の鴈孤ッ

浅茅原にて
化野や焼もろこしの骨ばかり

春日法楽
今幾日秋の夜詰をかすが山
四所の宮人、夜ごとにとのゐして、戌の刻たか侍る也。

野外夕虫といふ題にて
蜻蛉や狂ひしづまる三日の月

相摸川洪落水接レ天
狼の浮木に乗や秋の水

二挺立の歸掉
鬢を焼枕つれなし星の露
鶏頭や松にならびの清閑寺

こまひきの題にて
甲斐駒や江戸へ〳〵と柿ぶだう
みの路に入て　素牛にて
駒曳や岩ふみたてゝ元筥根
ある長者のもとにて
砧きかん孫六屋敷志津屋敷
中の間にねぬ子幾人さよ砧
和水新宅
さい槌の音を仕まへば礎かな
臾好の殿やうつらんから衣
遠里小野の虫聞にまかりて
霧雨は尾花がものよ朝ぼらけ
茸や御幸のあとの眉つくり
あたかのわらべに扇とらする序に
關守の心ゆるすや栗かます
大和路の女に物いひて
泊瀬女に柿のしぶさを忍びけり
嵯峨遊吟
清瀧や澁柿さはす我心

茸狩や山のあなたに虚勞病
女中の茸がりに
茸狩や鼻の先なる哥がるた
舟中
ない山の富士に並ぶや秋の暮
秋山や駒もゆるがぬ鞍の上
隅田高橋之記　稻葉見に女待そへすみだ河
烁の空尾上の杉をはなれたり
餞ニ秋航ニ
諸鶉駒はまかせぬ脇目かな
松虫に狐を見れば友もなし
柴栗さいせをかたりて
故郷も隣長屋かむしの聲
すむ月や髭をたてたる荃
夜過レ山
鈴虫や松明先へ荷はせて
山川や梢に毬はありながら
たばこ干す山田の畔の夕日哉
二見にて

岩のうへに神風寒しはな薄

長谷越

山畑の芋ほるあとに伏猪かな

川芎の香にながるゝや谷の水

遠州二股川を河舟にて下り侍るに推河脇といふ所、逆水大切所をこえて

打櫂に鱸はねたり淵の色

一夜前栽といふ事を

御城へは何に入やらをみなへし

功悠亭にて

日盛を御傘と申せ萩に汗

専吟庵

萩薄むすび分ばやササ𦬇(ぼさつ)

曉松亭

獅子舞の胸分にすな庭の萩

楓子亭

ねだり込は誰の内儀ぞはぎに鹿

井筒を略したる書に

いそのかみ竹輪にむすぶ薄かな

田家

庭鳥の卵うみ捨し落穂かな

敷藁に稲ほす窓は手織哉

餞ニ青流難波ニ

芦刈のうらを喰せて砧哉

隣家にもさ結こくを

大絃は晒す元結に落る雁

元結のねる間はかなし虫の聲

太郎二郎の貝をさりて

かけ出の貝にもてなす新酒哉

露香月灯を憐。

古寺や漉紙ふまん所だに

駿府御番に旅だち給へる人に

たが上に賤機ごろも木漉桶

同仙石玉芙公御加番に餞別

萩すりや傘すかす昔鞍

葵上 あふひのうへの後、花子、喜太郎

三栗のうはなり打や角被

在原寺にて

僧ワキのしづかにむかふ薄かな

松のはにその火先たけ薄醬油

感徹和尙に對す。

そば打や鶉衣に玉だすき

品川泛鉤

鴈の腹見送る空や舟の上

白雲に聲の遠さよ數は鴈

むすめ喰そめに

鴫啼や赤子の頬を吸時に

順檢にとはず語や百舌の聲

曳尾

泥龜の鳴に這よる夕哉

餞二少長上京一

うら枯に花の袂や女ほれ

如是果のこゝろを

二子山二子ひろはん栗のから

尾州淨敎寺にて

燕もお寺のつゞみかへりうて

宵闇や霧のけしきに鳴海がた

鹿の一聲といふ小うたのさんに

更がたを誰が御意得て鹿の聲

さほしかや細き聲より此流

木辻にて

門立の袂くはゆる男鹿かな

小原女や紅葉でたゝく鹿の尻

秋葉禪定の時

合羽着て鹿にすがるやあきは道

下山

かし鳥に杖を投たるふもと哉

芭蕉翁、嵐蘭を悼める詞あり。

嵐蘭一子、孤愁をあはれむ。

芋の子も芭蕉の秋を力かな

めおさむつましくて、年比子なき

事をなげく人に

おもふ葉は思ふ葉にそへ秋菓

二月室にまいりけるに、七日斷食

の僧、堂のかたはらに行ふこゑを

聞て

日の目見ぬ紙帳もてらす栬哉

甚五左衛門にあひて

此風情狂言にせよつたの道

產寧坂くだりて

菊紅葉鳥邊野としもなかりけり

戸越山庄

むら栬荏の實をはたく匂哉

かつちりて翠簾に掃るゝ栬哉

あさふ山庄

谷へつけ鹿のまたきの栬狩

三條橋上

片腕は都にのこす紅葉哉

ある人の從者に

紅葉にはたが敎えける酒のかん

山姫の染から流すもみぢ哉

箱根

杉の上に馬ぞ見えくる村紅葉

高雄にて

此秋暮文覺我をころせかし

泊瀨にて

栬見る公家の子達かはつせ山

山行

道役に紅葉はく也さよの山

いせにて

紅葉して朝熊の拓といはれけり

南天やをのがみほどの山のおく

南天の實を包めとや鴈の聲

南天や秋をかまゆる小倉山

うつの山の繪に

旅思四句

笈の角梢の蔦にしられけり

七十の腰もそらすか鳴子曳

いつしかに稲を干瀨や大井川

山の端をやんまかへすや破れ笠

水郷

唐秬を流るゝ沓や水見舞

富士

笠取よ富士の霧笠時雨笠

朝霧や空飛夢を不二颪

背面達磨を畫て
武帝には留守とこたえよ秋の風
旅思 二句
みゝづくの獨笑ひや秋の昏
みゝづくの頭巾は人にぬはせけり
本多下總守どの御侍の宴
召ごに馴し子方や花薄
うら枯や馬も餅くふうつの山
後園
いきぬけの庭や鐙摺菊の花
手の内の穀こぼれてきくの露
旅行
駕籠に濡て山路の菊を三島哉
しほらしき道具何ある菊の宿
荷分が從者たんざくほしがるに
土器の手ぎはみせばやけふの菊
けふの菊小僧でしるやさらさ好
きくの香や瓶よりあまる水に迄
白鷄の碁石になりぬきくの露
雨重し地に這菊を先折ん

こは誰に雨ののこりの袋菊
素堂、殘菊の會に
此菊に十日の酒の亭主あり
畫菊
きく白く莟は後にかゝれたり
榮苑
菊を切跡まばらにもなかりけり
水鼻にくさめ也けり菊枕
病起 千山ヨリ菊ヲ得て
大母衣のうしろを押や瓶の菊
三島にて重陽
門酒や馬屋の脇のきくを折
宮川のほとりへ酒送せられて
重箱に花なき時の野菊哉
みちさせのもゝの名におふきくの
笆(まがき)に、さよみけるにおもひよりて
いかで我七百の師走菊にへん
竹苑のやごなきたれをうつし奉り
て、花奇なるを

出世者の一もとゆかしつくり菊

翁さび菊の交(ツル)むに任せたり

時服藏菊にはきくの笆哉

十日菊

觀世殿十日の菊をかねてより

女子なれがひて、まふけたる人に

かに屎にうつろふ花の妹哉

十日菊

宸宴の殘りもがもな菊膾

笠きたる西行の圖に

菊を着てわらぢさながら芳しや

袖の浦といふ貝づくしに

白菊を貝の實にせん袖の浦

那波屋九郎左衛門がさかづき也。

御迁宮の良材ども拜奉りて

大工達の久しき顏や神の秋

御齋にまふで奉りて

御穗を取て髮あるまねのかざし哉

内宮 法樂の遥拜なるに

身の怀や赤子もまいる神路山

外宮

日は晴て古殿は霧のかゞみ哉

いづれも〳〵わが身はよかりあるゆへに申侍る也。

雲津川にて

太ゞや小判ならべて菊の花

冠里公御わだまし祝奉て

花すゝき祭主の輿を送りけり

初鴈や臺は場はれて百足持

周信が瓢の畫に

白露も一升入のめぐみ哉

平家の哀を語るに

かへり來て福原淋しうづら立

元祿辛未のとし、大山榎島へ參詣

品川 紀行前書略之。

品河もつれにめづらし鴈の聲

さつか

稻塚の戸塚につゞく田守哉

藤澤

宿とりて東を問やくれの月

いせ原

よこ雲や離〱の蕎麦畠

御向松にて

生栗を握つめたる山路哉

大山

腰押やかゝる岩根の下もみぢ

石藏寺對レ僧

手に提し茶瓶やさめて苔の露

二間茶屋にて

白馬の尾髪吹とるすゝき哉

由井がはま

朝霧に一の鳥居や波のおと

雪の下にやどりて

砧うつ宿の庭子や茶の給仕

鶴岡左の古樹のもとにて

有し代の供奉の扇やちる銀杏

横几追悼

一鍬を手向にとるや新糀

酒もろ詞を切題にして、各一字を探る中に間を

あいせばや夜寒さこその空寐入

白晝雁

片足はやつしゆ也小田の鴈

秋のくれ祖父のふぐり見てのみぞ

白扇倒懸東海天、といへる句つれ此いたゞきに對して、手ににぎりたる心ちせらる。このあした雲霧立おほひて、山の半腹より見わたされたるを、要よりすそといはんも、後句なりとて、

白雲の西に行衞や普賢富士

未曉吟

鐘つきよ階子に立てみる菊は

洞房の茶屋字兄、生前笛を好けるが、うせたるを悼て

とぶらへや笛の爲には塗足屐

悼二朝叟一

此人に二百十日はあれずして

吉田氏

唐網も糸をたれたる手向哉

芭蕉翁十三回

辰霜や鳳尾の印のそれよりは

寳永三戊十一月廿二日、妙身童女
を葬りて

霜の鶴土にふとんも被されず

神無月ふくら雀ぞ先寒き

高砂や禰宜の湯治の神無月

玉津島にて

御留居に申置也かみな月

高野にて　十月三日

卯塔の花表やげにも神無月

鷺からす片日かはりやむら時雨

あれきけと時雨來る夜の鐘の聲

時雨ゝや葱臺の片柳

芭蕉翁三回

しぐるゝや此も舟路を墓参

帆かけ舟あれや堅田の冬げしき

遊二金閣寺一

八疊の楠の板間をもるしぐれ

大和めぐりせし比

蓑を着て鷺こそ進め夕しぐれ

むら時雨三輪の近道たづねけり

芭蕉翁病床

吹井より鶴をまねかん時雨哉

釣柿の夕日ぞかはる北しぐれ

飼猿の引窓つたふしぐれ哉

時雨くる醉やのこりて村霽

しぐれもつ雲の間にあへ酒の間　とたはぶれし人に
こたえし也。

當麻寺おくのゐんにて

小夜時雨人を身にする山居哉

當院に靈寳・什物さまぐ多し。
中にも小松どの、法然上人へまい

らせられし松かげの硯あり。箱の上に馬蹄さかきて、硯のうみの形容さす。

松陰の硯に息をしぐれ哉

世尊寺より、にしかうの瀧を見やりて

三尺の身を西河のしぐれ哉

本多總州公に侍座しける夜、むら雨さひさしく、かうほりの鳴たるを發句せよ、さ仰られしに

蝙蝠や柱を捻たる一しぐれ

守山の子にもりを葺時雨哉

三か月のおぐらき程に玄猪哉

東には祇園・清水とうたへば

揚弓に名のる女やかみな月

神の旅酒句は橋と成にけり

家々の留守居よる也大社

大和めぐりしせし比

たかとりの城の寒さやよしの山

使者獨書院へ通るさむさ哉

井波門主應心院殿ありそうみ・さなみ山の二集ゑらみ給ふに　御所望

凩や沖より寒き山のきれ

何がしの家にて、御流頂戴のとぶきに

紅葉の下部もあらんゐのこ哉

玄猪とや祖父のうたふ枝折萩

くろの諸代々のゐの子に歸花

つみ綿に兎の耳を引たてよ

大町新宅

水仙や鉦ついでの小島臺

水仙に猶分行や星月夜

凩に氷るけしきや狐の尾

捨人やあたゝかさうに冬野行

父が醫師なれば戯に

鈍汁に又本艸の咄かな

河豚あらふ水のにごりや下河原

何よけん藻魚はた白冬肴

表我十九日から見へぬ也

大黒いはひたる家にて

醉さめて大黒出ん夕ゑびす

まな板に小判投けり夷講

糸屋十右衛門宅にて

嵯峨山や都は酒の我かう

人妻は大根ばかりを鈍汁

打鉦に鈍もゑびすの笑哉

生煮をふぐといふ也ふぐと汁

世中に鼻をよぶやふぐと汁

日本の風呂吹といへ比叡山

ふけゐの浦打めぐりて

鈍ひとつとらへかねたる網引哉

幻住菴にて

雑水の名どころならば冬籠

蕪汁や霜のふりはも今朝は又

宗隆尼みまかり給ふ年、千那にぐ
して堅田へ行きて

婆に逢にかゝる命やせたの霜

蛋の刈蕪おかしや見るめなき

祕藏がる鍋のかるさや筑摩汁

鈍汁や祝言のこす能戻り

かへり花それにも敷ん莚切

柳寒く弓は昔の憲清也

靈山のみちにて

かまきりの尋常に死ぬ枯野哉

生島新五郎上京に

鉢の木の扇笑ふなかへり花

野の宮のやぶかげに、わびしき槌
のおさしけるに

鍬鍛冶に隱者尋ん畑の霜

淀にて

初霜に何とおよるぞ舟の中

しばらくもやさし枯木の夕附日

園城寺にて

からびたる三井の二王や冬木立

凩や勢田の小橋の蘆も渦

芭蕉翁を見送りて

冬枯をきみが首途や花曇

石菖の露もかれ葉や水の霜

加生のつまの心づかひを得て

縫かゝる紙子にいはん嵯峨の冬

むかしせし戀の重荷や帋子夜着

起出て事しげき身や足袋頭巾

寐心やこたつぶとんのさめぬ中

紙子着てくゝり頭巾もみそじ哉

長途狂倡吟

帋子きて渡る瀬も有大井川

目ばかりを氣まゝ頭巾の浮世哉

山鳥のねかぬる聲に月寒し

何となく冬夜隣を聞れけり

此木戸や鎖のさゝれて冬の月

閑さや二冬なれて京の夜

新宅 二句

竹の場の小庭成べし炭俵

鼠にもやがてなじまん冬籠

遠水三十五日に

おほふ哉さまさぬ袖を納豆汁

霜月朔日の例を

諸人や嵐芝居を冬籠

好柳が市店

人を見ん冬のはしゐも夕涼

顔みせや曉いさむ下邳の橋

朝叟老父七十の賀に

白河の波をかゝばや桐火桶

幡（播）州たち（龍）野に一僧のすきあり。六十年の榮花を誹諧にきはめて終りを取侍る。ことに我をしたへるよし聞え侍るに、いたみ。

粟飯の焦て匂ふや霜の聲

法雲寺老僧香色と聞へたり。

源氏もや季吟の家の夷講

さびしさは獨我住ほいろ哉

螻の手に匂のころや霜の菊

捨人の爲の切とて火打哉

鬢の霜木賊のひと夜枯にけり

蕗のとう其根うへをけ冬構

　蜘のうつせ貝を盃にして、都鳥と名付たるによせて

炭賣は炭こそはかれみやこ鳥

　柯求老人の手向

山茶花や獨もれたるお盛物

海へ降あられや雲に浪のおと

みがゝれて木賊に消るあられ哉

　山行

山犬を馬が嗅出す霜夜かな

みぞれにも身はかまへたり池の鷺

　寒芦書讃

あな寒しかくれ家いそげ霜の蟹

氷にも盞とちよ鴛の中

　住吉にて

蘆の葉を手より流すや冬の海

　周防どのは、才ある人にて、政事行るゝに一生非なし。ひなきためでゝ、板くらごのさ中さかや。この中より、やけたる錢をひろひ出て

火燵から青砥が錢を拾けり

　片手打落したる火鉢を、幸のもりかなさて

忠度と灰にかゝれし火鉢かな

　名もたゞのりさいふべし。これに對して

炭とりに鏡のぬけし手桙哉

　三年成就の圖に入

爐開や汝をよぶは金の事

　炭竈　三句

炭やきの獨ぞあらん釜のきは

炭がまや鈴木龜井が軒の松

炭うりや朧の清水鼻を見る

炭竈や煙をぬけば猿の聲

かたずみも其木葉より發りけり

うづみ火の南をきけやきり／＼す
埋火に芋やく人は薫す
炭屑にいやしからざる木のは哉
とてもならかの一車とのる炭

寒蠅爐なめぐる。

憎まれてながらふる人冬の蠅
口切や袴のひだに綫蘿蔔

梅津某、秋田へ發駕な、箱壁の宿まで送侍て

こゝに夵座敷しつらへ網代守

閑居安慰

へら鷺の爐を殘さぬや灰せゝり

山中　高客

衿卷の松にかゝるや三穗の海
並藏はひゞきの灘や寒作り
十石は鷺につく也れうあん寺
冬川や筏のすはる蜱の原

閑倚橋

うすら氷や鐙長なる橋柱
瀧幅や氷の中にゐざり松
鯉一ッあじろの夜のきほひ哉
煮凍や簀子の竹のうす綠

對友

内藏の古酒をねだるや室の梅

市隅の佗人に

宮藁屋はてしなければ矢倉賣

揚屋の外邊に鳥うるもの、鴨の毛な引た見て

鴨の毛や鷺の衾の道ふさけ
心をや筌にゆらるゝうら千鳥
浦鵆さここそ明石も大神鳴
網代屋にところてん屋の古簾
塩椊子や投てたゆたふ礒鵆
よき日和に月のけしきやむら鵆
妹が手は鼠の足かさよちどり

薩埵山にて

汐汲の猪首も波のかもめ哉
珍しき鷹わたらぬか對馬舟

京なる人に案内して

るほしきた船頭はなしみやこ鳥

瀧口やおもひ捨ても池の鴛

人丸講　月次に

沖の帆も十はたみそや濱千鳥

兩國橋上　二句

曉の筑波にたつや寒念佛

寒念佛橋をこゆれば跡からも

酒飯の飲酒(おんじゆ)はいかに寒念佛

去來家にて

千鳥たつ加茂川こえて鉢扣(たゝき)

こと〴〵くね覺はやらじ鉢扣

南都にあそべる時

寒聲や南大門の水の月

ひたち帶のならはしなど、おもひ
よせ侍りて

たれとたが緣組すんで里神樂

夜神樂や鼻息白き面の內

雪買に雪を沽ばや鶴の雪

清水修行にとまりて

むかしたれ雪の舞臺の日の氣色

知恩院町に宿とりて

初雪にまくずがはら(眞葛原)の姿かな

大津まつもと(松本)にて

雪の日や船頭どのゝ顏の色

ひらかた(枚方)の宿にて

馬かたに貧きはなし雪の宿

寒山のさん

ねる恩に門の雪はく乞食哉

西運寺興行

初雪に人ものぼるか伏見舟

我雪とおもへば輕し笠のうへ

はつ雪や赤子に見する朝朗

はつ雪や雀の扶持の小土器

門といふ字を得て

馬に炭とこそはたゝけ雪の門

矮屋

窓錢のうき世を喞すゆき見哉

宮城御普請成就して、諸家御褒美
給はりける比
陪臣は朱買臣也ゆきの袖
芭蕉空庵をさひて
衰老は簾もあげず菴の雪
山居の僧に
門の雪榼ありやとゝはれけり
雪を汲て猿が茶を煮けり太山寺
かも川に一むれさよみたるを
釋迦とよぶ頭も雪の黑木かな
ちどれがみなる女のあだ名にや。いとけうざめたり。
醉吟
雪うちややり手をかへす小忌衣
望叡山
薄雪や大の字枯る山の草
戸障子のおとは雪也松の聲
かはかうや竹田へ歸るゆきの暮
遊女土佐をむかへたる人にうとく
成て

黑塚の客あしらひや閨の雪
立徘徊
はつ雪や内にゐさうな人は誰
めづらしい物が降ます垣ねかな
鴨川の鴨を鐵輪に雪見かな
或御方より雪見にむかへさせ給ふ
馬上吟
初雪に牧やえられて無事なやつ
楠の銅壷、四間に一間とかや。万
客の屏をうるほせば
はつ雪や湯のみ所の大銅壺
もさすみだ川と云わたりにて
半衿の洲崎もありや雪の松
人も來ぬ夜の獨酌
初雪や十に成子の酒のかん
軍兵を團炭でまつや雪礫
松の雪蔦につらゝのさがりけり
前さいふ字で雪の句
叡覽の人になりつゝけふの雪

初雪は盆にもるべきながめ哉

出口にて

きぬ〴〵に犬を拂ふや袖の雪

すてゝあるといふ小哥を、句の題にして

おもはめや捨てあるかは雪の宿

市中閑

初雪や門に橋ある夕間ぐれ

不分當春作病夫

酒ゆへと病を悟るしはす哉

極月十日、西吟大坂へのぼるに

いそがしや足袋賣に逢ふうつ(宇津)の山

新堀にて食くふやうに師走哉

餅花や灯たてゝ壁の影

餅と屁と宿はきゝわく事ぞなき

やりくれて又や狹莚年のくれ

書出しを何としはすの卷柱

座右銘

行年や壁に耻たる覺書

乳母ふえてしかも美女なし年忘

鰤荷ふ中間殿にかくれけり

のり物の中に眠沉て

年忘レ劉伯倫はおぶはれて

霊滅流火しづまりて

妹が子や薑とけて餅の番

煤掃てねた夜は女房めづらしや

京に春をむかゆる年、おはら(大原)の暖に問事あり。

行幸の牛洗ひけり年の暮

臘兎五ッの子を産り。樊中にやしなはれて、若艸にかけらん事をいはひて

年をとる兎に祝へ煮ぬ豆

すゝはらひ暫しと侘て世捨藪

童にはしころ頭巾や煤はらひ

忠信が芳野仕廻やすゝはらひ

有がたき親の悋氣も師走哉

閑窓に羽箒をめでゝ

煤ごもりつもれば人の陳皮哉

鼻を掃孔雀の玉や煤ごもり

　御煤ノ翁ハ竹取。

　千山宅さし忘に

割すそや八乙女神樂男より

　揚屋に醉房して

戀の年差紙籠をさらへけり

年の市たれをよぶらん羽織どの

小傾城行てなぶらんとしの昏

山陵の壺分をまはすしはす哉

　女子の疱瘡しける家に、きげんさりて

餅の粉や花雪うつる神の咲

　行露公、万句御興行卷軸

萬代の〆をあげけり神樂帳

　市隅

弱法師我門ゆるせ餅の札

鳩部屋の夕日しづけし年の昏

梟よ松なき市の夕あらし

　自悔　三十

子をもたば幾ッなるべき年の昏

　大津驛

千觀の馬もせはしやとしの暮

　雪窓

損料の史記を師走の螢かな

年の瀨やひらめのむ鵜の物思

行年や谿評定夜明迄

（校訂者曰、五元集板本は元・亨・利・貞の四卷に分れ居れど、其角自筆の句稿は元・亨の二卷にして、利は「おのがね鷄合」の後半、貞は旨源の追加せるものなれば、こゝには元・亨の二卷を取り、利は「類柑子」に追載し、貞はこれを除きて載せず。諒焉。）

玄峰集

嵐雪

（序）

かく（書）ともなく、集るともなく、机上に一書あるも、みな雪中庵嵐雪のほくなり。ひともこれを紐といて、まもりをる。ひるつかた、例の竹川訪ひ來りて、たまへ、梓にきざまんといふ。さはまて、かうぶりして得させんとて、玄峯集とものし、うちくれぬ。

玄峰集　春之部

改正

四海波魚のきゝ耳あけの春

元日や漸〳〵うごくいかのぼり

元日やはれて雀のものがたり

年すでに明て達磨の尻目哉

面〳〵の蜂をはらふや花の春

三ッの朝三夕暮を見はやさん

今朝春の奥孫もあり彦も有榾（ホタ）を富

若水に智恵の鏡を磨うよや

五十にて四谷を見たり花の春

あら玉の馬も泥障（アフリ）をおしむには

初空や鳥をのする牛の鞍

楪の世阿彌祭りや青かづら

惟茂と起しに來たる二日かな

此句は睦月二日にあさゐせしに、人の來て起せしに、かく申されしとかや。

寳ぶれ　詞書有爰に略

須磨明石見ぬ寐ごゝろや寳舟

夢明て浪のりふねや泊瀬寺

む月はじめのめおといさかひなど、
人々に笑はれ侍りて

よろこぶをみよやはつねの玉はゝ木

若菜七つがひを判ずる詞　略

七草を三べんうつた手首かな

ぬれ椽や薺こぼるゝ土ながら

霜は苦に雪に樂する若菜哉

憶翁之客中

裾折て菜をつみしらん草枕

とゝ（父）ははやすめ（女）は聲若しなつみ歌

春朝

蔀あけてくゝ（莖）だち（立）買ん朝まだき

題しらず

風渡て石にすがれる薺かな

ほつ／＼と喰摘あらす夫婦哉

鶯

鶯にほうと息する山路かな

うぐひすや書院の雨戸はしる音

鶯をなぶらせはせじ村すゞめ

鶯の宿とこそ見れ小摺鉢

梅

むめ一輪一りんほどのあたゝかさ

此句ある集に多部ニ入たり。又おもしろきか。

籥に結ぶ梅をぬけたる月夜哉

臥龍梅

白雲の龍をつゝむや梅の花

荏柄天神奉納

こぼれ梅かたじけなさのなみだ哉

北といふ一字題

手のゆかぬ背中を梅の木ぶり哉

梅ちるや齒のない馬に耻かしさ

桐雨のぬし、京うち參りさて出ぬ。
行かたの覺束なく、知る人はそこ
／＼に、みちのほどはかう／＼さ
いひふくめて出したてつ。卯の花

の雪消へ、五月雨の、もらぬほど
に歸り來べきなれど、いと名殘お
しくて

梅にさひる朝けわするな辛きもの

翁の、春もやゝけしきとゝのふ
と申殘されし句意を味へ侍りて

この梅を遙に月のにほひかな

梅干しや見知つて居るか梅の花

椿

鋸のからき目見しを花つばき

柳

目前に杖つく鷺や柳かげ

中納言藤房
於テ二馬場殿ニ一龍馬に付て直諫を奉ら
れしは、其言行未レ如シレ鏡ノ。

亂るべき風の柳をさすの神子（みこ）

春の水に秋の木葉を柳鮠（はへ）

題しらず

正月も廿日に成て雜煮かな

一ト鹽の聲さぞあらん南部雉

せはしなき身は痩にけり作リ獨活

蕗のとうほうけて人の詠かな

狗脊の蘆にゑらるゝわらび哉

きさらぎや火燵のふちを枕もと

春風の石を引切わかれかな

此句は門人なにがしが旅立けるに、餞石をおくるとて、
かく申されしと也。

なんなにかはりて

なれも戀猫に伽羅焼てうかれけり

燕

簾に入て美人に馴るゝ燕かな

柳にはふかでおのれ嵐の夕燕

歸雁

順禮に打まじり行歸雁哉

箱根にて

かへる雁關とび越る勢なり

紙鳶

糸つくる人と遊ぶや凧巾（いかのぼり）

惜ニ暫別一

虚空を引とゞめばやいかのぼり

蚊足が鄰かへたるに巾つかはしける。

此夕べ軒端へだちぬいかのぼり

行脚惟然へ申しおくり侍る。

木の枝にしばしかゝるや凧

蛙合

よしなしやさでの芥とゆく蛙

上野より歸り侍るとて

酒くさき人にからまる胡蝶かな

朧月

中川やほゝり込んでも朧月

我等今日聞佛音教歡喜踊躍と讀誦し奉りて

嬉しいか念佛おどりの柄杓ふり

出がはり

出かはりや幼心にものあはれ

出かはりや其門に誰辰の市

接

見たい物花もみぢより接穗かな

苗代

なはしろに老のちからや尻だすき

靑精飯

桐柳民濃に茶飯かな

上巳

隣〳〵雛見廻るゝ小家かな

うまず女の雛かしづくぞ哀なる

鶯の來て染つらん艸の餅

汐干に

水莖の馬刀かき寄ん筆の鞘

しほひくれて蟹が裾引なごり哉

桃

おの〳〵の桃の席や等持院

桃の日や蟹は美人に笑はるゝ

華

あらおそや爪あがりなる花の山

白鳥の酒を吐らんはなのやま

花に風かろくきてふけ酒の泡

櫻川はほそくながれて、青柳の里
一トかまへうちかすめり。

膝木よる長女いやしや糸櫻

殿は狩ッ姿餅うるさくら茶屋

手習の師を車座や花の兒

兼好の莚おりけり花ざかり

逍ニ遙鵬鷃之間一出入是非之境

花の夢此身をるすに置けるか

花はよも毛虫にならじ家櫻

はなを出て松へしみ込ム霞かな

新發意が花折あとや山颪

賴光山入之賛

なまぐさき風おとすなり山櫻

小町賛

我戀よ目も鼻もなき花の色

原の宿を通るに、勅使の歸京ましますとて海道も塵をはらひ、山も殊更に耻かしげに、けふを晴さつくろひたてり。砌のすだれはれ上られたるに、ゑぼうしの用意なんときら〳〵と見ゆ。おそらくは未きかず、富士に雲井の客人を見る人は仕合なる旅に參合たり。

富士を見ぬ哥人もあらん花の山

雲雪と仇名も言はじはなざかり

筆とるは硯やほしき兒ざくら

花片〳〵鼓にあたる舌の先キ

月花の共ひとふしや火吹竹

女中方尼前は花の先達か

大和廻りの東潮、めぐれ〳〵風車、東風ふかば西へ行、にし吹ばもどれ、前後與す。箱根は手形有り、大井は川越有り、左右廣し。空吹く風の何が吹やら

大井川船有ごとし花の旅

逢坂は關の跡なりはなの雲

躑躅

白つゝじまねくやうなり角櫓

藤　詞書あり略ス

ふぢ浪に鶚(ミサゴ)は得たりいらこ崎

小奴吉齋に花を見せて

小坊主よ足なげかけん松に藤

立志追善

山ぶきのうつりて黄なる泉哉

ばせを翁は普化の師、晋子は臨濟の怨子、三十年來は面にから笑をならして、他のつらを出せるなし。末期に及で半句を吐ず。さらに遺跡を止めざるは、若夫それもしらず。大悲院へ齋喰に行歟。

中陰廻向

普化去りぬ匂ひ殘りて花の雲

亡跡

茶の花や坊が灰まく果はみな

三七日

鶯や弓にとまりて法の聲

墓參

山ぶきの實を穴掘の鍬ひとつ

立峰集　夏之部

更衣

塩魚の裏ほす日なり衣がえ

腸は野に捨たれど袷かな

すゞりする傍(ソバ)にうつくし白がさね

詞書あり略

老ひとつこれを荷にして夏衣

青簾

五位六位色こきまぜよ青すだれ

時鳥

行燈を月の夜にせんほとゝぎす

ほとゝぎす耻かき道具かたづけん

伊勢法樂

こゝろには松杉ばかり郭公

錦帳の鶉世を草の戸や蜀魂

たちばなを喰ひもつみもし時鳥

待乳山の社頭に雨をしのぎて

空は墨に畵龍のぞきぬ郭公

時鳥鳴や利休の落し穴

悼晋子が母

啼いりて音もなしそれは時鳥

ほとゝぎす旦夕(タソガレ)。里さび燧(ヒウチ)うつ比

御成筋いかなる筋をほとゝぎす

冠里公にて

ありがたやたゞとり山の郭公

時鳥聞ヶば坐頭の根付かな

似た鳥を賣付けてゆけ時鳥

卯花

聲もなく兎うごきぬ花卯木

齋なまうく。

榕賣あなうの花の飯を見る

川骨や撥に凋める夜半樂

經の偈は連哥ときゝぬ時鳥

此三句は晋子追善の吟なりとぞ。

懐舊

からびたる烁なりけるを若楓

島田の宿に或僧なさふ。

やすき瀬を人に敎へよかきつばた

牡丹

古庭にあり來りたるぼたん哉

土嘗(ナメ)てはにかむ顏が牡丹かな

はつ鰹盛ならべたるぼたん哉

青嵐

青あらし定まる時や苗の色

義仲寺師父之廟

色としもなかりける哉青あらし

新樹

若葉ふく風やたばこの割(キザミ)よし

煮鰹をほして新樹の烟かな

鎌倉鶴が岡

並松の行列ありし夏木立

こがね海道にて

霧雨に木下闇の紙帳かな

はせを菴にて

菴の夜もみじかく成ぬ少しッヽ

うたゝ寢の夢に見えたる墨蹟　晋子

其夢に戯る。

下部等に鰹くはする日や佛

内外の神拜終りて、猗儀の宮の奥ふかく八十瀨をわたりぬ。塵外五里の山陰にして森の雫に舍殿破れ、寄生さしなかされて夜のあらしいぶせげなるに、いとゞかみさびわたらせ給ふ。

神ませばかつほもすめり山の奥

大勢の中へ一本かつをかな

熊野

煮取たく爰でもお僧愚なり

南無大悲觀世音ぼさつと、聲よくうたひ連たり。

桑笑ムや名とりの老女娵達者

燕居もやう〳〵見いだされて

このごろは新麥くるゝ友もあり

氷花へ祝義つかはすとて

澤瀉の花にくはへの銚子かな

箏

竹の子や兒の齒ぐきのうつくしき

たけの子やかり寐の床の隅よりも

善光寺にてみる喰ける尼に

海松ふさやかゝれとてしも寺の尼

悼ニ青流亡妻一

物どに妻なき家の茄子づけ

蝸牛

白露や角に目をもつ蝸牛

坂本の宿にとまりたるに、樵木つみたる火たき屋の隅に、具足と太刀の埃にまじりて侍りけるを、持つたへたる。故やあるとたづれければ、爰のならはしにて、かばかりの兵具もたぬ家は侍らずと、申ける。心にくかりける。

なめくじり這て光るや古具足

大津の驛に出て

あぢさいを五器に盛ばや草枕

大津の梅主、入集の句あまたこされけるを、艸案みだりがはしく失

ひければ

あぢさいやどこやら物のとたらず

漁

簑ほして朝〳〵ふるふ螢かな

照射

弓杖に哥よみ顔のともし哉

端午

しだり尾の長屋〳〵の菖蒲哉

一刀見せんあやめの九節

あやめ草賀茂の假橋いま幾日

世のあやめ見ずや菰(まこも)の髑髏(されかうべ)

曾根太郎を登り、曾根次郎を下る。

片足は岩に放ッてかぶとかな

粽一ふさ全阿袖にし來り、ねぶり

かたむきたるに

粽もつ扨はうつゝの草むすび

文もなく口上もなし粽五把

楞佩(あふちおび)てわざとめかしや芝肴

印地

おもふ人にあたれ印地のそら礫

競馬　賀茂

落たるがとに目立やあし揃

拔レ劔逐レ蠅

蠅はぢき怒る心よ手束弓

顔につく飯粒蠅にあたへけり

獨座

來るのみか裾から蠅の折ふしは

題しらず

蚤蚊

それにさへ願ひ絶めや金(きん)の蚤

めづらしや、唐の蚊詩人を喰ッて

桃のどし。珍らしや、からの蚊美

人の帳にこがれて、痩て柳に似た

り。からの蚊〳〵。

唐の蚊や絲に枯たる藻塩草

此句は唐紙に蚊を遮いれたるに書れたるよし。

うち歎く事侍りて

哀れとより外には見えぬ蚊遣哉

蚊遣木や斧に女の石をうつ

旅意

萍の實もいさぎよし水驛（うまや）

紀の山・きの浦（紀）、海にいり江に入る。禹益の水を治て異物をしるせる海外山表のありさま、ルスン・カボチヤなどいふ遠津島根の人がらは、畫にのみ見たり。目前に南のゑびすの洞にかくれ、いはほに走るを、鬼にもせよ人にもせよ、こゝろおかるゝ旅寐也。

蛇いちご半弓提て夫婦づれ

和泉式部之石塔

本宮より一里、彼式部の月のさはりと詠たる所といふ。

蛃（ブト）のさす其跡ながらなつかしき

維盛彌助

十津川近き湯のかはのほとり也。除田百五十石、代かはり家くだりたれど、さすがに今も平家也。

川骨の花一時もさるほどに

妻覽詣（めぐろ）　文アリ畧

荊の花裾きらしや旅ごろも

梶原屋しきを見る。此人はさばかり文筆には達せざれども、歌も詠、物の情もしれる人にや。折ふしの口ずさみもきこえとゞまりしを、にくきもののひとつには、先此一族をいひふらしぬるは、いかなる宿執のつきたるにか。舊跡あはれに覺侍りて

むつかしき中に香もありばらの花

茱萸（グミ）

山茱萸のかざしや重きふじ颪

瓜

兒の手の玉にもあまる眞桑哉

八幡太郎贊

御堂關白殿御物忌に義家朝臣參籠の時、南都より早瓜をたてまつりしに、博士毒氣有よしを申。義家に仰て瓜を割たるに毒氣則出。下略

瓜切てさびぬ劒の光かな

氷花が妻うしなひたるに、いたみ
さて潰す。詞書有略

なでし子は紅粉おしろいも散しすて

常盤木のちるや母さへ其子さへ

うち籠るほど訪ひ侍りて

山鳥のほろ〳〵なきや五月雨

夜雨吟

五月雨や硯箱なる唐がらし

さみだれや蚯蚓の徹す鍋のそこ

昨鳥の二聲三聲おとづれければ

五月雨の端居ふるき平家をうなりけり

亡母を夢見る。

五月音に我簑虫や母戀し

伏見撞木町
炬松ふつて野邊を行も、げに爰も
その古風なるべし。

行燈で來る夜送る夜五月雨

明てのく家に伏見や夏の月

艸菴むすび侍るとて

蓼紫蘇にむすばぬ先の白露か

題しらず

鶯の音を入あやし二ッぼし

早乙女にかへて取たる菜飯かな

三河鳳來寺

一もとのあふひを登る山路哉

打麥歌

蟬鳴や麥をうつ音三〻三

六本木にて

下闇や地虫ながらの蟬の聲

あなかなし鳶にとらるゝ蟬の聲

那智山

暑雲の外瀑に奪るゝ人の色

夏の日に懶き飴のもやし哉

おもだかのふとりすぎたる暑さ哉

江の島

夏の日やさめて窟のいなびかり

稻村が崎を過るに、木陰ともなき

砂のうへに、漁父のこぞりて、わかなごといへるものをゑりとり侍る。

照付てひかりも暑し海の上

貝うる家の男のわらは、麥の粉を盆子にもりて、かしら揃えてうちなめたるに水を乞て

蜑の子にたうとがらせん道明寺

長谷寺の前にて

飴賣の箱にさいたやゆりの花

能見堂

ふるく侍るといふ人あり。

汗ぬぐひ小松に干て沖津風

雪の下に泊り侍りしに、蚊やりたきたて、けぶたかりければ、みたらしのふちにむしろ敷て

川芎のたまさか匂ふ茂り哉

藤澤を出行、民家の門に木有。根は土を拔あがりて五尺ばかりも高く、左右にひろごり、元木たくましく肥て、末葉もつたて、蟷螂の髭をもて鼻にかへたるさまして這出たり。西行のもどり松とかや申侍る。越路・松島のかたにもかゝる名のきこへ侍る故はしらず。

童アにあふぎとらせん松の陰

納涼

犬に迯犬を追ふ夜のすゞみ哉

水車のしづくをうけて

すゞしさや心手へとる水の色

かはらの涼

來る水の行水洗ふすゞみ哉

埋火を涼とあふぐ夜的かな

一種賞翫にとて皆ゆく中にまじはり侍りて

味噌するにすゞ敷鮒の游哉

祇園の會の七日の鉾、十四日の山綾より錦より見ものなるは、荻野・いがらし・松尾・まつむら、素袍に

太刀はきて四條高倉の辻に床几を居れば、下の雜式おなじさまにて、紅の總さげたる鐵棒かいこみ、かちんの上下着たる男等、黑漆の棒(手)てに手に持て粧をつくろひ、非常をいましむ。兼て定められたる一二の闔を改めかへす。威儀嚴重なる中に、はしごさ臼と車に積て、町どに引は何の用にか侍りけん。

たて臼もともに踊や祇園の會

移徙の祝義に

とこなつの家にいれたる德利哉

逢恨戀

我戀や口もすはれぬ青鬼灯

竹婦は(馴)なれて抱きよけれど、と人やれたまん。凉しくて一人ねむには

汗に朽ば風すゝぐべし竹襦袢

ちんじやうの和巾(ふきん)さばきや汗拭

清水　詞書あり畧

拔ヶたりなあはれ清水の片草鞋

目黑の瀧も人のまふでぬ日

底しみづ心の塵ぞしづみつゝ

序令・沽洲ちなみ侍りて、京より大和路かけて、和歌の道たづねんと出立けるを、跡おしみして

神奈川の岱の清水に先ッ進め

紀伊野中の清水　播州に同名有

すみかねて道まで出るか山清水

桒の菴

夕だちや障子かけたる片びさし

題しらず

すぐろたつ羽黑のきどす夏尾花

夏畑に折〳〵うごく岡穗哉

切昧噌のひなた臭さや夏泊り

芭蕉の墓まいりのつゐで、義仲菴へ尋侍りけるに、庵主出奔せられければ

住持まで拂ひ果けり夏の空

御祓

今日の日は東北の隅より出て西北の間におさまる。長日短夜の頂上なりさて、此國の法しれる家〳〵には、とさらに日の神を祭り侍るさかや。青海のおもても限りなく覺て、尤祓すべき砌なるべし。

いくばくの溜息つきて夏はらひ

なつはらひ目の行かたや淡路島

玄峯集 秋之部

初秋

秋風の心うごきぬ縄すだれ

つくり木の糸をゆるすや秋の風

閑居

洛外の辻堂いくつあきのかぜ

痩る身をさするに似たり炑の風

葛

齒のあとのあり葛の葉のうら表

宗祇之廟

石塔をなでゝは休む一葉かな

市中

盆迄は秋なき門の灯籠かな

七夕

眞夜半やふりかはりたる天の川

ほし合に我妹かさん待女郎

ほし合や瞽女(ごぜ)も願ひの糸とらん

大伽藍造營まし〳〵ける年の今日、遠くおがみ侍けるに、富士・筑波根の間に更に山ひとつ出來たるかさ、空のにほひもちかく成べきほどなりけり。

上野より道や付らん銀河

瀧飛のけろりと浮や星使

名月の夜はいかならん。はかりがたし。

七夕は降と思ふがうき世かな

七夕や賀茂川わたる牛車

防鴨河使

妻越や人目づゝみの河づかひ

梶の葉に小うたかくさて

我や來ぬひと夜よし原天の川

年渡りえや隅田川原の橋柱

さもあらば有れ何を洗ふ天の川

飛鳥井・なんばどのゝ蹴鞠、いけの坊の立花、みやこの田夫、ゐなかの風流、立て見るあり居て見るあり。

秋風のうしろを覗く立花哉

薄

のゝ宮にまいりて

嵯峨中の淋しさくゝる薄かな

花すゝき階子つれなくこけかゝり

品川へ二里の休や花すゝき

野の華

おもしろく富士にすじかふ花野哉

花の秋草に喰あく野馬かな

盃のそばを切題にして、一字を探うる。

洮

くどらせて色〳〵にこそ萩の露

蟲

寺にて

常燈や壁あたゝかにきり〳〵す

蓑虫の音をきゝに來よ草の庵　芭蕉翁

聞にゆきて

何も音もなし稲うちくふて螽哉

茶碗銘

黒茶碗あり。花の朝はます〳〵くろく、雪の夕はいよ〳〵黒し。月待宵のやみをさぐり、闇夜に鼻をさられしは、おの〳〵つちめくらのまじはりなるべし。

檢校　貧僧　大黒　小ぐろ　はちの子　早ふれ　小雲雀

三代目をのんこといふ。のむここそ猶ふかき意味あれ。祕してしばらく殘す。

松むしのりんともいはず黒茶碗

底倉・木香・あしの湯を經て、地獄めぐりといふをあり。惣じて此邊の濕化、蝶蜻の類、墨をぬりたるがごとし。

おのれさへ餓鬼に似たるよきり〳〵す

露

草の葉を遊びありけよ露の玉

十歳に成ける童の身まかりけるに

駒取りのもとの雫や末の露

うすひ權現にて

いなづまにけしからぬ神子が目ざしやな

鷄頭

まだ夏の心ならひや葉鷄頭

味噌で煮て喰ふとはしらじ鷄頭花

鷄頭は蚤のたきさす煙かな

西瓜

身ひとつをもてあつかへる西瓜哉

妻悼

尸かな桔梗かるかやおみなへし

蓮の骨あはれは美女の尸哉

朝叟をとぶらふ。

蓮の實の飛はとびしがそもされば

同　一周忌

青ふくべひとり廻ッて一周忌

里右が娘うしなひたるに遣す。

鬼灯のさすればつぶす歎哉

盆會

魂棚は露も涙もあぶらかな

魂祭母屋の妻戸の音は何

喰ものも皆水くさし魂祭

たま棚や皆こま〳〵と茄子あへ

詞書有略

たま祭り爰が願のみやこなり

九日の六道まいり。小野のたかむらの冥途にかよへる道なりとて、洛中の貴賤まふでゝ槇の葉をもとめて、魂をむかふる印とし侍る。

打ばひゞく物としりつゝむかへ鐘

靈棚の栗にさきだついの字哉

あかねや美濃やと聞えたる、なき名のながれとゞまる所は、千日寺の蓬生の露ときへかゑりぬ。盆のこのごろは夜どに群集して、逆縁にさぶらふ人もあまた侍りけり。改名嵐雪月照と石の塔婆に彫入たり。あるまじきとならねど、おりからは思ひかけずおぼえ侍りければ

夢によく似たる夢哉墓參り

松が崎妙法の火

經を燒く火のたうとさや秋の風

大文字の句をもとめたれば、雪のこゝろの出けるまゝに

山の端を雪にも見ばや大文字

相撲

千本を南へ、よつゞかの邊りへ行さて

角力とり並ぶや秌のから錦

島原の外もそむるや藍畠

戻りにも賣レずに鵙の草鞋哉

蘭鮑同肆

盗たる蘭や乞食の嚢の下

秋暮

立出てうしろ歩や秋のくれ

もどかしく吾面くはす秋の暮

寐て起て又寐て見ても秋の暮

秌の暮石山寺の鐘のそば

定家

舟炙るとま屋の秋の夕かな

單誓上人の岩室

燕のかへりみちありほらの雨

江之嶋

日を拜む海士のふるへや初あらし

江の島の穴をうなるや秋の夢

鶴が岡の放生會拜みにとて、待宵の月かけて雪の下のやどりに侍り。試樂の笛に夜すがらうかれぬ。明れば朝霧の木の間たへ〴〵に、樂人鳥のごとくつらなり、社僧雲に似てたなびき出る。神のみゆきの殿重なるに、階下塵しづまり、松の嵐も聲をとゞめぬ。

烏帽子着て白きもの皆小田の雁

月

名月や柳の枝を空へ吹く

名月や烟這ゆく水のうへ

旅泊

錢矢立空に三五とよぶ聲を

仕合な岨の松かなけふの月

青空に松を書たりけふの月

花折新發意に戸ぼそを扣て、茶飯の狼藉をする一客有。

名月は蜂もおよばぬ梢かな

明月や先ッ盞取りて蕎麥を饌

海も山も坊主にしたりけふの月

清涼・紫宸のあらたにつくりみがゝれたる中に

新月や内侍所の棟の草

名月や歌人に髭のなきがごと

青鷺の叱（ギャツ）と鳴つゝけふの月

名月の園友坊は男かな

土臭き鯔にはあらずけふの月

ひたちの鮭・かまくらのかつほ・松江の鱸鱠・わたらぬ雁に爼板ならし、遠き海の珍物・ちかき江のひれもの、心におもへばよだれに流

れ、さもあれとしの名月ながめ得たり。

獻(こん)〳〵は嘶ですみぬけふの月

詞書あり略

名月は絶たる瀧のひかり哉

早雲寺名月の雲はやきなり

鎌倉大佛

明月は南を得たり佛頂珠

名月やたしかに渡る鶴の聲

高笑ひ月見る人に見さけたり

けふ長崎の泥足、めづらしき顏もて、目なれぬうつは物をおくり侍るに

新月の心ばえなり唐煙筒

明月や道心の名のおもしろき

聟とは外よりしらぬ月見哉

詞書有略

野に寐たる牛の黑さを秋の月

とこぶしは宵の小貝か磯の月

信濃催馬樂

君來ずばねこにせん信濃の眞そば　初眞蕎麥

新酒

我レもらじ新酒は人の醒やすき

題しらず

はぜ釣や水村山廓酒旗ノ風

あしの穗やおやぢと呼ぶは渡し守

木犀の晝は醒たる香爐かな

八九月風やいづこのほらの貝

穗に出て世の中は田も疇(アゼ)もなし

水音も鮎さびけりな山里は

柿栗

ひとり旅しぶ柿くふた顏は誰

詞書有畧

猶石にしぶ柿をぬる翁かな

毬(いが)栗や手にさゝげたる法(のり)の場(には)

秋のくれ井手の蛙のからだ見ん　舟竹

さいふて土產れだられけるに、人

丸の柿の實・山の邊の栗のから、けふの得ものゝあまりなりと笑興じて

榧(カヤ)のからよし野ゝ山の木の實見よ

標茅(シメジ)

林間に煮燒する日をたゞたのめ

くち木となおぼしめされそ榎茸

菊

初菊やほじろの頬の白きほど

指に入る風はや寒しけふの菊

蒼浪にのぞみたえけり菊の岸

一くねりくねるにもこそ菊の水

菊九章

其一 九日

菊もまだつゆ〳〵つぼむ九日哉

其二 素堂亭にて人と菊見られけるに

かくれ家やよめ菜の中に交る菊

其三 百菊を揃けるに

黄菊白菊其外の名はなくも哉

其四 名所の菊

白ぎくの鎌倉やすまば扇が谷

其五 莖のたけのみやびやかなるは哥のすがた也けらし。菊を見て句をもうく。

鶴の聲菊七尺のながめかな

其六 琴

琴は語る菊はうなづく籬かな

其七 棊

菊買ふは又棊にまけし人やらん

其八 書

書を抽芭蕉にねぶれ菊の兒

其九 畫

菊さけり蝶來て遊べ繪の具皿

京よりから崎へ詣るとて、しがの山越はするとなり。

志賀越とありし被(かつぎ)や菊の花

駕にてをのれと覺ぬきくの晝

霜の菊杖がなければおきふしも

繪の菊に今朝は餓たる胡蝶哉

蜂はさし蝶はねぶるや菊の華

瀧下園哲に燕ス。

きくの香にさすが山路の雪踏哉

山路ふるこゝちや菊に榎たけ(茸)

きく添ふやまた重箱に鮭の魚

されはこそひなの拍子のあなるかな

神田祭のつゞみうつ音　歎足

ひやうしさへあづまなりさや。

花すゝき大名衆をまつりかな

詞書有略

袖つまにもつれし雲や露時雨

まつ風の里は籾するしぐれ哉

狐林紅葉

牛まれに茶道をかくす栬かな

莊子樗木の大きさ牛をかくす。紅葉の醉ざめを一ぷくさかや。化されけんさ放散・逍遙のたはむれ事なり。

ちり行も二度の情や梅紅葉

去かたへまいりて

蔦の葉やつたの身ながらかゝる時

病床に虱をとる辨

しらず身の毛いよだちて、襟の程うさ〳〵としつるが、飯つぶの半したる物さすりあてたり。疾くものゝ上に赦しはなち、めがね二重に疊て、渠(カレ)がさまを窺ひ見るに、白き肉・黑き腸、呼吸につれて動搖ゆるぐ。眼きら〳〵と見すへ、手足よつか六つかありて怒げなるが、護摩堂にまします明王尊に似たり。虎にも戰ひ龍とも爭ふべし。誠や、必死の人の床にはがいふり戻りて、あざむきにらむとこそ、本艸には見へたれ。いまだ死まじきにや、しり終ひむけて行く。恐ろしとみればこそさも覺ゆれ。おのれが姿のなべての虫におとれるものかは。歌うたはぬは、聲のなければなり。今少身かろからば、待宵のふるまひもしかねやはすべきを、蓑虫にゆかりたる鬼の子なればか、かく世にうとみ果られたる業生のほどこそ、いと拙けれ。

と、臭穢の中に質を請て、褌に潜り、ぬひめにかくれて、人の血氣を犯し吸ふと、蚊子の鐵牛を嚙むより猶甚し。その生涯の終れる所は、火とりの中に細きけぶりと飛び、木枕の角にからき耻をばさらされぬ。されば眞如の性のみてる事や。摩竭なにとかいへる魚の大百由旬より、鷦螟の微細なるまで行わたりて、憎愛かはる事なしとこそ見ゆれ。內裏にもの祈けるひじりの御灯の光に、一夜しらみ拾はれたるに、物の化のこと治りけるとぞ。知識の肌に馴まとひて、德をおなじういはれけるも、さるべき因緣にや。柱の穴に生をたくはへて、舊年の怨人には報ふとも、さもあれさついかにゆるしてんと、かたなひねくり鎗とりしごく迄、いらちおもふ間に、ころ〳〵とところげて見へず。こはもらしつるはと騷て、あなぐり求れどなし。淵に物落せし人の顏して、手打はたきてより、夢もしらみにしらみ、東雲の空もしらみはてぬ。白身坊が衣被けしものか。

あさがほの花ほど口をあくび哉

玄峯集　冬之部

讃大黒

神の留主能ク女房を守るべし

十月ノ蟋

きり〳〵す鼠の巣にて鳴終りぬ

凩

木がらしに梢の柿の名殘かな

前川亭にて

木がらしのわづかにまねく庭木哉

芭蕉翁回鄕

凩の吹ゆくうしろすがたかな

一葉ちりいくらもちりて月夜哉

時雨

茶を煎て時雨あまたに聞なさん

深谷やしきる時雨の音もなし

山茶花

いさはやの葉やあは雪も消がてに

延喜帝

寒夜に國土の民ども寒からんと、夜のおとゞにて、御衣をぬがせ給ひけるとなり。

脱たまふ御衣は天下の衾かな

京にて

ふとん着て寐たる姿や東山

足袋はきて寐る夜隔そ女房共

爐

爐びらきの日をしめし野ゝ土茶哉

法華を聞侍りて

沉著世樂無有慧心

つとめよと親もあたらぬ火燵哉

冬の日、客をもてなす。

君見よや我手いるゝぞ莖の桶

たま／＼に引人の有赤大根

午といふ一字題

萱原や枯かけろひて馬の陰嚢（キン）

水鳥

鈴鴨の聲ふり渡る月寒し

萍に何を喰やらいけのかも

汀氷

鴨おりて水まで歩む氷かな

題夷講

鮃汁をついて巖（イハホ）に落るなる

霜朝の嵐やつゝむ生姜味噌

十月廿五日共ニ桃隣一出ニ武江一而豎ニ

義仲寺一望ニ芭蕉翁之塚一歎唱。

上署

霜月七日のゆふづくよの程に、義仲寺の冢上にひざまづく。空華散じ水月うちこぼす時、心鏡一塵なひかざれば万象よくうつる。此師この道におゐて、みづからを利し他を利して、終に其神不レ竭。今も見給へ今も聞給へとて

此下にかくねむるらん雪ほとけ

十月廿二日夜

十月を夢かとばかりさくらばな

四七日　題₂翁三一物₁

木がらしの猿も馴染か簑と笠

十一月十二日初月忌

泣中に寒菊ひとり耐へたり

元祿乙亥十月十二日一周忌

夢人の裾を摑めば納豆哉

七回忌

霜時雨それもむかしや坐興菴

十三回

品〳〵の蒲團にのぼる木魚哉

歸依法　肉邊の菜ヲ喰ふ。

鰒のやうに腹を立するあけ麩哉

海鼠

海鼠喰ふはきたないものかお僧達

海鼠だゝみもむつかしき世や獨住

蠣を得て返事に

たまはるは石花にかしこしひねり文

神樂

かぐら舟澪の灯の御火白くたけ

雪

門の雪臼とたらひのすがたかな

竹の雪百歩の馬屋見すかせり

蛇もせよ木兎もせよゆきの猫

初雪や裾へとゞかぬ白丁花

御築地のうちをおがみ侍りけるに、如意が嶽より出る月の、南門にかゝりて、かぎりなくめでたかりければ

から花に月雪こぼすとびら哉

菓子盆やそもそめいろの雪ならば

澤菴の若衆せゝりや雪のふみ

藏ありと知たる雪の光かな

今の島田よし助が門も見すてがたくて

鍛冶の火も殊さらにこそ笠の雪

明星は乞食も見るか雪のうへ

雪中に雪を投込ムあそび哉

雪はまうさず先ッ紫の筑波山

此雪にむかひにおこす人も人

霰

武士の足で米とぐあられかな

顔出してはづみをうけん玉霰

鉢たゝき

今少し年より見たし鉢扣(たゝき)

畫賛

畑中によし野静やすゝ拂

歳暮

山伏の見ごとに出立師走かな

古足袋の四十に足をふみ込ぬ

東潮が子もてるに申遣す。

つき立の餅に赤子や年の暮

おもへはや泣れ笑はれとしの暮

とし一夜轆(わだち)残さじ日の鼠

又汁粉さまで浮世にあかねども

はせを庵の芭蕉もいまだうい〳〵しかりける秋、桐の葉の一葉さへさ告げこし給へる事なんど、おもひ出られ侍りて

錢ほしとよむ人ゆかし年の暮

慰ニ女房一

三盒子(ガウシ)とたらわすや年の暮

古暦ほしき人には參らせん

岡見すと妹つくろひぬこへ(小家)の門

五十ばかりの古猫の鼠もとらずなりて、常にいろりに鼻さしくべて、冬ごもりたり。なまじいに南泉の刀をのがれたるを身の幸にして、今年も暮ぬ。

いづれもの猫なで聲にとしの暮

軒の柊梅を探るにおぼつかなし

豆をさへ聞ぬ藁屋にこれや此

此句は家をやきたる年、小屋の住居のわびしきに、眼をさへやみこの吟なるよし。

埋火を凉とあふぐ夜的哉

蕎麥うちて鬢髭白し年の暮

猿猴のて（手）に手をかるやとしのくれ

辭世

一葉ちる咄（トツ）一葉ちる風のうへ

旹寛延三庚午正月

百萬旨源校訂

蓮二吟集

風雅 文考

蕉門世に多き中にも、美濃ゝ支考は、釋門を出て文才秀たり。諸國を俳行脚し、翁の正風躰を遠鄙に演說して廣く知らしめ、其雅詠を化度し侍る事幾ぞや。さるに此人の生涯の句撰を、いまだ見ざるもの本意なきよし、書林春秋堂是を求めむと乞ふ事年あり。いなみがたく約し、かなたこなたより彼の句ゝをひろひ、蓮二吟集と上書して贈る物ならし。

東武　掬　一　浮

寶曆乙亥初秋

蓮二吟集引書

歳旦帖　炭俵　笈日記　奉納
皮籠摺　春曙　日枝　續猿蓑
西花集　島臺　既望　俳諧曾我
小弓　風水洞　嵯峨　笠引手
金閣　泊船集　鞍馬奉納　韻塞
桃盜人　間乃山　十五童子　白陀羅尼

丁子枕　有磯海　砥並山　東華集
鷹　砂川　三千化　浮世北
正風論　閑居　伏見初午　田家
續五論　一鎌筵　篇突　小文庫
貝盡　重三　桃首途　夜話狂
杜曆　櫻山伏　四農輯　日附繪
葛松原　東西夜話　家見舞　風俗文撰
梟日記　首途　二夜歌仙　淡雪
人麿繪　和漢文操　一幅半　白扇集
千鳥掛　住吉詣　三日哥僊　祇園會
水車　藤首途　朏日記　本朝文鑑
六花集　東山墨直　伊勢墨直　南無誹諧
温泉　菊能宴　菊之塵　山中集
大黒繪　冬椿　鶯蓑　枯尾花
御命講　星合　寒取角力　爲辨抄
十論爲辨　聞書　替古能花

凡八十七部

芭蕉翁誹門蓮二吟集（風）

美濃國産俳行脚　沙門　野盤子支考

春之部

元祿十七甲申年賀初老

龍宮に三日居たれば老の春

念佛と豆腐とふとし老の春

梅が香の筋に立よる初日哉

馬のはなむけしける人に

しら玉や梅のつぼみも一包ゝ

傘の花柄千句や神の梅

薪つむ軒の富貴や梅の花

梅に梅里へをりなば木葉屋

ほのかなる梅の雫や淡路島

香利や梅より外に立盡し

常陸の國足洗ひといふ所に行暮て泊り求めんとせしに、其夜はさる事有とて宿をかさゞりければ、一夜別時の軒にかゞまり臥て、

椽に寐る情けや梅に小豆粥

梅は先散て見せたる手本哉

土器に梅のかゝりや昆陽難波

枯た歟とおもふたに扨梅の花

むめが香にあかるゝ紙子坊主哉

鶯の蹴立によるか梅の雫

日當りの干潮に散るや梅の花

むらさきを諸事に補ひ初霞

馬で行鷹のきほひや夕霞

箱根をこゆる日は雪など降ける。

うぐひすの肝つぶしたる寒さ哉

鶯の調子替へたるあらしかな

雲鴻の主、今は世を引かへて侘しげなるを見るにわびしく

うぐゐすや枯木がちにて痿ましき

阿部川はたゞ名のみして

水上は鶯啼て水淺し
鶯や生とし生る物がしら
うぐひすは長刀に乘る若衆哉
鶯の名を槇檜原師の字哉
うぐひすや此間に雪も降ながし
鶯も小笹にちよつと味噌臭し
うぐゐすやそよりと出たる笹の中
鶯の三足三足芝居かな
鳥の音も絶ず夜陰の赤椿
椿踏む道や寂寞たるあらし

山寺に題す。

鳥の巣に蓋してをけば椿哉
十ヲ五ッ芽より柳の並び哉
六田のや柳は風に障らぬに
明ほのゝ働き見ゆる柳かな
ふり亂すやなぎ神代の姿哉
年明けの此頃針に糸やなぎ
山鳥の樵を化す雪間かな

是まで歟〳〵とて春の雪
木枕はまだ寒けれど旅寐哉
膳立もまだ正月の匂ひかな
羽二重の膝に倦てや猫の戀
うき戀にたゝ(たへで)ばや猫の盗ミ喰
春の曙その七もとや祕藏鷹
水くさき空や淡雪おぼろ月
居風呂に夢見る朧月夜かな

途中の吟

あれ是を集めて春はおぼろ也

何某王(主)馬が武江の旅店を尋ける時

春雨や枕崩るゝうたひ本
まな板や霞たな引いかのぼり
繪も斯や遠山低し風巾の糸
養父入に温飩打とて借着哉
早蕨の笙美しや指の跡
早わらびの何かは握る袖の内
直奕の神は初午さしもぐさ

山はけふ皆杉の葉のふいご燒
爰に露初午道の小條(篠カ)原
傾城の晝寐はいたく雉子かな
耕すや親に似ぬ子の仁しらず
ひとおもひ碎くに手なき田槌哉
おがたまの木に繩さげし種井哉
苗代や帶紐解て代ゝの水
水澄て籾の芽青し苗代田
苗しろを見て居る森の烏哉
菜の花や感じ入たる寺の前
菜の花をいざ見に行む孫を杖

前鏡に題す。

くゝだちの花うちこ(ほカ)はす彼岸哉
蝶ゝも袖脫かけて彼岸かな
さくら咲ひとえに彌陀のひがん哉
雪の賦や銀杏の間にこほれ梅

別墅

歸るとて梅に一夜や四十雀

留別　伊勢より江戸へまかる頃

鴈の聲おぼろ〱と何百里
花の咲木は間しき二月かな

祭二圖司一。　前書を略す

死に來て共如月の花の時
小刀のそれから見えぬ接木哉
引馬の中に交るや田螺とり
そこに馬刀(まて)爰に三日月潟帆浪
としの內よふ踏わたる潮干かな
明星の東へちろり夜の雛
布子着て夏より暑し桃の華
まいら戶に顏見ゆるやと桃の花
餅喰はぬ旅人はなし桃の花
白桃の怪我で美し薄あばた
船頭の耳の遠さよ桃のはな
伏見のや臥て見る桃又類ひ
九牛が毛桃の花や稻荷前
出替りの當言つらし臼に杵

男あり妹に見居りて山ざくら
賭にして降出されけり櫻がり
似た事のかゝる櫻に海近し

田家に題す。

乙鳥につゐて這入や箱廻し
燕や庭は目出たき臼に杵
初花や猪振り向かす嵯峨急ぎ
朝鷹の濡て出るや華の中

挟夜の中山より、彼大井川を見渡して

日晴ては落花に雪の大井川
麓から花見土産や坊が母

留別の吟

巽見して花に別るゝ狐かな

吾妻の餞に

此こゝろ察せよ花に五器一具
（校訂者曰、此句支考に與へたる芭蕉の作なり）

花ニハ感ズニ西行ノ時ヲ。

花にそゝぐ泪やしでに畏り
鳥めと云れて安し花の中
花の跡南へむけし杖の先
もゝすじりゆがみて臥さん花の陰
諸佛あれと魚にして鯽鱠の花
笑ふのが正門ならめ花の山
斧朽し跡に翅を花の鶴
華鳥に悟ればもとの白髪哉

筑紫の旅寐をおもひ立侍るに

月花の梟と申す道心者
月花の目を休めばや春の雨
爐ふさぎや念佛掃出す臺所
我がものと蛙鳴らん西行田
款冬に春をわたして青葉哉
馬の耳すほめて寒し梨の花
蝶は先へ行けり彌生山
その花の咲てや鳥藤三百里
小鮎汲む戀の心や立結び
菅笠を着て覗き見る茶摘哉

行春に底のぬけたる椿かな

三月盡

おぼろ夜を白酒賣の余波哉

ちり／＼に春やぼたんの花の上

夏之部

つゝがなき母の便りや衣がえ

鶴に乘る支度は輕し衣更

世の中をうしろの皺やころも替

西行は娘もちてやころもがへ

橘にうつり心やほとゝぎす

洛の風國亭にて

羽づかひの空にあそぶや時鳥

湖水眺望

郭公帆かけに出るや比叡おろし

杜宇高砂尾上二世帶

播陽書寫山に詣て

ほとゝぎす啼山藪や雲傳ひ

吉備津の宮、此神は一神二應さかや。備前・備中の兩國におはして、吉備の中山に隔りぬ。

短夜やこなたの月に時鳥

周防の國岩國の纖橋を見て杜野さ云所に宿す。此地を旅立けるに、雨もそぼ降山中なりしが、座頭の琵琶負行さまを見て

蜀魂むかしなつかしびわ法師

伊勢の國にて

時鳥啼かぬ夜白し朝熊山

頭の上へにむせぶや魔所の杜宇

舟で行山もありてやほとゝぎす

芍藥は遲し牡丹にほとゝぎす

鶯や笠出來かねて四月まで

雲と見し彼御涎れ花卯木

卯の花に扣ありくや桂かけ

元錄（祿）戊寅のとし、四月廿日津の國を出て

卯の花に難波を出たる無分別

からす崎にて

山かげで卯の花咲ぬ須磨明石

旅だゝんとおもふ今宵

卯の花に祈り過たる曇り哉

姫路の旅店より人〳〵の方へ申遣はす。

晩鐘や卯の花の雪に宿からふ

臨川亭にて

卯の華やちぎれ〳〵に雲の照り

うのはなや垣根〳〵の小土器

卯のはなや夜深に繋ぐ市の牛

卯の花に紅裏つけよほとゝぎす

卯の花に月をあへたる月夜哉

關守も寐させぬ須磨の新茶哉

備中の國に至る。鴫が鼻といふ所は、山城の六地藏に似侍ると云に

宇治に似て山なつかしき新茶哉

ある寺院にあそびて

僧達の袂を染る新茶かな

灌佛や青物店の朝あらし

祝ひの吟

若竹の根に通ひけり緣定め

吉備津の宮に詣す。

俳諧師見かけて啼や諫鼓馬

李唐より七福仲間杜（牡）丹哉

線香に眠るも猫の杜丹かな

をどり子の笠並べたる杜丹哉

閑居の留主なるに入て

我が袖は杜丹を盜む風雅なし

水魚・養竹といへるはらからの人は風雅の志切にして、吾が行脚を止めて、ふたりながらよく饗し給ひけるに

何所やらか菖蒲に匂ふかきつばた

笋の露曉の山寒し

元翠亭に至る。其夜枕のあなたにて翌日の饗を妻に談じけるを聞に、

笋は既に過て爪・茄子は未來らず
さぞ。心ぼそき世なりける。

竹の子や茄子はいまだ痩法師

笋の何處でかぬけて縄斗

たけの子の合羽着て出る入梅哉

二竹堂に宿す。此人去る月世を遁れて、田舍に淵明が三徑の昔をまねび居ければ

耕作の先手習ひや夏大根

湊川にて楠の古墳を見て

鎧にも泣たもとあり百合の露

筑紫の山中を過るに、女の童共の伊勢詣するに逢ふ。道の邊りなる家に呼び入て、何某の方へ遣はす文の奥に、此童共に茶漬喰はせ給へ。柿の本の聖も哀れと見給へるものを、と書て

姫百合の情は露の一字かな

化粧坂と云所にて

百合の花酒の醉人や化粧坂

野紅の主、おさなき娘を失ひ申されし悲しさ、おもひやるばかりはかなし。

世の露に傾き安しゆりの花

前書あり略す

忠度と馬も木賃や百合の花

題二山家之百合一。

しら雲やかさねを渡るゆりの花

岐阜ノ過雨。

うね〳〵に流るゝ雨や芥子の花

幾程の世に寄麗なり罌粟の花

藝陽嚴島彌山

彌山とは芥子の峯に朝日かな

散る時の影や鏡にけしの花

華ちりて芥子は法師の名のみ哉

伊州にて途中の吟

余所〳〵の山は覆盆子の盛哉

麓ともおぼしき庭のいちごかな

雪も散り花もちるとて螢かな

夏の葉やほたる抓めば錢の臭(カザ)

梨壺の五夂膳や飛ぶ螢

江州柏原の驛、江水亭にて

行暮れて蚊屋釣草もほたる哉

備前岡山の梅林亭にて

窓に寐て雲を樂しむ螢哉

端午の吟

田の中に棒の立よき甲かな

幟たつ軒端や雪の朝景色

備前岡山の城下にて

松風ときけば浮世の幟かな

鈴も實伊勢路の端午けふの聲

貧僧の苦しみ、冬の寒さは防ぐにもよすがなきに、夏の納涼は扇子一本にして世上にまじはる。

帷子の願ひは安し錢五百

備中の露堂亭にて

五月雨に袖面白き小夜着哉

竹原と云所は、山を箕の手に負ふて前に塩濱あり。一雨亭に宿す。

五月雨の塩屋に近き燒火哉

宮市、此地に天滿宮おはして、鏡の御影と聞えさせ給ふは、左近の昔旅姿を水鏡し給ひしより、申傳へしと聞侍りて

五月雨に濁らぬ梅の疎影哉

笠縫の里は古哥の名所なるに、簑といふ物は野夫の袂を重ねて、誹諧の便りある物也。若き人といへど此道のさびなからんや。

秋ならで五月も寒し鷺の簑

さみだれや匂ひ袋のひたしもの

五月雨や雲雀啼ほど晴て又

尾の道に趣く道の傍に、あやしき小家の侍るに、能因の詠をおもひあはせて

笹の葉に何と寐たるぞ蝸牛

人々に催され、藤戸の浦に行て

生て居て何を舞(せむ)浦の田植時

さみだれて竹原な旅立、林光坊の
辻といふ所にて送り來る人に留別。

我影や田植の笠に紛れ行

松影をうしろにしざる田植哉

またぐらに山見る磯の田うへ(ゑ)かな

參宮の笠着て出たる田植哉

早乙女や黑髮山を笠の影

里の子の乙鳥握る早苗かな

早苗香や田中を行ば弓と弦

孟母贊

撫子や植けん母の土目利

攝州西の宮にて舍羅に別な結ぶ。

短夜の余波や軒十ばかり

小田山の何某に宿す。さるな芦惠
の主に招かれて風雅の物語なごし
けるに、捨難き事に急がれて宵の
ほど歸るとて

みぢか夜のうさとよむべし月の宿

何に此末摘花を老の伊達

柳浦亭に招かれて、手作の瓜畠な
ご見歩行けるに、古郷の眞桑も今
や盛りならんと思ひ

美濃を出て知る人稀や瓜の華

莊子贊

枕香のこがしも飛ぶや夢の夢

板の間に出てや蚤も桂馬飛び

風陽が小弟風雅に志あるなよみ
し、進學の解な作りておくる。

山斷して水鷄に扉たゝかるな

日田に着て西光寺に宿す。から竹
藪四方にめぐりて、山川流れ左右
にわかる。

宵月や寺は千鳥の巣のあたり

尙政亭にて

鹿の子のあそびたらでや磯の月

除風菴にこみ入る。主外にあり、
驚き歸る。

先いの歟(ろ)甲斐こそ見ゆれ瓜茄子

播州書寫山奥の院にて、辨慶が晝寐の顔を水鏡せし池の名有。其邊に立寄て

晝寐せし負や茄子のむさし坊

仲津に歸るその夜、源七の何某、初眞桑をおくりければ

源の字は忘れじ今宵初眞桑

初瓜や道に煩ふ枕もと

示ス二秋ノ坊ニ一辨　前書を略す

瓜ふたつみつにわかるや蘁劫記

涼しさや瓜ふむ闇の畔傳ひ

むき肌は藍を出けり東寺瓜

園友亭酒狂の後、人々の口質まねびて見むとて

瓜喰ふて酒飲む腹は祭り哉

祭客我ほど黒き顔もなし

連立や祇園守りの結びさげ

かな棒に急度言(コト)やめ岩戸山

備前の國大藤内屋敷は、門戸高く子孫めでたし。

淨瑠理(璃)にいへば夏野ゝ草まくら

西淨寺を出て、道すがら夏山鶯の今もさかりのやうに啼たるに

夏山や鶯啼て小六ぶし

梅睡亭にまねかれて

夏菊に濱松風の便りかな

浪化の舍維、剃髮の後も舍羅さいふ。此舍羅を捨て、どの舍維をか求む。舍羅〳〵さしてさらにしやらなし。

一度は瓢の花のあたまかな

仲津の竿水亭に訪ふ。あるじ居にゐ給はず。何某の息もてなされ侍る。けふは殊に暑き日なり。白雨を待さいふ題のこゝろにて

水無月の雲一寸の錦かな

みな月や蜜柑の秋も今三日

菊もありて人なし夏の宵月夜

米あれば鶏あり里は夏の月

生花や夏の枯葉を軒めぐり

社僧の情有て濱の宮に通夜申侍るに、朱拙・怒風など尋れ來り、中にも怒風は美濃ゝ國に歸ると聞ば、古郷の方戀しくぞ見えはべる。

夏旅の馬ならばよき黒みかな

五老井四梅廬之納涼

涼しさのたらでや黄なる軒の梅

きんかには蓋してありく團哉

花鳥の中に蚊屋釣る繪の間哉

四日市と云處に宿す。西條といへる柿の名所也。此里に我名を知りたる男有て、來りて風雅の事いひていにけるを、主の聞て我に物書て得させよと云。我を尊き者とおもふにこそと心の程おかしければ

弘法を狸にしたる蚊遣哉

藝州宮島神前奉納

灯籠やいつくしま山浪の花

都をばいつ六月のほとゝぎす

宇佐の宮に詣て、そのかみを思ひ奉り

鎧着ぬ身も哀れ也蟬の聲

豐後の日田といふ所に趣(赴)くに、立野と云所を過る程白雨に逢ふ。空漸晴て涼し。

蟬の音をこぼす梢のあらし哉

蟬の聲けふは晝寐の仕舞かな

豐後の岐(キイ)ノ西淨寺と云寺に宿す。されば昨(きの)ふけふ馬の口に附たる久作といへる男の晝飯に、五郎四郎〳〵と云を見れば、小麥の餅也。是を尋るに、筑紫人はすべて云習はせたるよし。此名の嬉しければ、今宵是が傳を作りて何某へおくる。

夕顔に鏡見せばや五郎四郎

大橋の人々に贈られ、濱の宮に詣す。此神の昔此濱に一夜の夢を結び玉ひしを、世に網敷の天神と崇め奉る。旅寐は神だにあはれとおぼしたらん。

晝顔よ今宵は爰に濱の宮

晝良や夏山臥の峯づたひ

散込て晝寐を埋む笹葉哉

里仙亭にて

月雪や夏は晝寐の香爐庵

湖南木曾塚に至りて師の石塔を拜す。差向ひたる塚の神の、物いはざるは唯悲し。其夜は舊草に昔をしのぶさて一夜寐侍て

夜噺のねぶたかりしも夏の夢

倉敷を出て矢掛に趣く。觀音寺に宿す。あかつきの夢覺て鐘の聲をきく。

夏の夜の夢や菅家の詩の心

大垣斜嶺亭にて

たが家の伊吹を軒の青あらし

臕出の泡たつ空や雲の峰

前置に尾上の鏡や雲のみね

餞別の吟

其杖も龍にやならん雲の岑

嶋もその初洲走や表筒雄

切箔の風にちらばふおぼこ哉

しろ瓜の出そめて嬉し市の中

革摺を疊上ゲたりあらひ鯉

宝蓋の崩れて青き澤田哉

炭とりとしらで瓢の莟かな

蕎麥を伸す心に蓮の卷葉哉

野紅亭にあそぶ。蓮池有て、一二輪切て、此日の床の見ものにと

盧山には歸る橋あり蓮のはな

驚をいなせて竹の落葉かな

さかづきや百日紅に顔の照り

筑紫の羅漢寺の山頭によぢのぼり、

五百尊を拜す。

葛の葉の秋待顔や羅漢達

人形の顔に袂や葛の花

玖珠(クス)といふ所より、投錐・曲風な
どいへる風雅の友なるよし、主の
許へ文して葛を贈り申されし。

葛水に玖珠といふ名の面白し

大名の影たかむしろ高鼾

旅人の名はよく知りぬ夏の艸

夏苅や叡山衆の馴ごろも

涼しさに中にさがるや青瓢

牛もなき車の尻や夕すゞみ

長門の國下の關に着て流枝亭に宿
す。されば文字・赤間の二關は筑
紫・中國の境ひにして、海の面十
町余に差むかふ。

關の灯のあなたこなたを夕涼

豐前の小倉に至る。有斐亭に宿す。
是より九國の道東西へ別れて、行

脚の志定め難し。

笠に帆をあげてどちらへ夕涼

闇に來る秋をや門でゆふ涼

前書あり略す。

翠簾ごしに向ひの人をゆふ涼

高砂のゆかりや松の下すゞみ

莓の名の月先涼し水前寺

一夏山陰に籠りて

牛になる合點ぞ朝寐夕涼

肩衣にをの〳〵涼し帆懸船

涼しさや椽から足をぶらさげる

涼風に九ゝの鱗のともしかな

風も江の作者也けり船すゞみ

長刀の五條も涼し橋の月

寶蓮坊に招かる。僧のいまだ見え
給はず。屏風の傍に角力の土俵な
ど云べき枕を、ふたつまでかされ
置れたり。

六月の峰に雪見る枕かな

柳浦亭を出んといふに、人〳〵袖にすがりてとゞめられしを

又越さん菊の長坂秋ちかし

備中の國にて小堀宗甫の汲捨たまへる井あり。姫路を過る頃、何の藤三郎か初日の茶一斤送りし。此里に來りて此茶ある事

茶にやつす袂も淺し山清水

梢まで來て居る秋の暑さ哉

夏と秋と今宵や雲の詰ひらき

（芭蕉翁誹門蓮二吟集　雅）

穐之部

秋もまだ二日月夜や峰の松

土佐が繪にあふのく人や星祭

牽牛の傘すほめてや橋の上

朝寐にはよし蘇の北座敷

早稲の香や伊勢の翌は二見より

早稲の香や蟹踏分る磯の道

笠着せて見ばや月夜の鶏頭花

雞頭に牛盗人の晝寐かな

北溟亭病後の吟

燈籠にならでめでたし生身魂

さゞ浪や井波にかはる墓泉（参カ）

一介亭にて

仲麿は誰が家にきく魂祭り

阿叟が魂まつる吟

松の葉を包むこゝろや蓮の飯

法性院の欄干に月を賞す。

唉亂す山路の菊を燈籠かな

鞍風に誘はれ、小船を泛めて、彼
數千の灯籠の光り水面につらなる。

漁火に通ひて岑の灯籠かな

里仙亭にて

切麥やあらしのわたる膳の上

立臼に手杵連だつ踊り哉

明ぬれば近附戻すをどりかな

踊り髮直に抓むや大江山

ほんほりの相圖を待や花火舟

出女の口紅をしむ西瓜かな

前書あり。

桃の實の眠りもたらぬ雫哉

草花や秋知り顏に持ありく

前麿山の賦を略す。

艸花の名に旅寐せん禿ども

庭掃て鶺鴒寒し草の花

定ニ前、後ヲ一辨を略す。

あふ坂も粟津も果は秋の草

一里はみな俳諧ぞ草の花

讃岐檀の浦の蟹は、平家の人〱
の魂魄也さぞ申傳へ侍る。

秋の野ゝ花ともさかで平家蟹

虫どもの啼てや我を涅槃像

賣家や猫も酌子も虫の聲

松虫に人なつかしや磯の家

番椒といふ題にあたりて

鎗もちの秋や更行とうがらし

籠るなり百日紅の散る日まで

何よりも唐めかし行秋の風

桐の葉にどふでも今宵秋の風

尾張の國津嶋といふ所に旅休して

秋風のふけばいよ〱旅寐かな

澤蟹の鋏いからせて秋の風

しら河で引かせ給ふな秋の風

餞別

筑前の國極樂寺に宿す。此日病ありて怖しき熱に苦しむ。人〳〵驚き侍る世のさま社あやしき物なれ。生(いき)の松原も此あたり近ければ、生ては歸らんなど人のいふを聞て

秌風の枕にちかし生の松

悼ム二少年ヲ一

その親をしらぬ其子は秋の風

身の穂を何頼むらんいきの松

黍の葉のそよぎて浦の朝茶哉

難波にて

衣食住ゝ津の浦也蓼の花

筑前の博多に至る。甫扇を訪ふ。箱崎ゝ松原に續きて、世ゝ住所も常にはあらず。斯ても有べき所かなと

松原の葛とよまれし住居哉

海はあれど翁まいりぬ葛の宿

船に火を焚ヶば蔦はふ家のさま

萩咲て便あたらし宮古人

人が人に似たとて餅を萩の花

かる餅も臥猪の床の小萩かな

長持はむかしの家ぞ萩所

秋萩とけふから名付御先哉

菊扇亭に招かれ、手燭をかゝぐるに、蘇鐵山有て眞砂を敷わたしたる庭廣し。

爐次下駄に雪の音あり萩の露

一俵もとらで案山子の弓矢哉

極樂寺に至る。野亭の何某にたすけられて、人間半日の閑を得るに似たり。極樂の二字何かうたひ侍らん。

寺は我古巣なりけり椶梠の秋

下の關にわたる。流枝亭に會して、

たのく病床つゝがなき事を賀せ
らる。

死ナでこそ都の秋も山つゞき

壇の浦にて古戰場の弔を演る。

烏部野は遁れずや此浦の秋

連中三人夜る書あそびて

虎もなき和田酒もりや秋の暮

阿彌陀寺にて

屏風にも見しか此繪は秋の昏

一保庵にて

何とやら心も髭に老の秋

腸に秋のしみたるほとゝぎす

弓かためとる頃なれや蘭（ふぢはかま）

卜居篇　前書あり

宇治山の僧も御出や初月夜

あそこには誰すて置て三日の月

蔦の葉にともし付たり三日の月

羽黒の晩鐘

三日月のかけて飛ぶ日や晩の鐘

長崎の秋や是より江の月夜

猿猴の手をはなれてや峯の月

熊野本宮温泉

ふだらくや湯錢にのぼる松の月

鹿の音の糸引はへて月夜哉

人く（ひと〴〵）に連立て諏訪（すは）の神に詣す。宵闇の月も影ほのわたりて、宮前の吟望いふ斗なし。

一は闕二は月影の花表哉

沙明亭にて病後の吟

生て世に茶汁菊の香日に月夜

待宵のまだ閙しき月見かな

尾に泥の我も家鴨かけふの月

名月やぬけば玉散ル砥並山

筑前の國久留米の西與亭の前に川あり。さるは古歌にも詠じたる一夜川にて侍るよしをきゝて

名月はふたつこそあれ一よ川

伊勢の山田に有て、假の庵をおも

ひ立頃

二見まで庵地尋る月見かな

五器たらで夜食の內の月見哉

十六は美人の圖なり月の色

鉢ひらき彼岸にわたる小鳥哉

玄全亭に至る。是は西鷗老人の高弟になんおはしける。老師を招きて此度の恩を報ひたてまつるさなり。

藥園の花に假寐や秋の蝶

粟の穗を見あぐる時や鳴鶉

うづらにて鳴立澤やまのゝ浦

居りよさに河原鶸來る小菜畠

ひよどりの空やわたりて日和山

小倉の西鷗老人が藥を服して病いゆ。

駕籠の戸に山まづ嬉し鴫の聲

水颯亭にて

脇息に木兎一羽秋寒し

又來たと鳥おもふや小田の雁

初鴈や口にからろの拍子利

影照院にて

蕎麥の花待てやたてる岡の松

手拭ひは何山姫の溫泉に染ゝん

松風に新酒を澄す山路哉

新酒に醉ふはえふ同士五百弟子

いなづまに染てはらりと野山哉

稻妻に聲ありそよと花薄

狐とはおもはじ君を花すゝき

黑崎を立て、又小倉に趣くに、人〳〵へ別れをかなしむ。

菊萩にいつ習ひてや袖の露

砧にはまだ新らしき匂ひかな

一知亭に招かる。昔大貳の高達、此地に來りて菊の歌詠しさなん。

煉酒は今俳諧なるを

ねり酒にやぶいりせばや菊の宿

福岡にいたる。此所むかしは唐船

も入つごひたりさきけば、今の長崎のやうに侍りけん。五里の濱さいふは、此あたりすべて一領の中なるべし。

もろこしの菊の花さく五里の濱

重陽の吟

簑虫にそむきも果ずけふの菊

霜をかぬ三笠のかげや神の菊

煮も綿の雫淋しやきくの華

此句有磯海ニ入たり。然るに續さる簑ニは、雫に寒しトアリ。

我形ﾘは山路の菊の寒さ哉

菊の香を扇子に汲て山路哉

借ﾘかけし庵の噂やけふの菊

親役でけふは目（呂カ）めくぞ菊の杖

しら菊や鶴の都の霜降羽

財布から小判の耳や菊合

悲しがる秋をめでたふ菊の花

白菊はしろし昔の物がたり

豆まはし廻しに出たる日向哉

有猪亭に至る。此亭は水無月の初め一夜の假寐に別れしが、行めぐりて九國のさまもおもひやられて

琵琶形りに歩行て秋も九月哉

夕顔の汁は秋しる夜寒かな

帆柱亭にて

ひだるさを兒の言葉の夜寒哉

茸狩といふて出ばや旅すがた

植て行人こそ見えね菌がり

狼の此頃はやる晩稲かな

梅川亭にて

衣着の香も嬉しき秋の宵寐哉

穐の夜や山鳥の尾に是が人

和風のあるじにまれかれて

鯱釣るや角前髪の上手顔

新蕎麥や夕部伊吹を夢に見た

柿主に野分かゝえて旅寐哉

昌倚亭に招かる。此人は落柿舍の

従弟になんおはす。
淋しさの嵯峨より出たる熟柿哉
一霜の寒さや芋のずんと苅
東すれ梅や櫻の七紅葉
泊船津
船頭も米つく磯の紅葉哉
備前の福岡にて
城外の鐘聞ゆらん紅葉山
阿彌陀寺の庭に老木の松ありて、薄墨の名を得たり。文字が關を此松の木の間より、見わたしたるゆへなりとぞ。
薄墨のやつれや松の秋時雨

冬之部

簑箱の古實聞たし初時雨
川上の煎酒にほふしぐれかな
金堂に雀啼なり夕時雨
川音の時雨なりけり御用船
垣間見やたしか葉守の神無月
茶の花や是も玄旨の植殘し
初霜や砂に鰯の反かえり
はつ霜や芦折違ふ濱づゝみ
侍は腹さへ切るに巨燵かな
埋火や寐かねたる夜のふたり力
頭巾とはぬぎ替つたり膝頭
起さるゝ聲も嬉しき湯婆哉
柚子蜜柑會式の箔を命哉
屋根ふきは下からふくぞ星下り
惠心寺に奉公はせいで網代守
水仙にあの日は床し障子脩
水仙や門を出れば江の月夜
上代の推水くきぞ冬柳
はちたゝき聲は梟に衣かな
鉢たゝき出そむる夜の笑ひ顔
鴨おろす水に筋あり昆陽の池

くる〳〵と堀江の鴨の浮寐哉

海士小船廿日ゑびすを圍ひ鯛

世ゝ志

夕暮を惜む隙なし冬景色

野は枯てのばす物よし鶴の首

亡師をいたむ。

鹿の音も入て悲しき野山哉

龍昌寺與行

霜月の霜のひかりや月と花

一つ葉や一葉〳〵の今朝の霜

足場よし霜の三結のしめぢから

いつく嶋法樂　寶前の花表に題す。

三日月の一點寒し嚴しま

篠原の月冴殘る兜かな

蠣むきの手に明りさす冬楓

はつ雪や竹に雀のかざるほど

雪と知つてそつと目を明く夜や昔

明ヶむつの花やちら〳〵御供觸

竹の子に簑着ぬ庭の雪景色

傳ひ來る高根の雪や小松まで

降たらぬほどや鶯見の池の雪

竪横に織らせて見ばや雪の原

網の手に今ふる雪や濱便り

馬の尾に雪の花散る山路かな

ふたつ子も草鞋を出すやけふの雪

降る雪に淡路は夢の心地也

前書あり。

節〳〵のおもひや竹に積る雪

冬の日飯居寺にて

杉の葉の雪おぼろなり夜の鶴

きつとして霰に立や鹿の角

みぞるゝや鶏覗くとまり時

雪霜の骨となりてや梅の花

早咲や錢壺貫にむめの花

此里は山を四面ゝや冬籠り

あの聲の撞木は細し寒念佛

煤掃や笑はせものは田植笠

すゝはきや何を一つも捨られず

草庵の歳暮

煤掃はさいとりさいて仕舞けり

茶を刻む廣敷寒し吹く灯

呵られて次の間へ出る寒さ哉

寒ければねられず寐れば尚寒し

元祿十六癸未年尾　行年三十九

乗好は死ねといふたに年忘

餅つゐた音は夢歟よ朝烏

餅たべて年うち越えん老の坂

能なしの僻に急ぐや年の影

鳥護ニ増賀ノ夜ヲ。

梟一羽鏡に寒しとし籠

硝子の一夜あちらや華の春

追加　七章

虎の位をかり催す日かるた哉

蛇の目の何歟悟りて早合点

色かえぬ姿は件ニ軒茶屋

風爐かける淋しき松の雫哉

嚴島法樂

神も知れ三河遠山出雲白

尾の道より小船に棹さして、安藝の國竹原といふ所にわたる。道のほど八里斗、あしか瀉能地の浦さかや、浮鯛の名所なるよし。

浮鯛の名やさくら散る三四月

樺にうき名の立や戀の山

還俗の吟

蓮の葉に小便すればお舎利哉

嶋亭にて病中の吟

魂棚にこちら向ヶ日を待身かな

嘯鳥舍が月見に

名月やけふは賑ふ秋のくれ

何尾亭にて

山の端の月見や岐阜は十三夜

梅泉庵に願ひのまゝに鑑塔の碑成就す。五月も後の七日八日の比ならん。

人のとほす盆もまたずに螢かな

盆も十四日の夜ならむ。

玉棚に油火細し我がごく

今年の良夜は今生の名殘とおもひ、人々の目をさまし侍らんと

富士をいざ山の端にせんけふの月

重陽

千代はいはず露の間嬉しけふの菊

うら山し美しう成て散紅葉

秋夜の吟

氣短し夜ながし老の物狂ひ

はせを忌

待らんに行ばや我も冬至の日

神にも人にも捨られて

婆婆に獨淋しさおもへ置巨燵

鷄の音の隣も遠し夜の雪

臘八や痩は佛に似たれども

煤の日や蒲團に釣りて童事

歲暮の吟

正月もまだ二日路ぞ老の坂

歲旦の句

けふ〳〵と思へば嬉し華の春

人日

雜炊の名もはやされて薺かな

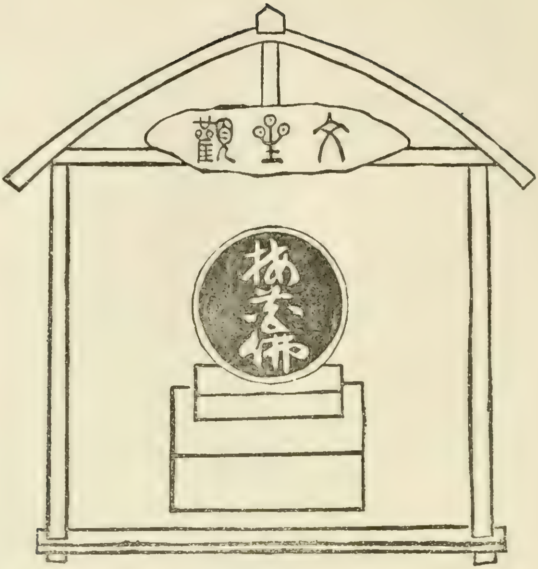
正月の月夜は嬉し見はせねど

蓮うふる日に趣向有て

極樂の指圖や蓮の植所

此句を一生の言止めとす。享保己酉の春の頃より疝痛の病ひになやみ、出入三年の煩ひにて、終に享保辛亥の如月七日、齡六十七歲にして、本土美濃の獅子庵に於て黃泉の客となれり。門人遺言にまかせ、黃山の西の岡に葬り、遺骨梅泉庵の鑑塔におさむ。

支考古墳之圖



（校訂者曰、こゝに蓮と小禽の圖あり、略す）

蓮二房がふるきをとふ

蓮の實の魄は
うき世にとゞまりぬ

永我

蓮二吟集終

寳暦五乙亥冬

古文字屋次郎兵衛

五老井發句集

許六

五老井句集序

晋弘度、書を部類して見安からしめんとし、藤の黄門、多本を集て用捨し、青表紙にうたがひをさく。こゝに湖東の五老井許六子は、一たび蕉翁に謁して、正風の直指を得られ、文辭の才は膽逸にして人情世態を盡し、天下の耳目を愕かす。俳諧は匂塞・深川集ニ入りて、万代の龜鑑となれり。丹青の妙は精神徹に入、筆端妙をふるふと、祖翁、桑門辭に擧給へり。今や予がよみすてし一代の句ゝ、諸集よりもしほ艸の書あつめ、撰訂を正し、五老井句集と題す。翁在世のとき、須磨の鼠の句につけて、余が腹中へあしだをはき這入ものは、汝より外なし。よく余が精心をしれりと、其丹誠を稱歎し玉ひしより、一生我才の自屓(負)に高ぶり、文場に跋扈し、天下に横行して、世人を芻狗の如く思はれしは、かたき武の中に、雅の和かみを兼備し英俊なればなるべし。末世鼠才の舌頭ニかゝるなどは、愴妬猜嫉よして論なからんや。末期ニ臨て起請の教を作意し、門葉にしめされしは、芭蕉風の百年に及ばで、朽廢せん事をなげかれし豪傑の修行は、實に蕉門齒牙の弟子とも感稱すべし。さるにてもかしこき人の句を、おのれらごときが編集して、代(世)に公にせんも、いせ人らの僻事するにはまさりなんか。おもふに梨園のたて役者の手道具は、後見が取集る道理にして、集るものはおよばぬものゝ役なり。なんぞ憚んずべきにもあらずと、君子の貶、杜撰の辜をかへりみず、かくは自序するものなり。はた籠の淵蘆、關屋の板びさし、もれがちの句もありなん。そは後の人正しねかし。

天保四巳霜降月

於于銅山寓舎

指艾園山蔭撰

印　印

五老井發句集

湖東陳人山蔭著

春之部

立春　春立や歯朶にとゝまる神矢の根

歳旦　君が代にあふや狩野ゝ福祿壽

粥杖　古猫の相伴にあふ卯杖かな

朧月　墨の庚申塚やをぼろ月

猫戀　田作りの口で鳴けり猫の戀

若菜　雁瘡の足をつまげて若菜かな

梅　梅が香に濃花いろの小袖かな

深川懐舊

豆腐やもむかしの顔や軒の梅

ちりしほやはぜうる里の梅のはな

梅が香や粉ぬかちりゆく臼のあと

梅が香や客の鼻には淺黄椀

柳　五老井記

水すじを尋ねて見れば柳かな

庚人のうしろ向たるやなぎかな

ぬれ色に春のうきたつ柳哉

西風にひがし近江のやなぎかな

旅の吟

春　乗掛に春の蜜柑やうつの山

鶯　うぐひすの鳴破りたる紙子かな

鶯の小瓶やほしき飴おこし

春雨　春雨やはなれ〳〵の金屏風

春風　灸の点ひぬ間もさむし春の風

春雪　掃ためを捨かけておく春の雪

雲雀　砂川や芝にながれてなくひばり

遲日　懺法のあはれ過たる日の長さ

出代　出代やからかさ提て夕ながめ

出代や哀れすゝむる奉加帳

陽炎　かげろふや破風の瓦の如意寶珠

苗代　苗代やうれし顔にもなくかはず

病より起て四梅廬に遊ぶ。

蛙
苗代のきはや病後のひたひつき
角大師井手の蛙の干ぼしかな

雛
三月の三日平氏やひなあそび

花
春慶のぜんすへ渡す花見かな

五斗米の爲に腰を折るに懶し。
年ゝに倚いそがしや花ざかり
春死なば花に迷はん後の闇

櫻
茶のはりにそしつてちるや山ざくら
見物にちり交りたるさくらかな
百石の小村をうづむさくらかな
世の中を見きつてちるか山櫻

双林寺中西行・頓阿の墳を拜して
これ斗り啌のまぜらぬさくらかな
苗代の水にちりうくさくらかな

梨花
忍ばする妾に似たりなしの花

菜花
なの花の中に城あり郡山
菜の花や豆の粉めしの朝げしき

海苔
春なれや田の青のりになく蛙

いせ奉納
青のりも和光の蘆のひとつ哉

浪花の諷竹、之道といひける時、しばらく行脚の頭陀をとゞめて、又みのゝかたへも趣んといひければ

木瓜
紬きる客に取つけ木瓜の花

藤
藤の花さすや茶摘のになひ籠

題草字藤
蝮蝎の餅にうごくふぢの花

行春
けふ限り春の行衛やほかけ舟
行春やさて出代のなられもの
行春に佐渡や越後の鳥曇り

入學の贊

若芽
本箱にまづなる桐の若芽かな

支考が長崎行脚を送る。

海松
貫之も精進の友よ海松海雲

夏之部

衣更　上ひとつ脱で大工の衣がへ

佛生會　佛法をはだかにしたる產湯哉

旅懐

麥秋　宿〳〵は皆新茶なり麥の秋

半夏生　半夏水や野菜のきれる竹生嶋

天龍川にて

入雨　天龍の黴雨やしら髪の渡し守

木曾路にて

田植　山吹も巴もいづる田うへかな

胴亀やきのふ植たる田のにごり

產月の腹をかゝへて田うへかな

五月六日武江の舘を退て

卯花　卯の花に蘆花〔毛〕の馬の夜あけ哉

大津に住ける比瀬田に初音を聞て

郭公　ほとゝぎす春〔瀬〕田はうなぎの自慢かな

四五月の卯波さ波やほとゝぎす

白河を夜舟や京のほとゝぎす

蕎麥切のわかれもかなし杜宇

牡丹　蠟燭にしづまりかへるぼたん哉

西ひがし六條どのゝぼたん哉

唐戸から覗て見たるぼたんかな

信濃・上野を過、むさしの國にいりて芥子の花を見る。馬頭初見米嚢花といふ句の力を得たり。

芥子　熊谷のつゝみあがればけしのはな

杜若　日あたりや紺やのうらのかきつばた

片店は掻〔櫛〕を賣るやかきつばた

竹子　竹の子に身をする猫のたわれかな

李由にかへし

竹の子の上るきほいや夜ゝのつゆ

竹の子の末は親仁に根はむす子

新麥や竹の子時の艸の菴

心太　晝がほのはても見へけりこゝろ太

凉　凉風や青田の上の雲のかげ

旅行

涼風や峠にあしをふみかける

新宅賀

天井も井の字で涼し夏ざしき

蚊遣火　蚊遣火や麥粉にむせる咳の音

納涼　山伏の髮すきたゝて夕すゞみ

螢　麥跡の田うへやおそき螢どき

蚊遣火の烟にそるゝほたるかな

宇治川の螢は、昔日三位入道の亡魂といふ傳ふ。今の世は

かしこさに合戰なしにとぶほたる

八十に餘れる老祖父、子孫のさかへ行につけて、はやく死たしと斗り願はれける。

土用干　一竿は死裝束や土用ほし

夕立　夕立に幾人乳母の雨やどり

荒井にて

今切や夕立風の汐ざかひ

木曾路にて

蟬　棧やあぶな氣もなし蟬のこゑ

三保の松原にて

伊豆するが蟬のめあてや三保の松

團扇　いそがしきから臼ふみの團かな

長雪院の解

何をおもふ長雪院のしぶうちは

清水　我跡へ缺口立よる清水かな

甲斐の郡内を出て

暑　道ばたにまゆ干かざのあつさかな

雲嶺　國中や青田にうつる雲の嶺

てり附るさらしの上や雲の峰

西瓜　世にすめばたゝかれくらす西爪かな

氷室守　京菓子のなき世なりけり氷室守

江戸を立て

蚤　江戸立や蚤にわかるゝ衣がへ

富士にて

蚊　蚊の聲やふじの天邊の明殘り

大井川にて

鮎　大名に馴染の鮎や大井川

宇津の山にて

茂り　ぶらさがる沓の茂りや蔦の道

山いもゝ茂りてくらしうつの山

矢矧にて

短夜　短夜に矢矧の橋は猶長し

笠寺にて

夏月　夏の月旅のかさでらいざぬがん

物見松にて

夏野　青天にもの見の松に夏野かな

醒ヶ井にて

瓜　醒ヶ井の地藏やうりの尻ひやし

土用　寒ざらし土用の中をさかりかな

夕皃　夕皃の花見の衆やあぶら賣

夏　麥めしのへらぬに夏の夜明かな

秋之部

うつの山を過て

秋　十團子も小粒になりぬ秋の風

あさがほのうらを見せけり風の秋

大きなる家程秋のゆふべかな

のび〳〵て衰ふ菊や秋のくれ

蚊遣火にうちは當けり秋の風

秋の夜に寐たらぬ人の聲とさよ

嶋田・金屋の送り火に感をます。

天川　聖靈とならで越けり天の川

かさゝぎの橋や繪入の百人一首

星合　星合をすかして見るや揚燈籠

踊　藪入にもどつて京のおどり哉

相撲　裸身に麻の匂ひやすもふとり

下帶は見事なれども京角力

相撲取のもみ紅うら染し秋袷

角力合の時　四句

見物の鼻血をかしや辻相撲

あの人の嗟と相撲は親ゆづり

茶壺割座敷相撲や從弟同士

雨ふりは夜着きて寐たり角力取

八朔　八朔に酢の利過るなますかな

名月　名月の是もめぐみや菜大根

名月や一聲こもる天津雁

月　乞食せん月の宿には外（そと）がはま

渡邊に薄知あり雨の月

名月や升の匂ひの淡路しま

題揮月忌

いもを煮るなべの中迄月夜哉

十六夜　十六夜や有馬を出て歸る人

彼岸　百性の嫁の出たつひがんかな

虫　くるゝほどばせをにひゞく虫のこゑ

干鮭のめへかゞんだる竈馬かな

松むしの中や夜食の茶碗五器

疝氣もつこし骨寒しきり〲す

稲刈のその田のはしやこき所

亡母年回追悼

蕃椒　唐がらし茶摘水汲法の人

鹿　小男鹿やころび折たるそば畑

小雨たる糸より細し鹿のこゑ

白畫自贊

朝鹿の身ぶるひ高し堂の椽

雁　白雁や野馬をおとす草の露

おなじく

夜寒　落雁の聲のかさなる夜寒哉

野分　一番にかゝしをこかす野分かな

瓢　針立の撫〲は入るふくべかな

駒迎　挑灯に蹴上の泥や駒むかへ

尾花　ない袖をふつて見せたる尾花哉

海棠　海棠の盛り過るや大小姓

菊　欄干に登るやきくの影法師

山科や五荷三束にきくの花

朝顔　看經の間を朝がほのさかりかな

女郎花　男はねの艸になるのや女良花

鶉　鶉なくや八丈嶋の女子ども

旅の吟

寒サ　大名の寐間にも似たる寒かな

冬之部

時雨　あたらしき紙子にかゝるしぐれ哉
新わらの家根の雫や初しぐれ
有明となれば度〳〵時雨哉
今市の市日といへばしぐれけり

亡師一周忌に手づから畫像を寫し、野坡送りて深川什物ニ寄附す。

霜　甕の霜無言の時のすがたかな
水ふろに垢の落たる霜夜かな
初しもや鐘樓の道の沓のあと

宿明照寺にて

落葉　寒山と拾得とよる落葉掻
大根引　同日に山三井寺の大根引
出女に投て通るや大根引

亡師三回忌報恩

紙子　月雪にさびしがられし紙子かな
紙子きて川へはまらば龍田かな

十夜　禪門の革足袋おろす十夜哉
下京の果のはてまで十夜かな
佛名會　佛名や打敷ほめるみすの中
冬至　挑燈に水菜揃へる冬至かな
御影講　精心の多き大工や御影講
御影講や顱の青き新比丘尼
鴨　明がたや城を取まく鴨の聲
江湖　鼻息や朝飯まつまの江湖部屋
雪　初雪や拂もあへずかたつぶり

去來が雪の門を題して、晋子に句をのぞまれて

十四夜は海手に近し雪の門
初雪や先馬屋からきへ初る
初雪や納る江戸の人ごゝろ
しつとりと雪もつもるや木綿夜着
初雪やけさくだられし山法師
網代　網代守宇治の駕かきとなりにけり
初雪を脊中に肩（負）ふや網代守

鶺鴒　鶯に啼て見せけりみそさゞゐ

冬　杉の葉の赤ばる方や冬のくれ

寒　大髭に剃刀の飛ぶさむさかな

鉢叩　嫁入の門も過けり鉢たゝき

納豆　臘八や腹をさぐれば納豆汁

示二小坊主阿段一

布子　訴を直にきくなり節布子

埋火　埋火やふとんを通す茶の匂ひ

氷　あし代ややぐらの下の薄氷

寒菊　寒菊の隣もありや生大根

枯野　血の附し鼻紙寒きかれのかな

寒聲　寒聲は葬禮がきて仕舞けり

翁一周忌に

歸花　一度は醫師ものとはん歸りばな

何がし寺の住持、いにしへ石榴鼻といふものにて面色のあかければ、今に寺のあだなとなる。

達磨忌　達磨忌の旭たふとや赤東堂

行年　行年や多賀造宮の訴訟人

餅搗　もちつきや犬の見上る杵の先

旅の吟

年暮　出女も出かはり顔やとしのくれ

年内立春　連哥師の去年とやいはん冬の春

雜之句

旅の吟

世話やきの友にあきたる旅の宿

清見寺にて

餓鬼の食雲もかゝるな清見寺

相撲合に

大腰にかけて投けり石地藏

旅の歌

古郷はむかしながらの山青く
見しや波間の海人のつりぶね

西の銘

髮の花女瀧男瀧のかざしかな

辭世

一時ニ打二破ス屎糞ノ壷一芬々タル臭氣供二ス梵天ニ一

下手ばかり死ぬる事ぞとおもひしに
上手も死ねばくそ上手なり

蕉門直指五老井許六句集終

天保五年甲午春刻成

指艾園藏版 回

北枝發句集

北枝發句集序

風俗文選に北枝叟の略傳をのせて、北方の逸士といへり。やつがれ同郷に生れて、少壯の頃より、叟が實傳を聞ことすくなからず。そが中に美談あり。叟常に杉あじろの大笠をかぶり、樫の太杖つきはしらかし、足にまかせて吟行けるを、街にむらがる童部ども是を見て、やよ北枝おぢ、何事ありていづち行たまふぞと、かしましくもあざみ問へば、吾はほ句拾ひにありくなりと答へてさりぬ。是を興ありとして、わらはべのならひ、あこぎにも此事につのりて、日ごろにもなれど、けしきをもかへず。吾はほ句ひろひに歩行なりと、いく度も同じさまにこたへられしとなん。是らをもて其ひとゝなりを思ひやるべし。はた、はせをの翁も、ある時のたはむれながら、北枝とは發句師の約言ならんと申されし事もありとなん。されば翁も叟がほ句はめでられし事いちじるし。さるに其發句どもの世に傳ふるもの稀なるは、一かたの恨みなるべし。こゝに加賀の北海、遊歷のついで、西はしらぬひ、東はこさふく嶋のさかひまで、はひわたりて、こゝにもとめかしこに拾ひ、そがあらましをこたび梓にのぼせて、北枝發句集と題せり。いまだ全きにあらずといへども、氣格と手段とを見るに足れり。依ておこがましくも、はじめに一言を述る事しかり。

天保壬辰春　　梅室素芯

北枝發句集

春

元日やたゝみのうへにこめ俵

四日には寐てもや花の春ごゝろ

歯がために杖のへるこそめでたけれ

七種や唱歌ふくめる口のうち

梅がゝにそこつな人や草鞋がけ

手拭を籠に納めて闇の梅

客に對して

のさものに盃かゝせうめの花

髭白きかたうど得たり梅花

亡師百日の忌

とひのこす數の數やうめの花

うめがゝや垣をへだつる草履取

うぐひすやつたふておりる梅の花

鶯のはまり過たる山家かな

うぐひすや谷のけしきを庭の面

鶯にほろりと筵の氷かな

うぐひすの尾羽ね吹そらし啼音哉

鶯も笠着てあがれ小家の家根

送別

はつ午のみやこをさしてきつね哉

屏風の繪に

岩穴をぬけてなきけり雉の聲

水飲に落るひばり歟蘆の中

おしあふて鳴ときこゆる蛙かな

田の庇やかはづ飛かふ四ばしら

田を賣ていとゞ寐られぬ蛙かな

麥のため先風ゆらぐ雪のうへ

寐るところありて行らめたつ蝴蝶

はつざくら足輕町のはづれから

初ざくら鮒の料理を好まれて

とにかくに胸うごく若木櫻かな

鳶の巣としれず梢は鳶の聲

誰が糸につなぎとめたぞ朧月
呼にやる人も戻らずおぼろ月
夕風に何吹あけておぼろ月
つぼふかき盃とらむ桃の花
橋桁や日はさしながらゆふがすみ
元祿三のとし大火に、庭の櫻も炭に成たるを
燒にけりされども花はちりすまし
塔は花ゝは塔より氣色かな
湖やこゝろはしりて四方の花
柿の袈裟ゆづり直すや花の中
會下僧の旅だつ跡や花の雲
さる山寺に遊びて
白妙に花やさくらの枝くばり
旅行
風流の國主なるらむ山ざくら
紅爾が武藏にゆく時
いたづらに不二見て永き日をたてな
鐘つきを誰も見による花の山

春日奉納
此神の山なればこそ花に鹿
梟のしらみ落すなはなの陰
三月盡
晦日の行燈たてゝ春の暮

夏

大空も見えず若葉のおく深し
ほとゝぎす啼て入けり南禪寺
啼ころぶ曉あらむ不如歸
時鳥うしろの人が聞出し
應無所住而生其心
待ねども鳴ずにも來ぬ蜀魂
四睡が武府に行なり
牡丹散てこゝろもおかずわかれけり
みじか夜や夫人間の遊ぶ時
蝙蝠に手元もくらし油うり
藻の花をやらじとするや釣の糸

さびしさや一尺消てゆくほたる

田の水を見せて螢の盛かな

普請にかゝりて

さい槌の祝儀なくつ(マヽ)す水鷄哉

くひなく夜や吸物に茗荷たけ

ひと田づゝ行めぐりてや水の音

居りかはる羽おと凉しや森の蟬

おしかへしなくや晴行みねのせみ

ゆふがほのかた尻かけぬさん俵

夢中に申侍る。

はきながら草履を洗ふ淸水哉

野社に太皷うちけり雲の峰

われがねのひゞきも暑し夏の月

夏酒やわれも乘行火の車

舟すゞし吹れて居ればふきにけり

風凉し生地へかへる浪の音

京へ行人の所にとまりあはせて

蚊帳越に草鞋はく歟行たいぞ

何がし方救の主は洛にありて、よろづの事は倚言子のさばきあふがれて、夏旅のくるしさも打わすれ、野子はかへりまも秋かけてなど、かたりかはして御ゆかしきばかりに候。今すでにわかれんさする時

はなれうき宿や秋まつ葡萄棚

秋

來る秋は風ばかりでもなかりけり

楚常身まかりし由。母の許より告來したる返しに

來る秋を好けるものを袖の露

七月旣望

高燈籠しばらく有て嶺の月

朝がほは咲ならべてぞ凋みける

死なぬ身に幾度きゆる露の玉

翁へ蓑を贈りて

白露もまだあらみのゝ行へかな

帆柱にならぶや霧のむかひ島

追ひあげて尾上に聞む鹿のこゑ

霧深き朝、渡月橋をわたりて、北
嵯峨に分入ころ

川音や木槿さく戸はまだ起ず

秋風や羽織をまくる小脇ざし

蟷螂や露引こぼす萩の枝

野田の山本を伴ひ歩行て

翁にぞ蠅つり草を習ひける

魂祭甥の居たらば茶のかよひ

我身

秋風や息災過て野人なり

馬かりて燕おひゆくわかれかな

竈馬やかほに飛つくふくろ棚

鴈の行くづれかゝるや瀬田の橋

多田の神社にまうで、木曾義仲の
願書、ならびに實盛のよろひ兜を
拝す。

くさずりのうらめづらしや秋の風

乳を出して舟漕ぐ蜑や蘆の花

かりますといふて稲ほす華表かな

千ゝの秋二上山の前うしろ

行船や苫もる月に袖の紋

山中温泉にて

子を抱て湯の月覗くましら哉

さむしろやぬかご煮る夜のきり〳〵す

寐てからに角のしるべや鹿の妻

草の葉におくや殘暑の上ほこり

木刀やかへす袂に萩の花

しばしの旅寝、しばしい餞別、ゝ
魂碕念。

さりながら袖にこぼさじ萩の露

蝸牛の眼やさますらむ秋の風

三岡夜泊

濱荻のひと夜泣たは誰が聲ぞ

綸子から辷り出けりけふの月

月を松にかけたりはづしても見たり

わが草庵を訪れし頃
耻もせず我なり秋とおごりけり
我友は今年も月にあかしけり
垣越の山や松だけ露しぐれ
竹賣て酒に換ばやつゆ時雨
梟の來ぬ夜もながし猿のこゑ
菊の香になくや山家の古上戸
牧童名代に重陽を勸て
爪衣の老をたすけよ菊の露
大根もよろしさうなり菊の花

冬

十月に降は時雨と名を替て
しぐるゝや夕日のこれる原くらし
兎かくに悲しき時
ひえながらうちねて時雨きくばかり
しぐれねば又松風のたゞおかず
無名庵にて當坐

流れたる雲みやしぐるゝ長等山
池の星またはらはらと時雨かな
買に來る人はこなすや大根畑
うち入て先遊ぶなり池の鴨
三日の晴を得たれば野に吟行して
稻ほしのもゝ手はたらく冬日かな
十月望
辛崎の鮒煮る霜の月見かな
かれ蘆を手がゝりにして氷かな
おもしろもなうて身にしむ神樂哉
初雪や松にはなくて菊の葉に
炭の火にならぶきんかの光かな
角つゝむ越後の牛の寒かな
淋しき庵のすさみ　二句
山颪來よ寒がりて明すべし
爐の隅に身や酢の神といはゝれん
翁の事、霜月三日の暮がたにうち
きゝて

きゝ忌にこもる霜夜の恨みかな

ことしの春、むさしの便に、境もへだゝりぬれば、待日も心にまかせず、わすれずやなど、細にせうそこありて、自畵下し給はりぬ。はからざるに、ながきかたみとはなりけり。その日にしほれたる袂たゝずんで、是を席上にかけ奉りて、いさゝか追善をいとなみ侍る。

おもひきや繪讃の梅を冬の宿

・路青へ返し

根雪かと見ればおそろし風の音

野田の山本に住人を、尋ねまかりしにあはず。かたへの垣にかづらのかゝりたるを

何の實ぞたま〳〵見出す雪の門

朱の鞍や佐野のわたりの雪の駒

あら熊のかけちらしてや前の雪

年こしやあまりをしさに出て歩行

附韻

やがて煮る蕣なはやす稽古哉　梅室

戸の明たてにかぶる福藁　北海

磯くさい春のかせぎの畚提て　抱儀

照降なしに鳩のくう〳〵　室

たて横に無れば可笑しき小屋の月　海

水あげかねて桔梗たふるゝ　儀

施餓鬼棚くづすになれば無二無三　室

弟の方がよほどかしこき　海

またぬかほしてもどこやら落つかず　儀

衝立こけてこみかける髮　室

猩々の謡にいきる臺ごころ　海

ごつさ來さうでそれる夕立　儀

瓜切て荷に作るまで月明り　室

わづかの露もかゝぬ仕合　海

第子うちで見立られたる急家督　儀

小地面なれど花は千金　室

たうさぎは御注連も戰ぐ麗に　海

とまりどころのしれぬ鶯　儀

近く來て傘すぼめけり梅の花　抱儀
消てはもゆる橋のかげろふ　北海
二羽三羽見かけた雉の皆たちて　儀
飯くふうちもやめぬ酒盛　海
どさ〳〵と人によらるゝ暮の月　儀
このひやつきは日和さうなり　海
きゞされぬなれどたしかに遠ぎぬた　儀
手綱曳して遊ぶ湯川原　海
犬なんど追ふをかどとに日をやりて　儀
こゝろのある歟塩茶迄出す　海
木鋏も耦合のわろき入梅のうち　儀
暮の明りをうける蛛の巣　海
ちよんぼりと森の中から見ゆる月　儀
足のほこりをはたく芋の葉　海
濟だ跡はがさすにおく施餓鬼札　儀
半氣違ひの絕ぬ藥屋　海
せつかくの花の設けを雨にして　儀

鈴のうちにも子雀のなく　海

この二卷は満尾すべかれども、旅立をいそぎ侍れば、半にして筆をとめぬ。

北枝發句集跋

北枝叟者蕉翁直指弟子而實俳諧壇上之麟鳳也世傳叟笠杉笠檉杖日吟行街市々中小兒競隨其後環擁驟趨而戲謂者如恒河沙數蓋遁世佯狂者歟凡騷人墨客異域隔生而其風致略相似者不可勝數矣其最似者彼陸務觀乎我北枝叟也務觀詩云箬笠芒鞋橋下路兒童爭逐放翁行是其風致相似之一證也今北海漫遊四方廣收叟遺句編輯成卷名曰北枝發句集余亦受一部其句清淡而飄逸尤可爲軌範也北海此擧不啻發揮叟之奧妙於後俳亦有裨益

天保壬辰陬月下澣鷗嶼閑人守邨約跋小靑軒　印

古太白堂句選

桃隣

若かりしころは、仕官おほやけのために、長劍を腰にさしはさみ、老ては山林清泉に遊びて、泥龜曳尾のたのしみをなす。三野太白堂は、本土伊賀の上野にして桃氏也。ことにはせを翁と同家の祿をはみて、後はおなじ風雅の道に入る。よつて師恩のふかきとは、あまたの集にも見へたり。齡八十一にして、ついに俳諧の口を閉ぬ。（于時享保四己亥十二月九日）ひと日あつて、東都淺草新光明精舍に葬す。其ころ門葉はつかのしるし置しが、度〳〵の火災に失ひて、しばらくその跡たへたり。今はた此事をわすれず。桃家に遊ぶ友どち、あちこちさゝやきて、再び墓のしるしをおかんとす。されば元祿の昔に殘れる哥仙七卷に、言捨の句々をそへて櫻木にちりばみ、百とせの報恩會をとりこす法莚の一切經にもなれかしと、冬夜の燈下に筆を執のみ。

文化きのへ子初冬

四世太白堂桃隣　印　印

元祿六酉三月十八日

人麿講　於隣亭

凡又東叡山や華の種　　枳風
春は地よりも近き白雲　　仙化
朧月赤貝舟の彌帆引て　　全峰
四五はしれずに詞闘ひ　　氷花
雨箱を物に、中テたる上ゲ下ゲ　　其角
潜りを明る犬の鼻づら　　介我
凧ウを火燵に凌ぐ大和機　　桃隣
修行歸りに分る鉢米　　万卷
竹の垣鉋丁さしに成ニけり　　角
山水をとる小田原の庭　　風
養子聟一日二日のもの思ひ　　花
髮の結目のゆるき姿見　　化
駕ノリモノを椽まで上る武士めかし　　我
一里前から音大井川　　角
鮨に置手頃の石の撰からし　　卷
ちいさき御師の神樂珍らし　　花

座頭連れ月に目明は先ニ立　我
　待乳に舟をよせて虫の音　風
二
菌(くさびら)を荷作らせたる齋の施主　化
　名譽な癖で口で爪取ル　隣
隱れなき看板書の字は丸し　我
　新地渡ると共まゝの恒　卷
石灰の畑ッにむごき芥子の花　隣
　藪の中にてつかふ洗足　化
繋がれて間なく動かす馬の舌　角
　蕎麥急がせて廻る小坐敷　風
懷の本の表紙は皺に成　我
　頰摺をして思ひ切する　化
鎖戸に通へば目立宵の月　卷
　早稻の御供を後手に持　花
葉がくれの榼を鳴らせし山颪　隣
　襟に掛ては輕き唐珠數　角
着物の色も自味なる年廿　風
　道具好する京の付合　花

ねり土は鍬を養ふ花の庭　卷
　物を隔ぬかわづ泥龜　隣

遙に思ひやりし名所、風雅にひかれて近く見侍り。一句を窺ふ。

岩城山と思へば香あり夏木立　桃隣
　梅首鷄(けり)の群たる方は玉河　露沾
引起す朝寐の枕打やりて　助叟
　樂屋の札を僕が請取　沾德
坂ゆへに門も氣高き秋の月　沾荷
　筑(築)山廣く出る初茸　兎谷
ウ
新蕎麥に口は匂ひて濃茶也　芳津
　土圭(とけい)の鈴も濁るむら雨　沾國
別れには禿に髮を曲さする　谷
　何を諷ふもみな涙なる　隣
眞帆ながら播磨路過る走り舟　沾
　ねぢれた松を庭にほしがる　叟

新参律義な迄をとり得にて　國
　登分のあるもしれぬ付紙　津
鮨桶は借りて漬たる宵の月　德
　根は隣にて此地の楢の木　堂
穴蔵を出せば花のいつきりと　谷
　彌生をおしむ鎌倉の僧　沽
浮雲の雨に片寄る雉の聲　叟
　文字彫筏はや普請めく　德
長嘯の褒て置れし此所　隣
　厠に遠く弱るむしの音　國
露艸に影も寐て居る順禮等　荷
　歩行行歩の役に當る月の夜　谷
忍び夫是にしのべと古革籠　津
　祈れば踊出る幣串　叟
引登す板久(いたこ)の舟の脚早き　沽
　二人天窓を入る管(菅)笠　隣
夏瀧の半紙なるらん此息(臭カ)さ　德
　蛔に雀の内迄も來る　荷

水待て薪を流す熊野川　叟
　旅で豆腐の味は喰出す　津
忘んと思へば哂噬(シャクリ)なを止ず　國
　面〳〵硯引殘す床　沽
あの崖は竹で持けり花の雪
　地道ばかりを春の遠乘

けふは那須の篠原まで送り出んさ約諾して、竹筒などご認けるに、未明より卯花くだし、外も覗かゝれず。おのづから滯留、おの〳〵めでくつがへり餞別をなしぬ。

剛力に成て行ばや湯殿山　桃賀
　布子袷の跡は帷子　挑隣
芝屋根も南東を引請て　翅輪
　いやといふまで朝茶汲出す　助叟
今の間に霧の晴たる峰一ッ　桃水
　星の備へを崩す有明　白桃

此濱の塩は苦ィと名を立て　桃雫
無理に鳴らする竹の螺貝　賀
題目と大形顔に見へにけり　隣
積る雪なり後張に降　輪
朗に明離るゝが三番三　叟
借ぬ羽織を是非に脱する　桃
埒のない戀に心や碎覽　雫
黑ィばかりで揃入ぬ髮　水
守にと加茂の葵を取て來ル　叟
若葉を花に打轉す樽　隣
月代(つきしろ)の遲き筈なり山百重　賀
頭襟(トキン)はづして露を引ッ敷　輪
うは〳〵と何やらかやら渡ッ鳥　隣
居ながら手水つかふ淀舟　叟
せつるても藥飲ぬは下思ひ　桃
呵く聲を暖簾の風　賀
引出しに草履も見ゆる大工箱　隣
搔鱠にて祝ふ朔日　叟

十軒に足らぬも村の名を付て　雫
形(なり)りを四角に作る笋　水
ぞつとして鼻の塞(ふさが)る年の程　輪
ふまねど馬に蹈馬の札　賀
後の月西行谷へ呼つられ　隣
松露とるにも上手下手有　桃
先度から角力〳〵と觸廻り　水
疝氣も道理今朝の初霜　雫
衣〳〵にどうのこうのとぐとつきて　隣
天窓の丸ィ癖に目遣ひ　輪
花鳥は旅の養生とやならん　叟
是が柳の根より涌水　雫
紫陽花や藪を小庭の別座敷　芭蕉翁
よき雨間に作る茶俵　子珊
朔日に側の子貰の聲聞て　杉風
出駕の相手揃ふ起〳〵　桃隣

かん〳〵と有明寒き霜柱　八桑
　榾掘かけてけふも又來る　焦（蕉）
住うくて住持こたへぬ破レ寺　珊
　とう〳〵と鳴濱風の音　風
若黨に羽折ぬがせてかり枕　隣
　少サき顔の身たしなみよき　桑
商ひもゆるりと内の納りて　焦
　山のかぶさる下市の里　珊
草臥の付ては旅の氣むづかし　風
　四日の月も未だ細き影　隣
秋來ても畑の土のひゞわれて　桑
　ひばりの羽の生揃ふ聲　焦
つく〴〵と足のまだるき花盛　珊
　ひらたい山に霞立けり　風
正月の末より鍛治（治）の人雇ヒ　隣
　濡たる俵をこかす分取　桑
晝の酒寐てから醉ノほかつきて　焦
　五ッが鳴れば歸る女房　珊
此際を利上斗に言延し　風
　まんまと今朝は鞆を乘出す　隣
結構な肴を汁に切入れて　桑
　見世より奥に家は行込　焦
とり分て今年ははるゝ盆の月　珊
　未だ花もなき蕎麥の遲蒔　風
柴栗の葉もうつすりと染なして　隣
　國から來たる人にものいふ　桑
いそがしう一臼搗て供支度　焦
　糞くむ匂ひ憐さうなり　珊
今の間にしるうなる程降時雨　風
　日雇の五器を籠にとり込　桑
扈從衆御茶屋の花にさゞめきて　隣
　小舟を廻す池の山吹　筆

元祿六酉仲秋、深川芭蕉庵留守の
戸に入て

生綿取雨雲立ぬ生駒山　其角
芋の煮賣の中の松茸　桃隣
雙ぶ舟月の水主見かはして　介我
乳呑子寒く羽折着て居る　角
婦鷹に少さく成し鴻の鳥　隣
柄に印ある小田の捨鍬　我
のせ替て笠結付る駕籠の上　角
樗片取る商の小屋　隣
今の体親に似とて呼返ス　我
二十四五まで定らぬ心　角
紋好の費いとはでなまめかし　隣
加へを専に祝言の酒　我
人がらも扶持取ル醫者は武士張て　角
鏁(クサリ)の外へうつる桃灯　隣
井の蓋を敲ケば氷る空の月　我
納屋は寐聲に語る淨瑠璃　角
參宮を見はやす良も花の時　隣
法躰金をのけて置く春　我

又 太刀具足の餅の幾重ね　角
疊のうへへゆるす獅子舞　隣
頓作は口より筆の働きて　我
坊主還リは不性なりけり　角
壟を撰る最上の初の朝市に　隣
野越の中の蟆(ブト)にさゝるゝ　我
革靱うしろに屓(負)る岑の月　角
ひやゝかな風瀧の線(イトスヂ)　隣
樫の木に椎茸出る雨上り　我
半田の灰の霜にこぼるゝ　角
和巾まで共色替て哥仙貝　隣
禿額の眉かけてつむ　我
誰を誰が文珠(殊)普賢にうつしけん　角
彼岸七日を天王寺山　隣
ちる花を風に吹込かます錢　我
施薬院より若艸を摘　角
四塚のぬるみを水の末にして　隣
雁行跡は一双の鶴　我

天野氏興行

道くだり拾ひあつめてかゞし哉　桃隣
どんどゝ水の落る秌風　野坡
入月に夜はほんのりと打明て　利牛
塀の外まで桐のひろがる　隣
銅壺よりなまぬる汲て遣ふ也　坡
つよふ降たる雨のついやむ　牛
瓜の花是からなんぼ手にかゝる　隣
近くに居れど長谷を未だみぬ　坡
年よりた者を常住ねめまわし　中
いつより寒い十月の空　隣
臺所けふは奇麗にはき立て　坡
分にならるゝ嫁の仕合　牛
はんなりと細工に染る紅うこん　隣
鑓持ばかりもどる夕月　坡
時ならず念佛聞ゆる盆の内　牛
鴫まつ黒に來て遊ぶ也　隣
人の物負ねば樂な花ごゝろ　坡
もはや彌生も十五日たつ　牛
より平の機に火桶はとり置て　隣
むかひのこごとたれも見廻す　坡
買込だ米で身躰たゝまるゝ　牛
歸るけしきか燕ざはつく　隣
此度の薬はきゝし秋の露　坡
杉の木末に月かたぐなり　牛
同じ事老の咄しのあくどくて　隣
だまされて又薪部屋に待　坡
よいやうに我手に占を置てみる　牛
しやうじんこれはあわぬ商　隣
帷子も肩にかゝらぬ暑にて　坡
京は格別家に念入　牛
焼物に組合たる富田鮒　隣
隙を盗んでけふも寐て來る　牛
髮置は雪踏とらする思案にて　坡

先沖までは見ゆる入ふね　隣
内でより茶がなうても花の陰　牛
ちつとも風の吹ぬ長閑さ　坡

鋤立上京餞別の卷、難波園女判にして認登せる詠艸、愚集の傍に加へ侍るは、連中したしみな捨がたきのみ。

足本も遠山も見よ雪の松　桃隣
寒菊移る香やまくら筥　鋤立
吸物の蓋を明れば溫飩にて　舖水
若いうちには何もおかしき　方雨
透垣の月一昨日の丸合羽　宇月
千句吟ずる蔦の葉の風　冬市
快き瘡も柿に又おこり　玆少
一文錢が耳にふらつく　水
押合て乘船膝に膝をあげ　旭志
とやこや言て近ィ正月　隣
何の共颶(ツカン)で負ヶる素魚(シラス)賣　市
鼻の位ィもよい氣にて持　雨
どうぞ唯名乘せたいぞあの角力　茄毛
女で賊(スリ)をする袖の露　立
文や雁や住吉堺岸の和田　隣
月見の席に食は喰勝ッ　少
二十五の厄前人も花ごゝろ　月
袴雪踏で旅の糸ゆふ　志
手の垢に飴はきたなき蝶や鳥　毛
魚の干たが網の目にある　水
落し物御秡(祓)に繫(クヽル)雨の後　市
内を覗けば乞食でもなし　立
中高な顏うつすりと化粧して　隣
國阿の足踏おもひ伊勢迄　月
散な此百日紅も二百日　毛
碁盤を押に笋の鮨　雨
外ト通る人呼掛る藏の窓　少

持あつかふて手の刺(トゲ)を泣　志
うれしきもつらきも源氏打笑ヒ　立
月と雪とに戀を引出す　少
七ッから大宮通碓の音　月
小兒の脉を見せしふところ　市
箍(タガ)掛に結んで貰ふ足袋の紐　志
同じ宗旨はうなづいて濟　水
常に行所も替る花の時　雨
梅は匂ひよ人は息災　毛

古太白堂桃隣句選

春之部

うぐひすの聲に起行雀哉
七種の跡の拍子は鳥の骨
深川の畠でたゝく薺かな
ひと筋は瀧のながれや梅の花
筆よろづ藤江の花の據(よりどころ)

雪雞墓に詣て

たくましき松も眠るや春の雨
白桃や雫も落ず水の色
畫舟に乗るや伏見のもゝの花
世の中や大根の花も藤色に
藤棚や場をとる琴の乘せ所
ちる花の外は流ずはるの川

東叡山

曉の風を見かけて花見かな
さくら咲頃や隱者の古だゝみ

奉納

蚕の香や七ッ曲りて山櫻
鳥に落て蛙にあたる椿哉
貝もなき礒辷ッ行汐干哉

首途

何國まで花に呼出す晝狐
畑中の雲雀追出す野猫哉
舟着や馬に附行雛の箱

鹿嶋にて　春日奉納

額にて掃や三笠の花の塵
長閑なる御代の姿や要石

神軍の跡、敵味方の城あり。

鬼の血といふ共土が躑躅かな

筑波靈山の奇瑞多し。

土浦の花や手にとる筑波山
筑波根や辷て轉て藤の花

海棠や綸子着て居る寺若衆
赤松の木末や乘垂花の瀧

小栗村にて

汲鮎の網に花なしさくら川

東照宮奉納

花鳥の輝く山や東向

黑髮山　三四月にも雪ふる。

花は咲け湖水に魚は住ずとも
鶯は雨にして鳴みぞれかな
雪なだれ黑髮山の腰は何

寂光寺瀧あり。

千年の瀧水苺の花青し
雲水や霞ぬ瀧のうら表
片かわは我眼なり春がすみ
着たかひもなき古蓑や田螺掘
見事なる旅の相手や花に鳥
鳶の羽にひるまぬ藤や木の間より
石川や簗打時の薄濁り

帆の影にいとふ夕日や春の海

夏之部

四月朔日雨

物嗅き合羽やけふの更衣

更衣かへぬもつらし夜着蒲團

聞までは二階に寐たり時鳥

遙におもひやりし名所、風雅にひかれて近く見侍り。一句を窺ふ。

岩城山と思へば香あり夏木立

一八に言葉もかけず牡丹哉

石磨も庭に馴こし苔の花

あたらしき宿の匂ひや富貴艸

はてしなき野にかゝりて

草に臥枕にいたし木瓜の刺

道より便りなうかゞひて

黑羽の尋る方や青すだれ

淨坊寺桃雪に宿す。翌日興行

幾とせの槻あやかれ蝸牛

叩首や扇を開き目を閉

法樂

木の下やくらがり照す山椿

留別

山蜂の跡覺束な白牡丹

奥の花や四月に咲を關の山

氣散じや手形も入らず時鳥

植て行田にのみあるか畫の風

蜘の子の杜傳ひや繩簾

小名濱

初鰹さぞな所は小名が濱

須ヶ川より一里脇に石川の瀧あり。

ころも夏瀧へ飛込む心かな

緒絶の橋・野田の玉川・玉の石、何れも同じあたりなり。

橋に來て踏みふまずみ蝸牛

茂れ〳〵名も玉川の玉柳

淺香山、南部若艸山の俤あり。

五月女に土器投ん淺香山

仙臺杉山氏興行、山川の富を祝す。

氣を濯で淸水や影は青葉山

もとあらの若葉や花の一位

あやめ葺代(花)りや(こ)陸奥の情ぶり

仙臺大町、南村千調亭に宿す。

落つくや明日の五月にけふの雨

殺生石

哀れさや石を枕に夏のむし

取あげてそつと戻すや鶉の巣

鹿の子のあどなひ貞や山畠

卯の花に忘るゝ宵の明衣哉

牡丹見にうつすりとよき唐茶哉

翡翠のまぎれて住歟牡(杜)若

汗と湯の香を振分る明衣哉

ふりもどり不二見るふじの下向哉

机に附る曲

水無月や人の來ぬ間は丸裸

釆女塚、山の井にて

山の井を覗ば答ふ藪蚊哉

安達が原

塚ばかり今も籠るか麥畠

文字摺の石 長サ壹丈五寸 巾七尺余

文字摺の石の幅知る扇かな

實方中將の塚に、同じく召れたる馬の塚あり。

言のはや茂りをわけて塚二ッ

一とせ芭蕉、須が川に宿して驛の勞れを養ひ、田植唄の風流なのこす。予其跡をしたひ、關越るより例の相樂氏を尋侍り。

踏込て淸水に耻つ旅衣

若竹に聲や響す蛙黽

晝がほやともに刈るゝ麥畑

藻の花のとぎれ〳〵や泡の上

橋や下に落たる鳥の糞

たをれたる酒も醉けり夏の月

蝙蝠に貞かゝれなよ橋の上

翁への餞別

行水の跡や片よる菱の花

引盡す菖蒲の跡や田のつもり

五日まで水澄み兼るあやめ哉

伊達郡桑折田村氏は、武江不卜門葉にして年來この道をこのみ、陸の巻を踏分たり。迷ひ行下官(やつがれ)、彼が扉をたゝき、膝をゆるめて

誰が植て桑と中能紅畠

螢を見て氣の付く皿の清水哉

煤氣たる鵜匠が負や朝朗

五月雨の色や淀川大和川

深川の末や女中の茄子狩

羽黒八景の中

鵜匠ども遣ふて見せよ前田川

夏の月胸に物なし飯繩山

笠松や先白雨の遊所

籠らばや八塩の里に夏三月

行者堂に詣

手に足に玉巻葛や九折(つゞらをり)

南殿欄・夜の星、是名水の井也。佐藤庄司墓所一ッ石塔、次信・忠信石塔あり。

星の井の名も頼母しや牡〔杜〕若

丸山の構も武き若葉かな

義經、腰掛松に

幸崎と曾根とはいかに松の蟬

軍めく二人の嫁や花菖蒲

武隈の松あり。

武くまの松誰殿の下凉

陵〔凌〕霄や木を離れては何所這ん

一息は親に增たる清水哉

若切新田といふ村にて

臥頃にかられぬ菅や一ト構

塩竈の明神へ法樂

禰宜呼に行ば日の入る夏神樂

月涼し千賀の出汐は分なもの

松嶋や五月に來ても秋の暮

たちばなや籬が嶋ははいり口
橋二ッ滿汐凉し五大堂
麥喰て嶋〳〵見つゝ富の山
茂る藤やいかにも深き石の巻
御手洗や夏をこぼるゝ金花山
黄精の花やきんこの奇所
水晶や凉しき海を遠眼鏡
金堂や泥とも朽ず蓮の花
田うえ等がむかし語や衣川
軍せん力も見えず飛ほたる
虹ふく(吹(ふき))てぬけたか凉し龍の牙
朴の木の葉や幸の下すゞし

古川といふ宿に來て秋山壽庵に所縁あり、尋入て一宿。

暑き日や神農慕ふ道の中

夜烏といふ村へかゝり、小町塚あり。

晝貞の夢や夕日の塚の上

爲家の山極白し盤提山

山路吟

おそろしき谷に隱すか葛の花
梟鳴て跡も更なる青田哉
燒飯に青山椒をちから哉
短夜を二十里寐たり最上川
しら糸の瀧やこゝろに心太
薫るとはこゝらの風か袖が浦
うかれ出る色や阪田の辻が花
きさかたや唐をうしろに夏構
能因に踏れし石の苺(こけ)の花

芭蕉に供せられ、曾良も此地に至りて

波こさぬ契りやかけし鶚(みさご)の巣

（校訂者曰、此の句曾良の作なり）

うやむやの關やむや〳〵鬼人中
樹も石も有の儘也夏座敷
夏百日身は潔白よ梵字川
五十間練るを羽黒の祭かな

吹く蝶に木末の蟬も鳴止ぬ
おもひ出や花なき隅田の夕涼
水無月は隱れて居たし南谷
大汗の跡猶寒し月の山
山彦や湯殿を拜む人の聲

曾良登山の頃

錢踏んで世を忘れけり奥の院
秋近く松茸ゆかし千葉山

最上市

野も家も最上なりけり紅の花
山寺や岩に戻たる雲の峰

天神社造立中

石突に雨は止たり花柘榴

秋之部

文月に神慮諫ん硯石
宮城野ゝ萩や夏より咲の花
三日月やはや手に障る中の露
秋暑しいづれ芦野ゝ柳陰
一反の畑や柳のちり處
あさましや鵜匠が門の施餓鬼札
送り火の跡あはれ也虫の聲

杉風ミ二人、はせをの旅行なつらやみて

見られねば猶うらやまし盆踊

喜連川庚申に泊り合て

御所近く寐られぬ秋を庚申
笠脫ば天窓撫行一葉哉
又起てみるや七日の天の川
手を揚ゲて群集わけたり中の花
盂蘭盆や蜘と鼠の巣にあぐむ

ひさ日二日、流行の病に平臥て居たるに、折ふし嵐雪のもとより、珍らしき干飯を送り侍るかへしに

くだけても𦬇尊し秋乾
稻妻や二荒山の根なし雲
寐ころべば晝もうるさし秋の蠅

朝がほや濡てはかなき花の藍
來る雁の力ぞ那須の七搆

新楓會

片庇師の繪をかけて月の秋
稻の香や我養ふてけふの月
名月や曉近き霧の色
山畑に猪の子來たり今日の月

小松川

童等よ間引菜洗へけふの月
名月や舟虫走る石の上
名月や雪みんための庭の松
宵過や虫賣通る町はづれ
淋しさや山は猶更しかの聲
うら枯るゝことの早さよ茄子売
泊り人を寐せて軒並砧哉
有明や比良の高根も霧の海
きり〳〵す鳴くや最上の下り舟
米入る我器なり種ふくべ

蜻蛉の來て哀れ也釣灯

遊行寺

十人の殿原强し梅もどき
紺菊の色に呼出す九日哉
菊の氣味深き境や藪の中
世をそむく野菊や百の名に入らず
道くだり拾ひ集てかざし哉
鎌倉へ行ぬが手也后の月
粟稗は苅られて古きかゞし哉
打過てまた秋もよし梅もどき
落栗に思ひがけなき菌哉
淋しさや芳野を椥子に思ふ頃
蘭の香や角振戻す蝸牛

鎌倉

行く秋や七里が濱も八里ほど

おなじく若宮

銀杏も落るや神の旅支度
ゆく秋や紅葉の寺に我を客

行く秋や椴より落る蟬の売

行德舟にて

おろすべきけしきはみえず沖に鴈

菅（言）笠にいとふもおかし散すゝき

下總八幡

神在す地は人知らず八幡竹

榎の實ちる門や干する女馬

眞間の繼はしは名のみにして、いさゝかの流れあり。弘法寺はもの舊たる境内にて、前には石の階高し。頃しも秋の末、暮つかたのをなれば、物問ふ人もみえず。老たる僧を見かけて

古寺や紅葉も老て幾むかし

國府臺

松杉に秋風寒し古戰場

市川

朝霧や川を隔て闇に入

山炭に冬を隣や燒榮螺

暮るとてけふも時雨や九月盡

冬之部

市中や木の葉も落ず不二颪

木枯の根にすがりつく檜皮哉

屋根葺のそしらぬ貞や村しぐれ

元祿九丙子十月十二日翁三回

今更に袖を絞るや冬櫻

こがらしや鶴見る窓に朝の月

口切や聟取當て置頭巾

ひとりうつ痛き肱や冬籠

美濃の旅僧を泊て

埋火に酒あたゝめる霜夜哉

鎌倉極樂寺

口切に千眼茶磨淋しけれ

由比が濱

人を啼鷗を鳴や濱千鳥

松が岡

葛の葉の落ぬ構や蜘の糸

梶原屋敷
平藏が哥の名殘や歸花
驚かぬこゝろや冬の大井川
兄弟の若盛也大根引

隅田川
大名のしのび出立も小春哉
茶の花や乾きつたる晝の色

大津百白亭
蘇鐵にも厚手當や霜覆
寒ぎくや夕日に向ふ硯彫
から風の吹からしたる水田哉
一嵐庫裏へ吹込落葉哉
衞聞くために二日の旅寐哉
薄氷や鶺鴒走る浮芥
濡て居る梢もみえず冬の月
眞直に霜をわけたり長慶寺

川崎宿
時雨口や塩差附し戻ッ馬

六鄉
朝風や霜の手を吹く渡し守
足元も遠山も見よ雪の松
繕はぬ窓や吹込今朝の雪
雪積て揚ぬ筏や神田川
闇き夜や雪の枯江に汐の音
出ることは翌と我家の雪見哉
雪の日や唯白更の麥畑
市中や泥龜釣す雪の軒
たゝかれて明るもつらし雪の門

旅行
はつ雪や筆捨山の右ひだり
物くさや松葉敷さす霜柱
御火燒や風雅と呼る友ほしゝ
有明となりて一群千鳥かな
碑に名なしかづらも枯野哉
茅葺や枯野ゝ口の小商ひ
山鳥の尾に見る鏖や冬籠

山茶花や未だ消安き枝の霜

調和・立志の來る時、隣たる家の豆蒔聲しきりなるもおかしく、各狂句あれば

塩からき聲もおかしや赤鰯

煤掃やよごるゝ皃の晝下り

薄着して霜もいとはず年木樵

蔦槌の世はやるせなや年の暮

墨繪書く心床しや年のくれ

夜に入て水賣來たり年の暮

年内立春

年の内の春や夜市の鉢の梅

桃隣句選終

うらちどりのたちゐひまなくも、寄來浪のあはづが原に、枯尾花のあはれをつくされたる桃隣、むさし野につもれる雪の見おさめせられしより其名四世にいたりて、百とせを奠らるゝのけふとはなりぬ。されば此道に遊ぶのひとゞゝ雲のごとくあつまり、法筵をひらくのさち、風流にして不易の道むなしからざると、まつたき古桃の餘光なをあまりありといふことをつぶやきつゝ、碑前に香をひねつてうづくまる。

舞石

文化元年甲子九月

江戸大傳馬町二丁目
東都書林　大和田安兵衛
同麹町平川町二丁目蛤店
衆星閣甚助

杉風句集

杉風子壯年より風雅をこのみ、はじめだむりん風にあそび、後ばせを翁を師とす。閑なるときは禪法大龍寺の和尙にうけ、いとまある時は茶道宗甫公のながれをくみ、伏しては句案をたのしび、起ては附あひの流行をおもふ。はいかいにあそぶこと凡六十年、蕉門の高弟なり。實學ならぶひとなし。奧旨深意、翁より傳へずといふことなし。去來は西三十三ヶ國の俳諧奉行なり、杉風はひがし三十三ヶ國の俳諧奉行なりと、翁常に狂ふじ給ふとぞ。されども己がながきを說かず、ひとの短のいはぬ機にして、たゞ師恩のあふぐのみ。翁・素堂・杉風、ばせを庵にて正門建立ありて、年〱正風さかむにして、日〱蕉門のながれをくむもの多し。しかれども、いにしへのこと草ほり難きことにこそ。爰に先師白東園、多年茶舍にたよらむとを願ひ侍れど、いたつきの身となりて、此とをえず。梅人年わかければ、かならず茶舍の舊居をたづぬべしとて、身まかり給ひて、いたづらにおくる月日十三年の秋にこそ。時なるかな。去年より茶舍にたより、杉風子五世の孫さる女にまみえて、杉風祕記をえたり。まことに連城のたまものといひつべし。故叟ながらへたまはゞ悅びたまはむことを。それが中に殘し給ふほ句書あつめ、末の世のかたみにもと撰び、又祕記の祕すべきも、爰かしことりて櫻木にうつし、はせを忌の今日、香花を捧て、杉風釋一元居士の尊前に備ふるものなり。

天明五はつ冬

杉風四世
採茶庵梅人 印 印

杉風秘記拔書

杉風本國三河　杉山氏　御入國の頃より　公用の納屋たり。小田原町に住ス。隱居して一元ト云。一時號ばせを庵。別號、

茶舍　採茶庵　衰翁　衰杖ト云。

松尾甚四郎殿、伊賀よりはじめ此方へ被二落着一候。剃髮して素宣と改られ候時、

衣更着は十德をこそ申なれ　杉風

斯申おくりぬ。その後此方深川元番所生洲の有レ之所に移す。時にばせを庵桃靑と改られ候。

古池や蛙とびこむみづの音　翁

ばせを庵の傍に生洲の魚を圍ひし古池有り。後元錄（祿）十一寅年ばせを庵を外へ引。

春待や根越のばせを雪かこひ　杉風

あくる卯試筆

茶畑のはつ日の客となれりける　仝

私ニ曰、許六の書に翁ばせを庵に入年三十七、支考の書に三十六。兩說相違なる也。延寶六戊午年翁春帖、予所持ス。其年翁三十五也。考るに、ばせを庵に入給ふは、夫より前なるべし。許六書、松尾甚七郎と有如何。

翁は正保元年甲申ノ生　杉風は正保四丁亥年ノ生

花雀のばせを句撰ニ、

七夕にかさねばうとし絹合羽

翁ノ句也と加へたるは誤也。翁自筆杉風と有。

たなばたにかさぬ（ね）も（は）うとし絹合羽

ぬもをねばと翁直して認有レ之、此外の相違のこと有れども不用なれば爰に略ス。

辭世

痩顔に団扇をかざし絶し息

八十六翁 杉風

享保十七壬子六月十三日寂

寺築地西門跡内
成勝寺



萬里園三巳謹書之

檀林風

ばせを庵主

四季

聟万歳よもいちが曰御代の春
笑ふぞよ花を見捨て歸雁をはゝ
草すでに八百屋の軒に芳し
髭かくるやと簾にかざす藪柑子
今ひくも小松がはらのはたな哉
はやなりぬ干物の木の日もはるに
花よりもなを芽うどの春の紅は
玉うどの美し苣の早苗の薄緑
芹とる翁碧潭に望んでこはいかに
假に風女裩かさうか雨やなぎ
澤苣やくさの草鞋のちぎれより
しほらしきもの土筆ちよろき貝割菜
防風ゆるく吹て青酢漸賣り
余所に男薄暮にはなを見る男
茗荷たり薑生姜の上にたゝんとを
櫻蒟蒻いかなる人の何を以てさくら
晝の君うつゝを唉り夢さくら
干大根娵菜を戀ふるおとろへは
蜈のり榮螺の洞に潜てけり
獨活の千年能なし山の柚木哉
春わさび蟹が爪木の斧の音
身は筏月ほとゝぎすわすれ竿
柚の花は香などに花と社いづれ花
老人山椒を藤の若葉とて
夕かな雨ほとゝぎす坐禪豆
麥飯やさらば葎の宿ならで
夏の夜はせはしなき秋の旅寐哉
きり蓼の切れておのれが命哉
夕影や色落す紫蘇の露おもみ
夕風が娘とよばん添寐籠
女とや茄子葉隠れに打かたぶける姿
我たてり盆飛野の犬かくれ
山賤の垣ほのさゝげともよめる

五月雨の余所に露の葉ながら蓮の池
天蓼のえだ打老たる猫にはあらねども
あへてこの箒のほろ〳〵と成て只
影うらむ毛虫かりきがくれの溜り水
古そばやあかても人に夏大根
蕣の夏日影待間のとうふ哉
里芋の長なり畠中の庄司とやらん
薯は山をうがつて金輪際に月自然
亂酒の僧見よや柚べしの責を受
暮山の雨松茸のすご〳〵と獨り
月ひとり家婦が情のちろりかな
月見女舟や木の間を棹ぬらん
岩もる水木くらげの耳に空しく
哀旦市たつ鮎の暮のさび
だい〳〵を蜜柑と金柑と笑て曰
水又栗ゝを淸しといはんとすれば
茶僧を見る梅干の影のごとくに來り
賤が契は干瓢のむすびもとめず

僧うかれけり松はひとりに里時雨
時雨浪の音昆布の笘(苫)やの夜すがらやな
かれ〳〵になるや野邊に冬瓜の獨ぬる
山寺の冬納豆に四手打やあらし
凩の風に葉は窓をうがつて去る
霰やは芥子に牛房は埋木の
筵窻のふけり短檠の下に釜睡
はづかしや根深の老の黛も白根がち
あけぼのや霜にかぶ茶の哀なる
麩といふもの有情水を好で氷に遊ぶ
氷筋のごしかんてんのかんは寒ィとよむ
大根生れ逆なるがおかしいとや人ゝ
雪の冬菜男鍬ついて立りける
雪の竹の子今は塩したがあるものを
僕がゆき夜犬を枕のはし寐哉
臘月の青物我常盤屋なりとよばふ
かざり松や遠山鳥のしだり尾の
にぎ〳〵と千石萬石としの暮

歳暮
俳諧うた

かけ乞ひもけふはなきぞよ大卅日
　妻もこもれり我もこもれり
寄としの月にはさやかに見えねども
　豆の數にぞおどろかれぬる

試筆

はやけさはおもしろうなる萬哉
花鳥に除ぬすまばや春もたち
蓬萊を脇息のけて居けらし
あけくるや我もつれだち春となる
春の色と言ばやけふの人の艶
雪降や紅梅白し花の春
若水に皺影笑ふあしたかな
けさの春は李白が酒の上にあり
着そはじめ咲や難波の梅の花
仕着せもの皆着揃ふて春の宿
みちのくのけふ關越ん箱の海老

八十の春をむかへて
つもれ〳〵けさやはじめの老かさね
老かさねかれ木に咲や花ひとつ
桑さして榮行畑や老の春
元日や花咲春は屠蘇の酒
きのふけふ音ぞきこゆる春の水

若菜　梅

賤が子は薺見る目のかしこさよ
きのふよりわか菜摘そへ薺うり
けさの若菜人影もなし野は入日
きのふ今朝是の早さよ若菜賣
咲そめし梅のほそ風しづかさよ
むめが香やふるき軒端の杉の風
紙衣着て梅手折ぬる人のあり
梅ちかき庇柱やもたれもの
風の香や立枝は見えて藪の中
とほ〳〵と日は入切てむめの花
そのゝ梅老木に花のしづか也

水次しむめや齡のながからむ
爽やかに日向のむめの花厚し
花いづれ精進日にはしろき梅
庭の紅梅におもひつきて、此梅求て十六年なり侍れば
紅梅に我影おかし白紙衣
紅梅やけふは涅槃に香をさゝげ
紅梅は娘すまする妻戸かな

柳　椿

みづからの病身をいたみて
立寄て柳に頭痛さすらせつ
長生の思案しでかす柳かな
柳見よ藏のあと先くり返し
これもその千代のしら玉花椿
黴のつく餅わるころのつばき哉

若艸　すみれ

わか草にあれたる駒ぞあらけなき
馬のつらくはして行やすみれ艸
病中の吟
髣松過てうれしや綛の道
願くば花のもとにて春死なむその二月の望月の頃
よし死なばその二月の月花に

蛙

山の井や墨のたもとに汲蛙
庭の若草に鳥の遊ぶを見るに、朝已が塒をおりるより、暮に又あがるまで、せわしなき味をおもへば
大様にはるをおくるや藜

春の月　ひばり

さえ〳〵て梅に氣のすむ月夜哉
青柳に念なかりけり朧月
子や待ん余りひばりの高上り

雛　桃

千代といふ鶴にも雛の道具だて
漢の代の鳥はこしもと桃使
桃咲や花のあり數鳥おどし
酒によしことぶきによし桃の花

何ぞとまれ花のあとなる桃の花
白桃は節句のあとの盛かな

汐干

けふの汐干讃岐が嘘を沖の石

題しらず

一塩にはつ白魚や雪の中
何の木も霞で烟る小ぬかあめ
おぼろ夜に梅が香おくる風ほそし
けさは雪雨になりしが春のとが
ふり上る鍬の光りや春の野ら
花咲む小石がくれに草ものび
風なきや花にとれたつ市の魚

花　櫻

待花に小寒ひ雨のあした哉
このもしや花の中なるしばの庵
花盛り大腹中となりけらし
めづらしや内で花見のはつめじか

雨中のはなに

雨に散る花やみぞれにかへるかと
ひとり居て獨物いふはなのもと
眞盛峯も見落す谷もはな
花に氣のとろけて戻る夕日哉
笑れに行ばや花に老の皺
花ぐもりこゝろのくまをとりけらし
花に散また吹れ行はなの果
散りしあと咲ぬ先こそ花戀し

瓢簞より駒の出たる畫ニ讃

櫻や咲瓢簞出ていさむ駒

何がし亭にて

產着て茶の花持や櫻狩
花にあけ松にくれたる閑所哉
雨つよくきのへる花のすぼみかな

茶庵の花問來し人に

一もとの花見せ顏の世ぞ狭し

藤　宰府天神法樂

水鏡 影移る松のみどりや藤の花
風なくてしづか過たり藤のはな

暮春

遲うくるゝ日もけふ切のわかれ哉

更衣 病中の吟

重ね着も上は作法の更衣
痩肌やうる〳〵しくもころもがえ
田をうなふ賤が裸やころもがえ

若葉 橘

常盤木のならびて榮ふ若葉哉
老淋し若葉の花をさがす杖
たちばなや定家机の有所

時鳥

ほとゝぎす一聲交る鶴の聲
風の間は何にかたよるほとゝぎす
はかま着て出れば空にほとゝぎす
提燈のそらに詮なし郭公

櫻がもとは若葉ふりけれども、花のあさのつらく、立寄るべくもあらず。

子規まつや柳の小くらがり
聞殘す都ゆかしやほとゝぎす
時鳥寐まきとく間に影もなし
あかつきの鐘をさそひし郭公

世をのがれたる人のほと(もカ)より、子規早う告たりと、嬉しげにいひこしければ、この句をむすびておくりぬ。

かぞふるや老の仕事にほとゝぎす

卯花 牡丹

卯の花に五日も月の定らず
うの花にはつと眼ばゆき寐起哉
飛胡蝶まぎれて失し白ぼたん

牡丹に寄る女といふ題を探りて

上氣ほどおしろいさむる牡丹かな

杜若 あやめ

かきつばた花あるうちは降れ曇れ
澤瀉はとり殘されしかきつばた
けさあやめ猶草深し小家ども

許六子へ餞別

笠摺や葺わたしたるあやめ艸

瓢　さゝげ

軒のひさご花のあはれに身を耻よ
掛おきしそのゝ垣ほの初さゝげ
なりそめるさゝげかつらの園の垣
なりそめて妹がさゝげの花かづら

螢　蝸牛　蟬

すつと來て袖に入たる螢かな
飛ほたるきえて心の行どまり
ころ／＼と笹こけ落し蝸牛
蟬の音やおさえて通る山颪
啞蟬の啼ぬ梢もあはれなり

五月雨　夕だち

空も地もひとつになりぬ五月雨
さみだれや長う預る紙づゝみ
五月雨に蛙のおよぐ戸口哉

持病漸こゝろよかりければ

死こぢて雨に日をふる五月かな
撫子を打白雨やさもあらき

扇　團扇

居並で手を唯をかぬあふぎかな
なぐさみもあふぎくらぶる斗也
晝寐して手の動きやむ團扇かな

虫干　涼　暑

土用干久しき物やめづらしき
有明に汗入るゝ頃の鐘涼し
凉むと月夜になればざれありく
行馬の跡さえあつきほこりかな

佛前にて

夏の花捧てかざる聲ばかり

題しらず

夏かけて軒になれたる燕かな
落着の故郷やてうど麥時分
凸見にむせるばかりや草の息
去年かけて夏にもかゝる椿哉
魚干て病家にゆるす夏日和
水音やほたるたのみに宿とりぬ
月の頃は寐に行夏の川邊哉

万句興行に

肩衣は綟子にてゆるせ老の夏

蓮白畫讚

おもかげの蓮の露にうつれかし

みのゝ國の俳友、伊吹山の句を乞けるに、姉川さやらん麓に滴、金の砂ながれて湖水に落るよし。きゝ及侍りて

あね川の夏ぞ戀しき金の水

亡母五十回取越し侍る時、成勝寺空玄尊師繪師を招て、折ふし墓所のかざしに這たる藤、いまだ花半残りて、風なく靜に見へ渡りければ、觀音に此藤をむすびて、繪をかゝせて予に給りぬ。まことに母の成佛に引れて、藤も草木國土成佛の縁となりけるよとおもひ侍りて

成佛の花の色香や夏のふぢ

秋風　烌夕

がつくりとぬけそむるはやあきの風

吹よどめ馬乘舟に秋の風

鐘の音物にまぎれぬ烌の暮

修行者は猶世の中の秋の暮

七夕　玉祭

天の川色繪の扇ながさまし

鶴龜もかぎりやあらん星の戀

遍昭うた

たなばたにかさねばうとしきぬ合羽

稻妻になき魂や影かよふらん

萩　女郎花

しら萩やなを夕月にうつり際

萩咲やまぢかき小野に色かさむ

置露に朝日くはゝるはぎの照

予閑居採茶庵、それが垣根に秋はぎをうつし植て、初秋の風ほのかに、露おきわたしたる夕、

白露もこぼれぬ萩のうねり哉　翁

このあはれにひかれてみづから句、

萩植てひとり見習ふ山路かな
をみなへし八重もひとへもなゝてから
薹の色花のかたみやをみなへし

手折たる女郎花を、所のものゝおかた艸といひけるおかしさに

女郎花賤がうたにはおかた艸
たま川の水におぼれて女郎花

蕣　桔梗

あさがほや蚊屋のうちから障子明ヶ
斎堂に蕣いけて哀かな
蕣にほのかに殘る寐酒かな
朝がほは二人ながめてあしき哉
あさがほや共日〳〵の花の出來
草しらず咲て目だつる桔梗かな

砧　雁

やかましう國の榮へをうつきぬた
燈をほそめ寐つけばひゞく砧哉
月更て雁は寐言の相手かな

月

月かともいはん間もなき二日かな
待かねて三日月見る歟屋形舟
白う黑う月見る顔もはれくもり
名月や木末の烏の晝の聲
川ぞひの畠をありく月見かな
見る影も冷行月のしまり哉
名月や爰は旭のよいところ
名月や軒もる雨の音淋し
月今宵出たる山ぞ名はなき歟
影ふた夜たらぬほど見る月見哉

深川指月庵にて

のちの月おもひ切たる今宵哉

述懐

頑（かたくな）に月見るやなを耳遠し
行燈も灯は泡（淡カ）むくれの月

旅行

とり分きてたまの郡の月夜哉

いざよひも更て人なし老が友

姫身まかりければ

いざよひや我身にしれと月の欠

菊　鹿

白ぎくや朝がほよりは遲う起

きく畠奥ある霧のくもり哉

露霜にめげぬや菊は齡草

こぼれかゝる空には菊の照白し

しら菊や夕飯過の行どころ

おそろしげなる角に似ぬ聲色、れざめがちなる艸枕に

いかにしても霏耳に鹿の不便也

うごかすは鹿や角磨ぐ松の下

枯木に鹿自畫讃

猶更に枯木に鹿の聲淋し

十三夜

後の月星も宿かるきく畠

後の月名にあふ菊の花盛

雨降り滿水にて、瓜ひき、殘おしくおもひて

殘多し後其後の月十四日

音やめば雨見に出るや後の月

秋も末月も細きを後の影

山に月の繪　法橋永然筆

今宵月出かゝりし山名のけしき

猿引自畫讃

里〳〵の田刈祝ふや猿まはし

題しらず

風しむや入日は尾花招はらひ

刈ながら咄は稻の實入かな

手をかけておらでしざりし花木槿

名はしらず草毎に花哀なり

松茸や峯は是非なし足の下

水呑んで跡に秋しる咳一ッ

草の葉も八日の露は何とやら

門の畑よるの枝折や蕎麥の花

野の露によごれし足をあらひけり

むれいの里にて

霧薄きそらにつゞくや原の果

稻穗白書讃

魂祭る頃、形斗のこりたる庵に、ばせをの下葉をしたふ友打寄、手向種を題に探て發句塚へ備へけるに、予も稻穗と云題をさりておもふに、一させ亡師陸奥より越路へ行脚の時、早稻の香や分入る奥は有礒海　と結ける。ほど經て越中の浪花公、此句を以て有礒海といふ集を撰て、末の世の形見となしければ

草まくらありその稻穗手向かな

秀堂子老母七十七、寄二七種一賀

けふ星の名にあふ花や女郎花

時雨

はつしぐれまだ朝がほの花ひとつ
しぐれつゝ雲にわたれる入日哉
山下や牛にもはこぶしぐれ水

恭にまけてつれなく見ゆる時雨哉
深川は月もしぐるゝ夜風哉
羽折かさむ月にかゝれる村時雨

病中の吟

音信るしぐれや我が病ムまくら

木枯　枯かづら　かれ薄

凩に何やら一羽寒げなり
おしげなく吹ども松の木枯や
立ならぶ木をまたげたる枯かづら
上下の枝引しめしかれかづら
卷つきし其草ともに枯かづら
さりとては寒きもの也かれ薄

霜　あられ

露の道松寒うして霜白し
影むらさき霜を染なす旭かな
あられにも怪我せぬ雀かしこさよ
あられにはいかなる雲のはりあいぞ

雪

はつ雪やふところ子にも見する母

雪や散る笠の下なる頭巾まで

ゆきにあかきもの道行人の鼻の先

たま〳〵に降たはみけりもみの雪

たはみては雪もつ竹のけしき哉

病衰の腕立、人や笑ん。

覺悟して風引に行雪見かな

猶行〳〵て

降かくす小家は雪のすがたかな

其夜

ふる〳〵とおもふ寐覺に月と雪

冬月　十夜　臘八

襟まきに首引入て冬の月

こゝろへず月に見付し雪の萩

さえこむる鐘ぞ十夜の場の月

明星悟心

我目には師走八日の空寒し

寒

晴天も猶つめたしや寒の入

老衰や口に梅まつ寒の入

髭そらぬ身はならはしの寒哉

紋どころよごれ着物の寒かな

題しらず

菊刈や冬たく薪の置どころ

原中やうしろ歩みに冬のかぜ

いつ喰ふて落る木の葉の虫の穴

吹寄し木の葉より出す紅葉哉

はせを翁へ餞別

なく千鳥不二を見かえれ汐見坂

世の中のよしあしを聞につけ見るにつけて、とやかくとおもふは眞氣の虚也。あさましきとなり。

世の中にやどるものなし散木のは

枯木ニ鶏自畫讃

かれ〴〵てもの寂わたる冬の園

水仙自畫讃

冬ごもりこの水仙や老が友

打こけて煩ふこれが冬ごもり

さびしき冬のながめせんと、郊外にいでゝ、あやしき木の陰・藪のほとり過るに

いくしぐれつくりかけたる庵あり

元祿十二神無月初四日雪降。しぐれより先達て、けしきめづらしかりけるに

はつ雪を持ちからなく落葉かな

年暮

月雪もふるき枕にとし暮ぬ

左様にと三ッ四ッ書し暮の文

燈にも花咲けりな明日のはる

としの暮破ればかまの幾くだり

花ほとゝぎす月雪もはや年の暮

包直し正月つかん座敷杖

身にとまる年をやられば銀（カネ）添ん

雪の日やとしのいそぎも忘けり

ふか川にさし暮て

川の音藪の起ふしとし暮ぬ

草の戸のとしとる物や墨と筆

大年も雀の遊ぶ垣ほかな

もろともに年を越ばや巨燵の火

七十の暮行としぞつれなさよ

餅きりに残らぬ年の仕舞かな

老（ひカ）たものゝ顔を見あぐる師走哉

年今宵越るや人の老の坂

年内に春たちければ、いそがしき市店を勤るやうに袴着てまぎれて

我ぞ此師走の梅を見るたわけ

年内立春

鶯よ咽（のど）こそばいうなりける歟

冬籠

冬籠目のくたびれる明り窓

諂の中にかくれて冬ごもり

山雀もこもりの小箱冬ごもり

小倉山時雨るころは朝な〳〵
きのふはうすき峰の紅葉ゝ

客とめむ時雨の雲の通る内

雑

何となく柴吹風もあはれなり

はせを翁悼

細工笠世〳〵の時雨に殘るかな

翁の像を畫て

侘られし俤畫くしぐれ哉

天明五巳初冬　　校合　梅府

跋

古白鬼園宗瑞、この句集を撰んで、末の世の形見に傳んとねがふこと二十餘年、ふかく彼庫中に埋れながら得ることあたはず、生涯志を遂ざりき。玆に吾師、先師の命を受て杉風翁の跡を慕ふこと年あり。時なるかな。採茶庵の舊屋に入ることを得れども、いまや其五世の孫婦、年わかき主なれば、いなみて師に見へざらまじきを、あはれ杉風翁の風姿を讓り受てや、貞節にして且風雅の旨趣あり。よ速にゆるして、自ら庫をひらき、古き文を閲せしむ。よて三百余章を選み、ひとつの巻となしぬ。いさゝか師の志を繼ものなり。衰翁數千餘章の句を吐て、深く藏しおきけむこと何ぞや。愚おもふに、衰翁既に百年のむかし、吾師のために遺せるなるべし。

天明五巳年孟冬　　潮水舍　魚葉　印

採茶庵所持

翁發句控帖 自筆
翁短冊
杉風亭會詠草 翁添削 杉風筆
杉風辭世 自筆
杉風祕記
杉風花押
杉風自姿 自讃 雪の句
同むれいの里紀行 自筆巻物
深川集草稿 杉風自筆
杉風發句扣帖
杉風春帖
翁春帖
杉風自畫贊
此外短冊墨跡等

右ばせを庵主杉風家より讓り給ふを、爰に記侍るもの也。

續杉風句集 近刻
續深川集 全
蕉門古筆鑑 全
蕉門略系圖 全
續白兎余稿 全
續はせを句撰 全

茶舍梅人藏板

下谷池之端仲町
須屋原伊八

惟然坊句集

梅華鳥落人惟然坊は、美濃國關里の產、廣瀬氏安通が舍弟なりけり。或日庭前の梅花、時ならずして鳥の羽風に落散を感動せしより、しきりに隱遁のこゝろざしおこりてやまず。ある夜妻子を捨、みづから薙髮して芭蕉門にかけ入、吟徒となりて晝夜をわかず。俳諧三昧にして、終に此道の大眼悟徹を遂たり。翁遷化後、師とし隨ふべき人なし、友とししたしむものなしとて、風羅念佛といふものを作り、古き瓢を打ならし、諷ひ風狂して、足のゆく處に走り、あしのとゞまる處にとゞまりて、こゝろの儘に身の天然を終れり。まことに世に奇ゝたる風骨のこのもしきあまり、わが旅寢のひま〳〵、かの鳥落人の句ゝ・奇事・奇談眼に見、耳にふれたるほどのかず〳〵、書あつめ、一囊となしたるを、關里巴圭がすゝめにまかせて、一囊の紐解て、ひとゝぢの册子とはなしぬ。

暁菴秋擧

鳥落人惟然坊は蕉門の一奇人なると、世に知る人まれなり。秋擧これをかなしび、艸枕の暇〳〵、目に見、耳にふるゝごに年頃書置ぬ。こたび惟然坊がふる鄕、關に假寢して、巴圭にかたらひ、鳥落人の遺稿をあはせて、かの風韻を世にかゞやかすことしかり。

朱樹叟　士朗

惟然坊句集

曙庵先生選定　　巴　圭　校

春

しづかさのうへの靜や梅花

梅さくや赤土壁の小雪隱

うめの花赤いはあかいはな

梅畫

梅花あの月ながら折ばやな

人日

芹薺踏よごしたる雪の泥

山のはゞ啼ひろげけり雉のこゑ

風呂敷へ落よつゝまん舞雲雀

衣更着のかさねや寒き蝶の羽

山吹や水にひたせるゑましる

まだ山の味覺えねどまつの花

こよひ智積院の鐘聞、今朝まで其元の事ども益御無事之旨及レ承候。秋與風・須磨・明石のはつ花、一兩日已前にあはてゝ東山に飛まはれば

花もなふすこしの分がまだなんぼ

久泄によわり果、いづ方にてもゆるりと伏申分別のみ。大雲様近日御下可レ被レ成候よし、御聞可レ被レ成候。

三月廿七日　　惟　然

東暇丈

かう居るも大せつな日ぞ花ざかり

我儘になるほど花の句をさくり

富貴なる酒屋にあそびて、文君が爪音も、醉のまぎれにおもひ出らるゝに

酒部屋に琴の音せよ窻の花

上市にとまりける夜は雨ふりけるに、明て晴わたりける。よしの川

たわたれば、口のはなはちり過て、かへらぬころほひになりぬ。それよりしてひたはいりにはいれば、花も奥ある氣しきにて、匂ふばかりに咲わたりぬ。なほ山ふかくいれば、圓位の住める蹟とて、幽靜の谷あり。鳥しづまり、處〴〵花はかなげにて、しばらく此石上に眠れば、心むなしく萬事を休す。

けふといふけふこの花のあたゝかさ

馬の尾に陽炎ちるや晝多葉粉

出羽にて

しとやかな事ならはうか田うち鶴

鶯や笹葉をつたふ湯たて曲突

新壁や裏もかへさぬ軒の梅

宗鑑の陳蹟を尋ねて

梅散て觀音艸の道の奥

詣二聖廟一

如月や松の苗うる松の下

乙鳥や赤土道のはねあがり

鳥散す檜木の中や雉子の聲

茶の花の匂ひや花の磯山

文臺に扇ひらくや花の下

夏

若葉吹風さら〴〵となりながら

於二知足亭一

名所夏

凉まうか星崎とやらさて何處じや

澤水に米ほうばらん燕子華

かるの子や首さし出して浮藻艸

撫子やそのかしこさにうつくしき

夕㒵や淋しうすごき葉のならひ

糊ごはな帷子かぶる晝寢かな

追善

追つかんたれもやがてぞ夏月

故郷の空ながめやりて

あれ夏の雲又雲のかさなれば

四日市にて

涼しさよ饅頭喰ふて蓮花

無菓（果）花や廣葉にむかふ夕すゞみ

竹の子によばれて坊のほとゝぎす

蕁菜やひと鉢いるゝ浪のひま

嵯峨鳳仭子の亭を訪ひし頃、川風涼しき橋板に踞して

すゞしさや海老のはね出す日の曇り

史邦吟士に別る。

起臥にたほふ蚊帳も破れぬべし

芭蕉翁岐阜に行脚のころ、したひ行侍りて

見せばやな茄子をちぎる軒の畑

遣ㇾ悶

鶏鳴や杜踏ゆる帋帳ごし

玉江

貰うよ玉江の麥の刈仕舞

秋

なほ秋に竹のしはりのしなし哉

更行や水田のうへの天の川

七夕やまづ寄り合ふて踊初

張殘す窻に鳴入るいとゞかな

尚々御無事之段承たく奉存候。爰もと折〳〵の會にて風流のみに候以上。

先月ははじめて罷越、ゆる〳〵得㆓貴意㆒、大慶ニ奉ㇾ存候。色々預㆓御馳走㆒御懇意之御事ども忝奉ㇾ存候。翁彌御無異ニて奈良一宿仕、重陽之日に大坂着仕候。　翁

菊に出て奈良と難波は宵月夜

此御句ニて會など御坐候。其元彌御無事ニ被ㇾ成㆓御坐㆒候哉。御句など少々承たく候。先日奈良越にて、

近付になりて別るゝ案山子かな

錢百のちかひが出來た奈良の菊

右兩句いたし申候。御聞可ㇾ被ㇾ下候。　土芳

丈・望翠丈、どれ〳〵様へも可レ然様ニ御心得被レ成可レ被レ下候。如何様なご罷越、萬〻可レ得ニ貴意ニ候。京都ニて高倉通松原上ルつゞ良や町笠屋仁兵衛店ニて、素牛と御尋被レ下候得ば相知れ申候。何時にても風流の御宿可ニ申上ニ候。恐惶謹言。

九月廿二日　　惟　然

意専老人

此冬の寒さもしらで秋の暮

粟津にて

いまならば落はなされじ田刈時

塩壺の庇のぞかんけふの月

なほ月にしるや美濃路の芋の味

奥の細道

萩枯れて奥の細道どこへやら

田の肥る藻や刈よせる礒の秋

物干にのびたつ梨子のかた枝哉

朝露にいざり車や草の上

廣瀨氏の別墅なる、萩山とも又は松山ともいへり。

萩にのぼる雲の下のは木曾山か

かなしさや麻木の箸も長生並

竹藪に人音しけり栝蔞

伊賀の山中に阿叟の閑居を訪ひて

松茸や都にちかき山の味

湖邊

八景の中吹ぬくや秋の風

我寺の藜は杖になりにけり

肌寒きはじめに赤し蕎麥の莖

世中を這入かねてや蛇の穴

翁に坂の下にて別るゝとて

別るゝや柿喰ながら坂のうへ

冬

何事もござらぬはなよ水仙花

水仙の花のみだれや藪屋敷

凩や刈田の畔の鐵氣水

鶇（鶺鴒）の糞の白き梢や冬の山

しがみつく岸の根笹の枯葉哉

鵯や霜の梢に鳴わたり

枯芦や朝日に氷る鮠の顔

欲ㇾ塡二溝壑一只疎放

水草の菰にまかれんうす氷

茶を啜る桶屋の弟子の寒さ哉

稲葉堂に詣る。

撫房のさむき影なり堂の月

萬句興行

はつ霜や小笹がしたのゑび葛（かづら）

冬川や木の葉は黒き岩の間

寒き日にきつとがましや枇杷花

蕉翁病中祈禱之句

足ばやに竹の林やみそさゞゐ

看病

引ばりて蒲團ぞ寒きわらひごゑ

於二義仲寺一六七日

花鳥にせがまれつくす冬木立

越路にて

薪もわらん宿かせ雪のしづかさは

あそびやれよ遊ほぞ雪の德者達

世の中はしかじとおもふべし。金銀をたくわへて人をめぐめる事もあらず、己をもくるしましめんより、貧しうして心にかゝる事もなく、氣を養へるにはしかじ。學文して身をおこなはざらんより、しらずして愚なるにはしかじ。

人はしらじ實に此道のぬくめ鳥

有（ルモ）二千斤金一不ㇾ如二林下貧一

ひだるさに馴てよく寢る霜夜哉

水さつと鳥はふわ／＼ふうは／＼

水鳥やむかふの岸へつうい／＼

芋饀汁は宗因の洒落

奈良茶漬は芭蕉の清貧

冬ごもり人にものいふとなかれ

臘八や今朝雜水の蕪の味

煤掃や折敷一枚ふみくだく

節季候や疊へ鷄を追あげる

天鵝毛の財布さがして年の暮

としの夜やひきむすびたる縫守

年の雲故郷に居てもものゝ旅

尋元政法師塚。

竹の葉やひらつく冬の夕日影

曾禰松

曾禰の松これも年ふる名所かな

貧讃

いにしへより富めるものは、世のわざもおほしとやらん。老夫こゝの安樂山に隱れて、喰はず貧樂の諺にあそぶに、地は本より山畑にして、茄子によろしく夕良によろし。いまは十とせも先ならむ、芭蕉の翁の美濃行脚に、見せばやな茄子をちぎる軒の畑　と招隱のこゝろを申つかはしたるに、その葉を笠にをらん夕顏　と、その文の回答ながら、それを繪にかきてたびけるが、今更草菴の記念となして、猶はた茄子・夕顏につちかひて、その貧樂にあそぶなりけり。さて我山の東西は、木曾・伊吹をいたゞきて、郡上川その間に横ふ。ある日は晴好雨奇の吟に遊び、ある夜は輕風淡月の情を盡して、狐・たぬきとも枕をならべてん。いはずや、道を學ぶ人は先たゞ貧を學ぶべしと。世にまた貧を學ぶ人あらば、はやく我會下に來りて、手鍋の功をつむべし。日用を消さむに經行靜坐もきらひなくば、薪を拾ひ水を汲めとなむ。

椎葉文之事

坊、適ゝおのれが菴に在て、帋なき時は、みづから軒端なる椎の枝をりて、葉の次第に一二三のしるしをわかち、味噌ほしき、或は米ほしき、その餘のあらまし事、葉毎に書て闔里の社友へおくり、事たしぬとなむ。家にあればけにもる飯を旅にしあれば椎の葉にもる。事かはれど用をなす事ひとつにして、その氣韻尤たかし。

坊名を僞り俳席に交る事

西國に遊びける頃にやありけん。たはむれにおのれが名を隱し、ある好人の家を訪ふに、をりしも人つどひ、俳席を設けゐたりけり。あるじすゝみ出て云やう、いづこの人かはしらざりけれど、俳諧好みけるとあれば、まづ此席へつらなれかしといふ。坊とみににじりあがりて、はるか末坐につらなり、たゞ默々として沈吟す。もとより孤獨清貧の身なれば、衣服などとりつくろふべきやうなければ身すぼらし。一坐のもの皆〻あなどりて、指さし嗤きあへり。さる程に附るほどの連句、いひ出すほどの發句、こと〴〵く引直しけれど、さもうれしげに一〻おしいたゞきぬ。とかくするうち、卷滿尾にいたれば、人〴〵たちかへりぬ。坊も歸んとしければ、あるじ呼とゞめて、二夜とはならざれど、こよひ一夜は宿かさむなど、見下しがましくいひければ、坊大笑して、天を幕とし地を席とし、雲に風に身を易うするもの、何ぞ一夜のやどりに身を屈せんやとて、たゞはしりに走りゆきぬ。あるじも今さら、いさゝかいぶかしき者とおもひいりぬ。明る日朝とくきのふのあらまし且、〽栗の穗を見あげてこゝら鳴鶉　かゝる句書て、加筆ねがはしとて、けふは惟然坊と文の奥に書したゝめてやりけり。あるじひらき見て、扨はきのふ來られしは、聞及ぶかの惟然道人にて有しやと、開たる口をもふさがず、腋下に冷汗流し、はぢに耻入て、返事さへ得せざりしとぞ。

翁に隨從惟然行脚の事

翁と共に旅寢したるに、木の引切たる枕の、頭いたくやありけん。自ラの帶を解て、これを卷て寢たれば、翁みて、惟然は頭の著に家を亡へりやと笑れしとなり。

蕉像の事

風羅念佛の事

翁の亡骸、いとねもごろに粟津義仲寺に葬たてまつりて、幻住菴の椎の木を伐りて、初七日のうちに蕉像百躰をみづから彫刻し、これを望めるものにあたへぬ。又、まづたのむ椎の木もあり夏木立　降はあられか檜笠　古池や〳〵蛙とびこむ水の音南無アミダ〳〵。かゝる唱歌九ッをつくりて、風羅念佛となづけ、翁菩提のためにとて、古き瓢をうちならし、こゝろのおもむく處へはしり

ありく。そも風狂のはじめとぞ。

翁なきあと旅のものゝ具携行事

かくて惟然坊、翁遷化し給ひし難波花屋何がしが家に歸り、殘れるみの笠をはじめ、旅硯・錢入・杖などひとつにとりあつめ、みづから脊に肩（負）て播磨國姫路にゆきぬ。舊友のしるてもとむるにまかせて、みなあたへぬ。今増井山のふもと、風羅堂の什物となりぬ。

翁百年忌の頃、笠あてやゝほつれければ、堂守こはよく翁の筆の蹟に似たりとて、ほどきみるに翁の草稿なり。こまやかにきれたるを、かれこれとつぎあつめぬれば、

芳野山こぞのしをりのみちかへて
　まだみぬかたのはなをたづねむ

わが戀は汐干にみえぬ沖の石の
　人こそしらねかはくまもなし

青柳の泥にしだるゝ汐干かな

かゝる一紙にて、ことに筆のすさみいとうるはしく、めで度一軸とはなりぬ。

坊婚家一宿の事

坊ある俳士のもとにやどる。其あるじちかき比、妻をむかへて、いまだ坐敷のかざりをおさめず。振袖の小袖あまた、衣桁にかけならべ置たり。朝とく家なる下女、座敷へゆきてみるに、かの坊はとく出で行たりと見えて、やり戸明はなちたるまゝにてあるに、衣桁にかけたる娘の小袖ひとつうせたり。さはこの坊のぬすみたるものにこそと、走り入てあるじにかくと告るに、あるじの曰、惟然坊、中〳〵盗などすべき小器の人にあらず、しかし洒落の道人なれば、朝の寒さを凌んために、この小袖を着て往まじきものにもあらざれば、夜前のものがたりに、明日はそこ〳〵の風士のかたへゆかんなどゝきこえければ、先かのかたへおとづれしてみんと、やがて坊行べきしるべのかたへ、使もてたづねつかはしけるに、坊その家に在て答へけるは、その事なり。今朝とくたち出たるに、野風の身にしみて、甚寒かりしゆへに、たちかへりて衣桁に有し小袖をひとつとり、うへに覆ひ來れり。もとより小袖なる事はしりたれども、男女の服のわかちはおぼえず、さだめてこれにてやあらんと、かの振袖したる伊達摸様の小袖をとり出し、其使に返し侍りけるとぞ。

坊布を得る事

西國行脚の時ならん。播州姫路の方に知る人有て、立寄侍りける。もとより風狂者のならひ、裾を結び肩をつなぎたる單物を身にまとへり。あるじあはれみて、布一匹とり出てあたへけり。坊これを得て柱杖にかけていでゝゆき、旅店に至りて云やう、この布にて帷子ひとつ縫て給れ、殘りは内儀にあたへんといひけるゆへ、あるじ悦び、取いそぎ縫たてゝあたへぬ。やがて古衣をぬぎ捨て新衣に着かへ出けるが、二町もゆきぬらんとおもふころ、たち返りていふやう、何としても着なれたるものはこゝろよきものなり。新しきものはどこやら着ごゝろあしければ、もとの古衣に着かへんために返(歸)りたりとて、やがてかの帷子をぬぎ、もとの垢つきたるものに着かへ、あとをもみず出行ぬ。こゝにおきてあるじもはじめて道人なる事を感じ、このものがたりしてとふとみけるとぞ。

俳諧の心を語る事

姫路に寓居しておはせし頃、久しく俳諧の席へ出ず。うちこもりて居侍りけるを、ある人いふやう、此ほどは何とて俳諧の交りし給はざる、今宵は誰が亭にて俳諧あり。いざゝせ給へかしとすゝめければ、坊うちわらひ、をかしき事をいふ人かな。我は俳諧師なり。さあれば、日いでゝ起き日入て休ふ。喫茶・餐飯・行住・坐臥、共にみな俳諧なり。それを外に俳諧せよとは何事ぞや。さやうのことは俳諧と常とかはりたる人にこそ、すすむべき業なれといはれければ、その人且耻且歎じてかへりけるとぞ。

娘市上に父惟然坊に逢ふ事

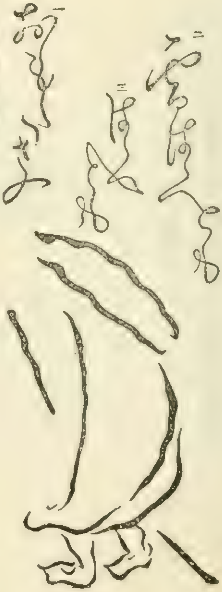
坊、風狂しありくのちは、娘のかたへ音信もせず。ある時名古屋の町にてゆきあひたり。娘は侍女・下部など引つれてありしが、父を見つけて、いかに何處にかおはしましけん、なつかしさよとて、人目もはぢず。乞丐ともいふべき姿なる袖に取つきて歎きしかば、おのれもうちなみだぐみて、

　兩袖にたゞ何となく時雨かな

といひ捨てはしり過ぬとなん。

娘父を慕ひ都へ登る事并娘薙髮の事

娘、父にあはまほしくおもふこゝろ、明くれやまざりけるを、ある時父都に在りと聞て、いそぎ都にのぼり、書肆橘屋何がしの家は、諸國の風客いりつどふ處なれば、此家にゆきてとはゞ、父の在家もしらるべければとて、ゆきてあるじにあひていふやう、みづからは惟然坊といふものゝ娘にて侍る。ちゝ（父）風雲の身となりてより、たえて音信なかりしを、さいつ頃ある街にてふとゆきあひ侍りて、いとうれしくちかくよりて、過こし程の事いひ出んとし侍りしほどに、かきけつごとく遁れ隠れて、かげだにみえずなり侍りつれば、いはんかたなく打なげきつゝ、日數過しつるほどに、此ごろ都におはするよし。風のたよりにうけ給はりて、取ものもとりあへず、ばる〳〵のぼり侍りぬ。父の在家しり給はゞ、あはせ給へ、いかで〳〵となく〳〵いひ出れば、うちうなづきて、げにことはりなりけり。さらば尋もとめてあはせまゐらせんとて、かなたこなたかけあるきつゝ、からうじて坊がありかたづねあたりて、かくてしか〴〵のよしかたりければ、坊とかうの返事なく、硯とり出て墨すりながし、



眞蹟縮圖

かゝる書かきて、うへにほ句書ていふやう、あふべきよしなし。此一片の紙をあたへてかへし給ひてよとて、投出しつゝ、かくてその身は、雪の越路の冬ごもりこそこのもしけれとて、うちたゝんとしけるを、袖をひかへて引とゞむれど、ふりはなちて草鞋さへ足にはかずして、越路をさして走りゆきぬ。橘屋何がし、ほいなくおもひけれどせんすべもなく、かのかいつけたるを持て歸り來て、ありしとのよしをかたりければ、むすめはたゞふしにふして泣けり。あるじもともに涙にかきくれけるを、やゝありて娘、頭を擡ていふやう、かくまで淸き御こゝろを、しひてしたひまゐらするは、わが心匠のつたなきなり。これぞ我身にとりてのうへなきかたみなるとて、懐にい

れて、いとねもごろに、あるじにいとまごひして、父のふるさとこそ戀しけれとて、關の里へかへり、みづからもと髻どりをはらひ、幽閑なる山陰の竹林に草の菴をむすび、かの都よりもて歸りたるを一軸となして、明暮父につかふるこゝろにして、かの一軸をぞかしづきける。坊かゝるよし越路にて聞て、にはかにはせ歸りて、かく染衣の身となりぬれば、過こしかたの物語し、一碗のものをもわけつゝ喰ひて、ともにわび住居せんと、こゝろうちとけて、多年のおもひ一時にはらし、かくて辨慶菴といふ額をみづから書て懸つゝ、この菴の名としぬ。（調度七ツをもて明暮の辨用するゆへとぞ）さるを一とせもたゝざるうちに、又風雲のこゝろおこりて、風羅念佛をうたひうかれてはしり出ぬ。かくて播磨國姫路のさとは、したしき友おほければ、尋ゆきてこゝに足とゞめしを、日あらずして病して、終に姫路にて身まかりぬとぞ。

追加

春

南部に年を越て

まづ米の多い處ではなの春

鶯のうす壁もるゝはつ音かな

下萠もいまだ那須野のさむさかな

宵闇も朧に出たりいでゝ見よ

飛でまたみどりに入るや松むしり

山中に入湯して

こゝもはやなれていく口の蚤虱

惟然坊は枕のかたきをきらはれしが、故郷へ歸るさて草庵を訪れける。なほいまだ遠き山村野亭の枕に、いかなる木のふしをかわびむさ

木枕の垢や伊吹にのこる雪　丈草

かへし

うぐひすにまた來て寐ばやねたい程

行春や寐ざめきたなき宵の雲

○

ほとゝぎすふたつの橋の淀の景

たゞものはもてなすべき美惡をしらむにこそ、その愛する心のすがたもわかるゝにあめれ。あるじ雪下風人は淵明が菊にならひ、宗祇の朝がほをもおもはるゝ草〱はない籬中ながら、さくに蘭にありもはらならむ。古人もあはたゞしからぬにほひの一間へだつるに、なほ〱なればここにさぞ。草中に入てその香をしらず。しらざるにより其談無味をしられつるにほひ、なほうす〱さしてうす〱しからぬも、又風雅の友にこそ。

すんこりとなほなる蘭かことに月

磯際のなみに啼るるいとゞかな

夜あらしに尻吹おくれ峯の鹿

○

しぐれけりはしり入けり晴にけり

彥山の鼻はひこ〱小春かな

長いぞや曾根の松風寒いぞや

山茶花や宿ゝにして杖の瘦

しめなほす奥の草鞋や冬月

名とりとのふたつみつよつ早梅花仙

○花柚押

ゆべし〱汝そよ

ある園に生し實の

經山寺の會下となり

味噌にあらぬ華衣

晩方の聲や碎るみそさゞる

ゆつたりと寢たる在所や冬の梅

贈二杜園一

笠の緒に柳綰る旅出かな

古沓や老の旅出のひろひもの

○

相國寺にて

鶯に感ある竹のはやしかな

山頭月掛ニ雲門餅一
屋後松煎ニ超州茶一

佛法は障子のひき手峯の松
火打袋に鶯の聲

これ、これをもて俳諧の變化を知るべし。

○

煙艸のまぬ傾城ミ、菓子喰ぬ俳諧
師はすくなきものなり

ちり枝や鶯あさる聲のひま

曙葊道人、我闕里に來給ひて、一日惟然坊が舊葊に遊び、道人、坊がひととなり、坊の唫詠をよく覺え、詳に語りてのたまふやう、惟然以前惟然なし。惟然以後惟然なし。前後その風調を似せさせず、誠に俳家に二なき風骨なりと歎美し給ふ。けふ葊につどへるもの、それをよろこびそれを慕ひて、とりあへず道人の筆勞をかりて此集なりぬ。

秋香亭　巴　圭

發兌書林

京都三條通　出雲寺文治郎
江戸日本橋通　須原屋茂兵衛
同　芝神明前　岡田屋嘉七
大阪心齋橋通　河内屋喜兵衛
同　河内屋茂兵衛
伊勢津　篠田伊十郎
名古屋京町通　美濃屋伊六
同本町通十丁目　美濃屋清七

去來發句集

上

わが世尊に十大弟子とて、やごとなき羅漢達のおはしけるにも、智惠第一の何、神通第一の何とかやいふて、その一ッ〱修し得たる德のおはしける。また孔子の十哲とて、かしこき人〱のいまぞかりけるにも、德行は誰、言語には誰と、己〱が學び得し道の有けるとぞ。芭蕉翁の風雅の門人にも、其角はその句躰花やかに、丈草は靜に、野坡は輕く、士芳はあだに、許六ははたらきあり、正秀は奇に、支考はほどけたり、など去來の評ありし如く、己が好たる句躰の一すじによりて、かた糸のかた〱に習ひ得たるなるべし。これみな蕉翁一人の敎より出て、かくその句躰のかはりたる。これや世尊の十大弟子、孔子の十哲のたぐひなるべし。さればその門人多かる中にも、關東に其角・嵐雪といひ、關西に去來・丈草とて、難弟難兄の上足なれども、其角・嵐雪は風雅を弘むるを業とし、もはら名利の境に遊べば、またその流れを汲む輩も多くて、其角に五元集、嵐雪に玄峰集などいへる家の集ありて世につたふ。さるを去來・丈草は、蕉翁の直指のむねをあやまらず。風雅の名利を深くいとひて、たゞ拈華微笑のこゝろをよく傳へて、一帋の傳書をも著さず。一人の門人をもとめざれば、ましてその發句を書集べき人もなし。この寥ゝたるこそ蕉翁の風雅の骨髓たるべけれ。予としごろ此二人の風雅をしたひて、嵯峨野ゝ春の花に遊びては、梢にちかき嵐山と吟じて、落柿舍にむかしをかたり、粟津の浦の秋の月にうかれては、秋の廻るや原の菴と詠て、岡の堂のすたれたるをなげく。かしこにすみ、爰に思ひ出て、書あつめたる發句を、久しく衣嚢の底にかくし置しを、このごろ嵯峨の重厚、粟津の魯江の二法師、寫んことをあながちにこひもとめぬるに見せしむ。かならずや窓の外へ出して、いたづらに古人の心に背く事なかれ。

明和八年卯の春二月　東山岡崎の里

五升菴にて

蝶夢記

去來姓は向井、名は平次郎、號義焉と。肥前長崎の人なり。彼地の聖堂祭酒の氏族にして、世〻儒を業とす。博く書をよみ、天文曆學をきわめ、詩歌を翫ぶ。また沈勇にして猛猪を刺す。都にありて何がしの殿下に仕へ奉る。宦袴の暇には芭蕉翁に隨ひて誹諧の風雅を學ぶ。鴨川の東聖護院村に住り。また嵯峨の小倉山の麓に別莊をいとなみて行通ふ。ある秋のころ庭に柹の落しを見て、その居を落柹舍と名づく。菊亭內府公よりその三字を賜ふ。寶永元年の秋九月十日沒す。墓は東山眞如堂にあり。今の落柹舍は明和のころ、重厚再興して今存せり。

去來發句集

春

元日や家に讓りの太刀帶(佩)ん

元日や土つかふたる顏もせず

褻(け)形(なり)では逢じいふても花の春

商人の空音ゆたかや伊勢の春

蓬萊にかけてかざるや老の袖

萬歲や左右にひらいて松の陰

月雪のためにもしたし門の松

獨り寐もよき宿とらん初子の日

わか菜つみ敷ものやらうさん俵

嵯峨にて、ある曙に

春や祝ふ丹波の鹿も歸るとて

鶯の啼や餌ひらふ片手にも

うぐひすの音づよになりぬ二三日

鶯や内のも啼ば野から來る
黄鳥のなく〳〵そこに樂寐かな
うくひすの朝日まつ音や谷の底
鶯や雀よけ行枝うつり
黄鸝（うぐひす）のまだ啼まひか今朝の雪

風扣が春の景色見んと、舟に乘て出けるに

うぐひすか人の眞似るか梅が崎
瘦はてゝ香にさく梅のおもひかな

上﨟の山莊にまし〳〵けるに、候し侍りて

梅が香や山路分入る犬のまね
高潮や海より暮てうめの花
五六本よりてしだるゝ柳かな
應〳〵で人をすかせるやなぎかな
青柳のたゝいて遊ぶ板戸かな
姑の氣に入る人は柳かな
たのしさよ闇のあけくの朧月
鉢たゝき來ぬ夜となれば朧なり

洛よりの文の返しに

朧月一足づゝにわかれかな

弟魯町、故鄕へ歸りけるに

手をはなつ中に落けり朧月
呼出しに來てはうかすや猫の戀
うき友にかまれて猫の空ながめ
竹原や二疋あれこむ猫のこひ
いくすべり骨折岸の蛙かな
田の畔や虹を背屓（負）てなく蛙
一畔はしばし啼やむ蛙かな
瀧つぼもひしげと雉子のほろゝかな
雉のおかしがるらんきじの雛
歸るとてあつまる雁よ海のはた
遊ぶとも行ともしらぬ燕かな
山雀の高音になるも別かな
振舞や下座に直る去年の雛
上り帆の淡路はなれぬ潮干哉

うごくとも見へて畑うつ男かな

陽炎や足もとにつく戻り駕

神鳴や一むら雨のさへかへり

春風に吹出されけり水の胡蘆

呂丸追悼

踏きやす雪も名殘や野邊の供

北草ヵ哭す。

凡十年の笑は三年の恨に化し、その恨は百年の悲を生す。惜しみても猶名殘おしく、此一句を手向て、來しかた行すゑを語り侍るのみ。

なき名きく春や三とせの生別

花をまつ日數によごすころもかな

西行の詞をかりて賴政の詠を難す。

疎きも人は折にこそよれ。使は來たり馬に鞍おけ。

供觸も折にこそよれ初ざくら

花守や白き頭をつき合せ

知る人にあはじ〱と花見哉

何事ぞ花見る人の長刀

咲花にうき世の人や神ぜゝり

よし野山またちる方に花めぐり

小袖ほす尼なつかしや窓の花

一昨日はあの山こえつ花ざかり

花見にもたゝせぬ里の犬の聲

湖上の花

花に今眼入けり志賀の浦

立枯の殘り多さよ花の中

田上の尼へ、花見にまねかれて

海を見る日つきも出す花の雲

山深く分入りて

木の空の天狗も今は花の友

南都の般若寺にて

散こもる花や般若の帋の間

散錢も用意顏なり森の花

花雪とちらすや錢の間の山

朝ざくら芳野ふかしや夕櫻

一むしろちるや日うらの赤椿

手一ぱいゆすのかるたや躑躅山

閑居

山藤のもとのゆがみを机かな

藪の根やあけてゆり出す茶つみうた

百姓も麥にとりつく茶摘哥

翁の身まかり給ひし明る年の春、
義仲寺へ詣て

石塔もはや苔つくや春の雨

三月と文に書のも名殘かな

參宮の折、奉納の心を

神風の彌生はふかし門の竹

夏

郭公なくや雲雀と十文字

うかれ出て山がへするか子規

兄弟が顔見合すやほとゝぎす

心なき代官殿や時鳥

吉野にて逢れう物かほとゝぎす

横雲の間や山出しの郭公

ほとゝぎすきのふ一聲けふ三聲

うぐひすもやゝ受太刀や時鳥

明くれの空啼ひゞけほとゝぎす

西山へまかるさて

新足に聞や内野ゝ子規

熊野にあたしかといふ所あり。初
音をきゝて

こちの身もあたしかに聞郭公

伊勢にて

卯の花も海のかざりや朝熊山

うの花の絶間たゝかん闇の門

巡禮のころ

卯の花に笈摺寒し初瀬山

光りあふ二ッの山の茂りかな

色〳〵の作となりけり麥のあと

つかみあふ子共のたけや麥畑

朝〳〵の葉のはたらきやかきつばた

舟乘の一濱留主ぞけしの花

熊野路にしる人もちぬ桐の花

元祿七年、久しく絶たりける祭の行れけるを拜して

醉顔に葵こぼるゝ匂ひかな

竹の子や畠隣に惡太郎

武士の子の生長をいはふて

笋の時よりしるし弓の竹

湖の水まさりけり五月雨

たま〳〵に三日月拜む五月かな

大和・紀伊の境、はてなし坂にて、往來の順禮をさゞめて、奉加すゝめければ、料足つゝみたる帋のはしに書付ける。

つゞくりもはてなし坂や五月雨

雲とりの峠にて

五月雨に沈むや紀伊の八莊司

曲水子にいざなはれて、勢田の螢見にまかりけるに、夕べの程流れにつゞきて下りぬと語れば、猶舟をさし下して

ほたる火や黑津の梢見が嶋

螢火や吹とばされて鳰の闇

妹千子、身まかりけるに

手の上に悲しく消るほたるかな

水札啼や懸浪したる岩の上

鷄もはら〳〵時か水鷄なく

石垢になを喰入るや淵の鮎

見物の火にはぐれたる歩行(かち)鵜哉

旅寢して香わろき草の蚊遣かな

木津へまかりて

山里の蚊は晝中に喰ひけり

其角の母の悼に

蚊遣にはなさで香たく悔かな

青柴を蚊帳にも釣や八瀨大原

谷汲寺にて

順禮もしまふや襟に鮓の飯

すゞしさや浮洲の上のざこくらべ

立ありく人にまぎれて凉かな
凉しさよ夕立ながら入日影
町すじは祭に似たり夕すゞみ
更る夜を隣になろふ納凉哉
猫の子の巾着なぶるすゞみかな

紀伊の藤代を通りける頃、此所に三郎重家の末、今にありと聞及びぬれば、尋入侍りしに、門・築地押廻し、飼たる馬・みがき立たる矢の根立かざりて、いみじき武士なり。また庭に、いにしへの弓掛松とて古木今もあり。

藤しろやこひしき門に立すゞみ

洛東眞如堂にて善光寺如來開帳の時

すゞしくも野山にみつる念佛かな
夕すゞみ疝氣起して歸りけり
じだらくに寐れば凉しき夕かな
蕣の二葉にうくる暑かな
石も木も眼に光る暑かな

美濃の國熊坂が人見の松にて

わるあつく吹や人見の松の風
住かへよ人見の松の蟬の聲

同じ國にて

夏かけて眞桑もみへぬ暑かな
葉がくれをこけ出て瓜の暑かな
暮まつや藪のひかへの雲の嶺
夕ぐれや兀ならびたる雲のみね

伏見の舟中より都の方をながめて

夕立の雲もかゝらず留主の空

六玉川の記あり。

六玉川高野ゝ外は淸水かや
鎧着て疲ためさん土用干
水無月の竹の子うれし竹生嶋

從兄弟の筑紫より上りけるに

むかし思へ一ッ畑のふり茄子瓜
夕顏や名を落したる花の形

洒堂が難波に居を移せし時

門賣も聲自由なり夏ざかな

秋

蠅ならぶはや初秋の日數かな
うちたゝく駒のかしらや天の河
酒盛となくて酒のむ星むかへ

筑前の黒崎にて、明日は此邊りの
たゝども沖に出て、雨乞の踊し侍
るといふを聞て

七夕をよけてやたゝが舟踊

たゝとは、此邊にて漁父の妻娘の事也。けふは七月七日
の事にぞ侍りける。

黒崎砂明亭にて

うちつけに星まつ顔や浦の宿

魯町が許にて

山本や鳥入り來る星むかへ
魂棚の奥なつかしや親の顔

妻におくれたる人の許にて

寐道具のかた〳〵やうき魂まつり

年經て長崎に歸りけるに

見し人も孫子となりて墓參り

踊子よ翌は畑の草ぬかん
朝顔や夜は萑の博奕宿
秋の日のかりそめながらみだれけり
初露や猪の臥芝の起上り
露落て尻こそばゆき木陰哉

悼二風國一

朝夕にかたらふものを袖の露

嵐蘭追悼

千貫の劍うめけり苔の露

遊女常盤身まかりけるをいたみて、
相しれりける人に申侍る。

露けぶり此世の外の身受かな

芭蕉翁の奥の細道を拜して、その
書寫の奥に書付ける。

ぬれつ干つ旅やつもりて袖の露
稻妻のかきまぜて行闇夜哉

長崎丸山にて

いなづまやどの傾城とかり枕
都にも住まじりけりすまひとり

淺茅生やまくり手下す虫の聲

早稲ほすや人見えそむる山のあし

田上にて

山家にて魚喰ふ上に早稲のめし

こけ様にほうと抱つく西瓜かな

尻撫て馬飛(とば)するな花すゝき

ひみといふ山にて、卯七に別るゝとて

君が手もまじる成べし花すゝき

岩端や爰にもひとり月の客

盲より唖のかはゆき月見かな

名月や椽とりまはす黍のから

名月や海もおもはず山も見ず

月見せん伏見の城の捨郭

名月やむかひの柿屋照さるゝ

乘ながら馬草はませて月見かな

黒い身に照こむ旅の月見かな

誰〳〵も東向らん月のくれ

猪の寢にゆく方や明の月

嵯峨に小屋作りて、折ふしに休息仕ゆなれば

月のこよひ我里人の藁うたん

世波にたゞよひて、日ぐれの頃、岡崎より京に歸るとて

鴨川や月見の客に行あたり

長崎素行亭

浦人を寐せて海みる月夜かな

長崎より田上に旅寐うつしける時

名月やたが身にせまる旅ごゝろ

岡木の宿にて、小姫のまだらぶしうたふを聞て

月かげに裙を染たようらの秋

中秋の望、猶子を送葬して

かゝる夜の月も見にけり野邊送り

長崎諏訪の社にて　前書あり

尊とさを京でかたるも諏訪の月

十六夜やたしかにくるゝ空の色

駒牽の木曾や出らん三日の月
海山を覺へて後の月見かな

宰府奉納

幾秋の白毛も神の光かな
一戸(いちのへ)や衣もやぶる﹅駒むかへ
乗掛の眠をさますきぬた哉
娘より嫁よりよはき砧かな
あき風やしら木の弓に弦はらん
秋風に耳の垢とれわたし守

吉備津宮奉納

秋かぜや鬼とりひしぐ吉備の山
臥所(ふしど)かや小萩にもる﹅鹿の角
小男鹿や岩に踏ばる雲のすき
啼鹿を椎の木の間に見付けり
夜あらしや空に吹とる鹿のこへ
おく山や五聲つゞく鹿の聲

伊都岐島にて

みつ潮の岩ほに立や鹿の聲

浦陰や通しも交るわたり鳥
朝あらし天窓の上を渡り鳥

長月のすゑ築(筑)紫より上りける道、安藝の廣島を通けるに、人々さらへけれども、故郷に心いそぎせられて、のがれいづる曉、一夜の宿に書とゞめ侍る。

けふ翌と成ていそがしわたり鳥

長崎に旅寐のころ

ふるさとも今はかり寐や渡りどり

筑前の國にて

雁がねの竿になる時猶さびし

同黒崎にて

福岡や千賀もあらはに鴈す﹅き

先訪(故)をあくの浦に訪ふ。

氣遣ふてわたる灘女や鱸つり

田家

八月や潮のさはぎを山かづら
聞まつといふか案山子の腰刀

有礒海集撰給ひける時、入句ども書あつめ參らせけるに添て祝す。

鷲の巣や野分にふとる有礒海

松茸や人にとらるゝ鼻の先

老て神職がふむりたる人を賀して

花も實も晩稻に多し神の秋

難波津にて

芦の穗に箸うつかたや客の膳

閭女亭にて先師の事ども申出ける序に

秋はまづ目にたつ菊の莟かな

菊咲て屋根のかざりや山畑

筑前博多にて

菊の香にもまれて寐ばや濱庇

自題ニ落柿舍一

柿ぬしや梢はちかきあらし山

落柿舍感偶

柿買や見ればぬいたる眞桑賣

芽立より二葉にしげる柿の實　さ

丈草申されしも、いつの頃にや有けん。彼落柿舍もうちこぼつよし。

やがて散る柿の紅葉も寐間の跡

長崎にて支考に逢て、京の事などたづねられて

息災の數に問れん嵯峨の柿

木のもとに圓坐とりまけ木綿どし

周防にて

德山の蕎麥白たへや綿もふく

唐人の枕とて、故鄕にて人のくれけるに

囉へどもまづ此秋はより枕

鼠の説

面扶持をへつるか栗の鼠ども

讀ニ甲陽軍鑑一

あら蕎麥の信濃の武士はまぶし哉

長き夜も旅草臥に寐られけり

聖護院にて

樫の木の色もさめるや秋の空

うき人をまた口説みんあきのくれ

冬

鳶の羽もかいつくろいぬ初しぐれ

かはらけの烏帽子の上や初時雨

柳など天窓は寒き初しぐれ

いそがしや沖の時雨の眞帆片帆

一時雨しぐれて明し辻行灯

こがらしの地にも落さぬしぐれかな

しぐるゝや紅の小袖を吹かへし

雲よりも先にこぼるゝ時雨かな

山雀の里かせぎするしぐれかな

塗物の上にちよほ〳〵しぐれ哉

食時(めしどき)にさしあふ村の時雨かな

翁の病給ふを聞て、伏見より夜舟さし下す。

舟に寐て荷物の間や冬籠

翁の病中

白粥のあまりすゝるやふゆごもり

看病も一人前の火燵かな

眞夜中や火燵際まで月の影

翁の病中祈禱の句

木がらしの空見直すや鶴のこへ

傷二亡師終焉一

わすれ得ぬ空も十夜の泪かな

丈草の許より、芭蕉翁の七日〳〵さうつり行あはれさ、猶無名庵に偶居して、心地さへすぐれずさて、朝霜や茶湯の後の薬鍋　といへる、かへし

朝霜や人参つんで墓まいり

翁三回忌に義仲寺にて

夢うつゝ三度は袖のしぐれかな

行かゝり客に成けり蛭子講

木曾墳に参りて

船馬にまた泣よるや神無月

松本にて

初雪や四五里へだてゝ比良の嶽
應〱といへどたゝくや雪の門
せめよせて雪のつもるや小野の嶺
雪の山かはつた脚もなかりけり
九重に見なれぬ雪の厚さかな
詠やる奥のとろくや比良の雪
旅人の外は通らず雪の朝
繪の中に居て見る雪の山路かな
雪空や鬼も腕を出すべう

悼二浪化君一

その時や空に花ふる野邊の雪
暖簾や雪吹わたす旅籠町

軍書を讀て

雪降れば常盤御前の最惜しき
ひつかけて行や雪吹の豊嶋御座
松杉にすくひ上たるみぞれ哉
老武者と指やさゝれん玉あられ

訪二僧丈草一

馬道や藁をはなれて霜の屋ね
山畑や青みのこして冬がまえ
墨染に眉の毛長し冬籠

卯七亭

霜月や日まぜにしげく冬ごもり

其角へかへし

放すかと問るゝ家や冬籠

賀二礪波山撰集一

木がらしや劍をふるふとなみ山
夕照にひらつく礒のかれ葉哉
冬がれの木の間覗ん賣屋敷
賽錢を落して拂ふ落葉哉
布子着て淋しき顏や神送り
荒礒やはしり馴たる友千鳥
鴨なくや弓矢を捨て十五年
尾頭の心もとなき生海鼠かな
その古き瓢箪見せよ鉢たゝき
物くるゝ門にも立ず鉢たゝき

箒來せ眞似ても見せん鉢敲

十錢を投じて百聲の瓢を聞しむ。

旅人の馳走にうれし鉢たゝき

榾の火に親子足さす侘寐かな

懷二僧丈草一

寒き夜や思ひつゞける山の上

堀川を通りて

有明にふり向がたき寒さかな

火いけ(かカ)虫背戸から寒し竈の前

李下が妻の身まかれるに

寐られずやかたへ冷ゆく北下し

盗人におひともいはん鰒の錢

御神樂や火を焚く衛士にあやからん

老樂の口もと寒し御佛名

廣澤

池の面雲の氷るや愛岩(宕)山

除風子の撰集を祝ひ、發句參らせんとおもふに、青むしろはことしの霧をもて織出たる物なりと、人の申ければ、かならず冬季なるべしと沙汰し侍りて

草庵に一の寶や青むしろ

くれて行年のまうけや伊勢熊野

行年に疊の跡や尻の形

うす壁の一重は何かとしの宿

としもはや牛の尾ほどのたより哉

神鳴もさはぐや年の市の音

長崎の浦に旅寐して

年浪のくゞりて行や足の下

としの夜の餅や鰯や三の膳

年の夜や人に手足の十ばかり

追加

青柳や覆ひかさなる糸ざくら

十五夜の月のひらきや前うしろ

日和見る窓にはちかし月の暮

牛賣て伯父と道きるしぐれ哉

丈草發句集

下

丈草、俗姓は内藤にして、世ゝ尾張の國犬山の城主に武を以て仕ゆ。文を右にして和漢の才あり。若きより佛乘に歸して玉堂和尚の禪意をつたへ、奉公を辭して薙髪す。偈曰、多年屓（負）屋一蝸牛、化做蛞蝓得自由、火宅最惶涎沫盡、追尋法雨入林丘　發句、涼風にきゆるを雲のやどり哉　と云ゝ。終に故郷を去りて、湖南の粟津龍が岡に茅屋をむすび、佛幻庵と號し、芭蕉翁を開祖とす。ちかくまでその跡ありて岡の堂といふ。翁の滅後、山に籠りて師恩（を）の報ぜんために、一石一字の法華經を書寫して墳に築く。元祿十七年の春二月廿四日病床に坐化す。塚は龍が岡の東林の中にあり。正秀が墓にとなる。

丈草發句集

春

うぐひすや茶の木畑の朝月夜

竹簀戸のあふちこぼつや梅の花

床脇は梅さくかたか荷茶屋

待ことは梅にあるかも茶摺子木

本納

梅がゝや湯立の跡の炭の切

片屋根の梅ひらきけり畑出し

遲望が新宅を賀す。

水仙に作事は濟で梅の客

尾張の國に春を採りて

うめの花ちり初にけり難（灘）追風

芭蕉翁の往昔を思ふ。

梅が香にまよはぬ道のちまたかな

引よせてはなしかねたる柳かな

我事と鯲の迯し根芹哉

寒だけは寒く、土用だけは暑し。
春ひさりなんぞ餘興なきや。

春だけはもちのこさぬやおもしろみ

背戸中はさえかへりけり田螺がら

里の男の田螺がらを水底に沈め、
まち居たれば、腥をむさぼる鯲の
いくらさもなく入こもりて

入替る鯲も死ぬに田にしがら

取つかぬ心でうかぶ蛙かな

梅本寺に遊びて

松風をうちこして聞蛙かな

中　菴

火をうてば軒に啼あふ雨がへる

のら猫やうかれ行ほど松の中

歸る空なくてや夜半のやもめ鴈

眞野雄琴雲雀にとゞく煙かな

朝ごとに同じひばりか屋根の空

文考餞別

松風の空や雲雀の舞別れ

燕の雁に問てや鳰まはり

芦文に別るゝさて

落付のしれぬわかれや鳳巾

大原や蝶の出てまふ朧月

陽炎に隣の茶さへすみにけり

芭蕉翁の墳にまふでゝ我病身をおもふ。

かげろふや墓より外に住ばかり

春雨や何からいはん嵯峨戻り

はるさめやぬけ出たまゝの夜着の穴

身を風雲にまろめ、あらゆる乏しさを物させず。たゞ一ッの頭の病もてるゆへに、枕のかたきを嫌ふのみ、惟然子が不自由なり。蕉翁も折〳〵是を戯れ興ぜられしに、此人はつぶりにのみ奢を持る人なりさぞ。此春故郷へさて湖上の草

菴を覗れける。猶すゑ遠き山村野亭の枕に、いかなる木のふしをか佗て、殘る寒さも一入にこそと、後見送る岐にのぞみて

木枕の垢や伊吹に殘る雪

閑居

朝夕にせゝる火燵や春のたし

白妙に月夜烏や花の奥

眞先に見し枝ならんちるさくら

角入れた人をかしらや花の友

更に劉伶が鋤を倩しき興じて

醉死ぬ先から花のうづみけり

うか〳〵と來ては花見の留主居哉

鳶の輪の崩て入るや山櫻

花曇り田螺のあとや水の底

死だとも留主ともしれず庵の花

塗樽の庵に立よる花見かな

花ちるや覗あひたる岩の穴

水壺にうつるや花の人出入

片尻は岩にかけたり花むしろ

ちるかたは志賀にしておけ澳の花

木啄や枯木をさがす花の中

笠松に舞もどりけり花の友

小疊の火燵ぬけてや花の下

洛東の花

落こむや花見の中のとまり鳥

病中

山がらは花見もどりや枕もと

夕ばへや花の波こすあらつゝみ

餞別

見送りの先に立けりつく〴〵し

咲立て柴のならぬや躑躅山

さし覗く窓へつゝじの日足かな

あぐらかく岩から下や藤の花

畫讃

何の葉の影ぞねぢむく雉子のてり

三月や冬の景色の桑一木

三月盡

明ぬ間は星もあらしも春の持

夏

時鳥啼や湖水のさゝ濁り
飛込だまゝか都のほとゝぎす
子規瀧より上のわたりかな
川越の渡(途)中に立や郭公
ほとゝぎす誰にわたさん川むかひ
啼ぬ間よ空一ぱいの時鳥
菜種がら焚や野風の子規
杜鵑なくや榎も梅さくら
しるべして山路もどせよ杜宇
山道や壺荷にひゞく時鳥

嵯峨にて

鹿追の寐入るや藪の杜鵑

木曾川のほとりにて

ながれ木や篝(かゞり)火の上の不如歸

月夜の松原に醉出て

夜(征カ)亂のけいこの中にほとゝぎす

遊二長命寺一

筝(箏)の鮓を啼出せ郭公
寐て待や梅田枇杷麥蜀魂
屋の棟の麥や穗に出て夕日影
杉なりにせり上りたる田植かな
谷風や青田を廻る庵の客
松風を中に青田の戰ぎかな
夕ばへや茂みにもるゝ川の跡

去來が落柿舍にて

芽出しより二葉に茂る柿の實
はね釣瓶蛇の行衞や杜若
青雲や馬鍬やすむる晝の芥子
晝鐘や若竹そよぐ山づたひ
子につれて歸(返)る青みや去年の竹
草芝を出るほたるの羽音かな
はしりこむ螢の中や谷の水
螢火や蟹のあらせし庭のへり

豐後龍門寺の瀧
篝火や村中に取る瀧の水
曲水の子を悼
呼聲は絶てほたるのさかり哉
やう〳〵と出て啼時かかんこ鳥
仰木の里書懷
おのが音の尼や水鶏の礒の闇
血を分しものとおもはず蚊のにくさ
朝日さす帋帳のうちや蚊の迷ひ
衰病倚人
行先にのがれ入けり蚊帳のうち
魯九剃髪せし時垂辭
蚊帳を出て又障子あり夏の月
隙明や蚕の出てゆく耳の穴
竈のさそひ出してや火とり虫
梅本寺より歸るさて
蟬啼やわかれて上る軒の山
夕立のかしら入たる梅雨かな
美濃の關にて
町中の山や五月の上り雲
白雨にはしり下るや竹の蟻
夕立に飛のく月や松のうへ
凉しさに寐よとや岩のくぼたまり
小屛風に山里すゞし腹の上
あら壁や水で字をふく夕すゞみ
つゝ立て帆になる袖や凉ぶね
草臥の根ぬけや澳の晝すゞみ
すゞしさの心もとなしつたうるし
丈山の像
さか樣に扇を懸て猶すゞし
大山にて市中苦熱
凉しさを見せてやうごく城の松
ぬけ果し納凉のあとや椽の月
四梅廬の納凉
打水にのこるすゞみや梅の中
誰笠に受合せけり蓮の露
浦舟の頭へしに匂ふ蓮かな
惟然行脚を送りて

炎天に歩行神つくうねり笠
雨乞の雨氣こはがるかり着哉
元春法師身まかりけるに
世の中を投出したる團扇かな
旅行
帷子にあたゝまりまつ日の出かな
梅本寺を立出るとて
雨乞に先立けふややぶれ笠

秋

朝夕べ秋の廻るや原の庵
夜明まで雨吹中や二ツぼし
精靈のすかれし人をあつめけり
聖靈の隣ありきや山の上
魂棚や藪木をもるゝ月の影
精靈も出てかりの世の旅寐哉
舊里に歸りて
精靈にもどりあはせつ十年ぶり
送り火の山に上るや家の數
稻妻のわれて落るや山のうへ
夜舟より上りて酒堂亭に眠る。
いなづまや夜明て後も舟ごゝろ
悔いふ人のとぎれやきり〴〵す
行燈に飛や袂のきり〴〵す
宵まてや戸にうたれたる蟋蟀
踊子のかへり來ぬ夜や蛬
寒けれど穴にも啼ずきり〴〵す
きり〴〵す啼や出立の膳の下
物かけて寐よとや裙のきり〴〵す
寐がへりの方になじむや蟋蟀
つれのある所へ掃ぞきり〴〵す
病床
虫の音の中に咳出す寢覺哉
啄木の入まはりけり藪の松
はせを翁に文通の奥に
まねけどもとゞかぬ空や天津鴈

山はなやわたりつきたる鳥のこへ
ぬけがらにならびて死る秋の蟬

旅中

蜻蛉の來ては蝿とる笠の中
啼はれて目ざしもうとし鹿の形
北嵯峨や町をうちこす鹿の聲
あれこれを思ひはづれる花野かな
早稲の香や履出さるゝ庵の舟
名月や雨にはりあふ風光
名月や車きしらす辻番屋
辻堂に梟たてこむ月夜かな
戸を明て月のならしや芝の上
から樽を漏にあてけり月の雨
野山にもつかで晝から月の客
京築紫去年の月とふ僧仲間

淀川の邊りにて

舟引の道かたよけて月見かな
發句してわらはれにけりけふの月

此句は林之助といひける九歳の時、はじめて言出せる句のよし。

友ずれの舟に寐付ぬ夜寒哉

答見寄山莊

燒栗も客も飛ゆく夜寒かな
病人と鐘木に寐たる夜寒かな

洛の惟然が宅より故郷へ歸るに

鼠ども出立の芋をこかしけり
鷄頭に置て迯るや笠の蝿
鷄冠の晝をうつすやぬり枕
つり柿や障子にくるふ夕日影
木づたふて穴熊出る熟柿哉

落柿舍すたれけるころ

澁柿はかみのかたさよ明屋敷
谷ごしに鳴子の綱や窓の中
居風呂の下や案山子の身の終
借かけし庵の噂やけふの菊

嵯峨にて

竹伐の外には見へず菊のぬし

芦の穗や顏撫上る夢さかり
あしの穗や蟹をやとひて折もせず
早咲の得手を櫻の紅葉かな
稻積に出るあるじや秋の雨
松の葉の地に立ならぶ秋の雨
ねばりなき空をはしるやあきの雲

伊賀へこす時、おとぎ峠にて

いひおとす峠の外も秋の雲
飼猿も秋はことさら山のこへ
旅瘦を見にはよらぬに秋の池
靑空や手ざしもならず秌の水
歸り來る魚のすみかや崩れ簗
堂頭の新蕎麥に出る麓かな
夜嘶の長さを行ばとこの山

須磨の浦

詠あふ秋のあてどや寺と船
行秋や梢にかゝる鉋屑
行秋の四五日弱る薄かな

冬

雷落し松はかれ野の初しぐれ
一方は藪の手つだふ時雨かな
黑みけり沖の時雨の行處
幾人かしぐれかけぬく瀨田の橋
鳥の羽もさはらば雲のしぐれ口
屋根葺の海をふりむく時雨かな
鍋もとにかたぐ日影や村しぐれ
風雲や時雨をくゞる比良おもて

東湖あたりの冬空を吟じて

むきたらで又や時雨のかり着物

越中翁塚手向

入月や時雨るゝ雲の底光
海山のしぐれつきあふ庵の上

所思

もたれたる柱も終に礎しぐれ

芭蕉翁病中祈禱の句

峠こす鴨のさほひやもろきほひ

はせを翁の病床に侍りて

うづくまる薬の下の寒さかな

傷亡師の終焉

暁の墓もゆるぐや千鳥數寄

芭蕉翁追悼

ゆりすはる小春の湖や墳の前

芭蕉翁の七日〳〵もうつり行哀さ、無名庵に偶居して心地さへすぐれず。去來が許へ申送る。

朝霜や茶湯の後のくすり鍋

國〳〵の墓所も、同じ蕉葉の霜にしらめる三年の喪は疎ならぬ中に、湖上の木曾寺はそのまたき姿を收て、人〳〵のぬかづきよる袖の泪も、一しほの時雨をすゝむる舊寺の夕アより、朝をかけて梵筵吟席のつとめ、ねもごろ也。然ども野衲はひとり財なく、病ある身なれば、なみ〳〵の手向も心にまかせず。あたり近き谷川の小石かきあつめて、蓮經の要品を寫し、その菩提を祈り、その恩を謝せん事を願へり。誠に今更の夢とのみ驚く心喪のかぎりに筆を投うち、手を拱して、たゞ墓前の枯野をみるのみ。

石經の墨を添けり初しぐれ

芭蕉翁七回忌追福の時、法華經頓寫の前書あり。

待うけて經かく風の落葉哉

水底の岩に落つく木の葉かな

凩のあたり處やこぶ柳

奈良の玄梅、蕉翁の、こがらしの身は竹齋に似たる哉さいへる句を夢見て、その翁の像を書て讃望けるに

木がらしの身は猶かろし夢の中

飛かへる岩のあられや窓のうち

山中泊

霰ふる宿のしまりや簔の夜着

はつ霜の泥によごれつ草の色

思はずの雪見や比叡の前うしろ

雪空の片隅さびし牛の留主

狼の聲そろふなり雪のくれ

納豆するとぎれや嶺の雪おこし

ふりかへて山から見たし雪の窓

狐なく岡の晝間や雪曇り

野も山も雪にとられて何もなし

さかまくやふりつむ峰の雪の雲

おれあふて中行色や雪の友

都の人に申遣しける。

山雲のあまりをやれば京の雪

嵯峨の野明別莊にて

柴の戸や夜の間に我を雪の客

去來が菴を訪ひ來れるに別るゝさ

て

雪曇り身の上を啼烏かな

村雲の岩を出るや雪吹の根

しまき來る雪の黑みや雲の間

淋しさの底ぬけて降みぞれかな

背戸口の入江に上る千鳥かな

さよ千鳥庚申待の舟屋形

水底を見て來た顏の小鴨哉

夜がらすをそやし立けり鴨のむれ

霜腹の寐覺〳〵や鴨の聲

榾の火や曉がたの五六尺

草庵の火燵の下や古狸

下京を廻りて火燵行脚かな

ほた〳〵と朝日さし込火燵かな

守り居る火燵を菴の本尊かな

吹嵐あらしや今は山やおもふ行曉の寐覺なりしを、さいふを誦して

山やおもふ帋帳の中の置火燵

炭賣や隣の人が焚に行

紙子着てよれば火燵のはしり炭

貧交

まじはりは紙子の切を譲りけり

一夜さに猫も帋子もやけどかな

居寐さへかゝらぬ物なりければ、立別るゝ宿の跡もさこそと思ひて

踏やぶる帋帳の穴や置土産

鶏の片足づゝや冬ごもり

しづかさを數珠も思はず網代守

舟岡に影氷すや鉢たゝき

一月はわれに米かせはちたゝき

うら門の竹にひゞくや鉢敲

長崎卯七、渡鳥撰集の時

句撰やみぞれ降夜のあられ酒

水風呂に筧しかけて谷の柴

鷹の目の枯野に居るあらしかな

神松のさえこむ影や禰宜の夢

黒海苔は雪海苔ともいふ。岩間に降つもれる雪の、日に照されて此物とはなれりとぞ。泥化より悪れしに、さりあへず。

海苔の名やたゞうち見には雪と墨

あら猫のかけ出す軒や冬の月

雪よりも寒し白髪に冬の月

獨法師は中〳〵の手廻しにて

煤掃や山風うけて吹通し

寒は既望の日より明て、風景殊更に悠然たり。

十五日春やのしこむ年の暮

行燈を消せば鼠のとし忘

追鳥も山へ歸るか年のくれ

安永三午年六月　　翠樹書

蕉門俳諧書林

井筒屋　莊(マヽ)兵衛

橘屋　次兵衛

板行

追加

うぐひすにとらばや菴の風ふせぎ
着てたてば夜の衾もなかりけり
影法師の横になりたる火燵哉
しら粥の茶碗くまなし初日影
酒賣のもどりは樽に野梅かな
子規たしかに峯の早松茸
とゝ川の春やくれ行葭の中
船待の笠にためたる落葉哉
月代やしぐれの中の虫の聲
粟津野や山から京のほとゝぎす

荆口尋られしに

名月の前へ廻るや旅まくら

賀二助然于山彦撰集一

月花やよきこたへある里の山

浪化上人發句集

浪化上人發句集序

麗水のこがね崑岡の玉、璪る人・治る人を待て始て寶とやなる。たゞに此二つのみならず、人にしてそのことの葉の善き聞人を得て世にあらはる。大和・から國の長き短に、うたの品、ことの葉のかはる數々、有磯海の中より玉をひろひ、こがねを集めて世に傳えんと也。いと〳〵ゆかし。浪化上人は、予大谷十あまり四世の御門主淳寧院の君の季の御子なり。越の中國井波の御園にまし〳〵て、法のをしへの言の葉の餘り、月花にふれ山水にめでたまひ、技折句々の數々、ありそ海・後の有磯海など、世の人々の口に傳えうつしえしを、この頃越の人野鶴ぬし、ひろく上人の言の葉を集め、あづさにせむと遠く都に來まして、卷の首にふみせよとあるより、日を重ね月を踰てあまた度見るに、こは璪る人・治る人の寶を世に傳ふるにひとしく、百とせあまり後の世に聞人を得て、こと葉の顯るゝを喜て、はるかに上人を弔ひてしかいふ。

慶應紀元丑七月

大谷坊官下問(間カ)民部卿法眼源頼世誌

序

應眞院浪化上人は、御門主一如大僧正の御連枝にして、越中井波瑞泉寺に住し給ふ。一とせ在京の折、去來紹介して、嵯峨落柿舍にて芭蕉翁の門に入らせ給へるより、風雅に富給ふ事、實北方俳諧の雄師なり。かくて元祿十六年十月九日、御年三十二歳にて遷化し給へり。應々山人、休々山人、自遺堂の數號あり。傳の委きは霜の光・和漢文操等に詳也。今上人句集を編輯するに、

名月集　有磯海　礪波山　玉まつり
そこの花　續有磯海　霜の光　白扇集
墨流し　今日の昔　放鳥集　白陀羅尼
桃盜人　東西夜話　泊船集　金比羅會
北の箱(山カ)　笈日記　韻塞　射水川
旭川　梅の牛　本朝文鑑　和漢文操
風俗文選　旅袋　喪の名殘　三物拾遺
俳諧反古　柿表紙　菊の道　續別座敷
風尾集　名所小鏡　類題發句集　古選
月令博物筌　去來評句合
上人自筆日記 四卷
同俳諧文章 二卷　井波弄兮子　北英陸平所藏

これらの書について抄出して類題に編さいへども、もれたるもなほ多かるべし。おのれが見ざる書はいかゞはせむ。文章中の

句は句集につられず。又てにをはの諸書に異なるは、てらし合てそのよろしとおもふかたを擧て、一部の書さはなしぬ。

野 鶴 識

浪化上人發句集

越中 半雪居野鶴輯

秣園蓼芽校

春之部

梟もたちのく花の夜明かな

糠星もうへにくづるゝ花の空

一本をくるり〳〵と花見かな

肩くまの猿も花見の日和哉

あた暮のもどる明さや花のうへ

後はりに曇を花のちからかな

文詞

古文よむ人も一日花に蝶

いそがしい機てよう寢るや花の蝶

歸院

馬おりやいざ先花に旅衣

夕里が亡妻をいたむ。

こたへたる花にも泣か二七日

十日は老尼が忌日はじめなれば

花鳥の古びぬうちよ初月忌

京にのぼり侍かへるさの次手、那谷に詣でける。彼境は山淺してしかも俗をはなれ、岩ほのかたちげにたゞならぬ處也。かたへの櫻はやゝ散のこりて、春をゝしむ吟客たゞに過さん折かは。その時しも近きあたりの風雅人と見えて、ひとりふたり徘徊しけるが、予を見つけてあいさつのほ句送らる。行春を駕にとりつく男女かな　彌千、その日しも三月盡也ける。予もほ句して送る。

けふきりの花さへ樽のかゞみかな

今年安居の道場に、彌生十日のころ、おもひ立て彼是具して詣侍に、例の風情にさそはれて、堂の東南に席をまうけ、やゝ日の暮しもわすれて嘯きたるに、折から花の空の曇がちなるも、春のけしきの無下に晴やかならんよりはと、いと興ある事にいひなりしが、霞の八重に黒み立て、さて雨のふりけるが、近き里人のとみに迎へ出たるぞうれしき。かの雨によるといひけんうたの心にはあられど、蓑といふものを身にまとはされて、いとゞあぶなげに馬の上に送らる。

身におくも心のみのや花の雨

花咲て目白の旅や廿日ほど

冷汁にふたをつけたる櫻かな

餞別會

朝立の目に有明と櫻かな

なら漬の根本とはん八重櫻

野亭　題梅

きのふけふ風のかはきやうめの花

出てゐるや梅のつぼみに三日の月

山畑のうめ苔行茶の古び

蓑の毛に雪のけしきや梅の花

卓散(たくさん)についてもたらずうめの花

うめが香や風呂屋の道の一たより

柳鶯梅

引馬のたえぬや梅の築地陰

巓梅

根くばりや片尻かけてみねの梅

初會　二句

月雪の場とりも廣しうめの花

初の字の梅にはのらぬ月夜哉

寒ン丈の寒さもうめの二月かな

蕗のめやうめを尋る一つゞき

白梅や星なき雪のうは曇

林紅亭興行

紅梅のやがてといふて日數かな

紅梅の畫賛に

うぐひすに墨のひなたやうめの花

くりからの峠こゆるとて

梅が香にくらさもまじる山路哉

十八日は此君庵にまねかれて、終日風雅の高情をつくす。

うぐひすの爪にもかけずうめの花

正月廿四日、けふは都につく日なる。先は湖南の義仲寺に立より、古翁の廟前に跪く。九とせの春と立めぐりて、塚の草青々たり。むかし圓覺寺大巓和尚の迁化に、師のおくり給へる芳吟にすがりて、今もその句をしたふほどに、

梅とひてその梅おがむなみだ哉

かしこに無名庵はなつかしき草の戸なり。今もすたれず、ゐます時の心地に侍り。きのふの暮まで惟然坊の住て侍りしが、誰か風狂にさそはれて、いづちともなく行けるよし。垣れに梅の花の咲殘て、

うめが香やひる盜人の去（いん）だあと

廿三日は森氏の五老井を訪ふ。かれてよりそのあないありて、許子は先夜より此亭に出むかふ。賓主四人ことさらに雅興のみ。半歌仙別錄にあり。

顏あらふ流やうけてうめの花

路健子が祖父二十五回忌懷舊

指折て五度やむかしの梅の花

元祿壬申の冬十月廿五日の朝、夢想を見る事あり。其日しも聖廟の諱日、かつ梅の花の句也。かゝるめでたき夢想捨おくべきにあらずと、卽わき（脇）仕りて、ことし二月廿五日開席に及ぶ處、

かれこれさしあふて、漸十月廿五日に企會。

折ほどは折おほせたりうめの花
　柳の間をわたるはし音

初會

初春のおちつくかたや梅柳

金澤留別

梅に行柳はあとにこゝろかな
人ごみの中へしだるゝ柳かな
青空の底といふべき柳かな

久しくあはざりける大聖寺の人々
に對して

如月のこゝろもとけて柳かな
さかなやがはひつた門は柳かな
菜畑や境てりあふもゝの花

福光の柳士、まれに松扉をたゝく
にこたふ。

笠ぬぎて桃にまけり(本ノマヽ)はうらの門

歸與

杖すてゝちかづき顏や桃櫻

荻人亭

花鳥の空に目のつく椿かな

藥王寺にて

鴨の觜いるゝつばきかな

其繼がおさなき娘に、重〳〵はなれて、愁にし
づみゐるをとぶらひて言遣す。

いちどきに涙も落る椿かな

集鷄堂のぬし、年の初にめでたき子さへまうけ
ゝるをことぶきて、

末廣にのする産衣や玉椿
龍頭まで雨にしほるや梨の花

きのふは藤の花見んと人々に促され、終日の興
にて侍りける。今日は引かへたる雨の淋しさの
まゝ、連中の中へ申遣し侍る。

だん〳〵に藤の雫や持つたへ
宵の氣をすてゝ起るや花の春
心ンうりは撰屑ひろふ子の日かな
曳松や山よりおこすうしのつて
　つはたの宿をはなれて

七草も過て赤菜の寒かな
うす鹽の鴨に薺の雫かな
庖丁に袂もぬるゝ薺かな
板前に行燈のころわかな哉
うぐひすと畑で出あふ若な哉
春もはや一畝うつろふ大根花
たね痳やぐるりにうつるやけ畑
すゞ懸を誰野にすてゝ猿いばら
山吹やよく／＼下は水のおと
うぐひすに朝日さす也竹格子
うぐひすの柳にそまる小雨哉
うぐひすの啼やくまなき大座敷
鶯や屋敷づたひの竹の風
うぐひすの年の關こす花心

呂風亭

うぐひすや谷のこゝろで藏の間

例の峠をこゆるとて

くりからの鶯ふかし谷のつて

夜深うして旅立ける時

鷄やまだうぐひすは夜中藪

山行

坂過て下りづめなり啼雲雀
やせ骨を出して雲雀の日和かな
囀もかへりがけなる小鳥かな
四十雀地にさひづるや麥の節
夜通しに何を歸鴈のいそぎかな

今年は洛の本廟に詣て、つとむべき事の侍れば、二月の末に旅立とて、

朝立や鳥見かへれば雲に入

越中庄の川、源飛驒の山中より出づ。幾谷の岩間をくゞりて漲る流、奔箭のごとし。そのほとりに雄神の叢祠あり。庄川は庄の在處ある故也。然ば雄神川なるべし。夫木集第二十四に俊頼卿の歌あり。暮春の一日こゝに遊びて、各かがみ川の句を探。

奥ふかに巣鷹の鳴や雄神川

路健子の妹におくるゝを悼て

若草の夢かとのみぞ春の雪

うぐひすの雫となるや春の雪

うぐひすの尾でくるはすや春の雪

其繼が娘の追善に

この春をなぶりおさめや雪佛

栗殻は減路の切處なれば、人馬困り、

朝霞峠をこゆる馬の息

三月十二日、義仲寺古翁の墓にまうでゝ、

かげろふや苺(こけ)につきそふ墓めぐり

出霞のつゝみおほせぬ初日かな

櫟に筆こゝろみんうら表

はせを翁百ヶ日

けふ晩や正月させてふぢごろも

うめにまた鶯もどる涅槃かな

つけかうて鶯もどすねはんかな

巴兮が老父をいたむ。

長々としてたよりなき春日かな

閏三月

三月に蚊の聲まじる閏かな

夕日はや春のおしさや畳丈

蝶蜂の春をかゝゆる日の下り

鷄のとまり時なり春をしき

空もうらゝに晴て、朝日の山の端をのつとさし出るより、すき返したる田づらのくまもなく見わたされたる、まことに目出度豊年を祝して、

萬倍のことはじめなり墾田(アラキバリ)

夏之部

郭公雨のかしらを啼て來る

ほとゝぎす山田の水にいろがつく

ほとゝぎす二聲かゝる一枚田

子規尻に聞せて飛脚かな

山伏の山は山ほとゝぎすかな

句空法師が山寺に來りけるをとゞめて

豆腐こそなのらね山はほとゝぎす

四月十三日、庄の村の下、雄神川の流を、舟にて芹谷まで下る。行程二里。舟中の吟。

艫に舳に聞人せんぎや郭公

松の葉をつめたう握るほたるかな
首立て鵜のむれのほる早瀨哉
鵜のいろの照りにてりたる川原かな
中喰に鵜飼のもどる夜半かな
畝豆の二葉に見ゆる水鷄かな
さひづりも略して夏の小鳥かな
梁打や罪の淵瀨をしらぬ人

十二日に人の招に應じて、高岡におもむく。彼境は古き名處遠からず。國守の舊壘今も堅固の要害たり。こゝかしこ徘廻しめぐり、眺望に富り。なほ蕉翁の流に志す輩も少からず。彼是風雅なつかしき地なり。

高岡大守の靈廟

松杉にせりこむ聲や夏の鳥

同古廓の感情

升がたもみだれぬ草の茂かな
疱瘡する兒もみえけり麥の秋
ひと通り小麥の秋の半かな
穗に出て夏をつくろふ田麥哉

洛の方山を宿して

新麥をたばねてわたすまくらかな

夏かけて藤の咲みだれたるに、即興望まれ、折ふし季は過侍れども、

半日は曇てもゐるふぢの花
燕子花咲や日照りの朝曇
あたゝかなものゝ咲けりすろの花
欄に夏うぐひすや蛛鳥啼

全匙醫法躰の賀

すんずりと古葉落して松の形

夢想

夏山を手にゝぎらるゝ新樹哉

蟬聞がてら腰かくる松

卯月十八日水闌子が七年にあたれり。日頃すけろ風雅の友達、なの〳〵白遣室に懷舊の情をさゝむ。

この櫻むかし好たるわかばかな
わたり猪の竹の子につく山家哉
竹の子や道のふさがる客湯殿

うちぬきにわか竹藪の月夜哉

ゆがむより竹と見えたる生立かな

白沙やしよろりとはえし今年竹

白鷺の羽ずりに動く早苗かな

うちわたすおちかた人にものまうす、それその
そこに白くさけるは、何の花ぞも

夕がほや半時のかねに日の返し

東華坊が母の一周忌をとぶらふ。

ひるがほの袖もなほひずなみだ哉

草無しにおなじ顔なる小松かな

水無月の末、暑さ忍びかねし折、
二三子に訪れて

すゞしさの水からはづむ眞瓜かな

旅人のまくらに瓜のにほひかな

松風にほそみの出る四月かな

膳廻り青みの見ゆる卯月かな

卯月來て天氣にまける雲雀哉

みじか夜を寝あまるくせに宵寝哉

八疊に爐疊青し更衣

飛で見て蝶にくらべむ更衣

手つだひの肌ぬき寒し佛生會

生れ子は佛も赤きつゝじかな

端午

實盛と年はえをさす甲かな

遲麥の端午へかゝるみだれかな

山ありて舟橋ありて五月雨

二三日蚊帳のにほひや五月雨

四月の中頃、和久・嵐青の老母にはなれて、う
ちなげきゐるをとぶらひて、行道はすゞしき方
なれど、殘るくやみのほどをとぶらひて、和久・
嵐青の二子へ申遣す。二句

蚊屋ごしに寝すがた見えぬ歎哉

靈膳に新茶そゆるやひとつまみ

山肌の底のうつりや青嵐

青雲に底のしれざる暑かな

嵐青が老父追悼

目もくれてなみだもゐつく暑かな

松の木のあはひや暑き山の兀

薄柿のにほひもかろし麻頭巾
ひとりでに風まきかへす簟(たかむしろ)

京にて

汗水になりてをしあふすゞみかな

旅立人を里外まで送りて

わかれ場や川の處で朝すゞみ
松苗をほねにそよめく夏野哉
變化(へんげ)ゆく雲や一夜の秋近し

その射水川は、萬葉のすがたに流て、むかしのあともなつかしければ、此度集の名となすべきよし、文通に聞えたれば、

集の名の寢覺もすゞし射水川

秋之部

青鷺の番わたるやけふの月
名月や露を蹴させに夜の駒
めい月や魚のはたらく水の音
名月や土手のはづれのなびき藪
めい月の眼にちいさしや草の花
名月や袷着て來る中戻り
めい月やはら〳〵鷄の俄客

金澤の旅坊の荒たる境内を打めぐりて

名月に屋敷となりの囃子かな
めい月や夜着に迯こむ雨の音
麻がらを踏をる脊戸の月見哉

淨蓮社に遊ぶ。

見舞〳〵は料理に暑き月見哉
初月夜木の間出來る座敷かな

祝兒形

祝ふけふ七日の月の兒びたひ
十六夜やおそう出て來る門の人
神妙や松の中より出る月

八月十七日安居寺に詣て、誠に大士の應變をおもふ。

どの月も寒さはおなじ秋のいろ

名月は例の淨蓮社にて雨降ければ

傘さしてまゐりめきけり寺の月

かし舟や月に主まつ宵のほど

方山生、なほ越路の海見んと、文
月十一日井波をたつ。餞別

月にゆけ有磯の小貝奈呉わたり

高岡別院

盃に隈とる客やのちの月

むら雨を相手に后の月見かな

八朔と節句をそへて月二夜

朝がほの花や惣ねに雨の後

山深し薬にもれて咲桔梗

病中

雨さらに風負ふ萩のねなりかな

萩の戸やしばし遠慮の翁丸

文月十六日の風涼しく、高岡のかたに東花坊を
おくる。かつて都の別よりは、殘りて淋しき我
をいかに、

行先も寝やすきかたぞ萩と月

はせを翁、當國の行脚もしらず。やゝほどをへ
て其句をまうけたる人をしたふ。

早稲の香や有磯めぐりの杖のあと

相伴の早稲に苅らるゝ稗田哉

稲むしろ近江の國のひろさかな

神鳴の末野は遠し花すゝき

見る人の眼も細うなるすゝき哉

高岡瑞龍寺のほとりにて

鶏頭のゆるぐや雁のたつ畑

汐風にもめてもそばの白さかな

しのぶ草宙にふらりの姿かな

打擢に泥をかけゝり蘆の花

山行

山水に薬の花のにほひかな

茴香に浮世をおもふ山路かな

はれ／＼と鶏うたひけり菊の中

霜をまつ菊も暮あふ九日かな

菊ひらけ八日の月の片なりに

病後

覗きあふ菊のつぼみの底のいろ

重陽

濱菊の眞向に祝ふ朝日かな

間引菜の隣は菊のにほひ哉

菊蘭や開そろへて黄なが勝

寒菊は咲かほもせぬ九日かな

菊の十日なるべし。楊弓のあそびにあるじまうけせしに、おの〳〵いどみあらそひ、松梅櫻などの聲々にのゝしりわたる。折にふれたる物の名のおかしかりければ、

人數にゝほひをわけよけふの菊

菊の香に風爐すさまじき數奇屋哉

風爐釜の肩まで菊の雫かな

留別

兩方へ手開く栗のわかれかな

鳥にまづ色をそへたる野山かな

祖父ばゞの白髮めでたし虫の聲

伏木の浦にて

松むしや磯山かげを暮廻す

此日は高きに登る日也と、二三子を誘て八乙女

山にのぼり、かつ風穴にいたる。その所は多くの坂を過て、平らかなる處あり。そのあたりみな小笹生茂て道も見えず。又少うづ高き所あり。その腹についたる横穴なり。口は方にして少長みあり。うちは苔むして、岩もてたゝみたるやうに見え侍る。常に濕氣をふくめり。又鷄塚とて形は一里塚ほどにして、二つ相むかへり。處の者の云、この塚元日の朝は鷄の聲すと云傳へたり。いかなる事にやゆゑをしらず。

鷄塚に耳あてゝ聞いとゞかな

夕風の引すてを啼うづらかな

駒の口ひかへ〳〵てうづらかな

高岡におもむく途中

寢處に日のさす栗のうづらかな

社日を待て歸る燕も、また秋風にわたり來る鴈も、おなじ旅況の心ならずやと、寄轍士。

來る鴈にかへる燕も今一足

鶍わたる空や寺子の起時分

庄村光教寺に遊ぶ。

矢山川の奇勝を尋ぬるは、必跋渉の勞をいとは

す。佳境に遊ばんさ也。庄の村や山淺うして人家めぐり、長流斜に帶たり。寺は翠微に入とや、檐間近く色鳥の聲おもしろく、うしろよりすぐに山に遊。

ひよどりも遊び仕事の山路哉
水玉に鱸をしるや淵のいろ
それ〴〵にかたつき顔や蛇の穴

七夕前夜　三句

かさゝぎのふみかへさじと天の川
前の夜に見ておくほしのそなへ哉
逢坂のこなたや星のかゞみ山

同後朝　二句

雲いきのしまらぬほしの明る朝
きぬ〴〵や光かくるゝ星のかげ

哀雨星

一僕を雨に流すな天の川

馳走

七夕や大かた出たる今年もの
かさゝぎや尾上の杉を橋柱

一年の爪髮するかほしの馬
秋立や鷹のとや毛のさし殘り
あきたつといへばやけさは瓜の皺
手近なる秋見に出るや瓜ばたけ
冷々と小路へはひる殘暑かな
稻妻や手拭懸のはづれより

悼風國

いなづまに筆を投たるたより哉

盆會

秋もまた切籠の四手の凉みかな

悼野童

されば此なのこは、先師死後のはり笠を廟前に備て、蕉門のなつかしき名なりしを、なくてぞことさらに戀しき人なりける。

その笠にその身の秋の旅寢かな
魂まつりことに女の從弟どし

麗山氏燈円喪姒

月しろと雲にぬかりし花火哉
寢た顔でゐるやをどりの明る朝

人丸讃
うすくまはその朝霧か筆のつや

馬宿にすそ湯わかすや霧も立

京笠はみな駒曳のもどりなり

板敷は冷しくなるはじめかな

伏木の浦は奈呉の入江につゞきて、北のかたは有磯の濱ちかし。此處よりすべてありそ海といふなるべし。先師の早稲の香も今更句さゞまりて、

秋の風有磯へくばるこゝろかな

秋風の吹ぬく舟の世帯かな

日和ようなるとて夜の野分かな

京を出る時、人々に日の岡にわかれて

ふんばりて峠をこゆる野分かな

丸おきに夜寒おぼゆる戸口かな

瀨の音の二三度かはる夜寒哉

呂風亭
常盤木で秋深うする小庭かな

長月五日六日の頃より、わらはやみのごさくなるものにふして、藥ちさたうべ侍る。七日の頃はすこし心よかりければ、

秋深しひるも馴たる小夜着哉

秋もはやあたま入たるしぐれかな

行秋を身にしたがふや夜着ぶとん

行秋に籔ある家のあらしかな

冬之部

夜の雪晴て籔木の光かな

西行も雪の降夜は茶飯哉

六つ過の雪のくらみや本ンの明

有明と氣のつく雪の明さかな

大雪や隣の起る聞あはせ

嵐青が母にひさしき尼の終焉に
入跡の光や雪の宵月夜

夕子雅僧が三回忌懷舊
有し世の繼木は雪を持通し

雪雲の引のき際をあられかな

賑やかに菊は咲けり初しぐれ
居つゞけの鳥もわたるや初しぐれ

病中　二句

夜着ふとん有のまゝなり初しぐれ
たて横と屛風にくれて時雨かな
有明やしぐれ待とる杉のうへ
雪雲は愛宕にたはふしぐれ哉
牛馬のくさゝもなくてしぐれかな

芭蕉翁追悼

かなしさやしぐれに染る墓の文字

同一周忌

おもひ出す空の機嫌もしぐれ月

はせを翁忌　三句

一日は塚の伽するしぐれかな
かしこまる後も壁のしぐれかな
いひ出すもけふの佛の寒かな
御座綿や寒き茶の間の吹通し
水風呂の上ざめしたる寒さかな
松竹やおなじ寒さにおなじ色
染ものゝ中ゆふわりの氷かな

はせを翁三回忌　二句

羽氷る蝶もかなしき其日かな
口切もけふに成たる茶湯かな
木がらしやあげろ（上野）の山の宙を飛
極樂はいつも月夜に十夜かな
開山忌となりは留主のいなり山
鉢たゝきまはりあはせや上手づれ
御火燒に元服するや鍛冶の弟子
臘八や夜着の中から聞あらし
佛名や屛風見くらす小僧かな
茶の花や鶯の子の鳴ならひ
茶の花の皺ものしたり小六月
茶の花やいつを盛といふけしき
久々で野に出る馬や大根引

林紅亭

柊の花のこぼれや四十雀

賀呂風新家

かけものや水僊のぼる花のかけ

賀路健新家

薄壁の手近に探れ梅の花

年内立春

早梅の春にかたつくさかりかな

節分

片尻は春へかけたりうめの花

林紅法師が例のればりも、師走の空のさぎるゝかたになかしく、ある日此句を書て遣しける。

油氣の雪にとれてやうめの花

火をつゝむ藥の明りやあじろ守

鈴の音に雲をあてめの鷹野哉

裝束は黑にきはまる鷹野かな

はせを翁四十九回忌

なき跡も手にはたまれよちから草

雪かこひするやいなやにみそさゞい

八疊のすみに目をもつ巨燵かな

朝夕にとりまはしよき火桶かな

埋火や障子より來る夜の明り

夕兆亭新舊

桶とりてなじむたよりや冬座敷

筭用に猫もはひるや冬ごもり

飯臺に鼠のあがく冬の月

のら猫の聲もつきなや寒の內

三日月の入もたしなき師走かな

賣鴨の毛も撫つくす師走哉

節季候や夕日につゞく袋持

この句は夢中に句作り侍る。

雲井にも菜食の嗅や年忘れ

はしこかす屛風のうちやとしわすれ

下積の蜜柑ちひさし年の暮

待春や机に揃ふ書の小口

浪化上人文之部

司晨樓記

ことし仲秋の月はれて、蒼天いさゝかの曇なし。誠に風騷の徒いたづらに過すべき宵かはと、酒たづさへて此樓にのぼれば、四望いよ〳〵ほがらかに、清光あまねく山川をてらす。古堂はもとより物ふりて、杉のはるかに松のさびしさ、ゑがくともいかで此幽微を寫さん。されば此樓上に一鼓ありて一日三時の聲にしたがふ。彼もろこしの諫鼓は一君の耳をおどろかし、此樓上の太鼓は衆生の夢をさます。彼は世の中にいさめられ、我は世の爲にあそぶならし。今宵は此太鼓を鳴らして、無風雅の人の耳をおどろかさむには。あが佛もてあそびたりとはにくみ給はじをと、たはぶるゝ人も又をかし。樓上に頭をめぐらせば、西は栗殼の梢につらなり、礪波山・卯の花山など八乙女山の後にたてり。折から秋の色々に夜のにしきも又さら也。樓の四壁には色紙あり短尺ありて、或は詩あり或は歌あり、連歌誹諧もその人の心にしたがひて、麒麟閣上の名をとゞめむとにはあらず。たゞ自己の目をよろこばしむるのみ。しからば辻堂の樂書に似て、水戸岩城の作者もなからざらんやと、月のために此樓を賞し、亦かつ司晨の二字をとゞめて、今生後世の便あらば、婆娑寂光のあそびをなすべきと也。

樓上眺望

花鳥に最そつとちかし樓のうへ

ひとりでに風卷かへすたかむしろ

名月や筵をうつす檐の牙

初雪や形さま〳〵の煙出し

觀櫻記行 （元祿十年三月十六日—翠補）

山寺の櫻を見んと例の好もの催し出るは三月十六日なり。朝とくより空晴きり、連日の雨の名殘もなくいとうらゝか也。□（蕊）庄の村々山淺くしてしかも廛里の閧閙なし。前には大河を帶て、折から四山の雪汁ひとつに落あひ水かさまされり。兩岸の山は屛風をたてたるやうにたち、松の翠水に映じて、山色水光一時の壯觀盡さずといふ事なし。されば世に山川を尋る人は千里の跋涉に勞と。こ

れは纔に行程一里ばかりの□(空)に山あり川有。征人のしば〱行かふ野の色は青みわたり、しばらく旅行の心地ぞする。渡しの舟の綱を投て向の岸なる舟待人の綱先を取てたぐりよせ、やがてうち乘。こなたの人も又かくのごとし。此川は飛驒の山中より出て、幾谷のするどき岩角を潜りて、瀨のはやき事矢をつくるごとし。川上は猶山嶮う谷深うして、船筏のたぐひ通ふべきにあらず。或は兩方の岸よりさし出たる岩はなに七橋をわたし、又は名にあふ籠の渡り危處々多し。されば此川を通じて庄河と名づく、庄の村あれば成べし。此里の神祠を雄神といふ。されば夫木集卷廿四に、

おかみ川ね白高かやふみしだき
　とるあしつきも君か爲とぞ

俊賴卿のよみ給ひけん。越中の名所也と。しかれば雄神川なるべし。庄河は俗にいふ也けり。いとめづらしき名所也。かゝる佳境に經行すること誠に所得たり。かつ花を尋ぬる興、春をゝしむの情、彼是風雅の徒空しく過さんは、殺風景の人といふ成べし。しかれば道すがらの言種、詩韵・俳句、矢たての筆にまかす。しめのゝ原を過て、

落雲雀一鍬おこす畠の先　浪化
あつちらへ鵆のきほふ山路かな　林紅

金屋の里は家居たち並び、樹竹あひかこみたり。

家としのはさみ出したる櫻かな　化
四ッ鷄にひるのおぼろや風の筋

かの寺前の櫻はことにおそく、やゝ散返る頃咲揃ふなれば、花したふ心のあまりは、先たづぬべき所也。その木のもとは一周に滿、根より二尺ばかりゆきて二俣に、枝は四方に布て十間にあまれり。花は間もなくひしと咲こぼれ、たゞ一木にてそこら覆ひ滿たり。うちつゞきし雨に綻び、風の折〱ちりかふさま雪にまがふ。おの〱おそ櫻と題をすゑて、

分別の親仁の番やおそざくら　嵐青
湯戻りの又二三日や遲櫻　山紫
道すがら心ひまありおそざくら　全之
おそ櫻かるはづみなる出合かな　林紅
十二羽の雉子の子供や遲櫻　浪化

山寺見落花

春晩舊坊倚翠譜　滿谿櫻雪自堪乾
曾聞往昔布金處　忽爲落花無地看

古寺春興

永き日や太鼓のうらの虻の音　化

附録

行春や鯛のさかりを待あはせ　呂風
行春のあとに寢てゐる酒の醉　嵐青
蝶そうて藤は殘れり春わすれ　路健
行春や杉原作る長門船　化
指折の櫻を花の終りかな　化

跋

一歳之勝景在三春、三春之佳遊有一日、豈空過此節乎。偶得休暇之日卒爲殘春尋花之行。彼寺也倚翠微而花木自深矣。門下臨長河之急流、最山川之秀所鍾也。此則寺前之概觀也、日更風靜禽語繞檐花影上壁。誠是誹情之精微詩腸之鼓吹也。誰舍此幽趣乎。且行路之作席上之吟從得馳禿筆、其加行記輯而爲一小冊。尤無好句、然非無微情奥衷之託意處、又幸得者俊頼之詠也。因漫記其事。元祿有疆圉赤奮若三月哉生魄之日、灑筆於白遺堂之燈下。

休々山人書

續有磯海序

公任の大納言は、みやこ北山の谷にこもりていくばくの思ひをめぐらし、和漢朗詠集をえらむで、唐人の興ある情、和國は猗才ふかき文人・歌仙の詩歌を集め給ひける。今もそのところを朗詠谷と云へるとかや。まことに至情虛ならざる風雅と羨しく祟し。されば故芭蕉翁も折ふしの言わざにも、彼集の部立の面白きなど沙汰侍りしと、日ごろ去來が語りけるに耳とゞめて、今年有磯の後集撰ばんと思ひたつより、かの卿の集に倣はん事を據とし侍りける。當時みだりに蕉門の徒と名乘やから、國々にあまねく所々にみてり。されども正しく其直示を得たるものすくなし。伊陽は翁の故國、東武は舊縁の地なり。湖南また折々に瘦節を休めたまひしゆかりにして、彼ほとりの諸生は今にも亡師の遺風をさまさず、なつかしき事のみ多し。これらに會談を欲すれども、彼はゝるかに東南の

地を隔てゝ、我は又邊塞の境にあり。折ふしの便さへ心にまかせず。たゞ山遠水長の歎を增のみ也。されども時々の文通に聞えわたる佳句の無下に紙魚の栖に成果むはロおしく、かつ師におくれて其俤を歎きしたふ者どもの作をも拾ひあつめて、續有磯海と名付侍る物ならし。

元祿戊寅抄秋廿三日

翁塚記

元祿庚辰のとしの春都にのほりて、はからざる事に水無月半までありしに、すでに秋ちかき風の音におどろきて越路の方に歸らんとす。道のつてよろしく粟津の義仲寺に詣て、故翁の廟前に跪て、つく／＼生前の事をおもふに、まのあたり遠からで、なつかしかりし年月もはや七年の秋に立變て、魂まつる頃は我住里に其魂を招かむ。されば此塚の木葉だに其ゆかり淺からねば、基下の小石を拾ひ取來て、かねて此塚を築かむ事をおもふ。こゝに一宇の淨蓮社のあり。その所は人家遠からねど、松杉の木立深く、俗をへだてゝおのづから世の間聲をきかず。竹茂り水流て清閑その境を得たりといふべし。此寺の傍に地をえらぶに、林紅がともがら心ざしまめやかに、庵主もともに鍬をとりて三尺の方墳をまねび、かの小石を壺中に貯へたれば、神靈の契りもこゝに金石ならむと也。予かつて京師在留の中に、かねて師門の高弟其處々の一順をこふて、十月十二日には十百の韵を滿て、此度の手向とおもひ侍れば、遠近文通に合信して已に一順を得る事にぞありける。其月其日は殊に加賀・越中の門人を催し志を遂侍るに、今この墓前におの／＼手向の句をぞならべ侍る。

土芳・去來・諷竹・李由・杉風・露川・丈草・荊口・万子等の句は略。

七度や心を灰に夜の霜　浪化

すでに今年も文月十二日、折から魂まつりの頃なりしが、東花坊支考こゝに旅ねして、此時にあへることを悦び、無縫塔を造立す。時に芭蕉翁の三字をこの法師の記念にとゞめしめて、此塚の不朽に殘し侍る。我きけり、樹石みな神あり。ましてよ是はまたき（全）石なりければ、いかで其靈その憐みなからん。しかれば師翁の神こゝにいまさゞらむや。これよりこのかた我翁の流れを慕はむ輩は、此塚

に詣して、深く風雅のまことをもとむべきもの也。此頃粟津の骨丈草、國々の翁の塚を記して、其文をとゞめ申さるゝよし、くはしくはそのたかにゆづりて、此翁塚の次第のみみづから記し侍るもの也。

元祿十四年巳初秋日

七月十二日廟參

おもかげの尾花は白し翁塚　浪化

みそはぎのけしきばかりぞ墓まゐり　路健

帷子となみだ新たらしはかまゐり　林紅

さゞ波や井波にかはる墓參　支考

新築芭蕉翁之塚文

ことしは芭蕉翁七回の忌年に當りて、文月十二日魂祭。折からの月かげもすごふ籔木をもれて、實の入る風の音も萩の友ずれにたぐへて、かた／＼聞過しがたき夕なり。爰に蘭若あり。淨蓮社といひて淨土の一流を傳へ、不斷念佛の道場也。其所は人里に遠からず、樹木少し隔て、しかも俗をはなれり。さあれば竹茂り水流れて、清閑おのづから境を得たり。日頃風狂の輩往かよひて、吟花嘯月の雅筵おこたることなし。かねて此寺に翁の墳墓を築かむ事をつぶやき侍。林紅子まめやかに志を抽て庵主とその基地をえらび、手づから土石を運びて方三尺の一基を經營す。中には義仲寺故翁の碑下の小石三片を收む。我聞、樹石みなその神あり、ましていはんやこれはそのまたき塚の石なり、何ぞ靈なからむ。しかれば翁の神いますがごとし。これより已來此翁の流を慕む輩は、かならず此塚の前にて風雅の至誠を求むべき者也。此塚なりて後そこの花の撰もとけつるに、壬午の冬の頃士芳等が文のおとづれに、故翁肉縁たる也寥法師の厚志によりて黒髮をおくれり。速に墳墓をひらき、敬謹てまた收む。寥法師が文も淺からざるものなれば、俱に石中の物となしつるのみ。

しつらひは旅のやうなり魂まつり

元祿壬午之初冬

祭　文

予が近隣に好事の者二三ありて此二歌仙を携來、こゝの翁塚に詣して、文月十二日の玉祭せんとぞいへりける。

時に淨蓮社に一會を催して、ともに往昔の翁をおしむに鍾哀の情にたえずして、これを緘して笠塚のぬし李由のもとに贈る。されば此翁の魂、むつなゝつもありといふにあらず、月のかげの水に隨へるか、淸きは玉の羅籠にあるがごとく、濁れば蓮の泥中に薫へるが如し。我此山里の淋しさも、すまであはれはしらん物かはと、すでに二とせの秋を過し給へり。ことしは湖水の秋もめづらしう、かの比良の初霜も見給へかしと、送火のかげに此わかれをぞおしみける。

から紙の外は浮世ぞ魂まつり

名小坊主說

汝は滿足か、汝が性のにぶき事は飴を刷て、小刀にして瓜の皮をむくがごとし。されどあまき物をもてあまき物をむかば、自然にむける道理もあらんか。このゆゑに汝をつかふ事は、狙公が猿を養ふにことならず。茶を汲すれば冬の夜を汲あかし、箒をとれば春の日を掃くらすよしは、竹田が人形ならんにも、土計のかぎりはあるにこそ。さりや汝が顏の漫々として、湯とも粥ともわかれざれば、その鈍きを躰となし、その靜なるを用とせる唐子面も、こゝにおいて生を養とはいふなるべし。ことしは東花坊に讃せられて自慢の慢の鼻や高き、錫頭の錫の光やはなてる。但は滿足の二字をもて汝が顏の萬福を稱せば、汝が心は是を滿足なるべし。

秋風に吹れ次第の糸瓜かな

俳諧發願文

人死して六道に生れ、からき目見むは、ひとへに娑婆の業因によれりけるとかや。世に立花好人は、たてゝはくづし、崩しては又たて、終日大汗をながし、葭のさきに枇杷の葉つけて馬の耳のおもひをなし、屈曲を好みて鐵釘に打つけ、針がねにしばりかゞめて、見るめもくるしかるべし。わづか五寸の瓶に千山萬水のおもひをこめむも、猶々氣づまりならんかし。若立花せむとならば、曾根の松を心に立て、ながしに淸見寺の梅ならば、少は心のびやかなる風情もあるべし。されど一時の榮花も盡きて、まづ椿ころりと落ちて無常をしめし、木槿一日の榮をさとりて、ほどなくしほる例の心みじかきにや。やがてぬき捨、

果は煙と立のぼる。それさへあるを、碁うつ人は、赤目引つり喰物時をわすれ、終夜おなじ事ならべたらんは、飽ずやあらん。よき手・あしき手とて一座うちこぞり、案じふくれ、碁石のかぎり蒔盡す時、何のをしげもなく打くづしたるは、さりとは殘多き事なるべし。さしも手間入て案じたらんは、せめて五日十日もながめよかし。此人死たらん後は、かならずさゐの川原に生れて、父母子供に立まじはり、地藏おぼさつの御衣の下にかくれ、あけくれおなじ事すらんも又あはれなるべし。若一枝さして諸佛に奉り、一日投てはあみだぶ唱へたらん人は、うたがひなく西方に生れて、百味の外の飲食には、なら茶麥切は喰次第たるべし。今吾誹諧の結緣は狂言綺語のふるみにおとし、百員千句の數を合せて、一座の廻向はあみだぶ〳〵と申て仕舞侍りける。

賡常永戒光和尙上日香語之芳韻

東風今日地天改　依舊物華返本來
一箇老禪若相問　檐頭笑指雪間梅

卒步白省子迎月酌酒之韻礎

雲頭吐月曾無塵　更酌酒甌正對賓
席上題詩幾所筆　粹然語志慰吟身

附録

春之部

おし出した春のすがたやうめ柳　京 芹舎
うらゝかやふくる雀も窓近き　淡節
雪折の音の下よりはつがらす　升悉
芹摘や螢名高き藪根川　文海
うぐひすや鈴なき宮の朝清め　波同
越て來た山は日暮て春の風　春沙
春風や日和過ての夕ぐもり　操斧
江の舟のけふは揃ふて春の雨　春松
切株に先腰懸て花見かな　蘆月
山ひとつあなたも照かはるの月　一解
うぐひすやけさ見し月の昇迄　大阪 鼎左
黃鳥の雪にまぎるゝ油斷哉　知風
戻る門わすれて鳴かねこの妻　麥舍
雨もよき春とはなりぬ夕眺　公眠

きじ鳴や足踏しめる爪あがり　セツヽ 可春
淡雪やつひに雨夜と成くらさ　大和 可成
風の逐ふ流のはやし谷の梅　イヅミ 松子
野に出て遊べと蝶も來る樣な　キイ 桼丘
入はてる日を待かねて月と梅　アフミ 乙也
黃鳥の鳴や數奇屋の草履數　蟻洞
これとても貰ひもの也福壽草　ハリマ 桃五
朝ぐもりすら〳〵はるゝ柳かな　松聲
常入らぬもので尊き薺かな　古谷
降たやう笠のよごれぬ夕霞　アキ 柳塘
三ケ日立ば眠立ぬ朝寢かな　イハミ 靜里
雲に入鳥のまばゆし午時下り　梅谷
これほどの若なつみけり屑の當　肥ゼン 樗山
蓮翹や花になりての水うつり　イヨ 半窓
見つゝ來て道踏迷ふつゝじかな　壽外
燒山やこゝにも鹿のおとし角　坡堂
ちよぼ〳〵と見頃に莟む菫かな　窓雪
もらひ湯に一坂こすやおぼろ月　イセ 果樵

望みなき心のどけし老の春　而后
蝶飛やふりかたけ行傘の上　三楓
見る欲も咲たほど也初ざくら　士芳
奥へ來て結句花なき山路かな　鶴知
粧はぬ顏も愛あり若菜摘　春松
うめ咲や千もとの松のかげ日南　三河 拾山
山燒の麓はくらき夜也けり　春芙
砂濱や梅の若木の花少な　江戸 荷少
帆に風をふつくりふくむ二月哉　東枝
行燈を振むけて見る柳かな　、
お降やそれほどぬれぬ注連の紙　案曉
明てまづ空のけしき初日の出　苣磨
焚柴の香はあたらしき櫻かな　等栽
日表もまだめの細き柳かな　シナノ 臾山
梅柳ふりはかはれどむづましき　エチゴ 契臾
黄鳥のとばかりありて初音かな　蒼山
莟から折るや椿の盛まで　雀角
雪はまだ消んぞ梅の一二りん　ノト 鳳全

常ほしき人のおろかもむ月哉　梅村
墨の手で撫たあとあり雛の顏　生芽
暮たれば田になる里や啼蛙　蘆水
うつくしい日和になれば春の風　立松
暮るまで日のあたりけり踏のとう　翠堂
見とめぬは人の油斷や春の鴈　カヾ 大夢
鳴門さす鯛もあらうぞ春の月　晴江
海山の草を褥や鏡もち　雪奚
蘆の雛ふむ聲なるか朝のきじ　桂洲
春雨や庭木眺て針仕事　眠鴦
京も降噂聞けりはるの雨　北山
ちる花の中行人のこゝろ哉　悠平
散時は八重一重なき櫻かな　北園
のびてゐる日に氣のつくや遠柳　越中富山 嵐布
雪過たばかりの空やはつ蛙　其諺
淡雪やまた箒めも消ぬうち　桃所
開田を仕あげた宵や春の雨　奇雲
柳見て眠氣のつくや馬のうへ　里白

うぐひすやいつにすぐれし起ごゝろ　壽竹
うす暎は花ともみえてかゞみ餅　三桃
日につれて野の深入や小松引　雀走
うめ咲や朝寢のならぬ家の向　上市 魯伯
わか草に見處出來る伏家哉　八尾 柿園
くるゝ日の心にはやき櫻かな　其柳
かけろふの立や起行午の跡　稀水
出代や村に似合ぬ塗木履　知立
眺にもなる降やうやはるの雪　イハセ 慶里
赤いものがちに賣るゝや春の魚　二選
雨ごとに春はうれしうなりにけり　百芝
ふる雪を雫にこぼす柳かな　宇非
はり箱の雛も桃の節句哉　水ハシ 文峰
火を焚ば植ぬしも來る野梅哉　ナメリ川 東邱
水音の末に梅さく山路かな　呉鄕
一本のなの花咲や流れ尻　東周
雨晴や何處まで蝶の高あがり　魚見
枝ほどは根も有さうな柳かな　ウヲヅ 吾三

花の香に出かねて暮る木の間哉　素紈
うら表なくてのびたつ柳かな　可咲
川風の寒みわするゝやなぎ哉　鯉玉
はつ／＼に山吹そよぐ流かな　三俗
わか草やひるからかはく水たまり　鯉逸
この外に色なきものか梨子の花　トマリ 桐哉
浮てゐる鳥の動かず春の海　蘆邦
祖父は田に婆々は戸口に霞けり　戸イデ 柳屋
咲かゝる色に眼のつくうめの花　太田 岸樓
元朝や去年の古着の假たゝみ　煉石
聞ほどの聲おもしろや春の鳥　オヒコ 孤芳
歸のとおもへばさびし鴈の聲　ノジリ 林處
寒い事しらぬ顏也傀儡師　孤ジマ 杜丈
御降や景氣の見ゆる松のいろ　ヒツメ 青嵐
馬の眼に花の散こむ峠かな　神ジマ 鳩車
春風のさはる音なき廣野かな　コン正寺 老圃
見てゐれば落るでもなき椿かな　春溪
囀に籔をわたして朝寢かな　出マチ 蓼牙

溫泉もたつかこの山中の初櫻　爲積
子を肩に置てとゞかす柳かな　中田 井梧
うぐひすの初音さゝへる瀨音哉　和風
宵にまた霜見た原や花すみれ　フクノ 靜芳
春立や燈にもひく薄がすみ　春涯
初空のながめらるゝや草まくら　ワダ 禾廷
わか草や土手に並て叱るうし　ツカハラ 竹林
立よれば振茶かをるや桃の花　トノムラ 半山
黄鳥のしるはづのなき釜日哉　出成田 野笑
啼やんで空に隙あく雲雀哉　ホンコ 瓦玉
咲までにして貰ひけり福壽草　タヤタ 和遂
春の雪竹は雫のそよぎかな　シマ 井里
雨になりて柳靜にくれにけり　、
うめ咲やなじみの里の人多き　中川 米升
入こめばよき里のあり梅の花　ノウ町 吾川
行鴈をよむうち數の紛れけり　フシ下 晩笑
水音にさかひのありて野の霞　放牛ツ 若水
寺よりは貴き梅の舊記かな　芝石

岸を引舟や柳に身をかはす　愛山
水仙も咲や山家の花ざかり　キナミ 有尾
もつるゝと見えては捌く柳哉　如泉
町はなや竹わる音にちる櫻　楚竹
出代やいとま乞してひと釣瓶　霞糸
傀儡師來て行あとや松の聲　陸平
曳ためてのせし小松や市め笠　兎山
萬才や顏に日のさす裏通り　高岡 蘆洲
うしろから聞たはなしも櫻かな　、金英
梅咲や大工のはづす塀の注連　、花精
新嚢や萬才に出る一在處　溫然
さゆるより眺の有やおぼろ月　肥水

田一枚の柳の高吟によりて

はしこ田にうつる柳のかげ遠し　桐城
よき人の庭にほころぶあざみかな　、
惣井戸やわか水汲の讓あひ　犀江
炊桶の水の青みも柳かな　萬非
薪ながら莨火出すや桃の花　、

ひはふらと柳にはかり風のあし　可中
椽先はつい麓也つゝじ山　炳文
篠につくちからやなくて春の雪　雪窠
老松をひかへて光る夕ざくら　一正
さゞ波に網うちまよふ柳かな　楚山
野に人の立初しより春の風　雨條
海棠や雨の中よりさす薄日　石丈
今かした燈の霞けり小提灯　、
閊るやまた見ざかりの花に雨　菊士
菜の花や往來べりも二三本　洗車
春立や柳につたふ軒の雨　雪江
あらし吹さかりも過て山ざくら　、

元服の賀

日表になりよき花や玉つばき　滑水
陽炎やはね出た蘆の枯たまゝ　可常
わか草や二葉に見ゆる風のいろ　帶雨
海草に月も宿るや汐干潟　、
なの花や日ざし〳〵が花おもて　螢雪

日の空を小貝に遊ぶ汐干哉　碧外
爐の炭をつぎ足して出る梅見哉　北亭
うぐひすの初音もあまる小庭哉　眉丈
よいむきに花山みえて二日灸　東里
山つゞき朝日も宇治の茶摘かな　五瀬
花に行一里は近し薄草履　雅山
風の手にゆられて咲や糸櫻　、
軒へまで出て遊びけり里の春　野泉
澤はまだ千鳥の夜也はつ鴉　力谷
ほの〳〵と朝日もうけて宿の春　、
花の雪笠をかたぶけ見るあたり　玄茂
萬才や大和言葉の物がたり　錦二
はせ舟のおもふまゝ也春げしき　、
杉箸のにほひも高き海雲哉　梅山
仲過て愛をはづすな土筆　廣齊
日あたりに親と並ぶや雀の子　晋齊
雨はれて啼や雲雀の幾處　桂山
朝々や扨あらためてちる櫻　應節

朝立の足の輕さやきじの聲　澄涯
杖を持手はまだ寒しうめの花　白華
汲あぐる若水かろきおもひかな　石香
鷺のたつ岸の淺瀨や芹の花　湘山
このあたり雨のあとある柳かな　桂里
茶にもよい水さへありて嶋の梅　素桐
踏こみし雪に色めく若な哉　、
蝶飛や白きはものに紛なき　盈科
人中を退も花見の方便かな　依山
水うみの水にほひけり花の雨　鶯叟
槌音に柳うごくや鍛冶が庭　吟水
籔入や袂おもたき紙つゝみ　松堂
やぶいりの何を見て立朝戸哉　文誠
藤しろや何事もなき夜のしらなみ　、
手透とて子を友にして手まり哉　習靜
見殘しを夢にも見るや花こゝろ　麥風
東風吹や有磯の潟はのぼり舟　是洲
わか水や釣瓶の繩を弓かたち　葆清
物うりを畑てよぶや茶摘時　三谷
御降ははれあがりても長居哉　逸江
買初や足袋白々と暖簾ごし　泰丈
鳥の巣や根にまだ雪のある楉　兎石
はなれ家のぐるりも春や鶯菜　野鶴

夏之部

わか竹のかげしほらしや机先　京 九起
出て見れば我家も深し夏木立　漁藻
尻むけた人にものいふすゞみかな　默郎
檢ざしの田もひとつらや夕すゞみ　兎尺
消殘る星より清き蓮かな　春沙
茶を挽た臼の仕舞や一夜鮓　操斧
日の入も見ゆる處やすゞみ臺　一解
退き汐に芦はゆられて雲のみね　梅園
ゆきわたる間も待かねる新茶哉　春松
蝶の來て一重ちらしぬけしの花　芦月
枕して見たれば牡丹崩れけり　大阪 素屋

竹植たのがうれしいか朝すゞめ　湖水
郭公啼や扇のしめる頃　アカシ柿玉
一日のてりに散けり栗の花　五瓜子
眼を閉てわたる小橋や木下闇　肥ゼン麥紫
六月やゆふべかぞへて立日數　日句林烏
夕やけの最中をおろすのぼり哉　イヨ文鄕
蚊の聲の中へなげこむ羽織哉　英市
朝の月みじかい夜とはなりにけり　琴岳
まだ春のにほひのこりぬ花御堂　其戎
しづむ葉のうへを流るゝ淸水哉　ヲハリ鶴叟
暑き日や誰も通らぬ袋町　鶴知
芍藥や山手に古き里つゞき　ミカハ完伍
萍や照に背かぬ花ざかり　蓬宇
蚊帳からふるひ出さるゝ子供かな　遠江杜水
松魚から四五日過てはつ茄子　江戸春湖
すら〳〵と靑田にすゞむ夜水哉　默平
貰ふても價もしらず初松魚　ヲクたよ女
紫陽花や折らねばならぬ色になる　雲水大虫

山畑や二葉の豆に閑古鳥　越前也同
百合咲や風を呼出す草の中　鶯村
松かさのひとつ落ても庭すゞし　秋江
露のぼるちからに脫や竹の皮　エチゴ雅佛
竹植て柳のみどりおとりけり　ノト生芽
むら雲のゆるりと通る靑田哉　翠堂
みじか夜の月過行や竹の上　蘆水
水さへも寢しづまりけり郭公　立松
月ゆするばかりもすゞし雲の波　カヾ丹嶺
釣初た夜や幮通す風の嗅　桂洲
鮓店をすかす簾や夕げしき　眠鷺
手のあとの臺に暑し塗柱　雪奚
一雨の晴際たゝく水鷄かな　新漲
笠あげてあと連よぼる淸水哉　賀水
あけぼのは笘ひとへなり鳴水鷄　林坡
和らかに日をてりかへす新樹哉　越中トヤ山嵐布
やすむ樹のかげたゝみこむ扇かな　魯朴
花ののち風に親しきわか葉哉　桃處

鳰の見てゐるや浮巣に飛小蝶　雀走
したしみも雀ははやき若葉哉　奇雲
わか竹に灯のこぼるゝや寮の窓　三桃
夕凪を見てゐる蟹のうちはかな　ハツヲ 柿園
たづね來し庵は留主也閑古鳥　知立
大寺やけふの暑さのすて處　稀水
紫陽花や水のかげさへ澄にけり　其柳
裾分や新茶と人のいはぬうち　イハセ 慶里
酸漿やゆふぐれ時に來る雀　二選
朝々の葉がくれのぞく胡瓜哉　、
木の根にもそゝぐ佛の産湯哉　字非

涙化上人御墓にまうでゝ
置土や苺の花にもそゝぎ水　掃雲

松島にて
すゞしさや月待宵の汐明り　百芝
ふき落す吸がら赤し木下闇　、
やがて蚊になる虫もあり佛生會　ナメリ川 東邱
旅人の連呼こむや花御堂　魚見

朝懸のひとりすゞしき簟かな　呉橋
幟かけさすがによけて人通り　東園
あせ川の橋の高さや蟬の聲　ウヅヲ 楞丈
水かけに葉うらの螢見つけ鬼　三俙
植た手をひかぬに戰く早苗哉　三日市 敬哉
朝々の心も清し夏花つむ　トマリ 壽巣
わか竹の健氣にふとるちから哉　寛陽
みじか夜や芦の嵐の吹殘り　戸出 都山
舟からもあがる中間の簟　太田 露仙
山に入る朝提灯やほとゝぎす　フクノ 麥里
涼む夜のはなしに更る時計哉　潤亭
日ざかりや傘におさまる人のかげ　松屋
我かげは日傘のうちになりにけり　ノジリ 林處
有丈の花に日のさす蓮哉　トカミ 龜友
ふいと立裾のかるさやはつ袷　オヒコ 孤芳
紫陽花の咲丸みたり日和口　日ツメ 青嵐
流出る谷したはしき清水哉　ソイツミ 雫波
吹かへす様や競馬にむかひ風　出マチ 窺元

紅の花やをし分見れば細い枝　クシタ 寄川
雛はぐれてひとり殘るや凉臺　寺ツカハラ 竹林
淸水汲道かすかなり草の中　ワタ 禾廷
早ずしや水もうたせて馴加減　コン正寺 老圃
乙鳥子の立初る日や更衣　ノウマチ 吾川
一畠ぼたんに富し小家かな　故生ツ 鳩齋
柚の花のにほひこぼすや雨の下　タナ田 和遂
剩水の行すゑしらず燕子花　テキ田 野笑
山入や住ば都のほとゝぎす　中田 和風
手にすゑて見たきぐらゐや初茄子　サノ 義好
わか葉から出て田にかゝる流かな　中川 米升
苺古く花新しう咲にけり　井ナミ 有尾
蚤飛や二人かゆびの千鳥懸　如泉
草のうへはふ溫泉煙や五月雨　霞条
夕がほや德利をすゝぐ垣ね川　楚竹
帆ばしらの外に樹はなし郭公　兎山
とけて降雨とも見えずかきつばた　高ヲカ故 梧齋
たばこ火に四五軒とぶや麥の秋　花精

ぼたんかな只一りんで事たりぬ　學海
萍やながめ處のさだまらず　雪窠
川骨や浮世にうとき咲處　一正
旅人の見て行過る田植かな　楚山
御車のあともあふひのにほひ哉　石丈
みじか夜やけさも掃るゝ枕もと　、

海岸寺にて

代々は知識の門や木下闇　洗車
郭公この川上に橋もなし　碧外
出勝手のよき宿とりて子規　北亭
後に着る袷たゝむや旅の宿　鶯叟
虹の根をたしかに見たる靑田哉　吟水
袷着てついと手にとる竹箒　梅山
空鮭に雫もちたり五月雨　弄禾
水かれし夜は水鷄の通ふ筋　蘆圃

大岩山にて

茂りもる日の傘さや瀧の上　可常
色も香もわすれぬ花やわすれ草　帶雨

ふり向て八幡見る間やほとゝぎす　士石
さゞ波のやうにゆれ立青田かな　、
木蓮はいよ時咲て花御堂　眉丈
蓮池の流れつゞきや燕子花　五瀬
人聲や在處〳〵の夏木立　東里
一聲はわすれても鳴け郭公　丈紅
植付た田の行儀見る月夜かな　野泉
浮葉して濁り粧ふ蓮かな　烏旭
帷子のかげのかるさや青疊　雅山
一葉づゝてらして數の螢かな　力谷
とゝのふた寺の掃除や蟬しぐれ　螢雪
まねぐ手によらで小笹に飛螢　肥水
夕立や森をはなるゝ鷺一羽　錦二
にぎやかなものや田植の戻り道　習靜
川の瀬の高う聞へてほたる哉　蝶畝
朝々の所業や青田の水廻り　澄涯
松原や清水もありてひと休　松堂
笠のひもといて聞けり郭公　應節

雲分て月のうつるや草清水　綾齊
動くのは草の白根が苔しみづ　桂里
草の香の風通り行蚊帳かな　石香

萬葉集のおもかげは、青田の色に見えたり

郭公啼やこゝらも布世の湖　湘山
籠づめの林檎すゞしき光かな　、
山鳥の尾を引空やほとゝぎす　葆清
海草の岩にかれつく暑かな　壽丈
有明の殘る氣味あり菱の花　三谷
鷄のかゞむ處や苺のはな　盈科
舟通すあとやすかさず行々子　依山
晝がほのかげもつ頃や人通り　泰丈
肌あたり妙なる風や氷室の日　兎石
植るのがけふの仕事ぞ庵の竹　逸江
道々も見て來て宿の蓴菜汁　野鶴

秋之部

雨夜からまぎれぬ聲やきり〴〵す　京 有節
待わびてはや起もせずけさの秋　默池
此頃や柿に市立町はづれ　碩水
蜘も巣に仰むいてゐる月夜哉　(蠹)□子
三日月や青みのもどる庭の苺　春沙
わすれ葉のひとひら青し梅嫌　鳥岳
月の出て肌着る里のをどり哉　操斧
聞なれて聞ぬもさびし庭の虫　芦月
更るほどひとしまりもつをどり哉　春松
ふつと見た川にかけさす花火哉　一解
活てある萩やふらりと下り蜘　ヤマト 司水
なつかしきかげは尾花ぞ後の月　カハチ 孤杉
墓まゐりかるう提けり花手桶　ハリマ 北梅
夕榮のまゝ夜に入て秋の月　イハミ 由義
垣ね掃音に秋立夜明かな　チクゼン 宇逸
秋來ぬと眼にこそたゝね東山　ブンゴ 石友

戸にさはる蔦もかれけりきのふけふ　イヨ 蔡白
そのまゝで落てあるなり桐一葉　アハ 正樹
引聲に月やくもらんみねの鹿　アフミ 百錄
初秋の庭へも來たりもの貰ひ　イセ 閑美
行もどり糸瓜眼につく小家哉　ヲハリ 棗地
名月や雨うつくしき濱づたひ　星岬
風に飛實を持草や夕紅葉　鶴知
朝がほや毎日咲てめづらしき　一清
風呂敷の結びめかたしけさの秋　梅裡
雨の鴫左右にわかれて暮にけり　江戸 見外
それ〴〵に得意もあるかわたり鳥　奇泉
染ぬ木へまくしかくるや秋の雲　芳草
梨棚子にすける雨夜の燈かな　草栖
咲はなに秋の見らるゝ桔梗哉　默平
見盡もなき初秋ぞ玉の浦　窠曉
待宵の雲は厚うもなかりけり　苣磨
湖を我ものにして月見かな　エチゼン 觀湖
菊の香や火をよくいけし煙草盆　エチゴ 禾雄

霧の香やよく人の住む濱ふくろ　市猿
大方はつくり過たり寺の菊　雲水 松朗
葛城のはづれに白し銀河　桐林
秋の日のせりこむかげや椽柱　木市
さびしさに慰む秋のあふぎかな　ノト 翠堂
案内者は母なり嫁の墓参り　生芽
かる〳〵と飛や兎も露の中　蘆水
むし鳴やすみれ咲しも此あたり　カヾ 柳壺
明いそぐ芦の戰やほし今宵　我柳
蜻蛉の尻から立や池の波　香積
翌はまた降らぬ模樣や稻の殿　桂洲
背負行稻にさしこむ落穗哉　雪奚
飛ざまに蜘の巣やぶるいなご哉　眠鴦
秋立や隣ほしがる小百姓　山ト 寄雲
名月やひとすぢ細き水の道　桃處
紅葉見や鼻紙遣ふ夕げしき　凌古
咲たるゝほどの小雨や萩の花　雀走
美しう流れてさびし秋の水　三桃

初鴈のそれかとばかり波間より　上イチ 竹母
そのなりにたふれて萩の盛哉　八ツノ 柿園
青田からほめたがひあり稻の出來　知立
ものおもふ身にこたへるや鹿の聲　稀水
朝がほの花にさますや二日醉　共柳

泉岳寺にて

うつくしや草にならへし露の玉　イハセ 慶里
草木鳴らす風の中より鹿の聲　ウヲツ 樗文
待宵の名處までは日のたらず　ナメリ川 東邸
我宿のめづらしうなる夜寒かな　魚見
秋風やひとつくなりに草の蔓　東周
嶋の灯の數ともす夜や渡鴈　呉橋
並松に花野のほめきはなれ兒　トマリ 立器
折々は膝かいこんでのちの月　ノウマチ 吾川
草木より催す秋の氣色かな　放生ツ 秋湖
坂おりて見れば花野の在處哉　可代
尾花咲中に廻るや水車　正齊
桐一葉今までありしがけのうへ　石動 一芳

松に日の出るこゝちや初紅葉　龜友
日のあたるうちに暮けり秋の山　木兄
川留にあふて旅路の月見哉　林處
ある聲をほそめて雨のきり〴〵す　蓼牙
その草にその薫りある花野哉　雪巒
家の棟の日あしも消て鵙の聲　水慶
名月や山をはなれてひとゆるみ　栗齊
晴て行雨の隣やむしの聲　南淵
一聲の鴈の過るや里の暮　雄江
人も出てゐれどさびしき苅田哉　孤芳
霧たちて沖より波のうねり哉　和風
藁灰に炭團うづめて居待月　甫草
畑ものはみなあれ行に鶏頭花　霞翠
色かへぬ草木も秋のすがた哉　青嵐
十六夜やまだ雲やけのさめ殘り　野笑
ひとつづゝ見やるばかりや月の雲　和遂
吹破れし巣に蜘の居る秋の風　竹林
川幾瀬こして來にけりわたり鳥　伯圭

新しき家の棟高き夜寒かな　子狢
名月や雲のかゝるは夜のしるし　米升
雨の枝辷りし聲や籔の鵙　禾廷
秋風の吹ちゞめたる日あしかな　有尾
むしり葉の袂にあまる菊つくり　美杉
底明りして戸もしめず雨の月　如泉
名月やくらき處より人の出る　兎山
待宵や箒にかゝる蜘の糸　花精
晦日の闇にも消えずそばの花　可中
花で葉の氣隨おぎなふ紫苑哉　炳文
雨の日や菊にさしたる蛇目傘　雪窠
行秋や引さく紙の音さびし　一正
月の出る歩を見せる案山子かな　楚山
行雲の末からくれて秋の山　石丈
古郷をおもふや桐のひと葉より　鶯叟
ともし灯の外へはきかぬ月夜哉　鶯樹
溫泉の利目身に覺あり朝寒み　吟水
藥ほるまでの道なり岩はしご　梅山

たはむほど花數をもつ小菊かな　松堂
むしの音を相手や庵のひとり留主　習靜
秋深き色とはなりぬ蠣波山　可常
明星とならんでてるや高燈籠　螢雪
朝顏や樹々の雫も落ぬうち　北亭
咲にけり野菊もまじる草の花　碧外
日車も廻らずくれて秋の風　眉丈
さす夕日白菊に眼のとゞきけり　東里
しら菊の高う見えけり朝ぼらけ　野泉
堀て退く土までにほふ藥かな　雅山
露しぐれ落て谷間の一瀨かな　、
湖の白うくれけり秋の風　土石
椽先や菊を相人に小さかづき　力谷
更行や草の葉つたふ露の玉　鳥旭
ともし灯は宵のまゝ也けふの月　繁星
山出しの松に引そふ野菊かな　北河
掃とれば一葉のあとや地の乾き　澄涯
朝顏や翌をかまはず咲いそぐ　玄茂
何となくにぎはふ山のはつ紅葉　つき女
空の雲さらぬうちよき菊見哉　晋齊
稻づまや戸口に海人のさばき髮　禿雅
はらばふて見る場もあるや萩の原　暉川
名月や枯木に光る蟬のから　綾齊
鷄頭や葉には力も見えぬ也　桂里
百里來て知己のあり角力取　三谷
ほし合の空や澄きる水のうへ　雪江
雁の聲ひくう聞ゆる雨夜かな　素桐
仰向ば笠する繩に鳴子かな　萬井
燈籠のあかりのとゞく小草哉　葆清
夏の氣のかはらぬ藪や渡鳥　壽丈
みのむしも出てゐる菊の日南哉　湘山
豆引て田舟あけおく家腰かな　、
ひとつらは西日のかげやそばの花　石香
見る人の中よりまじるをどり哉　依山
みねの雲とゞく日もありそばの花　泰丈
敷足して月をあやかるむしろ哉　逸江

草むらやむしはまた夜の啼殘り　兎石
はしる雲かゝる外山の尾花かな　野鶴

冬之部

行を見て寐たれば戻るしぐれ哉　京 公成
鶴鳴て明る夜もあり神無月　赤甫
落來てははしる千鳥や加茂のくれ　自長
暮行や枯野にひゞく水車　楓城
初雪や夜明の鹿のうしろかげ　梅園
おき土もまたおちつかずみそさゞい　春沙
畑買ふこゝろ定まる小春かな　操斧
すご／＼と提灯通ふかれ野かな　漁藻
餘の草のかるゝまで咲野菊かな　書外
初雪や稚き時をおもひ出す　春松
水仙や籔の隙もる薄月夜　芦月
輕さうな音のはなれぬ紙衣かな　丘湖
燒たらぬ炭を燃すや庵の隙　一解
あるゝ江ににこりと出すや鴨の首　大阪 艾園

つむ雪やひとり前ほど窓明り　フアミ 九峰
かげろふのふとたつ霜の芝生かな　イセ 松柏
知己のやうな聲なりむしろうり　ヲハリ 鶴知
木竹にはつまねど雪の山畑　士前
ひる中は窓の月あたるこたつかな　エド 爲山
寒菊の無心手紙や二くだり　卓郎
朝かげの障子を撫る落葉哉　荷少
十月の柳見わたす入江かな　、
釣合に來て浮く鴨や澪標　ムサシ 五渡
高ひくに鳥の灯見えて夕しぐれ　スホウ 道味
身にかゝる雪も眺のひとつかな　チクゼン 鳳尾
根もとまで月のすけるや枯尾花　タンゴ まき女
せきかねて流るゝ年の早瀬かな　エチゴ 志扇
小春日やなす事もなく庭へ出る　エチゼン 布陌
十ほどの千鳥百にも聞へけり　ノト 竹塢
眠るにも氣のあへばこそ鳴千鳥　涼瓜
濱千鳥波ふむくせの見ゆるなり　生芽
月かげと並に出るやひとつ鴛　蘆水

こがらしの中にめで度月夜哉　立松
寒念佛老し人でもなかりけり　翠堂
橋の雪眼をすれ〱の朧かな　木圭
寢てゐてもこれほどの夜に鉢叩　雪奚
年のうちに春立礒や波の花　眠鴦
春の品はかりにせわし市の聲　桂洲

年内立春

花に心うごくや年の此方より　野也
午時かけてかねの音氷る麓かな　卜少
岩波に月もくだけてむら千鳥　都豐
角力取もはなし相手や桐火桶　盧夫

平壽丸さいへる大ふね見むさて、
高岡より伏木にいたる。舟中の興

水鳥のよけて通すやくだりふね　其竹

古國府勝興寺にて

寮々は雨戸も明かず冬木立
弟子ひとりなくて淋しや寒念佛　里白
御火燒や舟からも來るひとまつひ　雨遂

むら松や網ひき立る霜けしき　壽竹
漁火のひとつとなりて鳴千鳥　桃處
今すてた茶屑共まゝ氷りけり　奇雲
澄わたる八日の月やちどり啼　梅谷
賣に來る顔もかはらず河豚かな　仙史
はりつめし氷のうへや汐の來る　勢齊
落葉してかよはき水のよどみけり　雀走
引て往たあと雨になる千鳥かな　李水
冬ごもり鼠のかよふ壁の穴　三桃
みそさゞい啼や只ゐる窓の先　柿園
卷紙のほそり加減も師走哉　知立
この頭のまうけ日よりや復花　其柳
この枝と見ればかしこよみそさゞい　稀水
大鳥の渚を歩行深雪かな　二撰
日の窓に手を摺蠅や大師講　慶里
冷などに利くとさたして鷄卵酒　百芝
鐘遠く聞夜や榾の焚はじめ　鯉逸
土までもぬくもる日也大根引　鯉玉

人多く來る音のして落葉かな　自北
水を汲外に用なし庵の雪　ナメリ川東邱
一本の鰒に手かはる料理かな　魚見
獨居の巨燵のうへに行燈かな　東周
こがらしや空は事なく望月夜　呉橋
木の間もる日もとゞかぬや石落花　三日市恕兮
藪垣は只居よいかみそさゞい　トマリ桐哉
暮るまで子供の遊ぶ小春かな　壽榮
牛にあふ度に山路のしぐれ哉　士孝
木の下の人のひくさよ冬木立　寛陽
松葉火に宵々染る紙衣かな　フクノ麥里
日くるゝや炭竈ひとつうらの山　雄齊
梟やくもらぬひるをかくれ鳥　出マチ甫隨
冬椿花をいたはる葉ぐみかな　ノジリ木兄
つむる雪解るものはおもはれず　林處
首たれて馬も眠るや榾あかり　中田和風
凍つきて節くれたちぬ蓼の莖　甫草
寒菊や芋もわさびも置處　コン正寺老圃

繼て行炭はしりけり客の中　春溪
雪に名のかゞやく比良の高ね哉　日ツメ青嵐
波ひとつ隔てぬをしのちぎり哉　オヒコ孤芳
うし馬も野にはなされて小春哉　ノウマチ吾川
山茶花や見る窓だけはよき日南　放生ツ桂山
御佛事やかこひおほせし熟柿　正齊
十月の日向もちけり藪の家　ワタ禾廷
意地がまし冬至の風の間に籠り　テキテン野笑
板の間に氷つきけりこほれ水　寺ツカハラ竹林
宵までの雨にけさ見る垂氷かな　タナ田和遂
うし馬もやすんでゐるか里の雪　中川米升
道連にわかれて寒うなりにけり　井ナミ有尾
氷ふむ音や夜明の人通り　如泉
野はかれて根づよき松の戰かな　北英
星ひとつ見えぬ闇なり鳴千鳥　汲霞
樹の穴へ小鳥のはひる初しぐれ　嵐江
鴨啼や十村やしなふ山の池　之峰
野べはみな石あらはれて枯尾花　守性

月しろにかれてさはらぬ柳かな　成竹
さや殼にはぢく豆ある小春哉　兎山
初霜やうら見て通る家ばかり　（蔦ヲカ故）楮齊
雪少し降や聲なき森の鳥　、花精
さま〴〵の鳥の飛かふ枯野かな　、柳外
日こそあれさす鳥かげや夷講　、素月
朝鷹のそれてとまるや橋のうへ　心月
炭つぐや釣行燈の下明り　雪窠
蜑か焚火さへ見かけず鳴ちどり　一正
松風の冬ぞともなき聲す也　雨條
袖ぬるゝ小貝ひろふや小六月　楚山
ちるあとや降つくろふて竹の雪　石丈
音もなく香もなく風の枯野哉　萬井
雲たれてしぐれも近し三笠山　白羊
束ねもれしたる小枝やかへり花　靜章
うぐひすを藪にかこふて冬篭　鶯叟
山かけへ鴨かくれ行小春かな　吟水
うき旅をしるや落葉の笠ざはり　梅山

直うち丈聞たまで也店の鰒　弄禾
明に出た戸をそのまゝのしぐれ哉　松堂
落葉火や行儀崩したかけぼうし　麥風
寒菊やおなじ畑の出來不出來　習靜
山の端やしぐれ見て行はしり舟　蝶畝
長橋やしぐれて人のかよふ音　碧外
茶の花やどちへ向ても村の端　北亭
炭の香に香をとらるゝや新疊　螢雪
寒い日の梢にさしてかへり花　雪江
初雪やけさは鴉もうつくしき　香國
枯ながら月に添よき尾花哉　可常
開く香にちらつく雪や冬の梅　帶雨
さし出た木の下かげやあじろ守　雅山
むぐら戸やひそかに明て霜の朝　東里
疊はふばかりに暮て冬の蠅　野泉
柴の戸の夕明りして枯野かな　力谷
啼さして入日にたつや寒苦鳥　士石
持山の松伐こむや事はじめ　眉丈

しばらくは霰もみえて水たまり　錦二
人近う來てもかしこしみそさゞい　澄涯
鳥の來た樹のゆれてよりしぐれけり　三谷
水仙や織部障子の小くらがり　葆清
鷹狩や一番鷄を出立ぶれ　壽丈
すて菰や庭にさびたる草の霜　桂里
脫すてに鼠のかよふ紙衣かな　湘山
初雪やこれほどつむに隙の入　石香
棟上の寺に餅まく小春哉　素桐
木がらしや柱にあたるかねの聲　依山
暦にもよらぬ日がらや御取越　逸江
葉のかはく丈の日和や石落の花　泰丈
東雲のかげに降やむあられかな　兎石

愛本橋上

吹おとすしぐれの雲や黑部川　野鶴

脇起一順之俳諧

高岡胄雪窓社中

高岡古廓之感情

升がたもみだれぬ草の茂かな　浪化上人
わが葉がくれに鳥のから聲　野鶴
鹽の出日起すと朝戸たゝかれて　兎石
鑓のしるしに風見ゆるなり　泰丈
澄きらぬ酒の香もする月の秋　鶯叟
はなしすむまで碪やめさす　石香
またひとつ鳴つく庭のきり〳〵す　湘山
寢顏に淚かけし去ざま　萬井
古鄕へ引とあけてもいへぬ義理　逸江
何處詠ても雪ばかりなり　素桐
寒菊の枯葉を塵に掃添て　可常
木ぎれあてがふ塀の節穴　眉丈
敷足せる月の筵も人の數　石丈
艫そろへてのぼる稻ふね　桂里
初鮭に引立市の腕まくり　文城
相手うしなふ宵のいさかひ　雅山

嵯峨鞍馬ひとつに花の綻て　雪窠
　長閑な空のつゞくこの頃　一正
樟腦の香にしむ雛のあと仕舞　洗車
　また毒斷を醫者のゆるさぬ　盈科
かし傘の騒我をしたのも底拂　依山
　綺羅をかざりた參宮もなし　禾廷
入交る咄の果は戀になり　三谷
　二階住居のおもしろき夏　吟水
湖の裾は菅田に燕子花　溫然
　腓にたまる沙のきらめく　弄禾
綿相場扨は狂ふた樣子にて　梅山
　おくへ呼るゝ聲のいかめし　碧外
講中を立せて跡は月のさた　炳文
　瓢簞棚の光る露霜　東里
武者引もそろ／＼隙な秋になり　帶雨
　雪花菜の玉を菰に並べる　野泉
鸛は人にもまさるかけほうし　北亭
　道具をかれは大工つぶやく　松堂

獻立に骨折御代の花咲て　桐城
　春をめでたう書のべし文　藻淸

同一順　井波黒髪庵社中

青鷺の番ひわたるやけふの月　浪化上人
　野は百草の咲にほふ時　野鶴
ほそ／＼と露の扉を明かけて　兎山
　筬の目をさす相手またるゝ　如泉
拍子よく貰ひ合せて亥の子餅　有尾
　冬にまゐる蠅のしぶとき　北英
塗物に透間の風をいとふなり　嵐江
　呵られながら子供ほたへる　霞条
食客は血脈なれど見さげられ　汲霞
　琴のをし音もへだてある部屋　之峰
何事もうすひ契のうとましく　守性
　なつかしき帆の嶋にかくるゝ　巨淵

朝月のまたあり〳〵とのこる空　守吾
角力の太鼓近う聞ゆる　向齊
秋更て二階の後架の味わるく　美杉
額おもたき宵の大酒　楚竹
花に鳥寢るも起るもおのがまゝ　陸平
年中まちし此頃の春　成竹

慶應元丑ノ夏

半雪居藏板

麥（ばく）林（りん）集（しふ）

上・中・下

乙由

題

麥林舍發句集

誹歌古人有之而旨微矣貞德始多用巧於此作者雖競斯可稱
創體矣而後稍ゝ取其材而不變其格以至蕉翁澹ゝ然彬ゝ然
蓋乃今而誹則已極也人各握靈珠玩春花擅昆玉嗜海棗者不
遑之收也麥林舍主人壯歲有誹癖老而不倦弄月嘲風緣情而
綺靡體物而瀏亮無意敢當于述作之林適足以效澹ゝ彬ゝ已
夫

藤羽林

麥林集（上）卷一

春部

歲旦

二見から蒔繪やつゞく門の松

天の戸に朝寢はあらじ初日影

遊ぶにはふさがりもなし初ごよみ

麥林の五仙といふを題に探て

壺の中に我は居なり松かざり

我は隱れたりさおもへど、春光の
至所は宮居も藁屋もへだてなくて

初空や爰も岩戸に見おろされ

紙衣にも花井の名ありけふの春

久しく他國にありて古郷に歸し春

鶯のなまらぬ春に逢にけり

蓬萊に一色多し麥ばたけ

我隱れ家のふつゝかなるを誰〳〵
にすゝらめれて、主居・客居の隔

なしつらひ、壁も疊もあら玉の春
を待えたり。

あら壁に蔦のはじめやかざり縄
若水や井土からもの丶囃ひぞめ
隠れ家や麥の二葉を福壽草
濱荻も筆に芽ぐむや初硯

内外の玉垣に行かふ素襖ゑぼしの
古風は、我ながらおかしく、いさ
めでたし。

万歳や鼓嶽をうちながめ
短檠も明れば永し初日影

六十の春を迎て

鶯に耳おもしろきことし哉

ことし美濃の芦呂人がもとより養
老の芹を贈れり。嬉しき名なれば
是を元旦のあつものに祝ひて

若水を瀧にそ丶ぐや根白艸
枝折戸や我心には藏びらき
若水や老をわすれてつ丶井筒

君が代や猶も永字の筆はじめ

ことしは吉野丶花に先達せんと、
大和にすめる十方庵が、古としの
なごりに告こしければ

何も角も吉野〳〵とはつ暦

人日

駒下駄に野飼幾人若菜摘
七草の七つ道具やとし男
若菜摘しあとや雪間の七所
我は垣根に詠て祝ふ薺かな
前垂の舞姫も有薺の夜
鶯ははなし飼なり芹なづな
若菜とは讀たり雪に鳥の跡
ふりそ丶ぐ水に七草わかれけり
俎板の皺をしらけて薺哉
白鷺も嘴を譲や薺つみ
蓬摘日も此道や芹なづな
笠縫も綿着て出るや若菜摘
薺から遣ひ初けり菊の鍬

鶯

鶯の待をおろしたる初音かな
鶯の調も深し竹の奥
うぐひすや鳴ぬ時には蓬餅
鶯や人に待せて飛で行
うぐひすに一日染る日雇かな
鶯や柳にさます梅の酔
うぐひすの鳴日は竹も静ぬ
鶯の氷もくだく初音かな

尺八にらく書せよと人の望ければ

鶯や竹は離れぬ哥ぶくろ

梅

梅が香をとめて紙衣の仕廻哉
もゝ尻の鳥を留るや梅の華
鶯の留主にも梅は匂ひけり
十八丁おくに里あり梅のはな
梅白く咲けり門に僧ひとり
梅が香や障子の破も加減よし
鶯の茶に紅裏や梅のはな
見といふ名にはかしこし梅の花

柳

きつとさせて見たひ日も有柳哉
花さかぬ身をすぼめたる柳かな
いそがしき中に芽を出す柳かな
折ふしは風に腹立柳かな
おもしろふ狂へ柳のみだれ髪
たゝかれて柳に遊ぶ野馬かな
唐繪にも假名にしだるゝ柳哉
畠人と一度に休む柳かな
駒つなぐ花のとがなき柳かな

涅槃

朝顔は今二葉なり涅槃像
涅槃まで花も笑ひをこらへけり
花の名の目蓮もけふしぼみけり
鶯もけふまとを鳴やねはん像
百草も揃はぬ頃や涅槃像

猿の手もけふは只居や涅槃像
どふ響く涅槃の暮の鐘の聲
牛の角落ぬも哀れ涅槃像
ねはん會や人の氣もみな丸ばしら
涅槃像是にはあらじ繪そらご
老僧に死きらひ有ねはん像
燕の巣も蓮から運ぶ涅槃かな
涅槃から落し初てや鹿の角
涅槃會や梅の座論も散て行
ねはん會や俗室はみな躶虫

上巳

三日月もろくに受るや桃の酒
盃に桃の雫や苔清水

閑居

曲水にひとりいそがし竿釣瓶

麥林に上戸なくて

爰に又酒の汐干や桃のけふ
冠にもさはらず雛の桃の花
蛤はまだ雀で遊ぶ汐干かな
すげ笠や汐干に遊ぶ都鳥
毛氈をけふの歸帆や汐干がた
曲水の船は常盤の一葉哉
蝶ゝは掃ぬ埃や雛あそび

桃

家一つ村にあまりて桃の花
桃さくや畠の肌の脫はじめ

矢野にて

青麥の波まだ淺し桃の花
花守にみなもと問ん桃の奥
雲中に人の聲有桃の花

櫻

能ものを笑ひ出しけり山ざくら
懐は山にも有て初ざくら
鐘のなひ寺にも散や山櫻
夕風や己が花掃糸ざくら
織姫の秋は油斷や糸櫻

鶯の梭にはたらくや糸櫻
鳶飛で影も動かず花盛
散たがる花にものいふ事なかれ

威勝寺に遊びて

池水を鏡や花の夕化粧

朝熊嶽にて

吹て行花のゆく衛や帆かけ舟

春　以下不レ分レ題

茶に近き蓮織なり春の雨
鳩部屋に腹立聲や春の雨

三月二日

雨に猶宵の雛の品さだめ
鶯もだまつて見たる寒サかな
沙汰なしに日は永ふなる寒さ哉
白魚の疊ざはりや春の海
道草を寺で和たる摘菜哉
仲人の虚言摘交る嫩菜哉
けん〳〵と雉子さへ鳴て渡し守
草にまだいとふ花なし雉子の聲
燕や何を忘て中がへり
つばくらの普請仕廻ば子持かな
帆柱を便に渡るつばめかな
出代の運や釣瓶の輕ひまで
草臥て星に代るや夕雲雀
結構な日を啼くらす蛙かな
朧夜もまばゆさうなる蛙かな
鶯に返歌のおそき蛙かな
ぬすみして見かぎられけり猫の戀
此草は餅に搗れて花咲キぬ
摘だ手に杵は耻かし蓬餅
譽ぬ人を撫て戻すや藤の花
山吹や水は流てもとの影
芦の角耻てや雪の綿ぼうし
番鳥は乳母が勤めて摘菜哉
梟は琵琶ひく鳥や朧月
仙人の碁にも指さす蕨かな

奈良にて
けふ知るや三月堂の夕雲雀

山寺にて
ぬるめとて筧の道の幾曲り

東花坊が新宅の屏風に、蓮二はありて白狂は遲し、と落書して
燕が來たら机の置どころ

四十の賀しける人におくりて
春の草の麓は若し老の坂

題鶴契齢
万歳や松に中よき袖の鶴

新宅をことぶきて
吉日を知ルや鼠も燕も

年經たる松をことぶきて
十かへりの榮や鶴の雛あそび

呉竹亭俳諧月次の初會に
門松やけふ月花のはしら立

安濃の津に遊びて
咲かねる詞や藤の長みじか

木公・左欄の兩子に對して
啼聞んこま鶯の二人づれ

古山・一夢に訪し時
燕より先へ柳に客ふたり

東松館俳諧月次の初會に
鶯や百囀のはつ懐紙

をだまきといへる花生に、一句を乞はれて
花よりも糸の手柄の柳かな

奈良に住ける茂秋に示ス。
墨染を伊達に返るな八重櫻

吉野・初瀬の花に漂泊して、けふは萩原に遊ぶ。されど待人ありて、奈良のかたに赴きて
又こゝへ吹戻されんいかのぼり

加賀の千代女に對して
國の名の笠に芳し花の雪

西行上人の、しばしとてこそ、とよみ給し柳を、庭前にうつしたる人のもとへ

爐路笠を旅にして見む柳かけ

何某がもさへ招かれて

軒をめぐる音も匂ふや花の雨

長途を凌て內外に詣たる人に

道草の筆も芳し旅日記

見龍が女の住し家を買ける時

その伊勢が匂ひ有けり家櫻

信務の何がしに元日の戸を敲かれて

福藁に田每の秋ぞおもはるゝ

人日の宵、美濃の俳士に訪はれて

養老の咄はやさん芹薺

尾務の何某に訪はれて

たゝかれる月下の門も朧かな

讃務の何某に網戸を敲かれて

起されて蛙の躶春寒し

敦賀の俳士に問（訪）れて

燕に底見られけり麥の奥

信務の俳士に對して

同じ名をけふ笑ひけり朝熊山

豐後の人に訪はれて

鶯の笠も珍し豐後梅

越後の杜角に對して

越の人に寐覺問ばや花の雪

洛東青龍寺は世にたふさむ伽羅の觀音さかや。こゝに暫のやどりをもさめて

香の圖に寐て芳し草まくら

暮春

暮やすき春に鞭打柳かな

鶯の啼へらしけり月日星

行春や山鳥の尾は長けれど

苗代に案山子はあれど春の暮

行春に鼻毛のばすや藤の花

行春の關かまへたり岩つゝじ

鈴鹿を越さて

行春や櫻もくらき鈴鹿山

旅中吟

ながれ來て翌日は夏見や櫻川

寺院の池邊に遊びて

鶯も老を惜むや水かゞみ

麥林集 卷二

夏部

更衣

綿拔て花のよごれは面白し

更衣山はおもたき姿かな

御簾よりおくは古風な袷かな

立臼も痩つさらしの白がさね

傾城の知た顏なり更衣

帶に似た雲有山も更衣

蠶飼ふ里には知らじ更衣

さげ帶の藤は殘て更衣

行所かぞへて出たる袷かな

綿ぬきや鞠の手紙も吹て居

綿拔て頭陀輕めけり旅用意

加良洲にて

染貝もこゝろ〳〵や更衣

奈良にて
骨で有團扇は寒し更衣
旅中
今朝は先虱忘れて更衣
駕舁の肩に覺えや更衣
石山開帳に詣て
御佛の石坐見る日や更衣
灌佛
芭蕉葉の曆ひらくや佛生會
その庭に佛の兄や夏木立
灌佛や乳はたらねども比丘尼寺
色〳〵の軒の雫や花御堂
蓮の芽はどこを指す佛生會
天をさし地には影有夏木立
灌佛や小僧に飛彈のたくみ有
弘法の井も有庭や佛生會
相伴にあふや八日の撫佛
七堂にかぞへ餘るや花見堂

丈六は葵にありて花御堂
山寺にて
木つゝきのこけら葺かと花御堂
京にて
灌佛やなを拜まるゝ子安堂
杜鵑
鷹居た肱もよはるやほとゝぎす
時鳥夜明〳〵のまだ寒し
ほとゝぎす一夜〳〵の月の欠
杜宇戸明て寐たる手柄かな
純子より木綿の夢やほとゝぎす
子規按摩の耳の明た時
ほとゝぎす講釋きけば猶哀れ
郭公鐘に哀を勝にけり
泥龜も樹に鳴ものをほとゝぎす
曉の山兀としてほとゝぎす
並ばれぬ道の咄やほとゝぎす
鳥見えて猶哀なり郭公

尺八は袋に入てほとゝぎす
夕暮はゆふぐれは何と杜宇
時鳥蚊帳にも枕返し有
卯の花の月柳の闇や杜鵑
雨だれの琴も止けりほとゝぎす
ほとゝぎす谷に照込夕日哉

山家にて

時鳥外に紛れる音もなし

閑居にて

ほとゝぎす合歡木の寐時起る時

關を越るとて

杜鵑啼ずばやらじ關の宿

何某が別墅にて

ほとゝぎす青田の浪を湖水とも

鼓嶽にて

時鳥啼や山にもうらおもて

嶋原にて

塗下駄の空は月夜や杜鵑

八坂茶店にて

ほとゝぎす夏も蹴ぬけの塔なれや

端午

竹の子は袴脱たる節供かな
泥足の京で乾くや菖蒲賣
菖蒲賣名もなき池を問れけり
星の日の船にも殘せ筵粽
小便は茶にこそ替れ菖蒲賣
本阿彌の軒に疵なき菖蒲哉
筵の名は酒にも有て粽かな
五月雨に我は蓑着て粽哉

洛陽にて

十万家その尾につゞくあやめかな
長刀の五條を通る節供哉

燕子花

染あげし夜の間の色や燕子花
公家に似た鞠の休やかきつばた
折形の舟流さばや燕子花
伸る鷺隱れる鷺や杜若

田植

山かげや階子を登る田植哥
間〳〵に顔見合て田植かな
尻を帆にあげて波たつ田植哉
日黒みに鷺を羨む田植かな
そよがせて風より涼し田草取
休には梢を積る田うへかな

氷室

梢には暑ひ壁有氷室やま
氷室から夜光の玉や都まで
涼しさや心太賣氷うり
年を經て我は老嚊氷室守
禁には瓜も冷たり氷室山

雲峰

名をつけて見る隙もなし雲の峯
雲のみねまとの山も交けり
先達もしらぬ道有雲の峯
倒の扇でもなし雲のみね

納涼

涼しさや夢もぬけ行籠枕
すゞしさを摺違ひけり一ッ橋
涼しさの盃とる蓮の浮葉哉
すゞしさを竹に殘して晴にけり
衣張を潜り歩行や夕涼
涼しさや遠寺の鐘の近ひ日は
千疊は田にそよがせて涼かな
橋の上に反の合ふたる涼かな
夕すゞみ夕顔ひとつ見つけけり

夏花

うき草や今朝はあちらの岸に咲
先秋の柚味噌はたのし花の數
草苅の鎌そこなふな鉄線花
前垂に咲や都の紅ばたけ
河骨は海士もたのまず浮ミけり
祭見の道おしへけりおどり華
菱の花魚の千里もさまたげず

卯の花も穢して行や手習子
尾長鳥ちいさけれども桐の華
虆葺に寺號ほしがるや椶櫚の花
花皿に花皿盛や百合の花
・馬の子の二葉譽るや花あふち
葛は又根から花から面白し
衣張の指圖まばゆし美人草
淀ぶねの笠やぬなはの花盛
山梔子の花にも耻よ行〱子
針有と蝶に知らせん花薔薇
蝶の羽も染に通ふや紅畠
垣越に盥覗く歟たち葵
山里や枳穀(殼)の花に尻合
手鞠花も枝に動くや沓の音
泉水を淀に見なすや風車
紫陽花におもたき朝日夕日哉
隠れ家や足音知らぬ苔の花
忍冬の香を尋ばや金の蔓

その匂ひ茶にもみ込や華茨
旅人の咽乾かすや茶挽草
さつき咲上ミや大河を一跨
鎖おろす人の心や牡丹畑
散あとに罪こそなけれ花柘榴
暮かねる日の尺取歟栗の花
何の葉を借て詠んれ(連)だ(玉)ま草
散時にねばりは見えず黐の花
學問の目を驚かせ麒麟草
鬼燈や弟坊主は喰たがり
橘に鶯も啼やどりかな
風蘭に手水を分ケて一柄杓
凌霄は老木に伊達を着セにけり
晝顔は知らず夜見セの花盛
虫干や畠は綿の花ざかり
老僧の箒にさとれ朝露草
虎の尾も咲や千里のことし竹
夕涼射干の風借らん

花盗む人はあらじな瓜畠
説法の扇に散や合歡の花
鎌倉は夏さへ寒し雪の下
蒲の穂の蠟燭立て涼かな
山中や樒の花に歌書ん
百生や花の時から鳴やうな
早乙女の疇に并ぶや半化粧
玉簪(ぎばうしゆ)の咲て待けり橋普請
夕皃の花に不形はなかりけり
やがて剃兒も遊ぶや芥子の花
雨に咲鬼一口や百合の花
赤染と娘譽るや紅ばたけ
うき草や大公望が裾に咲
鐘撞の俗を笑ふや芥子坊主
隱れ家の昔がたりや金銀花
白鷺は身仕廻早し半化粧
撫子を見てや乳の張布さらし
卯の花や風炉の窓にも朝の雪

石竹や蒔た扇も今いとふ
泉水に石橋有て牡丹かな
市中や世を紫陽花に藪がまへ
夕陽や山を東に桐の華
蓮池やその寺建た土の跡

夏 以下不レ分レ題

諫鼓鳥われもさびしい賦飛で行
若竹や雪の重ミはまだ知らず
水に山書せて賦る螢哉
花よりも一雨きかせ蓮の音
初瓜や都へ出れば金の蔓

壬生にて

山もゝの頃は人なり壬生の猿

大和橋

みじか夜や人音あまる大和橋

東山菊水

水桶の菊いたゞきや若楓

祇園二軒茶屋にて

さびしさをしらぬ水鶏や豆腐切

例より寒ければ

かさね着を笑ふな庭の若楓

有明のゆられて殘る青葉哉

薄曇る空に紛れる樗かな

石壇を下ればもとの暑さかな

河骨をくだく罪有鵜ぶね哉

蛙子もおよぐ手出來て五月雨

白雨や晝寐の夢も流れ込

こも僧は笋指てもどりけり

孫の歯も揃ふて遊ぶざくろ哉

人の閑居を尋て

枝折戸や我目印は忘れ草

洛陽に住寺に遊びて題三弦

三味線はよしの青葉の東山

祭の日は女の童まで、葵かづらをかざして行かふさまこそ有難けれ。

笄の蒔繪紛るゝあふひかな

清水寺開帳に詣て

切ひらく道も千年や夏木立

曾平老人の旅宿は、東西の石垣を見ひらき、暮ては万燈の中に遊ぶ。

嵯峨妓王寺に遊びて

三弦を聾にして飛螢かな

雨中卽興

旅人に昔がたりの新茶かな

石山開帳に詣て

五月雨や二階の曲も瀧おとし

瓢の銘を望まれけるに、猿衣となん名付て

鳰照や猶有難き夏の月

五月雨の蓑にはあらで猿衣

八十の人を賀して

蓮池や泥龜に鷺の置合せ

大和古山がもとにたどりたる日、霖雨の晴を得て

松も友竹も丈なり夕涼

大和の宗祐精舍に遊びて

脫捨た合羽も嬉し蟬の空(カラ)

蟬啼や山を芸窓の哥枕

難波の人に對して

ものゝ名の伊勢も難波も杜宇

水無月六日、越の海人に訪て

水無月の六日を我は契りけり

廿年を經て洛の吾仲にめぐり逢て

いざ顏の古びくらべん苔の華

加賀の牛睡・若推に問はれて

茶も菓子も化ゝてはなし麥の中

眞言院にて

一聲の祕密はしらずほとゝぎす

茂秋が落髮を祝して

剃刀の跡くらべばや麥ばたけ

越の白推が內外の宮に詣でけるに

信心のおくや見え透夏羽織

尾陽の竹夜に枝折をたゝかれて

麥苅て鶉の朝寐見られけり

大和五條の寺を尋て

夏ながらよし野につゞく山なれば

大和の古道に訪れて

麥の穗を茶筌に古茶のいろり哉

尾陽の巴静に問はれて

十德のひとつ欤袖の凉しさも

洛の素雲が律庵を尋て

透垣に茨の花はなかりけり

隱者を尋て

花の名の夏なき庭や雪の下

洛の茶店に遊びて

枕には足らぬもよしや初眞瓜

笑醉がもとに旅の勞をたぐり寄て

白壁をうつして蚊屋の月夜哉

古山亭にて

夏草もほどよし庭のつゞら折

長谷水樓に遊びて

欄干を舟にゆするや蟬の聲

湖雲子が旅寐を尋て

たづね寄句ひや炉路のすかし百合

出羽の嵐七に對して

花に出て道の日數や夏木立

五月の頃、洛の山只がもとを尋しに、旅瘦を忘れよと、主のもふけまめやかなれば

竹の子の葉になる迄を凉ばや

東山に遊びて

十万家見え透藪や青すだれ

五月六日橘次亭にて雨中吟

橘の軒や菖蒲の後の雨

古山亭にやどりけるに、卯月の空いまだ寒ければ

あたゝかに牡丹の家の旅寐哉

一とせ茂秋いたはる事有しを、大和にとゞめて、京へ別るゝ時

めぐり逢ふ日迄散すな風車

越の龍従が扇を贈しに

凉しさを百里封して扇哉

何某が居を琴舍と號して、その名に四季の題を配り、句を乞しに

松風のしらべに薫る曲は何

五月五日、五ゝ齋月次の初會に

交りを結ぶもけふのあやめかな

留主庵の主、鶴を夢見て、つとめての日笋を得たりとかや。一富士二鷹といへど、此鳥こそ夫にはまさりて目出度齢なれ。又竹は直キ心の君子になぞらへて、今更いふべきにもあらず。さればけふを千とせの初として、七十の童子に一句を贈る。

竹の子のその子の其子その子まで

加賀の雨子に對して

問れても只くちなしの花なれば

越の其汀に對して

さびつける旅寐や竹の若ざかり

越の圓巴に對して

卯の花や越路も輕き笠の雪

加賀の山隣が問來りて、扇をめぐみけるに

封切ばはや神風の扇哉

大和の國に連雜さかや、老若打よりて遊ぶ日あり。山田村の兎子がもさへ招かれて、予もその遊びに雜りぬ。

遊ぶ子も祭に似たり紅ばたけ

麥雨亭と別號を贈けるに

麥の穗も茶たつる頃や窓の雨

加賀の千代女に、洛にめぐり逢て

九重を一重で步行早百合かな

茂秋しばらく奈良にありし時

うき草や濁らぬ花の咲所

加賀の素心尼が、我麥林を問來りしに

脫捨て道に咲すや鹿子百合

東武何某に訪れて

下闇や咄しをさぐる草の窓

洛の橘次に旅宿せしを、越の桴仙に訪れて

暖簾の橘知てほとゝぎす

萩原の冬花亭を訪ひけるに、雉子・山鳥の庭籠有ければ

山鳥を庭に繪かきて牡丹哉

十方庵茂林は樹下石上の三宿をいとひて、かしこに走、こゝに遊ぶ中に、足びきの大和はしろへ有て、此道の好士にちなみ、彼地に行かふ事年あり。今又四季・吳竹二亭の人々にしたはれて、錫を爰にとゞむ。されば市中にして市中にあらず。閑居にして閑居ならず。豆腐にたよりよく、溫飩のさめぬは來る人の幸なるべし。

茶莚に山路付て枝折かな

何某に訪れて

水鶏かと枝折明れば風薰ル

加賀の五菱、麥林を問來りて、一炷の香を留主の扉に殘せし風雅の薰りを感じて、其國へ一句を贈る。

香の名の初音も今ぞほとゝぎす

花洛に遊ぶ日、芦呂人が順禮行脚にめぐり逢て

こちらむく笠の拍子や風車

加賀の三老人に對して

卯の花や千とせの松の若白髪

茶後菌といふ別號に句を乞はれて

月花の目覺し草や茶の匂ひ

洛の仙行亭に遊びて

まねかるゝ方へ吹るや風車

大和文谷が新宅に納涼して

葛水や吉野丸太の新座敷

十方庵の主は洛の漂泊に我杖を助けて、けふぞ柴門を開けば、留主居の初祖に長尻な白眼れて

問えばいはず問ねばいはすかんこ鳥

幻々庵　詞書畧之

涼しさやどれ置なをす山もなし

大和冬花亭に遊びて

堺越の薬屋を富士の下涼ミ

安濃津原氏に遊びて

靜さを市中に卜てほとゝぎす

高野女人堂にて

百合もその姫といふ名にしほるゝ歟

高野蛇柳にて

我目にも柳と見えて涼しさよ

高野木食堂にて

猶哀栗も蜜柑も花の時

麥林集（中）卷三

秋部

初秋

秋たつや野はまだ夏の花ながら
秋立や風はとし寄ことし竹
香久山に干ものは何今朝の秋
凌霄の花吹消して今朝の秋
秋きぬと目に見せる桐の一葉哉
秌たつや筏も水の調子竹
秋きぬと窓に先見る反古張

七夕

月は入星はたしなむ今宵哉
肌寒きはじめや星の別れより
星合や手織の袂ひるがへし
鵲のその細脛やはしばしら
あの雲のあちらを行歟女七夕
鵲や三ッ四ッ二ッ橋かけに
朝良に紅粉うつしけん女七夕
干瓜の舟さへ出たり星迎
行水に數はかゝじな星の戀
彦星もけふ逢坂や牛車
七夕にかして躶や竹婦人
立琴に一葉のさはる今宵哉
能因もけづり屑なし鷺の橋
傾城のその足わたせ天河
七草にけふは音なし星祭
夕風や浮木も薫る天河
立琴や秋海棠の爪はづれ
たて琴に風も雲井の調べ哉
星合や橋を崩して明烏
天河橈の雫も水祝ひ
星合の濱の眞砂や哥も詩も
星合や顔隱すほど雲のきれ

魂祭

指折に他人も入るや魂祭

蓮池を隣にもちたれば

蓮の香を窓に運ぶや魂祭
不拍子に誠有けり玉まつり
小車に咲やことしも玉まつり
定の馳走もかなし玉まつり
日に見えぬものゝいそがし玉祭
磨の音小家がちなり玉祭
笋の好ミもなふてたま祭
葬は二日もまたず盆三日
秋を知る蟬猶哀れ魂祭
蚊帳に寐て哭猛思ふや玉祭

八朔

八朔やおどりの足をかしこまり
鷄頭に酒の足らぬはなかりけり
肩衣の蜻蛉行かふ節供かな

待宵

待宵に契る梢やあすならふ
まつ宵のひかりや翌日の化粧迄
松虫も月の名を啼今宵かな
待宵や立つくしたる峯の松

名月

やがて染る山をさらすやけふの月
名月や押合影は六哥仙
寐た家を白眼やうなり今日の月
夜步行鳥何〱ぞけふの月
粟稗のうつぶくはよしけふの月
名月や橋を落ても船の上
名月やいつもの山を照せども
名月や濱邊の鳥の背高し
名月や譽られて飛燈取虫
名月や殊更御簾の揚かげん
今宵猶月は濁さじ一口
名月や樱の陰も憎まるゝ
三味線に我は招かんけふの月
献立の數さへ見えてけふの月

立琴もけふは寐させて月見哉

下手の漕船も又よしけふの月

名月や更て虎溪の笑ひ聲

名月や芋堀坊も僧正も

名月や金魚銀魚に散柳

けふの月かたぶく迄の二階哉

作り木の陰は耻べしけふの月

名月や岩戸の暮も面白し

夜ならぬ藝はさびしき月見哉

長明が氣は千疊や今日の月

芋喰ふた共畑へ迄月見哉

名月や茄子畑に人の聲

水晶に芋つらぬくや月の照

名月や糞船も行伽羅も行

朝熊村にて

翌日の夜は又遠山や里の月

病中吟

名月や起て詠る夜着の山

病後吟

名月や我は七歩の床はなれ

蓮臺寺の里に遊びて

月のため苅てや早稲の一畝町

十六夜

十六夜や家出の遲ひ人に照

十六夜や行水の間の闇は有

けふは又二八うどんの月見かな

十六夜の闇の間や丸行燈

鹿

鹿の音の屆かぬ山はまだ青し

鹿の聲心に角はなかりけり

鹿の聲呵る牛にも角はあれど

身ぶるひは尾花の雫や夜の鹿

金岡の屛も寒し鹿の聲

鹿の音や登〱て谷に聞

谷水や鹿の爲には天河

風の手に引のばしけり鹿の聲

山姥の角は落すや鹿の聲
色替ぬ松にさはぐや鹿のこゑ
鹿の音や案山子の形も戀のはて

重陽

花に遊ぶ鳥も頰赤やけふの菊
八重菊もけふ九日の匂ひかな
來る人の匂ひに知るや菊のけふ
醉て來る足もとも菊の山路哉
菊畑へ物巾とゞく節供かな
つと入ば節供にも有菊畠
繪心も襟に知れたりきく重

旅宿吟

菊の日の甘露を得たり旅の瘦

病後吟

菊の日の兒に還るや我天窓

十三夜

盜人に猶照月や大豆畠
野も山も狂言替て後の月
詩歌にも品玉有て豆名月
豆がらは木に鳴けふの月見哉

題山

階子田をかぞへて照や十三夜

題海

龍宮の姫は幾つぞ十三夜

閑居

藁一把他の蒲團や後の月

穐 以下ホレ分レ題

蚊帳ひとへ仕廻て近し鴈の聲
初鴈や一聲屆く文字が關
世の中の踊は丸し十七夜
近付に覗あてたるおどりかな

題座敷踊

三千の聲有風の女郎花
秋もまた腦居りたる暑サかな
入相に仰向て居る木槿哉

途中吟

此道へ迷ふたもよし草の花
堅横に風の機織花野哉

夏草の時惜れた花野かな
朝貞や竹のあちらは日暮迄

月浅律庵を尋て

蕣の鎖哀なり片折戸

隠者を尋て

蕣に習ん垣の覗キやう

蓮臺寺瀧詣

蓮の實もともに飛込や瀧の音
きりぎりす聲の長ひとみじかひと
金の間をさびしがらする鶉かな
梟を布袋のやうにわたり鳥
餘の鳥の先へ渡して火燒哉
夕貞も枕仕直す野分かな
西東野に別れたり角力草
洗濯の水かけ草や川の端
名所やいつの世よりの翁草
豢好が莚は何所の稲の花
女郎花野宿の笈の主せよ
落穂拾ふ鶴か夕日の影法師
泣て來て子も飯喰ふや稲の中
錢金に緣なき貞の案山子哉
秋ふけて木葉衣の案山子かな
雨露に地藏は濡て案山子哉
鳴子ひき已が畫寐に驚きぬ
きせ綿に髮なぞゝけそ菊の花

朝熊嶽にて

山路來て茶にも匂ふや菊の花
柴苅の黑主休む女郎花

放生會

山雀や藝まで付て放生會
菊月の飛脚もかつら男哉

一ノ瀬寺院を尋て

踏分つ楷の色を見返つ
淵水の藍染かへて紅葉哉
此川の越れぬもよし村紅葉
猜の田夫に荒す紅葉かな

何某が庭に紅葉を植ければ
竹の葉に色を分ヶてや薄紅葉

菩提山にて
林間に仁王も酔ふてもみぢ哉
紅葉もと樹ならずや菩提山
染ものゝ手も洗はずに礎かな

古戦場にて
股ひきで松も立たり蔦かづら
餘の木より櫻にまとへ蔦かづら

鳳來寺山中にて
竹の葉に落込音や秋の水

一ノ瀬にて
一の瀬も今は幾瀬ぞ秋の音

加賀山中温泉にて
仙人になる歟湯入の髭の露
見くらべる隣も遠し軒燈籠

初秋吟
羿しさの門に入なり三ヶの月

文月六日吟
翌日を待軒のしのぶや星の影

題米守
百はまだ若ひぃ雀やことし米

山田氏何某がもとにて
蘭の香にまよふや頭陀の置所

漂泊の雅子に問れて
菅笠の羽根も休めず渡り鳥

一ノ瀬にやどりて
落鮎の一夜肥たり水の淀

稱行院に遊びて
我は此花に乘たし寺の菊

坂氏に旅寐して
綿の廬早稲のほこりの居ちから

兒童に對して
蟷螂の肱の輕さよ給仕盆

午潮亭に遊びて
世の音に露はこほさじ菊の花

藥店に宿して
夜寒にも風ひかぬ宿の匂ひ哉

參士亭に遊びて
菓子盆に秋を忘れぬ主かな
杉夫亭にて
生て見る菊に又有秋の味
乙架亭
菊桔梗一間〱の匂ひかな
尾陽の連中に對して
その國も冬も隣や友千どり
和劦百地氏に杖を休て
山はまだしらぬ屏風の紅葉かな
一夢庵にて
這まとふ蔦も他力の庵かな
百地氏の別墅にて
秋涼し早稲の匂ひの右ひだり
居推法師が茶を贈しに
この茶にも祕密やあらん秋の水
坂氏にて
杖かして菊より若きあるじ哉
山田氏の別墅にて
秋はあの伊吹に有て蘇鉄山
江劦の何某に訪れて
汐踏に堅田の鴈や二見迄
李仙文志に對して
早稲を出た笠の匂ひや美濃尾張
越の工曲に訪れて
菅笠の菊いたゞきや旅すがた
東武貞國に對して
日黒ミのくらべもの有菊の花
信劦連化が俳諧の生質を稱して
たのもしき八日の菊の匂ひ哉
畔古亭にて
月讀の森の雫や丸硯
李仙が別號の芦呂亭に題して
鶴も遊び人も遊ぶや芦の花
出雲より評を乞へる一軸に發句せよと望れて
分かねる言葉の色や秋の山
氷見の野刀、有磯の哥仙貝を袖に

して、三五の月に參木の草扉を敲く。

貝に照有磯の月を二見哉

左欄亭にて

常盤木も律の拍子や雨の庭

未菱亭にて

松青し膳にむかへば紅葉鱠

一とせ竹ゝ庵のかり寐に、燒蛤の主せられしも、此菊月の頃なりけり。としは茂秋法師をいざなひて、その時其席の興をおもふ。

蛤のあとに最ひとり柚味噌哉

桑名永眞院にて

鶯は來たばかりなり梅もどき

左柳亭にやどりて

籾磨の哥を忘て寐夜かな

秋風や疊に拾ふ哥仙貝

何有亭にて

遊べとて蔦も招くや庭の秋

加藤氏のもてあそべる石有、是に名を乞。折節の秋に稻干わたしたる匂ひも、いさ目出度かりければ、稻葉山ともいふなるべし。

燕の石にはあらで稻すゞめ

八十の翁の旦暮の助に、子孫あまたさかえ侍るを見て、

立居にもかゝえ咲有庭の菊

旅僧茂秋法師は近頃十方庵の名をうつして、萩原の里に草堂を結び、一鉢の足を休るも、そこの人々の功力ならずや。されば圓位上人の、世の中よかれ我乞食せん、といはれしも、今さし此秋の事なるべし。

山かげや敷ものとてもとし藁

越の左圭が俳名あらためたるをとぶきて

名がはりの杖もあやかれ菊の酒

深草は鴫が啼ても秋の暮

ものいはぬ人揃ふたり秋の暮

秋の暮ひとり漕行槐の音
ゆふがほや秋は扇に乘せられず
不雀の名に對して
山雀の是からぬける輪は幾つ

暮秋

行秋の道〳〵こぼす紅葉かな
梢から來て梢から行秋ぞ
ゆく秋や馴染ぬ鳥も有ものを
行秋の尾をとらへばや蔦かづら
ゆく秋の梢詠て佾ひとり
澁柿の心づよさよ秋の暮
やがて鰒喰ふとおもへど秋の暮
秋の暮猪垣の齒もぬけて行
九年母は尻もくさらで秋暮ぬ
九月晦日雨降ければ
隱れ蓑有てや雨の神送

麥林集 卷四

冬部

十夜

小坊主の伯父に逢たる十夜哉
祖父祖母の京にも多き十夜哉
鷄頭は立往生の十夜かな
蓮池は根を拜るゝ十夜かな
豆腐屋も出直して來る十夜哉
菊はみな老て十夜の綿帽子

時雨

其柴の濡色買ん初しぐれ
牛の子も鼻ゆるされて時雨哉
おそろしき雲も心や初時雨
赤ひ實の何〳〵殘る初しぐれ
木兎の寐やうとすれば時雨かな
神鳴がなふて待るゝ時雨かな
杣小家の燒さしは何初しぐれ

藁焼てうちは音なき時雨哉
僧は歸るさらへの道や初時雨
瓢單（單）の形も定るや初しぐれ
窓明て双紙洗やはつ時雨

千鳥

笘（苫）舟の隣もなふてちどりかな
吹行や千鳥も川のまがり形
吹れ來て畠にあがる千どり哉
星の夜の梨地に鳴や村千鳥

小俣にて

こちらでは又おもしろし川千鳥

雪

初雪やまだ持足らぬ藪ぢから
梟の宵のたくみや今朝の雪
落書は鳥の跡や今朝の雪
風の手に酌子果報や竹の雪

大湊にて

雪見よと帆をはづれけり駒が嶽

霜月十五日小野ゝ湊ぃ汐干に遊びて

月寒し海髪や汐干のひしき物
月影に乾て寒し標冷（澪）
岩間〳〵殘るは氷る汐干哉
吹れては火燵へもどる汐干かな
影冴て月の漁村の汐干哉

臘八

臘八や八瀬の薪も山を出る
臘八や梅も眼のひらき初
埋火や曉見れば星ひとつ
臘八や空裏を走る豆腐賣
臘八や猫の座禪は時を知

冬 以下不ㇾ分ㇾ題

木兎の目たゝきしげき落葉哉
耻かしの森になりたる落葉かな
柳にはうけて見たれど落葉哉
木枯や蔦はゆるさぬ峯の松

かへり花日の短ひぞうらみなる
秋風を吹よはらせし歸花
歸花に盜氣はなし懐手
五人張に十三束や大根引
綿とりに和らいだ手を大根引
十方に里の道あり大根びき
麥蒔や一畝は又向ふ風
麥蒔は女もすなり鍬遣ひ
枯芦に沓や殘して池の鴨
達磨忌や拂子にさはる蠅もなし
足高に橋は殘りて枯野かな
のけて有火燵にあたる麁相哉
うかれ女に取巻れたる火燵かな
むらさきの雪を待ばや水仙花
我馬を栖にして行寒サ哉
蛇の枕見たか月夜の網代守
粥腹もしば〳〵むなし鉢たゝき
水鳥の猗振かたや竹生嶋
水鳥の玉取得たるきほひかな
木のはしのやうにおもへば生海鼠哉
我植た柵に凌ぐや老の肌
枕にもならぬ豆腐や冬籠
張廻ス壁に伽あり冬ごもり
喰ふ事も濱の眞砂や冬籠
寒菊は雪を崩して咲にけり
鶯の尾の働きや冬至から

霜月白魚を題に探て

白魚や一陽動く海の中
靑ふなる上戸も吹革祭かな
冬の月白し豆腐に梅の花
冬の夜の星や落けん梅の花

山寺にて

飯臺に咲分ひとり冬の梅
冬枯をひとり笑ふ歟赤椿

病後吟

起直り鳥遊ばすや雪の竹

寺院の落葉
落葉しても又觀音の誓有

題修羅
水仙に弓ひく草はなかりけり

畜生
鷄の忘れては寄霰かな

素道が新宅を賀して
家にまで尾鰭の付や惠美須講

うかれ女に對して
水仙やものにさはらぬ身のひねり
鏡にも曇らぬ影や冬牡丹

杉夫が入庵の時
世の中のからくり覗け薄氷

東棠がかたより年の暮に、百の錢
尾にして年の寒サ哉　と申こした
るかへし
行としの尾にする百もなかりけり

雪の朝閑人を尋て
我あとを我と呵るや雪の朝

兎士亭にて
冬籠椿一輪燈しけり

越の人に對して
笠の名の網代も寒し五十鈴川

何某が鴨と梅とを惠けるに
鴨の羽を借して飛すや冬の梅

桑名可有に訪れし時
浦千どりどちらの山も見えて居

乙鳥亭に招かれて
金屏に乾く時雨のやどりかな

五條坊遅三亭にて
白壁によごれ待なり初しぐれ

榎倉氏に招かれて
飛石のしめり加減やはつ時雨

越の至明に時雨蛤を贈るとて
時雨るゝといふ名甲斐あれ二見がた

はじめて參林の閑居を結びて、いらかを並べたるを、世の人は富貴に見なしたるもおかし。

隠れ家や余所から見れば冬牡丹

見龍が十一庵を結びし時

茶わかしてこゝに廬山の落葉哉

越の白推、世を雪苔下といへる別

墅に遁たるが、日暮樵哥の男女行

かふちまたさ傳聞て

小原女に化粧は戻（貧）し越の雪

歳暮

瓢箪のうき所なき師走かな

麥林に居をうつして

麥飯は畠に青し年の暮

年の尾にあらむづかしや雪霰

根深一把囉（もら）ふて年を忘れ艸

夕顔の座には何置としの市

雪をはかる隙な手も有年の市

四季庵の年忘に

春夏秋（一字缺）みな面白し年忘

余所からの木魂に煤を掃せけり

煤掃や疊たゝきも菊の杖

歯朶椈火燵の山にとし籠

病後吟

春へ越達者見せばやとしの坂

紙衣着て見て居や余所の衣配

五ゝ齋の餅搗に招かれて

餅花によし野を登る二階かな

したしきかたより、年の寒を凌げ

よさ、大黒頭巾さやらんおかしき

名のたまものを得て

世の音を聞ぬも嬉し丸頭巾

餅は杵がならはせとこそ申なれ

米の飯さいへる五文字を下に置、

豆蒔をなら茶にしたる米の飯

としの市朝熊の嶽の眞柴かな

明れば知命さかやいふ春なれば

我數も百の片荷やとしの市

町中の師走に交る雀かな

としの尾をしらで遊ぶや庭たゝき

搗立や餅は方圓のうつはもの

大黒の口なたほこりや煤拂

すゝ掃や馬も嘶藪の中

梅が香や師走の闇も力あり

酒もなく餅も搗ず、たゞ炉邊に高臥して春を待のみ。

隱れ家やひとり按摩をとし忘

一に俵炭も躍ふてとし仕舞

年内立春

梅が香の一封切ルやとしのうち

佐保姫の荷は居たり年の內

居風呂に春を跨ぐや年の內

としのうちに白の先手や梅の花

春たつや節衣は機に冬籠

鶯も一首詠けりとしのうち

麥林集（下）卷五

神祇

天神奉納

鶯も三枝を習へ梅の花

南枝よりけふは北枝の梅淸し

通夜の目を覺せと梅の雫哉

枝もその長哥短哥や梅の華

歌も詩も御髭の塵や梅の花

田に畑に百味わかるや梅の雨

白雨や莖も流て神ごゝろ

青梅に鶯もすゐの初音かな

冴返る日も春にして自在竹

影淸き御酒の匂ひも花柚哉

卯の花に筆のふるびや神の前

神風や梅を飛せて鳳巾

神の威を笠にや梅の匂ひ鳥

桃は藁檜皮の軒や梅の花
虫の音も髭に恐てや草隠れ
春へ飛用意や輕キ梅の雪
信心の跡見せて行雪間かな
綱敷の匂ひも高しことし藁
神垣の枝に無理なし梅の花
苗代や詩哥のたねもをのづから
梢まで御酒やうつりて薄紅葉

北野奉納

木の間から繪馬に名乘や明烏

菅神八百年忌

飛梅や爰に榮て八百の春

初瀬天神奉納

尊さよ樹はなけれども雲のみね

北野奉納

神垣や百味磨出ス鏡餅

二月末の五日は菜種の神事さかや。

神垣や菜畠は又蝶の舞

北野遙拜

凉しさの紙屋川有連哥堂

北野奉納 三物

燕も百度の連や黒羽織
御手洗むすぶ末は苗代

花の雲おもしろふ夜の明て來て

月次初會 天神奉納

御手洗や蛙の哥もその日から

加良洲の社奉納 哥仙の讃に

朝霧や明石を爰に伊勢の海

龜山八幡宮奉納

松に藤その結びめも男山

星合社奉納

是も又雛の夫婦や二ッ星

宮嶋奉納

うき鯛や是も神代の一雫

加良洲奉納

蛤も足では踏じ神の海

大ゝ御神樂に

八乙女も袷出立や山まはり

星谷の社奉納

立並ぶ宮はどちらを女郎花

加良洲社奉納

染貝も咲や千種の神の秋

越の神明奉納

神垣やふとしきたてゝ越の雪

秩父神明奉納

雉子の尾を裾に曳まはる宮居哉

矢立鴨奉納

弓張の影に白羽の鳥は何

嵯峨野ゝ宮にて

卯の花も過て黑木の鳥居哉

和劦稲地神明奉納

八乙女は田に諷ふなり夏神樂

祇園會

あけほのや岩戸山からねり雲雀

神路山の紅葉を法度口に詠て

紅葉にも五百枝の影や五十鈴川

春日社奉納

行秋や若草山の名は枯ず

關東井椋社奉納

鶺鴒も尾で招くや神迎

つゞら石にて

出代の神も有てやつゞら石

夏山を十二一重やつゞら石

神明奉納

五位鷺も交るや夜の神樂哥

星谷社奉納

手向ばや梶の若葉に旅硯

大和萩原神社奉納

老若をたゞ撫子の神ごゝろ

同稲地神社奉納

秋もはや隣に朱の神門哉

餞別

蓮二法師を送る。

青柳のほだしや解て又どこへ

涼菟を送る。

水鶏にもぬかりはあらじ旅の宿

桐甫へ

浦山し都の花に黒む時

蓮二坊へ

余の道はあれど遊行の柳から

桐甫へ

荻を出て難波に向やほとゝぎす

出羽嵐七へ

卯の花を道のあかりや何百里

美濃の木公、伊勢にしばらくさゝまらんと云けるが、やがて歸りなんとありし時

廿日とは牡丹のうその別れかな

廻國の人の三熊野に赴を送る。

餘所見すな道の便の蔦かづら

茂秋が大和へ赴を送る。

卯の花の雪踏そめよ笠に杖

汀芦へ

出雲への連には早し秋の旅

茂秋が和泉へ赴に

はらふなよみな名所の麥ほこり

蓮二法師へ

見ひらくや花の天氣のあみだ笠

茂秋へ

時は今都の富士も花の雪

みのゝ李仙へ

道〳〵も只は通さじ土筆

嵐七が洛に赴を送る。

都へは又卯の花のよごれ時

素道・春波が京師に赴を送る。

鈴虫の鈴鹿にいさめ馬の鈴

青錐が都に赴を送る。

道〳〵や大津繪にまで藤の花

杉夫を送る。

巣を誰に預て雲に遊ぶ鳥

茂秋へ

鉢の子に先早稲の香のこぼれけり

曾平が加務に歸るを洛にて送る。

ほとゝぎす見返れ木の芽峠から

茂秋へ

菅笠の仰向そめに雲雀かな

佐渡の素雪とともに大和にありて、彼は伊勢に行、予は萩原にとゞまる。

荻に行も萩にとまるも秋ちかし

水無月の頃出羽の芦錐を洛にて送る。

文月の近きを別れぢからかな

湖雲に別るゝ時、あふぎに讃せよとありければ

そら言はむかしまとの扇かな

古山が大和へ歸るを送る。

花の雲告たら頭陀を馬に鞍

悦峯へ

張笠や風にまかせて風巾

難波へ赴く其方を洛にて送る。

淀ぶねのどち向時ほとゝぎす

素心が山伏を伴ひて三熊野に詣るを送る。

すゞかけも背中に散て山路哉

洛に赴く人を送る。

すげ笠の都向日や風かほる

甲務に赴く人を送る。

便せよ時雨〳〵の富士の形

素道をおくる。

駕卵の雀はだまれほとゝぎす

風人を送る。

疇に寐てぬりこめられな頭陀袋

半睡が洛に赴を送る。

京を耻るものなし頭陀の土用干

素心尼を送る。

春風に髪の苦はなし櫛田川

風壷が奈良へ赴を送る。

なら坂や駕籠の紅葉もふた表面

春波が北國へ行を送る。
寒からぬ門出や雪の綿帽

茂秋へ
美し綿の大和の冬ごもり

卯月の末越の日推が洛に赴を送る。
京へ向日や馬駕籠の足揃

春波が西國へおもむく時
姫百合も鬼もあるじや草枕

夜白へ
歸るさは雪の木末を蟬の聲

早稲の香に分入古山を送る。
案山子までこちら向けり朝あらし

茂秋へ
梅寒し被山帽子の朝日影

左欄を送る。
陽炎の笠吹戻せ麥の波

尾陽の三子が順禮行脚を送る。
若草に草鞋かけんや笠に藤

古山を送る。
有明に螢閉こめ旅の窓

左雀が難波に赴を京にて送る。
川ふねの尻も詠て螢かな

茂秋へ
持歩行巣や風呂敷の旅雀

素心は洛に留て、予は伊勢に歸る。
すげ笠や脱と着るとの別れ霜

鵜をすける畔古を送る。
行先の目も覺安きうづらかな

素道が美濃に赴を送る。
籾臼の廻りも早し秋日和

長良の有琴仲志へ
やくそくの繩うごかせよ鵜飼舟

蓼雪を送る。
たつ鳥の跡も濁さず花卯木

東武の何某へ
乘かけやう津の山行蔦紅葉

東棠が中國へ赴を送る。
夏近き淀の渡ぞ美し

扇の一面を送る。

神風やすげ笠の帆も夏日和

加賀の里楓を送る。

旅だちのよごれめでたし田植哥

朝貝舍春波は、卅年來俳門に入てより產業に心をよせず。旦に松島をこひ、夕に象潟をおもふのほか他事なかりき。さればしきりに漂泊の志を發して、姿は念佛宗のやはらきにたより、居士衣の袂に念珠の音を隱すも、おかしき首途なるべし。

張笠に音聞替よ一しぐれ

十方庵が發心染衣の頃は、卯の花の雪を踏初て春秋十とせに餘れり。とし安樂坊が漂泊に、冬がれの梢を杖にたどる。かれも是もねぐら定めぬうかれ鳥の、行衛もなを心細くぞ覺る。

初雪や跡な鳥は鼠いろ

女中を伴ひける古山を送る。

綿をぬぐ手も有旅の更衣

加茘生可を送る。

笠輕し白ねはしらず雪の花

松木氏加茘に赴を送る。

涼しさや先門出から御田扇

越の千丈法師、暮秋の頃より我麥林に遊びて、霜ふり月のけふ、故鄕に赴きける紙衣の旅姿に落書して

無理に年寄らせて寒し旅姿

東棠が對馬に赴を送。

時雨にも海靜なり旅硯

桑名の乙架が競馬を殘して、洛より古鄕に歸るを送る。

から尻を競馬に見なせ夏木立

暮春の頃東棠を送る。

夏へ手のとゞく首途や藤の花

春波が四國へ赴を送る。

行先の月を覺よ山の形
　花に莫華に明て和哥ハ浦波も猶うらゝかなる季仙・左帆の旅祭を羨て
櫻にも塩がまの名や和哥の浦
　蓼林に終夜長途の別れを惜みけるが、侍座に需ありければ春波に示す。
口きゝの雀に梅のすわひ哉
　湖嶺を送る。
行先の機嫌知れたり恵美須講
　素道を送る。
蓼蒔の笠も續くや三河まで
　美濃の可白老人、我草庵に一夜風呂敷をとゞめけれど、道すがら待人ありとて、今朝はや歸路の笠を見送る。
時雨ても乾く宿有旅羽織
　越の倚彦、おもはずも我柴門をたゝき、爰に信宿す。きのふは西行谷の古風に遊び、けふは冬枯の濱荻にまれかれて、かの蕉翁の、硯かとひろふやくぼき石の露　と殘されしむかしを感じ、波間の小貝に袂をひたす。されば千里の孤舟に歸路のおもひしきりにして、翌日は北方の時雨に笠をかたむけんとや。
櫻貝けふや二見を歸花
　きさらぎの末、みのゝ左帆に訪れけるが、暮春の頃洛に再會せんとちぎりて
あふ坂の關に待合燕かな
　何某山只が東武の首途を送る。
駕籠の夢覺て一富士初茄子
　左雀が土州に赴を送る。
涼しさの日記待ばや土佐硯
　湖嶺を送る。
早咲もあれや難波を中休

信彌梅二を送る。

馬士の手綱も今ぞ藤の華

素道がみのに赴を送て

時雨にも名のおもしろき美濃路哉

加彌伯李・乎哉が大和へ赴を送る。

なら坂や涼しさしるし晒時

留別

奈良にて人〳〵に別さて

旅烏跡は晒の夜明かな

加彌桃妖へ

湯の匂ひ胡鬼に残して別れけり

大和にありし時、しばらく京のかた見あるきて、又爰に歸りなんと云て

立歸る目印も有三輪の杉

北馬庄は我行先の夜寒を紅葉にあたゝめ、朝烏舎は鹿の音のさゞくかぎり送る。

目に耳に樂み得たり鹿紅葉

競馬の頃より爰に足をさゞめ、糺の涼風を跡に殘す。

見歸るやあとに音羽の雲の峯

一夢庵の名殘に、庭の楮葉に落書す。

別れ行跡はいそがし盆坊主

水無月廿日ばかり洛を旅立頃、素雲法師の一句に暑さの日數かぞへて、其時の名殘を惜む。

二見まで涼しさとゞけ鷹野川

大和龍口何某がもさを出さて

秋風や杖に漕出ス蚊屋の波

尾陽の人ゝに別を惜む。

尾張路や跡にひかるゝ大根畑

居推・茂秋の二僧は、をのがさま〳〵のうき巣に歸る。予も故郷に赴きければ、文谷ひとり跡にとゞまりて、反古の中の三尺鍬に何事

を夢見るさや。

麥に隠れ山に別れて行ゝ子

麥湖樓の遊びに酷暑の旅瘦を忘れて、初秋二日に爰の名殘を立別るゝとて

長尻の秋に驚く螢かな

桑名江向亭にて

刈仕廻ふ田にうつかりと案山子哉

曾平・舍朶ともに都に遊ぶ事日あり。けふや歸路の名殘をおもふに、いづれの年何れの所にやありけん、物書て扇引さく別れかな　と蕉翁の實情を感じて

ものかゝぬ扇涼しき別れかな

大和の人〱に名殘を惜て

朝寒や鞭もすゝまず伊駒山

麥林集　卷六

名所

寐ものがたりにて

近江から尻くわせたる夜寒かな

星川にて、桑名より喰ハで來たれば星河の、とむかしの人のおかしみもたふさくて

拾はれぬものは言葉の落穗かな

伊吹山にて

草餅の景圖はなひか伊吹山

有原寺にて

里の子の躶も涼し筒井筒

三輪にて

素麵に引帷子の裳かな

余古の海にて

烏目は白し鷺目は芦の花

美濃野上の里にて

萩を見て居れば薄が招きけり

乙芳・五蓬に風呂敷の助けせられて、けふは奈良の京に杖を休て

陽炎や脫だ所も三笠やま

筆捨山にて

春なれや筆捨山に土筆

木の芽峠にて

階子田をちからに霧の峠かな

細呂木關にて

關守もなびけられてや女郎花

篠原の池にて

今は又草の錦もなかりけり

醒井にて

醒井に紅葉の醉はなかりけり

醒井や芋も洗はず落葉せず

井手の里にて

玉水や蛙に這ふて田草取

寐物がたりにて

茶の花に老の寐覺や軒丼び

神無月の頃鏡山を過ぎて

麥蒔に早乙女あらば鏡やま

越を出て此山寒し鏡磨

姥が餅にて

旅人に亥子幾人姥が餅

佐野ゝ渡にて

卯の花や我は肌脫三輪が崎

鸚鵡石にて

此石の內ぞゆかしき秋の暮

琴彈の里にて

琴ひきの名や今も咲桐の花

三河鳳來寺にて

霧晴て六本杉に旭かな

市宇五さいふ村は平氏の末さかや。

夏艸の鎌さへ錆て哀なり

同所の寺にて

須摩(磨)寺の根や通ひ來てとし竹

桑名の濱の地藏は勝景いふばかり

なしo いづれの春にや、はせを翁も白魚の一句を、此堂の柱に殘されたるとかや。予も此秋のけしきに杖をとゞめて

蛤の宮殿見たり霧の海

逢坂の邊にて象を見侍りて

今やひく關の清水に象の影

冬の月の時雨に曇るも、一ふしの見所有とかや。秋の夜はさら也。此水無月の望は洛に遊びて廣澤の月に納涼を催す。されば春の朧の千金にもかへじとは、今宵の晴明にいづれなるべき。芋は栗のかみ（上）にたゝんことかたく、栗は芋の下にたゝん事かたしと、此二つの名に并べて瓜名月となん、ながめ明しぬ。

玉を産鴉の浮巣や池の月

桑名走井觀音にて

御佛に習ふ手多し秋の山

阿漕浦にて

打よする藻屑も寒し浪の跡

彌生晦日、田村川を過て

光陰の矢も行春や田村川

初瀬にて

陽炎や里は寐ぬる化粧坂

三輪にて

二もとの杉のむかしや藤の裙

美濃三俣

三俣や河鹿の聲に數はなし

石山にて

石山の石もくだけず飛螢

象潟といふ事を

きさかたやどちへ歸帆の鴈の聲

嵯峨三軒茶屋にて

影落て筏に枝や青あらし

千句塚

筆嶋を時雨寄てや千句塚

多氣の舊跡にて
里の子の問ぬつゞしを敎へけり
朝熊奥院より富士峯を見て
詠出す富士や縮地の一ト霞
朧の清水にて
草苅に問へと朧の清水哉
伊勢寺といふ所にて
井のもとを今も尋て杜宇
伊勢吉野といふ所にて
すゞかけやよし野を移す瀧詣
星川にて
影ふたつ見ん星川の水ならば
養老の瀧にて
百草を分つゝ涼し瀧の道
兒童の名を尋ければ、梅干之助と答ふ。折ふし其寺の梅盛なれば
見てのみや實を待寺の梅花
洛の双林寺西行庵にて
實櫻や言葉の種の蒔所

菩提山にて
五月雨や木魚も登る瀧の音
西行谷吟
耳洗ふ瀧はあれども春寒し
鶯は梢に啼て經机
上人の笠取あへず花御堂
尼達の手染は薄し燕子花
尼達に富士を見せけり雲の峯
洗濯に汲干尼の清水かな
花皿に紅粉のむかしぞおもはるゝ
瀧の糸染て落すや青嵐
此寺の虫干見ばや哥袋
寒菊はいづれの野から笈の内
傘さをおもへ落葉の破衣
圓位上人の五百年といふとし、此寺に遊びて
五百年枝には遲しことし竹

畫讃

蕉翁の像に
芳野見た笠美し花の雲

莊子の讃
菜の花の色にも染ず蝶の夢

眉作の讃
眉掃はあれど野飼の馬の面

海棠のかたに
海棠は春を靜めて咲にけり

竹林七賢の圖に
七人の耳をすますかほとゝぎす

蒲萄のかたに
藤に春暮て蒲萄に秋暮ぬ

杜若の畫に
かれ飯の蝶と化シてや燕子花

天の橋立の畫に
一聲のきれと(切戸)をつぐや時鳥

茄子のかたに
市にいそぐ朝紫の茄子かな

間鍋の讃
燕の舌はまはるや酒ばやし(帘)

富士の畫に
よし野には咲ず常盤の雪の花

鬼の首ひきしける圖に
百合の名の鬼もしほむや夕嵐

普化禪師の圖に
鈴の音雲雀は下になりにけり

布袋の讃
撫子に舟をひかせて夕すゞみ

人麿の像に
その筆も動くやうなり花の雲

畫は茶笠に淋しく、夜は空也の瓢に寒し。
仙人の畫に
淡雪に降れ歩行や鉢たゝき

布袋の圖に
きさらぎの瓜を冷すや瀧の音
山に似て袋もともに笑ひけり

水草に鯰を書る繪に
藻隱れの鯰の闇に螢かな
松に旭を書たるに
雨晴て朝日又よし一ッ松
稻塚に雀を書たるに
追ふて居祖父を笑ふや稻雀
猿の畫に
青柳の糸は額まず猿の山
骸骨の繪に
はてはみなあふぎの骨や秋の風
兎の讃
何を聞何を見て居秋の暮
七鵆の讃
七草の野に揃ふたり鶴の數
枯木に鳥の讃
かさゝぎの巣は晴がまし冬木立
鳥羽繪の讃
禰宜殿は目に見ゆるやら神迎
芙蓉に蝶のかたに
まだ痩ぬ蝶や芙蓉の暖まり
西行の柳陰のかたに
旅痩の我を見よとて清水哉
波に燕の畫に
燕は夫婦遊ぶや片男波
布袋の琴を彈ける畫に
鶯の琴に遊ぶや糸柳
水鷄の畫に
桶輪入の在鄕を步行水鷄哉
芭蕉の繪に
芭蕉葉や大手廣げる今朝の秋
鶴の讃
横平に案山子またぐや鶴の足
月花樓の讃
此うちに雪も有べしさくら花
猫の畫に
うかれ出る猫や火燵も閉ギ時
白雨の畫に
白雨や智恵さまぐ\のかぶりもの

月の讃

波間貝の畫に

一輪の雲に照勝今宵かな

奈良の玄梅老人が蕉翁の夢に感じたるその圖を摸して、丈艸子が、凩の身は猶軽し夢の中　と云しは元祿の昔なりけり。老人の生前に予が讃を望まれしも、今はむかしさゆかりの人〴〵の求にまかせて

春風や波こゝもとに哥仙貝

凩や夢といふたも後の夢

松に蔦のかたに

十かへりの松の若さや蔦紅葉

猿の畫に

楊梅に歯や草臥て猿の聲

野ゝ宮に月のさし出たるかたに

野ゝみやのむかしを照や月の眉

藁屋に時鳥書たる畫に

聞に出た留主の庵やほとゝぎす

燕の畫に

光陰の燕矢はやしとしの市

雪の竹に雀を書る繪に

豐年の雪に遊ぶや稲すゞめ

三番叟の畫に

種蒔や秋の穂に待鈴の段

牛の畫に

牛の背に今朝秋たつや草の花

蘭の繪に

蘭の香を髭に嗜やきり〴〵す

高砂といへる筆の讃

盆石の讃

硯にも筆の箒や梅の塵

蕉翁の二見文臺に、西行談抄にたとり給へば

晴て行跡にもの有初しぐれ

梅の題に文臺の發句望れしに

西行の秋尋ばや月日貝

鶯の哥や梅花のちらし書

嘯鳥舎の別號に

月花の目を休とやほとゝぎす

雀の畫に

雀子のより／＼竹のしなひ哉

悼

菊を好る人の身まかりけるに

菊苗に蝶もつばさをしぼりけり

梅雫が身まかりけるに

梅の跡しほる袂の雫かな

彿から乾かぬ袖の別れかな

鶯の縫てふ梅のあみだ笠

彌生五日身まかりける人のもとへ

面白き終や桃の醉ごゝろ

蓮二坊を悼

月雪を見盡す春や梅の痩

けふの野に我もをくれよ薺摘　と人日の一章に此世を去侍し人のもとへ

替る世や薺にあらで鉦の音

知て居櫻にほこり松に蘆　と辭世あれば

蘆に匂ひほこりにおもふ櫻かな

蓮の葉の笠や歸らぬ旅すがた

答なき枝折を戻る水鷄かな

涼苑を悼

何鳥の此跡啼ぞほとゝぎす

千長公を悼

音を入て鶯も此時や知る

彿の蚊帳にも透す夕あらし

驚きぬ世は浮草の花なれと

藥草も花で手向る夏野哉

野角が身まかりける時、妻の紫仙がもとへ云遣し侍る。

是もまた五月のけふのなみだ雨

鞠を好る人の身まかりけるに

其人を問へば柳の一葉かな

少年の悼に

葬の朝〳〵かなしたとへもの
招ても歸らぬ道ぞ花すゝき
墓にまで包むもの有綿畠
筆意を傳へられし人の身まかりけ
るに
問殘す悔や千種の花の數
尊き僧の身まかりけるに
雲に入あとのくらさや宵の月
喪に籠れる人のもとへ
一葉づゝ日數算へる柳かな
薄にも荻にも風の音ばかり
止らぬたぐひもかなし落し水
希因が妻の身まかりけるに
佛を野山にわけて女郎花
一日我を招かれしを思ひ出て
其時を一葉の船の暇乞
八月二日、武藏にて身まかりける
人を悼
おしまれて草にこそ入れ二日月

素心尼が身まかりける頃、したし
き人〻辭世もやと尋侍しに、その
さたなかりしとかや。されば不留
文字のたかき心も、ひたすらにか
なしくて
文月に殘さぬも哀筆のあと
柳後園の身まかりし時
佛手柑も眞向になりて秋暮ぬ
生前に剃髪しける人に
入月を鏡に法のすがたかな
名月も二ッ詠て世をさりぬ
老母の喪に籠たる人のもとへ
順に散木の葉なれども秋の暮
つねさへもかなしきものをさよ千鳥
木因が尋しに、此ほど身まかりけ
るとかや。
名木の跡へ廻るや一しぐれ
かぞへては足らぬを啼や友ちどり
富る人の身まかりけるに

世の中の風に依怙なし冬牡丹

此墓も廻り殘すな鉢たゝき

妻の身まかりけるもさへ

なきあとに入らぬ氷の鏡かな

芦本が生前に、背中のながき紙衣哉 といひしをおもひ出て

月花にもまれて終る紙衣哉

筆道を好るものゝ身まかりけるに

水仙に筆勢も有手向草

時雨行笠や十夜の鉦の奥

桑門白道法師、臘月末の六日既に黄泉の旅に趣(おもむ)く。其期に望(臨)て、いふ事もなく、聞事もなく、たゞ獨居に旦暮手馴し調度に、記念をおしみて狂詠一紙を殘したるも、有難き終りなるべし。

鍋釜の煤迄掃て別れかな

冬枯や山詠ても野を見ても

雪見にも雨にもかなし杖の友

母の身まかりけるもさへ

男手に疊むもかなし夜着ふとん

十方の道もあかりし雪の暮

父のむかしをおもひて

郭巨には似ぬ塩竈の櫻かな

蕨さへ指折頃や一トむかし

祖父五十周

晝臭の莚のちからや竹の恩

去ものはうとしこともし夏木立

深草元政の塚に詣て

鳥の跡見するや竹の蝸牛

双林寺蕉翁の石碑に

石ぶみの謎解聲やほとゝぎす

懷舊

茶莚の帆に年波の早ッかな

人も茶も初むかしなり夏木立

父のむかしをおもひ出て

撫子も咲て見せけり雨の恩

同忌日に
蓑虫の啼につけても夜寒哉

母の忌日に
夜もすがら我はだまつてきり〴〵す

蕉翁の塚に
眞直な跡をしたふや水仙花

寄雪懐舊
その人の植た梢や雪の花

追加

三日月の句を望まれて
若草に入も中よし三日の月

みのゝ乙伍に對して
美濃の月に若鮎いかに五十鈴川

越の烏角・之通に對して
老の日に先よろこばし若楓

觀音奉納
草も木も誓の網の霞かな

自遁庵之記

于茲閑人あり。世を神路山の梺にのがれ、五十鈴の流に汚塵の耳を洗ふ。やつがれかの幽扉を訪ふに、或は茗話、時を移して歸路黄昏に至り、あるは信宿して遠近の眺望に世を忘れたり。まとや景にあふては唖すと、古き詞に侍るとかや。それは尊き言葉ならん。吾は俳情のうかむにまかせて、四時の變相を狂句につゞり、反古のはしに書留侍る。

山のすがたもきのふにかはりて、今朝は霞のたちへだてたる、殘りの雪の消なんは、猶かけまくもかしこき日の御かげなればなり。されば年のはじめのいとなみも、世に有さまにひきかへ、軒の松風に千とせの聲を聞、芋がしらのとぶきは佗(托)鉢のもふけ、是たのしからずや。こゝも又都のたつみと興ぜられし西行の古き跡を隣りて、風雅の佳境に禪眼を遊ばしむ。

鶯や西行谷に問答す

さくらは花に顯れたる深山には樵夫の心をなやまし、籬外の牧笛に晝寐の夢を破る。やゝ墨染の更衣、藤の玉だす

きに春の名殘をしたふ。かたはらにひとりの老衲あり。隔の竹林にこみちをひらひて、おなじ心のまめやかなるかたらひには、何事かあらんとうち見るさまもうらやまし。

竹の子や蔣詡がひらく道の端

後園の青葉は窓を覆へど、卯の花のあかりありて、持經のさまたげをなさず。暮れば枕のした行水の音に、三伏のくるしみをしらず。枝折の鳴子は目に見えぬ秋を驚かし、垣根の蕣・梢の蟬、はかなきたぐひをつくし、夜寒の燈にひゞくはいづれの里の砧やらんと、彼藁一つかねのためしをおもふ。葉月の望は猶名にあふ夜なれば、

胸中を出て遊ぶか松の月

鹿は何が嶽・何が谷など、曉かけて鳴あらしたる、木ゝの色香もうつろふまゝに、手をひるがへす雲の行衛は、はや時雨の名にかはりて、庭の落葉に箒とつては寒山のむかしを耻ず。遠きさかひに遊ばんも、張笠の雪の重からん事をおそれて、只室中に安置する初祖の畫像に向ふて、冬籠のにらみ合とはなりぬ。

かけ歩行足のほだしや高火燵

後序

先人の麥林舍は市中にして市中にあらず。田畝、居を圍ば鋤を荷はずして麥林を知り、苗を種ざるに東皐の熟するを見て、四時に興を催す。其柴扉を訪ふ誰彼の贈答に、筆楮を休めず。暇あれば郊外に逍遙して、藜杖の行にまかす。あるは道祖神にまねかれては、菅笠の風に隨て廣澤の月を弄し、吉野ゝ花に遊ぶ。いづれか詠ぜずといふ事なからん。其吟行都鄙に傳へ、梓に彫刻するを見るに、手爾遠波の違る事すくなからず。韓愈が子の父の字を正せるに似たれど、舍中の反古に記し侍るを集て、ある貴家の序を乞て、校して小册子となせり。

麥浪主人 印 印

京寺町二條
橘屋治兵衛
梓行

類柑子（るゐかうじ）文集

上・中・下

其角

類柑文集 上

あけほの

探幽が能事ノ筆その世にきこえければ、或時 女院の御所へめし、曙の氣色を書て奉らしめよとあり。さればおもひがけざる風情を、いかに筆にはこらし侍るべきや。彼の野渡無ノレ人舟白横。ときこえし無聲の詩は、むなしき船に鷺をのせて及第したり。亦一片の雲といふ書の題にその心を得て、金殿のうへに白雲をたなびかせたりけんためし、いにしへの奇術なりとかや傳えたるに、我國人の名折なればと思ひあはするに、後冷泉院天喜四年閏三月に、畵工の櫻を感じ給ふて、新成櫻花の題を献らしめたりし例も、此曙の時にあへる手ぎはを、いかにも書まさりせんとのみ、睡-醒現夢の精神をこらして工夫せしかば、其妙をのづから筆頭にあらはれて、もとより丹青の彩リをからず。おぼつかなくうす墨を引はえて、やがて院中にみそなはし奉る家の面目を、法印にとゞめたりし其比、花のもと貞室が風情、あまねく都鄙にうつしもてはやし侍りければ、堂上の若公家、北面の武士、つらなる雜掌までも、すいたるどちはかしらつどへて當時の宗匠とし、とものみやつこいとまあれやと、いひふらしほのめかしける。いつとなく叡慮に聞えたてまつりしとありて、さすがに一躰を得たりと御感のあまりに、かの明ほのの御かけものを下し給はりぬ。門人等此ことをむべことぶける賀會の時、

明ほのゝゑいりよかしこし春の山　貞室

亦ためしなき事にこそ。和漢其例をひとしくおもひなさるゝにや。こゝに曙のこと葉をつどり侍る。

含秀亭花中吟　五句　冠里

無風花　ひかぬ時鐙はきれて山ざくら

未開花　ひまの駒十日手前を櫻貫

満花　太フト歴の鳥も曇れ花の時

落花　はゝ木ゝの蟻とはにくし櫻塚

山中閑寂人跡稀ナリ。

音羽から音あるものや花の蔕

王維畫山水之賦、遠人无レ目。亦曰、丈山尺樹、寸馬豆人
とあるを雨中の花、

此雨に花見ぬ人や家の豆　晋子

山庄

高き樹は雲に畫をかく霞かな　三嘯

貝にてかひをむき侍るを

あさり貝むかしの劒うらさびぬ

蠣むきや我には見えぬ水鏡

藤瀉や塩瀬によするふくさ貝

鉄槌にわれから羸螺のからみ哉

子安貝二見のうらを産湯哉

へなたりやかづきあげしは水の栗

無腸公子

芦の穂や蟹をやとひて折もせん

あな寒し隱家いそげ霜のかに

右手左手の興を得て

浮舟のすゞしき中へかにの甲

海島曲浦長汀の吟

あつみ山吹浦かけて夕すゞみ　翁

汐ごしや鶴脛ぬれて海涼し

あら海や佐渡によこたふ天川

早稲の香や分入道はありそ海

明石のとまり

蛸壺やはかなき夢を夏の月

此さかひはひわたるほどゝいへば

かたつぶり角ふり分よ須磨明石

五月十日雷雨ス。永代島の小家に
やどりて、晴間を待に

明石より神鳴はれて鮓の盞　晋子

ちからくさ

故翁のおくのほそ道、見侍るに、
尾花澤にて清風を尋ぬ。かれは富るものから志いやしからず。都にも折ゝ通ひて、さすがに旅の情をもしりたれば、長途のいたはりさまぐ〳〵もてなし侍る。

凉しさを我宿にしてねまる也　翁

擧白集に、はじめて吾妻にいきける道の記、

五日、小田原といふ所の宿に泊る。明れば玉だれの小瓶に酒すこし入て、粽めくもの御前にとてさしいづ。あるじの男にやあらん、けふはめでたきせちにゆ。一盃けしめされゆへかしと、あいたちなくいふも顔まほられぬべし。しどけなき事うち語りて、今しばしねまり申べいを、それがしが旦那のえらまからんとて、立ぬるかれがふるまひにつけて、下略

道の記の一躰。民語漸くかはるなどいへるにつけて、とみに東國のだみたる詞を一句にして、風流を發されたるこそよき力艸成べけれ。箱根山にて、

山路來て何やらゆかしすみれ艸

同記に、匡房のぬし、はこね山薄紫のつぼすみれとよまれしは、二入みしほといはんれう也とばかり知て侍りしを、すべてこゝもとにある、皆かの色なるはおかし。昔の人はかう萬にいたらぬくまなかりしか。

○是、其力艸也、深う思ひとるべき事也。

同記に、淺くさのくはんをんとて、國ゆすりてもてなす佛おはす。口にまかせて、

いかなれや野べにかりかふあさくさの
くはんをむまのはみのこしつる

土堤の馬くはんを無下に菜摘哉　晋子

そのころ今の吉原はなくて、彼記にももれたり。朝づまわたり江口などよせたる、古きすさみどもよそならず。萬葉しふには朱雀の柳とあり。飛こえの柳といふなる所がら、あみ笠かりて傳ひゆけば、

たひらこは西の禿に習ひけり　晋子

これらも力艸よりほりあてたる也。亦、

心とめふみみし人のなき玉や
おもへばあかぬしみと成けん

紙魚と成それが灯籠の置字哉　冠里

十三夜

紙雛のうすき姿に砧月　同

南樓月下に寒き衣をうつとよせて、野分の巻、ひなのとのは、いかゞおはすらんとゝひ給へば、人々笑ひてとあ

るに、その夜をきぬた月とこそ。

瓜の一花

河野松波老人（宗對州公、茶道也）、一物三用の器をもてあそべり。則、長嘯翁のめで給へる記あり。時鳥まだ聞はえする比、かの鉢たゝき所望して見んと、芭蕉翁・高山何がし・言水等これかれ訪らひ侍りけるに、もとよりして風月の窓灯、雨の扉に修竹わかやかに茂りて、老をやしなふあらまし成に、折から風爐の蟹眼にわきたつ程也とて、半日のあしらひ、いと興あり。床のうちに無絃の琵琶を居（スエ）て、ふるき長瓢のわれたるに、花零（ヲチ）より雫發（ホチ）ゝと落て、誰となく後（ウシロ）をおびやかしたるしめり、やるかたなし。主の涼を味はふる心にくさをうかゞひ居たるに、瓜の花をもて此瓢にいけられたり。花よりもれ蔓より露をむすべるに、水はたあふれて扇を忘る。廬岳の雨を聞心地したり。撥面のうるほへる風情をいはゞ、戸難瀬の瀧に尾を曳けん龜のけしきしたり。水聲玉ちるばかり此一花に夏を流して、老人の茗話忘れがたし。月よくさし入、時鳥まぢかう飛ちがふほどの窓ならば、花をせぬを本意とす也。今は郭公すがりてあるに、久しう取出ぬふくべのけしからずもりて、閑席を犯すまゝに花はいけたりとて、一句づゝのぞまれ侍り。これらの風興今は二昔になん。

瓜の花雫いかなる忘れ艸　翁

花瓜や絃をかしたる琵巴（琶）の上　言水

此花に誰あやまつて瓜持参　晋子

幻住菴にこもれるころ、

夕べにも朝にもつかず瓜の花　翁

はじめてめされたる御かたにて、

見ぬかたの御園の瓜の汗ふかん　秋色

下鳥羽桂川にあそべる時、

瓜守やかつらの簗（いけす）たえしより　晋子

紀の靈泉にひたりて、

岩飛や味なさうなる瓜一ッ　堤亭

瓜の皮水も蜘手に流れけり　晋子

順禮は瓜につくなり一夜ぶし　大町

牧方や瓜といふ聲玉くしげ　推車

西瓜は蠻國の種にして、中華に賞翫うすかりしかど、卅年來のはやりものにして、今は和哥所へもめしあげらるべかりしを、女房達のきらはせらるゝかたもあるにや、題には出され侍らず。

ゆめひらき

西行法師、よの中のわづらはしきに心とゞめず。折にあひたる名高き人ゝをよそになして、筑紫のかた修行し給ひけり。かの山家集・せんす（撰集）抄に委し。それにはもれて泪の雫と名付たる定家卿の筆事有。六十の末に明靜居士と成たまひ、みやこの亂をさけて住吉のほとりに御休所をとゞめ、須磨・明石の月にね覺およぼし給ひけんよすがならし。其比、西行のたびのやどり、長門國とよら（豊浦）明神の社司加田の重貞といへるものにあはれまれおはしけるが、此比、ふと陸奥に下り給ひぬと聞え侍りしが、行衛しられざりしを、重貞おぼつかなく思ひくらせる長月のあかつきの夢に、住吉の御神、枕上にたゝせたまひて、

　しる人にわかれしよりは松かぜも
　　はらはずなりぬ庭の月影

重貞、此神詠に恐れ奉りて、とく墨吉に詣で、明靜居士に法樂の和哥をすゝめ申けるに、西行の心ざしにかはりて、十首和歌奉納、奉幣のと葉をそへ給へるもの也けり。是末の代に連誹ともに夢想開の會を興行せらるゝの例とにや。

北の窓

わが栖ム北隣に、芦荻しげくおひて、笹阿（クロ）めなる地あり。茅場町といふ名にふれて、昔は海邊なりしを、今は榮行家作りして、山王權現の御旅所とさだめ、藥師ほとけたち給ふに、堂のかみばかり、たゞほのかに繪にかけると見ゆ。空地は水をためて池めかし、深草行人しなければ、蓼の花穗に立のび、なもみ・箒木色づきわたる雨風につけても、虫の聲聞まさり、大かたの空もうつゝなるに、待にかならず出る月哉と、ことはりし窓ふたかたに明めり。北にうたゝ寐して炎夏わづらはしからず。竹の簀子に這出て、螢をかぞふるもはしたなし。娘の四ッばかり

なる、あぶなくふとはしりてとらんとす。あやまちすべし、さはをりぬものよ、手とりなど母ぞすかすめり。南の隅なる所に、灯の袋をかゝげて鵜舟と名づく。

石灯籠蚊屋にきえ行うぶね哉　晋子

垣根ゆひ廻したる古菰に、夕貌の花より見しが瓠にて、南風ふけば北になびき、西風吹ば東にとひとりごちつぶやきけん、男あらまほし。朝ゝの勤行すみやかに聞えて、鍔口打たゝく秋の聲目ざましき折から、鍬負、枌かつぎたる男等四五人入來りて、草刈つかねたり。隣づからのうつろひ、前栽かまへんとて溝堀はらふにや。例の八月十五夜には罌粟のたねまくわざなん。冬菜の畑うちならすにやあらんと見れば、尾花・鷄頭・菊・女郎花、所せくまであるも掘捨たる、無下に風景を殺せり。家藏造るかとおもへばさも均さず。あたらしき杭・古くゐせどもとり〳〵まぜて、網代打たるやうにものしけり。夕霧のたえまおもしろく、秋のけはひをかへてあらはれわたるなどいふ。

あじろへと契りし人のまだこぬは
いづくによりて日をくらすらん　道因法し

日をくらしつゝ明れば、れいの男等、機車みつ輪もて來りて、くるせのかたはらにしつらひけり。文七といふ者、もとゆひこく所に成ぬる也。やうかはりて虫のねもたえ、小艸の花ものこらねば、あら〳〵しき野分の行衛雨はれて、邵生が瓜、諸葛が菜畠をむなしくすといへども、是その主のはからひなりければ、北殿にしはぶくを鼻ひる迄にいひそしぬ。元結こく音、ひるは日ぐらしに聞まじへて、又ことさらの心ちしたり。山姥の廻り來ぬ所にこそ、五百機たつるにあらで、くる〳〵と卷とりたる車のたえまには、百舌の尾ふりの聲、したり顔なる虻蜂などの羽音にもかよひてけしからず。さらに松風の吹たゆめるしおりもあり。唐人鳳巾の雲に吼て、春色をもよほすひゞきも有。おのこらの形勢は農夫にとならず。破れめなる笠蓮にかたぶけ、袖なき物きつゝ、わらんづはいて、淀の河瀬の舟引あゆみしたり。夜ゝはやすめて來ず。雨の日も來ず。むなしき車のみあるぞ、與惣右が門にたれを待やらとうたひ出らる。

時鳥まつやらよどの水ぐるま　宗因

一日に十里の行かひはたやすかるべし。機たつる道いつしかほの白く、鵲の三筋わたせるやうにて、朝日にも猶消やらず。花橘のかほらざりせばといひけん、雪にも降は、さて、小笹の色にかこちぬべし。もとひこく雫のたゝなはりて、さる風情には成ぬるなり。車にめぐる男ども、しばしも立休らふ事なく、夕陽に背を晒し、砂石に足心をいたむといへども、心の苦しまざる所をうらやまれたり。上つがたの事いさしらねば、田家・山林・海邊の境談、ひとりをのれをはゞからず、かたこと多し。淨瑠璃・說經の所ゝを覺えて語るもあり。辻讀の平家・太平記、籠耳ならず咄あへば、つとめて樂しむ場をもしれるにや。思ふ事なく世を忘れたらんものゝふるまひ也。玉といへる物、鞠ばかりの大さしたるを、千筋八重〳〵に引はえて、ひと夜寝ずとて夜もすがら露にうたせて、朝〳〵にこきさらす。げに笹蟹のたくみにして、ゆききいくたびといふ數をしられず。車の前に光陰のうつりかはるを歎かずして、夕べをのぞむ事、猶人生のはかなきに、せめて東に流れ去とおんじぬ。其數三あるをや、法の車とも。

文七にふまるな庭のかたつぶり　角

元結のぬる間はかなし虫の聲

大絃はさらすもとひに落る雁

西北にならべる塗垂の間に一株の柳あり。凡五とせにして、八九間そらに雨ふる枝をたれたるに雪折もなし。こゝに病後の笻うなづけともてなしたり。時につけつゝ、

蝸牛豆かとばかり柳かな　同

正月つごもり、雨ふる。

山吹も柳の糸の孕み哉　同

二月つごもり、雨ふる。

春雨やひじき物には枯つゝじ　同

萩あそび

河東に楓子石原、河南に曉松本所すめり。專吟、此西にあれば鼎のごく交はれり。その〳〵萩をうつして紫白けぢめなし。秋の情とこしなへに、月露の袂を前栽にさらして、一口茄子・つまみ菜のまふけぞしたり。楓子は手を

盡さず。をのがまかせに咲みだれて、露もたはゝに、盃のかはく時なし。かたしき寐たる花妻にこそ、長治・桃八と二人が手ひかれたりし醉ほの見ゆ。

ねたり込は誰の內儀ぞ萩に鹿

曉松は野亭ゆかしくかまへて、志ヶ書にあり。詩酒、等閑の風情、池に敗荷を憐れみ、橋に睡鷺をやすんじたり。萩の品そこ〱に輪とりして匂ひこぼさず。猶、露霜のうつろふ色に心を盡して、あやなき夜半に灯火をもてなす。犬猫のしがらみかけて、こゝ宮城野とさかえたり。本あらの里外ならず。わきら子が袖の妻ずり、うらみ顔なるに、

獅子侖の胸分にすな庭のはぎ　晋子

小嶋のすさみにかゝせ給へるはもとあらは、春刈のこしたる去年の古枝に咲たるにはあらず。本あらの櫻も此里也。

專吟は閑庭の笹垣、野分のまゝに無掃なるもゆかし。ほさでみやこの人に見せばやと聞えし小萩にしほる衣手を、てづから洗濁ものして柏木にうちかけ、また、鈴・獨鈷のひゞき、虫のねにふり添たるも、佗人のこつてう也けり。畠の玄白をきりつくし、園の妙丹の霜に色づくを待も、世をそむけたる亭坊にこそ。

萩薄んすび分ばやササ茾（ばきつ）　晋子

菴主、此文章にめでゝ、玄白・妙丹ともに似合しき戒名なり。わが父母に名づけてといへりし顏氣時にあへり。

河東の萩遊び

秋萩のこれに鳴らんけいこ笛　曉松
萩深しとうふとよぶは卒都の濱　楓子
白萩や水涌あがるいざら井に　專吟
萩に來て筑縻の人か五本松　秋色
波者ちるや水に這子の玉襷　琴風
箱戸樋や千枝にわかるゝ萩の花　志賀
大名を泣せて見ばや萩の供　寒玉
はぎが花立よる袖やおぼろ染　日壽

白齒讀

白露もこぼさぬ萩のうねり哉　翁
百里野の萩よりうれし樝（ヘキ）のうへ　秋航

出し袖にたれかこぼれて眞萩原　　宜藤
亂そふ萩の車や茶碗書　　大町

東北、日光海道は、やせたる菊ばかり處々に、垣根まばらなる畠のへり咲みだれて、これより宮城野までのすさみもなきに、年に四たびの御行輿を拜み奉ると、つたなき詞にははゞかりあり。前駈びゞしく笠持二人、中童子は乘かけにめされたる六人、左右の御副侍かぞへも盡さず。次に上童子四人、馬上に曲籙したり。後師四人の坊官、長刀持せらる。御道の行列に對してはあまり見苦しき人足ども、仕丁にまじはり、馬峯ッけあげ走りめぐるぞうたて。なまめきたてるはなきゝやう・りんどうなどあらば、鞍のうへにまいらせたくや。

萩もがな菩薩にて見し上わらは
花にさは野越の萩のあらび馬　　辨外
能因の襷ほどくやしほれ萩　　竹意
馬工郎は一字引ぬやはぎの道　　角吁
むら萩に女むすびは誰がもとひ　　呂貢
萩の賤から辨當にひるねかな　　常役
萩くふて尾花芦毛のいさみ哉　　入松

いなつかの灯

刈田にならぶ賤が菴の、膝を容るにやすげなるを、科頭ニ箕踞ス長-松下とうちうめかる。そのかたちひとり書をよんでねんじいたる時、盞うちかぶせたるものにこそ、三行の窓もるひかりいとあかうもあらず。遠う流るゝやうにうつろへば、むすび熨斗などのさきにてさばけたるやうに、洞-口の虹の山の端にちりたる心地して、眼裏ほがらかに氣を伸しむ。一星の烟をはこぶ穴目より、北斗をさそふ影をもらして、闇中の銀河とこしなへに明らか也。是かならず貧閑幽居の大器にして、身にしたがへる物也。かれに肩おちせぬ物三あり。黑-樂のかけたる茶じみてまだら也。玄黄自然なりければ我-馬とよぶ。水鑵に藤の手さしたる炭とり世にもあれど、とりあへず日高川と名付てもてなしたり。水かへつて火にそふうつはものぞかし。まろびかへりたる形は、彼落たる鐘に似たるもおかし。破魔弓の矢筒ところはげたるを火吹とし、讃け

るまゝの名を松鶴とよぶ。これかれ取揃へぬ具とも、衾上の塵、枕の垢つけるかたはらにまじへて亂したれば、夜いたく更ぬるにつけてものすごきに、百-鬼夜-行のそれ〳〵に名乘出る心地して獨笑す。金銀の氣をむさぼるにたえて、つく〳〵とまたゝきしうちまもれば、油ねぶる狐、軒端を飛こえ、飯を盜む猫、戸棚を明て、たがひに目と目を見合たるに、雪踏引犬入來れば、力なくかへる尾ざしまでも、かゝはゆく心ゐまれて、麋鹿の友を愛せるに聊かはらず。鼠のよめりどおどろ〳〵しう人に似たり。憎かりし蚊さへ老ぬるよ、さす力なきに蚤こそばゆく、蓋をとつて光をませば、ありつる化物ども四方へちつて、かうろぎの聲ひとり悄然たり。深夜をなぐさむる數ゝかぞへもつくされず。砧・かりがね・千鳥・松風・舟のほう〳〵と押來る聲、納屋の魚よぶ曉までに紅閨の私語、白屋のひとりねに對して、楓橋のおもひをのべ、荻浦のかなしみをそふるなかだち也。清夜の吟をあつむるに秋-興八アリ。

名月や御堂の皷かねてきく　晋子

水汲のあかつき起やすまふ僞

中の間にねぬ子幾人小夜ぎぬた

人音や月見とあかす伏見艸

酒かいに行か雨夜の鴈ひとつ

蝙蝠や柱をねぢたる一時雨

滋樂城の火洞にあらば霜の聲

子子等には猫もかまはず夜寒哉

夜もすがらおもふとのうつゝは夢となりて、さめて盜-汗をさますには金爐、滿堂のたきもののぞみたへたり。安-慰して此油煙にふすぼりかへる顏色、さながら松陰にうづくまるひじりの影に似たり。心も心戒に似よかしと、形影罔雨のあらそひに咽をかはかし、水瓶をたづねて、碩-鼠の腹ふくれたる事をつゞりぬ。

共引

念に見ょすびつの下は天のはら　景帘

雪灯の帋あたらしや郭公　其尾

二の膳のそれを心やまはり炭　其裔

寢所へ訴訟て行や雪の梅　檀泉

口切に堺の庭ぞなつかしき　翁

口切やはかまのひだに線蘿蔔　晋子

貴賓をまれかるゝ御約束、三年の鳴りさかや。其鳴り世上にかくれらなし。韓退之いまだ此鳴をきかず。

爐開や汝をよぶは金の事　晋子

頭巾までふくささばきに挾みけり　其幄

松の塵

文月十三日、上行寺の墓にまふでゝかへるさに、いさらごの坂をくだり、泉岳寺の門さしのぞかれたるに、名高き人ゝの新盆にあへるとおもふより、子葉・春帆・竹平等が俤、まのあたり來りむかへるやうに覺えて、そゞろに心‐頭にかゝれば、花水とりてとおもへど、墓‐所參詣をゆるさず。草の丈ヶおひかくして、かずかずならびたるも、それとだに見えねば、心にこめたる事を手向草になして、亡魂・聖靈、ゆゝしき修羅道のくるしみを忘れよとたはぶれ侍り。

凡人間のあだなるを觀ずれば、我ゝが腹の中に尿と慾との外の物なし。五輪・五躰は人の体、何にへだてのあるべきや、と彼傀‐儡にうたひけん。公卿・大夫・士庶人・土民・百姓・工商乃‐至三‐界万‐靈等、この尿慾をおほはんとて、冠を正し、太刀はき、上ミ下を着て馬にめす。法‐衣・法‐服の其品まちまち也といへども、生前の蝸‐名蠅‐利なり。

たらちねに借錢乞はなかりけり

人間生‐路のいとなみ、一‐朝一‐夕を貪る事ことはり也。いきてなき人何のこたへかあるべき。それに一‐口の棚經よんで、家ゝをありくは何事やらんとあやし。是かのなき玉のために奏者・取次とおもへば、墓をならぶる面々其名晴からず、地獄にても馳走せらるべしとこそ。

かへらずにかのなき玉の夕べかな　晋子

徹書記が生キてかへりしよりも、死をいさぎよくせし兵、ふるさとに思ひのこす事露なかるべし。

亡父東順、七十二の影をうつして讃を乞侍りしに、其像露たがはざるを、

繪に書つ木にきざみたる佛見よ
をのがすがたにいづれかはれる

摩運法師、髑骨の爲のさんに、

生死をはなれんとおもふ心は何者ぞ。たゞ心の源をかへり見るべし。もし明らむるとを得ば、曠劫の無明たちまちに消滅し、本來の面目すなはち現前せん、とかいて、

かへし見よをのが心は何ものぞ
色を見聲を聞につけても

予、此書讃摸寫せんとおもふに、名工の心を盡せるものから筆に及ばずして、いさゝか案ずるに、童の時の遊戯をおもひ出られて、松の葉して人を作り、松の葉の弓・同じ鎗・長刀のそれぞと見ゆるをとりもたせて左右にわけ、息をふきかけて爭はするに、人間の動靜・起臥をのづからにして勝負決然たり。これは無心の松葉ながら人の息してはたらかすれば、有心有情のものと見るに、折ふし庭の松風吹落て、松のはの兵ものさん〴〵に打たふれて、忽に風前の塵となるを、浦風也けり高松の朝あらしとぞうたひ侍る。

亦この比增むといへる一字題を得て、彼歐陽公のことばを逐。

蠅の子の兄に舜なきにくさ哉　晋子

父かたくなに母ひずかしとかや。兄に玉虫のひかりも哉、松虫・鈴むしの聲もあらましかば、百余帖の虫づくしにものせられぬべしとたはぶれたり。

寺前述懐　同

馬老ぬ灯籠使の道しるべ

ながらふる人冬の蠅と見しが、日ぐらしの夕べにあさましきたどり也。

猿引

由良八郎左衛門正春といへる人、哥・連誹にほゝゑまるゝや、生涯の瘵とし身にそふ病とし給ふに、世の人深くおもひしみて侍りけり。亡父東順、師としてむつまし

かりけり。寛文年中九十の賀せずして身まかり給ひぬとかや。氏性浮田家の外戚といひ傳えたり。住所はもとよりとゞろける藥屋にて、軒は雙うる家にむかへり。門は鮑魚のいきれたるに鼻をおほふあたりにして、下司女などもなく、手みづから炊ぎ、うちくらひて、いとけうかる交りなりしかど、朝市と雲山とをあらそはずして、心ざしの高きをしたふもの多かり。或時吉川維足、此師こゝにありと聞てとむらひ來り、わが身よるかたも定り侍らねば、常うとかりし事どもを悔て、全く弟の道を忘れ中にはあらずとうやまひけるに、うちゑみながら、幸を得ルに人われ純熟あり。神佛すら業生緣をもてすと恨みをのこし給はず。今も哥は好れ侍るやと尋られ侍りしに、此ごろ世に張ル事のはひて、日本橋をわたりはに、猿曳の人にまとはれて、むづかしげなるを見侍りしに、

かしこさのをのが心につながれて
うきをましらのねをのみぞなく

となん申て過ゆ也といへるに、正春にがめる顔にて、かしらいたや、賢き人のいかで世の中につながれてうきめ見んや。癡猿把ル月とこそたとへたり。人は己れが愚につながれ侍るものぞとあざんかれしに、維足一言なく、顔に汗して耻入覺えたり。いかゞ御なをしをかうむらんといふに、

愚さのをのがこゝろにつながれて

といひたらば哥なるべし。猿智慧・猿かしこしなどいふは俗言也とて、

いろはをもかゝぬや我と山の猿　正春

此當座は哥の丁備にも似ず、口惜き姿也。さしも風變の新古はわかたれずや。誹諧はことさら一句一躰のものにこそ。

元日や狙にきせたる狙の面　翁
七猿の仲間に踊る師走かな　冠里

意の馬・心の猿、ともにさはがしき事也。

母猿を階子にしてや岑の花　大町
身の代を狙にとらるゝ櫻哉　一雀
百灯に猿もぬかづく木葉哉　竹意
いがみつくやたけ心や厩の猿　午寂

元日や夫婦の中に猿の膝　百里

たはぶれに夏冬をわかつ。

物着せてさるのすねたる暑哉　朝叟

後むく猿のあやまるさむさ哉　序令

僧寒しといふ題に

木食の江湖也けり木葉猿　寸楚

朝夕に三-盃、暮に四-盃とさだめしに、夜分は其數を破りて、心のまゝにくるへる猿あり。郊外に踊り、橋上をわたる。猿町の里はなれなる庚申塚に休みて、斷腸の吟、雪の中にこゞへたり。其句五。　晋子

欄干や柳の曲をつたふ猿

蝶飛や狙をよび込原屋敷

猿の寄る酒屋きはめて櫻哉

かなしとや見猿のためにまんじゆさけ

腸を塩にさけぶや雪の猿

哀猿の聲さえたてぬ成けり。昔、四谷の宿次に獵人の市をたて、猪・かのしゝ・羚羊・狐・貉・兎のたぐひをとりさ

がして商へる中に、猿を塩漬にして、いくつも〳〵引上て、そのさま魚鳥をあつかへるやう也。李徳遠が中陽洞に入て都をかたむけ、猿どもを殺したる物語は、繪そらどに見侍りし。かくあさましき形成べしとはしらざりけり。羊をもて牛にかへんとのことはりもさると。

歌の島并戀の丸

觀世小縷(ヨリ)よりして、いかにも文字をむすぶ盲人あり。もとより字形を手-練して、日月・山川・雨風・艸木、たてよこの點書たがふ事なく、竹は竹、鳥は鳥、馬は馬と見ゆる蒼頡のむねをわきまへ、その物とさとししらせたる玉しゐは、日明らか成人の書畫の筆術にもまされり。そのかみ大師高野の山を切ひらかせ給ひて、堂塔・院々を建給ふに、此道のたくみ等文字をしらず。印合すべきことはりもなしとて、いろはの四十八字を教へ給ひしより、末代の人の助けにもなれり。予その六八の字員を案るに、八卦六合にわたりて三才の形容、此かな文字にもるゝことなし。盲人そのかたちをむすぶといへども、鴉-鷺の黑-白をたど

さず。梅花雪ー鶴のうらみあるをや。一心の寄附する所、口にいふを何なりとしらば、よまず書ずの神代をあふぎ奉るべき事なり。あなにえやとの詞は、いかにして哥なりとは敎へ給ひけん。我國の風俗を習ひ得たらば、むすべる文字の心もをのづからほどけぬべしといふよりして、誹番匠、いつを昔と名付たる編集、北村湖春にこと葉をそへさせ、句の首中を分て、付習はせ侍りしも、今は二昔の事也けり。近來の冠付は敎へかた、先褒美の盞よりも起りて、專、人の本心をくるはせ、放財ものにしたり。泯江はじめは觴をうかめしに、後は汚濁の腐才に流て、舟につむほどの諸道具、椀・家具・絹布・夜着・ふとんのたぐひ、源氏ものがたりの箱入、春曙抄・つれ〳〵の諸抄すべて人のほしげなるものゝ書あらはし、一番・二番・三・四・十番まで、それ〳〵の句主に配分せしほどに、福引の水をのまぬものそとかろ〳〵しう心得て、十才の男女・丁兒・小僧まで、他につけてもらひながら、物をとらぬやからは下手也とのゝしり、よききぬ得たれば、此點者よくものしれる也とほめわたる。端ゞ・町ゞ・手寄よき所に看板をかけならべ、夜に灯を挑て郡(誹)集したり。風雅の狐ー狸なれば、弶をのがれて產業となる事、和光同塵のことはり、魔佛ー如の見ゆるし成べし。しかれども古代に思ひしのばるゝ俤もあり。今川の了俊(源貞世)いつく嶋まふでの記に、

鞆の浦つゞく海邊に哥の島といふ所あり。ん(む)かし此所を領じける人、和哥の道にすける心ふかきあまりに、おりたつ田子、いりぬる海士までも、哥をよませて興じけるより、やがて此所を哥の島といふ。哥の嶋のこなたに戀の丸といふ里一村侍る。いかなる人の物思ふとて名のりにし侍りつらんと、いとおかしく侍り。

夢とてもいもやは見ゆるたび衣
ひもだにとかぬこひのまろねを

長者よりくだるならはしぞなりければ、哥の嶋・戀の丸の名だゝるにつけても、世の人のやさしき道に心あらば、誹諧の津と申べくや。いたづらに邪慾の道に引入る事、神佛の御しめしを汚すわざ也けり。つら〳〵彼天狗

どもの飛行するやうを見侍るに、いづくの杉の上にすむともしられずして、蝙蝠の出るころに、必しも行ちがへり。その中の大團羽を以て座したる、首領とかや。最上源三と一二の賽をあらそへる者也。をのが住山〳〵等なれば、十月の比より師走をへて、二月のすゑまでは民家にまじはり、人間の胸-裏を亂-漫し、正法觀念の席を妨げ、一万三千の句形を招くといへども、白雲に花のうつろへば、あらしとともにちりうせたり。

里居の辨

やぶいりを春のものとてや。上下の人の心そゞろに成て、二たび盆後の悦びを待むかへたり。或古宗匠の判談に、

やぶ入　植物に二句去　養-父入　人倫也。

入の字は字去と沙汰せり。これらは文字の上を信用して共理くらし。たとへば家々の奴婢・童僕・丁児等まで、年に一度の暇をもゆるさず。家風に例つて、かたくつゝしみつとめ侍る事は、宗盛卿の遊やに御いとまを給はらぬを手本とすべし。今の代は人の品・その掟も改りて、春と秋二たび父母・はらから・うから・やから、類縁にめであひ、花月艶容の氣伸をし、命の洗-濯などことぶきあふ事、ちまたにうたふ時にして、諸家その禁門をゆるめ、里へ下るをやぶりといへるなり。

女御ヲ　にようご　寐ネルヲ　ねいる　破リ　やぶいりと心得べし。例しれるおもと人、三日・五日など〻日數を定めて、いとま申出るなれば、御やぶり・おゆるしなどいへるもしどけなし。雲上の詞はあまれるもよし、たらぬもめでたし。下司の詞は、かならず文字あまりしたりとこそ。

季吟老人の雜談に、職人盡哥合に、白粉　しろいものうりと有。御の字をそへ、物の字を下略して、おしろい也。

遠里小野　をりの　うりうの

雲林院　うぢゐ　不動堂　ふどんど

郷談などにいひかけたる句は、おかしき筋なりとて、

今はお里へおりう野の露　　季吟

里居の句引、

子をぬるはやぶいりさせし摩耶夫人　冠里

いもうとにいひやる。

やぶいりや見にくい銀を父の爲　晉子

やぶいりや淺草かけて芝の海　琴風

小町こそあのやぶいりの肘袋　反梅

やぶいりに松の嵐や前うしろ　呂貫

やぶいりや今の御主は百官名　山蜂

藪入やわづかに見ゆる雪の艸　口壽

やぶいりの破らぬ關の東哉　午寂

やぶ入の屐ほしげ也魚の店　百里

紅梅や御はしたの名も四阿(あづまや)と　格枝

やぶいりや入相の鐘の聲ごとに　大町

彼御經の海山にみちぬるを、一日一夜に演說し給ふは、佛なればこそ。

やぶいりやつもる思ひを涅槃徑(經)　專吟

やぶいりに梅さかり也めつた町　白櫻

初花や五茶男のより來つゝ　立朝

彼岸會に里へ下ばや杖と足　百猿

やぶいりや嶋(縞)の袷を朱買臣　每閑

やぶいりや梅あるかたは西の臺　宇間

引幕ややぶいりわたる天川　雋子

藪入がやぶいりに道おしへけり　百之

千夜を一夜

御所の香やつれて二夜は梅の宿　同

乙女子のおぼろ月夜や二日隙　唄言

やぶいりや御閻がたりを夫婦連　朴芝

やぶいりに犬をつけたりしのぶ山　雪花

やぶいりの掛狀さがす袋かな　凍雲

葛城の片山仁兵衛里居かな　入松

やぶいりやおつとの心家德利　堤亭

辰之助が猫は焦尾琴のしらべに躍り、澤之亟が帽子は滿宴の紫に匂ひて、二度のやぶいりをかざらずといふ事なし。

尼寺やそらぬを木瓜の垣間より　每閑

ほしあひや慶光院の德に入　立朝。

秋色にむかしかたらん雨夜哉　共雫

此句は秋の雨夜にやど申たれば、春雨のふりくらしたるつれ〴〵とかや。

やぶいりのあやかしはたれ車引　尭月

星合を中の七日の里るかな　功悠

やぶいりの狭箱より西瓜哉　野徑

うらわかばには、藪入とかいて破字の辨まへもなく、正月ばかりの人のぞろめく事に思ひなしければ、一ッはあたるうらや算など句作して、戀の心得たりしに、まつとしきかばかへりこんと、三日のひまを申かはしけれども、里の名殘おしみなるに、一日の虚病をかまゆるも哀也。通ふ心の人もあらば、ことに僞ごともいと憎からずと、御ゆるしもありけめ。

やぶいりやそれは因幡の是は星　晋子

千載集に、一條院の御時、皇后宮に淸少納言はじめて侍りける比、三月ばかりに二三日まかり出侍けるに、かの宮よりつかはされて侍りける。

皇后宮定子

いかにして過にしかたをすぐしけん
くらしわづらふきのふけふかな

宰相の女房わたくしには、けふしも千とせの心ちするを、曉だにとくとあり。御かへし、

雲の上もくらしかねける春の日を
ところがらともながめつるかな

里居ながら內裏に侍る同意なりと、すかし申したる哥也。いづれの奥方にもあるべき事也。

ひなひく鳥

さちは姉、いもうとを三輪と名づく。あねめは日壽の尼、名の親に成て、おひさきの幸(サチ)あれとことぶきものし給へり。三わはことしふたつに成ぬ。あねよりは物しづかにむまれつきたるを、いみじとかしづく。穩母つれて出るどに、小比丘尼のあと先うたひめでゝ、道ゆきぶりしたり。朝待かぬる蚊屋のくもでに、窓もる光かゝはゆく、春のすゞめの雛をひく聲おかしう、塒おりたる矮鶏のつまよぶに、をのがそらねもなし。灯は有ながら、しやうじ

ほがらかにして、陽にむかへるわらはべの兆をふくめり。丸に尿やる聲さえねむたげ成に、外の邊にいそぐ啼聲しきりて、歩み出んとするけしきはか〴〵しからず。きのふは十あしといひつゝ、六あし・七足ばかりはこびぬといふに、けふは藥師御堂の石壇をりたち給ふ心にや。まふでくる人にも目かよひ給へりしなどいふにうちゑまる。いつしか左のかた、稻荷の社なるみづがきにとりつき、立て手はなち、御手洗の水まさぐりて袖ひぢたれど、神の御心はけがしたまはずや。あなかしこ、祈ものするけしき也けり。

あゝたつた獨たつたることし哉　　貞德

井上河州公の御吟に、

はへばたてたてば歩めと思ふにぞ
我身につもる老をわするゝ

老人のよはひめでたきにあやかれかし。此比は眞砂のうへにまみれながら、をのづから立るもどかしからで、千里の濱、八百日行道しるべせんとて、あんよ〳〵と、はやしもていざなはれ行。社頭の梢、花あればうつゝとへり。月あればののとゆびさすに、猶、舌利なれかし。こゝにちい〳〵ちや〳〵うるものあり。色鳥に染たる餠を小串にさして、妖艶にふれそゝのかすを、ほしげにて手をさしのべたり。とればかいやりすつ。心のまゝにもてなせば、こてふの花にうつろひ、かげろふの水をわたるよりもやさし。家を出てあそぶ所、二町にたらずといへども、いき來るごとに、穩母がはかりごとをもてすかしありく。百里の行程に、海山をかけぬばかりの心なりかし。乳房くはへて寐てくるは鞍上の夢にや、駕籠のうちのうつゝにや、老幼のさかひをわきまへずして、浪の立居も眞如たがはず。

閑居の子共松風にねゐる　　晋子
眞はねてゐて緣子の月　　冠里

あした夕べに心得たる寐顏、つく〴〵とうちまもれば、ほゝわらふ時あり。うぶすなのすかしたまふ也と。凡ソ煩惱のきづなとはおもへど、田舍世界のゑびす等、あまの子の賤しきまでも、寶とめでたり。舐牛・哀猿のなさけ、夜の鶴・梁のつばめ・燒野の雉のひなまでも、つばさの床

をはなれぬにこそ。人とむまれぬれば、それほどの小ざうり・糸わらぢ・綾にさしたる足袋もあり。しころ頭巾のおかしげなるに涎をつゝみものし、雨ふらねども傘さし、座敷にて下駄はき習ふ。何れ心に任せざらん。よろづ人生の化育をしれり。月と日は過客、天地は逆旅也といへる詞にすがりて、子等のどちくるふを見つゝ、酔て二ッ子の道艸をつゞりぬ。機にあへる時、みさかなに何よけん、手うち〳〵あハゝ。

二ッ子をうしろへ引や大團羽　大町
廣蓋を車大路やあかり雛　適山
花ざかり薬を出す也老菜子　共脛
乳のみ子に意味を付てや十三夜　沾洲
子の尿や柳力にわらひがほ　掃尾
初雪や心もしらず肩ぐるま　素英
あたらしう子を思はどや花の春　内野母
ゆひ揃ふ迄を木芽やうなる髮　唄言
鳳巾の尾やえのころかつぐ袠馬場　洞滴
柿木にあそぶ子共や蟹と猿　白雪
釣臺にのる子いづこへとしの昏　棠紅
初午やあたりの乳母は夕月夜　沾徳
祕蔵さや醫師にだかせて紙鳶　百猿

桐火桶に、抑貫之が、万葉の哥にはこれらぞまことある哥といへるに、

日くれたり今かへりなん子なくらん
その子のはゝもわれをまつらむ

子に飽ヶと申す人には花もなし　翁
迷ひ子や一膳ひえてさくら花　序令
折とても花の間のせがれかな　晋子
孫どもの蠶やしなふ日向かな　同
袴着や子は決唇でも三郎兵衛　青流

楓子みたりめの女子を祝して

蟹屎にうつろふ花のいもとかな　晋子

はしさり初たる日

百舌鳴や赤子の頬を吸ときに　同
産衣に夜の目もあはぬ若菜かな　倫女

三輪女祝ひ侍りて

鶴龜の合器も御齋のしづく哉　　沾洲

みやこどりの序

僧專吟

なにはあたりのうつせあはびを、うかむ瀬と名づけて奇物となせしは、身をすてゝこそのたはれごより出て、遠き境にもしる人すくなからず。こゝに扇德と云人、その俤をしたひて一ッの器に盞をしつらひ、硯・懷帋やうのものを添て、風騷の人ゝに句を乞。これをさかなになして、酒の興をあらしめんとす。箱の中の貝なれば、二見のうらなどゝもよぶべかりしを、都鳥とは、もしむさしの國の名物、京には見なれずとにや。それにしてはふたつともにたよりうすし。たゞ水鳥とのこゝろなるべし。

花と見てのまるゝ水やみやこどり　　專吟

盃開眼の後、亭主なれば一ぱい仕りぬ。

宮古鳥先尉どのゝ扇かな　　扇德

京・大坂、諸國の水鳥、此蝶面にのらんとて、日夜參會しける人ゝ、一句一盃はもちろん、三盃一句・五盃一句と、老若男女着到に付たて侍れば、あらたに酒德の頌を見る事いかならん。玉たれの内へもはゞからずして、此後序をもとめ侍りしに、

元祿水馬の年、都鳥あづまに下れる詞　　晋子

こゝに小判あり、ぬすめば首がなし。
捨ればたはけといはる。
佛をつくれば善人とよばれ、
書物をかへば智者となる。

分別の外に、三斗入ッ滿願寺のから口をとゝのへて、月花をもてなすこそ誠にこそよけれ、こそよけれのおのこ成べけれ。其男の祕藏し侍るものなれば、すゝむる功德ともに、むかしの其角になりて、やう／＼半盞をかたんけ侍るとて、

炭うりは炭こそ斗れ都鳥

此主源左衛門なれば、雫には鉢の木を切くべて、扇の德を御舞ゆへ。

着到の句々、しげなきまゝに略之。

此比、袖のうらといふ盞の發句を勸進したり。いかなら

ん旅客にや。其貝いまだ手にとらねど、源左衛門が貝よりもやさしくて、袂より出たるならんと、

白ぎくを貝の身にせん袖のうら

賢ㇾ賢ヲかへがたきものか。

口紅粉や世をかるかやの浮櫻　來示

浦あそび

元祿十五年長月十六日のあさなぎに、釣好ク人にさそはれ、海晏寺のもみぢに心をそめて、品川のいそわたりせし事有。折からうなゐらが蠣・あさりとるわざの、うちはるみてうらかなしく、芦邊の鷺のかたし立たるも友ほしけ成に、かはらける小舟の間より雀ひとつ、おりてはたち、おりてはたち、いさごをはなるゝかとみれば、荻のうは葉をこえ飛たり。とびあがりしやうしといふらん。似ぬ鳥を犬公がよぶもあはれ也と、冠里公の御句かたり出て、氣色をこゝにおもひあひたるに、左にはあらで、蛤の貝に足をはさまれて、翅にまかせぬ也けり。從者とく見て舟より飛で、たゞよふ雀をとらへて、貝をば小刀にて抑わり、つばさに息吹かけて放ちやりぬ。是いたけ成さまにふらめきながら、からきめしたる聲ちう／＼とよぶ。角なうして穿つといひし磯屋のかたにかくれたり。貝ひろふ子等は、舌切雀などはやすめり。月令ニ季秋鴻雁來賓爵入ニ大水ニ爲ㇾ蛤註爵ハ爲ㇾ蛤飛物化爲ニ潜物ニ也云々。今の有樣けにかなへり。飛物の氣ひそまりて、穗末の粟芥の虫に心をかけず、砂中の蛤をさへ喰なすにや。爲の字を成解する心に見ば、月令ノ文義もいとおかしからめと、私の見を加へ侍り。されど西國あたりにては、すゞめの蛤に生を變たるを見しといふ人もあり。是共時理自然なるべし。我見しは水はしりにて、鼠の赤貝にはさまれしこそ、時候は忘れ侍れども、鼠化して鶉と成といふよりもおかしきもの也。生命をあらそふ物、これらにかぎるべからず。いづれ論ずるに益なし。石の蛤、二かはの貝、干氣貝のうきたる、これらは捨て、いかにも砂なき大蛤をゑらせ、松笠につみまじへ、あふぎたてたる風の音、をのづから松風颯々たるに醉すべらんにこそ。

撰みなし栗
懸出の貝にもてなす新酒かな　晉子

此句にて船頭も一盃せよといふに、新の一字に鼻はぢかれて心地よしと頭ふる。とりあへず押へとして醉言していはく、上代のさかもり、貝をもて賞翫せらるゝと、賴朝どのゝ御濱出に、土肥の實平が御もてなしにと舞する也。亦横山の聟引出に、太郎螺・次郎螺とてある貝の實に、伊豆・相摸の領を入て、三盃づゝはほさせたりとかや。今もかけ出の同行ども、郷侍の家に入て、齋の料乞たるに、時にとつての早稲作り、中酌なんども流すに、貝の腹八分に見て心よくほし、禮貝吹て通るもあり。盞はありあふものにこそ、酒はたしなくてならぬもの也と酒惜みすなれど、雀の命ひろへるにめでゝ、生前の一樽を天目にてかたぶけ侍るは、いと心ぼそくや。

蛤もこゝすみよしや酒惜み　朝叟

ますほの小貝ひろはんと、種の島に舟のり出たり。法花寺にあがりて酒のむ。

浪の間や小貝にまじる萩の塵　翁

みるくひや末つむ花に貝合　一雀
黑海苔は跡へおよぐや帆立貝　谷羊
ほら貝の筒音を聞くあつさ哉　專仰
寄蝦の夜寒さこそとつめた貝　堤亭
所から菊や小春の海津物　靑流
蛺を撥とや月のいつくしま　百里
いたら貝われても末に臺所　竹意
串貝に師走の風のはづみ哉　共道
赤貝の新山守やおぼろ月　功悠
今切の片荷に氷る鮑かな　里東
蛺や小進ものゝ大屋敷　曉白
蛤の番は丁兒に霞みけり　掃尾
あすの夜の月にはまけじ夜光貝　己郷
雲丹貝の上着也けり黑小袖　大町
ほらがいの跡に竿さす尾花哉　貞佐

日本紀のゆへあり。

獸とる眞珠もあらん汐干潟　谷羊

遷宮おがまんとて、みのゝ國立出

ろに、船にのる所まで送ける人に

蛤のふた見へわかれ行秋ぞ　翁

貝　十五　晋子

貝(ハイ)つるや白洲の末の流れ松

行春や猪口をおじまの忘れ貝

海松ふさや浪のかけたるほらのかい

かげろふや小礒の貝も吹たてず

すだれ貝雪の高濱みし人か

汐干なり尋ねて参れ次郎貝

元日に眞珠喰あてたる人、扇に句を望めり。其年出身の幸あり。

夜光る梅のつぼみや貝の玉

石ひとつ清き渚やむき蜆

われからとすゞめは雀からす貝

文月をかれて刺鯖を獵領し、世の人の祝ひぐさとす。

鯖切のかくてもへけり大赦まで

いはしは性柔弱にしてもろし。潮をはなれて忽に死す。鰯、俗字なり。よはしと訓ず。おむらさはいかに

小いはしや一口茄子藤の門

白菅の宿過侍るに、山鯵〳〵とうるをみれば、大小のその中と見えたるもおかし。商人の誠にその中をとるものにこそ。

世中をしらすかしこし小鯵うり

歳の暮

鰤荷ふ中間殿にかくれけり　晋子

うち出の濱にて

十六夜や海老煎程の宵の闇　翁

鯰さえあふのけに寐る暑さ哉　野徑

御茶壺で白川とても鰹かな　檀泉

小海老よる空や小春の水の文　潘川

鮟鱇やしころは切て高笑ひ　甘已

小安鱇道具揃はぬうき世哉　入松

山いくつ七ッ目鏡にいはし雲　來示

布施いはし行基の鯖のちかひ哉　同
西陣や二月中旬丹後鰤　白悦
袷から鯛の背切や椽の前　景窗
苦汐に鯛も浮木や秋の海　大町
初空や鯆鰤（イルカ）の優に風わたる　枳風
釣の沙魚挟箱よりあがりけり　來示
年の緒の文箱にそふやお紫　松雅
いはしまで春の光や金ねふり　芫月
本日の春を名のるや尺のきす　雪花
加賀蓑を鱚にきせたる山路哉　和重
初鮑や醫師の方より遣ひ物　其幌
かんてらに片身かゞやく眞黒哉　潤花
海鼠腸は咽通る間の手ぎは哉　止水
たゝまるゝ身はいくしなの海鼠哉　灯竹

所思

蛸を釣赤穂のうら人師走哉　朝叟
石鰈やかるた伏せたる遠干瀉　琴風

漁家に遊べる時　十一句

親にらむ鰈魚（ヒラメ）を踏ん汐干かな　晋子
小ゆるぎの名は昔にて渦輪（ッ）哉
夕汐や客の間にあふ中ふくら
蓮葉の赤鱏（エ）も枯るあつさ哉
ほの〴〵と朝飯匂ふ根釣かな
さちほこに篚をかまする鱸哉
足袋貢やたびかさなれば學（マナ）鰹
馬船とわかるかつをや競馬組

てりかつを附り河豚

松魚（カツヲ）本字とすべしとぞ。堅魚延喜式いはゞ文史の賞翫とし、貴人の上珍と成もの也。牡丹の紅その切目を正し、杜鵑の涙に錦手をそめたり。さつまがた沖の小島に物ありと、松江の浦の鱸を二にし、住吉の御前なる鯛の後段に成事、時を得て譽あるもの也。初の字に一朝を爭ひ、夜の字に百金をかゐんじて、まだねぬ人の橋上に、たゝずみあかすまゝに、一片の風帆をのぞんで早走りを待て公門に入時、鬼の首とる心地した

り。南溟・東海の魚龍、一番鰹と名のらせ、其威を犯せるものなし。渦輪・横輪・古瀬、小鰹の一属、目鹿・眞黑の兵ども、駿・豆・相・武の浦〳〵に魚陣をなし、鮮氏・筋鰹・霜降り・秋堅魚・濱切・岡付の族、一味同心して、火あて・雉子燒・あら煮・うしほ煮の手をつくすといへども、昔は下部のみもてはやしぬと書れて、臺のうへの獻上をゆるされず。一疋不調法ものにいはるゝ事、今さら浦島の子が悔にして、恨み中打に徹し、はらもにせまり、血合にくるしむと躍くるふを見て、いさめていはく、河豚は西施乳と比せらる。其意味を忘れて性つねに怒れり。世人皆醉のと葉をかうむる事なかれと、盃をとりて、

かまくらは活て出けんはつ堅魚　翁

堅魚うりいか成人を醉はすらん　同

此句人をいさむ。こよひ其いけるもの、

楊貴妃の夜はいきたる松魚哉　角

夜かれせぬ君が閨へと堅魚哉　青流

白兎公

冠里公の御園にうさぎを畜たまへり。中に妻兎はなくて子を生す有けり。これかの月にむかひてをのれが影を孕めるもの也。さればこそいとかよはくて、靑艸・薺芹の露をもてなされ、冬は爐邊にちかより臥て、枯葉・さゝの實などを味はふ。其かたち白蓮のつぼめるを、たなごゝろにのせたらん大さしたり。扈從して御側へめしけるに、樊中を出たりし心より、人におそれて飛さはぐまゝに、左へこえ右へせくゞまりて、文臺へをどり上り、硯の中へ足を入てとびまはりければ、雪の白玉を墨にこかしたらんやうにて、あやなく汚れたるに、やるかたなく御氣色をなんそこなはる。近習をの〳〵手を握りたるに、予放言していはく、硯にあふれ墨にそむと、かのものゝ性、天然、筆にむまれつきたる也と申たれば、御笑ひに成ぬ。臘月の末つかたに、兎の子いつゝ生れたるに、

年をとる兎にいはへいらぬ豆　角

三方に綿をのせて、雪の富士などいふ當時の興をもよほ

されしに、

つみわたに兎の耳をひきたてよ　同

長柄の文臺の記

貞享甲子の年にや。河村瑞軒といふものに、おほやけの仰せごくだりて、難波古江の埋れたるを掘て、船路の自由ならしめよとの、惠みあまねき御ふれに付て、都鄙・芻蕘のものども、膏澤の歩にさゝれて、まいりあつまるほどに、なんなく山をつきたて、淵瀬さらなる川筋となれり。さればかの名橋のあとは、今はわたりに成て、その封境をしる人まれなり。こゝにいにしへをあふぎて、今の物數奇しけるともがらも、こゝらあたりにこそ其古杭はあらんなどとて、おぼつかなき世の幸を得まほしく、奈裏までもと、うちたつる人の力に任せて、この埋れ木を掘出たり。往古稱美のかたみにして、とにたぐひなき板目なりければ、朽にしまゝにけづりなして朽せね名物とはなしぬ。いはゞ山の井をすゞりにくませ、濱荻を筆の軸にきらせて、みちのくに紙のあつこへたるに、かさねたらましかば、人麿の神も其左にゐまし、赤人の神も一座の句所をあらそひ給ふまじ。誠にありがたき寶ならずや。よりて當時の人をして結構に文詞をかざり、和哥・連誹の讃、まち〳〵みちぬを、予もその數にくはゝりぬべきよし。故實はいはずとも、さとしければ今の事實をあらはして、かゝる時代にむまれあふ人、疊の上にしてたやすく、此重寄を拜みぬるよろこびをのべぬ。其信うたがふ事なかれとしかいふのみ。

もる月もむかしの橋の朽目哉　晋子

大原木のことば

初瀨・難波の市女笠、柿の前垂ほのめかして、いづれ昔をわすれず、織殿・染どのの水仕かのこゆひ、牙婆めの被すきかけ、白くたちわたりて都大路のながめ也。河内女のきはたとるつま袋に、婀そしりといふ繩手を行こそ、さかしらいひて名はたちけん。越路の女は、糸機のわざもせで、奉書・鳥の子すき出す。うすきちぎりはむすばざりしをとよまれて、なるか川の瀨枕に、をのが妻をや

定むらめ。おほよそ鳥のざれありく名はたち、君のいたづらにひとりねしたる河原こそ、川風寒し。さる淵瀬を朝どにわたりて、暮どにをのが一つれ引連たる牛のひづめにそふて、八瀬の山家にとまりける夜ぞ、雪かき分しあともとゝはれて、祇法師の三吟せし古意をうらやみ、事たらぬ侘寐に友をしのべば、飯には石をかみあて、茶に藥しべを吐出して一夜明しぬ。誠に此山里の侘を求めて、閑放の風月を興じぬ。祭の子等に花折そへて、やさしがらせけん賤とないひそ。女院の侍士より、今も俗夫におちずして、柴うるにも背むかひてあしらへば、よしある賤とこそ見ゆめれ。

やぶいりや牛合點して大原まで　晋子
一とろに給になるやくろ木賣
をはら木や紅葉でたゝく鹿の尻
炭うりやおぼろの清水鼻を見る

荒神口にて、一とよみどよむ聲殊にけうとし。中にも釋迦よ〳〵とよぶを聞て、名のおかしければ、

さかとよぶ頭も雪のくろ木かな

雪山の法の薪をつみけん、身のこらしめも、入相のかねに、ふとおどろかれたり。

水戸黄門の君、山庄に黒木茶屋うつし給へり。酒旗、夕陽にひるがへり、木葉かくさらへかたはらに捨て　しば〳〵斧のひゞきを窺がふに、たゞならぬけしきのみ、風騷いたりをおもふもはゞかり有。

繪の中に居るや山家の雪氣色　去來

冬ごもり濕飽にしては、ひとたきにさゝもへやすき大原木のあかしもはてず。入がたの月に顏さし出て、醒てねかぬる灯のもとに、大原木をうたひてやみぬ。

後付

かも河の鴨を鐵輪に雪見かな　晋子
うす雪や大の字かるゝ山の草

さねかさき

方四寸の圓形にして、其色紫赤なり。梅檀の木膚よりも猶こまやかに、蹄のうらのごとく中くぼ也。厚サ五分ばかり。

夕顔や一臼のこす花の宿　晋子

抑、此杵の頭は、少長が宅普請の時に、大工どの一鋸にと、たのみ切たるくせものなるを、推車やがて拾ひとりて、一句を蒔繪にし、茶所の柱にかけて、日々の勞を忘れんとす。然れば休の一字に心あるにぞ閑を得たり。つら〳〵角藏が勞を見るに、一日の休みなく、百錢をまふけて、黑飯を押いたゞひて行なふ躰、盤中ノ飧粒〻辛苦の吟尤重し。こゝに京・大坂の座より、千金を積て少長をまねくといへども、三の富〻心にまかせたれば、今年も艸庵の月にかこつけて暮ぬ。其勞方寸の胸中にあれば成べし。坂田・山下がこゝに老たる、多門・嵐等が名ばかり聞えたるにも、身をやすうせん事を願へるもの也。錦繡に汗したりとも、裸なる場は臼前に同じ。六祖のひとり信濃の國より再來して、推車に杵をゆづるゝの角藏。

杵のえ

心水艸

金のあふぎに、牡丹嵜子のたばこ入に、菊の句とはよのつねあるべき事也。おもはざりき、きねの先に夕がほの句を見んとは。かゝるくだれるさまのものながら、やごなき御手にもふれけんと、優にめでたきたぐひたらずや。さるをおかしきおもむきから、もしは隱婆羅鬼童子が腕の小口切といふものあらましかば、いかなる句をか得られんと、ひとりたなごゝろをたゝひて、その杵の柄はいつか朽んと云つほに入。

大名も夕顔なくば杵の沙汰　心水
挽切て杵にわかやく凉みかな　推車
夕がほやまだき灯さぬ局口　秋航
ゆふがほに山伏見れば暑くろし　專吟
夕皃や須磨に咲どもこけら葺　呂貫
蟷螂の夕顔へ來て我なりと　幸輪
夕皃や呑かへ宿のまくらにも　大町
夕顔や氷室屋敷は火もたかず　一雀
夕顔や不破の關屋はおとし穴　文竿
夕皃や竹馬かゝる椎のふし　沾洲
ゆふがほに昔踊や上つかた　竹意

祖師の自畫賛

ひるがほに米つき涼むあはれ也　翁

晝顔や穴のいはれを居酒呑　青峨

あかつき傘

剡溪の雪に徘(タチ)、待乳山の時雨に徊(メグ)りて、心ありげなるを、妻なく子なかりし時の樂とせしかば、閨中の力としたる閒(カン)ざましこそ、胸いたかりし其吟三。

曉の反吐(ヘド)はとなりかほとゝぎす

夜こそきけ穢多か太皷郭公

ほとゝぎす曉傘を買せけり

傘うりの曉ばかり來るものかは。月夜の魚うりは本陣につく心地したり。物の哀れもこゝにしらずばとおもふに、其裔が閑所の額に、曉笠の二字をまうけて、時鳥のはつ聲をまたれ、來示が筆を躍らせたる物、傘うる時と名づけたり。西鶴が口拍子をからす、朝湖が虚(キョ)舟よりも、かろき事どもなる中に、季ある人の子、禿の親の手形すますに、文語一ツ〳〵よみ聞ふるに、わろびれず判して、金のかた一目、娘のかた一目見やりたる、年月のたのみ哀にも、かまれて來る猫、九月みそか、十月ついたちの比客、前も拵へぬ料理場の下に、かうろぎすだくころ。二階へあがる音はたえ、てわざとならぬ灯のかげに箸削る。ことにしはぶき、頭痛くなやめど、くすりの遠慮したるをんな、見せ男をまことにあしらひたる憎くて哀也。凩の夜駕籠、誰を待てか、妙喜堂の末枯、角前髪に似たる月影に、心ほそげに殘る客の中杉つかひへらしたる、文もかゝれず。荒たる家の分散とは見えて、庇まばらに天水もかはらぎ、破れめの障子の弓、所〳〵落て、いとあらうはあらぬ風の吹あてたる。

これはいつもあるかたながら、鎌倉へいきたりしつれ〳〵、冷飯といふ名もうき世に佗しかりける時、思ひつゞけたる也とかや。

勘當の月夜に成しすゞみかな

いづこよからんありかばやと、そゞろがましきも一ねざめなりけんと書て、來示に送り侍り。今はお小縮(ヶ)に耻といへば、

子もふまず枕もふまず郭公　角

子規人を馳走にねぬ夜かな

女郎屋・客屋といはるゝもの、假にも無常を觀ずべからず、といさめしに寐過しぬ。

ほとゝぎすたゞ有明の狐おち
告ロは仲の町なりほとゝぎす　大町
時鳥くまがへをよぶ寒さかな　其幄

寐て見るさくら

洛の凉及は有馬氏にして、ゐなかにもしられながら、いでそよ人を忘れ、已れを忘れたるもの也けり。貞亭の比、天脉を診み奉るべきめしをかうむりけるに、其時恭にうちほれて、まいらざりし罪にて、山科に追放たれたりしかど、明醫肩をならぶる者なければ、やがて都にかへし入られて、その名いよ〳〵高し。日比に好ば百貫にて茶碗を求め、撫子とよぶめり。季吟師、北野よりのかへるさに、凉及が家に休みけるに、薄茶をもてなし侍るつゐで、彼百貫の茶器を見ばやと望まれしに、たゞ今薄茶まいられしが、夫なりといらへけり。老眼よりは心闇くてあからさまに所望して、手を取たりと申されしか。年比の春大きなる櫻の盛なるをこきて、根は菰に包めるまゝにて、縁の側にうち倒して置り。うつしうへんとての花なるを、かく無下にせらるゝはいかにぞやといふ者ありしに、起て見る花は、いづくにも植てある也。寐て見んために、伏木のまゝにして、打こかしたりと答へぬるに、自性の愛に溺れざるとをしれり。茶碗を塊とし、百貫を沙石とし、麗花を塵芥と見て、一日の生路を安慰し、心を孩提の童のごとくに樂しめり。誹諧興行すれども、ぬしは一句もせず、人の句を聞て味はへたり。せめて一句はあれかしといへば、脇よりあげ句まで、一句〳〵に付て見侍れども、面白き句もなし。無用の句を云出さんは、きかぬ藥をもるに同じとて、滿座まで連衆をはやしたて侍る。いと興ありけり。山月の曉雲に映ずる一躰、今さらなつかし。知音の心を、

花の鐘けふも暮ぬと聞者哉　凉及
八重山吹は京へ出ぬ人　其角

朧月鵜匠の家にすじかひて　湖春
　鼠を煮レばたれも甘がる　及
裸身に大わきざしの草枕　角
　樗の雲よ暑うなる端　春

三吟のむかしに成ぬればあとなし。

改元の祥吟

ことし三月正當三十日　御城に於て革命改歴（暦）の御よろこび申あり。出仕各午の上刻。

寶永の袷にかはれ米の霜　冠里

寶祚惟永輝光日新ニナリ　杜子美句　是、此熟字を以て、山呼万歳をとぶかせ給へりとかや。此日八十八夜にあたりければ、星と霜とにむすびて、花の色にそめし袂を、おほけなく世の民くさにおほひ、曇らぬ日影、四方にあまねき御めぐみとなん、仰ぎ奉り給へる御句筋なれば、三月盡の題に沙汰し奉りぬ。改元の詔、本朝文粹、慶の保胤のと葉にいはく、唐堯の馭民いまだ年號あらず。漢武の撫俗はじめて建元の號あり。それよりの例、休祥災變によりて、開元革暦のためしを引、天元六年を改めて、永観元年の大赦、天ガ下徳政の化育にほこると云々。

今案ニ藤經嗣卿北山行幸記ニ、文武天皇より年號なども定まりたる事に成て、後は醍醐の御門こそ三十三年まで御位にありしが、此時にこそ格式などいふ事をも定られたれ。誠に聖徳のいたりは、延喜のいにしへも、應永のけふも同じかるべし、と書せ給へり。北山殿は鹿苑院准三公義滿公也。行幸は應永十五年三月八日也。

去年の冬、震火・溺亡、世界國土のくるしみを、西の海へさらりと流して、あらたまのとし甲申の卯月初めの日、あらたに浴ミし、新タに衣かへたらん人の心のあらたなるも、日ニ新ナリといへる句の心ばへならん。此御句にと葉をそへ奉るにつけて、天下泰平の奉幣の使に逐（追）つかん事を祈侍る。

兎した氣で伊勢迄たれか衣更　晋子

類柑文集　中

御玄猪

細川家の茶道、京都の御内緣につきてのぼりし比、近衛左大臣基熙公御茶にめして、御手づから御菓子を下し給へり。碁石形して色〻に染たる餅也。俗、仰せ下さるゝやうは、此餅はきのふ御玄猪なりし宸宴、供物拝のあまり也。いたゞきおさむべきにこそ。されば王道の興廢として、今は國栖腹赤の奏、十月朔日、氷魚といふ魚を公卿に給はるなどの舊例、その名のみなり。爰に丹波ののせの郡久路の庄より御玄猪餅の名也備へ奉る事、内藏寮ヶより是を行ふ也。昔をしのぶべき御心ばえとかや。ありがたきことに感じ入奉り、涙をつゝむ袖のつとにし、餅をばやがて懐中仕りぬ。御茶の具すべてかはる事なし。御掛物、極の一字の墨蹟也。是は道風の大極殿をとゝのへたりし下書にて、代〻傳はり來れるを、大と殿との其中をとり用ひさせ給ひて、尤御重賞の珍奇のよし、かやうのたぐひあまた御成藏にありとかや。凡家にはおつまじき物也。

俊一卿の古今全部も御書棚に拝覽したり。

三の蓮

江沼田中村に田中勘左衛門といへる農夫、はちすを好て、千もと四色の靈藥をあつめ、池をふかめ、砌をたゞし、島輪をめぐる小船にうかんで、心の水濁りなく、獨樂の閑さらにうき世の交をもとめず、あやしき人の名にふれたり。一とせの夏、さま〴〵に咲くるへる事ありけり。愛蓮の詞いまだしらねども、すける心より名付たる、おかしくて書とめたりし。

一莖に七輪の花を天子の蓮

一莖に三りんの花を武士の蓮

一莖一輪はつね也とて百姓の蓮とよぶ。其名、國あまねく聞えもれて、諸人此花を拝みに來ると、天人の影迎、ほさつも天降ます心地して、ありがたきためしにいひはやらし、むべ一郷に榮えたるもの也。七德は天子の瑞也。三德は武士の鑑。一蓮は勘左衛門が菩提のたねなり

と、念佛三昧の心ざし淺からず。汚泥にそまず、邪觸の胸を洗へるに、鬼神この靈藥の異香を惜めり。

謠の說

羽衣　實盛　ゆ屋　うたふ　そとは小町　熊坂　祝言と手の揃ひたるを見侍りて、昔より誣あやまれる所、文字の亘ー釋を云人あり。いさゝか愚意を加へてしかられ侍り。

△その名も月のいろ人は
三五夜中のそらにまた

月のみや人也。宮と色と行草のやつしを寫しあやまる成べし。月の宮古に入たまふ　とうたへる本義もあり。

△をのれは日本一の功のものと
くんてうすよとて

功の者と組ミ打チすよとて、力者をあざ笑へる詞也。打テウの聲にまぎれて、今さらくんでうつと書たるを、くんでうづよとうたへる也。くんでうつといふ說はわろし。

△ころも旅鴈のよこたはる
北斗の星のくもりなき

北斗ノ星前ニ旅雁横フ。經角堂は輪藏なり。北辰を柱にして廻る也。弘ー誓眞ー如海の文により、城南淀河の運送回ー船の爲に、常灯明をかゝやす。其光、北にあたりて、

△くもりなき經角堂はこれとかや

金森宗和上洛の比、清水に詣給ひて、この灯籠の倒れて苔に埋れしを、寺僧に所望し、吾妻の奇物として、今に芝の御屋敷に居られたり。

△うたふやすかたのとり〳〵

烏頭・善知鳥ともに不審の字也。東奥の商人、船にて松前へ渡る人のいへるは、蝦夷近き村里・島〻の獵師ども、呼子鳥の笛などの類、鳩吹・手合などのやうに、品〳〵聲を似せて鳥を打をさして、うたふ〳〵とよぶ也。打追の心成べし。それをはやし立る列士のものを、やすかたと云也。うたふは親、やすかたは子にて、列士狩に出る、ゐびす共笠にかくれ、蓑にふす有さま、やすからぬと作りかけたり。卒土の濱、東夷をさす也。鳥類さえ親子の愛情はふかく、血の涙にさけびて命を惜むに、夷狄の共

心なき因果を説て、殺生を戒しめたり。

△一夜、ふた夜、三夜、四夜、七夜、八夜、九夜

此夜は一輿、二輿、三輿、四輿、すべて助字なり。五六の殘りたるを分別して、榻の端がき、百とつめたる數を合せたり。

一ョ、二ョ、三ョ、四ョ 是を四と立て、七ョ、四七廿八 八ョ、四八卅二 九ョ、四九卅六 都合百の數なり。軒の玉水とく／＼と指折たる也。

△あらしやうやひかんとて
心よはくも引けるか

嵯峨本の假名の洒落なるゆへに、

あゝゝやうや 嗚呼危うや引ん と書たるを寫したがへて、筆肉をうしなひたる文句と見えたり。章句のさしまどへるにはあらず。遊樂回雪たるうねめ、十悪八邪のまよひの雲、入聲・去聲にて諷ひ流す所・うたひ消す所、句斷り・字義にかゝはらずして、面白く謡ひなす人感應なるべし。

國栖の、うばやたまへ、は、姥聞たまへ、との文句也。聞やのやつしを讀誤れる也。

万句 半面美印

足跡かはく飛石の露
盛久の長居はたれか氣をつけて
梟のかけ聲をきく鼓山
御輿はとうに覗く芹賣
泥亀焼に松茸の甲
山田守僧都の身こそ寸莎に成レ
双六の筒から直に手を握り
玉藻が智恵も犬ぎらひ也

万句 五字印

界隈の寺は幾つぞ大砂場
切レをよく見る伯丁が親

家々の名所

物に倦る時は、身の隱家をなどおもふもはゞかりながら、

岩ほの中とても遁るまじき世中也ければ、心の行處をかぞへて、鷺鷗の友をさそふに、五十にて四谷を見たり、といへる嵐雪が怠りど、奥羽へかよふ商人の松島雄島をしらぬ族、塵につき玉をひろふ、心まち〳〵也けり。いざとて誘ひ出れば、先、辨當の事を問て、かりにも行處をいはず。ひたすら富る者の後にさがりて、うか〳〵しく日を送るも有。良基公の御記にも、遁世を表(アラ)はして心を漫り、名聞名利に紛るゝ者は、賴政が射侍りけん鵺(ぬえ)のごとし。猫にもあらず、蛇にもあらず。狂亂物狂の至極也とかゝせ給へるに、我もその鵺(ぬえ)なるべし。こゝに國の數六十六部の法華經納めたる僧あり。名ある野山の末に心の露をかけて、佛を忘れず。一日物語しけるは、御當地の榮え、たぐへて物なし。東叡山中堂は日の本に一ッの影をうつし給へる靈場なれば、花のかほり・鳥の聲までも、日枝よりも猶ほころばしう心地よげなり。日光には莊嚴壓(アサ)れたれど、池は廣澤よりうつくし。遠-樹・高-閣、風景涌いでたらんやう也。淺艸川・隅田川たえず名に流れたれど、加茂・桂よりは賤しくて肩おちしたり。山並ミもあらばと願はし。目黑は物ふり、山坂おもしろけれど、はてしなくて水遠し。嵯峨に似て淋しからぬ風情なり。曹司谷(ぞうしがや)は樫の木立も昔ながら、寺もよし。三光などつね見ぬ鳥のから聲、伏猪の床もめづらしくはあれど、鶉鳴ふか艸山に墨染の寺、元政など聞ふるひじり住けん跡忍ばれたり。遙劣れるもの也。王子は漲-落一片の水に、曲水のたはぶれもすなる。舟にて行かへるよし。われもかうなど茂る。菊をあきなへる人の閑居には、茶園も所ゝにて、花園もうつろふ比成に、宇治の柴舟のしばし目を流すべき島山もなし。興聖寺・平等院につけても、詞をのこすばかり也。護國寺、御堂新たにして綠樹陰を重サぬ。町並きら〳〵し。かけ作ッ吉野に似て、一目千本の雪の明ぼのも思ひやらるゝにや。爰も流れなくて口おし。筏さす人にあたら櫻のちりかゝれかし。深川の洲崎は東南に圻(サケ)て、安房・上總の山ゝを風帆につみ上たり。池上の塔に增上寺の茂みを列(ツラ)ねて海原を彩どりたる形容、杜詩・韓文をあざめり。かの住吉をうつし奉る佃島もむかへども、岸の姫松のすくなきに、そり橋のたゆみおかしから

ず。須磨の蜑の汐やく煙ほのめかして、公家達のたゝずませ給ふ御けしき、おさ〳〵似もよらず。宰府はあがめ奉る名のみして、染川の色に合羽ほしわたし、思河のよるべに芥を埋む。都府樓・観音寺、唐繪といはんに、四ッ目の鐘の裸なる、報恩寺の甍の白地なるぞ、町繪の屛風立らんやう也。木立うすく梅紅葉せず、三月の末の藤にすがりて、回廊に莚をまふくるばかり、野には心もとまらずと。一ッ〳〵に疵物にしたり。無疵の名作は快霽の富士にこそ、三千世界をからげたりといへるに、我もまけじとて天に孕める地なれば、三藏法師の渡りしはて迄も、見るに聞に心の止り目を驚かす、蓬萊の山とこそは承りぬ。しかしながら世に劣らじと、勝槩の奇絶をつくされたる分限の殿つくりのうち、表はいらかにし茅にして、遠・石兩工の物數奇をふるはせ給ふ庭山・細川どのゝ國石・土佐殿の良材・島津どのゝ蘇鐵、家〻領分名木をあつめ、異禽・靈獸をかひはなちて、靈臺・靈沼の樂み、皷吹の聲外へもれず。仙臺のとのゝ秣刈・加賀殿の掃除の者、大路にせばまりてかぞへも盡さず。緣をもとめてかの山を見るに、三日粮をつゝむに見殘すかたのみ也。千丈の瀧の白玉落しかけて、辛崎の松に禿倉祝はれたる所、松島・鹽釜なる姿、霞がくれの寺、蚶滿珠寺をこゝに寄たり。香爐峯の雪とこしなへに白い鷺を千羽かはれたる汀、廬山の雨を灯籠一ッにてもてなす處、杉ばかりの端山をば老曾の森と見はやしぬ。白鶴丹頂の毛こほして、百梅に飛かはしたる砌、竹林の虎をつなげる宿もあり。是はむかし虎の生皮をうへて珊瑚の瞳を入たり。金の爪をといでうづくまるかたはらには、孔雀のひな字したるが芭蕉のかげに啼あり。櫻五百本・紅葉五百本、左右に錦の春秋をあらそふ。馬場あり。楞の雲にそびへたる陰に埒ゆひたてゝある所、犬追物し給へるあとゝかや。くちなしの爐次はこまやかに、木幡の山に心つけられたる物也かし。桐島の千入なる染井の山、立水・臥水の淸き流れ晝夜をすてず。これかの島好み給ふ公也けり。南天の冬庭、あられふりしけり。木賊ばかりの庭、月のみがゝれ出るにめでたり。知行とる菊作り吹上にたてり。牡丹の媒と成り蘭の奴となのるもの、京よりめしぬ。鸂鶒の

扶持とる辻番、釋しれる犬飼、玉川の螢をあつめ、野火どめの虫ゑらみ、根合艸合折しりがほに　玉箒眞砂をならしぬ。貝敷る道雨にされて月と霜との光をかすめ、瓦を疊める所露しげく苔ふかうして、昔を忍ぶ亂草を拂つて、蛙樂を愛する隱居、舟さし習ふ女中まで、湖水にうかぶ粧ひを餝れり。大井の逍遙・志賀の山ぶみしつ、日も夜をふかめては松明して尾上に行通ふ。樓閣雲の底につらなり、蟲鳴谷に答ふ。牛を愛して紅の手綱を引はえ、羊を興じては明道の巾をまねぶ。居士衣に錫を鳴して白兎の玉を躍らしめ、黄鸝の柱をゆるめたり。名鷹に獵をもよほし、奇犬に山家を守らせたり。八重葎をのづから鄙の住居をやつし、春耕し秋おさむる業、五十三次の羇猴をまうけ、驛路の鈴の音たえず。山關にねざめする男、竹の編戸にまろうどを名のらせ、かきつばたさきみだれたる澤邊には、飯をほとばし、柴の箸とり揃へて椎の葉の情に耽り、菓樹心のまゝにもぎとり、瓜田に杳をゆるして、起ふし已がまゝ也。車馬かまびすからぬこそ、柳のしだれたる所がらにして、笠に杖に清水をむすぶよすがならし。此清水、御茶に献ぜられてより、世人水屋敷といへり。心越禪師の記、道榮・玄龍がたしなめる額、今めかしきにもあらず。隱元、高閑の清莚にうそぶける跡、潁川に手あらひし人、養老にわかやげる形もよそならずや。蹄をひたし、脛をしろめて塘に登れば、洞庭・西湖に生れたらんやう也。から人のうたふを扇にうつし、拳といふ酒のみかはして、蘇門の鸞鳳をまねくに、林學士に硯を設とし。季吟に花のもとの和らぎを求めたり。琴・琵琶の檢校・法師、凧のしらべをかはせば、尺八・一節切の名だゝる沙門、高欄ゆするばかりに吹ならして、山の鹿必ず來たり、笑はるゝ梟・かなしまるゝ猿のみさけびて、憎まるゝ蠅なく、きたまるゝ虱なし。こゝに長安一日の花を見つくして、馬蹄に胡蝶しづか也。つくばやまのあまねきおほんめぐみの陰、武門の大家にたてこめたる名所、見ぬ唐土になどや心ゆかん。三都の賦にも聞へわたらず、御僧の納め給ふ御經にも、說のこされてゆべし。所望ならば何方へなりとも御供申ゆはん。

北の窓　一章下

塗壷のうしろに一株高し。

名月や柳の枝をそらへ吹　　嵐雪
莢(サヤ)のほころび豆ぞ飛行　　百里
お腹とる尼に砧をとめられて　　晋子
正宗じやとて甜(ナメ)ておさむる　　雪
シバ〳〵と便ゆかしき中盆田　　里
足半はねて袖はらふ雪　　子
ウ
水瀧にたまる蚿(マツデ)も八重葎　　雪
琴の師匠を待ぬ夕ぐれ　　里
とめよかし兩國橋で流るゝを　　子
さすがに錢はとらぬ人-跡　　雪
から臼に力車のわれら迄　　里
雞頭二本駕籠にさし物　　子
紺屋とは人も存知の名角力　　雪
沉香もたかず居待立待　　里

せゝる手の乳房あらそふ蝸牛　　子
紗の金さえもふるされし衣　　雪
近比は横に大原の花ざかり　　里
先孝をとふ人のおやぶり　　子
蛸引に手ぎはさえぎる巴也　　里
千住へ下る乘掛もある　　雪
物狂ひ亭主早〳〵名のらめや　　子
ふるき衾の柏から〳〵　　里
あたまから烟ののぼる墨衣　　雪
はま名の橋やつらき橋本　　子
風に蕎麥きのふの花はもろ〳〵と　　里
舌うちをして何うらむ虫　　雪
月と見て鼻紙袋ねぢふくさ　　子
乳母とよび出す渠(キヤツ)が塩梅　　里
穴藏の上の朝ゐもいとはれて　　雪
股をこえしか命中山　　子
鼻墮て顏の住居の淋しさよ　　雪
洗ひ河原に二番雞かな　　里

引粥に氷をのこす鉢扣　子
瘤のそだつに老ぞしらるゝ　雪
番町の朱子とはやして花ひとり　子
四ッの日影にしろむ山吹　里

北窓後園　二

業平の暗にしられし西瓜哉　潘川
薄は月のあらになるまで　里東
御用木一本乗を初汐に　堤亭
ものいはねどもすごき頬切　野徑
盞はつるにすはらぬ膝の上　曉白
下モ四-五間はやぶれしやうし　晋子
着ウるも〱北條殿の紋なれや　東
晝に落涙は朝鮮の者　川
くれなゐの心のこりて爪に虹　徑
うはの空なる戀は木夾子ハサミ　白
鶏の鶉鳴かもひとりかも　亭
鳴てる月に大般若粥　子
足の毛を入むしれども闕はなし　川
稲葉が末に寐衣ネマキほすアレ　東
近年は総の送りの酒停止　亭
せなかへ書て放す盗人　徑
腹切のしかも笑ふて山は花　子
九の戸からしも遊ヵ春風　川
かへる鷹俊乗坊のきびすとも　東
是でも集歟笑止千万　亭
いはて山一ッとりたい御客なり　徑
額ぬかせて夢のうきはし　子
回-船の腹へよせたる蜑小舟　川
齋のかへりにあかぬ柴の戸　亭
此空の碁盤の目もり定なき　子
命にかゝる五郎兵の露　徑
紅葉狩鬼も煮入シメをかたづけて　東
川見分の水上は月　川
此馬に曲をのらばや普-施戻ッ　亭
阿難迦葉へ銀子いさゝか　子

藪の色薄茶の稽古風そよぐ　川
柿かたびらは人に嗅れて　徑
川音も吼わたる也加茂の犬　東
内に寝ぬ夜は花の松かぜ　亭
つく〴〵と春の詠も錣盡し　子
氣風をしるもかへり新参　白

萩遊び　三章下

三田山庄にて　晋子
日盛を御傘と申せ萩に汗
鱸の車はしる板の間　功悠
鴈の影面のうごきに肩入て　青流
筏の馳走のほる十六夜　入松
子の袖も交〴〵卵尋ねけり　貞佐
氷柱〴〵と踏折もうし　常役
ウ
牛蒡の莚をあふつ朝嵐　悠
（一字缺）木まいらせて橋に染物　佐
耳輛の後はいたむと忍びかね　松
女中をひとり殿様にする　悠
山村が稲荷の社夜るならで　子
硯來るまでそらに五六句　流
松前に白乾のかひなかりけり　佐
御小進でも八十の賀は　子
仲人のまたもうしろの山颪　松
捨ぬ世間をすてゝ江戸町　役
花生の墨打はねる月のくま　流
中の料理はきたの藤並　佐
かやのみこぱつぱと物を春昏ぬ　子
しづむ漆の千代の兀ゲ口　悠
つれ〴〵と唐茶干たる帙のうへ　役
製法糞に壇のたゝずみ　流
晝ねして夢をはゞかる疊さし　松
鹿の近いは用心もなし　役
月の事須磨は浮世の臺所　子
乾のかたへ躍るやめきは　佐
篭ともに拾はるゝ子はおぼつかな　松

鉦の緒とつて音なしの瀧　役
胡麻塩に白きばかりを杜若　悠
　しなへの相手馬場へかたまる　流
住所もとめかねたる二隠居　松
　木具にたま〳〵室のゑり物　佐
角頭巾へだつる雲の身をかへて　流
　大内山の痩せ石も華　悠
初寅や主人のための申事　子
　うどんを干ものどかなる哉　役

猶の灯　四章下

待友對酌

氷凝(コヾル)間を推も敲もしつ手卷　格枝
　聖人ひとり霜に小便　晋子
野狐の尾の屁(ヲサマリ)を苦勞して　風葉
　小晝の箸は土堤にさゝるゝ　艶士
百莖に笠はあらしの仰(ノ)右衛門　虎笒
　城は六うつ鶉の行かた　枝

待月に障子ゆはへる鉋屑　子
　箱をひらける菊の切帋　葉
相應(ウ)に鈴木院は栖あらせ　士
　卵塔道のついたさかやき　笒
手に入し算盤ぞなら松も友　枝
　かたしく袖の跡は艫の町　士
附子也と下され次第いひよらん　子
　冠者におろして光ある殿　葉
鉄肌や月も氷の火打鎌　笒
　閼伽の仕切に水舟の着　士
まれに來る人に驗氣を慮(ヘカ)らせて　葉
　親の枕をわらふうつし繪　子
新疊是も苧に成袖の雨　笒
　納屋のそろひにうつゝかの面(ツラ)　枝
漸十の家老を花につきたてゝ　士
　あぶない岡をつなぐ若芝　葉
飴引の高根の深雪ねばる也　子
　櫛をかさぬも小屋の者から　笒

ほつたては蜘手めく縄待ぼうけ　枝
　金柑ぬすむ指はまぼろし　子
押賣の祇園寺に松の月　士
　けんくはに付て廻る重勝　葉
驛長が會式の酒のたまり水　笒
　足駄はかする柱よもぎふ　枝
調布のこれは穂待とさらすらん　子
　地震このかた見えぬ詫(コト)ぶれ　士
白川の歯に衣きせぬ門の婆　笒
　入子算より京中の竈　葉
うつかりを多勢が中へかざり棗(ナツメ)　枝
　何を見たやら夢は蒟蒻　笒
觀音へ印籠投ん船ゆすり　葉
　たかるゝ柴もおもかげは夏　士
白鳥にねぬあかつきの山颪　子
　これにも月の木形切くむ　枝
孕み稲帯にはさむも色に出て　笒
　一口のるも鬼の相談　子
喰分を柚山人の默阿彌に　士
　たが子の太刀をかへす石尊　枝
宵廻り伏屋にをふる名のうさも　葉
　兵部卿とはうたかたの粕　士
口にたちて八日の鐘の雪にあふ　枝
　心の杉も篭にたしなむ　笒
一札につんぼ商人花のかげ　葉
　鯉見てくらす外郭の藤　子

科頭に背けて、閑中の閑をしる。
竹の屁を折ふし聞や五月闇　晋子
　花たちばなに一重日よぶ　百里
表具屋の珠数さら〳〵に遺得て　朝叟
　野ごゝろの時鶏に喫るゝ　新眞
澁(シロミツ)に染る中葉の元結杭　嵐雪
　帆をよむ橋やよく〳〵の隙　堤亭
さし樽の角文字たつる十三夜　市盛
　枕俵は床の間につむ　全阿

禿から仕衣(キ)せとる子は蒲の中　眞
くもれば泪明日か大大　子
今拾てふむにつたなき蛔がら　里
からす三羽の跡は歴〱　盛
野鼠の願さむし森の色　亭
二日醉にもしら河の關　叟
乙女子が傘たゝむ身は晴て　阿
今ぞ情も質屋からしる　雪
開闢によひ(い)夢つぶす寅の鉦　眞
髮はきのふの中小性かな　里
一袋繪の具をといて雪の山　盛
たが盃に先約の先　子
月花もしらじ鞨皷の出來て來て　雪
東海道にねり雲雀とは　亭
雪消て疝氣たしかに物申(ス)　里
田舍がのかぬ手拭の脫躰　眞
たべつけぬなんひん餅を忍ぶらん　叟
長汀はてのしれぬ小便　雪

藤棚の卯月になれば竈干(ス)　子
黃蘗を乳にむごいたらちめ　盛
屋形舟三日つゞけて樂配所　眞
土藏も人も老の兀(ゲ)口　阿
行ぬけてもどりぬけたる柴屋町　里
彌六仕まへばよその通路　亭
月よたゞ覺束なくも牛玉買　雪
文治の秋の判官を泣　叟
猿にても人につかへば一かゝり　盛
かゞみを磨で足を戴く　子
抹香を臭うおぼえし我昔　亭
餅の丸みを握り出すつや　雪
あそばれぬ鳥の林は晝休　眞
くどく側にて前髮を切　叟
君が手の相伴を待道成寺　里
風に波たつ靑天の蟬　盛
旗白を病人と見て鯛は花　叟
亭主の胴をつく〱し哉　子

松の塵　六章下

万世いさえづり、鸚居を轉じ、黄舌をひるがへす。

うぐひすにこの芥子酢は涙かな　晋子
ちる約束や名殘ある梅　應三
船頭のけんくはは霞むまでにして　沾德
物書捨しあみ笠のうら　歩齋
隼の祭見る間や峯の月　周東
無地には染ぬ千丈の蔦　貞佐
とゝへば畠のぬしも神の秋　三
とまり〳〵で狂言を出す　子

此句につけて物語あり。中御靈に淺野稻荷とて、代々の鎭守あり。子葉、東行の時祈願のために參詣せしに、神垣の後に時ならぬ菌生出たり。是に納受の力を得て、奉納の三句を扉に書。

神垣や幸茸は人の笠　子葉
海山かけて秋の物成
かはらぬぞ月の桂の男氣に

これらの事おかしき、なき世語也。

臺の瓜こひせぬかたへころ〳〵と　齋
御前の眉を越ておもふや　洲
密法の德にあらずや此肥り　佐
山小屋を出て光る印籠　德
鳴千鳥夜衣は一間ほころばし　洲
鐘はちかうに親類の月　堤亭
靈棚へ足踏を鳴す鑰の音　德
まる馬出しに成し踊手　齋
いつのころ袴やめての花意　三
桶に野老は古郷の市　佐
はつ午にのれんの狐日だつ也　子
座頭さびしくわかる追分　亭
鉄床を今おろしてや大鑄　洲
翠簾をふたへに殘念な顏　三
夕顏の病人ふへて宿せはし　子
茶苑の太皷泰平を打　德

鞘丸の尻をからげて忘れ水　　佐
　三里をすへぬ是ぞ上臈　　子
首とつて首にかひある氷頭膾　　徳
　目黒のおち穂参詣の袖　　齋
あの鳥に心はとまる松の月　　亭
　神と君との外に足下豆　　洲
金の珠數三尺繩にかけまくも　　子
　氷雨一とをり露の瀧破　　徳
信濃者京にまじりて夢ぞかし　　三
　つるべの音も腹へとく／＼　　洲
案内のその手はくはぬ花の雪　　佐
　和尚のいきり彼岸也けり　　亭

君臣の塩梅をしれる人はたれ、子葉・春帆・竹平也。

なき跡もなを塩梅の芽獨活哉　　沾徳
ちる花はみな男にてなみだ也　　宜雨
あしたには朽ても花や名とり川　　紆角
うどんげの名も横雲の柳かな　　止倭
灸すゑてちるべき時のさくら哉　　仙芝
終に引汐に角なし梅の露　　沾葉
曾我どのゝ宮もわら屋も彼岸哉　　朝叟
身の關を越て手をうつさくら哉　　杏林
その骨の名は空にあるひばり哉　　貞佐
枝葉まで名殘の霜のひかり哉　　沾洲

岡野九十郎放水、はじめて東へ下、八はしの處を問て

四季咲は牛もくはずやかきつばた

さいへりとかや。人〻其橋の句を題して追善とす。

八橋に墓をめぐるや春の草　　周東
松寒き旅人のゆめやかきつばた　　午寂
ぬしやたれ素鎗のつぼみ杜若　　春船
八橋や帷子ぬいでヌ太郎　　專吟
塀のりの八橋匂ふ澤邊かな　　灌木
かきつばたあやめも其夜月明り　　昌貢

捨文も江戸のゆかりやかきつばた　　茶花
　父病死、みづから元服すと聞て
八はしの花ぞむかしの金右衛門　　楓子
かほよ花一株づゝのみさほ哉　　琴風
かきつばたさぞな煮込ム力足　　角吁
井戸二ッ八橋の名は春の霜　　入松
をもだかの鉈を引也かきつばた　　晋子
　未二月四日
　春帆最期
寒鳥の身はむしらるゝ行衛哉
　子葉末期
梅でのむ茶屋も有べし死出の山
　三月四日、追善、沾徳會
　其覺踏だるあとも雪の花
羽の調子にて目に角が入　　午寂
　丸太をのせて出る欤冬
踏潰す家をつばめの笑ふらん　　晋子
　雨のうはさも脇差にあり
やりて衆は魔佛一如に狹マれて　　沾徳
　廣袖の雪見がへりに宿も哉

恐ッ〱ながら馬に煎餅　　横几
　何の遠慮に鹽やかぬ海士
琵琶巴のねも身よりの鷹の一夜にて　　凍雲
　あたふたと行當たる女郎花
しづかにくへばまんぢうに音　　角吁
　松風さむしでんがくに寄
荷は先へまとの立か明後日　　堵岩
　憎まれ鶏の結句勝鬪
仁右衛門が人を置日を稽古にて　　晋子
　君なき壁にのこる献立　　沾徳
　　滿座一炷香拜

朝三章　下之三吟
　待乳山、あかつき越て、夕こえて
　いほ崎の家居にかへるな
ましこ引霜よりけふの行衛哉　　昌貢
　同じ枯葉に杉の實の色　　晋子
差圖板爰には痺きらされて　　琴風
　山川萬里法倫味噌で間　　貢

入月や樺につれたる腹の音　子
　鳥驚かしてんぼふる也　風
葛の葉の伯父公の撫しうらわかみ　貢
　されば都の衿の世中　子
千手堂一万兩のそば杖に　風
　鯱より武士に成すまいたり　貢
湯左衞門に谷のひゞきを馴て聞　子
　他にすらせて壽見る墨　風
楢小楢嵐と霜にやしなはれ　貢
　月にはえある翠簾の僧正　子
みそさゞいをのが翅を灰均し　風
　余所の無常に古着かはうと　貢
痩たうてつばなもくはぬ花盛　子
　これぞ雨夜の冶郎双六　風
捕ものゝ名にこそたてれ呼子鳥　貢
　鈇のあつらへは南禪寺より　風
兎にかくに子方の親は闇なれや　子
　ゆるがぬ中に脇ざしの汗　貢
卜た村の諱ねにいつかあづからん　風
　とをつあふみは君ともが國　子
手の筋のそれさへ匂ふ心和　貢
　蘇鉄やわぶる老の埋火　風
盞飯の穂に出にけり紫蘇醤　子
　盒にぬるゝ木津の枝道　貢
舟下に願主いくたりくれの月　風
　かれは薪にひろふ鉋屑　子
氣ちがひのざんない所ほころびて　貢
　人も臥目に懸河の臥座　風
臺ながらつき戻されて羽抜鳥　子
　みな皺面にお皮切なり　貢
花はこの加賀に傳はる五本骨　風
　雪間をわけてちやッと吸物　子

三の蓮　八章下

しのばずの池亭

寐てかとへはちすにさそふ朝朗　晉子

髭籠にあふはあふひなりけり　市盛
木玉より木挽にいさみわたらせて　百里
牛はうしろに行水の邪魔　堤亭
栽物のない搦手は月寒し　沾洲
河豚の遠慮に窓のうなづき　里
ウ
待空は足の大指をつかむらん　子
うつす日色に御番衆が乗　盛
信心のけしき變じて釣ッ狐　亭
鯰もげにや文王の園　洲
ふかみ草一年分の付とゞけ　里
曉の箭は天が下なる　子
さゞ波や餅は持屋に落る月　盛
柿を斫つて剛力が汗　亭
内儀やら何やらしれぬ初あらし　里
鎖ぞつらき藍蠟の髭　子
花ぶさを押小路物にほはせて　洲
う〱や竹に椒カラ皮　盛
涅槃像なきつる方を詠れば　亭

金子を首にうつの山越　子
元服ににげなき年のほとゝぎす　里
さゝやく人は橋で北むく　洲
灯の喜見城なり藏坐敷　盛
箸をかくして居へわたす膳　亭
駈ッ狂ふ八人天狗天津風　里
鴈來紅を君がこはがる　洲
二本まで扇ひろふて月を持　子
ほとをりさめぬ鴫を則　盛
藪山に希有な病を請取て　亭
過しかねたる口に入相　洲
風そふる綸はわたく成にけり　里
融をうたへ水戸の塩竈　子
スパ〱と甜からせたる星か火か　盛
寺家から通す花の古道　亭
山〱の檜榧木いかのほり　洲
墨流しなる水のかへる子　筆

歌の島　九章下

戀一折　旅一折

友寐して鍼立寒し戀の丸　秋色
歯涅もらひに霜の袖笠　晋子
よそにのみ早打みれば聶て　専吟
かぞふる鴈に爪のない指　色
月のうちの葛籠男はくもり也　子
伏屋のうさは酒臭い菊　吟
うら問に落てくやしゝ私語　色
御三所ながら同じ産月　子
折からと四條を謡て繪帷子　吟
水の出はなを長と不和成　色
はづかしや此かちよりの草履取　子
筑摩の祭世にはぬり笠　吟
をしたては薗生の竹のすうはりと　色
天の河瀬に化物の首尾　子
涎さえ枕にぬるゝ月の色　吟
たれに抱せんすまふにもうし　色

ちり迷ふ花に諍も半合點　子
白い歯見せよ猫も狂言　吟
ちゝめくや馬に嗅する菓子袋　子
かゞみ山から楊枝めせ〳〵　色
不仕の身兵衛の時を語出し　吟
漕はなれては蚊をしらぬ舟　子
居風呂を軒の鱸に覗かれて　色
しのぶのみだれ仙臺の繪符　吟
殘月に小遣ひ貳百文わたす　子
波はよせてもうらのない足袋　色
近道へすゝめ申せば桿まくら　吟
九佛の日記を十佛の〆　子
松盆に逗留中をもしほぐさ　色
たま〳〵あふは玉味噌に小菜　吟
夕鳥ひじりの弟子を一つなき　子
あの山見さい江戸にない山　色
大義して御本陣まで花に折　吟
請浦近しいざ櫻鯛　子

うぐひすに心の駒の朝はしり　色
上下の者のおぼろ〳〵と　吟
哥の島先松魚より光さし　掃尾
芍薬ぼたん岩に口紅粉　万橋
水雲に合掌戸樋の糸もれて　馬黒
たうがらしさへ千金を積　晋子
月の鵯お小間使をよびからし　橋
島に箆(ヘラ)は浩ー然の露　尾
野ゝ宮に万度の家もはやる也　子
風のたよりを茶屋へ早速　黒
卄日なる髪の袋をふりさばき　尾
この米虫は何の因縁　橋
艫板によめぬ坊主をぬすみ乘セ　黒
ぬくとさゝぬぞわれからの鞘　子
お見立に二百疋づゝけさの月　橋
すゝき折敷濱燒の傳　尾
熊本は露もかゞやく冠木門　園非
すはるこのりに段切を踏　寸楚
舟出して花の小鴨の手拍とも　黒
梅ほころびて前帯も緋　橋
春は此龍虎に立て泊らんせ　尾
三輪の奉行のまだしらぬ道　子
いかなれば草履上手の土めくら　楚
達摩の背瓦灯干ッるゝ　黒
さび竹を泥から出して雪の朝　橋
錦帳にふす鶴も新参　尾
石山の鑰はおぼろに鐘の聲　子
ふりたる烏帽子本性で舞　橋
足弱にあへらるゝ身は思ひ中　黒
ふたり打手を秋と答ッる　非
宵の月四方あかりの張簾　尾
いさゝか家賃乞食ながらも　楚
一ノ宮に十五ヶ村は腹鼓　橋
海松からほどく尺長ヶの貝　非
たれあらん天の橋立與平　黒

夕日にかざす袖も日三里　尾
幼少な隱元禪師花ごろも　子
匂ひにはまる艸の燒餅　黑

家々の名所　章下

富士長篇　枕草紙古本二溢は鳴澤の海、さ有。八海のその所也。季吟抄にはのせられず。愚案、此草帋にすべて此山の事なし。書寫、鳴海の海の誤にや。

鳴澤や幾双の奇の衣がへ　其裔
鵜蒼鷺も狩のざゝめき　晋子
風になびくもらひ欠をあの面に　來示
筆で心剪〃夜半の友閑　其幄
近松も松原遠く月は見ず　格枝
砂惜みたる菊の吹上　孚兄
竹とりの翁さびたる稻庇　子
大行あひやそれが初戀　裔
忍ばしき御綿帽子時雨ふる　幄
とけて流れて三階の酒　示
香ミ料の烟をきざむ三穂がゝり　兄
鷹と茄子を浮橋に待　子
來ヨとや打れてねたむ太皷共　示
月夜の反吐は鰶の罰　幄
をどり迄筑波に勝しお酌取　裔
朝鮮人のこゝろある鷗　枝
雪は花赤人の手にふるばかり　子
おゝひにもゆる胸は三ッユリ　裔
安部川をわたらば錦床道具　枝
百ー疊石も鹿子半分　子
日の下に雨はふり來ぬ捨舍り　示
蚊やりに鈎す扇あみ笠　枝
粟とする水は六月十五日　幄
岩本院の亭に上段　兄
神奈川のあなおそろしの物語　裔
はくりやうを待松に禪　示
時しらぬ梁の摺鉢雪を衣て　兄
ノヘに見へに見ん有明の鴈　子

汐見坂北の柑子に牛の舌　枝
野分せしより名も二見晴　幄
入あひにお明キ〳〵と持や田子　示
もとひの袈裟も百日の閼伽　斎
斗なき雪を湯にして酒の代　子
瓦坊主もむかしから今に　幄
堯孝のこよひ裾野を花の宿　枝
四方の腰は白妙のんめ　兄

繼目の御禮として、なみ〳〵の下
宜羽丞な出、時の宜しきに逢來り、
此悦なとく古郷にしらせばやと、
いそぐ心の駒ゑらみせしに、晋子
門送りの盃なさりて所望。

わがこふる南部二歳や後の月　其雫
一穗たしかに五百粒づゝ　晋子
木屎は屑うつ槌にふるはれて　沾洲
瀬をふみ分の鮊(ハタハタ)の穴　紫紅
橋ト虹ト卍に組ンで晴わたり　子

二車にて茂庵松の葉　雫
鼻も目も藤倉山の睡ー虎ー岩　紅
蒐落もの〻至極風藻　洲
小普請の鬼に待る〻その夜は〻　雫
指とゆびとのみとの交(マクハヒ)　子
早追の褒美して行走リ書　洲
帷ー幕のうちにたばこ始マル　紅
鷹鹿に五色の餅をうろ〳〵と　雫
今の遊行は誹諧を月　子
松明の影に聟かの秋の水　洲
否イヤ出なこひは沖の石舟　雫
花に棚熊の拱(コマヌキ)見てしがな　紅
檜原の辛夷諸白を吸　甘巳
臥セ紅粉の色ほころびて春日影　子
狐づかひも門前の物　洲
化さうな枕ながらも嗅ばけに　雫
つながぬ舟やりん氣仕習へ　紅
臺にたつもの〻哀や八代賀丸　子

梟に袈裟や御隱居の顏　雫
伊勢が鞍三途にかゝるつゞら折　洲
龍の尾ぶりはもみ上た錐　子
鉄炮に釣瓶がけふる夕あられ　雫
宿にゐたとはいづれ十月　紅
一葉づゝ兎の弓にはらふらし　洲
猿がみだれをきざむ松茸　雫
八十島のもくめを撫る玉の露　紅
漢蒲團に泣蛩のみどり子　雫
手力雄大飯ぐひを守り給ふ　洲
この御出頭千手觀音　雫
錫引の光を花と人の影　子
つる通りにも苑のこゝろ見　紅

糟壁のすく迄さ引付らる。檀泉さ
道くさして

爰にのむ坐敷しつらへ網代守　晋子
剝や松を一もと蔦かづら　檀泉

菊の間をから辨當に畫ね哉　沾洲
小車にいづくとまりのお鶴樣　紫紅

檀泉が庖丁しけるに

鴈遠し先これ迄は江戸肴　其雫

一葦のよる所、秋天万里、千帆漕もどす事かたし。

初鶴のしづくや櫂に強風（コチ）舟　雫
二日の月か朒肚臍の耳　紅
穴門のおくは酒も杷して　仝

一とせ巡領に供せられて

象潟の岩を削るや袖の露　泉
蜻蜓や日にてりわかる嶋衙　紅

里居り　十二章下

木葉に詩文など書て流したり。おもふ人の末にて、さりて見れば、里なつかしき事をしれさ也。

御溝葉に恐れながらや忍ぶ中　竹意
七百足をねらふ數さし　晋子

素建から月にはさはる角家にて　艶士
　くもらぬ暖簾聲なうて呼　幸輪
茶色鳩砦と申せば都也　専吟
　子のものしりが椰子ほしがる　意
床の間に熨斗は置れて公いまだ　子
　目影にわたす蜘のふるまひ　士
ほの〴〵と腹にたまらぬ明石瀉　輪
　段子あつめは拾得にこそ　吟
ぬれた目につられ〳〵て我は雪　意
　ねねばならぬかお袋の側　子
かもじぞと揃へあげたる蕗の皮　吟
　夕汐見えて神樂觸來る　士
流レ矢の身にはこたへて馬の尻　子
　つれなし蕎麥やいけぬ線蘿蔔　意
つれ〴〵と初茸程に雨の足　輪
　風呂の手合へ月の金札　吟
秋なれば諸行無常も大皷樓　士
　後のあしたは綾のおすべり　輪

大毒の反魂香を花の雲　子
　十八町を游ぐ曲水　意
鈴子して禁野かた野の亂拍子　吟
　いほりの茶臼さればさる者　士
よび生て御膝にかゝる五ッ衣　意
　すゝり團子も泣ク櫪也　輪
淺ましき鼻は奉書の作りつけ　士
　重顆の名はきえぬ送火　子
皷物もさすが岩城の月の友　輪
　ちればぞさそふ萩の染革　吟
兎の子籾に入て參りたり　子
　むかしながらの五智の假葺　意
壺笠で遊女こさめれたび衣　士
　沉のまくらを神鳴に出す　吟
氣霽ては船をお留守に岡の風　意
　猫かと光る宮守が姿　輪
一撫に天の羽袖を五合升　吟
　大鋸しらぬ巻向の山　士

入札の若衆さん〳〵冬がれて　輪
鵜に吐せたる文が物いふ　子
白無垢は二襟かえてゆめばかり　士
竈(クド)を流せばやかで共まゝ　意
雉の尾の枝を漕也花のうへ　輪
たうにたつ菜を袖に摺るゝ　子

篇外

三弄翁の食鑑に、鯸鮧(コウイ)布久と訓ず。古は布久閉とかや云り。腹脹して怒り、波の上にたゞよふ形を、ふくべとはさしたる成べし。三平二滿にして、けうとき口もとしたるを、虎御前とはいかに。西施乳と比して、雪の夜の衾をあたゝむるこそ、楊家の獨にも劣らじとて、詩人は鯸、文人は鰹とたて分りて、九夏三冬の親炙、近來の上達、醫師の口からはいはぬ事也。

茶の湯にはまだとらぬ也瓢汁　晋子
鐵炮のそれとひゞくや鯸汁　仝

丁喜菴の會饗、冬枯の榎、榛の木の嵐のひまに、曉笠亭の若者を集め、夕闇の灯火遠うして、すがゝき引もきらず聞ゆ。例の謀叛などすゝむるは、閑居不善の色敵よさ晋子に塞(セカ)れ、一方の連衆は手樽にふせぎぬ。亭坊の腹立は醒てあさなくや。

鯸汁や米買なとか假まくら　檀泉
鐘は木末にあられ一片　沾洲
有明の舟に車をかきのせて　晋子
たづぬる人に丁と玉むし　丈松
髮ゆひの帶にほどけて初尾花　貞佐
切戸はらつて西は田のあぜ　泉
(ウ)一すじに佛の梟とくさめして　松
おもひもよしや吐血三代　子
熊坂と在五中將いへばえに　泉
大根はにえず煮る榛の木　佐
穴倉へ梓のおとの水くらき　洲

篭でかぞへる若狭何束　指雀
鎗持にふるな〳〵とほとゝぎす　子
物にくるふもたばこ入也　洲
渡ればやうそ八百の安の川　松
名とりの老女殿へ盞　泉
ちると入ル後のあけぼの匂けり　子
段のつゝじへ着到は済　佐
頭巾とるゐぐひて晴る春の山　泉
おもひの外に見えし定小屋　松
投足に雨ふらばふれかき鱠　佐
穢多が崎をもれし土鑵子　洲
是やかの美濃様よしの着心に　子
階子にたつは雨の手の君　佐
俤はけぶりにくもる屯タカリ喰　松
大三挺に蘆の香を引　其幄
昨今にのこるとのはなかりけり　泉
杵もひゞきもしぶ〳〵とこそ　松
舌かゝぬ心わるさよ殘る月　幄
悠ー然として花にべカコウ　洲
釣の魚盞フタをたゝいていふならく　佐
門でおぼえる六郎左衛門　泉
御曼陀羅かゝれとても二百兩　子
駕籠のいやがる生れそこなひ　幄
矢倉には憎い面あり四方の花　洲
つばめにてふに勝手はたらく　松

丁喜菴に醉吟

先ッ皮をみやこの我に河豚汁　丈松
後の月汐さい鯸も契あり　五出
初鮑や身従の醫師の遣ひ物　共幄

柿の繪　一休和尚自讃

冠里公の奇品として、晋子古ル筆を嗇で、六種の一ッをまれたり。中〳〵似るべくもなし。予其氣質の禀タルひさしからざる事をしる。今年とに病僧と成て、見たてがら遊し。

うちまけて笑へや〳〵柿俵　東潮

かた撫になる秋は山人　晉子
有明の鐘つき賃を催して　青峨
鰯のよりに舟もはじまる　双魚
藕（一字缺）のうす紫に火のほめき　太岱
むかふたまゝの詩に辛い顔　潮
瘰癧の笠にぬふてふ梅の花　子
いひもはたさず蝶の口もと　峨
春を世に辻やすらひの枕うり　魚
遠見もありて城の塗ぎは　岱
千歳に膳のすへ手のかけ廻る　潮
五間つゞきに西日時雨る　峨
鼻帋はもらひづかひの木綿坊　岱
うかぬ軍と詠めくらしつ　子
海山の心にのれば刷毛をゆふ　魚
宜禰がならひに負はるゝ巫　潮
貝焼に月雪花とすゝりあひ　岱
奈良をつとめてやまぬ滞滞　峨
小表具の春の夕べを干てみれば　子
女中もさする岡の帆柱　魚
水増は宮古の雲のうき名かや　潮
ねらひの著に成し合歡の木　岱
蛸なんど腹たつそれに任せたり　峨
大御祕藏の利腕を取　潮
達磨寺に思ひ朽たる雨やどり　魚
ふいご祭の素袍尤　子
水仙の膠付ヶなるあさ氷　岱
一くだりでも訴狀聞える　峨
江戸者は伊勢の灯月白し　魚
かはる淵瀬を色越への秋　子
桐惜みわが庇なれば切惜み　潮
豆をくはうとかゝる味噌搗　岱
拍子木に左右をやつてくれはとり　峨
蒔繪の浦の節句淋しき　魚
名將の座榮各別花の咲　子
中にぶらりのなど夢の春　筆

金杉のはしにうち出の濱、大津馬、
松本の牛も休めり。

皿鉢に駒の蹴あけや心太　晋子
漁父にまいつた澤瀉の風　貞佐
假張の延喜天暦苔むして　仙鶴
凡手に入長安の矮鶏　沾洲
尿瓶の月推參の場もなかりけり　横几
上蠟かけば蜀黍の眞　子
ウ
龍田姫背を鏝で撫て行　佐
羊をたゝく皺皮の窄　鶴
みほつくし口中腫す火吹竹　洲
ひろひ買して走る岡持　几
迷ひ子と泊ッ定めぬ酒の醉　子
飛鳥井紅をたれ様の墓　洲
のけ物に金の封切まくず原　几
枕法度に名はたゝぬ月　佐
秋風や目にはさやかに骨攣痛　鶴
原田次郎が袖は世の露　子
花に來て物相飯も百人一首　洲
お湯桶までは遠くかげろふ　几
講中が已ノ已を夕はらへ　子
通辭をそこへ放す滄海　鶴
内ゝの傀儡女をよぶ木綿夜着　佐
けふも瘧ふと夢ぞ悲しき　洲
瓢まで數にはもれぬ司めし　几
欲にむかふ水の蟷螂　子
大空を天竺といふ月見して　鶴
また引負の扇一本　佐
掃キ庭に織流したる篩絹　洲
よし山婆へ雪車の餞別　几
鯸の血をしごくばかりに相枕　佐
狹み素袍はいつのきぬ〴〵　鶴
屏風好キ物おもふころは立こめて　子
股のしこりをいはね濃つゝじ　佐
留守居役朋遠方に花ざかり　几
俵にした箭の春惜むべし　洲

塩鶴の縄をほどけば干潟にて　佐

千とせの坂は分別の坂　子

漢家謫居の人は竹を詠て世の中のうきふしを忘れ、馬を畫てこゝろの散亂をしづめしを、雁のつてして、わが國に渡せる物、千金にもかへずさかや。澤菴の自畫に、月や流人のたすけ舟とありしを、きさかたにて得たる名物也。繪合の一かたにして、それにくらぶるもの何ならんと、島〳〵うら〳〵の日記、昔今の一風流をさがす中に、あかつきの雲にかくれ行舟のあとなき波に、ながらふる者あり。島むろで茶を申すこそ時雨哉　と侘たる句、今さらの袖の時雨とばかりに捨とゞてをしたり。

新月の島繪ゆかしき便かな　楓子

晝の白髮は篠のまた生　晋子

浮雲の鷹に採せゝられて　岩翁

名のある團子玉だれへ入　曉白

他屋敷へ櫓なしの舟が着次第　大町

なぶられものに松はさま〳〵　專吟

初雪のさかな求めに鉢かつぎ　猶郎

切灯臺はこゝも四ツ限　堡亭

ウ

つれ衆へは筆むづかしく法の聲　昌貢

占にも見えず水の評判　琴風

深山木の末はもつとも御縁づく　紫紅

内藤宿は江戸を古郷　反梅

世中を庄八が目にたしか也　晋子

二枚ある齒の年寒き松　楓子

佛とは大髓よりもつつ立て　止水

たばこがやむとすでに昇進　其雫

腰をうつ子ほどの寶あるべきか　專吟

かるい狐はつねに菊守　大町

虹梁の菰をとかれて秋の月　曉松

きぬたにかけて配り上下　岩翁

花にこそ士農工商さくや姫　其雫

水から揚る山吹は分　紫紅
雷も呑たいそらにうる〳〵し　琴風
　何を畫けるふんどしの蚤　昌貢
順禮の土藏に泊る暗ー閑と　堤亭
　河原といへば吸物を嗅　止水
逆剃も夜の錦とつぶやきて　岩翁
　女もつかふおとこ人形　晋子
りうたんのたへまにしぼる大指の血　反梅
　地藏を挺(テコ)に白樫の色　曉松
豆蟹の塩辛迯て月の跡　紫紅
　どこぞのはづれ仕り人　琴風
忍ぶにはちよつと稲荷を手傳せ　止水
　擲にかゝる袖のしがらみ　楓子
箱根路を四尺階子の行ちがひ　晋子
　田中の鷺のすぼむ傘　專吟
ニウ
をのが世を尾ひれもふらず氷鮎　昌貢
　傳受づゝみを看經の隙　大町
榮耀さに持あまりたる腹の張　專吟

　しやうじの骨に京邊の畑　猗卽
棹鹿の撫られに來る朝機嫌　琴風
　身ひろい形できぬ〳〵の露　岩翁
剝栗に頰を冷せば月うれし　堤亭
　鮫(サミ)ゞ洲(ス)よろしき楓橋にこそ　止水
よそ目には笛也けりな小脇差　紫紅
　こゝの輪乘の中に葱冬　曉松
放參のひだるい顏を日なた向　大町
　陸地へ賽を藤岡の市　昌貢
大釜の入あひをしる花の荒　晋子
　彌生と見ゆる引出の夜着　楓子
三
那智黑もまッ此ごく蜆川　專吟
　人は何とも若衆同道　猗卽
夢ばかり母袋へはいりし雨舍り　堤亭
　尾のある丸太牛房ばえ也　琴風
吐ヶといふ主のゆるしも山颪　曉松
　踏だ男は物取でなき　岩翁
功者なる鷄見まふ笘(とま)屋かた　止水

切籠のふさをしぼる蠣剝　晋子
宵の月産でくやしき娘とは　楓子
相談の場をしめぬかうろぎ　專吟
此側はみな鶴重のなるみがた　大町
千里を行も機おりの足　昌貢
百年の人を御扶助の雪の中　猶卽
奉行とあるは廣い制札　岩翁
三ウ　うちかへて伊豆の小山の花しきみ　楓子
雨の鵜籠に獺がつく　晋子
うす〳〵と見ゆる盲は罪ならん　止水
五人が待に三疋は來る　反梅
神無月袖にふりゆく眉鑷子　猶卽
菩提のみちをうたひ本より　昌貢
冷酒がうき世の友と鳴戸繰(クリ)　大町
腫物苦にせぬ目前の鬼　專吟
三方の底うちかへす蚊やり草　琴風
和尚の便宜まだ長もなし　曉松
から鮭に結ぶの町屋おもひ出す　岩翁
雫丸かくしまであられふる月　猶卽
咲花をかねて手に入作の鞍　止水
むめのしづくは三寸(みき)の相伴　堤亭
名　うぐひすに聟の中入ほのめかし　大町
鞘印籠にゆらぐ玉の緒　琴風
行列も杖つき坂はをのづから　昌貢
口拍子にはのらぬ共阿他阿　楓子
晒ほすこしらへ雲にほとゝぎす　專吟
どなたが殘す大鯉の首　曉松
六尺のまかり巾せば咳氣して　琴風
羽織に襷かけて石摺　昌貢
我宿の灯よその竹にあり　堤亭
ひと夜二夜は乞食の乳　晋子
嚢から中花へ出て峯の月　楓子
丁を隙日と鴈のおとづれ　猶卽
角町のわり下水から秋よたゞ　岩翁
あたまはづれて帋を尋ぬる　止水
ウ　奉幣使何もまいらず朝朗　曉松

帆にはねかへる三尺の海老　堤亭
つれ〴〵の爪をためたる古櫛笥　琴風
かたわれうつす鎗の間の富士　大町
屁合に膝たてなをすばかり也　晋子
二六對なる北向の篭　楓子
花鳥の改元觸て三笠山　昌貢
旅客もまじる曲水の躰　甘己

右巻ゝ文類の大意をわけて引合せ、精稿すべきを、風光に犯されしかば、寒暑、心煩らはしくて、雑篇一册に略し侍り。掌節論考の後、各其わたくした、ゆるさるべきもの也。

昔紙の巻物なりしを、宗祇法師、長門の國にて、尋出侍りて、つら〳〵よみ侍るに、なみだのしづくかはく時なし、とありし文義を感通せられしにや。そのまゝに外題にかきて、別に詞書をそへられたり。定家卿の御書に、宗祇の外題と代をかへながら、名物を揃へたるもたぐひなかるべし。

元禄十五年壬午。聖廟八年御忌。西行上人五百年忌。宗祇法師二百年忌。貞徳翁五十年霜月十五日懐舊の心をのべ侍る。

帯解も花たちばなの昔哉　晋子

かの長頭丸のすがたにて昇殿ありし昔をいへる句也。夢想を祝し侍る會盟の事につけて、才士・文人、筆を置ざることとし、其名高き人の年忌に廻り合するも、風俗おとろへず。飛梅のかろ〳〵敷云出べきにあらずと、

松梅やあがむる年も八百所　晋子

龜井戸千句奉納　發句、略之

荒木田守武獨吟誹諧千句之奥書

右誹諧は、そのかみ獨吟千句立願ありけれど、うち紛れ亦は成がたく過しけるも空おそろしく、如何はせんの余りに、御鬮を取べきに、一ならばもとより、二ならば誹諧の有增事にて、哀、二おりよと念じければ二おりぬ。有難さ限りなく、大かた千句は三日なれば、是はわづかに

二日にもたらざらんと、思ひの外になが引、夜はね覺がちに催し、庚申には二百韻にて五日につゞりぬ。其折ふしにや有けん、周桂かたへ、此道の式目いまだ見ず、都にはいかゞ、と大かた尋しかば、式目は予こそ定むべけれ。定まる所を用べきのざれたる返事下り合せ、さらば此度ばかり心にまかせん、と所に云ならはせる俗言、私びれたる心詞、一句彷彿、うつゝなき事のみなれど、あまたの中なれば、うすくこく打任せけり。扨、はいかいとて、みだりにし笑はせんとばかりはいかゞ、花實を備へ、風流にして、しかも句正しく、さておかしくあらんやうにと、世々の好士のをしへなり。此千句はそれをもとぢめず、とく滿したき一念ばかりに、春秋二句結びたる所も有ぬべし。されども正風、誰人の耳にも入まじきに、聊も聞えんはからざる幸ならんや。其上、粉骨妙句なきにしもあらず。又さしあひも時代によるべきにや、しゐてなをさんも執心いかゞなり。然れば誹諧、何にてもなき跡なしごと、好まざる方の言種なれど、何か又世中言ならんや。本連哥に露かはるべかるず、大事也。本連哥兼載このみにて、心ものび他念なきとて、長座には必ず催し、庭鳥啼かうつほになると夢を見せ、聟入に一橋をわたり、宗碩は文かよはしの自讃に、入相のかねを腰にさし、宗鑑より度〱發句など下し侍り。近くは宗牧一二座忘れがたく、こゝらをたよりにて思ひよる事侍る也。追加五十韵おほけれど、祇公三島にて千句二折を思ひ出る物ならし。さて古來まれなる獨吟千句成就。松の葉の正木のかづら目出度や侍らん。

これは勢州山田の住、反朱子がもとに、右の眞跡あるを京兎窟をして、聊たがはず、寫し得たるまゝ也。

類柑文集　下

闘雞之戯玩尚矣。季郈之芥羽金距之後。唐皇盛於此。在于傳賦韓聯杜律之藥則是戯玩于騒壇者。而其載籍之所見歴々焉。我　朝雖未聞其權輿。堂上以及里閭。爲佳節桃園之戯玩也。又已舊而前記之所錄。可以見其概也。今茲彌生之初。　公筵瀲芳之餘。取題於此延彼晋子。褋以從輩而恢鼓俳諧。　或有七步而吐五六調。或有十步而發一二曲。間有執一者。以夜既闌意始倦而各欲搏啄。多寡混合積壹百有卌奇。而　公裁居其半。至於遣詞名字之競變態。則所謂五百兒之羽儀森々屯其中。是所以追於佳節之典故據於桃園之賀趣。而戯玩之彰雅致者歟。逮使再煩晋子而後偶立篇分。篇得美名。而勇怯之品級。進退之點褒。判然破竹歎玉。是又可謂諧體之新奇吟房之希珍者。　然非與。甲申暮春下浣百之敍。

待宵　上冊

一　合　左右二字

一百の餅臼に拜め　治鶏坊　冠里

忠臣に箒のいらぬ羽音かな　棹孤

五德の冠者、羽團扇をもつて、開いて東西〳〵　むかし玄宗皇帝、乙の酉のとし三月三日に誕生ありしゆへ、唐土のとりをあつめ給ひて、七艸の薺生たつより、やよひの餅草までに馳走奔走有。やがて桃園に塒つくりして、治鶏坊と名づけ、五百人の童子に守らせらる。日本の鳥もその代のためしを引、今日の節會を初めて忠臣の朝を告、閭門の夜を司さどる。一日の計は鶏鳴に有と傳えたり。今度の行事、某仰せうけ給はりて、花鳥の心をやはらげ、列る題七十番の勝負を記ス。

凡例

一五字は一日長安ノ花の花やかなる御遊にもとづきて、これを用ゆ。

一三字は戴冠文、捕距武の二ツの德をあらはして、字面を改む。

一二字は越雞の雪に散亂して、鶴鴒・鶯毛のあらそひに批す。當時ゝ形の點を用ゆべけれども、甲乙の昔のやうに立かへりて、禿尖の力を合セ侍り。

一生變リの假名を正し、所生の實名をことはり、一手〱の名をひろひて、珍禽・怪鳥の品を定む。中ても諸國の大寄なれば、あまりに晴がましくて、目くれ心もみだれ、旦夕鷄のうか〱しきとばも有ぬべし。亦〱申事の御座候。待宵の手三十五合、をのがれの手三十五合とす。小侍從のきみ・少將の尼、いづれもほまれある方人なれば、則二卷題號として、物加和の藏人筆とり也。

二合

御簾まで撮なをすや花冠リ　　百之

戴冠文とす

左折哥にやはらぐ啄目かな　　里

捕距武トス

左の座に着らるゝ事、大臣の鳥也。爪距神爽とにすぐれたり。字義、花冠トサカ　朱冠サカ　とよみ分んとの心なり。是を文とす。左折、武門源平の威儀たり。右の座につけられて、羽翼をかひつくろふ事しかり。是を勇とす。猶、哥に和らぐとおぼめかし聞え候は、文武兼備して太平の時を唱ふ成べし。

三合

廣庭に風の輝尾の進み哉　　雪花

乙字とす

叡感もいざすゝなみや志賀の種　　里

五字トス

風波ともに揮ツて花にうち出の濱輪を廻り、にほのてり尾に、尾花なびかせた手合、其爭ひ君子の鳥にして、上下の貴賤、あれよ是よとまじろぎもせず。行事心ある者にて、さくらの一枝を折て、右へかざしぬ。それより志賀之助に上こすものなし。

四合

炭喰の聲だにたゝぬねらひ哉　　晋子

乙字とす

十月をかねてなき身と彌生丸　　里

二字トス

豫讓が昔を追て、けしからぬ餌ばみ也。其魂此鳥に化して、讎を報へるにこそ、蜀-魂のためしにならへるか。血に啼にはあらず、相手を血に鳴せたる兵也。丸は男の通ﾘ稱、鬫のこなたの名將、鎗下の聲晩世にひゞきて、其ノ月其ノ日と時をたがへずして信あり。

五合

湛增が汗をしづめし羽風かな　何虹

乙字とす

爪距脫て米屋へかへりしな　里

同

只白旗につけての御託宣ありしかども、猶うたがひをなしまいらせて、權現の御前にて、赤白の勝負せしに、赤キは一羽もかたずさかや。其中に搗屋出の上白と名乘て、七羽の中の大力、

別當もこれにほれたり。

六合

弱鳥やこゝは承仕かもらひ退　里

乙字

黄芪餌けふの手がらに宥しけり　習魚

同

遍照寺のけしかる法師、つと髭出て、左を抱へて、遮へたるに、衣におそれて唯はかたぬと見えたり。日比、諸鳥を飼なづけて、恐ろしき罪つくりけるを、大雁共の筆の跡たしかなりければ、只今質はれたりとも行末心もとなし。黄芪餌立られ盲と成て後、烏-骨鷄丸と製法せらるゝ事、ゆめしらずして、婦人虚弱の力と成事、これ誰が力ぞや。

只今の手柄こそ命冥加なれ。

七合

砂渦やつよきに水を一覗　里

五字

毛衣に腹黑き名を雪めけり　晋子

乙字

俵の末孫膜太郎と名乘て、立臼に上り、砂水にむれ入むら鳥の羽音、先陣比類なし。右は名さえつたなくて人にもしられず。骨迄烏武者とばかり、後ロ指さゝれしに、鶴の毛衣を

かりて會稽山に徘徊せしかば、忽ち其耻を雪めたり。此後、藥-劑の陣に進むべからず。

八　合

扮られて毛足は松のみどり哉　白櫻
遠く蒔ヶ梅の下はむ鳥の米　里

左右乙字

志賀の關脇、唐崎ひとつ松たぐひなし。此春は今一しほの色まさりけり。扨、此ノ方には、風ふけば梅の下はむ庭鳥の上毛に花ぞちりかゝりける。昇殿かさなりて、御階に近く賞翫せられたる鳥宦、源の仲正の扶持すまふといへば、

松と梅との中よくあれかし春や昔
扶持をやる鳥がしらせけり今朝の春　露沾

九　合

此首尾を狐はめなて御前負ヶ　里

二字

喰拔の羽實-檢や路次のもと　志水

屯

さんぐ\の首尾、昔男の名も汚れたり。くひぬき羽、羽箒の手本と成て、うつくしき手ざはながら、やりつるせなの恨みを得たる所、心にかゝる負成べし。無下の瑕-瑾にもあらずと、鳥に力を付て、もらひにしたり。

十　合

名乘せん三枚朱冠(サカ)をみつの山　里

一字とす一

めつたに勝闘鷄野の筋と召されけり　習魚

乙字

鬢切左右へこきあげ、大前髪つかみたてたる有樣三まいさかの見參と也。三番うつて三の山と名乘、角あるものゝ角、牙あるものゝ牙、見事〳〵。爰に闘鷄野のあら手を入たり、つげの小櫛もさゝず來にけり、となん。津國のつけ野は、昔、黒主、鹿をゆめ見しより夢野と名付。古意たゞ闘鷄といふ事に取合たり。

一作小雛目に見ゆ。

十一合

膀ぐらへ薩摩におゐて扇かな　百猿

左右乙字

入首へ胡椒頭巾の羽風さぞ　里

小膀くゞりの手者、汝は一人の膀夫とほめたり。破れかぶれの時に、破楚の大元帥と記されたるそれが弟子也。爪立より内膜へうつて、扇長ヶの大兵、琉球の後胤薩摩守我有といふは、隠岐の小島の荒者也。頭撚りの上手、つつと入所をはれかへしたり。

花〱しき胡椒軍かな。

十二合

裁つけの足に覚悟や錐嚢　辰下

乙字とす

取放し佐野にはいくつ合せ牒　里

捕距武トス

たちつけの躰、田舎行事とみえたり。芦と足とのせりあひ、六かしき手を云ほどきぬ。右も又入くみたる手也。佐野領舟橋より出て、牒面に合せ、その數極まり侍るに、いづくへか取逃したりと申す。そも烏は無ッ亦取離しとの兩用を、今あらたにとり放したるは、うせものゝ沙汰にして、吟味すべき事ながら哥の心も改まりて珍し、と仰せありて御褒美とに、

一扇をたびぬ。

十三合

音をはかる東々合や羽衣の曲　里

左右二字

柳が瀬をつかみ合せし鳴尾かな　右　此

吾妻合の曲流、音をはかるとの手寄、ひるがへす羽風に目ざまし事、彼玄宗のたはぶれには、以てまいつた合せものなり。兩岸の柳のみどり、東のかた屋・西の片屋、遲速同じからず。其羽・其尾ともに風流陣。

十四合　左右二字

刻ッて入くるみ花冠も箕手哉　晋子

距ル筋の子は子也けり小屋　雪花

山がらの廻すひねりを得手物、箕手にかゝる砂はらひ、たまるべからずとて、しやっに翦かふものなし。もてあつかへる手心にこそ、其せがれ鵰雛の奇をあらはし、汐干の小貝をわる拳にのせて鴨のごとし。花冠は唐干の米ほど。

十五合

角もじや三年瓜の弱くるま　唄言

屯

とりむすぶ植毛の爪や要石　焉子

乙字

爪にいの字をかけて進み出たるに、力定らずして膝車とみえたり。年の功猶〳〵執行すべし。かなめ石四結を取て、ちつとも動かず。神の力のあらん程にと莊言尤。

十六合

支毛なく漆ぬりけん惣まくり　雪花

乙字とす

油符を鯛合せとぞ恵比須抱　里

半両美人印

大雪屋の塗桶といへば大津の隈なし。かれは投る口を間ゆへ也。大坂濡髮、いづれも支毛なき若島也。爲家卿の哥に、紅のをのが身に似ぬうろしの木ぬるとしぐれに何かはくらん。鬢太をあざむくべし。節會に召れけるより桃九郎と改めたり。油生の將軍三郎どの、烏帽子櫻の陰に釣竿の旗さしあげ給へるに、はかりなく推參して、鯛の一はねにはねたをされぬ。此それ天下一。

十七合

大鋸の血は涿鹿よ戸板楯　毎閑

左右二字

須田町は菜虫ばかりや古戰場　里

たくろくの野、古戰場を賦して、市間に戸を鎖と、巷に屑を掃。其代の窮鳥は寒の夜鼎に煮られ、今の世の鬪雞は、温光の莚に眠たり。むべ持とす。

十八合

からたちの嵐はやがて距かな　里

二字とす

琉球の獅子に油や染ぼたん　立朝

乙字

歸國の御土産として、高麗の來雞のたれ、十つゝ十をかされしより、村里に時を報じて、御調の道たえず。其中にも牛といはるゝは唐獅子也。羽毛を膏かためにして、黑牡丹とも申べし。これ敵の鐵蹈をすべらかにし、剛強の力をうばはんとの計ど、專こゝろを盡し行

れども、からたちのあらしにけをされ侍り。

十九合

まくり距ケや同じ枕に十三羽　素琴

左右捕距武とす

手塚めにつるむ所を二けづめ　里

形容、背術飛鳥のかけりの手をくだかれたり。かの小男といへば今さら名のらずとも一の筆に記す。右は雌雄の中よきかたらひをへだてられし無念は今にありと聞ゆ。鳥も心をうごかして、物に感ずる所、時にさつてのりん氣距ケせしに、大事に成て、はげしきたゝかひ也けり。さてこそ紅葉葉を分つゝ行ばと、龍田山の錦、羽をひるがへして、名は末代に有明の

一番鷄と記せり。

廿合　左右二字

負ケ鬨(トキ)に逆カ櫓たてんと切戸引　欣以

風流を勝テ大振羽の黄彩雌(カシハツマ)　里

箭筈の景関が嚢先をあらそふ一二のかけ、二番鷄と許定し侍り。二字ヲ云。

膀浦の日出度名より、櫓間が陣も距ケちらされぬ。そのうち十八九斗なる女房の、大ふり羽をひるがへして、陸(クガ)の輿一を招きしよそほひ此扇を射たりし事、舟ばたをたゝいてほめもの也。

廿一合

鬘毛や兀ものゝしる雲の鬢　洞滴

乙字とす

目包ミのいじれもかくや羽音笠　里

二字とす

今日そわがせこ、花かつらせよ、とたしなみ出たる中に、栄冠(サカハ)兀ゲしたる老すまふの雲の鬢とは仰山也。くれぬともはや鳥屋出しの箸鷹を一よりいかゞ合せざるべき小侍從、此目包ミもすゝどき雄なれば、心のはやり出をしづめんとの事にや。笠を敲いて羽おとをかり、

陣中にきほはせ侍る一ツの計(コト)也。

廿二合

五字

尾を裁ル掌心(テノヒラ)かへせ初合せ　里

進む氣の鑷子にゝゝる板尾也　朴芝

乙字

二神の昔、あなうれしと人につたへ給ひしより、鶺鴒、鸇鳥也と重稱せらる。雄ゝ雌ゝいまだ交合比翼のわかちもなし。漸く長じて鳴尾さしたる比、尾に尾をうへてたはぶれをなす。其さま男色にふけるにひとし。程なく血氣壯ンに骨肉たくましく成て、初生合機の心ざしを忘るゝ事、掌をかへすがごとく也。同少年の春を惜める思ひ深察すべし。名は十六とかや。初手合に板尾の毛拔合なる進退、節にあたれりといへども、進ム氣若氣なれば也。

廿三合

羽さけびやかれも出たつ菖蒲革　里

五字とす　右二字

水白も紅の鹿子のくるひかな　言志

先年

白鷄の碁石に成ぬ菊のつゆ　晋子

此ゑらみ拔群なれば、碁石をば御ゆるし有。惜、黑毛に白のさしものは珍しき武者也。をのれが冑へるさま、さうぶ革に似たり。今よりして八幡黑と名乘て、勝負すべしと此下知に付侍りぬ。水白は味方の交ッ毛ながら、紅くゝる色みえたり。右に付べしと引分たり。羽叫遠鳴ッして、面にむかふものなし。

廿四合

六宮の籠にあつかる毛色哉　右此

地下の寄蚓の粮を包みけり　百之

左二字　右乙字

鸚鵡局中に飛入て、双六の道を崩したるためし、開元の遺事也。寵愛一身にありと、六宮にならぶ鳥なき美毛、一六のあらそひに氣を呑ミ目を瞋ッて、轉あひ、かさなりあひ、飛揚反動、心を碎きもみ籠の手づめと見ゆ。田舍はにふのかた屋に於て、骨なき蚓・力なき蛙歩食雜漏を喰って羽虫にやつれ、毛生見苦敷牛房鷄、目引、鼻引、笑ひ草也けん。花のあたりの梟とこそ。

廿五合

目啄キを當に仕せかへ權五郎　里

揮距ヲ云とす

景清がくろぶしや此壯（ワカ）けづめ　唄言

乙字とす

當は正當三月三日と聞ゆ。其前、三日三夜もつて廻りしは、くりをながら、厨川のつはもの鳥の海と名にあふ大鳥に合せて高名したり。何某も平家の家ー雞淸とて、翅を双べし兵、老の鶯の泪にくれて、昔忘れぬ手柄咄、

此春をにくやしからめ。

廿六合　左乙字

分られて櫻をつゝくあまり哉　幽調

右也

捕へ役われは雉とぞ二けあひ　里

行事、風呂屋の北風はげしき手合を分けて曰ク左近の陣に鴬を鳴し、羽を揮て撫られたる近衛どのゝ糸櫻これ也。

橘のかげふむ道にかくれかねて、尻ごみせし雉とは、見えたく〳〵の詞に聽して、今一番ともいごみがたし。げに、やすかたの鳥のやすからず覺へければ、とらへ役

丁簡すべき事也とぞ。

廿七合

炭桶へあへて物なし團炭朱冠　笹分

觜利（きゝ）の弓手へまはる地すり哉　雪花

左乙字　右二字トス

たごんさいふも一名にして神事法樂・勸進の手取、元來在鄕すまひなり。地摺は敵をうはそりにかまへて、息次の功者也ければ、しばしもこらへず尻しざりして、物なく炭部屋へ逃たり。

しばし扇（あふ）いで一枚の禮物。

廿八合

伽毘且（旦）の爪に荊輌が事もしれ　百之

乙字とす

バアカとて初め笑ひし鳥は物　里

下字優長

天上の麒麟・人中の鳳凰といふは俊傑の高才をさす也。カビタンめとうたはるゝ僮侶のたはぶれ尤哉。爪に荊輌が力ラをふくんで、敵陣にむかふといへども、つゐに本意をとげず

して八ッ割にさかれ、南蠻料理もうれうさなりぬ。バアカ文字なし。馬鹿と聞ゆるひゞき也ければ、はじめ笑はれしもことはり哉。距爪は御簾の鈎手に似て、上へついて反たり。起チ舞ヒ不調法にて力なげに見えしに、唐角力の手ごり、我國の鳥はものかは、此鳥は逸物也さて欄干、

ゆるぐばかりごつさいはる。

廿九合

宵啼や名をも雲井に二-日-月　里

尾をつゝく虎や栖らん東-天-光　毎閑

戯延文とす　右屯

すこし目にかけたる月の一聲は、雲の外の雁、雨の中の鵺を射たりし高名をしたひて、明日の心がけさ聞えたり。本哥とりても双びなき上、時鳥にもまさりたりとて感ぜられし。いまだ明ざるに、勢をもよほすははやり雄也。虎を養なふのうれへを用心して、高聲目ざましく聞えたれども、

右は膝をつき、左の袖にすがり侍り。

三十合

食に汁冠者が世話也額にくだ　里

二字とす

古塒の奈良にけやけし裝束毛　白櫻

乙字トス

鼻ごりすまふには、太郎くはじやを投て、したりがほ也。鳥飼へも是に思合てちつとも油断なくや。字彙、翁字ノ註ニ、翁ハ鳥ノ頸毛ナリ。亦韻字ノ註に、本ハ翁ノ字也、後ニ頁ヲ加フ。さみえたり。はつきりとして鳥のエリモトさよむべし。此國にてくだをかけたるは、神代よりのさうぞく、いつにすぐれて花やかならめ。古塒の毛ふるびたる出立はえなかるべし。廣中へはいかゞ、大衆どもの平家をおごろかしたる八聲、奈良の葉の古事宜しき結び合せなれども、

ふりにくだかけの手ごり無双也。

卅一合　左右乙字

毛車の力なき身や籠屯る　里

御最負や艾がもとの鶏の毒　芄月

毛車の前後にばつさよりて、物の手もなく喰ふせ、籠たまゐしけるを車輪ひさ名付たり。是は待宵方の上﨟の手より出されたる忍び音の鳥也。時めく御方には恨のころべし。亦身にそへて思しめさるゝ羽利、是大切のおすまふなれば、よもぎがもとへのつかひ、さるをぞかし。左右勝負なし。

三十二合

切ッ聲や背を三ッ伏せのいきり物　洞滴

左右二字

しやくり出せ手々中矮鷄をさねかづら　里

三ッ伏のわつは、手々中の玉かづらさもいふべき利口の手合、針ー穴兎毫の爭ひ、精神をこらしむ。是等座敷すまふの隨一さす。

三ッ指をあぐれば、七尺の屛風に躍り、片手にのすれば、四面の楚歌に舞とも申すべし。手々中、或鳥の曰、手々打さいふ說もあり。面白し。しやくり出たる手を打返すさならば小腕の勝負にして、チヤボ共のはしかき筋にや。狂作

さもあるべき事也。

三十三合　左右乙字

啄かれて十日坊主や桃がくれ　里

老鳥のけふ若やぎぬ國本丹　晋子

朝鮮國に沙門あり。形ちんまりさして、小ざかしきを人皆雞ー僧さ云り。晋妻にも鴇(トウマ)三左衛門が蒔、南京吉兵衛が鯔の風流も、其形似たる故也。今此十日坊時にあへるもの也けり。かたへの老さり、貧朝聊にたうさくおもはれ侍る嘲り忍びがたし。さればさて世の思ひ出に、辻とりしてあそばんさて、伏見・木幡の痩鳥、閑居竹林のればれ鳥時しらず、巣守子の親、蠱好(キラ)キ猫惡ひ迯呼揃へて、其日の遊興を催しけり。仙源の水に若やぎ、白頭を彼薬に染て、樂み窮りなし。

卅四合　左文右武共ニ三字

大玉子源平香のわれもかな　里

義の端(ハシ)の萠る思ひを鶯より　習魚

酒ヲ般若湯、雞ヲ鑽𥧄菜(サンリサイ)さいひかへては、出家のかくし喰するを、東坡居士䞋に見さがめし也。長蓽は鰻、なぎり子は鯖、鐵炮は河豚、

照手もしらぬ唐名也。大玉子とは近來の異名にして、まとは親仁也。香の箙（フツ）相印さし、われからの相詞にて、源平みだれ鳥に成ぬ。さればひよこふまるれども、母鳥かへり見ず。是を義とす。親しめらるれども、ひよ子のしらぬこそ哀なれ。既に夕陽西に成ぬ。あるひはうつばりへ投上ゲ、或は藏の內へ仕まはれて、犬道・鼠の穴をふせぎ、後日の軍をまつとかや。此番はむべ持とすべし。

三十五合

南無八符尾筒を守れ花も今　　里

勝足をひたさば鬪の淸水かな　　晋子

源氏十羽を出せば、平家も十羽も出し、源氏三十五をすぐれて、こなたも卅五羽を合せけり。

きのがね鷄合

（校訂者曰、類柑子に洩れたる後半を旨源編五元集利の卷より追加、完備せしめたり。）

是より別して勝負をす。主將の心は英雄の臣を以て、馳走せらるゝ所神妙也。四境の祭の事第一成べしとて、白綿つけの放ち鳥、東は相坂山、南は立田、西は穴生、北は有乳の鎮護をさだめ、先一ッの願書を認る。治雞坊の何某筆を取て、田饒が詞をかり、蘇秦が謀を顯して、神明納受の志をのべしかば、鬪の淸水にうがひ手水をして、頂禮しけりとぞ。

三十六合

春風やかくるも引も家雞の麾

二字とす

御節會に留守をたのむの家鴨殿　　辰下

是よりなのが音の新手歌仙の左坐ほのぼのと明わたる空の天鷄に、麾をふらせよとの軍配は、ひ（秘）曲をつくされたり。

右、みよし野ゝたのむの鴈は春霞たつを見すてゝ旅雁となり、さきはなる家鴨、家立とらずして、牝雞の朝夕、むつまじく狎（ナレ）たるに、留主居役申付らるゝ事切て附たり。其身の立居重く、大聲をあげて勤番まめやか也。道藏にあひる傳兵衛とて、むかしの笑ひものなるよし。

卅七合

桃花雨すは竹の葉のみだれ足　　其角

一字トス
五六間逃ては返す尾淺哉
乙字とす
清明の節、大雨しきりして思はず敗軍す。稻麻・竹葦に入亂、ぬれ鳥のしだり尾淺ましかりけり。何ものかしたりけん落書、雛去テ畫ニ竹葉ヲといふ句を書捨たり。是は五山派の僧雪の聯句に、犬走テ生ニ梅花ヲといへる對なりけるを、時にとつて用ひけるとかや。桃花雨にうるはしく、羽翼は醜しとわらへる也。晴て後、男涙のとつて返しながらも、一なび尾を見せたれば、尾花涙の鶉立とぞゆびさゝれ侍る。

卅八合

白綿付の黒で仕て取ル己日哉
乙字
桃節につくむほどあり杉の塀　百之
屯
黒士の男、白綾のふんどししめつけて、望んで出られたるは顏角力にや。こなたは酒陶氏と見ゆるが立髪杉の葉にはさみなし、胴骨づんぐりとして四斗樽のごく、丸くふとつたり。桃花の酔ざめと己の日の精進腹、力量いかゞあらん。

卅九合

くゝ鳴や胴迄はいる鳥甲
埔距武とす
勝鬮に毛並をなをす櫛も哉　素琴
乙字とす
中入して手はじめなるに、女房の後見とは心得ぬ業也。富士の煙のかひやなからん、力がひなく歯がみせらるゝとぞかし。此雛長すればわざはい有とこそ傳へ侍れ。象もよくつながれ、鹿必よるといへる詞をしらば、さし櫛も心をつけてつゝしむべし。力の出る最中なるぞ。

四十合

茶筅尾に鉞をたゝくいさみかな　習魚
左右乙字
落にきと當かへしにも距哉　其角
茶筅髪によりたる尾ざしにや。二十二番のし

ころ毛も手弱き方也。あてかへしの雜言事つのらば崩口なるべしさて持さす。

四十一合

鼻ふきを味方へ引や番椒　雪花

屯とす

油斷殿空餌ははかる庭菫

二字

嚴冬の水に舌鳴らし、三伏の番椒に鼻に汗す。辛烈の氣忽ち頂平へ通じて、あたまに血の過たる男、寒相撲意たる事なし。然ば味方へめしかゝへてもくるしかるまじ。空餌してつきたをす手もあり。それは不斷の心がけなれば、さりあげて本意させぬ也。

八ッ立、七ッ起は關の東の兵。

四十二合

兵と花もいわぬ歟トヽ呼ひ　何虹

二字とす

足田鶴の戰ロ丸の負て勝

桃李不言の詩兵さ、褒美の上からは艸木をなびけたる一言、誠にかたじけなし。トヽとよび出されて、棧鋪より此花をたまへり。足田鶴の由來は伊勢の國。

足の裏はあまりきたなく見ゆる哉

波はよせても洗はざりけり　慈鎭

成の高さに枕詞を置れたり。またつく鳥のつくしさもいへばさて、鶴丸のさもいひつゞけ侍るさかや。きりやう・こつがら、丸のまけにても勝なるべしさの評議からは、御家の見世男にかゝへらるべし。

四十三合

いそがしき木の芽をほどく距哉　右此

胡葱にむすぶ手もあり稽古關

二字とす

是彼を引用ゆべくもあられど、

雛の坊主にしたる若葉哉　闇指

先蹤正しければ双ぶ鳥なし。垣をへだてゝ關を合するたぐひならめど、その人はしられぬ成べし。右は時節相應のむすび艸也。頁手は味噌をつけたるといふも、いみじき巧言也。方〻の褒貶、口にまかせていはゞ、酔の過キ

たると嘗られぬべし。それさもに酢味噌。

四十四合

八の字やさすが寄來て鶯醒

左右乙字とす

觜利を母のひかゆる蚯蚓哉　焉子

酔さいひ、さむるさいふは好悪の詞にして、心にうつり行あらまし也。朱冠さだまらず、距覺束なきひなごもの性得、自然にしてれらひあふは父河津殿の俤にや。一万・箱王、母にのこれり。其母、勇を備えて、母衣といふ羽袴をきせたり。たさへば樊噲をもあざむけとの事にや。

四十五合

血盲の幾夜寐覺ぬ蜜柑籠　棹孤

也

尾雫も緋桃に染てくるしいか　百猿

二字とす

雛籠の山明なんさする日をしらず。闇くさしてうらみ音を啼、うつせみなりし蜜柑の皮、春の網代の置所なきから籠に入られ、是をつゝひて三月さ知る、口惜かりし血盲也。若武者はたれも目にかけ侍る。毛なかへ冠なけはひたてゝ、紅桃の露もれたむべしや。冠頂呉天雪、爪はかうばし楚地の花、さもはやしたり。かさいれて後いかならんか。

四十六合

撫勝を丸羽の事か難波寺

二字とす

南京の引音を猛に水や空　毎閑

乙字とす

天王寺の撫勝後記にさゞまる所、大坂矮雞の事か。其手にあひしよりか、今さても丸羽にして鳴尾なし。白すこしも煤けず、是源氏の嫡々、南京の小太郎深入すなさいはれて、尋常に引音を張、大勢はせ合けちがふ中なれば、水天一色にして千鳥・鴎の友よぶさかり、闘路の鳥も聲々に聞ゆ。

四十七合

足病のかたは車や觜疲　尭月

乙字

朱冠癰に潤ッ三月待れけり

鳥醫師の曰、足やみのいた手、箭折レ失(矢)盡てせむ方なし。是當分の弱なれば手あらふ(荒)あつかうべからず。冠癰希有にして六ヶ鋪病也。鶯鼻な病、鷹氣欝す、其苦鳥・飢鳶のたぐひは良藥な得べし。此鳥にして此病あると、漢家のむかし至癰發の膏藥にて、手なさりたるためしのみ也。しばらく命運な全して、かされて軍すべしとかや。

四十八合

波を蹴て巴ぞ負し悋氣喰　笹分
乙字とす
雛作り二人靜を合せけり
鐵冠文とす

此牝負べきやうなし。七騎が中迄もうたれざりけりとかや。悋氣喰とは名の悔ならめ。巴涙とあると葉こそ、盃なうかめて機嫌よき振廻ならめ。栗津の松原に放されて後いづち行けん、其場にても大手ぢらしたり。こなたは三芳野の奥深き菜畠に放されし美雛なり。衆徒等めしとらむとて、其影な作らせて、さがし出して合けるに、努(ゆめ)たがはず、さてこそ二人靜。

四十九合

沼津から足高山や大櫓　立朝
也とす
島原へはや人やりの雛行事
二字トス

清見が關取の血脉、原・吉原なかぎりて、宿〻に口な利ク者共也。みなとしより也。名高き君ども同じく、よき鳥なもとめて目出ものしけり。所〻のあらそひに人やりに合せ侍る。芳野、唐土などが鳥には翅に薫物し、爪紅粉、化粧して花美どに人の心なまめかし、迷はせければ、後法度に成て、鳥どもみな放らやりぬ。かの帚木の卷に、

身のうさなげくにあかで明る夜は
　とりかされてぞ音もなかれける

うつせみの哥也。此心よくかなへりとぞ。

五十合

勝口や推スも啄クも背で門　　欣　以

・職冠文トス

傅大士を雛驚かぬひた蹴合

今は寺〻の雛を召ぬ。推敲三年の執行にして、推ハ力、啄クは品也。韓退之、是を相手にして、以鳥鳴春と世上へ鳴りわたせられたり。輪藏の三影うごきなきを見馴て、重疊のけいこ場さしたり。さんづはれつの狂ひ、わらはゞ笑へ。

五十一合

柏手にかつ色見せよかしは最負　　辰　下

左右屯とす

尾（ワタレ）とる影隱しけり放雛　　百　之

祉頭ノ雛かしましき寄合、此をしづめんとの柏手か。松柏の霜に後れをとるとも、各浪人角力なれば笑ふものなし。神山い柏の平手うちたゝき幾番（ナン）もく。

五十二合

唯賴め血臭ひ背をさしも艸　　雪　花

五　字

願辜丸赤きは酒のいどみかも　　雪　花

捕距武

さしも艸さしも名高し。かゝる業を得て舞臺さび・瀧さび・傘いらず、うつくしき手ごもを取ぬ。目だつ朱冠ごもはのこらず出たり。願ふぐり今はこらへず、此鬼酒を力とす共、かれは佛力といひ、神力をそへたりとても、かなふべからず。

五十三合

爪玉に浮ぬ沉みぬころび勝

左右乙字

筋背の破軍をつるや花のつれ　　志　水

爪玉にあげたる浮舟、沉んで轉び勝、水際だつて見えたり。筋背は背に星あり。珍しきやつこ、手合のくりやう老切（功）なるべし。花とは桃花の陣を申すとかや。

五十四合

引色も日比の煤の埘鶏毛

五　字

相逕羅の勢を歴や花盛り　　習　魚

あかしの巻に秋の夜の月。
月毛とかよへる詞、正廣が日頃の袖にといひしに引合せて、向上の得かた雞人曉を唱ふる聲、明王の眠を驚かすならむ。相遇羅の花軍、一もみもみ合せたらば心もくもるべし。

五十五合

雞頭の追手は粢の紅葉哉　芬分

屯

土餌から豆腐なりしか君よ敵　焉子

二對の名月は立ながら、屋ねにてはおちつかぬ所あり。是は
雞頭や同じかざしの紅葉負
とあらば、其品わかれ侍るべし。紅葉・鳥・鹿にかぎるべからず。新參の圍者場に食ひて、をのがごちくるふを見るに力業、角力の外他事なし。これを土餌といふべし。豆腐の和らかなる、蒟蒻註の白きもあやしげ也。

五十六合

時下に後悔もあり蹴合時　百猿

乙字　右二字

塒込の恨を膈の鉄輪哉

むかひなる樗の木にのぼりて、睡れる見物目をさます事、庻く也しが、食つきて時下りしたりけるを相手にしたり。空腹の勝負後悔すべし。三足のかた輪鳥、世の中の余りものになりて、ほむらをもやし身をうらみぬ。中古、野出の喜三郎と云もの片腕を切られ、骨に皮引かゝりて、見ぐるしかりしを、鋸にて肚の程より引切て捨たり。桑門となりて片枝と號ス。此意地あやからせたし。

五十七合

欠爪に木の根撰や若手合　其角

砂水にしばし息をぞ古湘江　捕趾武

是に木の根ありと俣野方のいひわけ、負腹たてしも道理、古湘江、昔りの唐織をしめつけ、邪慢・我慢が手につき三番打したり。此男、足のみじかいが難也。

五十八合

雌が毛虫で捌く羽癖哉　志水

也

[illegible]いさかひの別れや唱ふ蓋下リ　雪花

　滑稽類書に雞は蜈蚣を以酒とす。鳩は桑椹を酒とすと云〻。其妻、醉興の羽瓣をつくろひ出す事やさしく見えたり。左へ廻る手しや、茶臼ならばもごかしからん。

　右は樂屋がもめると見えたり。早天からの見物、待艸臥たるに角力揃はぬはいかに、あかぬ別れとは是。

五十九合

風負のつまつき鳥や一颶ミ　其角

也　右乙

勝軍木に獨はねぬや雄の役

　甲のしころ毛をつかみ上たる腕首、隱波羅鬼（いはらき）也。こなたにはゆるぎの森の鷺にまじりて、野に伏、山に臥たる白鳥の源氏に着て、かつの木をかたどる。扨こそ究竟の左、忽ニ風まけしつ。鷺舞のほそはぎ、しどろもどろにて飄鸞（へうろ）〱したる風情苦〻し。

六十合

胸突の時をも問せ見けし獨樂

ちやほ王や小結に進ムはね[illegible]　白櫻

鷄冠父とす　右玉字トス

　韋駄天の一名、くるり〱と引廻して、もとの下界へふり投にせしかば、したゝか胸を突て絶入たり。渦まひ廻る大獨樂のうたかたの泡ときえたるこそ花月惣一。

　右はさしもの辯、雞合せかねて、しざつて肝をそけしたりける。

六十一合

髭鳥の厩から出て鳥はなし

噫にも地鳥といふな鳥伯樂　每閑

五字

　七の無迄はしなりあげて、眞黒な毛膸、關内出よとの御意をかふむり、仰はくだかけの出來口、世界國土にまた鳥はなし。欠伸・嚔・噫、（原註）又心をつけて行相を見る事、伯樂の煉磨也。さま〲の手入、今日の見せ鳥、襟・裾をかざり立たる所、當坐は丈夫なれども、其化あらはれて鷹の餌也。

六十二合

投打の屐を相手やせつは閔　乙字とす

今日の鬭篭を狂ふやかしは崎　五字とす　芃月

伊勢町・小田原町、雞犬どもの中あしく、木戸を限つて取合なし、童僕の心も亦しかり。たま／＼獨遊びをすれば、惣／＼のなぶり者となす。年比、日頃の意趣を含て、呉越の名主を煩らはしめたり。是たゞ繁花、長安の江戸氣にして、飽迄にくらひ肥たるゆへ也。

或人のいへるは、信濃の烏、大兵也。其卵も九年母ほどありさ、いまだ見ず。越後の國荷を荷ひ出て、川中島の手合せんさにや。龍虎の成、漢楚の爭ひ、是を末世の咄さすべし。

六十三合

聊白をたがひに矢壺／＼哉　辰下

抱分て爪の洗足せよ雛の酒　乙字　百之

たとへば箭合也。をのがさり／＼羽に札をつけて放せさて、あるほどの鳥一ッも殘さず、手拂しつ。あまりに喰に亂れたれば抱分たるもよし。しかるに爪のすそせんさて、酒ひたりに成しは、つかれ芷者ながら心せはし。油斷大敵。

六十四合

塒せりのいさむや桃の花振ひ　乙字とす　立朝

棊盤もていざ亟谷へ彌三五郎

塒せりの己が身がまへして、他の惡黨をよせず。背／＼どの脊篠は八聲の觸頭なるべし。右は孟嘗君が手のものいまだ出ざりしに、其手ふるしさて、あたらしき手をつくしたる雞術、三千の容を越たり。さてこそ叡覽人形の名をあげ、飛彈の掾さ受領を給りけり。昔のはかりごとは聲をはかり、今のたくみは形を工ミ出たり。和漢の通例を以て、寶永の史記にものせぬべし。それは鶴ひた、是は鷄ひた也。

博多は羽形なれば、

難波は名二羽とも番へ。

六十五合

尾狂におろとあがきし逆毛哉

左右乙字

蹴廻しや淺黄にあらで同士軍　雪花

尾狂めづらしく聞ゆ。

雞の獅子にはたらく逆毛哉

此句今更の手疵也、予が未練にも巾く也。尾狂ひの獅子にあがきし逆毛哉　とむすびたらましかば、首尾十分なるべきを、十五年以前の若氣にして、今さら取かへしがたし。すべてある事ながら、鷄口となるとも牛後となる事なかれ、といへる詞つゝしむべし。鳥主も御損淺きのけ廻し、表裏なく仕立榮したり。心の濃キからはむらもあらん。

六十六合

撮距小荷駄奉行に隱れけり　習魚

乙字とす

くは落せ宿まとひを蠅拂

軍旅の事聞つくし、いひつくし、書つくしたる中にも、小荷駄がくれの斥候のもの、此陣までつけつ廻しつ、透間かぞゆるは矮鷄か。

くは落せの事

坂落に御曹子、馬は主に得て落さんには、損ずまじかりけるぞ、くは落せ、義經を手本にせよとて、先三十騎ばかり眞先かけて落、蠅拂にせゝり落されたるも理り也。夜軍はかふこそ、是を分目の軍さたてゝ祕傳の第一とす。

六十七合

力尾や旗にひらめく出穂くみ　百之

二字とす

逢坂の番でふせぐ御秡哉

勝鬨、引音を合せ、味方の朱冠をそろへて、逢坂山へかけのぼつて、悦びの舞羽をひるがへす。起鳥あさを濁すなとて、出穂の一黨力尾の白旗をさしあげ、打ちらし、こと〲く蹴ちらし、關の明神の御前に謹上再拜し奉る。

六十八合

陸奥殿の鎗がころんでいざ手合

五字

狂鷄(ウカレ)心かろしや籾土俵　芃月

二字

白兄弟の先陣・後陣をあらそひ給へる、長いものには負れよと申詞に和せらるべし。是社淺きにあらで同士軍なるぞかし。亦者は心かろくて御陣屋にてもくるひ相撲をとり、やり踊などしてあばれありくなれば、一條目の制札をたてゝ、糀俵より内へ入べからずと也。しどけなき事ども多ければ評にたらず。

六十九合

馬士の朝出にすがる鳴尾哉

戴冠文

火啄やさなきつゝじに臆病毛　　每閑

二字

落足、手負しば／＼鳴て、駒の蹄について、ちりうせぬるありさま、鵡の尾をふみ、犬の口をのがれし心地也。慈悲心、佛法僧のたすけもがなと、三井寺にかけ込しかば月落烏啼て霜天に滿所、この篝火消うすらいたるに、のがれ出たる燒野の雉、峰にまたおどろくはかり、つゝじ咲亂て寒食の家を氣づかはれ、身の上いかにとさけばれたり。異國には火にすむ鳥もあるに、今此生鳥どもは屍を山吹にそめて梔を恨ミ、肉ムラを大根にまじへて銀杏に刻まれむも、前世の業因こそつたなけれ。人のわかれをせめて涙のたれをうつし、むくひのほどもしられたり。

七十合

一番の勝を佐久間が吹流し　　其角

五字

出し貝のかくす雛あり十二揃

讀跋苦深ク治雛坊に座靜也といふ事、氏の御神の力なれば、勝方一番の祭をつとめ奉る。是は例年見る事ながら、萬戸闕（トザシ）を忘れたり。出し貝十二・隱し貝十二にして、勝負を決す事十二のかくし勢にあり。此事委細に申さば、秋の夜の千夜を一夜になせりとも、と葉殘りて、鳥やなかなんと、行司其貝を桶におさめ、劔は箱、弓は袋に氷引をさらせて、鳥の跡を寶とし、正木のかづら永しといへる年の元（ハジメ）に、昨の跋をうちおさめ奉る。

鳥沙汰曰

承安二年五月二日、東山の仙洞にて雞合の事ありけり。公卿・侍從・僧徒、上下の北面の輩、常に祇候の者ども左右をわかたれ、銀の賢木をうへて葉枝に用ひ、八尺の銀臺を居て、藤の花を結びかけ、盧橘樹・薔薇・牡丹・山吹の作り花をかざりたて、伶人參集して、奏閑なる御堂の山の青山のさうたひ出て、篳篥を吹、和琴をしらべ、嗟歎の舞樂をそうして、扨兩方の雞を合す。

一番

左 右衛門督の鳥 字ハ無名丸

右 五條大納言の鳥 字ハ千代丸

以上十二番、左勝四番、右勝六番と記す。哥女・舞妓、興遊に絶ず、此間盃を勸む。亂舞、放宴たりといへども、万代の美談に備ふ。黄昏事おわつておの〳〵退去。此事、中御門の左大臣殿の御たづれによりて、奉行人經房朝臣書奉りける也。其代の記おもひ合せ侍るまゝ、あら〳〵是を述。

なをよろこびに余りて、

花鳥の後段は唐子合すべし

左右總計

麗人 二句

五字 十四句

三字 武文 十八句

二字 卅六句

雁形乙 五十二羽

㐂 十六距

寶晉齋其角

晉子終焉記

李白、鯨に乘て、汗漫の風にあそびしは、醉中に水中の月をとつて、豪放の氣を殘すものなり。いまや晉子三年の病根、なを誹情に富で新をあらはし、奇をはき、願をとき、人口に膾炙する句〻みなしる所也。ことし二月三十日、はからずもゝとの泉にかへる。倦情よる事なく、夢のうちのゆめのごとし。まさに誹灯の光をうしなふ。余多年莫逆のちなみをなす。この月廿三日。寶晉齋に膝をいだき、兩吟もよほしけるに、

春暖閑爐に坐の吟さて

鶯の曉寒しきり／＼す　其角
筧の野老鬚むすぶ儘　同
若草に普請の御諚哉やらん　青流
淺黃しらべの匂ひかくれて　同
月も經ぬひかり拵へはづかしき　角
風のうけたる留の番よぶ　流
ウ鷹の道大草臥に立やらで　角
汨さま／＼剃はそつたが　流
こりずまのまた水にあふ九條島　角

一席亥の刻に、晉子ねぶたきけしきにてわかれぬ。これぞ生前おさめの吟なり。いま思ひあはすれば、春興にかなしひかな秋の氣を感じ、末の句に龍溪禪師の九條島の水難に身まかりたまひし水中の天の一句、古今符節の愁をつなぐ。屋梁落月のひかり、さらに石友の契りを思ひ出して、こゝにしるすものなり。

青流

追悼之句聯

不分次第如左

はせを翁は普化の師、晉子は臨濟の怨子、三十年來、八面にから竿をならして、他のつらを出せるなし。末期に及で半句を吐ず、さらに遺跡を止メざるは、若夫それもしらず、大悲院へ齋（斎）喰に行歟。

中陰廻向

普化去ッぬ匂ひ殘りて花の雲　嵐雪

亡跡

菜の花や坊が灰まく果はみな　、

三七日

鶯や弓にとまりて法の聲　、

墓參

山ぶきの實を穴堀（掘）の鍬ひとつ　、

齋（斎）をまふく

榼賣あなうの花の食を見る　、
川骨や撥に凋る夜半樂　、
經の偈は連哥ときゝぬほとゝぎす　、

かの除夜の鳴門のさはがしさも、
ほどなく世は春なれや、さ紅裏四

天王の吟、今さら思ひ出て

泪かな左の耳はよぶことり　露沾

ない事の袖に殘るや朧月　古洲

行空にこれも其角が鳫字かな　竹苞

世の中をざれ繪ざつとの櫻かな　沾徳

初花の的はかけたり都から　桃隣

たんぽゝや終にノ馬（ヘチマ）の皮さえも　神叔

陽炎や香土器の土あそび　周竹

のぞむ時歸らぬ影や花の株　立永

この坊、かの琴花印の下樋にかくれけるや。

琴とれば起ふし柳三たび迄　格枝

梅さくらちればぞ人もよぶこ鳥　秋航

俳諧の力おとしや鹿の角　枳風

風流なたてぬきの飛花を惜む。

今もいま錦繡の人よぶこ鳥　千山

花曇りかはらけすへて伽羅一炷　朝叟

花見るや槐安國のさきの國　序令

風躰のまぼろしもがないかのぼり　專吟

孤芳を採る。

おしいかな梅をおもへば一指頭　百里

その鹿の角落こぼす泪かな　仙化

碎けたり黄鶴樓も蟹の殼　白雲

苗代に口漱しをゆく水に　濟通

かうばしき骨や新茶の雲の色　巴人

春雨に綱が噂のなみだかな　我常

花鳥にこいよと呼もうつゝ哉　千泉

蕨にもおる雫あり昔沙汰　同波

あるきながらといふも夢になりて

ちる花もとの雫や小盃　千江

鶯を中の主や假もがり　甫盛

あさつきを洗はでぞ行日は三十日　新眞

文かきの夢は破れて土筆　爲桂

いつ歸る空の名殘をいかのぼり　功悠

花鳥の泣盡しては眠かな　受松

花の吟扇の端もさがしけり　石雲

かへる鴈雲のいづくに片便宜　芝筵
珠數をもみさて居眠るや梨の花　仙芝
雨なみだ君がためなり千里鶯　指馬

茶に耽りて師にたがふをうらむ。

今はなし喚來る花も無念なり　渭北

別于東武。別後其角不相見三年。今載三月書流寄汗簡而傳角亡。生別猶快々。死別復如何。嗚呼角獨歩誹名在。惜其有器不展齋志以沒鬱々郊原傷此。

草の芽を何ニぞ採らすや鹿の門　大坂 才麿
さても世を鶯にのる花の壟　、廿泉
春雨や匪の中から虚栗　、人麿
雪霜の翅かはくやかへる鴈　、風麿
瀧壺を飛さる鯉ぞ花のひれ　、花睡
共文字は風にも折られず花の角　、三惟

田舍にまかり、晉子身まかり給ふ
もしらずして、三月末つかた江府
に歸り、升堂のしたしみにたへず。

股引て立かなしむや遲ざくら　貞佐
なを夢の二月卅日を死時分　昌貢
雛留の透をちりゆく菫かな　茶花
その時よやつこ豆腐も春の夢　在長
歸る鴈うき世の闕を何となく　文竿
巾まい酒の異見を花の靈　寒玉
なき人の筆にとならば夕雲雀　到李
その角を落して鹿も哀なり　常和
山は鐘海は燃つゝ鴈の跡　羽光
石印やさらに名を彫る花檰　兎株
寂光に居形にゐるぞ桃の花　是橘
しほれ草松じやと人をだまされず　岑柳
水くさにもぢ摺迄を土筆かな　省示
きれ俗鳶のをはりみだれぬ法の雨　志鉄
アサのないよみやうつらん春の夢　嵐水
七尺は蛙も墓のこなたかな　其裔

年ごろ茶つみ水くみたるかしづき
もなく、師恩をいたく、

ちからなき薄及の脂や蕗蕨　来雨

此所に年久しく住馴ぬれば、さゞまらぬ水に鎧の渡守も袖をひたし、竿の力ながらに

頼まれぬ島の引かな二月盡　白櫻
隈刷毛の春もむかしの雨戸かな　毎閑
挑灯や山吹きえてわたり川　右此
留主遣ふ寐姿もなし花の闇　立朝
青柳や沙汰と遠しほつき折　百猿
鹿の角に鎰を見せたる別かな　焉子
泪の手漸くはなす出蝶かな　欣以

曾子の羊棗もあり。

いへばえに水梅干を春の土　百之
蘇井ならで手切や花の掛蔓　習魚
みづくきの梅は開どロや夢　志水

晋子が琴に物かくはじめと一とせの春興じて、よの風雅のうるはしきいくばくぞや。こゝに限ある悲しき春にあへるを。

初ざくら哀に遅し琴の鉆　芫月
際付の躑躅をはづす袂かな　雪花
蛤の鍔も名のみや汐干山　洞滴
空家のもぬけ燕や袖の雨　向漁
その人の夢路も花の明りかな　女 辰下
土の黄な蝶に手向や花の露、　笹分
明日田鶴のあすも春なし袖の月、　籠口
迷ひ子の泣手に餘るさくら哉　鳥道
月か花かけふは朧の塚の水　掃尾
一寐入してから哀れ春の雨　里東

また涙花の状をひらく。

記念ぞと聞や東風ふく松の音、　大坂 北方
涅槃から十五日めにキ角也、　岸紫

忘れがたみに嬰子を残し、そのあたり思ひやられて

おもかげの似たもやあると雛の中、　文十
この後はたれを相手ぞ蕗の臺、　車庸
白桃のいつを昔とおもひしに、　芙雀

諸白に苦みつきけの江戸ざくら　雷記

聞事が泪になりてはるの雨　新宮 嵐水

金鐵の圍をなしても、遁るゝに所なきは、さだまらぬ世、さらにいふべくもあらず。只その人をしたふ物から、武江に於ては晋其角、それ程ならぬ年より道に生つき、高名を殘し、ことしの花に先だちぬるよし。惜むべし〳〵。誹因の淺からぬを知て、稻津氏のもとへ、せめてに申つかはしける。

霞けり消けり富士の片相手　大坂 來山

清新俊逸にあらずば、死とも休せずといふ、その心のすぢをひくは、この人にあらずしてたぞや。

他の耳を驚かす句も花の音　青流

霜の鶴土に蒲團もかけられず、と子を悲しみし人もともに流水むなし。

親も子も同じふとんや別れ霜　秋色

晋子が名は新羅を過侍るに、近き比の判にあまた渉川としるす。いま思ひあはするにわたり川とよめり。畢竟廣漠野の牛を愛して、邱菴が同轍をやすめん因緣なるべし。

無何有の裾とる胡蝶わたり川　沾洲

寶永元甲申文月十八日のあしたをしるす。

我菴も勢田の時雨の刷毛序

是はいつしかの御句奉るを、切字なほ覺つかなくや。其韵要をさとし、古歌に例ある事ども引出したらば、御ゆめ心にもかなひ侍るべしとや。一ッの解作を出して、御不審をいらへ奉ることとむかしの夢說にせよ、こはえとかじと隱言して、先、不測玄妙の姿にたとへていはく、

我庵とは侘しき家ゐ

すめばかくうさのみまさる世をしらで
あれたる庭につもるはつ雪

せたの時雨とは、

露時雨もる山とほく過きつゝ

夕日のわたる瀬田の長はし

この國の瀟湘・西湖を、心裏にそなへ給へる精工いはんかたなし。刷毛序せよ、かつ、はけつるでにやあらんと自問自答のさかひ、有心無爲の轆轤、精神畫得無聲の風景をたゝへて、夢のうきはしとだへせず。睡中現然たる御句の劫ゝ、石山の石の心にこり、水うみの水相に觀喜して、菅神無準兩聖の交感、ことさらに自現示の誓ひを、このあけぼのにしらる。

右瑞想圓のこと葉、侍坐の時、御返答申上たるを、愚意尤はゞかる所なしとて、かさねて草稿を仰かうむりければ、つたなき筆を揮ひ侍る耳。

晋 其角

一朝の夢解たりしぬしも、はやく夢中の客となつて、風輪に清香を起し、水相に月をゆりすへ、枕の下の有明も自由を辭し、自在な遊。かの夢裏の雜談などとゞめて、
したひて一句を投す。

百韻

花の雨胸は板間を裂夜かな　冠里
　梅黑しとて母を召るゝ　秋色
鷺には言葉おろさず黎に　嵐雪
　眞はついと通るすく道　枳風
冷汁はさつぱりとして雲もなし　岩翁
　かうかまえたる筆匂ふ也　青流
行月にこの松傘をさしかけて　千山
　平沙に並ぶ鳥は足輕　大町
ウ
釋迦頭鑷二寸は秋の肌　山蜂
　いざとそやせし拜領の樽　一雀
河骨の花繕ひに腮上て　朝叟
　伽羅の後に灰汁の音聞　序令
旅衣おもひ初しかわすれたり　百里
　妙なうき名でこそはあんなれ　白雲
俎板に土は殘りて雪の暮　風葉
　是なくんばと三上の吟　我常
取あへず手向になして草いちご　周竹

涼しき水に浮し鱗　仙化
なつかしう蟬の餘りに笛有て　立永
けふは靜も御奉書に逢　立朝
明月は寐ぬ合點にて夢もなし　桃隣
醉をふかるゝ軒の露霜　指馬
雲の端や藜の杖に草鞋がけ　沾洲
佛につなぐ晝中の鳥　濟通
川筋の音になり行髻こき　茱花
塗笠を着て霰よろしき　塞玉
紅顏も臼井峠の吹をろし　文竿
鍔の鳴日はまつも待うき　到李
春の雪好ナ所へふりにけり　仙芝
五山いづれも大釜に蝶　市盛
借銀を二月に延す雲無心　兎株
骨屋が撫て通る關札　同波
全躰はどれから出て皿の汗　沾德
名のなき蔓御前に懸　執筆
左へは神代の月の飛鳥道　青流

壹分をなめて戻す身の秋　嵐雪
二ウ
むら萩に今も大万三ッ瓶子　濟通
四角ナ人に北州を見る　立永
橋の宵袋さげたる三輪の曲(クセ)　序令
てれめんていこ鰡(ボラ)ともなる　沾洲
通にてとるてふいまは時鳥　白雲
すべらぬやうに石臼をふむ　周竹
鼻帋のとにかくにまた一雫　枳風
博奕の異見束帶で來る　沾德
まかなくに夫婦ぶつ〳〵何を種　秋色
秋も名殘の鬢水へ蠅　風葉
連雀の紫そめに下るらん　市盛
伊丹の土藏月の駒引　仙芝
眞那箸にかけてぞ思ふ花の波　周竹
雛のひとりはとり殘しなり　百里
三
出替りに言葉の市は中の口　立朝
寐ぬに明たる腹の塩梅　桃隣
けふも又廬山の連衆アサをぎむ　指馬

膳所の新茶に千木の逼迫　文竿
鯉はねて綻びきらす一あらし　同波
けさも干かぬる壁に脉あり　沾徳
饅頭の田舍へとゞく日は十日　寒玉
なむあみ右衞門世間かしこき　青流
大筆も借れて龍の勢ひぞ　到李
思ふ方へと投る鷓鴣班　指馬
塵ほども伊達はまじらぬ葵の日　桃隣
眞田を結ぶ指に入月　序令
淋しいをめづらしがらせ給ふ秋　立永
霧ほの〳〵と居風呂の經　立朝
三ッ
面白ひ如來の宿を寺といふ　白雲
車道なき鶴の滞留　風葉
配當で一代なれど日に向ふ　嵐雪
印判ほどに蕪は煠けて　仙化
いへばえに内亂（ナイラ）の禮も蟻通　沾洲
百合の光に手拭をとる　周竹
肩衣を着替置たる松の枝　枳風

九軒の首尾は念に念入ル　桃隣
金耳の落てはいとゞ片思ひ　沾徳
月をも汲は井戸替の樒　濟通
ぼた餅はたゞ二いろに露ぞ置　秋色
手摺をすべる角力見えたり　格枝
洛外に花を持たが病なり　桃隣
つぼ菫にてかれが高名　寒玉
名
塩竈のどちら霞や夕日影　秋航
酢和の濁り山はこさらぬ　貞佐
前垂にまだ鳥虫の額つき　青流
革蒲團には引舟の坐ス　沾洲
兄の成二寸延なばひたち帶　仙芝
ふんどしをせぬ時代かしこき　秋色
針見せに座頭のゐるはいつからぞ　濟通
むすぼゝれてもかける芝海老　寒玉
一面に鮓かく間をたち別れ　文竿
合羽は縛る物とたはれて　沾徳
八町はよるもさはるも油筒　貞佐

太鼓のかしら芥子に打込　到李
白繻子の狐の顔に月ぞ照ル　格枝
　祇園の南嵯峨の北秋　同波
ウ
蛸賣に蛸好家の露散て　沾徳
　門弟共のやう植ぬ楢　文竿
山姥はとかく跆跛と思はるゝ　秋色
　鼻かみ捨て瀧も汚れず　青流
雪の日の妙なる文字は五升樽　貞佐
　淨るりに金入て間世も　仙芝
住吉の矢見の姿も花の夢　沾洲
　柳のはらみ鶊はさびしき　寒玉

右百韻、四月十八日、深川泉龍院にして七七日之追善、各滿坐。

百ヶ日

蓮に赦は百日の鯉をこたらず　冠里

編集の昔な夏中に思ひ出て

移りゆく人や花つみ終りの日　沾洲
日ゝにもろ手あはせて百合の花　秋色

石に箔百日願ひて蓮かな　市盛

今日施僧印事

麥食に人も匂ひも猿すべり　青流

跋

狂而堂其角、氏は寳井、行年四十七才にして世をはやうしぬ。なきがらを二本榎上行寺に送りて、夜臺をなす知友・門人、石碑を建む事をのぞむ。然りといへども、宗法有とて本意のごとくゆるさず。これによりて深川長慶寺に、芭蕉翁の塚あり、それに隣りて、一ヶの土饅頭をきづく。晋子病床に、無眼の達磨の像一帋を書殘せり。廓然不動の因縁にやと心ざしをはかりて、すなはち和尚、開眼の筆を點じて、この佳城の下におさめたり。おの〳〵すごき夕暮目前にさら也。又この三卷は、晋子多年席をかさね、あるひは耳底にとゞまる新話をつゞり、秋菓の五味を嚙で類柑子と名づく。しかれども、全篇おはらざる中に病おもくなりて、つゐに空齊のかたみとなりぬ。嵐雪・枳風・沾洲・青流とひよりて、かれこれの反古とりあつめ、外へは散さじとやう〳〵一箱におさむ。されどつとふべき一子もなく、門弟またまち〳〵也。秋色といふもの、女ながらも久しく笈を負ふ心ざしあり。また忌日・祥月の志をはこび、いとになくものしたり。まことに晋子、日にねり月に鍊の功ありて、卷〻の艶麗錦を織なし、英を咀き花をかむ句〻の清新、氷にいさぎよく、眞に當世の一珍藏なり。むげに紙魚のすかみかにはてむもほいなしとて、前後くりあはせ、つゞり校べ、一集となりぬ。千山・朝叟その外連中もよほし、末卷に追悼の句をつらねて、吉田氏が乞にまかせて、これを梓にちりばめて、この誹道を文車にのするものなり。これを人につたへ、これを世につたへ、是を悠久に達して、斷續の清齊にかなふ事しかり。

丁亥冬季上浣

篁影堂沾洲
菊后亭秋色
阿桑門青流

江戸日本橋通三丁目
吉文字屋次郎兵衛版

類柑子追悼（校訂者曰、再板本に以下の追記あり。前年手抄し置けるまゝを爰に掲ぐ。）

指折は涅槃の月の焙炉物　秋色
　春を釣瓶のれだま根を繼　貞佐
痩ざくら移文ひとつに直を持て　沾徳
　五ッ替りのちぎり置傘　青峨
ほとゝぎすいつふくろふは爪の端　仙鶴
　空きわまらず枕まろめき　序令
ウ新市のあしたを見れば神慮　沾洲
　堤の木だち舟形に吹く　執筆
呑込のよいのであられ一通り　佐
　夕も拳にいのりふせられ　色
しからざる事でまたなき匂ひもの　峨
　ロ〳〵うらむ衆徒の間違　徳
日高くも鍬すゝめたる貝づくし　令
　毫なんとしてこと更の菊　鶴
物申て汁煮てもろふ霧の上　色
　我も白刹にうつふさの月　洲
花ざかり若衆ざかりのすまふ取り　鶴
　待にいなさの簀海苔たてかけ　佐
飛蝶の明たがる日のうつみ門　徳
　御借金は伽藍以來　峨
沙汰なしに夜着を持せる坂迎　洲
　橋を半途に大國の雪　令
きのふ過鍋とくらしつ筏主　佐
　あつらへ藥種これも燒鎌　徳
長生はものに動かぬ翠簾の鎰　峨
　ゆゝしく撫る笈摺のこぶ　色
木陰へとことのはゝそひ地形突　鶴
　戀ごゝろなき武佐墨の製　洲
月代の内外はしらず君が屋根　令
　湊の音頭絶てるを繼ぐ　鶴
ウ勸學の文に只居てこぼれ萩　色
　小りんの響き漏にともなふ　令
人形もお生成にゝて伏猪なり　佐
　寄りらうそくの所化の甲乙　洲
華の雪腰する庭の牛二本　峨

わたくし川も吐は曲水　徳

花蘭とけて跡弔ふ野末かな　冠里

春草生ず比は晉子が十三回也。

年〳〵に扨こそ杉菜醉しらけ　如蒿

角法師去つて十三雨琴竹のことし、名の譽は花をふらして、まさに天上の道眼をひるがへさん。

琴の糸めくりふりふる花の雨　栯李

かつて其角を見ず、舊友虎筝が、一醉さもにむかし也。

春雨や足あらふ圖の染もと　波星

行水や海苔に流れて二むかし　風洗

鹿も角落て增枝や草の種　松殘

桶有ッてそのきさらぎの寺の門　楸下

花見れば鳥聞けば實それよりは　琴風

名にゆする月やきさらぎ長慶寺　序令

來たるものは日々に親むはせを先生は、去年十月廿七年か、忘るゝあり、覺ぬあり。于時其角、嵐雪ことし十三年、晉子は春なれば俳友の悼も賑に都の便もちかし。

問寄か見ぬ世の人に酢みそ草　百里

朝諸の天氣定や弟子の上　喬谷

年もめぐる水の山吹何兄弟　沾石

光陰の中たるみ見せ雪なだれ　海宇

酒を灑す十德はなし花の雪　蓮之

菊の芽やそれも妹これも孫　只尺

句杞とりや廿九日の道の友　月下

年月の雨手をひらく蕨かな　壺月

燒筆の上を轉じて花のゆき　晉如

さやに見ぬそれも雲雀ぞ耳に物　安士

日月はどちへ旋るぞ花ざかり　文東

名に聞やその風流もしてこふし　紋梁

晉子の句こゝに今更光陰を思ふ。

問からに舊地ぞ花の枝末寺　水丸

苗代に長庇もなし水鏡　倚窓
口繼ギのあらましかはと過杉菜　秀宣
手の裏を夢や防風の砂の瀬々　以六
連堯の今もて雫むかし墨　文鶴
老せぬやまた前生の松の花　百船
帙とけて見しも聞しも花の筆　甫盛

臼なれど香こそ長者の大櫻　カラス山 潭北
去ッて今おもしろ上戸梨の花　結城 晋我
うぐひすや別の利益の報謝丹　仝 我尙
片町をはねて出けり防風賣　仝 猿栗
獅子咆や花ちる里の頭痛病　角吁
花になり行水くきの鸚鵡哉　薇牛
いざ花の土氣をはなれ半むかし　李投
花にいたく降り八專や空もよひ　李卿
また年に一日の花おしみかな　サハ 其道
泥を吹田螺のかるうくくもり　仝 泉支
川草の前出る夢や古すゞり　仝 露周

蛙子の出離まめなり身延道　カヌマ 立推
茶の花に誦經と聞は今むかし　仝 里堂
蜂の巣の日々に和讃も新也　仝 素秋
實もとぞ聞や蕨の珠數の房　仝 專之
線香の手譯芳しつぼ菫　仝 百詩
法論味噌に苣はまとはじ供物　仝 牡仙
連翅やいともかしこきねり供養　仝 松吟
萊の花の膝にたまるや竹の雨　秋田 非琴
まほろしのちからそのまゝ菫かな　仝 紅且
長成(ヒトヽナル)いほりや今朝の几巾の緒　仝 其雪

誰も一字の此人に及ばざるは何ぞや、能相伴なるべし。

是吉をも次でにおもふ蝶の夢　白雲
慕ふにや寺の櫻も小さかづき　何虹
闇き法に防風や朝なます　何龍
蓮翹の其つるにこそ花の末　何文
如意見よや其智惠しらふ蕨の手　梅志
有中に格別句ふわらびかな　沾津

音をのみ其末の香ぞ花の蘂　文下
實は殘る言の葉くさや木蓮花　卜童
廣宣の師は見知らずも木の芽だち　千柳
朝東風や草はみながら精進皿　波洋
春やあらぬ山葵はもとの辛み哉　巴水
その春や文をひろげて香人共　サガミ可水

居士十三周に及んで、猶云出しく
さは句毎にあり。

墨の香や世にもいの年花ぐもり　沾洲
春やむかし雲に雁字のうしろ影　周竹
ひた言も事物當然若むぐら　青峨
名號の香に年はめぐりて梅硯　園女
ことの葉の種芋なればかくの如　貞佐

晋が筆跡の初祖像ありしを、長慶
寺の墳土におさめしを

面壁に四ッを足す年つくづくし　仙鶴

追加

生死やのこる男の年八卦　我兄
石の肌撫て花置く手ふさ哉　羽州秀塘
角芦の白髪も知らぬ恨かな　仝硯洲
夢問ふて朧をぬぐふ眼鏡哉　仝鶴洲
春も經ぬ十三經のほまち道　沾德
　梨花も答ず振舞茶汲　秋色
きさらぎの人は都を簗にして　沾洲
　古錢見る日をさます川面　晋如
夏陰は射禮におゐて朝の月　壺月
　出むかふ山は犂からの山　青峨
ウ
雲盡て人は歸るにとまり網　月下
　いつ揚ゥとか塙結ふた鐘　貞佐
名物で今は寒暑に年を閉　蓮之
　筆おしみとは知らずへんねし　只尺
しつこくも繪嶋へ出張る棹の哥　如
　虚言を笑らへば物着星見せ　下

はまぐりに成るも合點か雀　尺
　初鮭出して看病の榮　徳
樂尼の武士をわすれて水の月　色
　使へはねる糊のすり鉢　月
降ずとも華の上は屋の神もがな　峨
　紋口のをこり廿一口　之
名
目も綾にこゝろの蒸る鮒鱠　月
　結納て縛り置て發足　洲
一本の蘇鉄にまける坪の内　下
　行に油煙を流す別行　如
駒形へあがるは旅人お侍　之
　笠で見知るは清十郎千年　尺
身にくらべ何そくやるか笹に幣シテ　佐
　二階の谺眉を引兼　月
久しさを遠乘序而この袴　如
　ぬけぬ杜に寺は逼迫　下
文月に九月十月峯の月　尺
　連歌の露はかつほぶし搔　之
ウ
祭見はげに逆髮の大ぐらひ　洲
　達磨はいつか飛んで謎〳〵　如
床縁で膝をうつり香脱散し　之
　三の間者も余花の宿下り　佐
鯖の子のほころびたがる郭公　月
　むかし扇の陰にたちよる　尺

舊知晋子が遺編類柑子の古梓秋色持つたへて、ふたゝび世に行ふ。依て其趣を難波に願ひて、花蔚の御一句を得たり。誠にさくやこの花の思ひを述て、後の明りとす。

雁鹿虫とおもふて斗幕たり昏　といふは晋子が初學の發句にて、四十年來此句おぼえし人、今予より外誰かはと思ふ時代なり。後〻人口にある句を吐し事共一氣に見えたり。李白は酒にて玄宗帝にうとまれ、其角は酒にて女房にそむく。太常が妻にことならんなど、たはぶれ侍ればば假氣をいこふて、今年十三回ともいはれしものを惜い哉、遺編の句〻今の風とは又聊かはり侍れば、今の句僅

に追加して時の句談をあらはす事なり

沾徳跋

享保四己亥稔冬季上浣

江戸日本橋南一町目
万屋清兵衛版

續其袋

嵐雪文集

秋のいろはの數〳〵もあらしとちり、雪と埋りてこゝにあり、かしこになし。俳孫蓼太郎こまさら乗にかいあつめて、漸一篇となす。もし手にはこぼれ、鳥の跡そゞろならんは、わらはべのわざなれば、見む人、補たまへ。

安永三甲午初冬

續其袋

雪中庵嵐雪文集

後學　蓼太　選

装遊稿

星こぼれ鳥(トリ)快(コヽロヨキ)あした。鐵鞋を踏でおとり出たり。掛羅(クワラ)を肩にやすめ、拂子(ホッス)をうしろにわがぬ。長明が海道の記一帖は、荷ふに重しとせず。意馬に鞭をかなでゝ、獨歩の伊達ものとなれり。彼一帖をみるに、便の人の芳詠に乗じて、俄に獨身の遠行を企てり。貞應二年卯月上旬五更に都を出て、一朝に旅だつとかけり。折ふしのよく似たれば、先達にたのみて、所々の指南とせんが爲なり。足柄山に手をあてゝといへるを、我はいかいの葛藤にして、箱根路をたどり、ちまたの蟻に脊をとゞめて、芦間の蟹のあはれを觀ず。古郷をはこねにへだてられて、三島の宿に寐たる夜、人々のはなむけせる句どもを取出たり。百里・氷花はこゝろざしふたつならざれども、おのれ〳〵の根情あり。ひとりはよろづわざ〳〵として、餞別の句も趣なし

とて、うちやりにして、旅でしねよとつきはなせり。ひとりは行先跡のことなど、とりまかなひて、

孤を捨つるおもひや花の山

といたはり出しぬ。車を推あり、車をひくあり、彼も親しくこれも不レ疎。大道無門千着有道。

かへる鴈關飛こゆる勢なり

原とほる日は。勅使歸京ましますとて、海道も塵を拂ひ、山も殊更恥しげに、けふを晴とつくろひたてり。砌の篠はね上られたるに、烏帽子の用意なんど、きら〳〵と見ゆ。をそらくはいまだ聞ず、富士の雲井の客人を見る人は、仕合なる旅に参合たり。

富士を見ぬ哥人もあらん花の山

大井川ちかき島田の宿に、としころたゞよひ遊ぶ僧の侍りける。世の中を用なきものに思ひとりて、宿へ行にも戸を打明て、出歩行ける。一日、如舟に誘つれて、留守のほど伺ひ入て、晝寐してかへりて後に申つかはしける。

やすき瀬を人に敎へよ杜若

よしだの宿に日の暮たり。橋のもとまで行たれば、舟に〳〵と呼。何方へ乘ことぞと聞ば、參宮の道者、こゝより乘ば白子・川崎といふ所へ着て、くがには三日はやしといふ。身を持ものゝ危き海路は、いぶかしとて行過るもあり。もとよりつながぬ船のかゝる便宜しらぬ國ざとも見ばやと、思ふこころづきて、苫の中さし覗たれば、三四十人込乘たり。多くは出羽の新庄・仙臺の拔參り、遠州・山梨かいつらの籠作り・いもじ・大阪の商人なんど春正が蒔繪のごとく押合たり。夜すがらすねにかしらもたせて、六明ッの汐合よしとて、船よそひして一時ばかり走るに、やゝ風あしきといふ程こそあれ。十たん帆をくる〳〵と地きりのやうにおし卷、船は茶うすに成て横雨骨をしぼる。かくてはいかゞし侍らんとて、嶋山を見かけて、からく船をよせたり。所は伊勢の沖中にて、尾張よりしろしめせる代官なり。しの嶋といふ所なりけり。わづか一里斗の丸嶋にて、人家百軒斗あり。いかさま港めきたれば、漁家に入てうかがふ。あるじの老婆いと深切に、旅は憂ものにぞ侍る。姥も去年のころ、白子の渡海に便船して、西國をうち侍るといふ。かゝるはなれ小嶋までも、大悲の惠みのゆき

わたりけるよと、尊くぞおぼえ侍ける。嶋の風俗、八丈に似たりとかや。伊勢のしの嶋は尾張八丈と、ところの諺には申侍る。こゝに三日をへて、ぬけ参りのつかれたるに、精を求てたすけ合ぬ。ならいの風待得たりとて、我さきに爭ひ乘て、二見の沖、立岩を見かけたるに、又西風つよく出て、梶とり直せば、南にもめ北にかはる。神鳴どろ〳〵と海底にひゞき、各の顏夕ぐれ立て、いなびかり髭に燃えつく。左にたふれ右にうめく。船中夜のごとくに、只磁石を便に伊勢の方を祈ばかりぞ、しばらくの人々の命なりけり。此時生涯の浮める事をおもふに、ひと〳〵の首にかけ、肌に包めるこがねは、身を沈むるにあだなるべし。板子一枚には劣りたりける。兎角してものし見えたるは、山にてこそ侍らめとて、そなたを便に走る。いらこ崎にてぞ侍りける。 此嶋さきを吹きはなたれて、遠江灘へ出たらば、津輕の方へや流され侍らむ。心うき人々を乘せ合たりとて、水主も汐かきむすび、大祓はり〳〵とおしもむ。沖にたゞよふこと半日斗、のりを考るに五十里も侍らんといふ。漸空しづまりて皆いき出たり。鷹ひとつ見付てと、はせを翁の申されたる所なれば、なつかしく立あがりて、

藤浪に鷹は得たりいらこ崎

けふは二見の御塩をはこぶ日なりとて、內外の御垣も殊に澄わたりおはしましたるに、山田が原の郭公、袂のもとに落かゝりたり。

こゝろには松杉ばかりほとゝぎす

義仲寺の師父の廟は、ばせをしげり、芭蕉破れて、七とせの露霜を送り迎へ、苔生たまへり。

色としもなかりける哉青嵐

加茂の御蔭あふひの神事もいそがしければ、日吉のやしろの跡の祭に参り、坂本の宿に泊ぬ。こり木つみたる火たき家の隅に、具足と太刀の埃にまじりて侍りけるを、持つたへたる故や有と尋ければ、爰のならはしにて、かばかりの兵具持もたぬ家は侍らずと申ける。心にくかりける。

なめくじり這て光るや古具足

賀茂の足揃は、神人淨衣にさしぬきして、駒のあしをためさる。帳の屋に着て、とき遲きをさだめ、赤かた・黑かたをわかてる也。けふは唯眞白にて馬上見わかず。

落たるがことに目立やあし揃

五日のくらべ馬はてゝ、森にうたひ芝生に醉る、けふの名殘も暮かゝりたり。

黒石興行　あやめ中賀茂の假橋今幾日

十五日は今宮殿、七日よりお旅所の御出なり。當日小川を南へ神輿を渡し奉る。十八日まで夜宮に詣ッ。

埋火を凉とあふぐ夜的かな

一種賞翫にとて、皆海中にまじはり侍りて、

味噌摺にすゞ敷鮒の游(ヲヨギ)哉

伏見にて、

明てのゝ家に伏見や夏の月

炬松ふつて野邊を行も、げに爰もとの古風なるべし。

行燈で來る夜送ル夜五月雨

祇園會の七日の鉾、十四日の山綾(アヤ)より錦より見ものなるは、荻野・いがらし・松尾・まつむら、素袍に太刀はきて、四條高倉の辻に床几を居れば、下の雜式をなじさまにて、くれなゐの房さげたる鐵棒かいこみ、かちんの上下着たる男等、黑漆の棒手に持て、粧をつくろひ非常をいましむ。兼て定られたる一二の鬮を改めかへす。威儀嚴重なる中に、はしごと臼と車につみて、町ごとに引は何の用にか侍けん。

たて臼もともに踊や祇園の會

かはらの凉に、

松雨興行　來る水の行水洗ふすゞみ哉

千本を南へ、四塚のほとりへ行とて、

嶋原の外もそむるや藍畠ヶ

京より唐崎へ詣るとて、志賀の山越はするとなり。

志賀越とありし被や菊の花

七夕

七夕や賀茂川わたる牛くるま

飛鳥井・難波殿の蹴鞠・池の坊の立花・都の田夫・いなかの風流、立て見るあり、居てみるあり、

秋風のうしろを覗く立花かな

九日の六道參り、小野の篁の冥途にかよへる道なりとて、洛中の貴賤詣でゝ、槇の葉をもとめて魂をむかふる印とし侍る。

打ばひゞく物としりつゝむかへ鐘

ことしは爰に盆をむかへり。なきものゝこゝろざしふかく、京へ〳〵といひけるほどに、舊跡を見るたびごとに、手向草にもとおもひよりたるなり。彼はあそびものゝ果ながら、二十年來みしものなり。常にをのれが罪を懺悔してなげきけるほどに、ものしれる人に見へさせて、公案といふものをひねくりけるが、いかに省ありけん、人に名のなき時は、いかゞ呼侍らんといふを、口に開かず開來たらば、耳をふさぎてぞ聞べけれと答たれば、いぶかしき顏して、猶ひねくりたり。尼になるべき望みます〳〵止ざりければ、受戒せさせて雪山淨白と改名して、頭くり〳〵と成ぬ。爰に乞食し、かしこに行脚せんもこゝろやすしとて悦あへり。庵室も外にしつらひてんとて、其事となく用意せしに、やまひせちにせめて、その本意ばかりはとげず終れり。けふは何となくおもひ出て、くきやうわりぎやうなどいふもの調、みやこ心の魂むかへして、

魂まつり爰が願のみやこなり

十六日は山ゝの送り火・如意嶽の大文字・松が崎の妙法、河原にも麻がらに火をとぼして、魂送りし侍りぬ。

經を燒火のたうとさや秋の風

大文字の句をもとめたれば、雪の心の出けるまゝに、

山の端を雪にもみばや大文字

里右が娘うしなひたるにつかはす。

ほうづきのさすればつぶる歎哉

のゝ宮にまいりて、

嵯峨中のさびしさくゝる薄かな

いばらに袖をひかれては、そこに其日をくらし、道のちまたに尻をすへては、二夜・三夜とあかす。都の家の棟もあまたかぞへぬ。

洛外の辻堂いくつ秋の風

歸庵

痩る身をさするに似たり秋の風

濟雲方丈へ行脚のいとま申入たる時、途中受用の一句を、問ッに隨て答申ければ、千牛曳ともかへらずと名殘すてたまへり。この秋歸りまかりて、

野に寐たる牛の黒さを秋の月

師問云去春堂別從乙片語今秋歸來相見了也即今如何是行脚眼。某荅云觀音境裡古松樹。師云松無古今色作麼生無古今色的一句某進云春色無高下花枝自短長師領之休 某拜退參堂去

塔澤記

山野にかけり温泉にひたつて、氣血をやしなふ事三廻りがほど、淨光禪院に日毎に遊ぶ。寺の眺望斜ならず、東北の山なだれ、左右より聳えかゝつて、蒼天を見越に、士峰逆に釣られたり。松露の瀧・深澤の流梢をつらぬき玉をまろばす。すべて心を補ひ眼をいさましむる事、温泉の外佳境の助る所なり。一日湯の記をみるに、ことのもと大かたならず。尤、信仰すべき靈場也。書は早雲瑞巖和尙の述作にして、紙上龍蛇を飛さる。爰を塔の澤と申侍る事、東天の阿育王八万四千の寶塔を作りて、滅後の佛舍利を籠奉り、四天下に分布し給ひたるが、此日のもとに止れる七ケ所の其ひとつ也とぞ。塔の峰は麓より十八町の險阻を登りて、厚萱葺の一字の御堂あり、阿育王山といふ。阿彌陀寺の四字は支那南源老師の筆跡、中興開基單誓上人と聞へし權化の人、座して籠居給ひし岩窟の跡は、猶夫より五六町斗山上にて、樵夫もかよひ難き片岨にあり。こゝにのみかゞまり居て、終に人間にくだらず、遷化有しとかや。漸、人の根氣もおとろへ行て今は庵も山の半腹に吹おろされ、里ちかき室となれど、たやすく行かよふべきにあらず。又東の澤と云こと、ひとゝせ江城より御湯めされけるに、塔の字いかゞ憚ありて歟、東の字に書替られ、その後、東塔通用して書來れりと也。彼の阿彌陀寺に這登りて、院中にて手火なんど用意して、行〲岩屋に入に、前後危く闇し。ひとつ葉といへる仙藥も、此邊りに侍りて各もとむ。

燕のかへり道あり洞の雨

此湯の世上にひろまれる事、わづか六七十年前寛永の比、おろ〲きこへ初〆けるとぞ。里の入口に熊野權現の小社あり。往昔よりこの地に垂跡まし〲けるが、其はじめを知る人なし。當所風祭の田夫、彼地の柴をこるに託宣し

て、示現さま〳〵おはしけるが、其比惟しき少童出まみえて、名湯ありと告たまはりしを、人いまだ信用すともなく、年ありて小田原より一家をうつし居住したりけれど、猪・猿のおそれ多く、友とするもの誘招き、やう〳〵に隣を並ぶ。今の一ノ湯（小川宗益 今宗泉）村開の湯これなり。追ㇾ日うらやみ集るもの七六家、所謂上湯・元湯・背戸の湯・瀧の湯・かはらの湯等なり。玉の緒の瀧の湯は近年ながれ出たりとぞ。由緒未詳。中興稲葉濃州大守の御家人水野何某、手脚（アシ）不仁の愁ありて、此湯に來るに、其夜ひとりの神女、十二人の客僧出向ひて、もてなされたるが、病たち所に癒。誠に藥師十二善神の擁護ありて、諸病悉除の誓ひむなしからざる靈驗なりとて、城下へいひ遣して赤飯一器・醴酒二樽をよせて、ことぶかれける。其時の使せしもの今の宗益なり。存命にして九十有餘、機嫌はなはだ健にて、大力量の翁なり。かゝる佛神の不思儀にあへる人ゝに、むかしながらにうちかたらひ、晝はからむし剝（ヘギ）に山路にさそはれ、夜はしゞつく杵の響に仙源を尋ぬ。

猪石にしぶ柿をぬる翁かな

河原に出て二百十日の波におどろき、貝ふきならす猪小屋も、めなれぬものから心とまりぬ。

水音も鮎さびけりな山里は

堂が嶋・宮の下・底倉・木賀・芦の湯を經て、地獄廻りといふ事あり。沸湯藍の如くなるを、紺屋地ごくといひ、鐵槌の音するを鍛冶や地ごくといふ。究て山陰の鬼窟を地獄とよぶも宜なるにや。

梢禿て蔦の葉もえ、塊（ツチクレ）こがれて盤石輕し。女は見て佛の名を唱し、男はさらぬ顔するこそいぶかしけれ。惣じて此邊の濕化、蝶・蜻の類墨をぬりたるがごとし。

をのれさへ餓鬼に似たるよきり〳〵す

湯本早雲寺は小田原北條氏五代の菩提所なり。古墓五ツ、つく〳〵と並べり。元祖新九郎氏茂は永正六うのとし八月十五日逝去ありしとかや。今早雲寺殿瑞公大居士と沓を側り、なき名を拜む。

早雲寺名月の雲はやきなり

宗祇の廟、

石塔をなでゝは休む一葉かな

長興山の瀧見にまかりて、梅花徑を下るに、白雲關を見上ゲ、青蛇白象の奇石の間を、瀧は三筋に落たり。瀧のもとを川涯と號く。水の湛を心潭とよぶ。泉の砌に手たゝく程の溜り江あり。かしらをつけてうかゞひみるに、小田原の海とひとつに成て、東西の廻船、梟のもとに寄來る斗、いとあやしくまたゝきせらる。むつのおくに影沼とかやいひて、かゝる所は侍ると聞ぬ。言語同斷の美景に口つぐみて此時句なし。三廻りの日比たちて、歸べきになりぬれば、親しきかぎりこぞりて酒送りしつ。石さへ木さへかへりみがちに、小田原より峠を見あげたれば、雲かゝりたり。

袖つまにもつれし雲や露時雨

ことしも名月は、鎌倉大佛にて見る。

明月は南を得たり佛頂珠

胡塞記

蜀山月冷し姑蘇草臺、孤松空しく老ぬ高田の城、魂を傷哉夜の鵑。朝曇楢の葉陰にかんこ鳥といふ鳥の鳴めるぞ、雨を催しがほなる。殿作りいらかこぼれ、閨屋玉だれを亂に、賢ぞ蘿のまとはれるや。古園誰ためにかうばしきぞ、招くともくる人あらじ。一本薄うつろふとも、誰か恨ん籬の菊。鬼灯といふ艸の、一房うへ殘せし。是ぞ京の上廊の住こし、春やむかしなりけり。南窓に月あかけれども、容色を磨かゞみにもあらず。白露粧すれども粉黛なし。雨に朽、しぐれに濡て、杉の板戸の殘りたるに、其ひとの號也けり。菊の色ゝ書まじへたるに、

繪の菊に今朝も餓たる胡蝶かな

猶山里のけしきぞ哀にもおもしろきや。橋柱半朽て、霜なゝめに置けり。茶店は年ゝの雪にかたぶき破れ、主隱埃を拂はねば、燕客はやく歸ぬ。おのづから狐・かはほりの塒と成て、胡桃を碎く烏の觜、梨を論村烏の聲、寔凶宅に餓たるさまぞかなしかりける。

凩に梢の柿の殘り哉

風樓に暮山を見れば、遠近雪山、畫屛をなすかとすれども、丹青いにしえの緣ならず。深池に芙蓉をかざれども、採蓮のまめやかなる童もなければ、泥龜月を濁て陰をい

とふに絶たり。

蓮の骨衰れは美女の尸かな

百士ちり、走り、屋形隣境を分ず。蓬の原・葎のちまたと成にたれば家鳩軒ばをわすれ、主なき犬勢ひつかれ行人の裾をしとふ。すべて見るもの聞事、ひとつとして哀ならずといふ事なし。年移り時變じて、彌生山若がへり、山代水も元トのこゝろを汲しる。折いたりて玉苗や、稲葉の侍從とかや、此所しろしめすべきに定りぬ。民くさ君恩の德雨にめぐみ、肆(イチクラ)履のおといそがしく、貧村二たび竈を發す。かゝりければ埋木の華にあそび、雨より後の月に嘯く。詩大和の風俗詞才種まくに倍せり。千賀萬壽と胡ふり諷終りぬ。

雪は豐年の若菜をこやし、櫻にあらぬ梢まで春の色を榮ふ。歸鴈も花に逢常盤山、予ぞ見捨る東路や、上野ゝ花の吹雪は寒からず。目黑・谷中の遲櫻、をそしとや侍覽とおもふこゝろに、おもんぱかる事もあらしせず、雨ふらぬ朝な、三月下旬、越後を他のしら雲と詠すてぬ。

虱をとる辨

しらず身の毛いよだち、襟の程うさ〳〵としつるが、飯つぶの半したる物、さすりあてたり。疾くものゝ上に敖しはなち、めがね二重に疊んで、渠がさまを窺ひ見るに、白き肉・黑き腸、呼吸につれて動搖ぐ。眼きら〳〵と見すへ、手足よつか六つかありて怒げなるが、護摩堂にまします明王尊に似たり。虎にも戰ひ龍とも爭ふべし。誠や、必死の人の床にはがいふり戻りて、あざむきにらむとこそ、本艸には見へたれ。いまだ死まじきにや、しり終ひむけて行ク。恐ろしとみればこそさも覺ゆれ。おのれが姿のなべの虫におとれるてものかは。歌うたはぬは、聲のなければなり。今少身かろからば、待宵のふるまひもしかねやはすべき。蓑虫にゆかりたる鬼の子なれば、かく世にうとみ果られたる、業生のほどこそいと拙けれ。臭穢の中に質を請て、褌に潜り、ぬひめにかくれて、人の血氣を犯し吸こと、蚊子の鐵牛を嚙より猶甚し。その生涯の終れる所は、火とりの中に細きけぶりと飛び、木枕の角にからき耻をばさ

らされぬ。されば眞如の性のみてる事や。摩竭なにとかいへる魚の大百由旬より、蟭螟の微細なるまで行わたりて、憎愛かはる事なしとこそ見ゆれ。內裏にもの祈けるひじりの御灯の光に、一夜しらみ拾はれたるに、物の化のこと治りけるとぞ。知識の肌に馴まとひて、德をおなじういはれけるも、さるべき因緣にや。柱の穴に生をたくはへて、舊年の怨人には報ふとも、さもあれさついかにゆるしてんと、かたなひねくり鎗とりしごく迄、いらちおもふ間に、ころ〳〵ところげて見へず。こはもらしつるはと騷て、あなぐり求れどなし。淵に物落せし人の顏して、手打はたきてより、夢もしらみにしらみ、東雲の空もしらみてはぬ。白身坊が衣被けしものか。

あさがほの花ほど口をあくび哉

若菜の序　祖翁一周忌の集なり。

きのふや義仲寺の旅寐、けふや十月十二日。爰にあり、かしこになし。なき俤は眼にとゞまり、餘情は筆にのこりたるを、今見る人のおもひ出草なるべし。此くさ咲にほふ秋のいろ〳〵むしの音の、耳に心にうつり行まゝ、終にこがらしのつくしはてゝ、句ゝ主なし。無心の當躰門下且ク道へ、いかなるか是俳諧の主人公。

或時序

花に對して信なくんば花うらみあらん。句は是にならふべし。花に問は花かたる事あり。姿はそれにしたがふべしと、ある時をしゆ。

兒筆序

冬松はいつも里がちに夜ながおきして隣りも寐せず。旭さす鳥影今やと待かね、魯山の凡巾に指さしして、百里の空の父よ〳〵と呼親も、親なればさぞ思ふらん。其子の母も待顏なり。

筆とるは硯やほしき兒櫻

右の兒に執筆させて、留守まもる門人。大魚圖牛渚岩八匡兎國光潮待設の一興あり。時のよろしくて書す。

其袋序

なにくれとして天の袋あり。あらゆる是が入物なり。人におふくろといふ、母の稱也。茶とらず物見すとて、父に追れておそろしきこらしぶくろのからきめみしも、いつにわすれて、底なし袋にもむすばすぞ、なりすたれにたる空言袋、淸輔の名立るにはあらず。我ぞつきありきぬ。士に番袋、有職に火袋有リ。くびにかけたるふくろには、いかなるものを入たるぞ。詩の袋。春山暮月李賀がふくろにおもし。哥の袋、光廣のひきずり袋、それもおもかりけん。爲憲がふくろをかぶらんとすれば、息くゞもりてむづかし。其袋や花のしほみたる、月のかけたる、かつかつひろひえて、括(クヽリ)て我家の祕藏ぶくろとす。蘭にもきせず、猫もかぶらず、元〻ろく三年、かのへ(え)むまみな月吉辰嵐雪自序。

吊(弔)翁辭

いつの冬か凩のうしろむきそめ、葛のはのおもてみし秋より春にわたり、杖にさめ笠に眠り、小蓑に病、つゐの浮世をなにはになして、枯野にあそぶと聞へ給ひし一句を、今さらのうつゝになしぬ。其角はさる契ありてや、生前のたいめ(對面)後の事迄とりおさめつかへけり。遠き境の人はいまだしり及さずや。江都に心ざしを盡せるたれかれ、ところ〲に席をかまへて、追善興行のくさ〲袖に秋にひろひかさねて、往くに歩みを忘れ、富士もみず、大井もしらぬ寒ムそらかけて、霜月七日のゆふづくよの程に義仲寺の家上にひざまづく。空華散じ水月うちこぼす時、心鏡一蘆をひかざれば、萬象よくうつる。此師この道におゐて、みづからを利し他を利して、終に共祚不レ竭。今も見給へ、今も聞給へとて、

此下にかくねむるらん雪佛　　嵐雪拜

蓑虫を聞に行く辭

みのむしの音を聞に來よ草の菴　　芭蕉

いで聞にまからん。行程二十町、をそやかの虫なきやさ

すべき。よしや虫待ともあらじ。またるべき身にもあらず。〽おもしろや、橋はふたくにゝまたがり、入江の釣舟は、まさま横さまに打こぞりぬ。鷺ねぶり、かもめなかれつ、駿河の山はいつこゝら來つらむ川隈おほふほどちかし。致景心を奪ひ、あゆむともなきに、柴門の雫衣の襟にひやこく、草の露わら履につめたし。あるじなくてやありけんとかめもたまはずさし入れてみれば、蓑虫の聲鳴すましてつくりと居給ふ。おとろへをくらぶれば、霜にいまだ壯なりしがごとちからを論ずれば風柳猶つよし。ふむ所、坐する所、音なし。かみ子の古ければなり。ゆへにそかの聲は聞予が性のさはがしきにはなに戀しとも聞へず。聞事にもあらじ、見る事にもなけん。がれが情と閑人の閑と猶〳〵閑のすぐれたるなるべし。虫よ翁のかしましからむ鳴ぞ。

何も音もなし稻打喰て螽かな　嵐雪

唐の蚊贊

唐の蚊〳〵、詩人を喰つて肥て桃のごとし。からの蚊〳〵、美人の帳にこがれ寄つて瘦て柳に似たり。

唐の蚊や終に枯たる藻塩草

右一章は鶴樓先生が許にて、唐紙に蚊の澁入たる有て、句を乞ひけるよし、今なほ伊勢の何がし、又東武にも持傳ふさぞ。

黒茶▲銘

黒茶碗あり。花の旦はます〳〵黒く、雪の夕はいよ〳〵黒し。月待宵の闇をさぐり、闇夜に鼻をとられしは、おの〳〵つちめくらのまじはりなるべし。

檢校　貧僧　大黒　小くろ　鉢の子

早舟　小雲雀

三代目をのんこといふ。のんここそ猶ふかき意味あれ。祕してしばらく殘す。

松虫のりんともいはず黒茶碗

通説

言水（「初心もと柏」）の句境は、浮世繪に見らるゝ如き、神經のやうに細いけれども執念强い線と、華やかなやうではあるが靑色い情痴の色とがある。美婦に飽いて美景をさびしむといふ風な、頽廢派の詩人風な、ほこらしさとやるせなさとがある。

夙に起て妻に芭蕉を縫せけり

碁は妾に崩されて聞く千鳥かな

斯うした氣持が、やゝもすると自己陶醉に陷り易いのはやむをえまい。

蓬萊に夜は薄ぎぬも着せつべし

晝蚊帳は人魚に網のまよひかな

後の句に「女の半ば衣脫ぎかけたるを見て」と作者は自註してゐるが、稍獨りよがりの感がある。尤も

鯉はねて水しづかなり郭公

の如き、醉覺めの靜かさに似た味、又

火燵出て古鄕戀し星月夜

の如き、舞臺趣味ではあるが、同感は出來る。

鬼貫（「鬼貫句選」）を芭蕉と對立せしめて考へれば、大いさに於て深さに於て、數步を讓らなければならないが、芭

蕉が其新風を提唱した時、其影響を受けずして、別に獨立獨歩して、俳諧の大道に遊んだ鬼貫は偉いと云はねばならぬ。「鬼貫の鬼たる無礙自在」との太祇の評もうなづかれる。

ほんのりとほのや元日なりにけり

そよりともせいで秋立つ事かいの

此素純さ、句としては何の内容もないと思ふほど、其程に自然にぴつたりと付いた氣持は、恐らく芭蕉も及ばざる所であらう。

あたゝかに冬の日なたの寒さかな

草麥や雲雀があがるあれ下る

此平易さ、愚かな者の言葉のやうな、いや天眞れいろうたる兒童の言葉のやうな、之を云ひ得る彼の氣持は尊いと思ふ。

ゆく水や竹に蟬なく相國寺

うち晴て障子も白し春日影

斯うした取材にも表現にも整々たる(芭蕉の風に近いとも云へる)作よりも

風がふく梅のつぼみはしつかりと

又もまた花に散られてうつら〳〵

斯うした無分別なる、云捨てたまゝの如き(しかも內容的の律のある)作の方が、鬼貫の本領とする所であらう。

「七車」の自序に、鬼貫は「乳ぶさを握るわらべの花にゑみ月にむかひて指ざすこそ天性のまことにはあらめかし、

いやしくも智惠といふもの出て、その旦を待ち其夕を樂しとするより、僞のはしとはなれるなるべし」と云つてゐる。八歳の時の吟といふ。

こひ〳〵といへどほたるがとんでゆく

此處から出發した彼は、確に正しい出發點を得たものである。「七車」は彼が自ら其作を集錄したものであるが、「鬼貫句選」の後に之に對すると、此中の句には、どうかと思ふものが多い。無分別といふよりも、無雜作すぎる、平易さといふよりも安易さにすぎる弊がある。此詞書でも知られる通り、他からやたらに發句を望まれる度にホイ〳〵と投げて與へてゐるやうな風がある。九十賀を乞はれて、「世の花や百の峠も九十から」、九十二にて身まかりける人に、「九十一も二もなし共も夏衣」といふ風な、其場其場に當てゝゆくだけで、彼の心持といふものが少しも出てゐない。是に較べると、彼が愛子を失ふた時の

此秋は膝に子のない月見かな

土に埋て子の咲く花もある事か

此句には、涙があり、血がある。「獨言」といふ俳話を、鬼貫が自ら書殘しておいた事は嬉しい。彼の境地、彼の主張は此卷に盡されてゐる。「句を作るに姿・詞をのみ工みにすれば、まこと少し、只心を深く入て姿・詞にかゝはらぬこそ好ましけれ」、「いつはりを除きて、まことをのみ云ひ述べんと、力を入て案じ侍るは、いつはり云ふにはまさりたれど、之も亦まことを作りたる細工の句にて侍り」、「面白きは句の病なりとぞ」等、是等の言說は今日より見て、やはり輝いてゐる。芭蕉流なる「風雅」を挨して其病竇に陷つたものは、鬼貫風の自由さから新しく出直すのも好い事である。

來山(「いま宮艸」「續いま宮草」)の句には、鬼貫の云ふまことがあり、又、その所謂工みがある。「梅翁を縦とし芭蕉を衡とす」とも評せられてゐる通り、芭蕉の眞實と宗因の技巧とである。

元日やされば野川の水の音

ほのかなる鶯きゝつ羅生門

此のさればゝ、ほのかなるの巧みさ。此巧みさは決して其實を疑はしめるものではない。

青し青し若菜は青し雪の原

松の月枝に懸たりはつれたり

此巧みさに到つて、やゝ興の方が勝ちすぎる。さうした興を一そ押し通して、くだけたものとして

小雨して竹にうぐひすなよ竹に

ころび寢や我葉を敷て夕がほの

斯うした小唄調には又、別の面白い味がある。

涼しさに四ツ橋を四つわたりけり

我寢たを首あげて見る寒さかな

此即興体に到て、再び巧みを離れたるもの、彼の酒々落々としたる氣禀が出る。

素堂(「素堂句集」)は早くから、芭蕉を友として好く、芭蕉から暗示を受けた點も多いであらうが、彼には彼としての風格が濃く出てゐる。

浮葉卷葉此蓮風情すぎたらん

又是より若葉一見となりにけり

彼が騷客として隱士として、遙かに世俗を離れてゐるといふ高邁なる氣持は、彼の作に或る香ばしさを與へてゐるものではあるが、それだけ世間とは交渉がなく、又、人間としての心の暖さに乏しい憾はある。

市に入てしばし心を師走かな

松陰に落葉を着よと捨子かな

「落葉を着よ」には淚がない。そこが素堂である。

目には青葉山郭公はつ鰹

人口に膾炙されてゐる句だが、之も素堂らしい、凡てを見渡したやうな氣持のものである。

才麿(「才麿發句拔萃」)は、宗因より出でゝ宗因より優れてゐる。才麿には「詩」がある。此上に「人」が出てゐたならば、と思ふのである。

時雨そめ黑木になるは何々ぞ

朝顏は少しの間にて美しや

彼は延寶より元祿を越して享保の頃まで、俳壇に遊んだので、芭蕉一派の影響を全然、受けてゐないとも云へまい。

しら雲を吹き盡したる新樹かな

凩に薪わりの銘ひゞきけり

之は、宗因傳統の句調ではない。然し、

日のもとの人の多さよ年の暮

の如きは、芭蕉には云へない句境である。かういふ見方を一片の概念におとさない所がいゝ。

猫の子にかゞれてゐるや蝸牛

こゝにも、わざとらしくない、好い微笑がある。

其角(「五元集」)以下、芭蕉一派の作家にうつる――其角は蕉門第一の俳豪として自他ともに許した人、其才氣の煥發するや觸るゝ所彼の俳材とならぬものはなく、其吟腸の鍛練と待つて、何れも一かどの妙味をそなへしめてゐる。

の雄大なる、又、凄愴なる

明星や櫻さだめぬ山かづら

聲かれて猿の齒白し峰の月

の纖細なる、又、微妙なる

鶯の身を逆に初音かな

百舌鳥なくや赤子の頰を吸ふ時に

の輕妙なる、又、滑稽なる

初霜に何とおよるぞ舟の中

みゝづくの頭巾は人にぬはせけり

の瀟洒なる、又、明快なる

品川も連にめづらし雁の聲

殊に晴れて雷朝顏にいさぎよし

柳寒く弓は昔の憲清也
　うの花やいづれの御所の加茂詣

の勇健なる、又、典雅なる

　うぐひすや遠路ながら禮返し
　梅寒く愛宕の星の匂ひかな

の景情備り、風趣全き、之を擧げて行けば限りもないが、彼は進んで

　蚊を燒くや褒姒が閨のさゝめごと
　乞食かな天地を着たる夏ごろも

之は實に人を驚かすものである。然し、之を一歩過ぎる時に、破綻が來らざるを得ない。才子は其才に誤られ、よく泳ぐものこそ溺れる。

　切られたる夢はまことか蚤の跡
　蓑を着て鷺こそ進め夕しぐれ

何げなく云つたやうに見せて、其底に「どうだい」といふ氣持の隱し得ないものは

　めづらしい物が降ます垣根かな
　煤掃て寢た夜は女房めづらしや

世態人情の俗に入つたものゝ、遂に其俗に落ちて出られぬのは、所謂、溺れたのである。

　よめりせし時の枕か土用ほし

　　舩を玉子でたゝくすゞみかな

蓋し是等は其角としては千慮の一失であらう。之で以て直に彼の句境の鼎の輕重を問はうとするのではない。何としても彼には多年芭蕉の薫下にあつて鉗槌を受けたる躰得があり、技倆がある。

　　我雪と思へばかろし笠のうへ

之を此まゝ俗と評することは酷であらうが、「我ものと思へばかろし笠の雪」と訛傳されて一般に喜ばれる所、訛傳するものゝ罪ばかりとも云へまい。

　　闇の夜は吉原ばかり月夜かな

之は「闇の夜は吉原ばかり」で切るのだが、誤て「吉原ばかり月夜」として、もてはやされるのも同樣である。

嵐雪(「玄峯集」)の句は、概しておとなしく、なだらかにして誰の耳にも入り易い。彼はさほどに冴えた手腕を持つでもなく、又、辯舌をもつでもなくて、其角と並び稱せられてゐた所以は（共に舊參だといふ外に）此の誰の耳にも入りやすく、容易く人をうなづかせるといふ所に彼の徳があつたのである。

　　元日やはれて雀のものがたり
　　むめ一輪一輪ほどのあたゝかさ
　　出代りや幼な心にものあはれ
　　文もなし口上もなし粽五把
　　秋風の心うごきぬ縄すだれ
　　黄菊白菊其外の名はなくもがな

ふとん着て寐たる姿や東山

誰にも、いつまでも、記憶されてゐるやうな句が彼には多い。從つて又、

聟とは外より知らぬ月見かな

といふ風な通俗的なつまらぬ作も少くないが、それよりも

はぜ釣や水村山廓酒旗の風

といふやうな、氣のきいた句を特筆して置かう。

支考（「蓮二吟集」）は其俳論でえらさうな事を云ふに似合はず、其句作にも佳吟が乏しい。

時鳥啼かぬ夜白し朝熊山

五月雨や雲雀啼ほど晴て又

金堂に雀なくなり夕しぐれ

以上は愛誦すべきものである。

侍は腹さへ切るに巨燵かな

炭とりとしらで瓢の蒼かな

羽二重の膝にうみてや猫の戀

是等は俗臭紛々たるものである。

涼しさや椽から足をぶらさげる。

斯うした無分別さうに見える句にも、さういふ風に作つた意識がぶらさがつてゐる。

　　蓮の葉に小便すればお舍利かな

「還俗の吟」ださうな。佛に犬を喰はさうといつた大德もある。佛に呵することが惡くはないのだが、此句の氣持では全く破戒無慚である。

　　叱られて次の間へ出る寒さかな

轉んでも唯は起きない、支考は餘りに利口すぎる。

許六（「五老井發句集」）は支考と共に俳論家だが、自分の俳論に縛られたが爲に、句作の道には充分に伸びえなかつた點はあるまいか。

　　梅が香や客の鼻には淺黃椀

彼が「自得發明辯」に於て自ら例證に引てゐる斯うした句は、餘りに意識が目立ちすぎる。同じ行き方でも、彼が最初に、芭蕉に賞められたといふ

　　十團子も小粒になりぬ秋の風

は、「秋の風」が無心にしてすつきりと付いてゐるのがいゝのである。

　　新麥や竹の子時の艸の庵
　　寒菊の隣もあれや生ヶ大根

季題二つを詠入るゝ事を、彼は「彥根体」とか名付けたといふが、さうした句作法の目だゝない、しぜんに、ありのまゝに出來たやうな句を擧げて誦したい。

　　苗代の水にちりうくさくらかな

芋を煮る鍋の中まで月夜かな

北枝(「北枝發句集」)は常に杉網代の大笠を被り樫の太杖をついて吟行するのを、童部達が何用がありて何處へ行くのかと問ふのに答へて、我は發句拾ひにあるく也と答へたといふ、此北枝の氣持はうれしい。彼は本當に發句に魂を打込んでしまつてゐる。

燒にけりされども花はちりすまし

大火に逢て凡てを失つた時の吟である。芭蕉は此句を見て、古は名歌を命に代へた人もあると賞めてゐる。

池の星又はら〳〵と時雨かな

うぐひすや谷の景色を庭の面

此句はよく芭蕉の心とする所を心としてゐる。

塔は花花は塔より氣色かな

おしかへし鳴くや晴行く峯の蟬

此句を產むまでの苦しさは、句作に沒頭したものでなければ解らぬ味であらう。さりとて又、

舟すゞし吹かれて居れば吹きにけり

朝顏は咲ならべてぞ凋みける

の如く、さらりと出來て、適確な作もある。

桃隣(「古太白堂句選」)の句は、芭蕉が奧羽行脚の跡を慕ふた吟行の作で見ると、佳作と稱すべきものは極めて乏しい。

橋二つ滿汐すゞし五大堂

稻妻や二荒山の根なし雲

芭蕉に、も少し長く指導されてゐたならば大成したらうに、と思ふ人である。芭蕉の眼が通つてゐた頃の作では

うぐひすの聲に起行く雀かな

白桃や雫もおちず水の色

素直な句がある。又

舟着や馬に附けゆく雛の箱

宵過や蟲賣通る町はづれ

机上の趣向だけでは出來ない句である。

杉風(「杉風句集」)は、芭蕉に依て新風の眼を開かれた人だが、其句風の篤實なる事、蓋し其人柄の反映であらう、初めから爰に行くべき人だつたのである。されば、老いても倦まず、たゆまずに其道にたづさはりえたのである。

がつくりとぬけそむる齒や秋の風

襟まきに首引入れて冬の月

何の巧みもないが、實情の親しさ、自ら人を合點させる。

大年も雀の遊ぶ垣根かな

此「も」は問題になるものではあらうが、作者の氣持はやはり此「も」で生きてゐる。

川ぞひの畠をあるく月見かな

「月夜」とせずして「月見」とした所、決して上手を望まぬ所に此人の身上がある。

惟然(「惟然坊句集」)は、芭蕉の沒後、師とするものなきを嘆いて、師の句を綴合せた風羅念佛なるものを唱へつゝ放浪して歩いたといふ。

更行くや水田のうへの天の川

木枯や刈田の畔の鉄氣水

之も正しい彼の風格である。然し、元來、飄逸洒落の性がだん〳〵に其天眞として露れて來たと見える。

うめの花赤いは赤いは赤いはな

斯うした句は、同門の間にも大分問題になつたらしいが、彼は自分の好む所へ向いて行くより外なかつた。

涼まうか星崎とやらさて何處じや

あれ夏の雲又雲のかさなれば

俳句に於ける童謠的の氣持をたづぬる時、又口語的表現の發祥をしらべる時には、惟然は立派な研究對象となる。

去來(「去來發句集」)は素堂を關東の俳諧奉行といふのに對して、關西の俳諧奉行といはれた、其も人柄を以て重きをなした爲であらう。

鎧着て疲ためさん土用干

秋風や白木の弓に弦はらん

水鳥や向ふの岸へつういつうい

武門の出である彼の氣持は凛々としてゐる。後年、嵯峨落柿舍にかくれて

柿主や梢はちかき嵐山

芭蕉が最後の病牀に侍して

白粥のあまりすゝるや冬籠

一つは、彼の悠々とした心、一つは彼の謙虚なる心がにじみ出てゐる。

上り帆の淡路はなれぬ汐干かな

光りあふ二つの山の茂りかな

鳶の羽もかいつくろひぬ初しぐれ

斯ういふ句は實に渾然としてゐるが、彼はどこまでも努力の作家だと思はれる。

鉢扣來ぬ夜となれば朧なり

湖の水まさりけり五月雨

うの花の絶間たゝかん闇の門

されぱこそ、此眼前卽景を云ひとめた手柄を喜びたい。

何事ぞ花見る人の長刀

去來の句として、誰も知つてゐる此句は賛成しがたい。

丈草(「丈艸發句集」)も武家より出でたもので、禪門に歸した人。東に、其角嵐雪と並稱されたのに對して、關西には去來丈草と呼ばれた。去來とは好く心が合ひさうな、獨り淋しくして、淋しがらず、いつも澄んだ眼と暖かな心とを持つてゐたらしい。

ほとゝぎす鳴くや湖水のさゝ濁り

山はなや渡りつきたる鳥のこゑ

其言葉に朗々とした響がある。堂に入つたものでなくては成し難い所である。

大原や蝶の出て舞ふ朧月

月代やしぐれの中の蟲の聲

前者は春の艶かさ、後者は秋のからび、好く其自然の中に息づくものである。

着て立てば夜の衾もなかりけり

影法師の横になつたる火燵かな

此孤棲枯淡の境地は倣はうとしても能はぬ所であり、しかも此人に

我事とどじようの逃し根芹かな

の如き愛憐溫厚の心持が詠まれてゐるのは珍重すべきである。去來と共に師を看護した折の句は

うづくまる藥の下の寒かな

で、芭蕉の感賞に預つたと傳へられる。

浪化（「浪化上人發句集」）は本願寺の連枝であつて、芭蕉の晚年に若くして弟子入し、壯年にして歿した。此人も桃隣と共に、も少し長く師の爐鞴に入つてゐたらば、と思ふ。

稻むしろ近江の國のひろさかな

鶸わたる空や寺子の起時分

之にはおつとりとした味がある。然し、浪化の句の特徴は、神經質らしい感じ方にあるやうである。

松の葉をつめたう握るほたるかな

待春や机に揃ふ書の小口

彼は平生、病身らしい所があつたのではないかとさへ、是等の句からは察せられる。

茶の花や鶯の子の鳴きならひ

寐處に日のさす栗のうづらかな

此見方は之で難ずべき點はないけれども、幾分女性的といふ感じがする。尤も、

郭公雨のかしらを啼いて來る

といふ風なリズムの強い句もない事はない。

乙由(「麥林集」)の句は數が多い、其多い中から

曉の山兀としてほとゝぎす

蛙子もおよぐ手出來て五月雨

名月や茄子畑に人のこゐ

其他贊成出來る句は、さてどれだけあるであらうか。

虫干や畠は綿の花ざかり

正直な寫生の句かと一度は思ふが、之は蟲干に綿入衣を思はせ、畠の綿はまだ花でゐるといふ心だと知れば興がさめる。

やがて剃る兒も遊ぶや芥子の花

美しい景情の句とのみ見ては、此作者からは叱られよう。芥子はやがて坊主になる花だからである。乙由の句は概ね斯くの如きものである。

梅が香や障子の破も加減よし

涅槃から落し初てや鹿の角

皆、一理窟を構へてある。

結構な日を啼きくらす蛙かな

すゞしさや夢もぬけゆく籠枕

詩といふものゝ心は味はれない。而も、詩の心を解するよりも、理窟を解することを早手まはしとし、安價な成程趣味を喜ぶ一般の人々には此方が受けがいゝのである、是こそ見本的なる通俗趣味である。

其角の文集「類柑子」は、文章そのものとしてよりも、彼の句に對する解說として面白い所がある、「妻なく子なかりし」若さに、遊里に沈湎した其頃は

ほとゝぎす曉傘を買はせけり

曉の反吐はとなりかほとゝぎす

今は

子もふます枕もふます郭公

子規人を馳走に寢ぬ夜かな

だといふ。「十五から酒をのみ出てけふの月」といふ彼ではないか。紅燈綠酒の趣味は、やはり彼の風流なのである。彼は芭蕉の祕藏弟子ではあるが、その性情氣稟は甚しく相違してゐる。其を包容して逸脫せしめなかつた芭蕉もえらいが、徒らに師が枯淡の眞似などをせずして、自分の個性に終始した其角もえらいと思ふ。（荻原井泉水）

日本俳書大系　第五巻　終

大正十五年十月五日印刷
大正十五年十月十日發行

非賣品

日本俳書大系（5）

著作者　神田豊穂

發行者　神田豊穂
東京市日本橋區數寄屋町一番地

印刷者　谷口熊之助
東京市牛込區早稲田鶴巻町四〇三

印刷所
春秋社印刷所

發行所
東京市日本橋區數寄屋町・春秋社内
日本俳書大系刊行會
振替東京二六八七二・電話大手二一二四　二二二四

